

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第502集

もと みや くま どう

本宮熊堂 A 遺跡第26・29次発掘調査報告書

盛岡広域都市計画事業盛岡南新都市土地区画整備事業関連遺跡発掘調査

2007

岩 手 県 盛 岡 市
(財)岩手県文化振興事業団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

本宮熊堂 A 遺跡第26・29次発掘調査報告書

盛岡広域都市計画事業盛岡南新都市土地区画整備事業関連遺跡発掘調査



獸脚付浅鉢



獸脚付浅鉢（底面から）



RE001 堆積土中 遺物出土状況



RE001 堆積土上位 遺物出土状況 (南から)

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その上地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成16年度（第26次調査）と17年度（第29次調査）の2か年に渡って行われた、本宮熊堂A遺跡の調査成果をまとめたものです。2度の調査で本遺跡から縄文時代晩期後葉の集落や古代の溝跡、また縄文時代晩期から古代まで存続していた旧河道も確認し、長きに渡り人々が生きた痕跡を見つけることができました。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会に感謝いたします。

平成19年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武 田 牧 雄

例 言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市木宮字熊堂24-3ほかに所在する本宮熊堂A遺跡の第26次、第29次発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の、岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と遺跡略号は、以下の通りである。
遺跡番号……L E 16-2107
遺跡略号……第26次：OKD-04-26／第29次：OKD-05-29
3. 本遺跡の調査は、盛岡市新都市計画整理事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、盛岡市からの委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

第26次調査	調査期間	平成16年7月1日～10月19日
	調査面積	2,636㎡
	調査担当者	須原 拓・亀澤盛行
第29次調査	調査期間	平成17年6月1日～6月30日
	調査面積	283㎡
	調査担当者	濱田 宏・石崎高臣
5. 室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

第26次調査	室内整理期間	平成16年11月1日～平成17年3月31日
	整理担当者	須原 拓・亀澤盛行
第29次調査	室内整理期間	平成18年1月4日～1月31日
	整理担当者	濱田 宏・石崎高臣
6. 本報告書の執筆はⅡ-3を亀澤、Ⅲ-2、Ⅳ、Ⅸ-3、4を濱田、石崎、その他は須原が担当し、編集は須原が担当した。
7. 石質鑑定は花崗岩研究会に委託したが、その結果を基に一部については須原が行った。
8. 野外調査ならびに、整理、報告書作成の際、次の方々や機関からご協力・ご指導いただいた。記して深く感謝いたします（敬称略）。
石川日出志、稲野祐介、稲野彰了、井上雅孝、神原雄一郎、小林正史、佐藤祐輔、品川欣也、高木晃、立花裕、本多準一郎、町田賢一、北上市埋蔵文化財センター
9. 野外調査では、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、並びに遺跡周辺の住民の方々にご協力いただいた。深く感謝いたします。
10. 調査成果の一部は、現地説明会資料や『平成16年度調査報告書』『平成17年度調査報告書』においても公表しているが、本書との記載事実が異なる場合は、すべて本報告書を優先するものとする。
11. 本遺跡の出土遺物及び諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターが保管、管理している。

目 次

巻頭写真	
序	
例 言	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地、環境	1
1 遺跡の位置・地理的環境	1
2 過去の調査歴	1
3 周辺の地理的環境と遺跡分布	3
III 調査の経過と方法	
1 第26次調査について	7
2 第29次調査について	7
3 凡 例	8
IV 遺物の分類基準	
1 縄文・弥生土器	10
2 石 器	13
3 土師器・須恵器	16
V 基本層序と調査区内の地形について	17
VI 第 26 次 調 査	
1 概 略	21
2 検出した遺構、遺物	21
VII 第 29 次 調 査	
1 概 略	165
2 検出した遺構、遺物	165

Ⅷ 自然科学分析	221
----------	-----

Ⅸ 調査の成果

1 本宮熊堂A遺跡出土の縄文晩期の遺物について	226
2 本宮熊堂A遺跡における縄文晩期の集落について	240
3 本宮熊堂A遺跡出土の土師器について	246
4 旧河道に堆積した土壌の花粉分析に関する見解	246

引用文献	247
------	-----

写真図版	249
------	-----

抄 録

図版目次

第1図 遺跡位置	1	第26図 RE001堆積土上位遺物出土状況	40
第2図 調査区範囲図	2	第27図 RE001出土遺物(1)	41
第3図 本宮熊堂A遺跡周辺の縄文晩期の遺跡	5	第28図 RE001出土遺物(2)	42
第4図 遺物の凡例	9	第29図 RE001出土遺物(3)	43
第5図 縄文土器器種別形態	10	第30図 RE001出土遺物(4)	44
第6図 フレイク分類	15	第31図 RE001出土遺物(5)	45
第7図 調査区内地形図・基本土層柱状図	18	第32図 RE001出土遺物(6)	46
第8図 第26次・29次調査区遺構配置図	19	第33図 RE001出土遺物(7)	47
第9図 第26次調査区遺構配置図	20	第34図 RE001出土遺物(8)	48
第10図 RA003	21	第35図 RE002	52
第11図 RA003石囲炉	22	第36図 RE002出土遺物(1)	53
第12図 RA003出土遺物(1)	23	第37図 RE002出土遺物(2)	54
第13図 RA003出土遺物(2)	25	第38図 RE003(1)	55
第14図 RA003出土遺物(3)	26	第39図 RE003(2)	56
第15図 RA003出土遺物(4)	27	第40図 RE003出土遺物(1)	57
第16図 RA004	29	第41図 RE003出土遺物(2)	58
第17図 RA004出土遺物(1)	30	第42図 RE003出土遺物(3)	59
第18図 RA004出土遺物(2)	31	第43図 RE004・005	61
第19図 RA005出土遺物	32	第44図 RE004・005出土遺物(1)	62
第20図 RA005	33	第45図 RE004・005出土遺物(2)	63
第21図 RA006	35	第46図 RE004・005出土遺物(3)	64
第22図 RA006石囲炉	36	第47図 RE004・005出土遺物(4)	65
第23図 RA006出土遺物(1)	36	第48図 RD042~047	68
第24図 RA006出土遺物(2)	37	第49図 RD042~047出土遺物	69
第25図 RE001	39	第50図 RD047出土遺物(1)	70

第51回	RD047出土遺物(2)	71	第96回	フレイク出土分布	124
第52回	RD048	72	第97回	遺構外出土石器(9)	125
第53回	RD048出土遺物(1)	73	第98回	遺構外出土石器(10)	126
第54回	RD048出土遺物(2)	74	第99回	遺構外出土石器(11)	127
第55回	RD048出土遺物(3)	75	第100回	遺構外出土石器(12)	128
第56回	RH001	79	第101回	遺構外出土石器(13)	129
第57回	RH001出土遺物	79	第102回	遺構外出土石器(14)	130
第58回	RF018・019	80	第103回	遺構外出土石器(15)	131
第59回	遺物集中区	82	第104回	遺構外出土石器(16)	132
第60回	遺物集中区遺物出土状況	83	第105回	遺構外出土石器(17)	133
第61回	遺物集中区出土遺物(1)	84	第106回	遺構外出土石器(18)	134
第62回	遺物集中区出土遺物(2)	85	第107回	遺構外出土石器(19)	135
第63回	遺物集中区出土遺物(3)	86	第108回	石核出土分布	136
第64回	遺物集中区出土遺物(4)	87	第109回	遺構外出土石器(20)	137
第65回	遺物集中区出土遺物(5)	88	第110回	遺構外出土石器(21)	138
第66回	旧河道	91	第111回	遺構外出土石器(22)	139
第67回	旧河道出土遺物(1)	92	第112回	遺構外出土石器(23)	140
第68回	旧河道出土遺物(2)	93	第113回	接合資料分布図	141
第69回	柱穴群(1)	95	第114回	石皿類出土分布	141
第70回	柱穴群(2)	96	第115回	接合資料(1)	142
第71回	柱穴群(3)	97	第116回	接合資料(2)	143
第72回	柱穴群(4)	98	第117回	接合資料(3)	144
第73回	遺構外出土石器分布図	99	第118回	接合資料(4)	145
第74回	遺構外出土石器(1)	100	第119回	接合資料(5)	146
第75回	遺構外出土石器(2)	101	第120回	接合資料(6)	147
第76回	遺構外出土石器(3)	102	第121回	接合資料(7)	148
第77回	遺構外出土石器(4)	103	第122回	接合資料(8)	149
第78回	遺構外出土石器(5)	104	第123回	接合資料(9)	150
第79回	遺構外出土石器(6)	105	第124回	接合資料(10)	151
第80回	遺構外出土石器(7)	106	第125回	接合資料(11)	152
第81回	遺構外出土石器(8)	107	第126回	遺構外出土石器(24)	153
第82回	遺構外出土石器(9)	108	第127回	遺構外出土石器(25)	154
第83回	石錐出土分布	113	第128回	遺構外出土石器(26)	155
第84回	石錐出土分布	113	第129回	RG054	161
第85回	遺構外出土石器(1)	114	第130回	RG055	162
第86回	石匙出土分布	115	第131回	RG055・遺構外出土遺物	163
第87回	遺構外出土石器(2)	116	第132回	調査区とグリッド配置	165
第88回	遺構外出土石器(3)	117	第133回	遺構配置図	166
第89回	遺構外出土石器(4)	118	第134回	RF020~022	168
第90回	不定形石器出土分布	119	第135回	RZ003	170
第91回	遺構外出土石器(5)	120	第136回	旧河道跡平面図	171
第92回	遺構外出土石器(6)	121	第137回	旧河道跡断面図	172
第93回	遺構外出土石器(7)	122	第138回	旧河道出土遺物(1)	175
第94回	遺構外出土石器(8)	123	第139回	旧河道出土遺物(2)	176
第95回	散石器類出土分布	124	第140回	旧河道出土遺物(3)	177

第141回	旧河道出土遺物 (4)	178	第161回	遺構外出土土器 (8)	205
第142回	旧河道出土遺物 (5)	179	第162回	遺構外出土土器 (9)	206
第143回	旧河道出土遺物 (6)	180	第163回	遺構外出土土器 (10)	207
第144回	旧河道出土遺物 (7)	181	第164回	遺構外出土土器 (11)	208
第145回	旧河道出土遺物 (8)	182	第165回	遺構外出土土器 (12)	209
第146回	RG55・56 出土遺物	182	第166回	遺構外出土土器 (13)	210
第147回	RF021・旧河道 出土遺物 (9)	190	第167回	遺構出土土器 (1)	217
第148回	旧河道出土遺物 (10)	191	第168回	遺構出土土器 (2)	218
第149回	旧河道出土遺物 (11)	192	第169回	遺構出土土器 (3)	219
第150回	旧河道出土遺物 (12)	193	第170回	遺構出土土器 (4)	220
第151回	旧河道出土遺物 (13)	194	第171回	深鉢・壺・注口土器変遷図	228
第152回	旧河道出土遺物 (14)	195	第172回	鉢・浅鉢変遷図	229
第153回	旧河道出土遺物 (15)	196	第173回	縄文土器属性分析	231
第154回	遺構外出土土器 (1)	198	第174回	本宮熊堂A遺跡出土土器組成器種	232
第155回	遺構外出土土器 (2)	199	第175回	石器の属性分析 (1)	234
第156回	遺構外出土土器 (3)	200	第176回	石器の属性分析 (2)	235
第157回	遺構外出土土器 (4)	201	第177回	石器の属性分析 (3)	236
第158回	遺構外出土土器 (5)	202	第178回	縄文晩期遺構全体図	241
第159回	遺構外出土土器 (6)	203	第179回	遺構変遷図 (1)	242
第160回	遺構外出土土器 (7)	204	第180回	遺構変遷図 (2)	243

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	4	第22表	石器観察表遺物集中区	89
第2表	土器観察表RA003	24	第23表	土器観察表旧河道 (第26次分)	94
第3表	石器観察表RA003	28	第24表	石器観察表旧河道 (第26次分)	94
第4表	土器観察表RA004	31	第25表	柱穴深さ (No1~No126)	96
第5表	石器観察表RA004	32	第26表	柱穴深さ (No127~No193)	98
第6表	土器観察表RA005	32	第27表	土器観察表遺構外 (第26次分)	109
第7表	土器観察表RA006	38	第28表	石器観察表遺構外 (第26次分)	156
第8表	石器観察表RA006	38	第29表	石器観察表接合資料	158
第9表	土器観察表RE001	49	第30表	自然燻集計表	159
第10表	石器観察表RE001	50	第31表	土器観察表土師器	164
第11表	土器観察表RF002	54	第32表	土器観察表RF021	169
第12表	石器観察表RF002	54	第33表	石器観察表RF021	169
第13表	土器観察表RE003	58	第34表	土器観察表旧河道 (第29次分)	183
第14表	石器観察表RE003	60	第35表	土器観察表旧河道 土師器 (第29次分)	188
第15表	土器観察表RE004・005	66	第36表	土器観察表RG055・056	189
第16表	石器観察表RE004・005	66	第37表	石器観察表旧河道 (第29次分)	196
第17表	土器観察表土坑	76	第38表	土器観察表遺構外 (第29次分)	210
第18表	石器観察表土坑	77	第39表	土器観察表土師器 遺構外 (第29次分)	216
第19表	石器観察表RH001	79	第40表	石器観察表遺構外	220
第20表	土器観察表RF018	80	第41表	フレイク計測表	237
第21表	土器観察表遺物集中区	89			

写真図版目次

第26次調査分遺構

写真図版1	全景・基本層序	251
写真図版2	RA003 (1)	252
写真図版3	RA003 (2)	253
写真図版4	RA004 (1)	254
写真図版5	RA001 (2)	255
写真図版6	RA005 (1)	256
写真図版7	RA005 (2)	257
写真図版8	RA006 (1)	258
写真図版9	RA006 (2)	259
写真図版10	RE001 (1)	260
写真図版11	RE001 (2)	261
写真図版12	RE002	262
写真図版13	RE003	263
写真図版14	RE004・005 (1)	264
写真図版15	RE004・005 (2)	265
写真図版16	RD042	266
写真図版17	RD043~046	267
写真図版18	RD047	268
写真図版19	RD048 (1)	269
写真図版20	RD048 (2)	270
写真図版21	RF018・019	271
写真図版22	RII001	272
写真図版23	遺物集中区	273
写真図版24	柱穴群	274
写真図版25	RG054	275
写真図版26	RG055	276
写真図版27	旧河道	277

第29次調査分遺構

写真図版28	第29次炉跡	278
写真図版29	第29次炉跡	279
写真図版30	第29次基本層序	280
写真図版31	旧河道 (1)	281
写真図版32	旧河道 (2)	282
写真図版33	遺物出土状況・作業風景	283

第26次調査分遺物

写真図版34	RA003出土土器	284
写真図版35	RA004・005出土土器	285
写真図版36	RA006・RE001出土土器 (1)	286

写真図版37	RE001出土土器 (2)	287
写真図版38	RE001出土土器 (3)	288
写真図版39	RE001出土土器 (4)	289
写真図版40	RE001出土土器 (5)	290
写真図版41	RE001出土土器 (6)	291
写真図版42	RE001出土土器 (7)	292
写真図版43	RE002出土土器	293
写真図版44	RE003出土土器	294
写真図版45	RE004・005出土土器	295
写真図版46	RD042~044・048出土土器	296
写真図版47	RF018・遺物集中区出土土器	297
写真図版48	旧河道出土土器	298
写真図版49	遺構外土器 (1)	299
写真図版50	遺構外土器 (2)	300
写真図版51	遺構外土器 (3)	301
写真図版52	遺構外土器 (4)	302
写真図版53	遺構外土器 (5)	303
写真図版54	遺構外土器 (6)	304
写真図版55	遺構外土器 (7)	305
写真図版56	RG055出土土器 (1)	306
写真図版57	RG055 (2)・遺構外土器	307
写真図版58	RA003~006・RE001出土土器	308
写真図版59	RE001~004・005出土土器	309
写真図版60	RE004・005・RH001・土坑 遺物集中区出土土器	310
写真図版61	遺物集中区・旧河道出土土器	311
写真図版62	遺構外土器 (1)	312
写真図版63	遺構外土器 (2)	313
写真図版64	遺構外土器 (3)	314
写真図版65	遺構外土器 (4)	315
写真図版66	遺構外土器 (5)	316
写真図版67	遺構外土器 (6)	317
写真図版68	遺構外土器 (7)・RA006・ 遺物集中区出土土器	318
写真図版69	遺構外土器 (8)	319

第29次調査分遺物

写真図版70	旧河道出土土器 (1)	320
写真図版71	旧河道出土土器 (2)	321
写真図版72	旧河道出土土器 (3)	322
写真図版73	旧河道出土土器 (4)	323

写真图版74	旧河道出土石器 (5)·····	324	写真图版83	遗構出土石器 (8)·····	333
写真图版75	旧河道出土石器 (6)·····	325	写真图版84	遺構出土石器 (9)·····	334
写真图版76	遺構出土石器 (1)·····	326	写真图版85	遺構出土石器 (10)·····	335
写真图版77	遺構出土石器 (2)·····	327	写真图版86	遺構出土石器 (11)·····	336
写真图版78	遺構出土石器 (3)·····	328	写真图版87	旧河道出土石器 (1)·····	337
写真图版79	遺構出土石器 (4)·····	329	写真图版88	旧河道出土石器 (2)·····	338
写真图版80	遺構出土石器 (5)·····	330	写真图版89	旧河道·遺構外出土石器 (1)·····	339
写真图版81	遺構出土石器 (6)·····	331	写真图版90	遺構外出土石器 (2)·····	340
写真图版82	遺構出土石器 (7)·····	332	写真图版91	遺構外出土石器 (3)·····	341

I 調査に至る経緯

盛岡南新都市土地区画整理事業は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結合した軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。平成3年度から、面積313haを対象とした整理事業が継続中である。

事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査の必要範囲を確定し、(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として実施している。

本遺跡第26次調査は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市及び(財)岩手県文化振興事業団の両者に通知された。これを受けた両者は平成15年4月1日、(財)岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成15年7月5日から10月19日であった。

第29次調査についても同様の経緯を経て平成16年4月1日、(財)岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成16年6月1日から6月30日であった。

II 遺跡の立地、環境

1 遺跡の位置・地理的環境



第1図 遺跡位置

本宮熊堂A遺跡は岩手県盛岡市本宮字熊堂24-3ほかに所在する。

国土地理院発行の5万分の1地形図「盛岡」(N J-54-13-14)の図幅に含まれ、北緯 $36^{\circ}05'15''$ 、東経 $136^{\circ}57'51''$ (日本測地系では北緯 $39^{\circ}41'8''$ 、東経 $141^{\circ}0'44''$)付近に位置する。

本遺跡は零石川南岸および北上川西岸に形成された河岸段丘上に位置し、地形分類上、砂礫段丘Ⅲ(低位段丘面)に立地する。標高は123m前後を測る。調査前の状況は宅地、荒地であったが、昭和20年代まで、水田として利用されていた。

2 過去の調査歴

本遺跡は当センターにより、過去4回(6次・7次・19次・24次)調査が行われ^(註)、その成果はすでに調査報告書としてまとめられている。調査面積は平成17年度の第29次調査をもって、総計23,775㎡で、遺跡推定範囲の80%以上を調査したことになる。当センターによる過去の調査歴は次の通りである。



第2図 調査区範囲図

次数	調査期間	調査面積	調査原因	報告書名
第6次	1996.07.03～10.24	15,110m ²	盛岡南新都市土地区画整理事業	岩埋文281集
第7次	1996.09.02～10.23	3,800m ²	盛岡南新都市土地区画整理事業	岩埋文266集
第17次	2003.04.12～06.20	1,588m ²	盛岡南新都市土地区画整理事業	岩埋文458集
第24次	2004.09.01～11.15	358m ²	国道46号盛岡西バイパス建設事業	岩埋文470集
第26次	2004.06.07～10.19	2,636m ²	盛岡南新都市土地区画整理事業	本報告書
第29次	2005.06.01～06.30	283m ²	盛岡南新都市土地区画整理事業	本報告書

〈註〉本宮熊堂A遺跡の調査次数は、隣接する本宮熊堂B遺跡と連動してカウントされている。従って本宮熊堂A遺跡は平成17年段階での調査次数は、第29次調査であるが、これは本遺跡が29回調査されたことを示すものではない。本遺跡の調査は、本調査・試掘調査合わせて当センターが行った第6・7・19・24・26・29次調査と、盛岡市教育委員会が行った第2・5・14・22次調査の10回である。

3 周辺の地理的環境と遺跡分布

平成12年度の岩手県教育委員会のまとめにより、盛岡市内から約500方以上の遺跡が確認されている。そのうち縄文時代晩期の遺構、遺物が検出した遺跡は86カ所を数える。第4図は本遺跡を中心として、約10km圏内にみられる縄文時代晩期の遺跡の分布を地形図にがしたものである^(註)。

本宮熊堂A遺跡(1)は北上川西岸に発達した河岸段丘上に位置し、そのうちの低位段丘面(以下、砂礫段丘Ⅲ)に立地する。この砂礫段丘Ⅲは北上川西岸および雫石川南岸に広く発達しており、ここに志波城をはじめとする古代の遺跡が多く分布する。そしてこれらの古代遺跡には縄文時代晩期の遺物が見つかるものがある。第3図に志波城などが含まれるのはそのためである。古代遺跡が多い砂礫段丘Ⅲに立地する遺跡の中で、縄文時代晩期の遺構が見つかる遺跡は、本遺跡の他に本宮熊堂B遺跡(2)と台太郎遺跡(3)、野古A遺跡(4)が挙げられる。本宮熊堂B遺跡では、第18次調査において4基の土坑が検出しており、そのうち1基には大洞A式に比定される土器が埋納されていた。また台太郎遺跡では、第51次調査において縄文時代晩期後葉の竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構2棟が見つかった。竪穴住居跡に伴う土器は大洞C2~A式に比定され、本遺跡の竪穴住居跡とほぼ同時期のものと思われる。台太郎遺跡は本遺跡から約2kmはなれた同じ砂礫段丘Ⅲに立地し、標高は121m前後を測る。

本遺跡から5km離れると、北上川の両岸とも山地に達する。特に北上川東岸はあまり河岸段丘の発達が見られず、北上川からさほど離れていない場所から、山地(北上山地)が展開する。その山地には多くの縄文時代晩期の遺跡(ここでは晩期の遺物が出土している遺跡全てを指す)が立地している。例えば、上八木山遺跡群(51~55)や川目遺跡群(56~58)が相当する。また、本遺跡から南に5km以上離れた北上川東岸では、河岸段丘と丘陵が複雑に入り組んだ地形をなしており、手代森遺跡(60)をはじめとする遺跡が点在する。手代森遺跡からは晩期前葉の竪穴住居跡8棟と土坑群が見つかり、特に有名となった遮光器土偶をはじめとし、動物形土製品や岩版、石冠などのいわゆる祭祀遺物が豊富にみつかる。

北上川西岸には河岸段丘とその奥に広がる山地(奥羽山系)との間に扇状地や丘陵が広がる。この扇状地上では湯壺遺跡(64)のように集落遺跡もみつかるが、遺跡の分布は単発的で、湯壺遺跡の他にほとんど確認されていない。ただし、本遺跡の西方の狭い扇状地上には晩期の包含層が見つかった上平遺跡(66)や晩期の竪穴住居跡が見つかる猪去館(65)などが立地しており、全くないわけではない。また、奥羽山系の山地には御所湖周辺で繁遺跡群(71~73)や葺内遺跡(74)などが立地する。葺内遺跡からは晩期初頭の住居跡や、土坑が検出されている。湿地部にかけては“カド”(川岸に立てられた水汲み、洗場)、割杭をうちこんで構築した漁撈施設と考えられる“魃”状遺構が検出されている。また魃形成区域が残沼湖状態になった時期に形成された丸木杭と階段状に構成された杭列などの遺構と共に縄文人の足跡が検出されている。出土遺物は多岐に渡っており、特に土偶、土器片裂円盤などの土製品は豊富である。ちなみに葺内遺跡は後期の大形土偶の頭部が見つかったことで有名である。その他にも漆製品や木製品がみつかる。

以上のように本遺跡周辺に分布する縄文時代晩期の遺跡を概観すると、主に山地を中心として展開していることが窺える。反面、従来より古代の遺跡の分布域として知られてきた河岸段丘、特に砂礫段丘Ⅲには、縄文時代晩期の遺物の分布は認められるものの、遺構は少ない傾向が窺える。従って本遺跡や台太郎遺跡が他の遺跡と比べ、立地面からみて、やや特異な位置にあることが窺える。

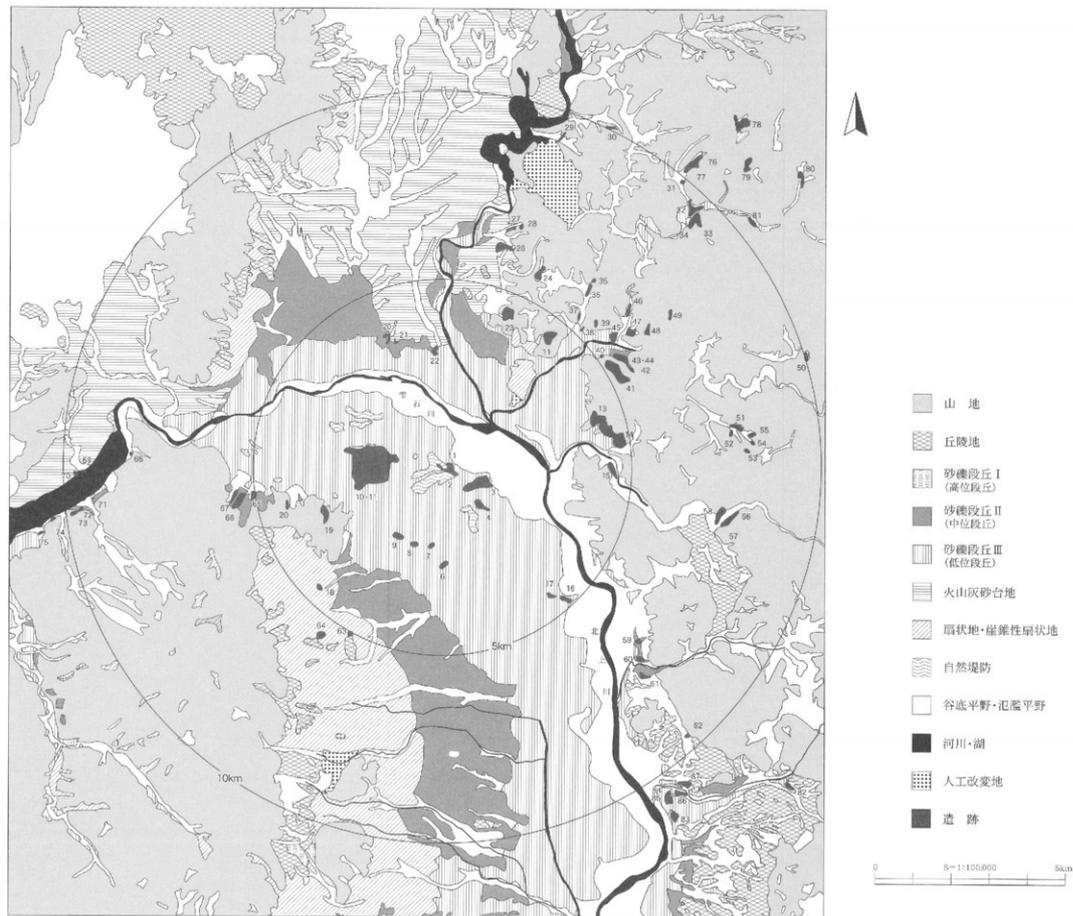
(註) 本遺跡は縄文時代晩期と古代の複合遺跡であるが、古代に関する周辺の遺跡については、いわゆる盛岡開発関係遺跡(例えば台太郎遺跡、本宮熊堂B遺跡、細谷地遺跡)の調査報告書に詳しく述べられており、今回は割愛することとした。

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	晩期の遺構・遺物
1	本宮館堂A	集落跡	縄文土器、竪穴住居跡
2	本宮館堂B	集落跡	縄文土器(晩期)、土坑
3	白太郎	集落跡	縄文土器(晩期)、竪穴住居跡(晩期)
4	細谷地	集落跡	縄文土器(晩期)、剥片石器
5	野古A	集落跡	縄文土器、陥し穴
6	田中	散布地	縄文土器、石器(晩期)
7	西	集落跡	縄文土器(晩期)
8	深溝Ⅱ	集落跡	縄文土器(晩期)
9	飯岡林崎Ⅱ	集落跡	縄文土器(晩期)
10	志波城	城跡	縄文土器(晩期)
11	新原端	城跡	縄文土器(晩期)
12	鏡神沢	散布地	縄文土器(後・晩期)
13	小山	集落跡	縄文土器(前期～晩期)
14	砂留	集落跡	縄文土器(晩期)
15	沢田	散布地	縄文土器(前～晩期)
16	三本柳郷	集落跡	縄文土器(晩期)
17	下永林	散布地	縄文土器(晩期)
18	アイノ野	散布地	縄文土器(晩期)
19	オミ坂	散布地	縄文土器(早～晩期)
20	小和国館	城跡	縄文土器(前・中・晩期)
21	大館堤	集落跡	縄文土器(中・晩期)
22	大館町	集落跡	縄文土器(前～中・晩期)
23	宿田	散布地	縄文土器(早～晩期)
24	上田山	散布地	縄文土器(中・晩期)
25	宇澄坂	散布地	縄文土器(中期)、土偶(晩期)
26	黒石野平	集落跡	縄文土器(早～晩)
27	東黒石野	散布地	縄文土器(後・晩期)
28	黒石野	集落跡	縄文土器(晩期)
29	小島沢A	集落跡	縄文土器(早～晩期)
30	庄ヶ畑	散布地	縄文土器、竪穴住居跡(晩期)
31	米内沢A	集落跡	縄文土器(前～晩期)
32	向館	城跡	縄文土器(中～晩期)
33	畑井野 (米内館)	城跡	縄文土器(早～晩期)
34	上米内	集落跡	縄文土器(中～晩期)
35	歳ノ神	散布地	縄文土器(早～晩期)
36	新茶畑	散布地	縄文土器(晩期)
37	イタコ塚	散布地	縄文土器(晩期)
38	屠牛場	散布地	縄文土器(早・後・晩期)
39	甘石	散布地	縄文土器(晩期)
40	大塚	集落跡	縄文土器、竪穴住居跡(晩期)
41	稲久保	集落跡	縄文土器(中・晩期)
42	寺沢	散布地	縄文土器(中～晩期)
43	向田	散布地	縄文土器(中～晩期)
44	柿ノ木平	集落跡	縄文土器(中～晩期)

No.	遺跡名	種別	晩期の遺構・遺物
45	落合	集落跡	縄文土器(後・晩期)
46	稲荷社前	散布地	縄文土器(後・晩期)
47	馬場野	散布地	縄文土器(中～晩期)
48	一本松	散布地	縄文土器(前・後・晩期)
49	熊ノ沢	散布地	縄文土器(前・中・晩期)
50	笹ノ平	散布地	縄文土器(早～晩期)
51	八木田Ⅰ	散布地	縄文土器、竪穴住居跡(晩期)
52	八木田Ⅱ	集落跡	縄文土器(早～晩期)
53	八木田Ⅲ	集落跡	縄文土器(後・晩期)
54	八木田Ⅳ	散布地	縄文土器(中～晩期)
55	八木田Ⅴ	集落跡	縄文土器、竪穴住居跡(晩期)
56	川目A	散布地	縄文土器(前・後・晩期)
57	川目B	散布地	縄文土器(中・晩期)
58	川目C	散布地	縄文土器(晩期)
59	高見	散布地	縄文土器(早・前・晩期)、石器
60	手代森	集落跡	縄文土器(前・後・晩期)
61	藤崎	散布地	縄文土器(晩期)
62	沢	散布地	縄文土器(早・中・後・晩期)
63	後鳥	散布地	縄文土器(後・晩期)
64	湯壺	集落跡	縄文土器(晩期)
65	猪去館	城跡	縄文土器、竪穴住居跡(晩期)
66	上半	集落跡	縄文土器(早～晩期)
67	上塚去	集落跡	縄文土器(早～晩期)
68	下塚田Ⅰ	散布地	縄文土器(早～晩期)
69	堂ノ沢	集落跡	縄文土器、竪穴住居跡(晩期)
70	新誠館	散布地	縄文土器(後～晩期)
71	繁Ⅲ	集落跡	縄文土器、土坑
72	繁Ⅴ	集落跡	縄文土器、土坑、 竪穴住居跡(晩期)
73	繁Ⅵ	集落跡	縄文土器(中～晩期)
74	前内	集落跡	縄文土器(後・晩期)、墓塚、 竪穴住居跡(晩期)
75	上野	散布地	縄文土器(前～晩期)
76	上三沢	散布地	縄文土器(後・晩期)
77	下三沢	散布地	縄文土器(中～晩期)
78	下小浜	散布地	縄文土器(前～晩期)
79	一戸農場	散布地	縄文土器(中～晩期)
80	矢沢	散布地	縄文土器(晩期)
81	畑	散布地	縄文土器(中・晩期)
82	城内	散布地	縄文土器(晩期)
83	乙部方丁	散布地	縄文土器(早・中・後・晩期)
84	町田	散布地	縄文土器(中・後・晩期)
85	高畑	散布地	縄文土器(中・後・晩期)
86	乙部野	散布地	縄文土器(後・晩期)
87	館	散布地	縄文土器(中・晩期)

※種別は遺跡地図上に記載されたものをもとに再編成しており、従って実際とは異なる場合がある。



第3図 本宮熊堂A遺跡周辺の縄文晩期の遺跡

Ⅲ 調査の経過と方法

1 第26次調査について

第26次調査は平成16年7月1日～10月19日まで、2,636㎡を対象として実施した。本調査に先立ち、平成15年に盛岡市教育委員会による試掘調査が実施され、第17次調査区の西側に遺跡範囲が広がることが判明し、第26次調査区が設定された。

調査開始に際し、任意に調査区内にトレンチを設定し、表土下の地層状況を確認した上で、重機を使用して表土除去を行った。表土除去後、人力による遺構検出作業を行っている。

調査区にはあらかじめ、グリッドを設定し、遺物取り上げの際はそのグリッド毎に取り上げることとした。グリッドは平面直角座標第X系（日本測地系）にあわせて設定している。まず、一辺50×50mの大区画に区割りを行い、北から南にアラビア数字（1～）、西から東にアルファベットの大字（A～）を設定し、さらに大区画を2×2mの小区画に細分し、東西方向に西からアルファベット小文字でa～y、南北方向に北からアラビア数字1～25に分割している。各グリッドの名称については、大区画と小区画の組み合わせで、例えば「4N1aグリッド」のように設定している。

なお、グリッドの設定は当埋蔵文化財センターが過去に調査した、本宮熊堂A、本宮熊堂B遺跡において設定されたグリッドに準じ、グリッド名が連続するように設定した。

検出された遺構は、規模や性格により、適宜に4分法と2分法を選択し精査を行った。各遺構について、平面、断面、遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。

写真撮影は主に、35mm判カメラ2台（モノクロ・カラーリバーサル）を使用し、必要に応じ、6×7判カメラ1台（モノクロ）も使用した。

平成16年9月29日に盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会の立ち会いの下、終了確認を行った。また啓蒙活動の一環として、平成16年10月7日（木）に現地公開を行い、調査成果を公表した。平成16年10月19日には全ての調査を終了した。

室内整理は平成16年11月1日から平成17年3月31日まで実施した。

遺物は野外作業の段階で水洗、注記の一部を終えており、室内整理は接合復元より行っている。

主に作業員は土器の接合復元、実測、トレース、図版作成を行った。石器は実測から図版組みまでを（株）ラングに委託した。また、写真図版編集は（株）セビアスに委託した。調査員は遺構図の修正、トレース、図版作成、遺物観察表作成、原稿執筆を分担している。

2 第29次調査について

第29次調査は、平成17年6月1日から6月30日まで、面積283㎡を対象として実施した。調査区は、前回第26次調査の東側に隣接する地点である。実際の調査は、第26次調査で得られた情報をもとに、まず旧河道およびその北岸に形成された縄文時代晩期遺物包含層の層序の把握を最優先して行った。調査方法は、基本的に第26次調査に準じているので、それについての記述は割愛する。

実際の調査は調査区西側から順次進めたが、旧河道およびその中に検出された溝跡2条が、平成8年度に調査が完了しているはずの第6次調査区に延びていることが明らかとなった。今となっては当時の状況は知る由もないが、この事実について委託者である盛岡市と盛岡市教育委員会文化課、若手

県教育委員会生涯学習文化課の各担当者と協議した結果、第6次調査区の状況確認調査もあわせて実施することとなった。その調査内容の詳細は以下のとおりである。

- ① 旧河道北岸の縄文晩期の遺物包含層について、可能な範囲でその広がりを確認する。
- ② 旧河道について、部分的に河底まで掘削し（トレンチ調査）、河幅・深さ等のデータを得る。
- ③ 第29次調査区側から続いている溝跡2条について通常の精査を行う。

結果①については、遺物の出土のみならず炉跡などの遺構も確認され、調査区北側・東側については、まだ周辺に縄文時代の遺構も存在する可能性が有ることがわかった。②・③については後述する。

また啓蒙活動の一環として、平成17年6月4日に現地説明会を行い、調査成果を公表した。

室内整理は平成18年1月4日から平成18年1月31日まで実施した。

遺物は野外作業の段階で水洗、注記の一部を終えており、室内整理は接合復元より行っている。

主に作業員は土器の接合復元、実測、トレース、図版作成を行った。石器は実測から図版組みまでを（株）ラングに委託した。調査員は遺構図の修正、図版作成、遺物観察表作成、原稿執筆を分担している。

3 凡 例

遺構の略号

盛岡市教育委員会の調査・整理方法に準じ、遺構の名称には、以下の様な略号を付している。

竪穴住居跡・・・RA 竪穴状遺構・・・RE 土坑・・・RD 焼土遺構・・・RF
溝・・・RG 集石遺構・・・RH

遺構断面の土層注記について

野外調査の際、土層の観察記録については、以下の項目を基本とし記録した。

色調（「標準土色帖」（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする。）

粘性（4段階表示：強い、やや強い、やや弱い、弱い）

締まり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量 1～10％・少量 11～20％・中量 21～30％
やや多い 31～40％・多量 41％～50％）

図版縮尺

遺構、遺物図版の縮尺は以下のものを原則とし、各国版にスケールを付している。

遺構 平向・断面：1/40 遺物出土状況図：1/20 炉の平面・断面：1/20

遺物 縄文土器：1/3 土師器：1/4

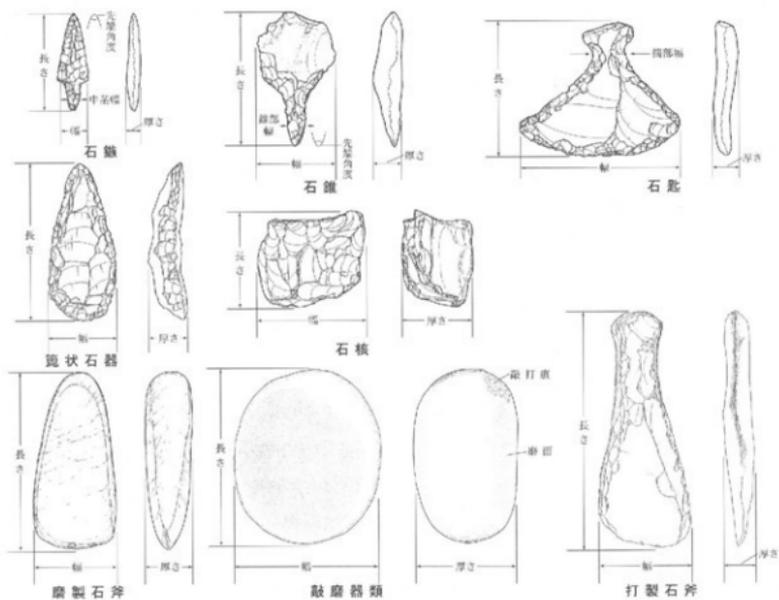
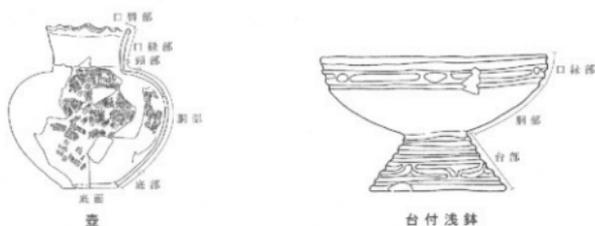
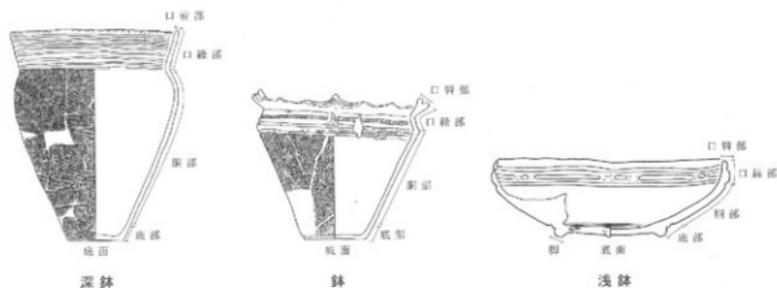
剥片石器：2/3、1/2、1/3 礫石器：1/3

遺物の各部位の呼称について

土器の各部位の呼称については第4図（上）に示したものを基準とし、本文、観察表に記載した。

なお、観察表では口唇部→「唇」、口縁部→「口」、胴部→「胴」、底部、底面→「底」と略して記載している。

石器の各部位の呼称については第4図（下）に示したものを基準とし、観察表に表記した法量などもこれに準拠し、計測を行った。



第4図 遺物の凡例

IV 遺物の分類基準

1 縄文・弥生土器

(1) 縄文後期

1点のみ確認した(第79図-254)。器種は注口土器で、十腰内3~4式に相当するものである。

(2) 縄文晩期

縄文晩期後葉、大洞C2~A'式土器に比定され、出土した土器の大部分を占める。器種は深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器、浅鉢形土器、注口土器、ミニチュア土器で、その他、土偶や耳栓などの土製品、粘土塊が見ついている。器種ごとに分類した。

深鉢形土器(以下、深鉢)

口縁部文様から4分類(A~D類)、形態から3分類(1~3類)した。

〈文様〉

A類:口縁部文様帯に数条の沈線が横位に巡るもの。口唇部は平縁の他、工具による刻みや押圧が巡るものや、4単位の突起が付き、その間を細かい刻みが巡るものがある。

B類:口縁部文様帯の上下端に沈線が巡り、その間を無文化するもの。口唇部はほとんど平縁である。

C類:口縁部文様帯が無文化するもの。頸部に沈線が巡るか、頸部に屈曲があり、また胴部には縄文が施文される。口唇部の形状は平縁が多いが、4単位の突起がつくものや波状を呈するものも見受けられる。

D類:口縁部文様帯と胴部文様帯との区別がなく、連続して縄文が施文されるもの。

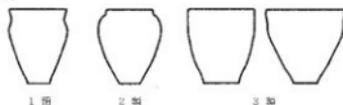
〈形態〉(第5図)

1類:口縁部が直線的に外反するもの。口径が比較的広く、口径が最大径になる。

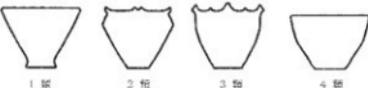
2類:口縁部が直立気味になるもの。口径は1類に比べ、すばまって小さくなる。従って最大径が胴上部にきて、肩を形成する。

3類:胴部から口縁部にかけて緩く内湾しながら立ち上がる、「砲弾」状の形態を呈するもの。頸部が明瞭ではない。

深鉢



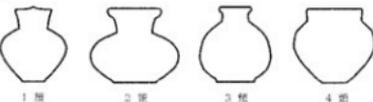
鉢



浅鉢



壺



第5図 縄文土器器種別形態

鉢形土器（以下、鉢）

口縁部から胴部上半の文様から7分類（A～G類）、また形態から4分類（1～4類）した。

〈文様〉

- A類：磨消縄文が施文されるもの。
 B類：縄文施文の工字文が施文されるもの。
 C類：浮線手法による工字文や卍字文が施文されるもの。
 D類：複数条の沈線文が横位に巡り、また沈線間に刺突などが加えられるもの。
 E類：沈線文による工字文を描き、工字文間には斜沈線が施文される。高橋龍三郎氏による所謂「特殊工字文」を指す（高橋1993）。
 F類：無文、あるいは斜縄文を施文するもの。
 G類：変形工字文が施文されるもの。（今回の調査では確認されていない）

〈形態〉（第5図）

- 1類：胴部から口縁部にもわい外に広がり、口唇部直下で内側に屈曲するもの。台部が付くことが多い。
 2類：胴部から口縁部にもわい外に広がり、口縁部で内側に屈曲し、口唇部直下でまた外反するもの。
 3類：底部から口縁部へと直立あるいはやや内湾しながら立ち上がるもの。
 4類：底部から口縁部にもわい外に広がるもの。

浅鉢形土器（以下、浅鉢）

口縁部の文様要素から7分類（A～G類）、また形態から5分類（1～5類）した。

〈文様〉

- A類：縄文施文の工字文が施文されるもの。
 B類：浮線手法による工字文が施文されるもの。
 C類：横位に数条の沈線が巡り、また沈線間に刺突が加わるもの。
 D類：所謂「特殊工字文」が施文されるもの。
 E類：変形工字文が施文されるもの。
 F類：口縁部が肥厚し、その肥厚部にB突起が付くもの。また肥厚部直下には沈線文が巡るもの。
 G類：無文のもの。

〈形態〉（第5図）

- 1類：胴部から口縁部にかけて、緩く内湾し、底面が丸底か、小さい平底のもの。
 2類：口縁部から胴部の形態は1類と同じで、台部が付くもの。
 3類：口縁部から胴部の形態は1類と同じで、四脚が付くもの。
 4類：胴部から口縁部へと外へと広がる「逆台形」状を呈するもの。
 5類：胴部から口縁部にかけて、緩く内湾するが、非常に浅く、「皿」状を呈するもの。四脚が付くものもある。

壺形土器（以下、壺）

壺は口縁部と胴部上半に文様帯が見受けられる。そこで胴部上半の文様（A～D類）、口縁部の文様（a～d類）、形態（1～4類）でそれぞれ分類した。

〈胴部文様〉

- A類：縄文施文の工字文が施文されるもの。

- B類：隆帯による工字文が施文されるもの。
- C類：斜縄文のみのも。胴部下半にまで及ぶ。
- D類：無文のもの。

〈口縁部文様〉

- a類：口唇部にA突起と、B突起が交互に付き、口縁部が肥厚するもの。
- b類：口唇部に突起が付かず、口縁部に隆帯による工字文が巡るもの。
- c類：口唇部に突起が付かず、口縁部に沈線が1条巡るもの。
- d類：口唇部に突起が付かず、口縁部は無文のもの。

〈形態〉(第5図)

- 1類：細頸で、最大径が胴部上半にくるもの。
- 2類：細頸で、最大径が胴部ほぼ中央にくるもの。
- 3類：細頸で、最大径が胴部下半にくるもの。
- 4類：太頸で、最大径が胴部ほぼ中央にくるもの。

注口土器

胴部に筒状の注口部が付くもの。点数が少ないので分類はしていないが、胴部の形態は壺に類似し、文様は縄文が施文されるものと、工字文が描かれ、隆帯が付くものが認められる。

ミニチュア土器

器高5cm以下のものについて、ミニチュア土器とした。

(3) 弥生土器

数点確認した。弥生前期～中期に比定される。甕、浅鉢、壺、高坏、壺、蓋が見つかった。点数が少ないので、時期別の分類は行わず、各器種で分類した。

甕

形態は、口縁部が外反気味に広がり、頸部が屈曲する。施文される文様から以下に分類される。

- A類：頸部に細い沈線で鋸歯文を描き、胴部に縄文が施文されるもの。
- B類：口縁部～胴部にかけて縄文が施文されるもの。
- C類：胴部のみ縄文が施文されるもの。
- D類：無文のもの。

浅鉢

形態は縄文土器形態分類(第5図)での4類に類似する。文様から2分類できる。

- A類：口縁部～胴部に変形工字文が施文されるもの。
- B類：口縁部に細い沈線で、鋸歯文が描かれるもの。

壺

形態は頸部が細く、縄文土器形態分類(第5図)での2、3類に類似する。文様は胴部に磨消縄文を施文している。

高坏

坏部のみ出土している。縄文が施文されるものと無文のものが認められる。

蓋

摘み部を有し、直線的に開く形態で、2点出土している。縄文が施文されるものと無文のものがあ

(4) 観察表の表記項目について

層位・法量(器高・口径・底径)・器種・残存部位・分類・文様、調整(外・内面)・胎土・混入量・色調(外・内面)について観察し、記載している。

文様：口唇部(「唇」と表記)、口縁部(「口」と表記)、胴部(「胴」と表記)、底部(「底」と表記)に分けて記載している。なお、無文の場合は特に記載していない。

胎土：土器の表面、断面を観察し、胎土に含まれる砂粒(「砂」と表記)・長石(「長」と表記)・雲母(「雲」と表記)・白色粒子(「白」と表記)といった混入物を記載した。

混入量：胎土混入物の混入量について、A、B、Cの3段階に分類し、記載した。

A→粒径1mm以上の混入物が多量に混入され、土器の器面がザラザラしている。

B→粒径1mm以上の混入物が多量に混入されるがAほど多くない。

C→粒径1mm以下の混入物が少量混入する。土器の器面が緻密である。

色調：外内面について記載した。観察に際しては「標準土色帖」に示される色調を基準とした。

2 石 器

本遺跡から出土した石器のうち、ツール類は石鏃、石錐、石匙、筈状石器、尖頭器、不定形石器、礫器、打製石斧、磨製石斧、中形石器未成品、敲磨器類、石皿類が、また他に石核、フレイクが多くみつかった。

石鏃

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ5cm以下のもの。未成品を含め、5分類した。

1類：有茎鏃 2類：尖基鏃 3類：円基鏃

4類：無茎鏃 5類：未成品

石錐

二次加工により錐状の端部が作出されるもの。扁平な基部の有無を基準に3分類した。

1類：基部が不明瞭、あるいは無く、形状が棒状を呈するもの

2類：基部が明瞭に付くもの。錐部の長さでさらに2細分した。

a種：錐部が長いもの b種：錐部が短いもの

3類：未成品

石匙

摘み部を作出し、また二次加工により幅広の刃部が作出されたもの。4分類した。

1類：摘み部の軸を垂直にした場合、刃部が横に付くもの。さらに2細分した。

a種：摘み部の最大幅が柄部より長いもの。

b種：摘み部の最大幅が柄部より短いもの。

2類：摘み部の軸を垂直にした場合、刃部が縦に付くもの。

3類：摘み部の軸を垂直にした場合、刃部が斜め(傾斜角度が30~60度)に付くもの。

4類：刃部、柄部、摘み部、いずれかが未成形のもの。

筈状石器

平面形が撥形を呈し、縁辺の一端あるいは両端に二次加工による刃部が作出されるもの。8点しか

見つかっていないので、分類はしていない。

尖頭器

幅にやや厚みがあり、二次加工により鋭角な先端部が作出され、長さが5cm以上のもの。1点しか見つかっていないので、分類していない。

不定形石器

定形化した形状をもたず、縁辺部に刃部が作出されているものを一括して不定形石器とした。刃部角度や刃部の形状から3分類した。

- 1類：縁辺の半分以上に刃部が作出され、扁平で、刃部の角度が 60° 以下のもの。所謂、「削器」。
- 2類：縁辺の半分以上に刃部が作出され、刃部の角度が 60° 以上のもの。所謂、「搔器」。
- 3類：刃部と思われる二次加工が施されているが、不連続や縁辺部の半分以下であったりするもの。

礫器

礫の側面部を利用し、刃部を作出したもの。3点しか見つかっていないので、分類していない。

打製石斧

平面形が楕形、長方形を呈し、剥離や敲打によって仕上げられた石斧。4点しか見つからないので分類していない。また所謂「石鋸」に形状が似たものも含む。

磨製石斧

平面形が楕形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石斧。2点しか見つからないので、分類していない。

敲磨器類

長軸あるいは長径が10cm以下で、磨痕、敲打痕、凹痕が確認できた礫石器。所謂、「磨石」、「凹石」、「敲石」を一括した。使用痕の種類や組み合わせで7分類した。

- 1類：磨痕のみが確認されるもの。複数の磨痕を確認したものも含む。
- 2類：凹痕のみが確認されるもの。複数の凹痕を確認したものも含む。
- 3類：敲打痕のみが確認されるもの。複数の敲打痕を確認したものも含む。
- 4類：磨痕と凹痕とが確認されるもの。
- 5類：磨痕と敲打痕とが確認されるもの。
- 6類：凹痕と敲打痕とが確認されるもの。
- 7類：磨痕、凹痕、敲打痕が確認されるもの。

石皿類

平向形の長軸、短軸ともに10cm以上のもので、磨痕、凹痕が確認できる礫石器。所謂、「台石」も含む。使用痕の種類や組み合わせから3分類した。

- 1類：磨痕のみが確認されるもの。複数の磨痕を確認したものも含む。
- 2類：凹痕のみが確認されるもの。複数の凹痕を確認したものも含む。
- 3類：磨痕と凹痕とが両方確認されるもの。

石核

剥片剥離作業が認められた石器。形状で3分類（A～C類）、作業面の数で3分類（1～3類）でできる。

〈形態〉

A類：球状を呈するもの B類：扁平状を呈するもの C類：棒状を呈するもの

〈作業面の数〉

- 1類：1面（複数方向から剥離作業を行うものを含む）
- 2類：2面（複数方向から剥離作業を行うものを含む）
- 3類：3面以上（複数方向から剥離作業を行うものを含む）

ユーズドフレイク（以下、Uフレイク）

上記の分類項目からはずれた剥片石器で、微細な剥離痕跡や使用痕が確認できるもの。後述するフレイクと同じ分類項目を設定した（フレイクの項参照）

リタッチドフレイク（以下、Rフレイク）

上記の分類項目からはずれた剥片石器で、刃部以外に二次加工が施されているもの。

フレイク

上記の分類項目全てからはずれた剥片石器。打面と背面の形状から以下のように分類した。

まず背面にみられる自然面の残存状況により3分類した。

A類：背面の全てが自然面（剥離なし）

B類：背面の一部が自然面（一部に剥離作業を行う）

C類：背面に自然面が見られないもの（面全体で剥離作業が行われている）

また、打面の調整具合で3分類した。

1類：自然面を打面とするもの

2類：1回、剥離作業が行われた面を打面とするもの

3類：2回以上、剥離作業が行われた面を打面とするもの。

これらの組み合わせで9分類を構成する（第6図）。また打面が欠損しているものなど、分類不能なものについては、自然面の有無で、次のように2分類した。

背面 打面	1	2	3
A			
B			
C			

▼—打面の欠損 ●—自然面

第6図 フレイク分類

D1類：いずれかの面に自然面が残るもの。

D2類：自然面が全く残らないもの。

石材について

石器石材の同定については花崗岩研究会に依頼した。その中で判明した石材は安山岩、デイサイト、砂岩、貞岩、赤色貞岩、凝灰岩、閃緑岩、花崗閃緑岩、ひん岩、石英、玉髓、黒曜石である。ただし、以下のものについては、須原が細分類を行っている。

貞岩：色調により、以下のように7分類した。

1類：黒色（7.5Y2/1）～青黒色（5BG2/1）を呈するもの。

2類：灰色（5Y4/1～5/1）を呈するもの。

3類：黄色（2.5Y）～オリーブ色（5Y）を呈するもの。

4類：灰白色（2.5Y～5Y）を呈するもの。

5類：白色を呈するもの。

6類：灰色（N6/1）～青灰色（5BG6/1）を呈するもの。

7類：緑色を呈するもの。

赤色貞岩：所謂「鉄石英」も含まれる。色調により3分類した。

1類：赤色（10R4/6）を呈するもの。

2類：暗赤褐色（10R3/3）を呈するもの。

3類：にぶい橙色（5YR6/4）を呈するもの。

軽石：分類上は安山岩に属する。黒色を呈し、多孔質で軽く、石皿類などに意図的に利用されており、従って安山岩とは別に扱うこととした。

3. 土師器・須恵器

第26次・第29次調査で出土した古代の土器は少なく、またこれらの詳細な分類が隣接する本宮熊堂B遺跡第25次調査で出土したものについて行われている。よって、独自に分類することはせず、それに従うことにする。ここでは土師器環が出土土器の大半を占めているので、それに関する分類基準のみを示す。なお、非口口の土師器環は1点なので省略する。

I：非黒色処理 底部からの立ち上がり a：外傾 c：内湾

I c類は4細分する。

i：体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がる。

ii：体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がり、口縁部で外反する。

iii：底部側縁で一度屈曲し、そのあと内湾しながら立ち上がる。

iv：底部が厚くやや柱状を呈している。

II：内面黒色処理 底部からの立ち上がり a：外傾 c：内湾

II c類は4細分する。

i：体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がる。

ii：体部が内湾しながら口縁部まで立ち上がり、口縁部で外反する。

iii：底部側縁で一度屈曲し、そのあと内湾しながら立ち上がる。

iv：底部で一度屈曲するが体部は椀状に立ち上がる。

III：内外面黒色処理 底部からの立ち上がり a：外傾 c：内湾

V 基本層序と調査区内の地形について

第7図は第26次調査で確認した基本層序の位置と地形について示した図である。

遺構を検出したのはV層上面であるが、IV層より下層は、どの土層も非常に類似しており、地山上と遺構堆積上との見分けが困難であった。なおトレンチで遺構確認よりさらに掘り下げ、遺物の有無を確認しており、V層より下から遺物が出土しない事が分かっている。またⅥ層直下から水がしみ出してきていたので、この層下位で掘り下げをやめている。

I層は現代の盛土層で、採石を多量に含む。第26次調査区は昭和20年代まで水田であったので、この層もそれ以降、人為的に堆積したものである。

II層は昭和20年代まで存在していた水田耕作土と考えられ、色調や褐鉄鉱の混入量などから2細分できる場所がある。II b層とした下位層に褐鉄鉱が多く含まれるのは、水田耕作土中に含まれていた鉄分が沈下し、II層下面に溜まったものと考えられる。

III層以下、自然堆積層である。III層は色調、粒子の細かさなどで2細分できる場所がある(III a・III b層)。調査区南側において、層下位から遺物が少量出土している。主に土師器片であり、III層下位は古代の検出面である可能性が高い。ただしこの層から遺構は検出されなかった。またIII層下位からIV層上面にかけて、調査区南側で「和田」アテフラと思われる火山灰を検出した。

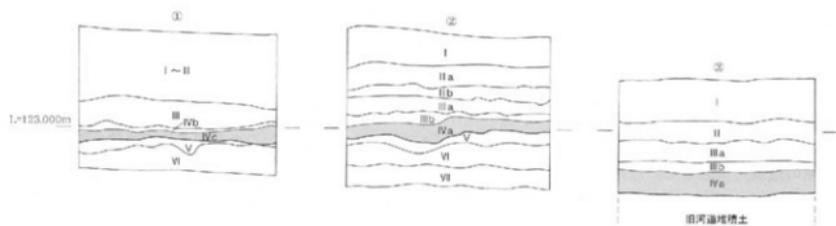
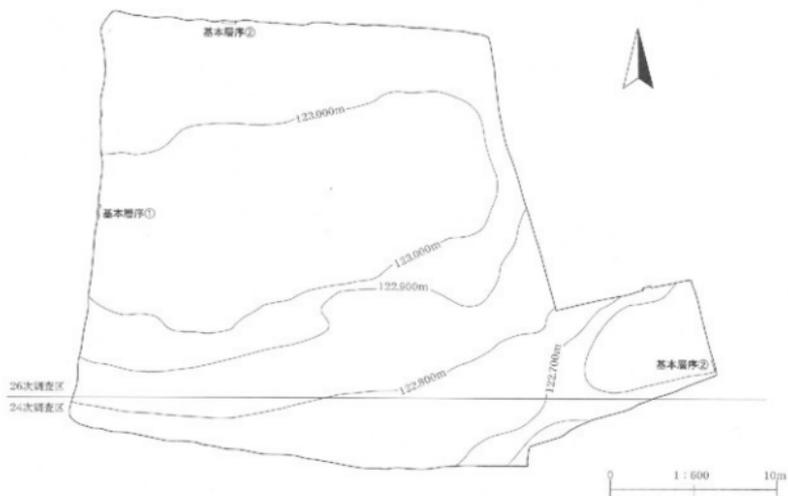
IV層は粒子が細かく、締まりが密で、粘上にやや近いシルト層である。色調などで3細分できる。層の厚は10~20cmを測り、縄文時代晩期の土器を包含している。調査区南西部はグライ化しており、土壌が青色に変色している。IV b層は基本層序②周辺でのみ確認できた層で、IV a層とは土質も色調も異なるが、遺物が混入することなどから、IV層に含んでいる。あるいはIV a層がグライ化によって変質したものであるかもしれないが、調査区南西部に堆積しているIV b層の範囲を確認できなかった。従って、IV a層とIV b層の堆積上の新旧関係についても、分かっていない。

V層は粘土層である。色調や粒子の細かさなどで2分できる。今回、このV層の上面で縄文時代晩期の遺構を検出した。ただしIV層とV層は色調が類似し、またIV層上がシルトでも粘土質に近いものであることから、粘上を主体とするV層との識別は非常に困難を極めた。

VI層でまたシルト層に戻る。粘性が弱く粒子が粗い砂質に近いシルト層である。調査区中央部のやや東寄り(RD048付近)ではV層の堆積が薄く、VI層が他の場所よりも上がってきている。そのため、遺構底面がVI層に達していることが確認されている。

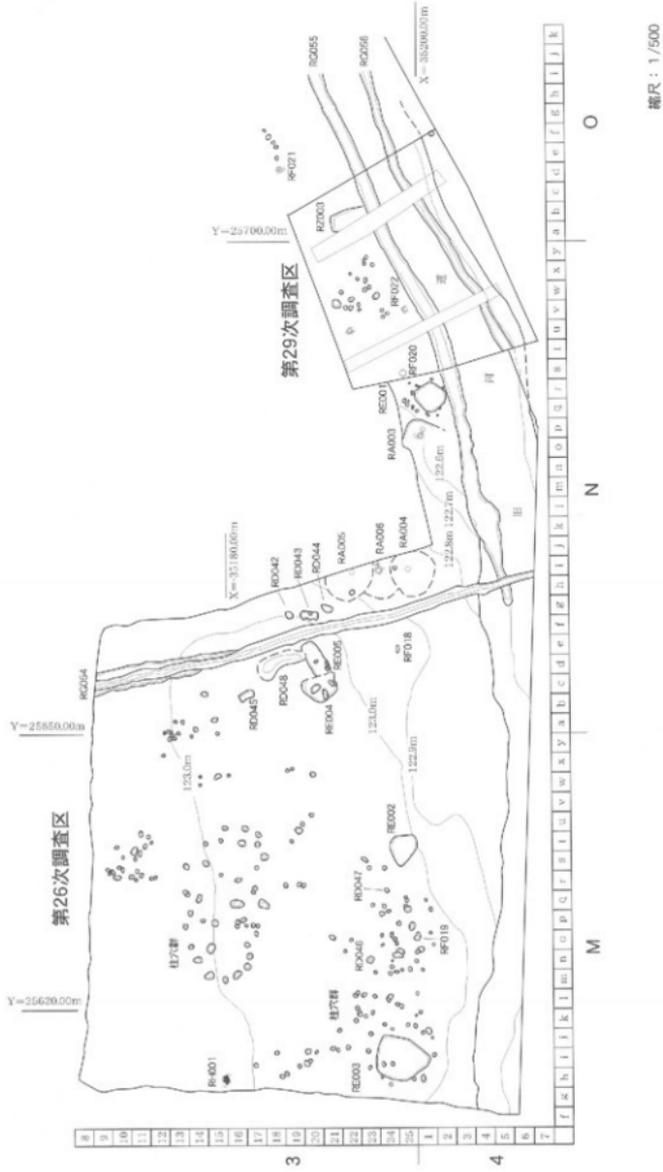
Ⅶ層は水気を帯びた粘土層で、直下から水がしみ出してきていた。そのため、土壌もグライ化しており、色調も青色を呈する。層下位には砂質に近いシルトがブロック状で偏在した。このように、VI、Ⅶ層は粘土層と砂質に近いシルト層とが交互に堆積していることが確認できた。

以上のような上層堆積状況を確認した。野外調査の際、各層を面的に確認することは困難であり、特に遺構検出では、判断基準として最も確かな上層の色調の区別が可視的には頼りにならない状況であった。従って遺物の出土状況や炭化物、焼土の堆積状況から、遺構が存在する可能性がある箇所、トレンチを入れ、その断面にみられる土層、混入物の内容や堆積状況から遺構の有無を確認している。ただし今回の報告書内に掲載した遺構図では、トレンチを入れた箇所は点線とし、あえて、トレンチの形状などは図が示していない。断面図に関しては、遺構の底面と判断した箇所より下に掘り下げているものはその層に関する土層注記を行い、その内容について示した。

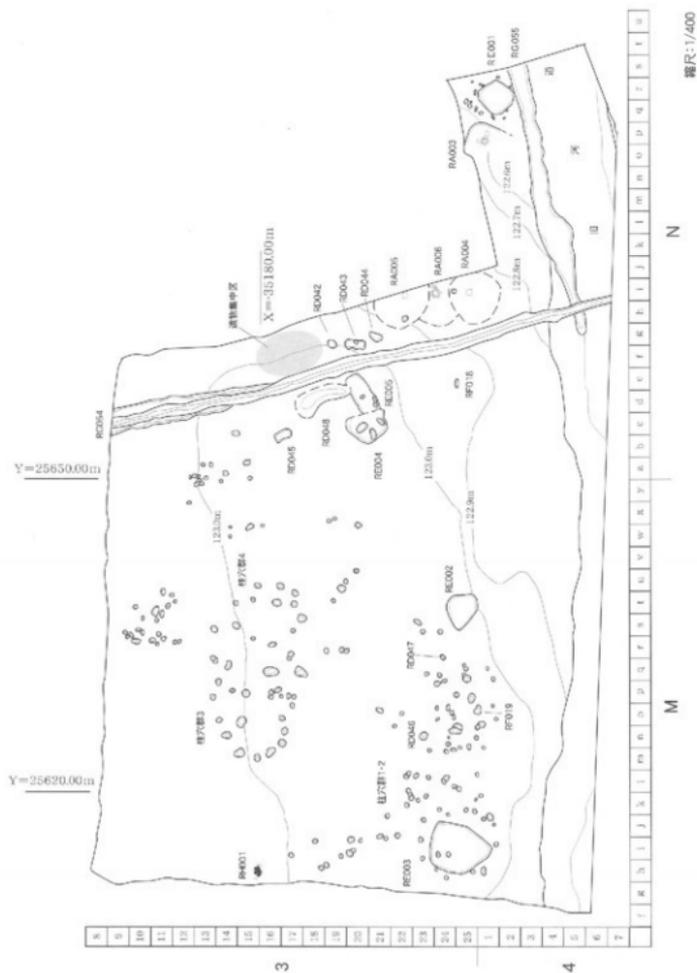


I層	3Y R5/6	黄褐色砂層	粘性土	締まりやや密	気性の表土・礫十、10~30cmの礫や多く含む。
IIa層	3Y R4/7	灰褐色シルト	粘性土	締まり密	粘土は細かい、磁鉄鉱少量含む。
IIb層	3Y R4/2	灰褐色シルト	粘性土	締まり密	粘土は細かい、磁鉄鉱やや多く含む。
IIIa層	3Y R3/3	明褐色シルト	粘性やや強	締まり密	粘土はやや細かい、磁鉄鉱少量、白色粘土少量含む。
IIIb層	3Y R3/4	明褐色シルト(基a層より硬め)	粘性やや強	締まりやや密	粘土はやや粗い、磁鉄鉱微量、白色粘土含まれる。火口穴下部に露在。
IVa層	2.5Y R4/4	褐色シルト	粘性強	締まりやや密	粘土は細かい、湖沼代堆積の気味強、磁鉄鉱少量含む。
IVb層	5Y 6/2	灰マゼンタ色シルト	粘性強	締まり密	粘土は細かい、磁鉄鉱中量含む。
V層	3Y 6/3	オレンジ褐色粘土	粘性強	締まりやや密	粘土は細かい、IVb層とV層との移行層、磁鉄鉱少量含む。
VI層	2.5Y R5/4	暗褐色粘土	粘性強	締まり密	粘土は細かい、透水性強、磁鉄鉱量豊富含む。
VII層	10Y R4/6	褐色シルト	粘性弱	ゆるりやや粗	粘土は粗い、砂質に多い、V層土ブロックで少量、黄褐色粘土少量含む。
VIII層	2.5Y R4/5	オレンジ褐色粘土	粘性強	ゆるり密	粘土は細かい。

第7図 調査区内地形図・基本土層柱状図



第 8 図 第26次・29次調査区連携配置図



第9図 第26次調査区遺構配置図

VI 第26次調査

1 概 略

第26次調査で検出した遺構は、縄文時代晩期後葉の竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構5棟、土坑7基、焼土遺構2基、集石遺構1基、また古代の溝跡2条、その他、縄文時代晩期から古代まで存続していたものと推定される旧河道が見つまっている（第9図）。

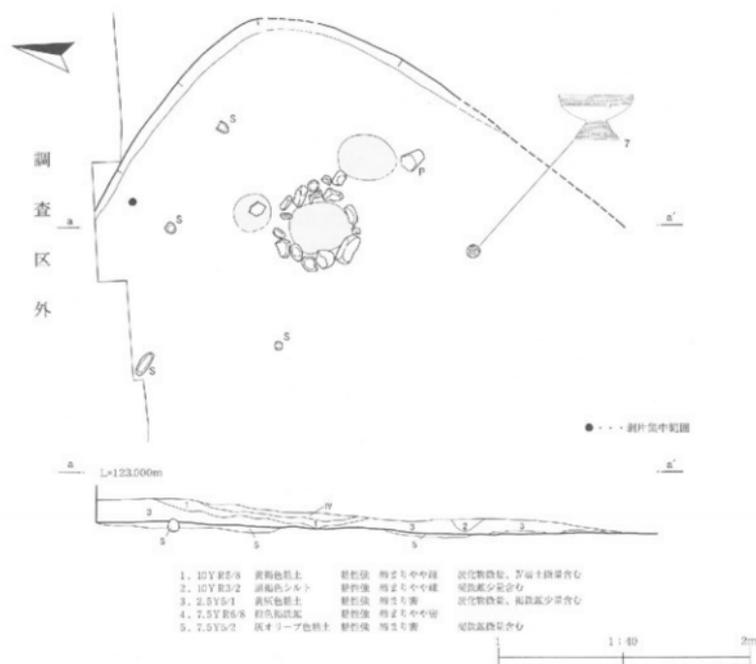
遺物は縄文・弥生土器が18,360点^(註)（203.5kg）、石器はツール類が413点（224.3kg）、石核・フレイクが1,607点出土した。出土土器は縄文時代晩期中葉から後葉に比定され、大洞C2～A式が主体である。

〈註〉上述の点数は調査時の取り上げ段階で集計した際の点数である。

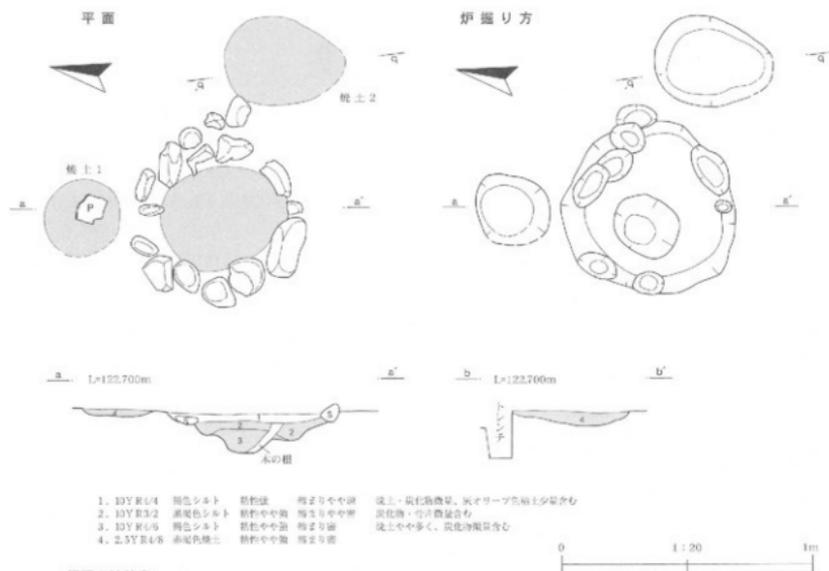
2 検出した遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡（RA）

4棟確認した。第6次・第17次で2棟確認されており、それらに続くRA003～006とした。



第10図 RA003



炉石の被熱痕



○・・・被熱痕のある炉石

第11図 R A003 石囲炉

R A003 (第10～15図、写真図版02・03・34・58)

〈位置〉調査区南西、4 N24～25 o グリッドに位置し、遺構の一部は調査区外へと続く。東側約50 cmで R E001と隣接する。

〈検出状況〉V層上面で、やや黒いシミ状のプランを確認し、南北方向にトレンチを入れ(断面 a-a' が相当) たところ、石囲炉を検出した。さらに石囲炉を中心として、放射状にトレンチを入れ、床面と壁の検出を行ったが、壁の立ち上がりは北東～南東壁の一部が見つかったのみであった。ただし石囲炉の検出面と同レベルからはほぼ水平に褐鉄鉱が堆積しており、また石囲炉の周辺からは土層中より遺物や炭化物が含まれているものが、石囲炉から2～3 m離れたと、土層中に混入物、褐鉄鉱の堆積がみられなくなる。

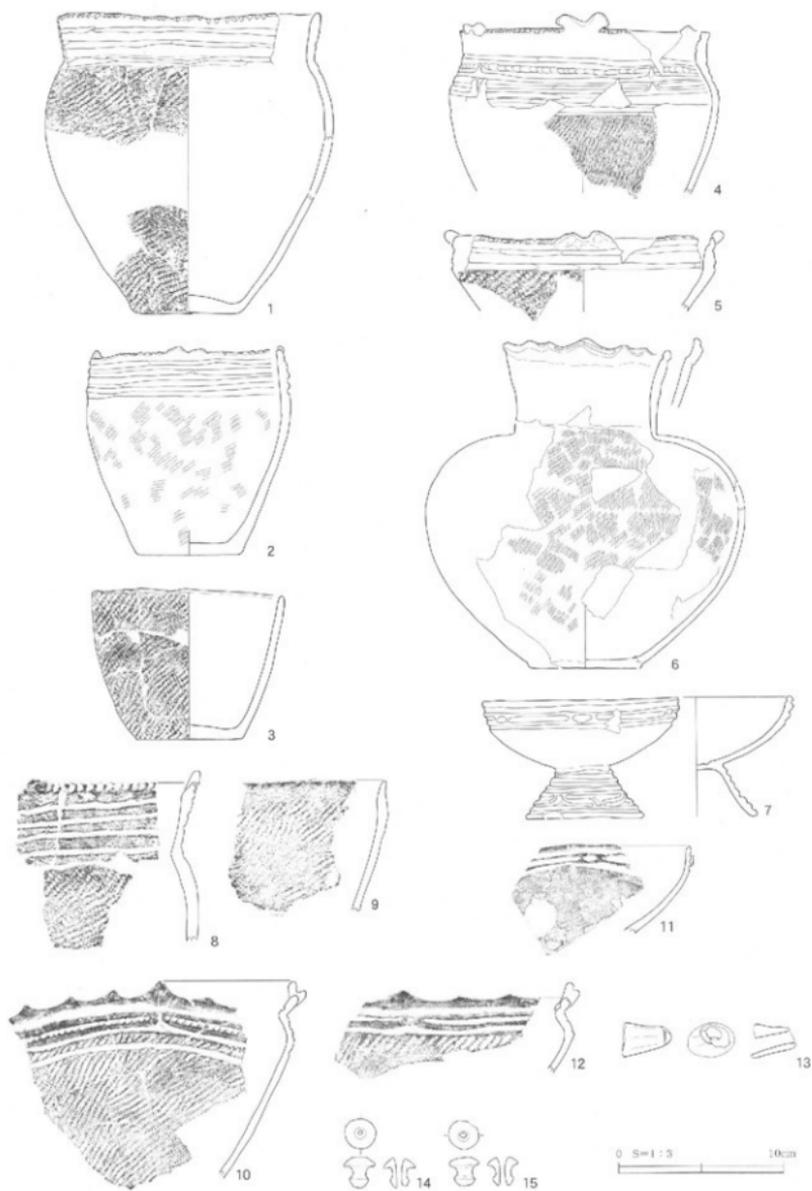
以上の点を根拠とし、石囲炉を中心として、褐鉄鉱の広がる範囲を住居の床面と判断した。

〈平面形・規模〉北側が調査区外に及んでおり、また西側の壁を検出できなかったため、平面形、規模共に不明である。平面形は西壁から方形を呈すると推測される。

〈堆積上〉黄灰色粘土を主体とし、4層に分層される。灰オリーブ粘土を主体とするV層と類似するが炭化物などの混入物から区別できる。

〈壁・床面〉北東～南東壁の一部を検出した。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は、褐鉄鉱の堆積する面を床面とした。硬化面は認められなかった。

〈炉〉石囲炉を1基確認した。また炉の南北両側に焼土の分布範囲が2箇所認められた。石囲炉はほぼ円形を呈し、北側に隙1個分の空間がある他は炉石が巡る。15点の炉石から構成され、石材は安山



第12図 RA003 出土遺物(1)

第2表 土器観察表 R A003

調査 番号	写記 番号	層位	砂種	分類	焼育 部位	外周文様	内周文様・顔彩	外面色調 内面色調	胎土	混入量	備 考
1	34	堆積土 上位	深鉢	A 2	口~底 1/3	唇: 割み 口: 沈線(3) 胴: L R 横	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・灰	A	容量2.68ℓ
2	34	床面	深鉢	A 3	口~底 1/2	唇: B突起(4単位)、割み 口: 沈線(2) 胴: L R ? 横	胴: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい褐色	砂	A	容量0.83ℓ
3	34	床面	鉢	F 4	略完形	口~胴: L R 横	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂・灰	B	容量0.52ℓ
4	31	堆積土 上位	鉢	D 3	口~胴	唇: R突起、割み 口: 沈線 胴: L R 横	口: 沈線 口~胴: L R 横	にぶい黄褐色	砂	A	
5	34	堆積土 上位	鉢	D 2	口~胴 1/3	唇: B突起、割み 口: 沈線 胴: L R 横	口: 沈線	黒褐色 黒褐色	砂・灰	A	内面に炭化物
6	34	堆積土 上位	皿	Ca 1	口~底 2/3	L: A突起(1単位) 胴: L R 横	口: ミガキ	にぶい黄褐色	白・雲	C	容量2.33ℓ
7	34	床面	浅鉢	C 2	略完形	口: 沈線、刺突 口: 文字文	口: 沈線 口~底: ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	雲・白	C	容量0.23ℓ
8	34	堆積土 上位	深鉢	A 1	口~胴部 片	唇: 突起、割線 口: 沈線 胴: L R 横	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 黒褐色	砂	A	
9	31	堆積土 上位	深鉢	D 3	口~胴部 片	唇: L R 横	口~胴: ナデ	黒褐色 黒褐色	砂・灰	A	内面に炭化物
10	34	堆積土 上位	鉢	D 2	口~胴 1/5	唇: 突起(波状) 口: 沈線、 刺突 胴: L R 横	口: 沈線、ミガキ	黒褐色 黒褐色	白	C	内面に炭化物
11	31	堆積土 下位	浅鉢	C	口~胴部 片	口: 沈線、刺突	口~胴: ミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	白	C	
12	34	堆積土 上位	鉢	D 2	口~胴部 片	唇: 突起 口: 沈線 胴: L R 横	口~胴: ミガキ	明黄褐色 黒褐色	白	C	
13	34	堆積土 下位	注口 土器	-	注口部 片	注口部: ミガキ	-	黒灰色	白・雲	C	
14	34	堆積土 下位	耳栓	-	完形	-	-	浅黄褐色	長・砂	B	
15	34	床面	耳栓	-	完形	-	-	浅黄褐色	長・砂	B	

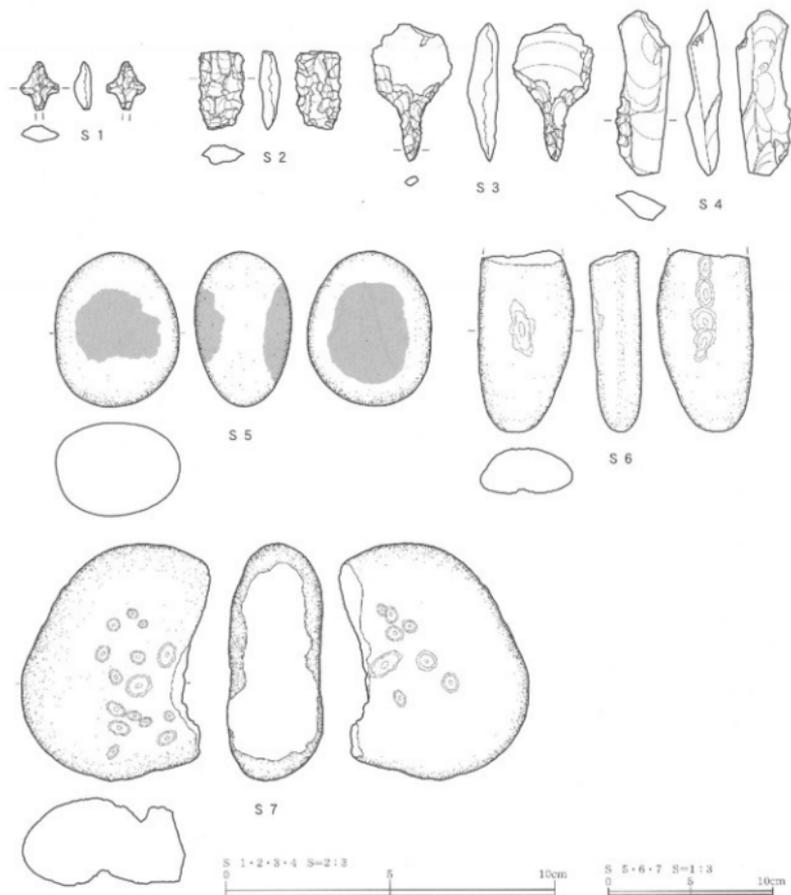
岩5点、アイサイト5点、砂岩2点に礫岩、流紋岩各1点である。炉石の組み方はやや粗雑で、サイズも不規則である。また石皿類、敲磨器類の転用品が3点含まれる。炉石15点中11点に被熱痕がみられた。燃焼部は黒褐色シルトを主体とする掘り方の堆積土中に焼土が混入する程度である。炉の掘り方は炉自体の大きさとほぼ同じであり、炉石部分も余分に大きく掘って埋めた形跡がない。炉石は直接、床面に刺すように設置していった可能性が高い。2箇所焼土分布範囲(焼土1・2)は30~50cmの不整形円形を呈し、焼土が約5cm堆積している。焼土1・2の方が石皿よりも燃焼しており、焼土の堆積も厚い。

〈その他〉北側の床面上から14点のフレイク(いずれも頁岩)が集中して出土している。

〈出土遺物〉石西炉周辺および、残存する壁周辺から出土した遺物を本遺構に伴うものと判断した。土器は破片にして546点(5.9kg)出土している。13点を図示した。出土位置は検出面に近い堆積土上位、堆積土下位、床面上の3段階に分けられるが、堆積土上位が多かった。深鉢はA類(1、2、8)と、D類(9)が見受けられた。鉢はD類が多く、特にD2類が多い。3はF4類で床面上から出土している。壺は1点のみでCa1類に相当する。浅鉢はC類が多い。7は完形で、床面上に伏せた状態で出土している(写真図版02-3)。注口土器は注口部のみ1点(13)出土している。

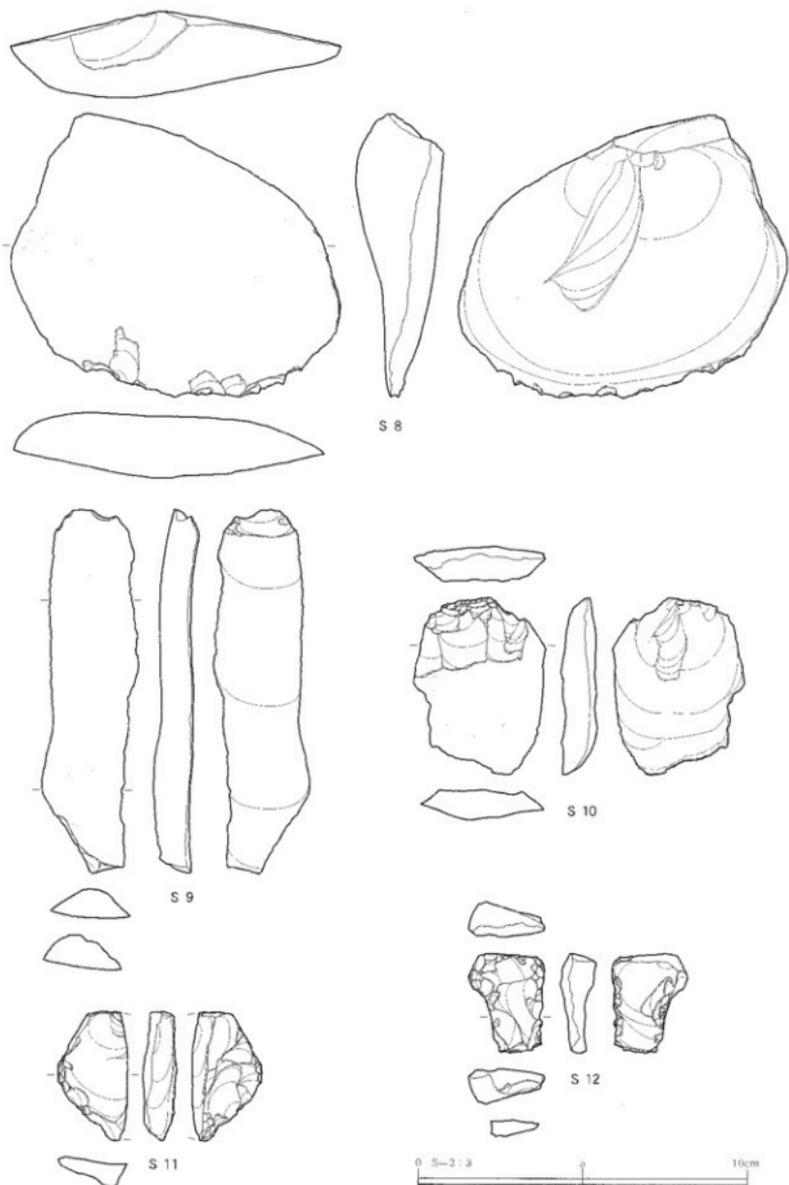
土製品は、耳栓が2点出土し、いずれも図示した。15は床面上から出土している。同じ床面上から見つかった浅鉢(7)と同時期のものと考えられよう。

石器は石礫1点、筧状石器1点、不定形石器10点、敲磨器類15点、有孔土製品1点、石核3点、フレイク127点(Rフレイク5点、Uフレイク2点)が出土している。フレイクの出土点数が突出して多い。7点を図示した。S1は石礫である。中葉部が欠損しているが、残存部だけでも先端と中葉部

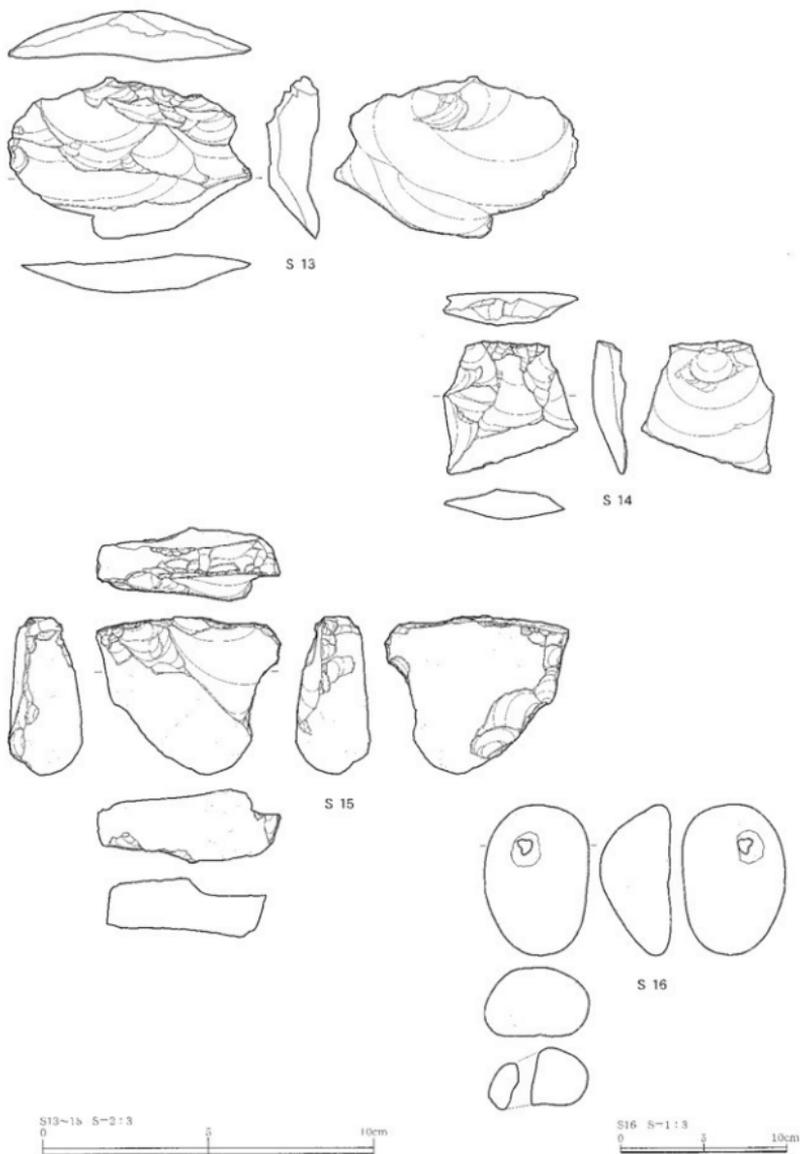


第13図 RA003 出土遺物(2)

がほぼ同じ長さなので、恐らく先端部より中葉部の方が長かったものと思われる。S2は床面上から出土した石鏃で、石材は赤色頁岩1類で珍しい。リダクション途中のもので先端部が作出されていない。S3は石鏃で、鏃部は両側面に二次加工が施されており、握み部には自然面が残る。S4は不定形石器で、片側の片面のみに二次加工による刃部が作出されている。S5～7はいずれも床面上から出土した敲磨器類で、S5は両面に磨痕が、S6、7は両面に凹痕がみられる。S8、9はUフレイク、S10～13はRフレイク、S14はフレイクである。S15は石核である。S16は堆積土上位から出土した有孔石製品で、両面から穿孔されている。



第14図 RA003 出土遺物 (3)



第15図 RA003 出土遺物(4)

第3表 石器観察表 RA003

検出番号	位置番号	器種	層位	分類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特徴等(注)	残存状態	備考
S 1	58	心礎	厚積土下位	1類	灰岩	14.16	11.40	4.85	0.49	47	口縁部欠損	手巻幅3.95cm
S 2	58	心礎	同上	3類	赤色頁岩	(23.82)	13.32	1.91	2.01	-	体部欠損	リダクション途中
S 3	58	平鏡	厚積土上位	2a類	頁岩1	41.25	24.1	9.34	5.60	38	変形	
S 4	58	不規則形石	厚積土上位	3類	頁岩1	50.11	17.11	10.34	6.39	-	変形	
S 5	58	鏡形研	厚積土	A類	安山岩	93.58	75.53	67.35	587.14	-	変形	
S 6	58	鏡形研	厚積土	B類	安山岩	(112.74)	56.88	28.68	281.31	-	1/4欠損	
S 7	58	鏡形研	厚積土	2類	輝岩	137.92	(102.06)	54.20	679.51	-	1/4欠損	
S 8	58	Uフレイク	厚積土	B1類	頁岩2	77.82	101.59	24.15	165.18	-	変形	
S 9	58	Uフレイク	厚積土下位	B1類	頁岩3	111.02	26.06	9.82	31.45	-	変形	
S10	58	Uフレイク	厚積土上位	-	頁岩3	34.65	40.56	10.71	22.38	-	変形	自然破れ
S11	58	Uフレイク	厚積土上位	-	頁岩1	39.30	20.76	8.84	6.01	-	変形	
S12	58	Uフレイク	同上	-	頁岩1	31.40	22.45	9.37	5.21	-	変形	自然破れ
S13	58	Uフレイク	厚積土上位	-	頁岩2	48.69	71.90	16.88	36.04	-	変形	自然破れ
S14	58	Uフレイク	2層	B2類	頁岩1	37.07	40.68	9.02	11.51	-	変形	
S15	58	心礎	厚積土中位	B1類	頁岩1	68.03	34.92	23.83	60.80	-	変形	自然破れ
S16	58	穿孔石製品	厚積土上位	-	マイカ石	61.48	40.71	27.22	71.99	-	変形	

また、遺構内から153点(25,190g)の自然礫が出土している。他の遺構と比べ、自然礫の出土量が多く、また石材の種類が多岐にわたる特徴がみられた(第30表)。

〈時期〉床面出土土器から縄文時代晩期後葉に比定されるものと考えられる。

RA004 (第16～18図、写真図版04・05・35・58)

〈位置〉調査区東端、4 N24～25hグリッドに位置する。遺構の東側一部が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉RA006の南側にトレンチを入れたところ、地床炉を検出した。隣接するRA006の石洲炉との距離は約2mほどあり、同一住居の炉ではなく、2棟の竈穴住居跡が重複しているものと判断し、RA006とは別の遺構とした。地床炉を中心にベルトを残り、周辺を掘り下げたところ、炉を中心に2～3mの範囲で遺物が集中的に出土し、その範囲外では遺物が出土しないので、この範囲をもって本遺構とした。

〈重複関係〉RA006と重複している。調査区北東縁際に入れたトレンチの土層断面を確認したところ、両遺構とも堆積土は黄褐色砂～シルトを主体とし、比較的近似した土層の様相を呈するが、かろうじてRA006の堆積土がRA004付近で途絶えているのが確認でき、RA004の方が新しいと判断した。

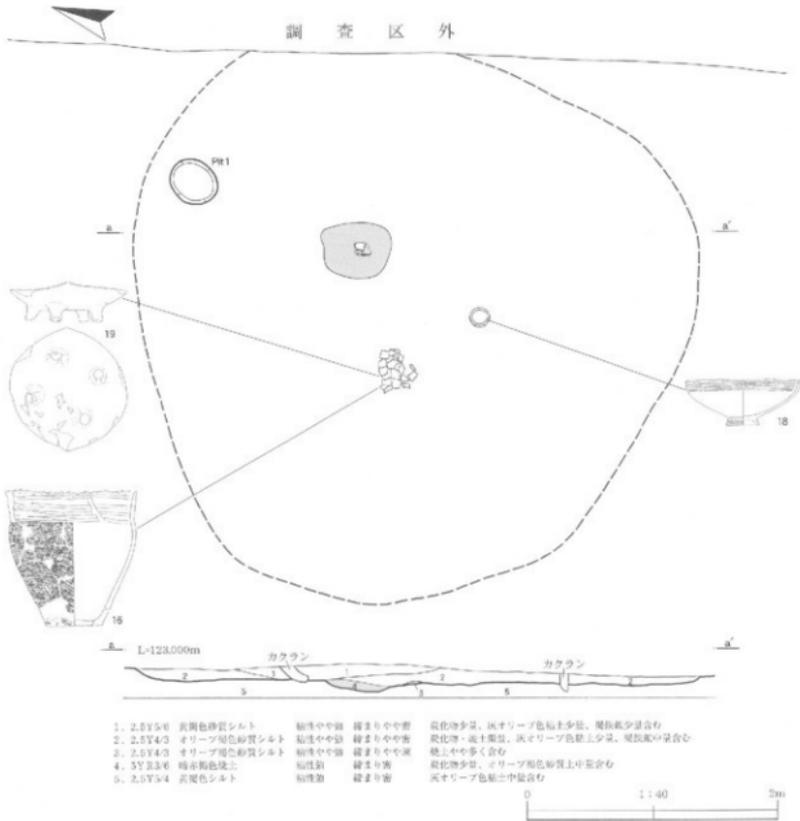
〈平面形・規模〉第16図に点線で示した住居範囲は、土層ベルトで確認した壁を結んだものであり、推定線に過ぎない。従って平面形、規模は不明である。

〈堆積土〉黄褐色～オリーブ褐色砂質シルトを主体とし、3層に分けられる。

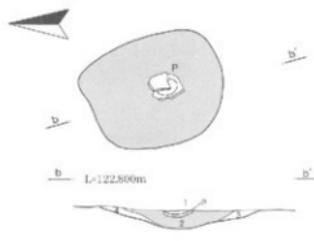
〈壁・床面〉床面は地床炉が検出した面を床面とした。硬化面は確認されていない。壁は土層ベルトの断面のみ確認している。外へと緩やかにひろがりながら立ち上がる。

〈炉〉地床炉を1基確認した。平面形は45×55cmの不整楕円形を呈する。焼成は良好で、焼土が約5cm堆積している。掘り方は焼上上面とほぼ同じ形状であるが、東側が若干ひろがる。焼上上面と掘り方底面から土器片が検出している。掘り方底面から検出した土器片は堆積土中から出土した鉢(17)と接合している。

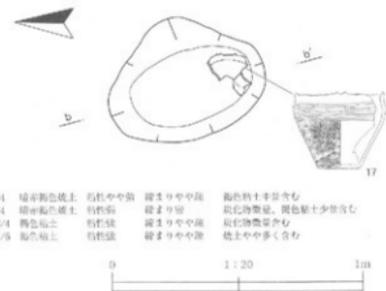
〈柱穴〉1個検出した。断面は図が示していないが、黄褐色シルトを主体とする単層で、炭化物が混入する。

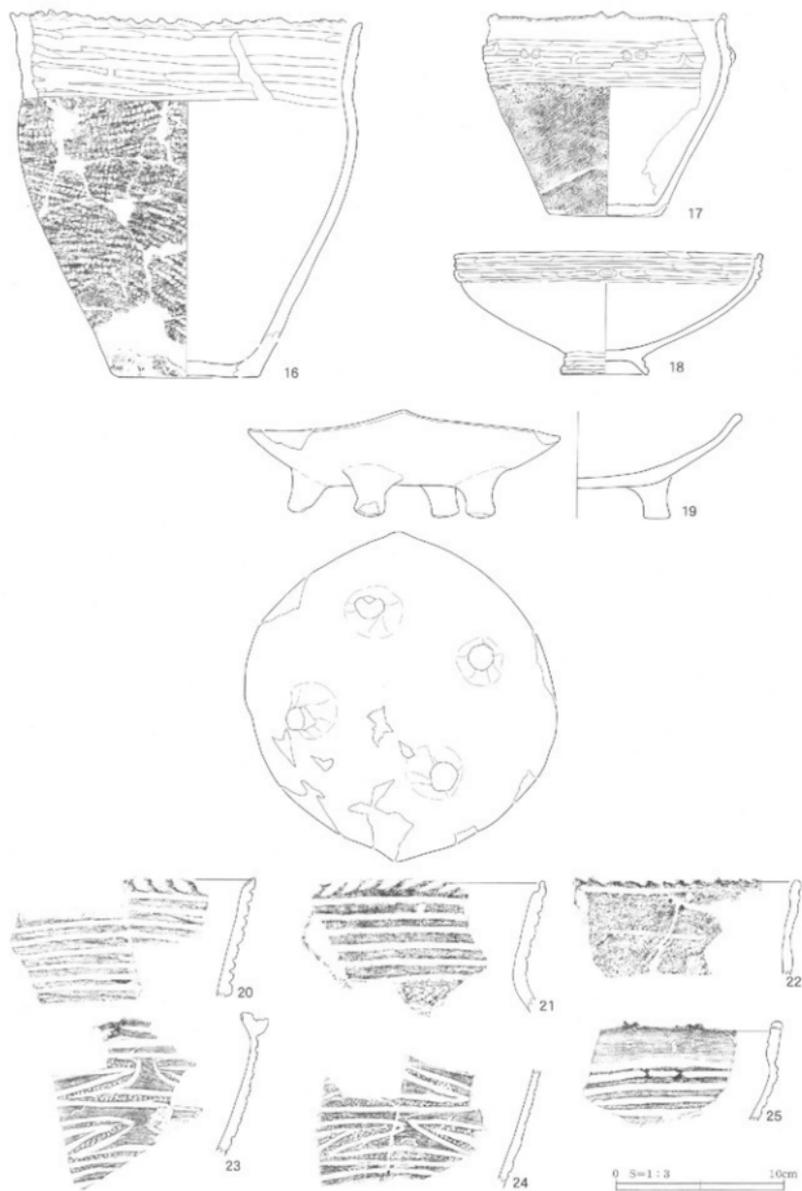


炉検出状態

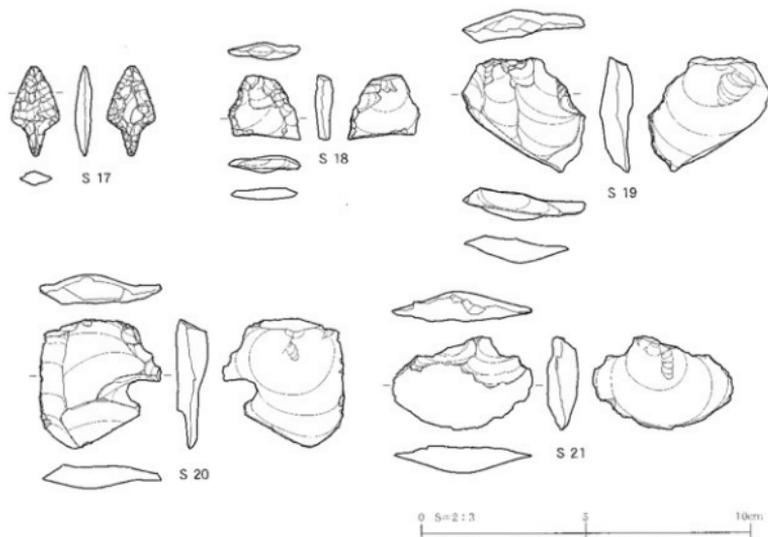


伊掘り方





第17図 RA004 出土遺物(1)



第18図 RA004 出土遺物(2)

第4表 土器観察表 RA004

図表番号	写図番号	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	透入量	備考
16	35	床底	深鉢	A 2	口~底 1/2	唇:押圧 口:沈線(1) 胴:L R横	口~胴:ケズリ →ナデ	褐色	砂	A	容量4.39ℓ
17	35	炉内	鉢	C 3	口~底 1/3	唇:B突起(4単位) 口:工 字文、筋付瘤 胴:L R横	口~胴:ケズリ →ナデ	灰黄緑 にぶい黄橙	砂・灰	B	外面炭化物吹きこ ぼれ。容量1.09ℓ
18	35	灰層上 中位	浅鉢	C 2	完形	口:沈線、刺突 台:沈線	口~胴:ミガキ	にぶい黄橙 にぶい褐	雲	C	容量0.89ℓ
19	35	床火	浅鉢	G 5	完形	無文	下面:ナデ	にぶい黄橙 黄褐色	砂	A	上面に炭屑あり。 容量0.23ℓ
20	35	床底	深鉢	A 1	口縁部 片	唇:押圧 口:沈線	口:ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	砂・雲	B	
21	35	床底	深鉢	A 1	口縁部 片	唇:押圧 口:沈線(5) 胴:L R横	口:沈線ナデ	暗緑 黒褐色	砂・雲	A	
22	35	床底	深鉢	B	口縁部 片	唇:削み 口:沈線	口~胴:ナデ	にぶい黄橙 黒褐色	砂・雲	B	
23	35	床底	鉢	A	胴部片	胴:工字文+L R横	胴:ミガキ	灰黄緑 にぶい黄橙	白	C	
24	35	床底	鉢	A	胴部片	胴:工字文+L R横	胴:ミガキ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	白	C	
25	35	床底	浅鉢	C	口縁部 片	唇:B突起 胴:沈線、刺突	口:ミガキ	にぶい赤褐 にぶい赤褐	白・雲	C	

〈出土遺物〉地床炉周辺から出土した遺物を本遺構出土のもの判断した。土器は破片で249点(3.3 kg)出土している。そのうち10点を図示した。遺物の出土層位は堆積土上位から床面上まで見受けられるが、比較的、床面上から出土するものが多い。深鉢、鉢、浅鉢が確認された。深鉢はA類(16、20、21)やB類(22)が認められる。16の深鉢は炉より西側の床面上で、19の浅鉢と重なった状態で

第5表 石器観察表 R A004

図録番号	写図番号	器種	層位	分類	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	保存状態	備考
S17	58	石鏃	堆積土下位	1類	頁岩4	27.33	14.33	4.47	1.15	43	完形	中央幅3.05mm
S18	58	不定形石器	炉内	1類	頁岩1	18.43	20.66	4.23	1.97	—	—	—
S19	58	リフレイク	炉内	群3類	頁岩1	35.24	30.74	8.11	7.85	—	—	—
S20	58	リフレイク	堆積土下位	A3類	頁岩1	29.02	36.01	9.29	9.58	—	—	—
S21	58	フレイク	堆積土上位	群2類	頁岩2	27.57	42.06	8.64	8.13	—	—	—

出土している。鉢はC類(17)、B類(23、24)が見受けられる。17は口縁部片が炉の埴り方底面から出土している。浅鉢はC類(18、25)が多く、またG類(19)が1点見受けられる。18は堆積土中位で完形の状態でも出土した。ただし、斜位の状態で見つかっており、意図的に置かれたような感じは受けなかった。

石器は石鏃1点、石匙1点、不定形石器4点、石核2点、フレイク33点(そのうちUフレイク3点)が出土している。そのうち、5点を図示した。出土層位は土器と同様であり、また炉内からも出土している(S18、19)。S17は石鏃である。石材は頁岩4類で今回の調査で見つかった石鏃ではS17のみにみられた石材である。18は不定形石器1類で、片側両面、もう片側は片面のみに二次加工を施している。S19、20はUフレイク、S21はフレイクである。

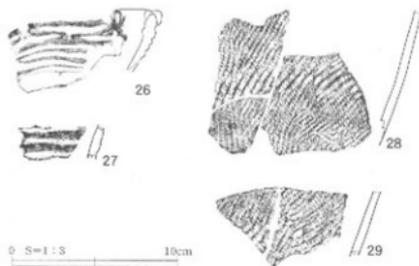
〈時期〉床面出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。

R A005 (第19・20図、写真図版06・07・35・58)

〈位置〉調査区東端、4 N21~22 hグリッドに位置する。遺構の一部が調査区外に及んでいる。

〈検出状況〉調査区北東壁際に入れたトレンチの土層断面を観察し、地床炉を確認した。この炉の検出面を床面と判断し、炉から放射状に2本トレンチを入れ、断面から上層を確認したところ、炉から上位で、炭化物や土器などの混入物や暗褐色シルトのブロックが混入する黄褐色シルト層を確認し、この層を本遺構の堆積土と判断した。また地床炉から西側に入れたトレンチ断面で、この堆積土が、炉から約3mのところで、緩やかに立ち上がっているのを確認し、本遺構の壁と判断した。

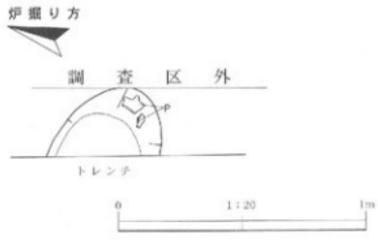
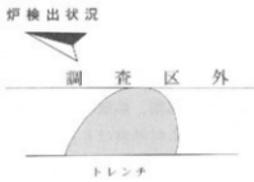
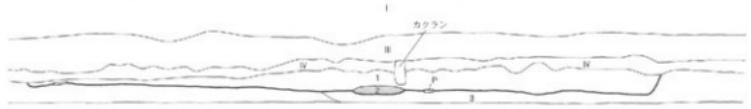
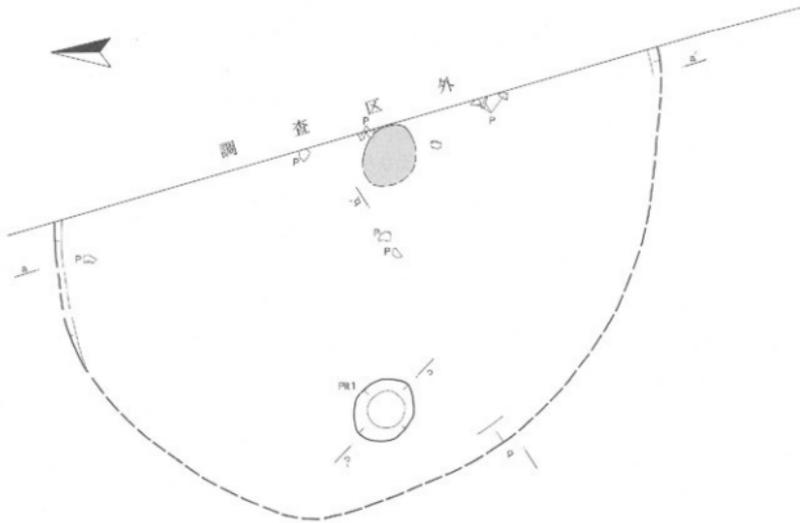
〈重複関係〉R A006と重複する。調査区北東壁際のトレンチ断面から、本遺構の床面がR A006の壁を切っており、また本遺構の地床炉の方がR A006の石囲炉より高い位置にある。これらの点から、本遺構の方が新しいと判断した。



第19図 R A005 出土遺物

第6表 土器観察表 R A005

図録番号	写図番号	器種	分類	保存状態	外面文様	内面文様・調整	外面色調 片面色調	粘土	混入物	備考
26	35	堆積土中	浅鉢	B	口: 突起 口: 上字文	口: 沈線、ミダキ	灰黄褐色 赤黄褐色	白	C	
27	35	堆積土上位	深鉢	A	口: 沈線	口: ミダキ	灰黄褐色 に赤い黄褐色	赤・長	A	
28	35	堆積土上位	鉢	—	胴: L.R斜	胴: ミダキ	明黄褐色 茶褐色	白	C	
29	35	堆積土上位	鉢	—	胴: L.R斜	胴: ミダキ	明黄褐色 茶褐色	白	C	



第20図 RA005

〈平面形・規模〉第20図に点線で示した住居範囲は、トレンチで確認した壁を結んだものであり、推定線に過ぎない。従って、平面形、規模は不明である。

〈堆積土〉褐色シルトを主体とする単層である。色調はV層上に類似するが、本遺構堆積土は炭化物が混入し、区別できる。

〈壁・床面〉地床炉を検出した面を床面と判断した。ほぼ水平である。硬化面は確認されなかった。壁は各トレンチの断面で確認した。外へと緩やかにひろがりながら立ち上がる。

〈炉〉地床炉を1基確認した。調査区北東壁際にトレンチを入れた際、西側半分を壊してしまったが、ほぼ円形を呈するものと思われる。焼成は良好で、焼土が約6cm堆積している。炉の掘り方は焼土上面と同じ形状を呈している。

〈柱穴・その他施設〉柱穴は1個検出している。堆積土は2層に分層でき、黄褐色シルトを主体とし、炭化物の混入が見受けられた。

〈出土遺物〉土器は破片で40点(0.34kg)出土した。地床炉を確認するまで遺構と確定していなかったため、本遺跡出土と思われる遺物を周辺グリッドで包含層出土として取り上げてしまっており、したがって比較的本遺構の遺物は少ない。地床炉周辺から出土した遺物を本遺構出土のものとして判断し、取り上げている。時期が分かりそうな土器片4点を図示した。26は浅鉢の口縁部片でB類に比定される。27は深鉢の口縁部片で、A類に比定される。

石器も土器と同様の理由から本遺構出土と捉えられたものは不定形石器1点、敲磨器類4点、フレイク9点である。ただし堆積土上位からの出土であり、図示していない。

〈時期〉出土した縄文土器から縄文時代晩期後葉に比定されるものと考えられる。

RA006 (第21~24図、写真図版08・09・36・58)

〈位置〉調査区東端、4N23hグリッドに位置する。遺構の東側部分が第17次調査区に及んでいる。ただし第17次調査の際にはこの遺構は検出していない。本遺構が位置するものと推定される場所からRD038が検出しており、同一遺構である可能性がある。

〈検出状況〉調査区北東壁際にトレンチを入れたところ、石囲炉を検出した。石囲炉を中心に東西方向へトレンチを入れ、その断面の土層から立ち上がりが確認でき、堅穴住居跡として判断とした。

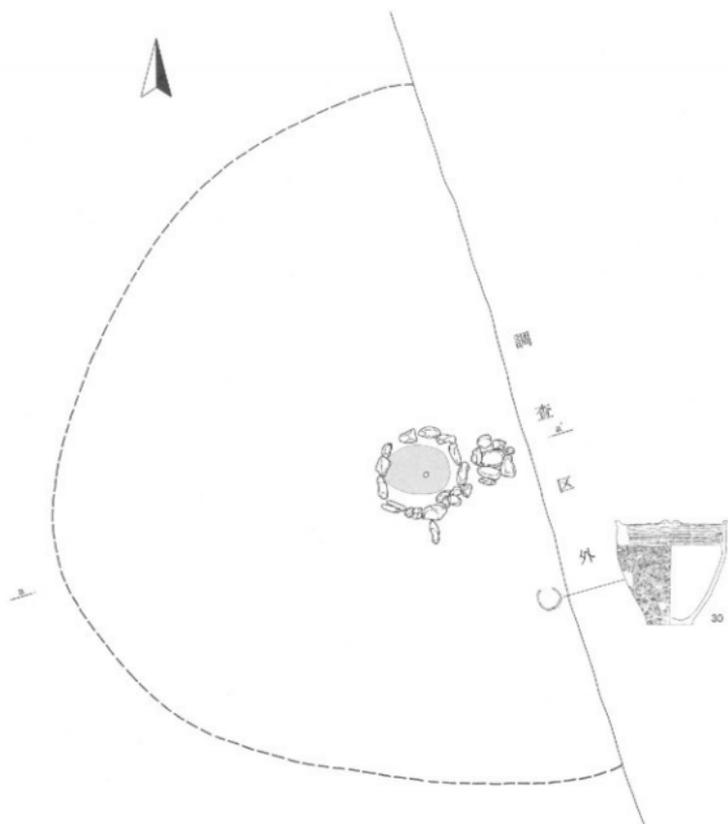
〈重複関係〉RA004、005と重複している。本遺構が最も古い。判断の根拠はRA004、005の項で述べた。本遺構の床面はRA004、005よりも低く、したがって本遺構が最も古いと判断した。

〈平面形・規模〉本遺構は東側が調査区外に及び、また南北両端も重複するRA004、005によって壊されているため、平面形・規模共に不明である。

〈堆積土〉オリブ褐色シルトを主体とした単層である。炭化物が混入する。

〈壁・床面〉石囲炉を検出した面を床面と判断した。ほぼ平らである。硬化面は確認できなかった。壁はトレンチの断面で確認した。外へと緩やかに広がりが立ち上がる。

〈炉〉石囲炉を1基確認した。直径70cmを測り、不整形方形を呈する。炉石の石材は安山岩が9点で最も多く、次いでデイサイト3点、砂岩2点、礫岩、ひん岩、頁岩、花崗閃緑岩、凝灰角礫岩各1点である。組み方はやや粗雑で、炉石のサイズも不規則である。また石皿類、敲磨器類の転用品が6点含まれる。燃焼は良好で、焼土が約5cm堆積していた。炉石にみられる被熱痕は6点にしかみられないがそれらの位置に偏りはないので、痕跡はなくとも、その他の炉石も火を受けていたものと思われる。炉の掘り方は炉自体の大きさと同様であり、炉石の設置した部分も余分に大きく掘った形跡がない。従って炉石は直接、床面に刺すように設置していったものと思われる。

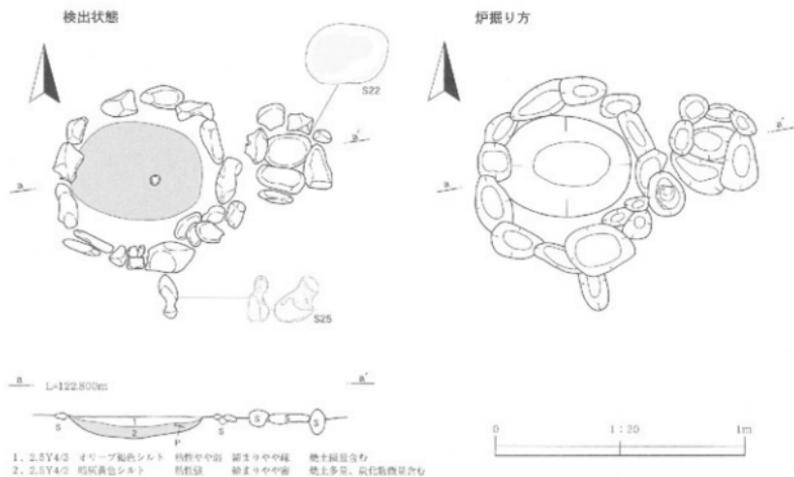


1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シレト 粘性强 緑タリヤヤ面 炭化物微量、灰オリーブ色粘土少量含む



第21図 RA006

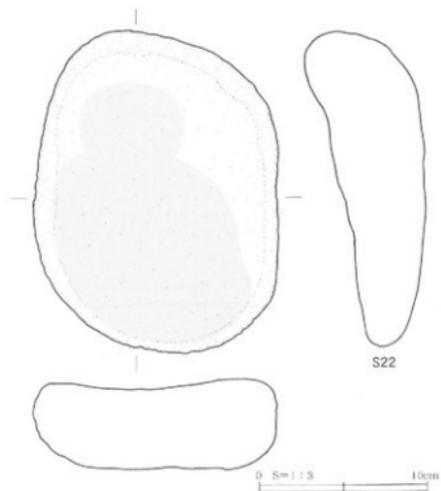
2 検出した遺構・遺物



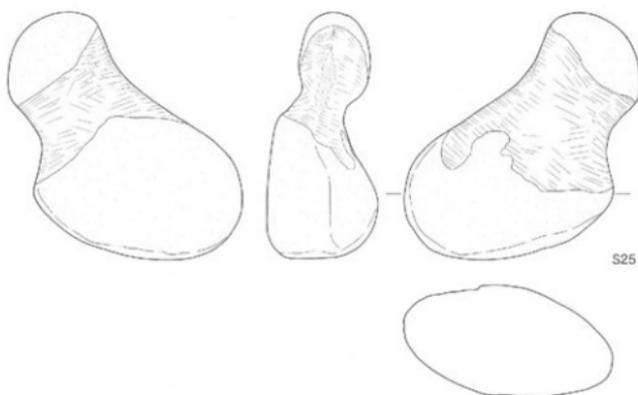
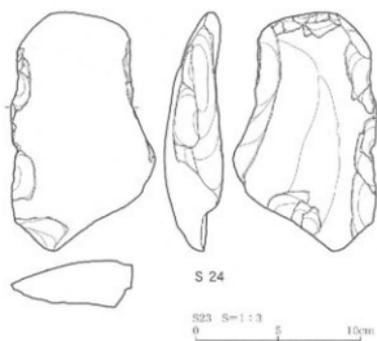
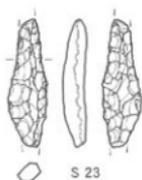
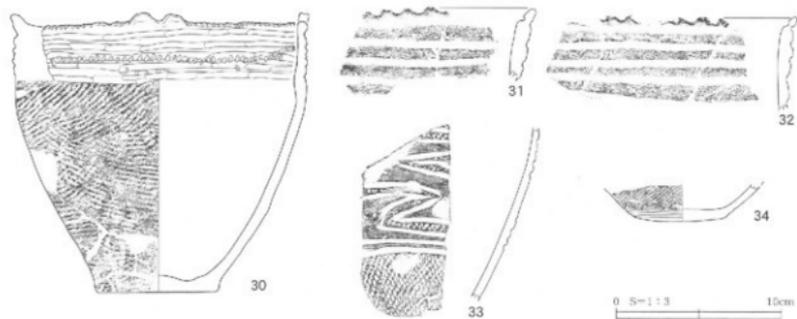
伊石の被熱痕



第22図 R A006 石囲炉



第23図 R A006 出土遺物 (1)



第24図 RA006 出土遺物(2)

第7表 土器観察表 R A006

図面番号	写真番号	層位	器種	分類	残存部位	外題文様	内面文様・遺物	再田舎調内面文様	粘土	透火性	備考
30	36	床面	深鉢	D 1	口～底2/3	帯：古帯彫、縹み 口：沈線①、縹み 柄：L京焼、磁	下～裏上：ナゲ	に深い帯彫 深灰帯	物・縹	C	容量2.42ℓ
31	35	単線トド位	深鉢	A 2	口縁部片	帯：縹① 口：沈線	口：沈線、ナゲ	に深い帯彫 深灰帯	物・縹	A	
32	36	瓦礫土下位	深鉢	A 2	口縁部片	帯：縹① 口：沈線	口：沈線、ナゲ	に深い帯彫 深灰帯	物・縹	A	
33	36	瓦礫土下位	鉢	D	胴部片	柄：上字文～L京焼、ミダキ	柄：ミダキ	帯彫 に深い帯彫	白	C	
34	36	張り方内	鉢	—	底のみ	底：L京焼、沈線	底：ミダキ	底調 に深い帯	白・縹	C	

第8表 石器観察表 R A006

採取番号	写真番号	器種	層位	分類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	残存状態	備考
S22	66	石皿類	床面	—	安山岩	196.00	145.00	71.00	2001.44	—	完整	
S23	38	石匙	床面	3版	頁岩②	138.80	11.53	6.23	2.28	—	先端部・基部欠損	
S24	58	打製石斧	床面	—	頁岩②	145.98	87.51	34.11	480.90	—	定形	
S25	58	打製石斧	砂丘	—	安山岩	—	103.30	67.72	1220.66	—	定形	「くびれ石」

〈柱穴・その他の施設〉柱穴は検出しなかった。また石囲炉に隣接して、礫が円形に組まれて配置されている石組み状の施設を検出した。石組み状の施設は径約35cmを測り、石皿類(S22)を中央にし、周囲を炉石同様の礫7点で囲んでいる。石材は安山岩4点、デイサイト2点、礫岩1点、凝灰岩1点で構成される。中央の石皿類には火を受けた痕跡はないが、周囲の礫2点から被熱痕を確認した。礫はS25の上にやや重なるようになっており、S22を設置した後、周囲の礫を設置している。礫4点に磨痕や凹み痕などの使用痕跡がみられた。

〈出土遺物〉石囲炉の周辺から出土した遺物を本遺構出土のものとして判断した。土器は破片で149点(1.63kg)出土している。そのうち5点を図示した。深鉢はA類(30～32)が多い。30は床面上から出土している。形態は3類に相当し、寸胴形で、鉢に近い。33は鉢A類の胴部片である。34は鉢の底面のみ破片で炉の掘り方底面から出土している。

石器は石鎌1点、石匙1点、打製石斧1点、不定形石器1点、敲磨器類3点、フレイク19点が出土している。床面上から出土するものが比較的、多く見受けられた。そのうち4点を図示した。S22は石組の中央に設置されていた石皿類である。設置されていた際の上面に磨痕が広く見受けられる。S23は床面上から出土した石鎌で、先端部と基部を欠損する。S24は打製石斧で、長辺の片側のみ両面から二次加工を施し、そのほかは片面のみ二次加工を施している。S25は石囲炉の南側で、床下に半分埋まるようにして設置されていた不明石器である。形状から所謂「くびれ石」(見本2002)と思われる。用途は不明である。

〈時期〉床面出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。

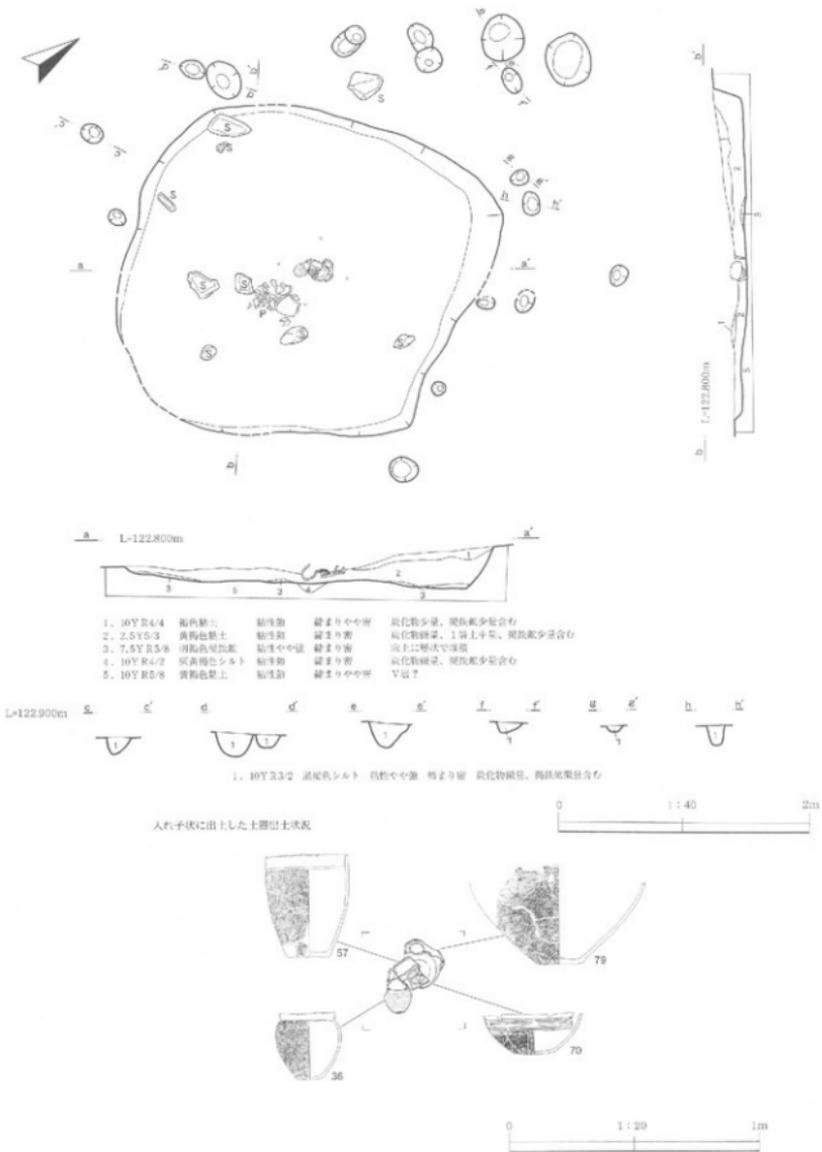
(2) 竪穴状遺構 (RE)

・辺2m以上の方形あるいは不整形の掘り込みで、底面は平坦であるが炉を持たない遺構を「竪穴状遺構」とした。5棟確認した。

RE001 (第25～34図、写真図版10・11・36～42・58・59)

〈位置〉調査区南東端、4N25q～5N1qグリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面で、多量の土器が一括出土した。土器は約3mの範囲に集中して出土しており、また土器集中範囲内の直下はやや黒色を呈することから、遺構の可能性があるとして判断し、範囲内にト



第25図 RE01



第26図 RE001 堆積土上位遺物出土状況



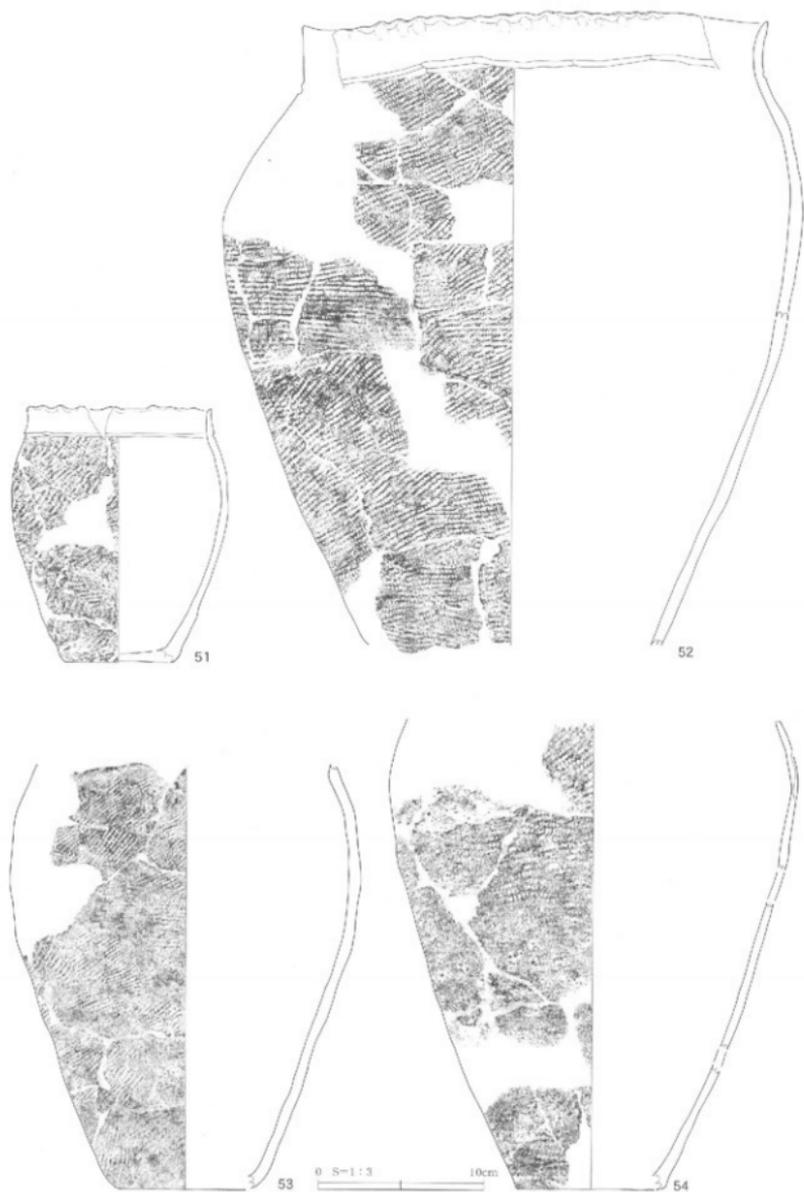
第27図 RE001 出土遺物(1)



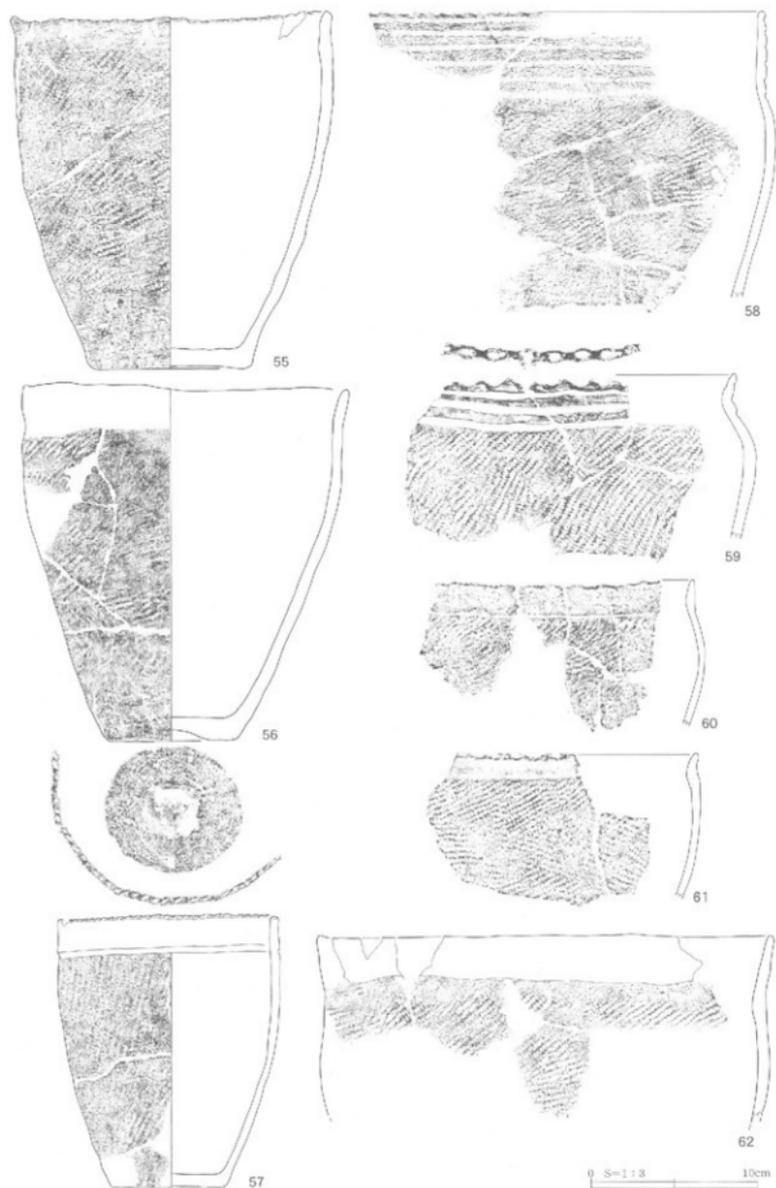
第28図 RE001 出土遺物(2)



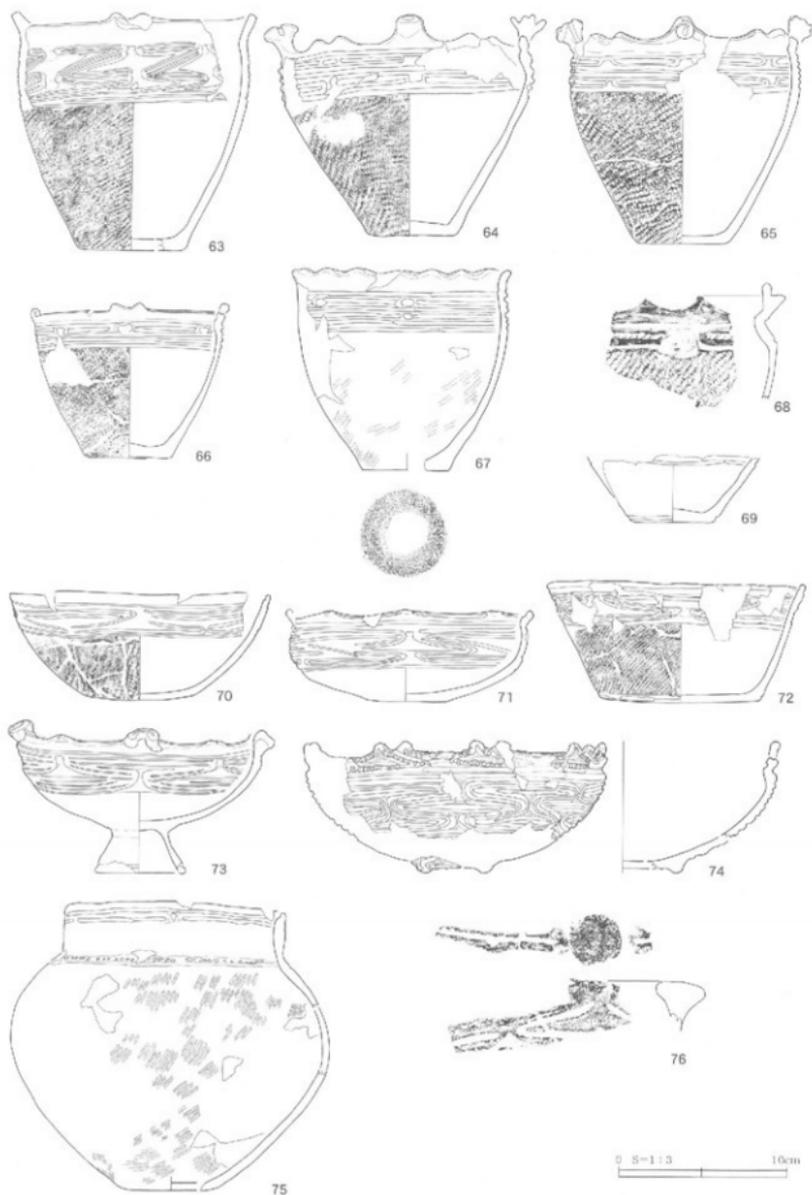
第29図 RE001 出土遺物(3)



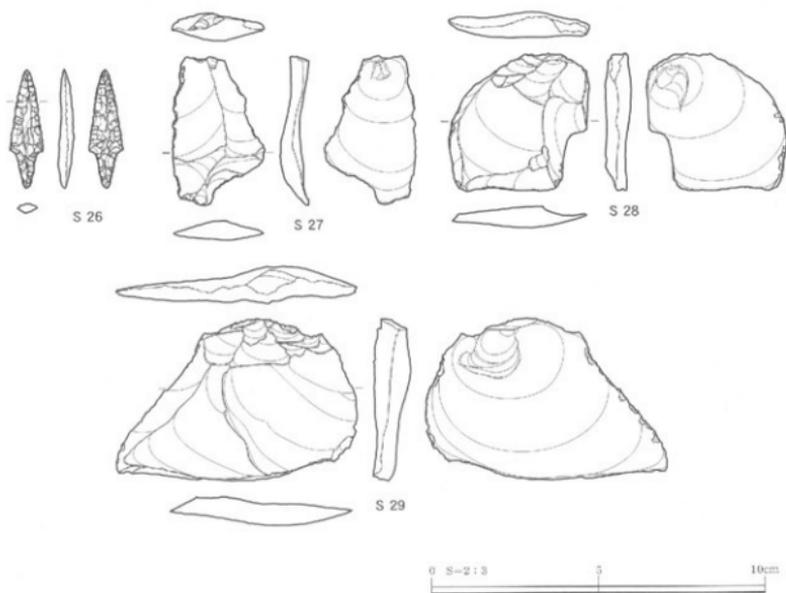
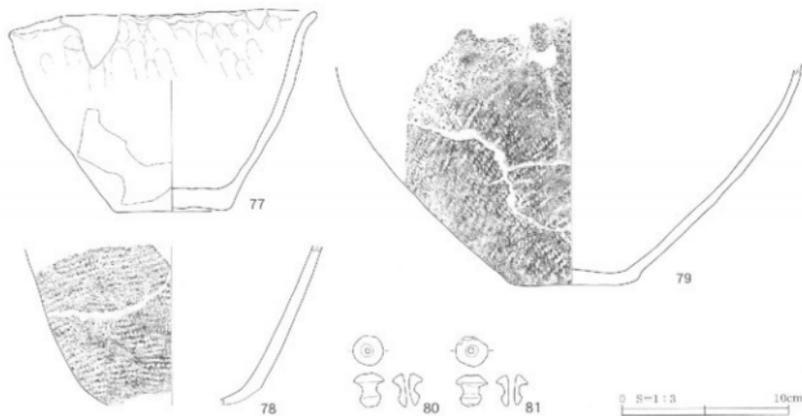
第30図 RE001 出土遺物(4)



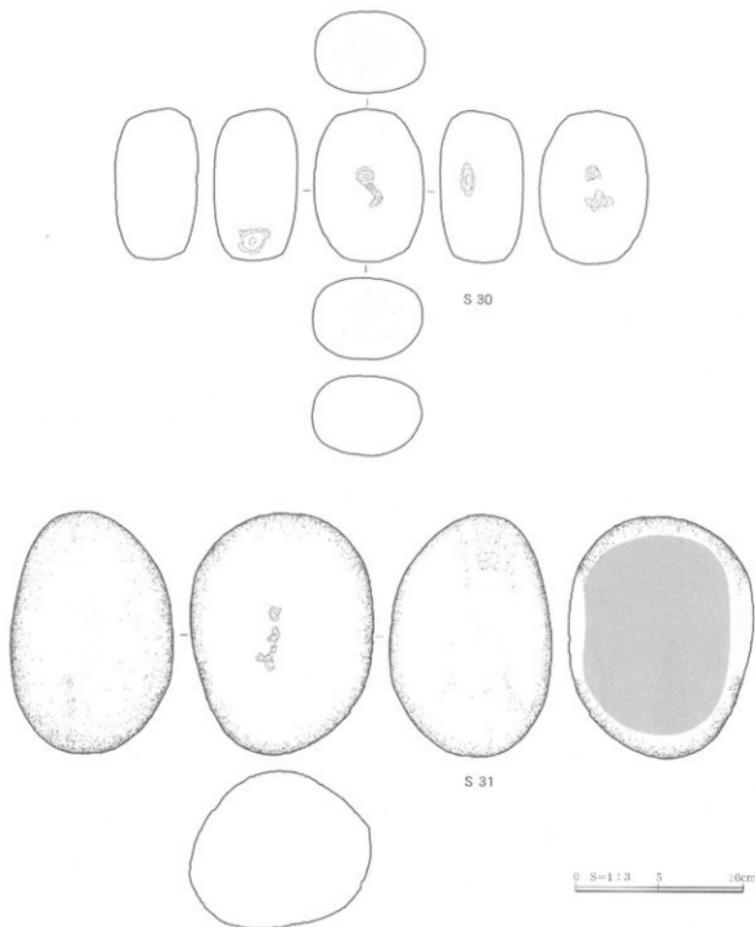
第31圖 RE001 出土遺物 (5)



第32図 RE001 出土遺物 (6)



第33図 RE001出土遺物(7)



第34図 RE 001出土遺物(8)

レンチを入れた。

トレンチ断面の土層を観察したところ、土器集中範囲の直下からも多量の遺物や炭化物の混入が認められた。また約10cm掘り下げ、褐鉄鉱が水平に堆積しているのを確認し、これらの点から遺構と判断した。また炉が認められないので堅穴状遺構とした。

〈平面形・規模〉隅丸方形を呈し、規模は250×280cmを計る。深さは検出面から10~30cmであり、北東側の方がやや深くなっている。

第9表 土器観察表 RE001

掲載番号	写図番号	部位	器種	分類	残存部位	外向文様	内向文様・調査	外面色割 内面色割	胎土	透入量	備考
35	36	堆積土上位	深鉢	C1	口~底 1/2	刷: L R横	口~刷: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	容量20.15ℓ
36	36	堆積土下位	深鉢	C1	定形	唇: 刷み 刷: L R横	口: 沈線 刷: ケズリ・ミナキ	黒褐色 にぶい黄褐色	長	C	底部穿孔 容量0.53ℓ
37	36	堆積土上位	深鉢	C1	口~底 1/4	刷: L R横	口~刷上: ケズリ →ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	B	容量0.56ℓ
38	37	堆積土上位	深鉢	C1	略定形	刷: L R横	口~刷: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	A	容量1.01ℓ
39	37	堆積土上位	深鉢	C1	略定形	唇: 沈線 刷: L R横	口: ケズリ→ナテ	にぶい黄褐色	長・砂	D	容量0.55ℓ
40	37	堆積土上位	深鉢	C1	口~底 1/3	唇: 刷み 唇: 沈線 刷: L R横	刷部: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	A	底部穿孔 容量6.73ℓ
41	37	堆積土上位	深鉢	C1	口~底 2/3	唇: 沈線 刷: L R横	口~刷: ナテ	にぶい黄褐色 浅黄褐色	砂	A	容量15.88ℓ
42	42	堆積土上位	深鉢	C1	口縁部 片	唇: 沈線 刷: L R横	口~刷: ナテ	褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
43	42	堆積土上位	深鉢	C1	口縁部 片	刷: L R横	口~刷: ナテ	黒褐色 刷部	砂・長	A	
44	37	堆積土上位	深鉢	C1	口~底 2/3	唇: 波状口縁(8単位)、刷み 唇: 沈線 刷: L R横	口~刷: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	容量2.89ℓ
45	38	堆積土上位	深鉢	C2	口~底 1/2	唇: 突起、端文押込 刷: L R横	口~刷: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	B	容量5.64ℓ
46	38	堆積土上位	深鉢	C2	略定形	唇: 突起(4単位) 刷: L R横	口~刷上	灰黄褐色 灰黄褐色	長・砂	A	容量6.48ℓ
47	42	堆積土上位	深鉢	C3	口~底 1/5	唇: 押込 刷: L R横?	口~刷下: ナテ	にぶい黄褐色 浅黄褐色	長・砂	A	容量13.96ℓ
48	38	堆積土上位	深鉢	C3	略定形	唇: 押込 刷: L R横	口~刷: ケズリ →ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	A	容量8.73ℓ
49	38	堆積土上位	深鉢	C3	略定形	唇: 押込 唇: 沈線 刷: L R横	口~刷部: ケズリ →ナテ?	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	A	底部穿孔 容量1.66ℓ
50	38	堆積土上位	深鉢	C1	口~底 2/3	唇: 刷み 刷: L R横	口: 沈線口~刷 上: ナテ	灰黄褐色 灰黄褐色	白	C	
51	38	堆積土上位	深鉢	C3	口~底 1/2	唇: 沈線 刷: L R横	口~刷: ケズリ	刷部 にぶい黄褐色	長・砂	A	容量1.22ℓ
52	39	堆積土上位	深鉢	C3	口~刷	唇: 押込 刷: L R横・縦	口~刷上: ケズリ →ナテ	浅黄褐色	砂・長	B	容量23.65ℓ
53	39	堆積土上位	深鉢	—	口~底 1/2	刷: L R横	刷部: ナテ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	A	
54	39	堆積土上位	深鉢	—	刷~底	唇: L R横	刷部: ナテ	刷部 にぶい黄褐色	長・砂	A	底部穿孔
55	39	堆積土上位	深鉢	D2	略定形	唇: 押込 刷部: L R横	口~刷: ケズリ →ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	A	容量3.68ℓ
56	39	堆積土上位	深鉢	D1	略定形	刷: L R横	口~刷下部: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	B	底部穿孔を透 中でやめている。 容量3.48ℓ
57	39	堆積土下位	深鉢	D1	略定形	唇: 刷み 唇: 沈線 刷: L R横	口~刷: ケズリ →ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	長・砂	B	容量1.47ℓ
58	42	床直	深鉢	A1	口縁部 片	唇: 刷み 口: 沈線(6) 刷: L R横	口~ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
59	42	堆積土上位	深鉢	A1	口縁部 片	唇: 押込 口: 沈線(3) 刷: L R横	口: 沈線・ナテ	黒褐色 刷部	砂・長	B	
60	42	堆積土上位	深鉢	C1	口縁部 片	唇: 押込 唇: 沈線 刷: L R横	口~刷上: ナテ	黒褐色 刷部	砂・長	A	
61	42	堆積土上位	深鉢	C3	口縁部 片	唇: 押込 刷: L R横	口~刷: ナテ	にぶい黄褐色 黒褐色	砂	A	内面に灰化物
62	42	堆積土上位	深鉢	C1	口~刷 1/4	刷: L R横	口: ナテ	黒褐色 刷部	砂	A	
63	40	堆積土上位	鉢	E3	口~底 1/2	唇: 凹起(4単位) 刷上: 得丸上平文 刷下: L R横	口~刷: ケズリ →ナテ	黒褐色 刷部	砂・雲	A	底部穿孔 容量0.90ℓ
64	40	堆積土上位	鉢	C3	略定形	唇: A突起、B突起(4単位) 口: 刷上平文 刷: L R横	口: 沈線 口~刷上: ナテ	黒褐色 刷部	砂・長	B	容量1.01ℓ

掲載番号	写真番号	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外壁色調 内面色調	粘土	埋入物	備考
65	40	堆積土 上位	鉢	C 3	口~底 2/3	唇: A突起, B突起(4単位) 口: 四字文 胴: L R横	口~胴上: ミガキ	黒褐色 明赤褐色	長・掌	C	容量1.01㍓
66	40	堆積土 上位	鉢	C 3	略完形	唇: D突起(4単位), 沈線 口: 四字文 胴: L R横	口: 沈線 口~胴上: ナデ	にぶい黄褐色	長・掌	C	容量0.47㍓
67	40	堆積土 上位	鉢	C 3	略完形	唇: 押圧(波状) 口: 工字文	口: 沈線	黒褐色	砂	A	底部穿孔 容量0.89㍓
68	42	床下	鉢	D 3	口縁部 片	唇: A突起 口: 刺突, 沈線 胴: L R横	口~胴上: ミガキ	黒褐色 黒褐色	砂	C	
69	40	堆積土 下位	鉢?		底部分 み	底: 沈線	底: ナデ	明赤褐色 灰褐色	白	C	
70	40	堆積土 下位	浅鉢	E 1	口~底 1/2	口: 特殊工字文 胴: L R横	口: 沈線 胴: ナデ	にぶい黄褐色 灰褐色	砂・雲	C	容量0.61㍓
71	40	堆積土 上位	浅鉢	E 1	略完形	唇: 波状口縁, 沈線 口: 特殊工字文	胴部: ナデ	唇にぶい黄褐色	砂・雲	B	容量0.53㍓
72	41	堆積土 上位	浅鉢	F 4	口~底 2/3	口: 変形工字文 胴: L R横, 沈線	口: 沈線 口~胴上: ミガキ	明赤褐色 明赤褐色	砂・雲	C	容量0.67㍓
73	41	2層	浅鉢	F 2	略完形	唇: 突起(4単位) 口: 変形工字文 台: 沈線	口~底: ミガキ	にぶい黄褐色 にぶい褐色	雲・白	C	容量0.46㍓
74	41	2層	浅鉢	B 3	口~底 2/3	唇: 突起, 沈線, 刺み 口~真: 工字文	口~底: ミガキ	緑赤褐色	白	A	容量0.86㍓
75	41	堆積土 上位	盃	C b 4	略完形	唇: 刺み 口: 工字文 胴: 沈線・刺突 胴: L R	口~胴部: ナデ	緑褐色	砂・雲	B	底部穿孔 容量2.72㍓
76	42	堆積土 上位	浅鉢	B	口縁部 片	唇: 突起, 沈線 口: 沈線	口: 沈線, ナデ	明赤褐色 明赤褐色	長・掌	B	
77	41	堆積土 上位	鉢	F	略完形	口: 指痕による変形痕 胴: ナデ	口~胴: ケズリ ナデ・指痕広げ	明褐色	砂	A	容量1.36㍓
78	41	堆積土 上位	深鉢	-	底部分 片	底下: L R横	胴下: ケズリ	緑褐色	砂・雲	A	
79	41	堆積土 下位	盃?		口~底 1/4	胴: L R横	胴部: ナデ	明赤褐色 赤褐色	砂・雲	B	
80	42	床下	耳栓	-	完形	-	-	浅黄褐色	雲・長	B	
81	42	床下	耳栓	-	完形	-	-	浅黄褐色	雲・長	B	

第10表 石器観察表 R E 001

掲載番号	写真番号	器種	層位	分類	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	残存状態	備考
S-26	58	石錐	堆積土下位	I類	頁岩 1	35.74	10.02	3.96	0.97	30	完形	
S-27	58	Uフレイク	柱穴中	C 3類	頁岩 2	43.30	26.65	6.10	5.62	-	-	
S-28	58	Uフレイク	I層	A 3類	頁岩 2	43.42	40.31	7.72	13.70	-	-	
S-29	58	Uフレイク	堆積土上位	C 3類	頁岩 1	48.57	74.47	9.46	28.10	-	-	
S-30	58	敲磨分類	柱穴中	C類	砂岩	92.87	65.39	49.81	496.95	-	-	完形
S-31	59	敲磨分類	堆積土上位	C類	安山岩	146.25	114.78	90.75	1724.37	-	-	完形

〈堆積土〉黄褐色粘土を主体とし、4層に分層できる。遺物や炭化物の混入が認められ、また底面に褐鉄鉱の水平堆積(3層)が見られる。床面下の土層(5層)は灰オリーブ色の粘土層で、V層上がグライ化したものと考えられ、遺構の堆積土ではないと判断した。ただし、5層中から土器片が少量出土しており(第32図-68)、貼床があるものと考えられるが、調査段階ではその範囲が特定できなかった。

〈壁・底面〉褐鉄鉱が水平堆積する面を床面とした。硬化面は見受けられない。壁は南壁の一部が消失しているがほぼ全周しており、緩く外に開きながら立ち上がる。

〈柱穴〉遺構内からは検出しなかったが、周辺から径10cm前後の柱穴が不規則に巡っている。これらは堆積土の様相が異なるので、R E 001とは違う時期の遺構の可能性もあるが、堆積土中からR E 001と同時期の土器片や石器が出土していること、また、柱穴はR E 001の周辺にのみ集中していることから、遺構に伴う柱穴と判断した。柱穴の並び方が不規則であり、遺構との関係は不明確であるが、

本遺構に作る上屋を支える柱があった可能性が考えられる。

〈出土遺物〉土器は破片にして2,161点(38.2kg)出土している。そのうち47点を図示した。遺物は検出面上(堆積土上位に相当すると思われる。)で多量に出土している。その多くは復元可能な土器である。第28図は堆積土上位から出土した土器群の分布図である。

遺構のほぼ中央部から出土した55、56の深鉢は入れ子の状態で横倒しになって出土した。また第28図に示した土器群の直下、床面から約2cm浮いた状態で、36、57、70、79の土器が重なって出土している(第25図一下)。一番上になっている36の小形の深鉢は完形であるが、底面が穿孔されている。また57の深鉢は押しつぶされたような状態で出土したが、底面が36の内部から見つかっており、36と入れ子状になっていたものと思われる。57の口縁部の方で70の浅鉢と重なっており、さらに大形の壺底部とも重なっている。器種もサイズも異なる土器を重ねているのが特徴である。出土土器の器種組成では特に深鉢が多いが、他に形態が認識できる鉢、浅鉢がそれぞれ5点ずつ、また壺1点が出土している。70の浅鉢を除き、全て、上述した堆積土上位の一括出土内に含まれている。深鉢はC類が大半を占め、A、B類はほとんど出土していない。鉢はC3類が多く、1点E3類(63)が見られる。浅鉢はB類(74)、E類(70、71)F類(72、73)が多い。壺(75)はD類で、頸部に凹字文が施文され、頸部には刺突文が巡る。

土製品は、耳栓2点が出土している。いずれも底面上から見つかっており、本遺構に伴うものと考えられるが、意図的に底面に置いてあったものかどうか定かではない。

石器は埋土中から床面上まで、石鏃1点、石匙1点、石錐1点、不定形石器8点、敲磨器類6点、Uフレイク4点、フレイク58点を確認した。そのうち、6点を図示した。S26は堆積土下位から出土した完形の石鏃である。S27-29はUフレイクで、幅広の縁辺部に微細剥離痕がみられる。S30、31は敲磨器類である。S30は柱穴内から出土しており、長軸方向の両端に敲打痕がみられる。S31は底面上から出土しており、厚みがある形状で、幅広の1面に磨痕が、またその両側面に敲打痕がみられる。

〈時期〉床面出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。

RE002(第35-37図、写真図版12・43・59)

〈位置〉調査区中央部、4M24sグリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面で、径約250cmの炭化物の集中範囲がみられ、その範囲を中心に外へとトレンチを入れたところ、炭化物範囲周辺の下から深鉢の大形破片が出土した。トレンチ断面で確認した土層からトレンチを入れた250-300cmの範囲で、遺物や炭化物の混入を確認し、また検出面から深さ約30cm下で、褐鉄鉱の水平堆積を確認した。従ってこれらの点から褐鉄鉱が堆積する層を底面とする遺構と判断し、床面上に炉や焼土は見受けられないので、堅穴状遺構とした。

〈平面形・規模〉東西方向に長い不整形を呈し、310×276cm、深さは検出面から18-36cmを測る。

〈堆積土〉褐色砂質シルトを主体とし、3層に分層される。底面上に褐鉄鉱が沈殿し、水平に堆積する層(3層)が見受けられる。南壁では壁立ち上がりにも褐鉄鉱の堆積が及んでいる。5層は暗灰黄色粘土を主体とする層で、地山土であるV層がグライ化したものである。また1層中に炭化物が集中する。

〈壁・底面〉褐鉄鉱が水平堆積する面を底面とした。ほぼ平坦であるが、硬化面は確認されていない。壁はほぼ全周し、緩く外へと開きながら立ち上がる。

〈柱穴〉遺構内からは検出しなかった。周辺に径10cm前後の柱穴が点在している。RE001同様、道

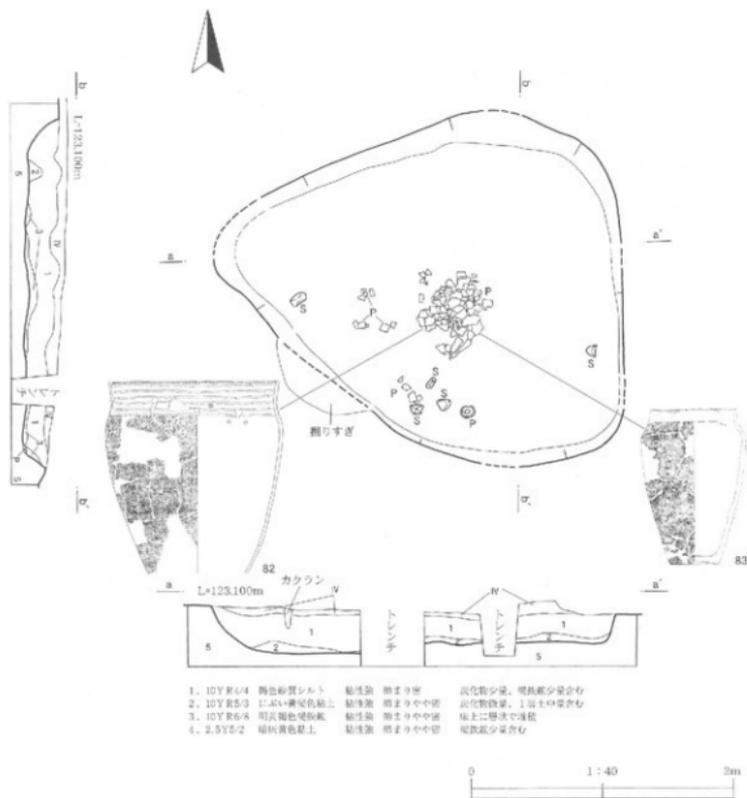
構に伴う柱穴の可能性もあるが、やや離れたところに位置しており、並びも不規則なので、第35図には図示していない。

〈出土遺物〉出土層位は主に堆積土下位から床面上であり、全体的にややまばらで検出段階で明確に個体として認識できたのは82、83の深鉢のみである。また自然礫が混在している（第30表）。

土器は446点（6.2kg）出土している。そのうち、4点を図示した。82、83は床面より15cm浮いた状態で出土した深鉢である。82は深鉢A類で、底部を欠損する。口縁部に6条の沈線が巡る。83は深鉢C類である。84は鉢の口縁部片で、沈線が3条巡る。85は深鉢底部片である。

石器は床面上でUフレイク1点（S32）が出土したのみである。S32は幅広の縁辺部に微細剝離痕がみられる。

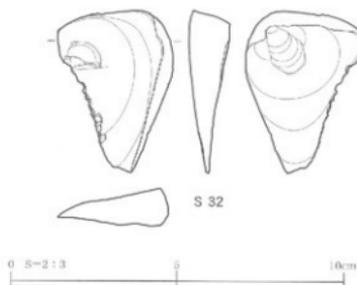
〈時期〉床面出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。



第35図 R E 02



第36図 RE002 出土遺物(1)



第37図 RE 002 出土遺物(2)

第11表 土器観察表 RE 002

掲載番号	写真番号	部位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	混入量	備考
82	43	底直	深鉢	A 1	口~胴	髹: 割み 口: 比喩(6) 別: L R 横、縦	口~胴: ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・白	B	補修孔3箇所 容量29.65ℓ
83	43	底直	深鉢	C 3	口~底 1/2	髹: L R 斜、縦	口~胴上: ケズ リ→ナテ	にぶい黄褐色 黄褐色	赤・砂	A	容量6.13ℓ
84	43	底直	深鉢	D 1	口縁部 片	髹: 突起 口: 比喩(6) 別: L R 横	口~胴: ナテ	灰青褐色 黄褐色	砂・長	A	
85	43	底直	深鉢	-	底部の み	髹下: L R 縦	髹下: ナテ	黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	

第12表 石器観察表 RE 002

掲載番号	写真番号	器種	部位	分類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	残存状態	備考
S32	59	U フライク	深直	D 1 類	頁岩?	47.80	32.70	12.46	13.34	-	-	

RE 003 (第38~42図、写真図版13、44、59)

〈位置〉調査区西端、4 M23 i ~ 25 i グリッドに位置する。

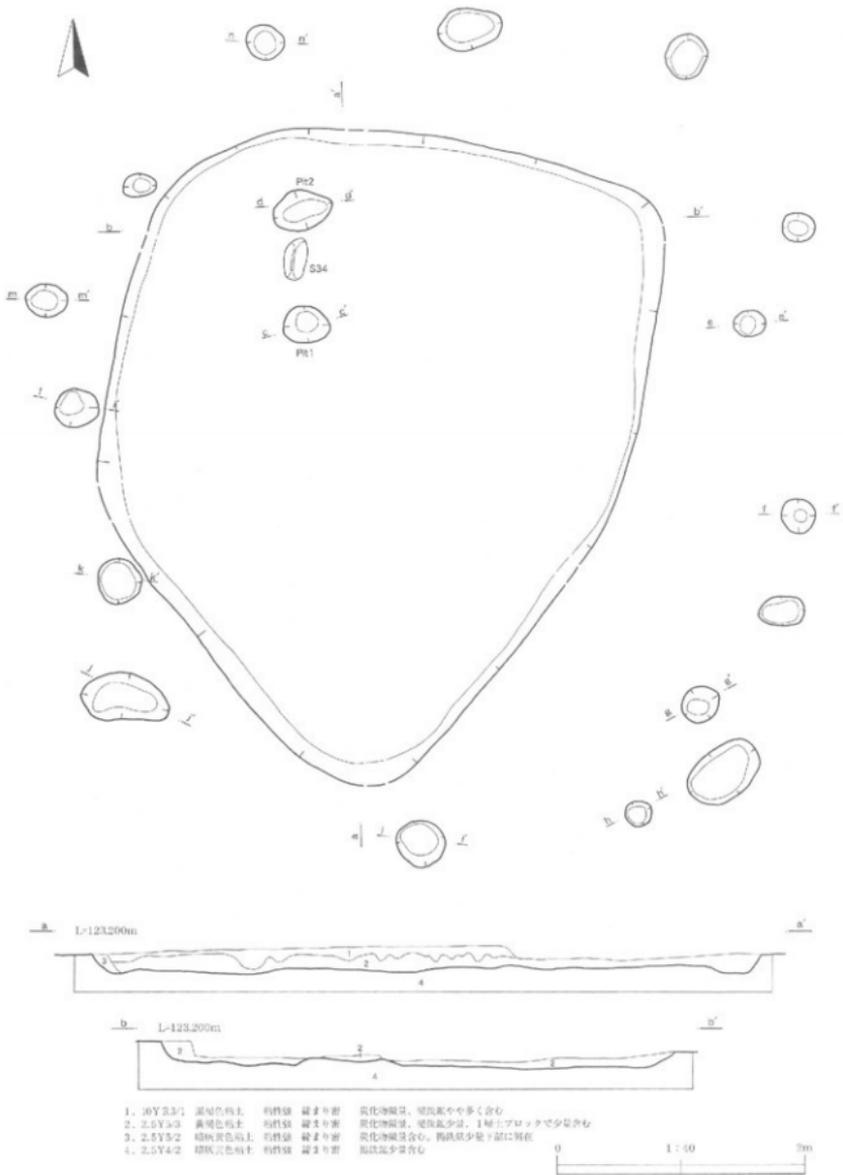
〈検出状況〉V層上面で、遺物が集中的に出土し、また周囲に炭化物の分布を確認した。遺物の集中範囲を中心にトレンチを入れ、その断面で土層を確認したところ、検出面から約20cm下まで、遺物や炭化物が混入し、その下に褐鉄鉱が水平に堆積しているのを確認した。またこれらの事象は遺物の集中範囲から半径約3mの範囲で確認でき、その範囲外では確認できなかった。従って褐鉄鉱の堆積する面を底面とする遺構と判断した。また底面上から炉は検出しなかったため、堅穴状遺構とした。

〈平面形・規模〉南北方向に長い不整形を呈し、規模は540×430cm、深さは検出面から17~19cmを測る。

〈堆積土〉黄褐色粘土を主体とし、3層に分けられる。堆積土上位には黒褐色粘土が偏在する。4層は暗灰黄色粘土を主体とする層で、V層がグライ化したものである。

〈壁・床面〉褐鉄鉱が堆積する層を底面と判断した。ほぼ平坦である。硬化面は見受けられない。壁は緩やかに外へと広がりがながら立ち上がる。

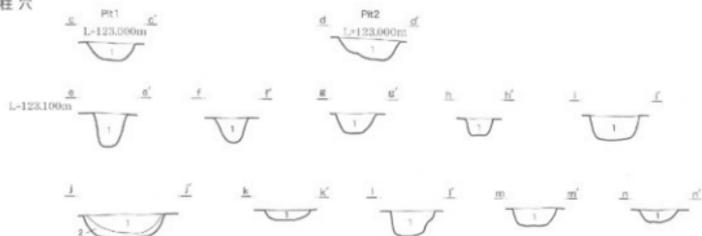
〈柱穴〉遺構内から2個検出した。位置から見て、主柱穴である可能性は低いものと考えられる。また、遺構の周囲に径約10cmの柱穴が巡っている。柱穴の堆積土は褐色粘土を主体とする。RE 003の堆積土の様相とは異なるが、柱穴がこの遺構の周辺のみ集中していること、また柱穴の堆積土中か



第38図 RE003 (1)

2 検出した遺構・遺物

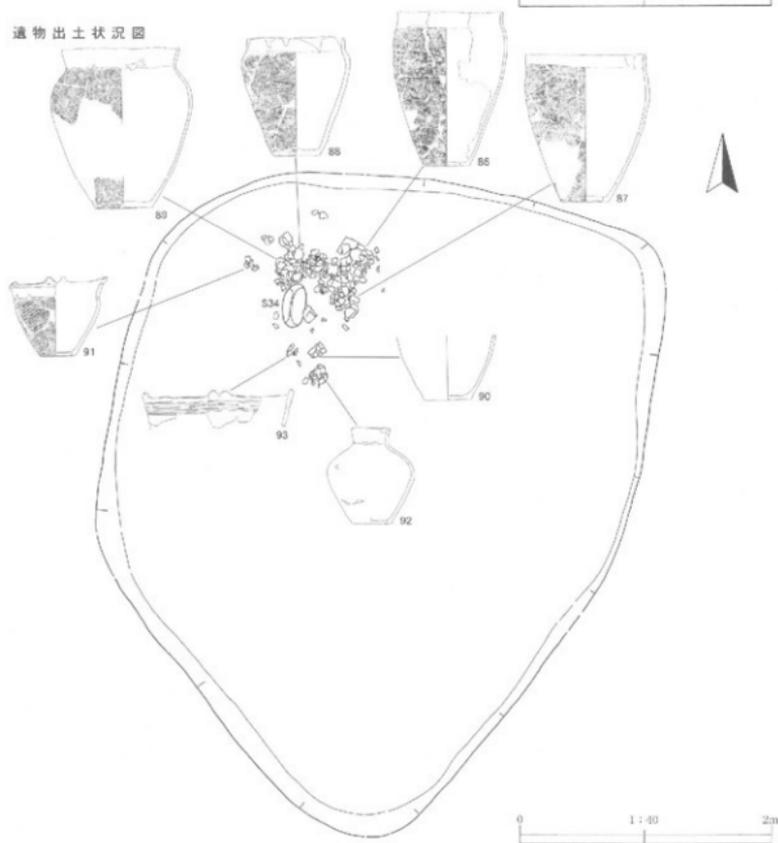
柱穴



1. 3.Y.R2/1 黒色シト 褐色や黄 砂より密 灰化物微少、黄褐色土少量含む
 2. 2.Y.5/3 黄褐色粘土 粘性强 砂よりやや粗 黒褐色シト少量含む



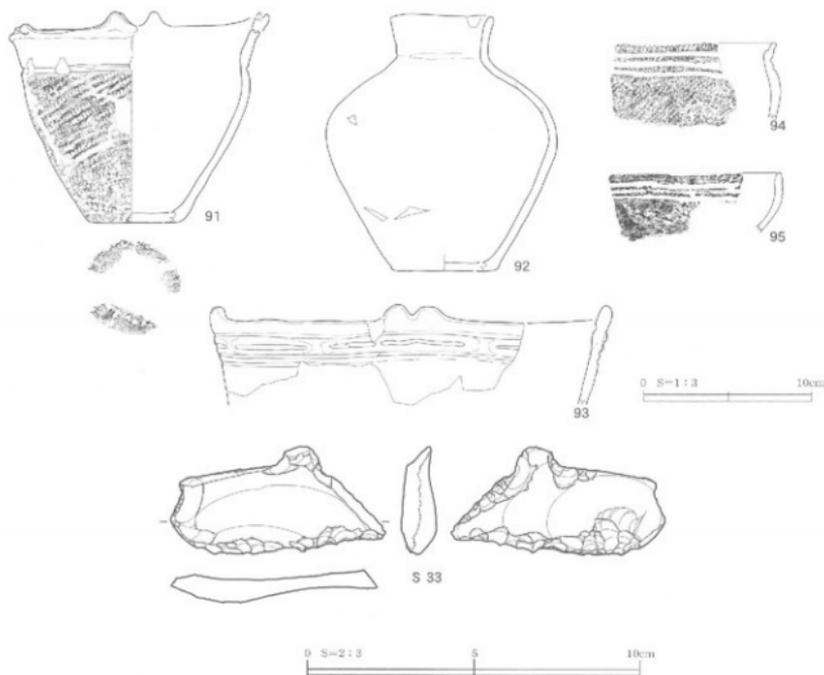
遺物出土状況図



第39図 RE003 (2)



第40図 RE003 出土遺物(1)



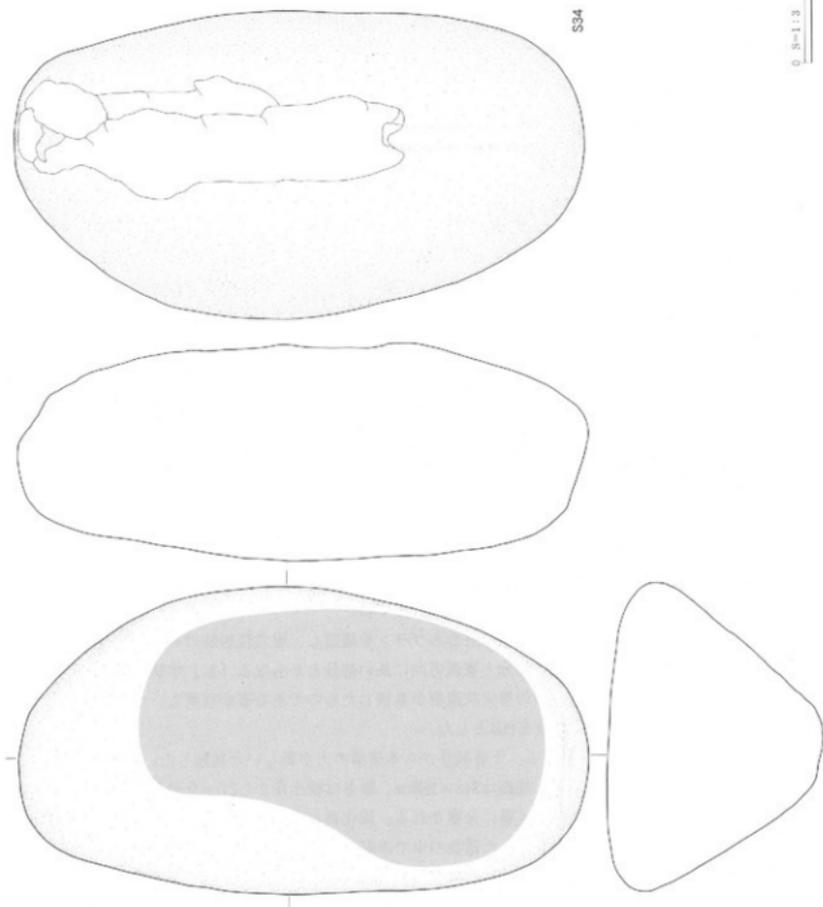
第41図 RE003 出土遺物(2)

第13表 土器観察表 RE003

掲載番号	写回番号	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	侵入量	備考
86	44	床直	深鉢	C1	口～底1/2	刷：L R縦	口～刷：ナデ	浅黄褐色	砂	A	容量9.65ℓ
87	44	床直	深鉢	C1	略完形	刷：L R横	口～刷上：ケズリ・ナデ	にぶい黄褐色にぶい黄褐色	砂	A	容量10.82ℓ
88	44	床直	深鉢	C1	口～底1/2	刷：L R縦	口～刷：ナデ	にぶい黄褐色にぶい黄褐色	砂・長	A	容量2.54ℓ
89	44	床直	深鉢	C1	口～底1/5	刷：L R横	口～刷：ナデ	橙褐色	砂	A	容量6.20ℓ
90	44	床直	深鉢	-	刷～底1/5	無文	不明	にぶい黄褐色浅黄褐色	砂	A	
91	44	床直	鉢	F	口～底2/3	唇：突起、沈線 刷：沈線 刷：L R横	口～刷：ナデ	にぶい黄褐色	砂	A	底部穿孔 容量0.97ℓ
92	44	床直	碗	I	口～底2/3	無文	口～刷：ケズリ・ナデ	にぶい黄褐色にぶい黄褐色	砂	C	容量1.02ℓ
93	44	床直	深鉢	A	口～刷1/2	唇：B突起(4層壁) 口：沈線	口：沈線 口～刷上：ナデ	灰白 灰黄褐色	砂	A	
94	44	4層	鉢	D	口縁部片	口：沈線	口：沈線	黄灰 黄灰	白	C	
95	44	柱穴内	浅鉢	B	口縁部片	唇：削み 口：沈線 刷：L R横	口：沈線	暗赤褐色 黒褐色	砂・雲	B	



S34



第42図 RE003 出土遺物(3)

第14表 石器観察表 RE003

掲載番号	発掘番号	器種	厚さ	分類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	保存状態	備考
S33	59	石匙	堆積上上位	1b Ⅰ	頁岩	33.87	64.32	8.70	15.56	-	完形?	組み縦11.8mm
S34	59	石皿類	床面	1 Ⅰ	安山岩	34.50	18.50	13.00	11400.00	-	完形	

ら土器片(95)が出土しており、これらの点から遺構に伴う柱穴群と判断した。配置が不規則であるが、本遺構に伴う土層を支える柱であった可能性がある。

〈出土遺物〉遺構のやや北側寄りの床面上で86~93の土器群とS34の石皿類がまとまった状態で出土している(第39図)。

土器は破片で745点(6.6kg)出土している。そのうち、10点を図示した。上述の通り、86~93は同一地点の床面上にまとまって出土した土器群で、深鉢を主体とする。深鉢(86~90)はいずれもC類である。89は胴部上半が大きく張り、口縁部との屈曲も大きく外反しており、他のものとは異なる形態である。91は鉢である。口唇部に4単位の突起が付される。口縁部は無文で、胴部との境に1条、沈線が巡る。底部が穿孔される特徴がある。92は壺で、Dd1類に相当する。口縁部はほぼ直立し、胴部上半に肩が張り出しており、やや他の壺とは異なる形態である。口縁部も胴部も無文である。93は深鉢の口縁部片で、口唇部に4単位のB突起が付され、口縁部には横位の沈線が巡る。94は4層から出土した浅鉢の口縁部片で口唇部に刻みが施され、口縁部には2条の沈線が巡る。95は鉢の口縁部片で、一括土器群内から見つかった。口縁部に3条の沈線が巡る。

石器は石匙1点、敲り器類3点、石皿類1点、石核1点、フレイク7点が出土している。2点を図示した。S33は堆積上上位から見つかった石匙で、柄み部がやや貧弱である。刃部の二次加工も施されていない部分があるなど、製作途中のものである可能性が考えられる。S34の石皿類は一括土器群(86~91)に伴って出土している。扁平な磨面が床面と接した状態で、使用面を逆にした状態で出土している。

〈時期〉床面上出土器から縄文時代晩期後葉に比定される。

RE004 (第43~47図、写真図版14・15・45・60)

〈位置〉調査区東端、4N19b~21bグリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面で、暗褐色上の不整形のプランを確認し、堅穴住居跡の可能性を考えながら掘り下げたところ、南北方向に長い部分と東西方向に長い部分とからなる「L」字状を呈するものであった。ベルト断面の土層から2棟の堅穴状遺構が重複したものである事が判明し、土層観察から西側の遺構の方が新しいと判断し、RE004とした。

〈重複関係〉RE005と重複している。上層観察から本遺構の方が新しいと判断した。

〈平面形・規模〉不整形を呈し、規模は348×268cm、深さは検出面から27cmを測る。

〈堆積上〉褐色シルトを主体とし、4層に分層される。炭化物が混入し、また2~4層には赤色顔料の混入が確認できた。本遺構から出土した遺物の中で赤彩されたものは見受けられないので、どのような理由で堆積土中に赤色顔料が混入したかは不明である。

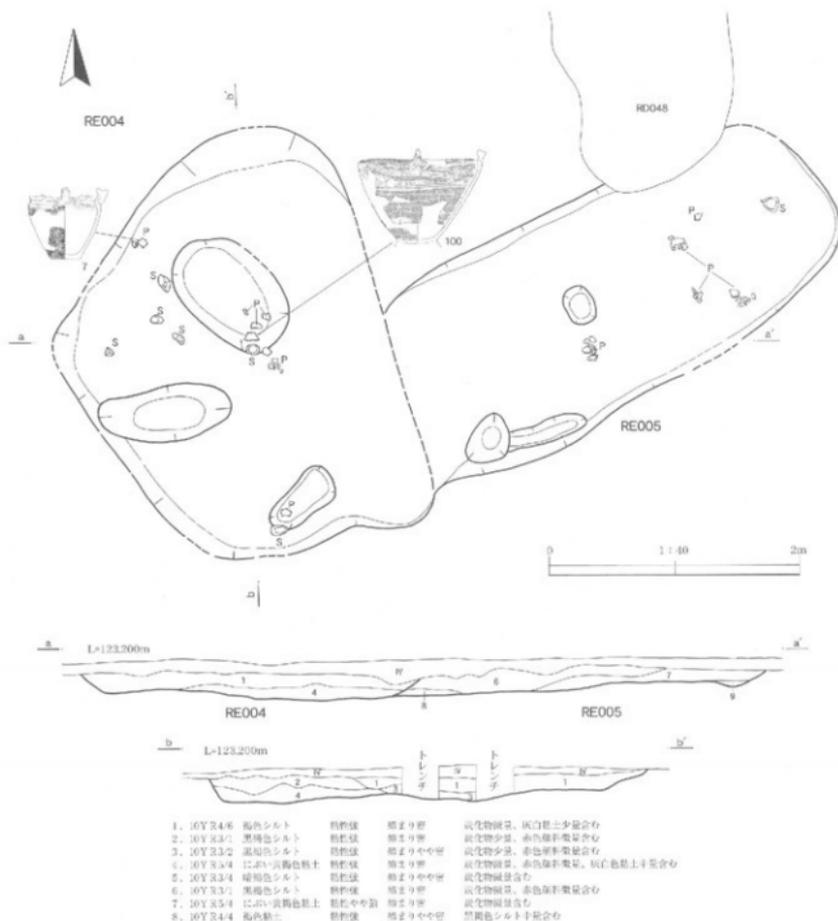
〈壁・床面〉V層土が検出する面を底面とした。ほぼ平坦であるが、硬化面は見受けられない。壁はRE005と重複する東側を除き、ほぼ全周する。緩く外へと開きながら立ち上がる。

〈柱穴〉検出していない。底面から柱穴状の掘り込みを検出したが形状がやや不整形で浅く、底面は皿状を呈している。

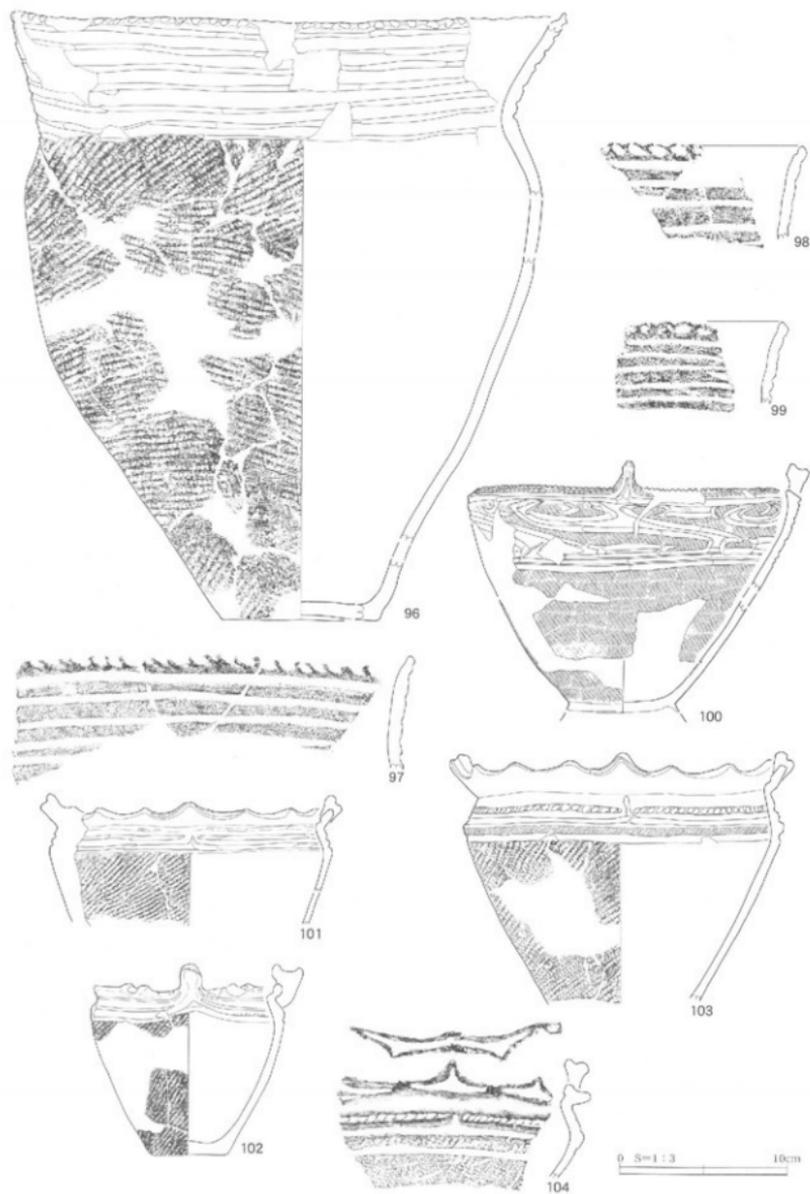
〈出土遺物〉遺物は堆積上上位から床面上まで、土器、石器、自然礫が混在して出土している。出土

位置に偏りはなく、ほぼ各層から出土している。前述した通り、RE005とは同一の遺構と想定して調査していたため、取り上げ段階でRE005の遺物も混在してしまった。

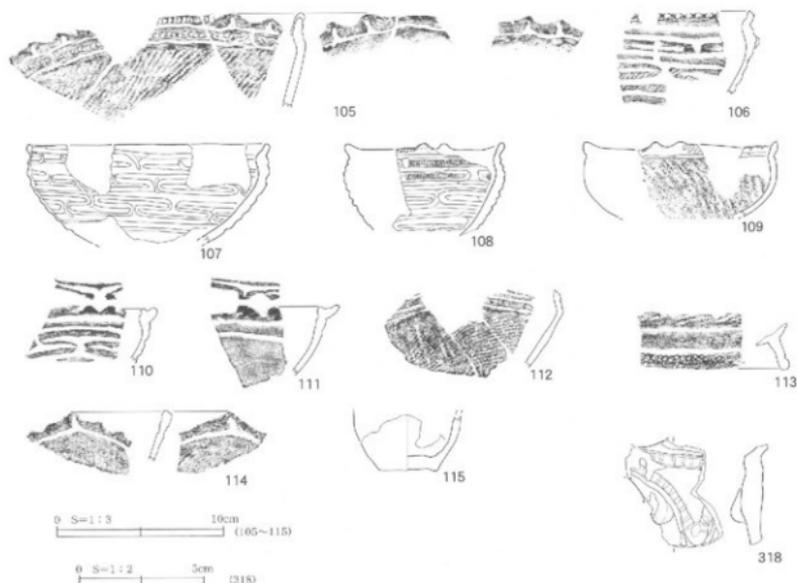
土器は611点(7.1kg)出土した。そのうち20点図示した。出土遺物量が多い割に、検出段階で形態が分かる土器は100、102のみであった(第43図)。96は1層から出土した深鉢A類である。大形の深鉢であるが検出段階では、破片が堆積土中に散在していた。口唇部に棒状工具による押圧が施され、口縁部には6条の沈線が巡る。深鉢A類はその他にも小片で多数出土している(97~99)。100~105は鉢である。前述の通り、100、102は床面上で出土している。そのほか、101、103は堆積土上位の破



第43図 RE004・005



第44図 R E 004・005 出土遺物 (1)



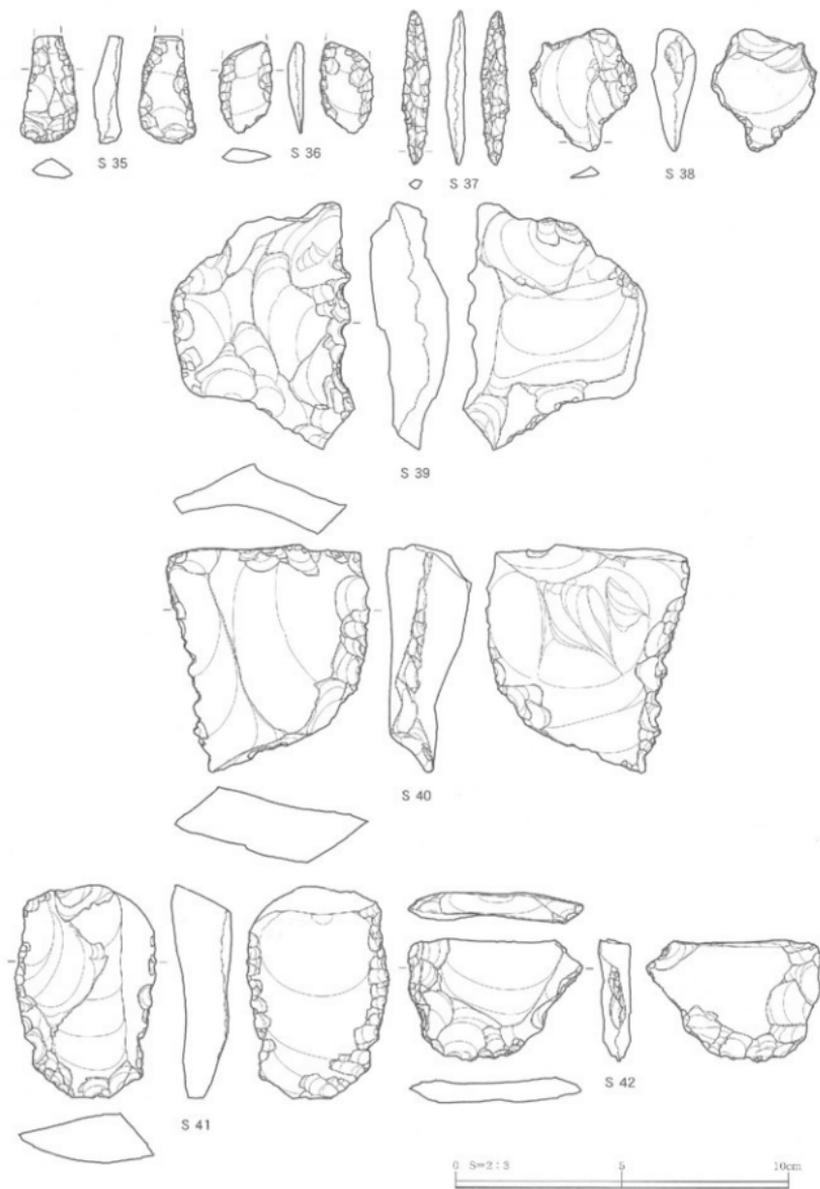
第45図 RE004・005 出土遺物(2)

片と床面上の破片とが接合したものである。100はA類に相当し、口縁部から胴部にかけて磨消文様が描かれている。口唇部には1単位の突起が付く。101～104はD類に相当し、口縁部に沈線文が施文される。101、103、105は口唇部が波状を呈する。102は口唇部に1単位の突起が付き、口縁部には沈線が巡る。105は小形の鉢で口縁部に沈線文が描かれ、内部に刺突が巡る。106～112は浅鉢である。106はA類に相当し、網文を施文した工字文が描かれている。107、108に沈線による工字文が施文される。

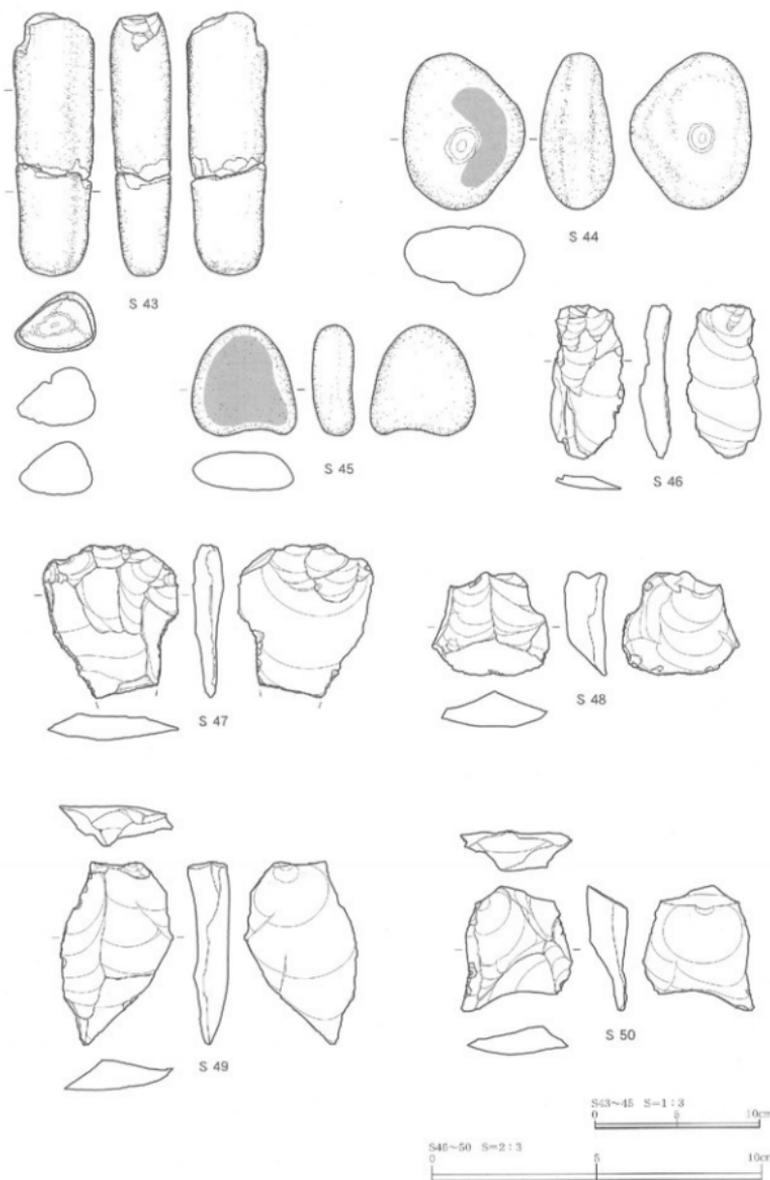
土製品は堆積土上位から出土した土偶の胴部片のみである。刻みの施された隆帯によって三角形を描かれている。同様な土偶が第17次調査でも出土している。

石器は石匙1点、石錐3点、不定形石器3点、敲磨器類11点、石核1点、Uフレイク4点、フレイク9点出土している。そのうち、16点を図示した。S35、36は石鏃で、どちらも先端部を欠損している。S37、38は石錐で、37は床面上から出土している。S39～42は不定形石器である。S39は直線的な縁辺部の片面に二次加工を施しているが、やや歪である。S40～42は複数の割縁に二次加工を施している。S43～45は敲磨器類である。S43は棒状を呈し、先端部に凹痕がみられる。S44は両面に凹痕がみられ、片面には磨痕も確認できた。S45は片面のみに磨痕がみられた。S45～48はUフレイクである。いずれも割縁に微細な剥離痕が認められる。S50はフレイクである。

〈時期〉床面出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。



第46図 RE 004・005 出土遺物 (3)



第47図 R E 004・005 出土遺物(4)

第15表 土器観察表 R E 004・005

調査番号	発見番号	層位	器種	分類	残存状況	形状文章	内面文章・調整	外面色調 内面色調	出土	個人名	備考
96	45	1層	加鉢	A 1	口~底2/3	唇: 紅色, 口: 沈緑色 肩: L 沈緑	口~肩: ナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂	A	容量16.66 l
97	45	1層	深鉢	A 1	口縁部片	唇: 青灰 口: 沈緑色	口: ナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂・灰	B	
98	45	検出可	深鉢	A 1	口縁部片	唇: 青 口: 沈緑	口: 沈緑, ナダ	加蓋縁 赤褐色	砂・灰	A	
99	45	1層	深鉢	A 1	口縁部片	唇: 粉土 口: 沈緑	口: ナダ	加蓋縁 赤褐色	砂・灰	A	
100	45	灰層	鉢	A 1	口~肩	唇: 突起(1単位), 肩み 口: 加蓋縁文, 肩: L 沈緑	口~肩: ナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂・白	B	容量2.00 l
101	45	灰層	鉢	D 2	口~肩1/3	唇: 突起(複数), 肩み 口: 加蓋縁文, 肩: L 沈緑	口: 沈緑 口~肩: ケズリーナダ	黒褐色 赤褐色	白	C	
102	45	灰層	鉢	D 3	口~底1/2	唇: 突起(1単位), B 突起 口: 沈緑 肩: L 沈緑	口: 沈緑 口~肩: ケズリーナダ	加蓋 縁赤褐色	砂・白	C	容量0.54 l
103	45	灰層	鉢	D 2	口~底2/3	唇: 突起(複数) 口: 粉土, 沈緑 肩: L 沈緑	口: 沈緑 口~肩: ミガキ	口~底: 加 柄赤褐色	白	C	内面に灰化物件着, 容量2.45 l
104	45	1層	鉢	D 2	口縁部片	唇: 突起(複数) 口: 沈緑, 粉土 肩: L 沈緑	口: 沈緑 口~肩: ミガキ	加蓋縁 加蓋縁	灰	C	
105	45	灰層	鉢	D 3	口縁1/4	唇: 突起(1単位) 口: 沈緑, 粉土 肩: L 沈緑	口: 沈緑 口~肩: ナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂	A	
106	45	灰層	深鉢	A 1	口縁部片	唇: 突起 口: 沈緑, 粉土 肩: L 沈緑	口: 沈緑 口~肩: ミガキ	加蓋縁 赤褐色	白	C	
107	45	1層	深鉢	B 1	口~底1/2	口~肩上: T 本文	口: 沈緑 口~底: ケズリーナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂・白	C	容量0.60 l
108	45	灰層上, 灰層	深鉢	B 1	口~底1/3	唇: B 突起, 肩み 口: L 本文, 加蓋	口: ナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂	A	
109	45	灰層	深鉢	G 1	口~底1/4	唇: B 突起, 肩み 口: 沈緑, 粉土 肩: L 沈緑	口~底: ナダ	口~底: 加 柄赤褐色	砂	A	
110	45	灰層	深鉢	B 1	口縁部片	唇: 突起 口: 粉土, 加蓋縁 口: 本文	口: 沈緑, ミガキ	加蓋縁 赤褐色	白	C	
111	45	灰層	深鉢	F 1	口縁部片	唇: 本文縁 口: 沈緑	口: 沈緑, ミガキ	加蓋縁 赤褐色	白	C	
112	45	灰層上, 灰層	鉢	D	口~肩1/4	唇: 突起 肩: L R (?) 縁	口~肩: ナダ	加蓋縁 赤褐色	砂	B	
113	45	灰層	浅鉢	-	台部のみ	唇: 沈緑, R L 縁	台: ナダ	加蓋縁 赤褐色	砂・灰	A	
114	45	灰層り込み	壺	-	口縁部片	唇: A 突起(複数) 口: 沈緑	口: 沈緑	加蓋縁 赤褐色	砂	A	
115	45	1層	ミニ チュエ	-	底部のみ	無文(彫刻による彫刻痕あり)	ナダ	沈青色 に赤い色	砂・白	B	
318	45	灰層上	土瓶	-	縁部, 肩み			加蓋縁 加蓋縁	砂・白	D	

第16表 石器観察表 R E 004・005

発見番号	発見番号	器種	層位	分類	材質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(w)	重量(g)	先端角度(°)	検出状況	備考
S-35	59	石鏃	灰層上, 灰層	1級	貫石 1	02.69	16.92	6.71	3.82	-	先鋒欠損	
S-36	59	石鏃	灰層上, 灰層	2級	貫石 1	08.30	15.82	4.81	2.11	-	先鋒欠損	
S-37	59	石鏃	灰層	1級	貫石 1	46.65	8.91	3.21	1.79	23	完整	
S-38	59	G 銃	灰層上, 灰層	4級	貫石 1	35.95	31.46	12.35	9.93	-	完整	
S-39	59	不定形石器	灰層	1級	貫石 2	73.12	33.73	16.72	38.00	-	完整	
S-40	59	不定形石器	灰層	1級	貫石 2	61.46	59.97	18.45	82.02	-	完整	
S-41	59	不定形石器	灰層上, 灰層	1級	貫石 2	63.12	42.74	19.95	42.02	-	完整	
S-42	59	不定形石器	灰層上, 灰層	1級	貫石 2	36.91	52.43	9.25	17.22	-	完整	
S-43	59	定形石器	灰層上, 灰層	G 級	アイサイト	158.50	259.57	254.75	305.63	-	1/4欠損	
S-44	59	定形石器	灰層上, 灰層	D 級	安山岩	95.20	72.61	43.13	385.96	-	完整	
S-45	59	定形石器	灰層上, 灰層	A 級	アイサイト	65.73	63.14	23.61	143.90	-	完整	
S-46	59	フアンイタ	1層	D 2 級	貫石 1	46.52	20.88	7.34	6.13	-	完整	
S-47	60	フアンイタ	灰層上, 灰層	D 2 級	貫石 2	45.63	39.88	8.26	14.40	-	完整	
S-48	60	フアンイタ	2層	D 1 級	貫石 1	32.24	35.24	11.65	10.90	-	完整	
S-49	60	フアンイタ	掘り込み	C 3 級	貫石 1	56.79	33.00	11.13	15.83	-	完整	
S-50	60	フアンイタ	2層	B 3 級	貫石 2	33.81	36.18	10.69	8.82	-	完整	

RE005 (第47～51図、写真図版14・15・45・60)

〈位置〉調査区東端、4 N20 c～20 d グリッドに位置する。

〈検出状況〉RE004とほぼ同じ状況で検出した。

〈重複関係〉RE004、RD048と重複する。本遺構が最も古い。

〈平面形・規模〉東西に長い不整形長方形を呈する。ただし、西側はRE004に壊されており、全容は不明である。残存する規模は375×167cm、深さは検出面から25cmを測る。

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし、3層に分層される。

〈壁・床面〉V層土が検出する面を床面とした。ほぼ平坦であるが、硬化面は見受けられなかった。壁は南壁の一部のみ検出しており、ほぼ直立気味に立ち上がる。

〈柱穴〉明確に柱穴と思われるものは認められないが、遺構中央と南端で柱穴状の掘り込みを3個検出した。また南壁に沿って、溝状の掘り込みを検出した。

〈出土遺物〉前述の通り、RE001と合わせて同じ遺構であるものと思われ、調査を進めたため、本遺構出土と限定できるものが少ない。床面上から数点の土器片が見つかったが、図示できるほどのものではなかった。従って、上述のRE004の遺物の中に本遺構の遺物も混ざっているものと思われる。

〈時期〉本遺構に伴うと考えられる遺物を確定出来ていないが、RE004との重複関係から、RE004より古いものと考えられる。2つの遺構から出土した遺物を整理した際、出土土器からはそれほど時期幅があるようには感じられなかった。従って本遺構はRE004より古い、それほど時期差があるものではないと考えられ、縄文時代晩期後葉と推定される。

(3) 土 坑

7基確認した。過去の調査で41基の土坑が見つかっており、それらに続くRD042～048とした。

RD042 (第48・49図、写真図版17・46・60)

〈位置〉調査区東端、4 N18 f グリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面で黒褐色のプランとして確認した。

〈平面形・規模〉隅丸の不整形長方形を呈し、規模は78×71cmを測る。深さは検出面から10cmである。

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし、2層に分層される。

〈壁・底面〉V層を底面とする。底面は皿状を呈する。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

〈遺物〉土器片が42点(1.0kg)出土している。北壁際より注口土器の注口部が、また堆積土中からは口縁部が出土した(116、117)。やや小振りの注口土器であるが、破片は図示したものが全てであり、接合しても完形にはならなかった。また、土坑底面のほぼ中央で石匙(S51)が刃部を下にして直立の状態でも出土した(写真図版16-2)。石匙は側縁の両面から二次加工を施し、刃部を作出している。

〈時期〉出土した注口土器から縄文晩期後葉に比定される。

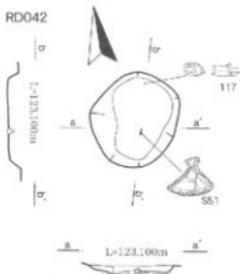
RD043 (第48・49図、写真図版17・46・60)

〈位置〉調査区東端、4 N19 f グリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面で、黒褐色のプランを確認した。

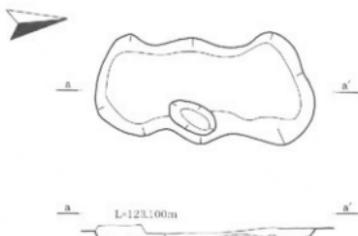
〈平面形・規模〉不整形長方形を呈する。ただし長辺は歪である。180×90cmを測る。深さは検出面から14cmである。

RD042



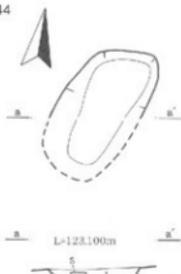
1. 10Y R3/1 黒褐色シルト 粘性やや硬 粘まり密 黒褐色粘土の層、塊状砂少量含む
2. 10Y R5/6 黄褐色粘土 粘性強 粘まり密 黒褐色シルト少量含む

RD043



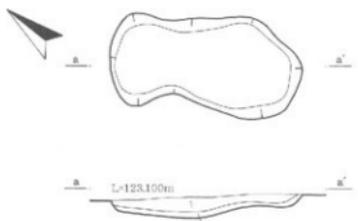
1. 10Y R2/1 黒褐色シルト 粘性やや硬 粘まりやや密 灰オリーブ色粘土少量、塊状砂少量含む
2. 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土 粘性強 粘まりやや密 黒褐色シルト少量、塊状砂少量含む

RD044



1. 10Y R3/1 黒褐色シルト 粘性やや硬 粘まり密 灰オリーブ色粘土少量、塊状砂少量含む
2. 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土 粘性強 粘まり密 黒褐色シルト少量、塊状砂少量含む

RD045



1. 10Y R2/2 黒褐色シルト 粘性やや硬 粘まりやや密 黒褐色粘土少量、塊状砂少量含む
2. 2.5Y R4/3 オリーブ褐色粘土 粘性強 粘まりやや密 灰褐色シルト少量含む

RD046

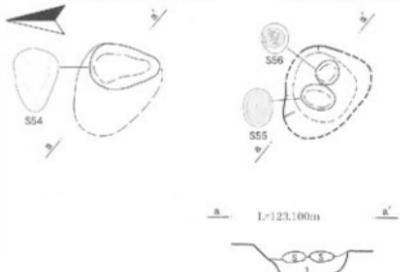


1. 2.5Y4/2 オリーブ褐色シルト 粘性やや硬 粘まりやや密 炭化物塊状含む



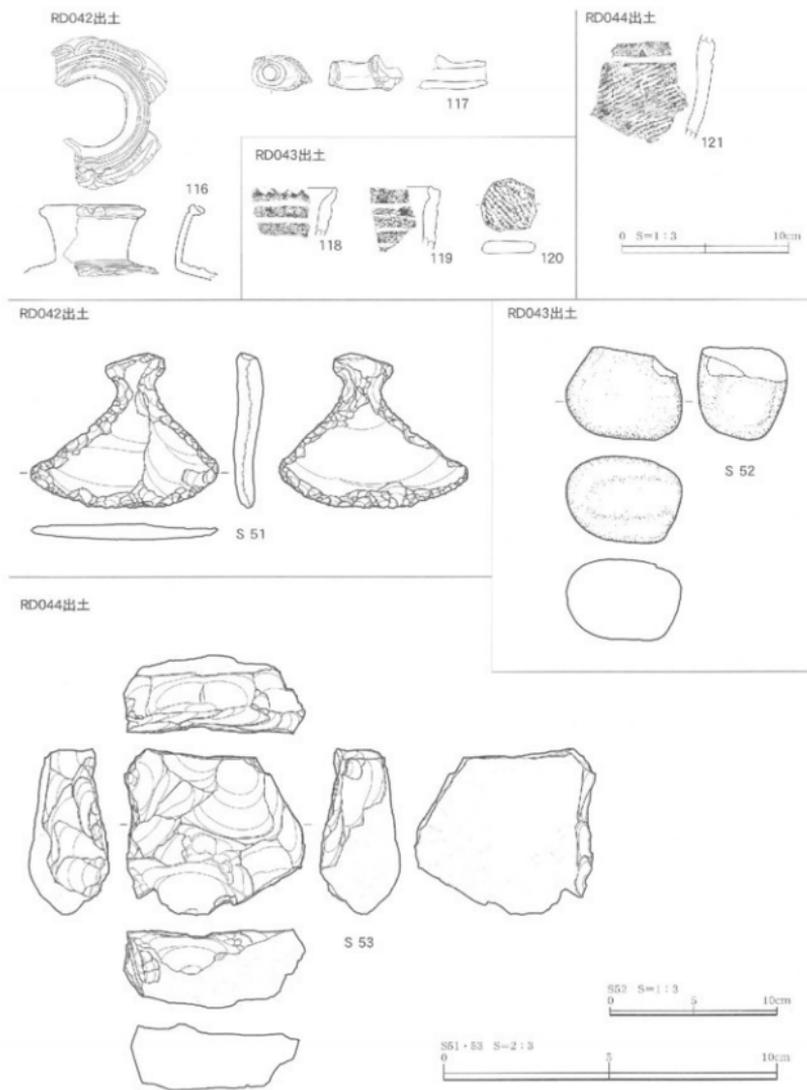
RD047

検出部石柱出土状況 遺構層断面出土状況

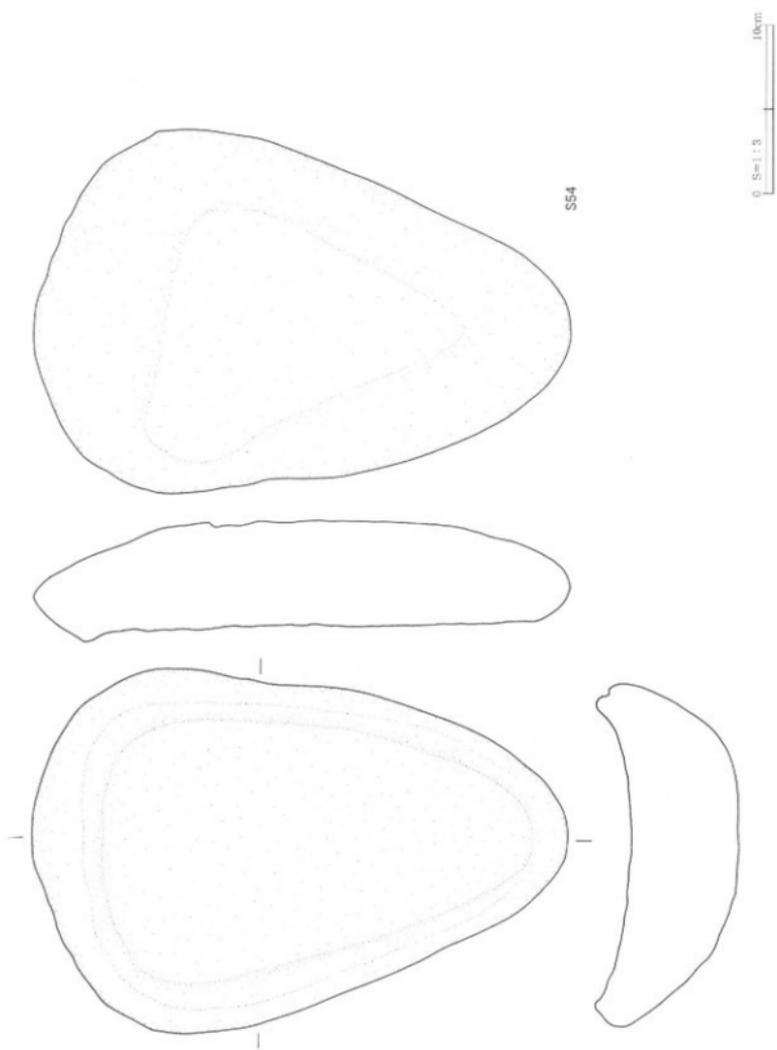


1. 10Y R2/1 黒色シルト 粘性やや硬 粘まり密 黒褐色粘土少量含む
2. 10Y R4/4 褐色粘土 粘性強 粘まりやや密 1層土ブロック少量含む

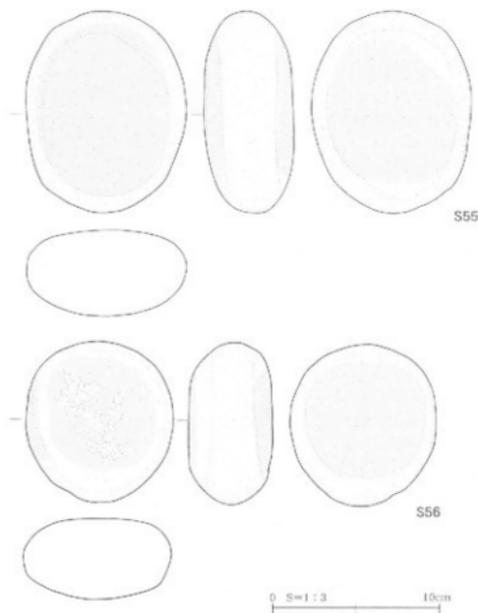




第49図 R D 042~047 出土遺物



第50図 RD047 出土遺物 (1)



第51図 R D047 出土遺物(2)

〈検出状況〉4 N20 f グリッド南側に、東西方向へとトレンチを入れた際、断面土層から本遺構を検出した。従って本遺構は南半分がトレンチにより消失している。

〈平面形・規模〉南側が消失しているので不明であるが、隅丸方形を呈するものと推測され、60×約120cmを測る。深さは検出面から20cmである。

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし、2層に分層される。

〈壁・底面〉V層を底面とする。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

〈遺物〉堆積土中より土器片19点(0.2kg)と不定形石器1点、石核1点が出土し、そのうち土器片1点(121)と石核1点(S53)を図示した。121は深鉢の胴部片である。S53は石核でB2類に相当する。自然面が残り、広い作業面に打面をかえながら、剥片剥離作業を行った痕跡が認められる。

〈時期〉出土土器から縄文時代晩期に比定される。

R D045 (第48図、写真図版47)

〈位置〉調査区東端、4 N16 b グリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面で、黒褐色のプランを確認した。

〈平面形・規模〉不整形を呈するが、長辺は歪である。規模は155×80cmを測る。深さは検出面から15cmである。

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし、2層に分層される。

〈壁・底面〉V層を底面とする。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに外へと開きながら、立ち上がる。

〈その他の施設〉南壁付近から柱穴状の掘り込み1個を検出した。大きさは40×20cmを測る。

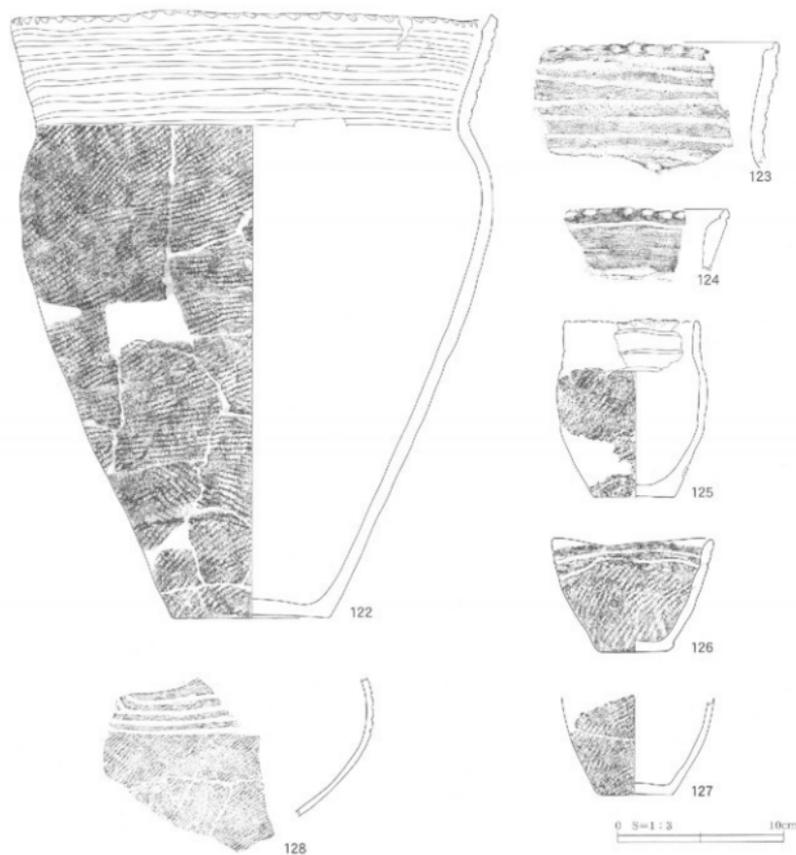
〈遺物〉堆積土中から土器小片が41点(0.3kg)と敲磨器類1点が出土しており、そのうち土器片3点(118~120)と敲磨器類1点(S52)を図示した。

118、119は深鉢A類の口縁部片である。120は土製円板で、L Rの縄文が施文された深鉢の胴部片を転用している。縁部には磨痕が認められる。S52は縁部部の2か所に敲打痕がみられる。

〈時期〉出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。

R D044 (第48・49図、写真図版17・46・60)

〈位置〉調査区東端、4 N20 f グリッドに位置する。



第53図 RD048 出土遺物(1)

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし2層に分層される。炭化物や黄褐色粘土が混入する。

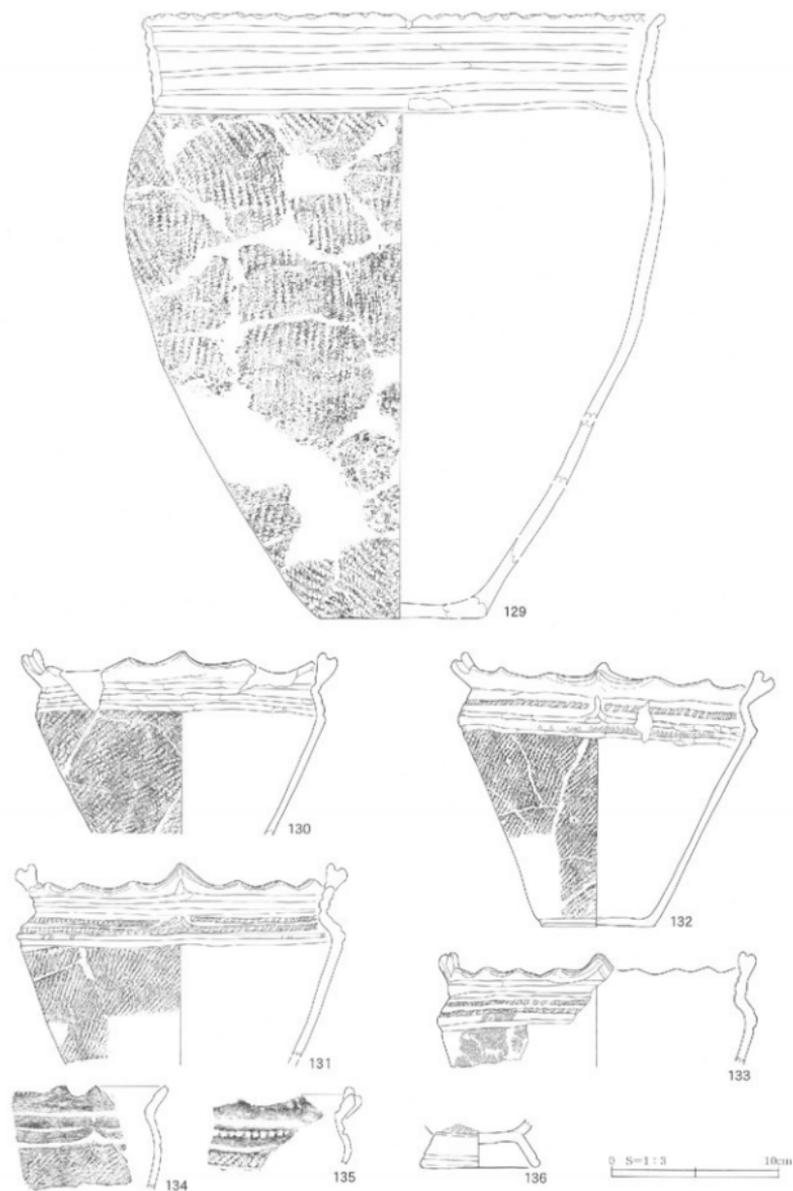
〈壁・底面〉V層を底面とする。底面は皿状を呈する。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

〈遺物〉なし。

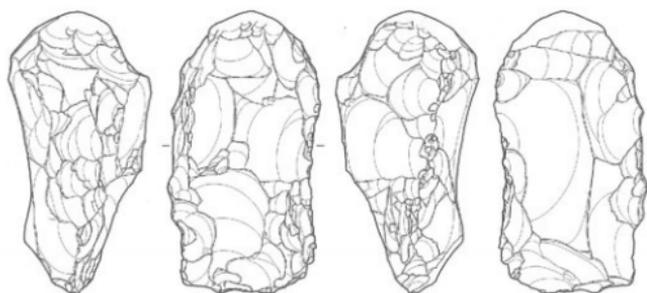
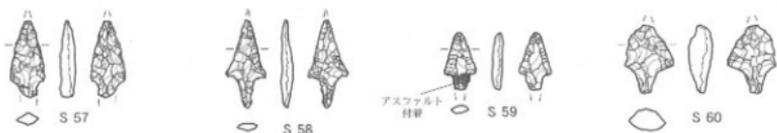
〈時期〉時期決定の根拠となる遺物が出土していないので、定かではないが、堆積土の様相から、他の遺構とはほぼ同時期の縄文時代晩期後葉と推定する。

R D046 (第48図、写真図版46)

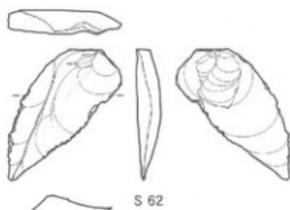
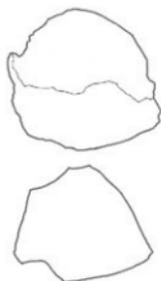
〈位置〉調査区ほぼ中央部、4 M22 n グリッドに位置する。



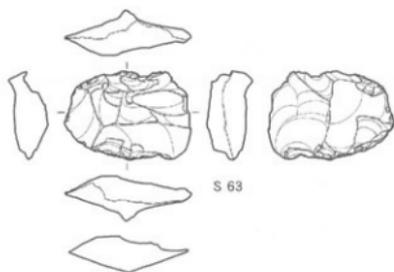
第54図 RD048 出土遺物(2)



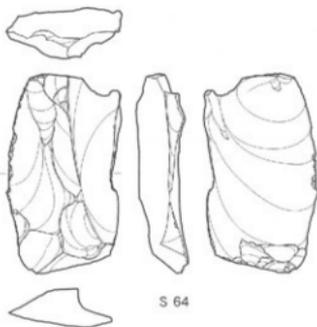
S 61



S 62



S 63



S 64



第55図 RD048 出土遺物(3)

第17表 土器観察表 土坑

坑名 番号	写真 番号	出土位置 ・層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・模様	外口色澤 内面色澤	形状	出土量	備考
116	46	R D042 2層	土器片		口一破2/3	器：沈線 口：点文 期：上文字+高文	口：沈線、ミガキ	に高い黄緑 に高い黄緑	片	C	
117	46	R D042 底面直上	土器片		口一破2/3	器：沈線、ミガキ、垂文、斜み	—	黄緑黄緑 黄緑黄緑	片	C	
118	46	R D043 堆積土中	漆片	A1	口縁部片	器：斜文 口：沈線	口：ナナ?	黄緑 黄緑	砂	B	
119	46	R D043 2層	漆片	A1	口縁部片	口：沈線	口：沈線	に高い黄緑 に高い黄緑	砂	A	
120	46	R D043 堆積土中	土製陶器	—	完形	上面：L R	—	黄緑黄緑 に高い黄緑	砂	C	
121	46	R D044 堆積土中	漆片	—	口縁部片	器：沈線、L R線	口：ナナ	黄緑 黄緑	砂	B	
122	46	R D048 底面直上	漆片	A1	口縁部片	器：斜文 口：沈線 器：L R線	口一破上：ナナ	黄緑 黄緑	砂・片	B	容量13.83 l
123	46	R D048 底面直上	漆片	A1	口縁部片	器：斜文 口：沈線 器：L R線	口：ナナ	に高い黄緑 に高い黄緑	砂・片	A	
124	46	R D048 底面直上	漆片	B1	口縁部片	器：斜文 口：沈線	口：沈線、ケズリーナナ	に高い黄緑 に高い黄緑	片	C	外面に炭化物付着。
125	46	R D048 底面直上	漆片	D1	口一破1/5	器：斜文 口：沈線 器：L R線	口一破上：ケズリーナナ	黄緑 黄緑	砂・片	A	容量0.30 l
126	46	R D048 底面直上	漆片	F4	完形	口：沈線 器：L R線	口一破：ナナ	に高い黄緑 黄緑	砂・片	B	容量0.21 l
127	46	R D048 底面直上	漆片	—	口一破1/2	器：L R線、斜	口：ナナ	黄緑 に高い黄緑	白	C	
128	46	R D048 底面直上	漆片	A	口縁部片	器：上文字+L R線	器：ミガキ	黄緑 黄緑	砂	B	
129	46	R D048 底面直上	漆片	A1	口一破2/3	器：斜文 口：沈線 器：L R線	口一破上：ナナ	黄緑 黄緑	砂・片	A	容量18.98 l
130	46	R D048 底面直上	漆片	D2	口一破1/2	器：斜文(逆文) 口：沈線 器：L R線	器上：ミガキ	に高い黄緑 に高い黄緑	白・片	C	
131	46	R D048 底面直上	漆片	D2	口一破1/2	器：L R線、斜文、斜、L R線	口一破：ミガキ	に高い黄緑 黄緑	白	C	
132	46	R D048 底面直上	漆片	D2	口縁部片	器：L R線、斜文、斜、L R線	器：ミガキ	に高い黄緑 に高い黄緑	白	C	表面に炭化物付着。 容量1.73 l
133	46	R D048 底面直上	漆片	D2	口一破1/4	器：L R線、斜文、斜、L R線	口一破上：ミガキ	黄緑 黄緑	白	C	
134	46	R D048 底面直上	漆片	D3	口縁部片	器：斜文、斜、L R線	口：沈線、ミガキ	黄緑 黄緑	白	C	表面に炭化物付着。
135	46	R D048 底面直上	漆片	D2	口縁部片	器：斜文(逆文) 口：沈線、斜文 器：L R線	口：沈線、ミガキ	黄緑 黄緑	白	C	
136	46	R D048 底面直上	漆片	—	口縁部片	器：L R線、斜文、斜、L R線	—	に高い黄緑 黄緑	砂	A	

〈検出状況〉V層上面で比較的大きい礫が4点、集中的に出土しており、それらを取り除いた後、黒色のプランを確認した。

〈平面形・規模〉不整形を呈し、径60cmを測る。深さは検出面から約15cmである。

〈堆積土〉黒色シルト～褐色粘土を主体とし、2層に分層される。

〈壁・底面〉V層面を底面とした。底面は皿状を呈し、壁は外へと開きながら立ち上がる。

〈遺物〉なし。検出面上の礫4点には加工された痕跡がなく、配置にも規則性は認められなかった。

〈時期〉時期決定の根拠となる遺物が出土していないので定かではないが、堆積土の様相から他の遺構とほぼ同時期の縄文時代晩期後葉と推定する。

R D047 (第48、50、51図、写真図版18・60)

〈位置〉調査区ほぼ中央部、4 M23 q グリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面から石皿類(S54)が検出し、その直下から敵磨器類2点(S55、56)が出土した。これらの石器を中心にトレンチを入れたところ、断面の土層で敵磨器類を内包する掘り込みを確認した。

第18表 石器観察表 土坑

坑番号	形式番号	器 名	出土地点・層位	分類	石 質	長さ(mm)	厚(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	刃角(度°)	使用状況	備 考
S51	60	石匙	R D42・底面	1a類	頁岩1	47.00	26.17	7.71	13.54	—	定形	深さ約20.70cm
S52	60	敲磨磨盤	R D43・2層	C類	アイサイト	51.72	68.85	51.33	287.74	—	1/4欠損	
S53	60	石槌	R D44・2層	B2類	頁岩1	48.26	37.07	22.11	73.94	—	—	自然面残る
S54	60	石皿類	R D47・段内底	—	灰石	—	—	—	120.00	—	定形	
S35	60	敲磨磨盤	R D47・溝縁上川	A類	灰石	123.19	94.13	53.67	935.53	—	定形	
S56	60	敲磨磨盤	R D47・溝縁上平	A類	灰石	98.74	87.68	50.07	398.96	—	定形	
S57	60	石槌	R D48・底面	2類	頁岩3	23.19	20.28	4.31	0.92	35	凹型欠損	中央幅3.18cm
S58	60	石槌	R D48・底面	1類	赤色頁岩1	25.68	11.92	3.86	0.61	29	先端欠損	中央幅4.37cm
S59	60	石槌	R D48・底面	1類	頁岩3	17.28	9.59	2.90	0.41	24	中央部欠損	アスファルト接着 中央幅4.58cm
S60	60	石匙	R D48・底面	S類	頁岩1	(20.05)	14.30	6.80	1.30	(71)	先端欠損	
S61	60	小型石匙 半完成品	R D48・1層	—	頁岩2	85.35	24.25	40.66	184.42	—	—	
S62	60	ヒソクイ	R D48・段内面	B3類	頁岩1	40.61	39.89	4.94	3.75	—	—	
S63	60	西壁石杵	R D48・1層	—	頁岩1	26.81	37.81	10.36	9.42	—	—	
S64	60	ヒソクイ	R D48・底面	—	頁岩2	60.14	32.56	12.70	23.35	—	—	

〈平面形・規模〉敲磨器類下の掘り込みは不整楕円形を呈し、規模40×30cmを測る。深さは敲磨器類の検出面から20cmである。

〈堆積土〉オリブ褐色シルトを主体とした単層である。V層土に類似するが、炭化物の混入から遺構堆積土と判断した。

〈壁・床面〉オリブ褐色シルト層下、特に炭化物などの混入物がなくなる面を底面とした。ほぼ平坦である。壁も同様な様相から立ち上がりを検出している。やや直立気味である。

〈遺物〉石皿類1点と敲磨器類2点が出土し、3点全て図示した(S54～56)。石皿類(S54)は使用面を地内側にし、伏せた状態で出土した。敲磨器類2点は、S56が石皿類の直下から、S55はやや石皿類よりも西側にずれる位置で並んで出土した。どちらも両面に磨痕が見られる。

〈時期〉石器以外、時期決定の根拠となる遺物が出土していないので定かではないが、堆積土の様相から他の遺構とほぼ同時期のものと推定する。

R D048 (第52～55図、写真図版19、20、46、60)

〈位置〉調査区東端、4 N18 d グリッドに位置する。

〈検出状況〉R E005を掘り下げた際、北東隅から上器片が多量に出土し、その下から多量の炭化物を含んだ黒褐色シルト層を検出した。土器はR E005の堆積土上位から出土し始めており、またR E005の床面よりも掘り込みが深いことから、R E005とは別の遺構が重複しているものと判断した。精査当初は、円形の土坑と考えていたが、さらに北側から遺物が検出し、大形の楕円形を呈する土坑であると判断した。複数の土坑が重複している可能性も考え精査を行ったが底面と判断した面から一定量の遺物が、途切れることなく分布し、1基の土坑であると判明した。他の土坑とは様相を異にし、またR E004・005と比較した場合、本遺構の方が規模が大きいが、平面形や断面形から土坑に分類した。

〈平面形・規模〉不整楕円形を呈し、長辺がやや西側へと湾曲する。北壁は掘りすぎのため消失しているが、確認できたところまでで510×190cmを測る。深さは検出面から20～35cmである。

〈堆積土〉本遺構は、調査段階で遺構範囲を確定しづらく、土層観察用の断面ベルトを設定できなかった。従って、土層の様相などは記録していない。ただし調査の際確認した堆積土は黒褐色シルトを主体とするものであった。

〈壁・底面〉褐色砂質シルト面(Ⅷ層上面)を底面とした。底面は短辺方向からみて丸く、皿状を呈

する。壁は大きく外へ開きながら立ち上がる。

〈遺物〉堆積土中から底面にかけて、多量の遺物が出土した。土器は破片にして456点(8.9kg)出土しており、そのうち15点を図示した。出土層位は堆積上位から底面上にかけてみられるが、特に中央部から南側にかけての底面上で、多量の土器が集中的に出土した。それらの土器は深鉢が主体であるが、特に122の深鉢は胴部が底面上に横倒し状態で、11縁部が一周分、欠けることない状態で西壁の立ち上がり上から出土している(写真図版19-2)。また底面上から出土した深鉢の胴部片に混ざって、完形の小形鉢(126)が伏せた状態で出土している。122~125、129は深鉢である。大形の深鉢2個(122、129)が底面上から出土している。123も含め、A類に相当する。124は深鉢の口縁部片で、B類に相当する。口唇部直下には指頭による圧痕が巡る。126は小形の鉢で、L R縄文が施文されるほか、口縁部に2条の沈線が巡る。竪は少ない。図示できたのは堆積土中から出土した128のみである。胴部中央に最大径をもつ形態であろうと推測され、胴部上半には沈線が巡る。130~136は鉢で、D2、3類がほとんどである。130や133が遺構底面から出土している。134、136をのぞき、いずれも口唇部には4単位の突起をもち、その間には波状を呈している。口縁部には横位の沈線が巡り、沈線内に刺突が施されるものもある。130は底部が輪積みの部分から丸ごと欠損している。134は平縁の口縁部に刻みが巡り、B突起が付される。136は鉢の台部片で、沈線が巡る。

石器は、石鏃4点、不定形石器3点、敲磨器類2点、中形未成品1点、両極石器1点が出土し、その他、フレイク27点(そのうちUフレイク2点、Rフレイク1点)が出土している。石鏃(S57~60)はA類で、いずれも先端部や中茎部が欠損している。S59は中茎部にアスファルトが付着していた。S61は中形石器未成品で、自然面が残り、両側の両面から二次加工による刃部が作出されている。S62はUフレイクで両側縁辺に微細剥離痕が認められる。S63は両極石器で、両面に上下一対の両極剥離が施されている。

〈時期〉出土遺物から縄文時代晩期後葉に比定される。

(4) 集石遺構(RH)

礫・石器が一定範囲に集中しており、その直下に掘り込みを有するものを1基検出し、集石遺構とした。関東地方などでみられる、所謂「集石遺構(土坑)」とは異なり、礫に被熱の痕跡がなく、また礫の集中する密度もやや薄いことが特徴である。

RH001(第56、57図、写真図版22・60)

〈位置〉調査区西端、4M15hグリッドに位置する。

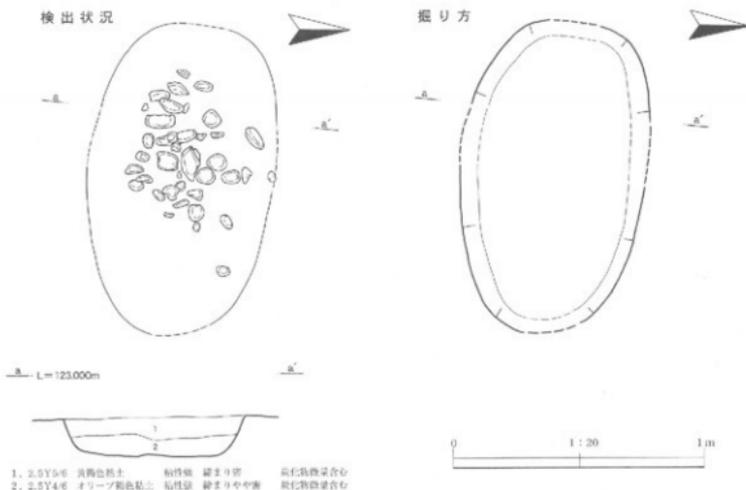
〈出土状況〉V層上面に、径約50cmの範囲で礫が集中して検出した。これらの礫群を取り除いた後、下部にトレンチを入れ、断面から土層を確認したところ、掘り込みを確認したので遺構と判断した。

〈平面形・規模〉礫が集中する範囲は径約50cmでやや東西方向に長い。掘り込みは130×75cmを測り、集石よりもやや大きい。掘り込みの深さは集石検出面から15cmである。

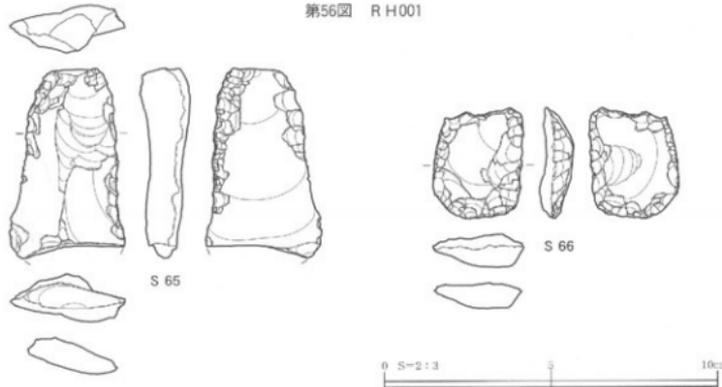
〈堆積上〉掘り込み堆積土は黄褐色~オリーブ褐色の粘土を主体とし2層に分けられる。V層土に類似するが、堆積土中には炭化物が含まれる。

〈壁・底面〉掘り込みの底面はV層面(炭化物などの混入物を含んでいない)を底面とし、ほぼ平坦である。壁はほぼ直立する。

〈遺物〉土器は出土していない。集石はほとんどが自然礫であるが、不定形石器2点、敲磨器類2点が含まれている。不定形石器のみ図示した(S65、66)。S65は側縁部の両面に二次加工を施してい



第56図 R H001



第57図 R H001 出土遺物

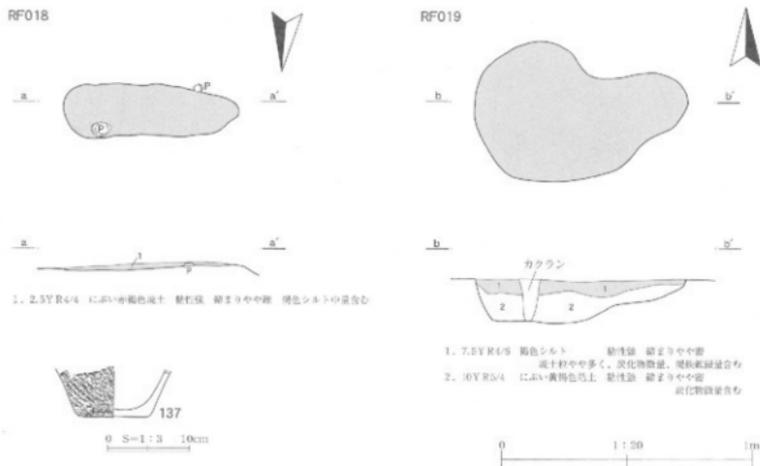
第19表 石器観察表 R H001

現状番号	写真番号	器種	層位	分類	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	残存状態	備考
S65	60	不定形石器	検出面	1期	頁岩1	54.00	34.00	12.21	21.21	—	—	
S66	60	不定形石器	検出面	1期	頁岩1	32.99	25.84	7.88	9.09	—	—	

る。S66は二次加工が縁辺全周の両面で確認できる。

〈時期〉時期決定の根拠となる遺物が出土しておらず、また位置もやや離れており、時期決定の根拠がほとんどない。ただし出土した不定形石器の形態が他の遺構から出土したものと類似しており、他の遺構とほぼ同時期に比定できる可能性が高い。

2 検出した遺構・遺物



第58図 R F 018・019

第20表 土器観察表 R F 018

採掘番号	写真番号	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	粘土	混入量	備考
137	47	1層	ミニチュア	—	底部のみ	底: R L斜	底: ナデ	にぶい黄褐色 淡黄褐色	砂・長	B	

(5) 焼土遺構 (R F)

2基検出した。いずれも竪穴住居跡の炉である可能性が高いが、周辺から柱穴が検出しないことや、また柱穴が検出しているも規則的に並ばず、竪穴住居跡と断定できないので、ここでは単体の焼土遺構として扱う。また過去の調査で17基の焼土遺構が確認されており、それらに続く R F 018、019とした。

R F 018 (第58図、写真図版20・21・47)

〈位置〉調査区東端、4 N 24 d グリッドに位置する。

〈検出状況〉V層をやや掘り下げた際、検出した。

〈平面形・規模〉長楕円形を呈し、70×20cmを測る。焼土の堆積は6cmである。

〈堆積土〉焼土のみである。

〈遺物〉焼土中から土器片3点(124.74g)が出土している。1点図示した。137は深鉢の底部片で焼土検出面上から出土している。

〈時期〉出土した深鉢底部から縄文時代晩期に比定される。

R F 019 (第58図、写真図版21)

〈位置〉調査区ほぼ中央部、4 M 25 o グリッドに位置する。

〈検出状況〉V層上面でプランを確認した。

〈平面形・規模〉不整楕円形を呈し、85×55cmを測る。焼土の堆積は6cmである。

〈堆積土〉焼土直下に深さ10cmの掘り込みがある。にぶい黄褐色粘土を堆積土とし、V層土と類似するが、炭化物が混入する。

〈遺物〉なし。

〈時期〉時期決定の根拠となる遺物が出土していないので、定かではないが、周辺のグリッドから出土する遺物から縄文時代晩期に比定される可能性が高い。

(6) 遺物集中区 (第59～65図、写真図版23・47・60・61)

〈位置〉調査区東端、4 N15 f～4 N20 fグリッド付近に位置する。

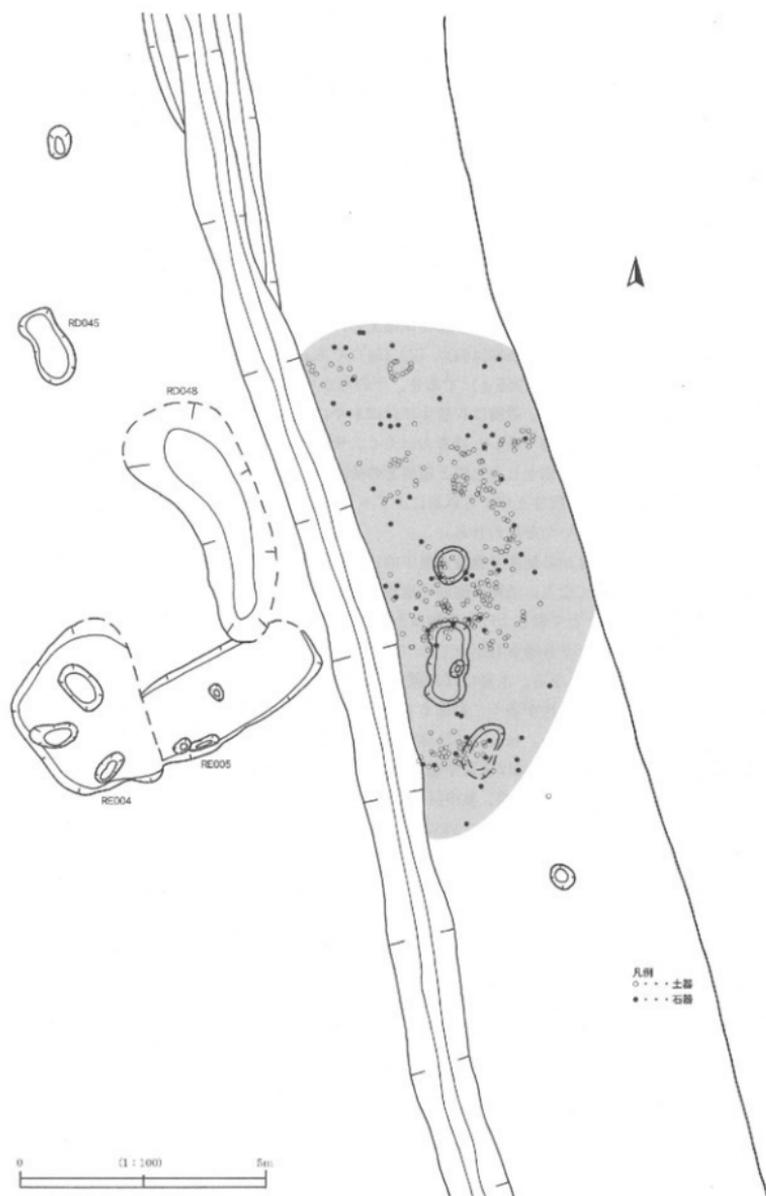
〈検出状況〉IV層を掘り下げる際、多量の遺物が出土した。約5グリッド(20㎡分)中、遺物出土量は土器が571点(8.3kg)であり、石器は64点(20.4kg)である。第26次調査区にみられる1グリッド当たりの土器出土量は平均27点(255g)であり、その点からも、この範囲に限り、非常に多くの遺物を包含していることが分かる。遺物はIV層中にはほぼ水平に堆積しており、また遺構検出面よりもやや上であった。従って所謂「捨て場」とは考えにくく、便宜的に「遺物集中区」と仮称し、遺物の取り上げを行った。範囲内から出土した土器と石器との分布を示したものが第59図であるが、また「遺物集中区」出土としてドット取り上げする以前にグリッド一括で取り上げた遺物があり、実質的にも多くの遺物が包含されていたと思われる。

〈規模〉南北9m、東西4mの範囲で遺物が集中的に出土した。遺物の出土する密度は南側がやや濃く、北に行くにつれ、薄くなる。遺物は層的に堆積せず、上述の範囲内にはほぼ同じ高さで分布する。

〈遺物〉「遺物集中区」として取り上げた遺物は土器571点(8.3kg)、石器は64点(20.4kg)である。なお土器はこれに同グリッドIV層から出土した(遺物集中区として取り上げなかった)ものも合わせると、1,190点(14.4kg)となる。土器はほぼ縄文時代晩期後葉に比定されるものがほとんどである。土器が多量に出土した割に破片が多く、形態まで復元できたものは少ない。138～140は深鉢の口縁部片で、いずれもA類に相当する。141、142は鉢の口縁部片で、D類に相当する。口唇部に突起を付し、沈線が巡る。143、144は壺で、143は隆帯が巡る口縁部片、144は胴部片でLR縄文を施文した工字文が描かれる。145は完形の注口土器で、集中区の北側で、正位の状態で出土した。147、148は浅鉢である。147はC類で口縁部に隆帯が巡る。148はA3類の胴部片で、短い四脚が付く。胴部にはLR縄文を施文した工字文が沈線により描かれる。

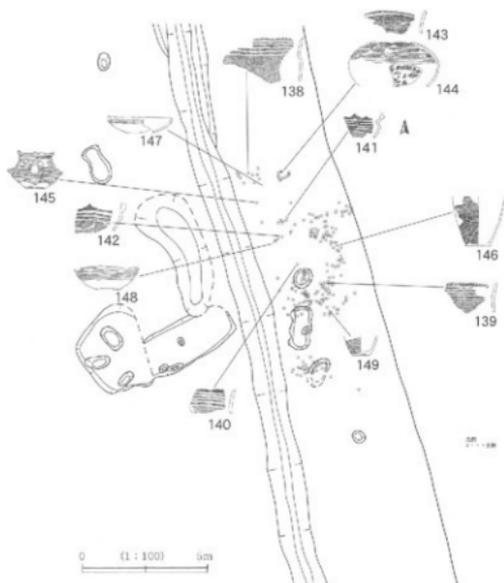
石器はツール類では石鏃2点、石匙1点、不定形石器1点、礫器1点、敲磨器類30点、石皿類4点が出土しており、また石核5点、フレイク33点(そのうち、Uフレイク4点、Rフレイク2点)が見つかっている。13点を図示した。S67は石鏃で2類に相当し、基部が欠損する。S68は赤色頁岩1類の石匙で側部の両面から二次加工を施し、刃部を作出している。S69は礫器で、厚みのある自然礫の縁部両面から二次加工を施す。S70、71は敲磨器類である。S70は完形で扁平な円礫の両面に磨痕がみられる。S71はほぼ半分が欠損している。両面に光沢が出るほどの磨痕が見受けられる。S72、73は石核である。S74～76はUフレイクで、縁部に微細刻離痕がみられる。S77、78はRフレイクである。S77は背面に二次加工痕がみられる。S78は正面の縁部に二次加工痕がみられる。S79は石皿類で、一部欠損している。軽石を石材とし、表面は脆くザラザラしている。側面に面取りとも考えられる痕跡があるが、不明瞭である。両面に11箇所の凹痕が確認できた。

〈付属施設など〉遺物を取り上げた後、さらに掘り下げ遺構を探したが、遺構は検出しなかった。

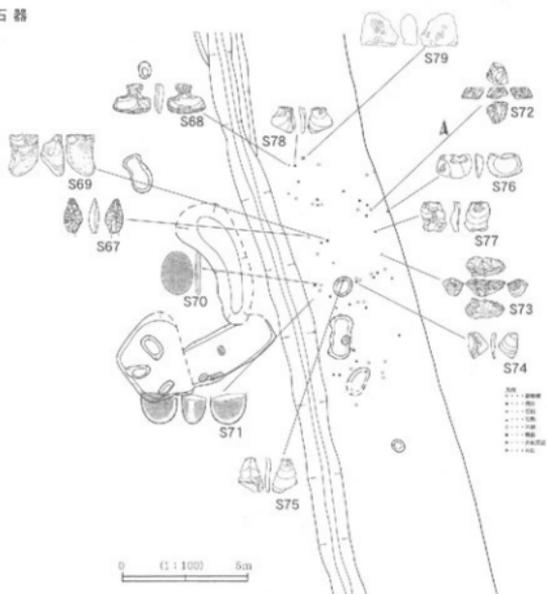


第59図 遺物集中区

土器



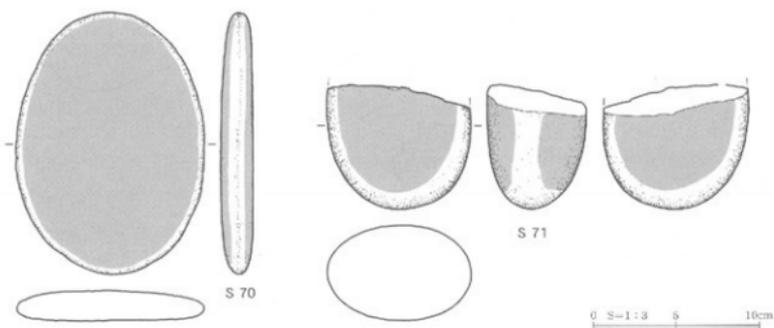
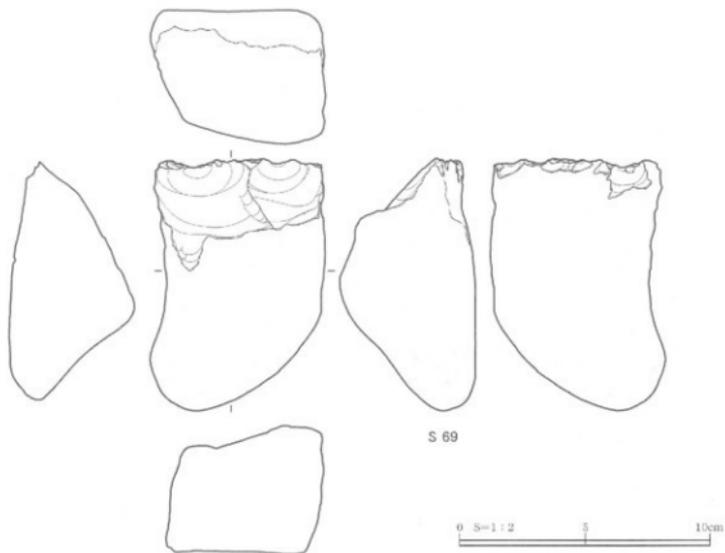
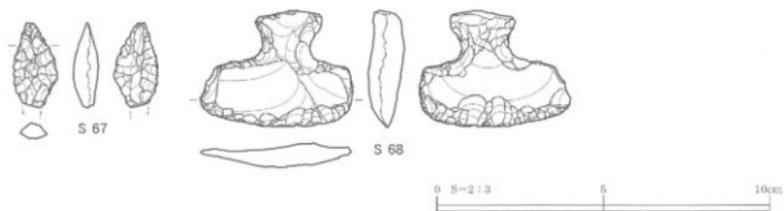
石器



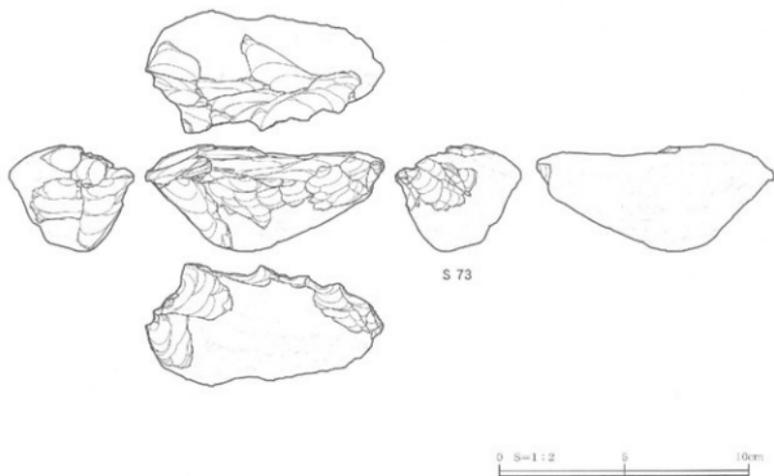
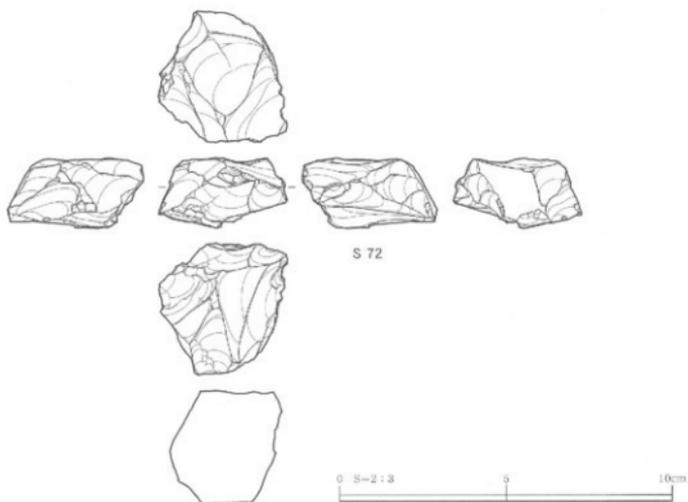
第60図 遺物集中区 遺物出土状況



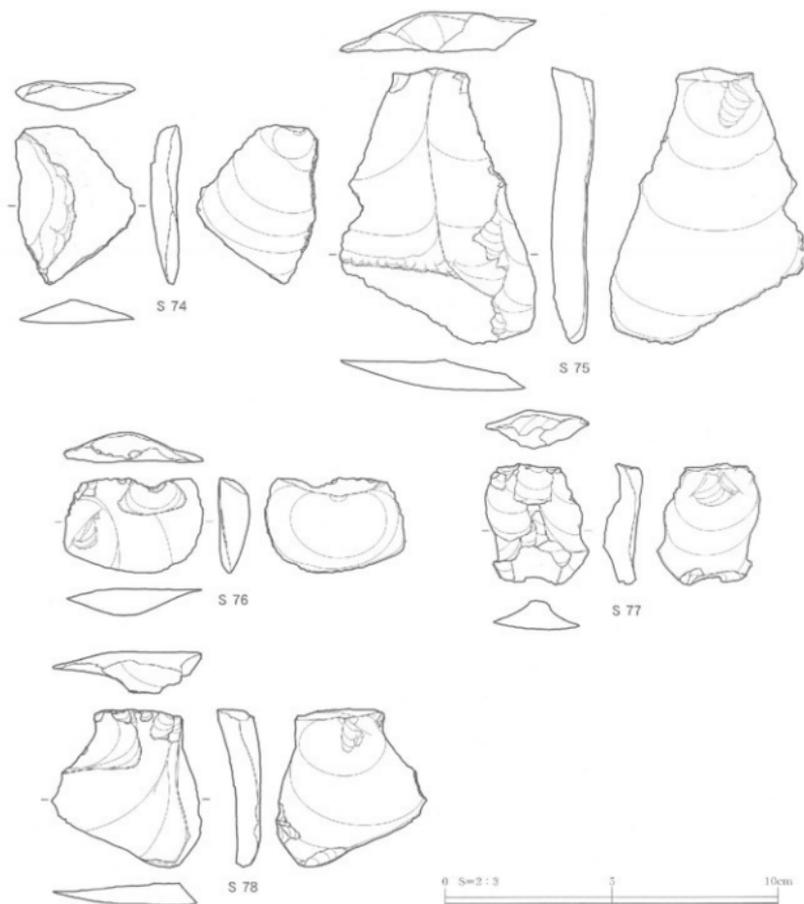
第61図 遺物集中区 出土遺物 (1)



第62図 遺物集中区 出土遺物(2)



第63図 遺物集中区 出土遺物 (3)



第64図 遺物集中区 出土遺物(4)

(7) 旧河道 (第66~68図、写真図版27・48・61)

調査区南端で、東西方向に伸びる旧河道を検出した。

〈位置〉調査区南端、旧河道自体は南側は第24次調査区へ、また東側は第29次調査区へと伸びる。
 〈検出状況〉調査区南端で、黒褐色粘土層の広がりを確認した。黒褐色粘土層の範囲を中心にトレンチを入れたところ、トレンチ断面の上層は粘土層とシルト層、またラミナを形成する砂層とが交互に堆積している様相が確認できた。これらは第24次調査区も含め、東西方向いずれの箇所のトレンチが



第65図 遺物集中区 出土遺物（5）

第21表 土器観察表 遺物集中区

探検番号	埋没番号	出土位置	器種	分類	検出状況	外面文様	内面文様・調査	外面再調査 内面再調査	出土	個人集	備考
138	47	3N17c	陶片	A 1	口縁1/4	青：青汗、口：沈線 刷：L.R.線、刷	口：ナラ	北の川 北の川	砂、灰	A	
139	47	3N19f	陶片	A 1	口縁部片	青：青汗、口：沈線 刷：L.R.線	口：沈線	北の川 北の川	砂、灰	A	
140	47	3N19f	陶片	A 1	口縁部片	青：青汗、口：沈線 刷：L.R.線	口：ナラ	北の川 北の川	砂、灰	A	
141	47	3N18f	鉢	D 2	口縁部片	青：A.黄緑、小灰緑 口：沈線、刷：L.R.線	口：沈線 口：刷：L.R.線	北の川 北の川	灰	C	
142	47	3N18e	鉢	F 1	口縁部片	青：A.黄緑 口：沈線、刷：L.R.線	口：沈線	北の川	砂	C	
143	47	3N17e	甕	a	口縁部片	口：隆帯、ミガキ	口：沈線、ミガキ	北の川 北の川	灰	C	144と同一個体
144	47	3N17c	甕	B	胴部片	刷：工字文、L.R.線	刷：ナラ	北の川 北の川	灰	C	
145	47	3N18e	片口器	-	底部	口：D.黄緑、刷：青染文 刷：沈線文、L.R.線	口：ミガキ	北の川	砂	C	口径0.39f
146	47	3N18f	陶片	-	胴一底1/5	刷：L.R.線、刷	-	北の川	砂、灰	A	
147	47	3N17e	陶片	C	口一胴1/4	口：工字文、刷：ミガキ	口：刷：ミガキ	北の川 北の川	灰	C	口径0.39f
148	47	3N18e	陶片	A 3	胴一底	刷：工字文+L.R.線 刷：刷	刷：ナラ	北の川 北の川	灰	C	
149	47	3N20f	鉢	-	口一底	刷：L.R.線、沈線	-	北の川 北の川	砂、灰	A	

第22表 石器観察表 遺物集中区

探検番号	埋没番号	器種	器種	分類	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	断面形状	検出状況	備考	
S67	60	石鏃	3N18c	3 類	赤鉄片	26.09	32.72	7.32	2.19	47	蓋状		
S68	60	石鏃	3N17e	1 a 類	赤色岩	34.99	45.30	9.21	11.38	-	底部	横断面13.31mm	
S69	60	石鏃	3N18f	-	赤	2	106.38	66.78	91.64	423.82	-	底部	自然曲線
S70	61	鹿角器	3N19e	A 類	安山石	193.00	113.64	17.29	253.57	-	底部		
S71	61	鹿角器	3N19c	A 類	火山岩	367.94	87.68	60.19	499.03	-	1/2 欠損		
S72	62	石鏃	3N18f	B 2 類	河石	39.85	39.18	22.11	31.77	-	-		
S73	61	石鏃	3N19g	B 2 類	赤	45.61	94.71	15.06	170.52	-	-	自然曲線	
S74	61	リフレイク	3N19f	A 2 類	河石	43.39	33.51	8.07	10.98	-	-		
S75	61	リフレイク	3N19f	D 2 類	赤	2	83.20	55.63	11.96	37.75	-	-	
S76	61	リフレイク	3N19g	A 3 類	河石	1	27.40	39.70	8.74	9.34	-	-	
S77	61	リフレイク	3N18f	-	河石	1	31.20	26.71	6.77	8.32	-	-	
S78	61	リフレイク	3N17e	-	河石	1	47.55	44.66	10.13	17.12	-	-	
S79	68	石山	3N17c	-	河石	1	201.00	221.00	102.31	2972.42	-	底部	

らも見受けられる。また、検出面から約150cm掘り下げた段階で、水が湧きはじめ、これらの事象から旧河道と判断した。

〈平面形・規模〉調査区南端を東西に横断しており、両端は調査区外に及んでいる。幅は約10mを測り、深さは110～160cmである。

〈堆積土〉堆積土は第24次調査分も合わせ、まず色調、土質から大きく4層に分かれ、また各層を混入物などにより細分できる。1層は黒褐色粘土～灰色シルトを主体とする層で、約30cm堆積している。層上位から十和田Aテフラと考えられる火山灰が検出している。火山灰はブロック状で少量、層中に混入するのみである。二次堆積と考えられる。2層は黄灰色粘土層であり、約10cmの堆積で薄い。3層は黒褐色シルト層で約50cm堆積する。第24次調査区ではこの層より、土師器片が出土し、また動植物遺体や木製品が多数出土した。4層は暗灰黄色～暗褐色シルトを主体とし、約30cm堆積する。層中から縄文時代晩期後葉の遺物が出土しており、また動植物遺体が出土している。

〈遺物〉旧河道は第26次調査区から、第24次調査区にまたがっており、3層中から古代の遺物が、また4層中からは縄文時代晩期の遺物が出土している。ただし第26次調査区においては、3層中出上で

は、図示できる遺物がなく、4層中から出土した遺物17点のみを図示した。4層中からは土器が603点(8.9kg)出土しているが、小片が多い。出土土器の時期は、概ね竪穴住居跡などに伴う土器と同時期に比定されるものである。150～155は深鉢の口縁部片である。150、151、153、154はA類に相当する。いずれにも口唇部とその直下の口縁部に指頭による圧痕が巡る。152はC類に相当し、口唇部に棒状工具による押圧が巡る。155はB類の口縁部片で、口唇部に刻みが巡る。このように、口唇部から直下の口縁部にかけて3種の手法による文様がみられる。157～158は鉢である。いずれも小片である。157は口唇部に突起が付く。159～162、166は浅鉢である。160は口唇部に突起が付き、胴部には工字文が施される。161、162、166は同一個体と思われる口縁部片で、口唇部に4単位と思われる円形の突起が付き、口縁部には工字文が巡る。胴部にはLR縄文が施される。156、163～165は壺である。156は口縁部がすばまる形態で胴部には磨消縄文が施される。163、164は口縁部に工字文が巡る。165は胴部片で、浮線手法による工字文が数段にわたり巡る。

4層中からは、縄文土器に伴い、石器が出土している。ツール類では不定形石器3点、打製石斧1点、敲磨器類7点、石皿類8点、不明石器2点、また石核3点、フリイク58点(そのうち1点はRフリイク)が見ついている。5点を図示した。S80、81は敲磨器類である。両面において、S80は凹痕が、S81は磨痕がみられた。S82はRフリイクである。縁部部に二次加工痕が見受けられるが不規則で、刃部として作出しているか不明である。S83、84は不明石器としたもので、S83は扁平な棒状を呈し、長辺の側面に、敲打によって形状を整えたような痕跡が見受けられる。S84は一部を欠損しており、先端部に敲打痕が見受けられた。石棒類の可能性もあるが、定かではない。

また、動物遺体では、樹木、堅果類、昆虫類などが見ついている。堅果類、昆虫類は概ね4層中から出土している。なお第24次調査区から出土したものについて、自然化学分析を行っており、その結果、堅果類ではオニグルミ、トチノキ、ミズナラ、シキミなど、昆虫類はアオカナブン、アカガネオゴミムシ、ハナムグリなどであることが判明した。また樹木類や木製品は旧河道全体から出土している。出土層は、ほぼ3層中である。一部、4層からも出土しているが、層上位面からの出土であり、おそらく3層中のものが混入したものである。樹木類は出土位置がやや南岸に寄っていることが特徴であり、同じ3層中から出土する土師器などと同時期のものであるならば、隣接する本宮熊堂B遺跡で見つかった古代集落と密接な関係をもつものと思われる。ただ樹木類はほとんど、加工痕跡がみられず、川岸に立てられていた杭材ではないことが判明している。第24次調査区において、加工痕跡のみみられる木製品も少ないながら見ついている。中には径約20cmの樹木に両側から切り込みを入れた木製品なども検出しており、古代集落内の竪穴住居跡で利用された柱材がその廃材の可能性もある。

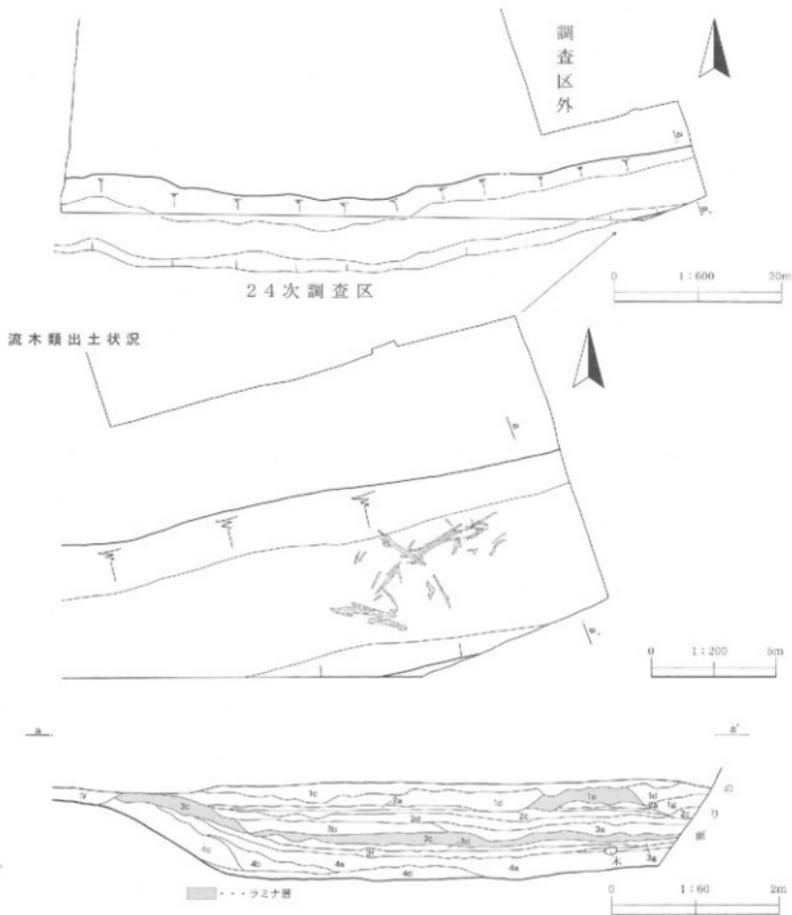
〈時期〉3層、4層から出土した遺物を根拠に時期を判断するならば、旧河道は縄文時代晩期ごろ～古代まで存続していたと考えられる。ただし、河川として機能していたかは定かではなく、水の流れの弱い湿地(沢)であった可能性が高い。(岩埋文470集 第Ⅷ章、Ⅹ章参照)

註：第66図の土層注記は本遺跡の第24次調査(岩埋文470集)に準拠している。

(8) 柱穴群(第69～72図、写真図版24)

調査区北西側を中心に、直径10～20cmの円形土坑が193個検出している。それらをここでは、「柱穴」とし、一括して報告する。

柱穴が円形に巡る箇所が4箇所みられ、その周辺で遺物の出土量が多くなる傾向があった(第73、86、87、99、100図参照)。これらの円形に巡る柱穴群は建物であった可能性が考えられるが、精査の

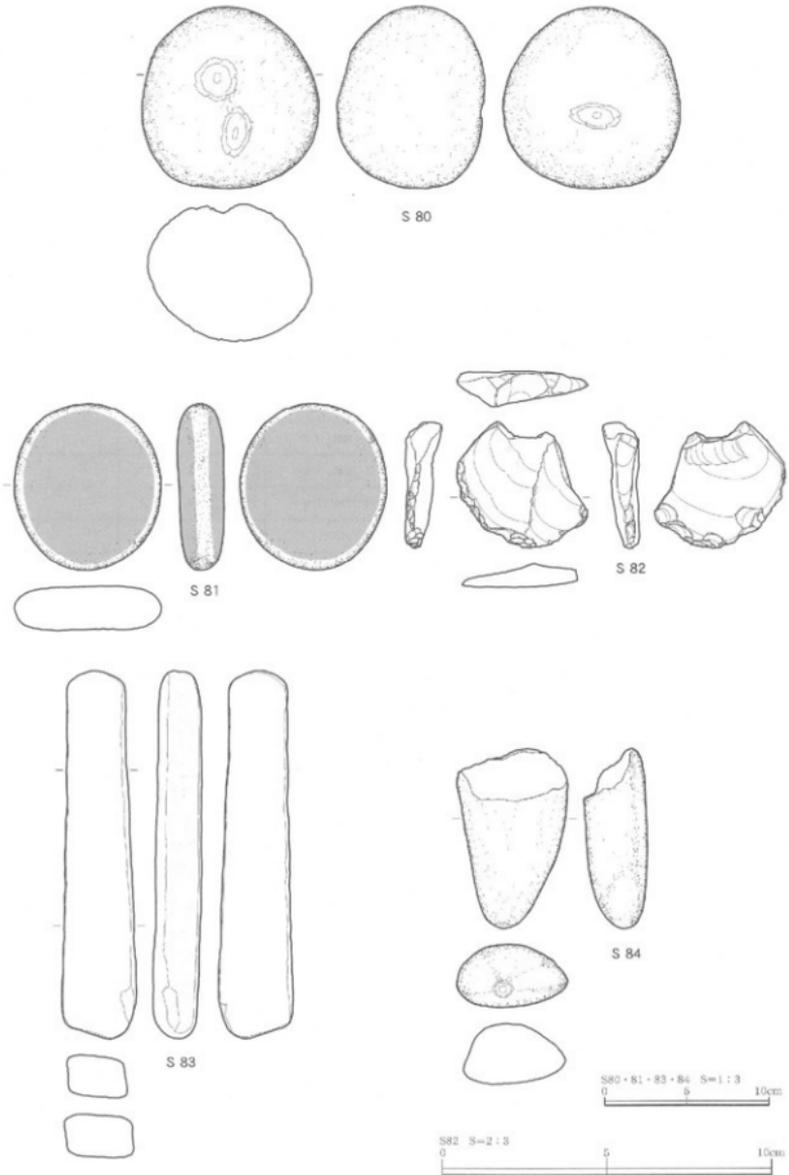


1c	2.5Y5/2	暗褐色土	粘粒質	相より密	炭化物少量含む
1d	2.5Y4/1	黄灰色シルト	粘粒やや密	相よりやや密	明黄褐色細砂・炭化物少量含む
1e	2.5Y4/1	黄灰色シルト	粘粒やや密	相よりやや密	明黄褐色細砂やや多く含むクマシ
1g	2.5Y3/2	灰褐色粘土	粘粒やや密	相より密	明黄褐色細砂・ブロックで少量、炭化物少量含む
2a	2.5Y4/1	黄灰色粘土	粘粒質	相より密	下部に炭化した植物遺体片層在する層
2c	5Y6/2	灰ナリーブ色粘土	粘粒質	相より密	黄灰色粘土を含む
2d	2.5Y4/1	黄灰色粘土	粘粒質	相より密	明黄褐色細砂・炭化物・炭化物少量含む
3a	2.5Y3/1	黒褐色シルト	粘粒質	相よりやや密	明黄褐色細砂・ブロックでやや多く含む
3b	10Y R3/1	黒褐色シルト	粘粒質	相よりやや密	明黄褐色細砂・ブロックでやや多く含む
3c	2.5Y3/2	黒褐色シルト	粘粒質	相よりやや密	明黄褐色細砂多量に含むフナナ層
3d	10Y R3/2	黒褐色シルト	粘粒やや密	相よりやや疎	明黄褐色細砂・ブロックで少量含む
3f	10Y R2/1	黒色シルト	粘粒質	相よりやや密	明黄褐色細砂・炭化物少量を含む
3g	10Y R2/1	黒色シルト	粘粒やや密	相より密	炭化物遺体少量、径約5mmの炭化物
4a	10Y R3/3	暗ナリーブ褐色シルト	粘粒やや密	相よりやや密	粘粒質多量多量、土層少量含む
4b	10Y R3/2	暗褐色シルト	粘粒質	相より密	灰色細砂・ブロックで少量、炭化物少量含む
4c	10Y R3/1	黒褐色シルト	粘粒やや密	相よりやや密	炭化物少量含む
4d	10Y R3/4	暗褐色シルト	粘粒やや密	相よりやや密	炭化物少量、植物遺体多量含む(4aに類似)

第66図 旧河道



第67図 旧河道 出土遺物(1)



第68図 旧河道 出土遺物(2)

第23表 土器観察表 旧河道（第26次分）

調査番号	可図番号	層位	形状	分類	残存部位	外周文様	内周文様・調整	外壁色層 与面取具	胎土	泥入量	備考
S50	48	4層	鉢状	A1	口縁部片	帯：丹土 口：沈線片	口：ナデ	灰白色層 に白い黄砂	砂・長	B	
S51	48	4層	鉢状	A1	口縁部片	帯：丹土 口：沈線片	口：ナデ	灰白色層 に白い黄砂	砂・長	A	
S52	48	4層下位	鉢状	C1	口縁1/5	帯：丹土 口：L.R.斜	口：斜：ナデ	黒褐色層	砂・長	B	内外面に灰化物付着
S53	48	4層下位	鉢状	A	口縁部片	口：沈線 口：L.R.横	口：ナデ	灰白色層 に白い黄砂	砂・長	A	
S54	48	4層下位	鉢状	A1	口縁1/6	帯：丹土 口：沈線片 口：L.R.斜	口：斜：ナデ	灰白色層 に白い黄砂	砂・長	A	
S55	48	4層下位	鉢状	B1	口縁部片	帯：丹土 口：沈線	口：沈線、ナデ	黒褐色層	砂・長	B	
S56	48	4層下位	鉢状	A	口縁部片	帯：丹土 (4層位)、丹土 口：L.R.斜 口：L.R.横	口：沈線2条、ミガキ 斜：ナデ	黒褐色層	砂	C	
S57	48	4層下位	鉢状	F	口縁部片	帯：丹土、沈線	口：沈線	黒褐色層	長	C	
S58	48	4層下位	鉢状	D	口縁部片	帯：沈線、L.R.斜、赤土	口：ミガキ	黒褐色層	砂	C	
S59	48	4層下位	鉢状	D	口縁部片	帯：沈線、赤土	口：ナデ	黒褐色層 に白い黄砂	砂	C	
S60	48	4層下位	鉢状	B	口縁部片	帯：丹土、沈線 口：十字文	口：沈線、ミガキ	黒褐色層	砂	C	
S61	48	4層下位	鉢状	C3	口縁1/3	帯：沈線 口：十字文 帯：L.R.斜	口：沈線、ナデ	黒褐色層	砂	A	
S62	48	4層	鉢状	C3	口縁1/3	帯：丹土 口：十字文 帯：L.R.斜	口：沈線、ミガキ	黒褐色層 に白い黄砂	砂・長	A	
S63	48	4層下位	鉢状	b	口縁部片	帯：丹土 口：十字文、ミガキ	口：沈線、ミガキ	黒褐色層 に白い黄砂	砂	C	
S64	48	4層下位	鉢状	a	口縁部片	口：十字文、ミガキ	口：ミガキ	黒褐色層	砂	C	
S65	48	4層下位	鉢状	B2	口縁部片	帯：十字文	口：ミガキ	黒褐色層 に白い黄砂	砂・長	C	
S66	48	4層下位	鉢状	C3	口縁1/5	帯：丹土、沈線 口：十字文、斜：L.R.横	口：沈線、ミガキ	黒褐色層 に白い黄砂	砂・長	A	

第24表 石器観察表 旧河道（第26次分）

調査番号	可図番号	形状	層位	分類	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先端角度(°)	残存状態	備考
S80	61	自然磨蝕	4層下位	A類	安山岩	101.45	68.63	26.36	327.22	—	完整	
S81	61	自然磨蝕	4層下位	B類	安山岩	109.11	106.86	86.48	980.96	—	完整	
S82	61	人工打製	4層下位	—	安山岩	37.70	41.83	9.42	12.71	—	—	
S83	61	不明石器	4層	—	頁岩	225.00	44.60	23.78	467.82	—	完整	
S84	61	不明石器	4層下位	—	閃緑岩	109.74	68.11	39.69	313.56	—	完整	

段階で掘り込み面を気づかずに削平してしまったか、あるいは元々、掘り込みの存在しない遺構であったか等、様々な推定はできるが、今回は堅穴住居跡などの遺構として断定せず、建物跡としての可能性を示唆するにとどめる。

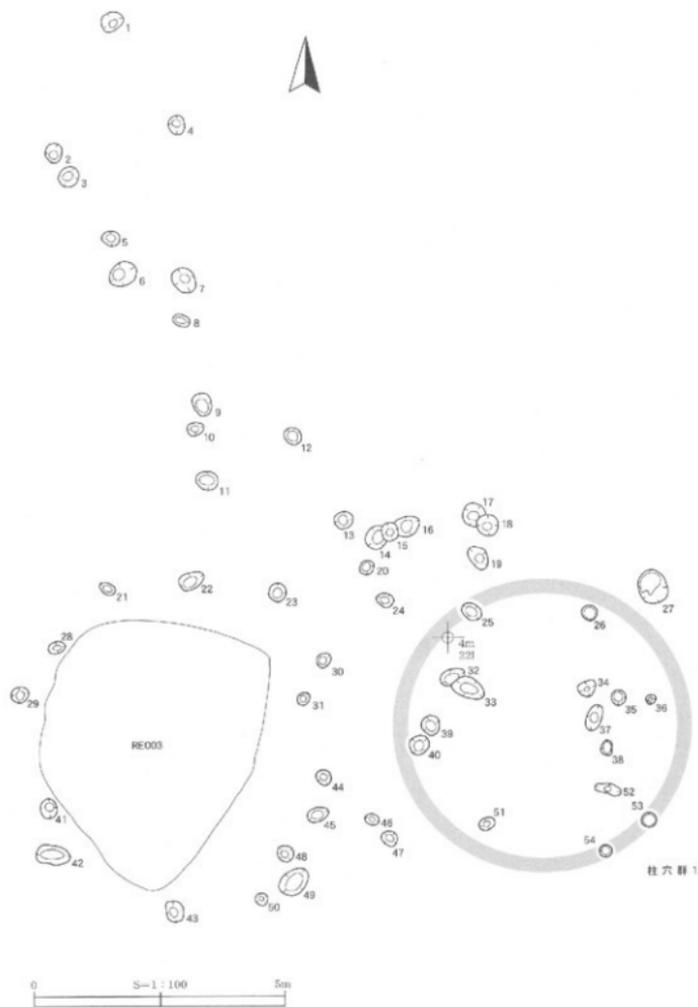
〈出土位置〉調査区北西部を中心に、4 M14m~4 M14t グリッド付近、4 M24o グリッド付近また R E 003 周辺に集中する傾向が見られる。

〈検出状況〉V a 層に黒褐色シルトの広がりと確認した。

〈平面形・規模〉平面形はほとんどが円形を呈し、直径は30~40cmのものが多い。深さは平均で17cm、最も深いもので36cmを測る。

〈堆積上〉黒褐色シルトを主体とする単層である。

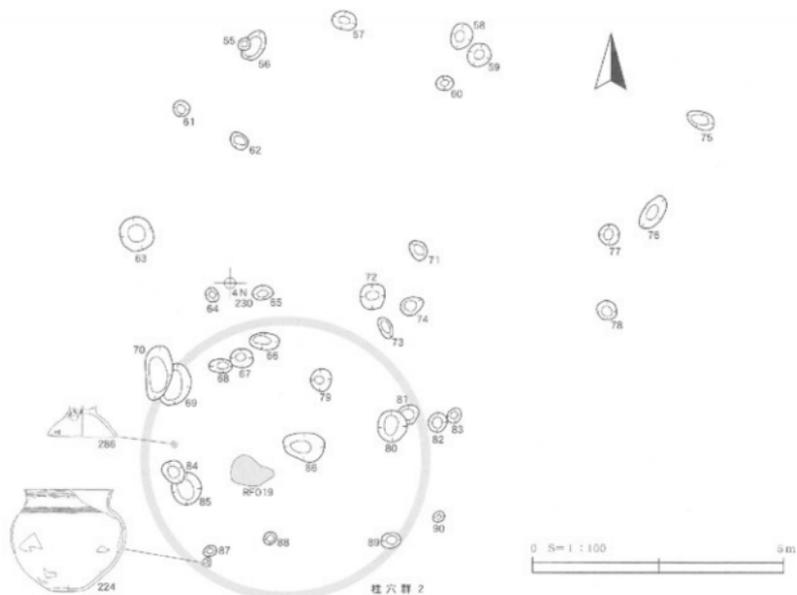
〈建物の可能性〉4 M21j グリッド付近、4 N23o グリッド付近、4 M14n グリッド付近、4 M14s 付近グリッドの4地点で柱穴が円形に並ぶのが確認できた（仮称して「柱穴群1」、「柱穴群2」、「柱穴群3」、「柱穴群4」とする）。前述の通り、4地点付近は遺物の出土量が比較的多い。



第69図 柱穴群(1)

柱穴群1はRE003の東側に隣接する。やや粗雑であるが、10個の柱穴が直径5mの範囲で並んでいる。柱穴の範囲内には別に5個の柱穴が確認された他には、焼土や硬化面は見つかっていない。

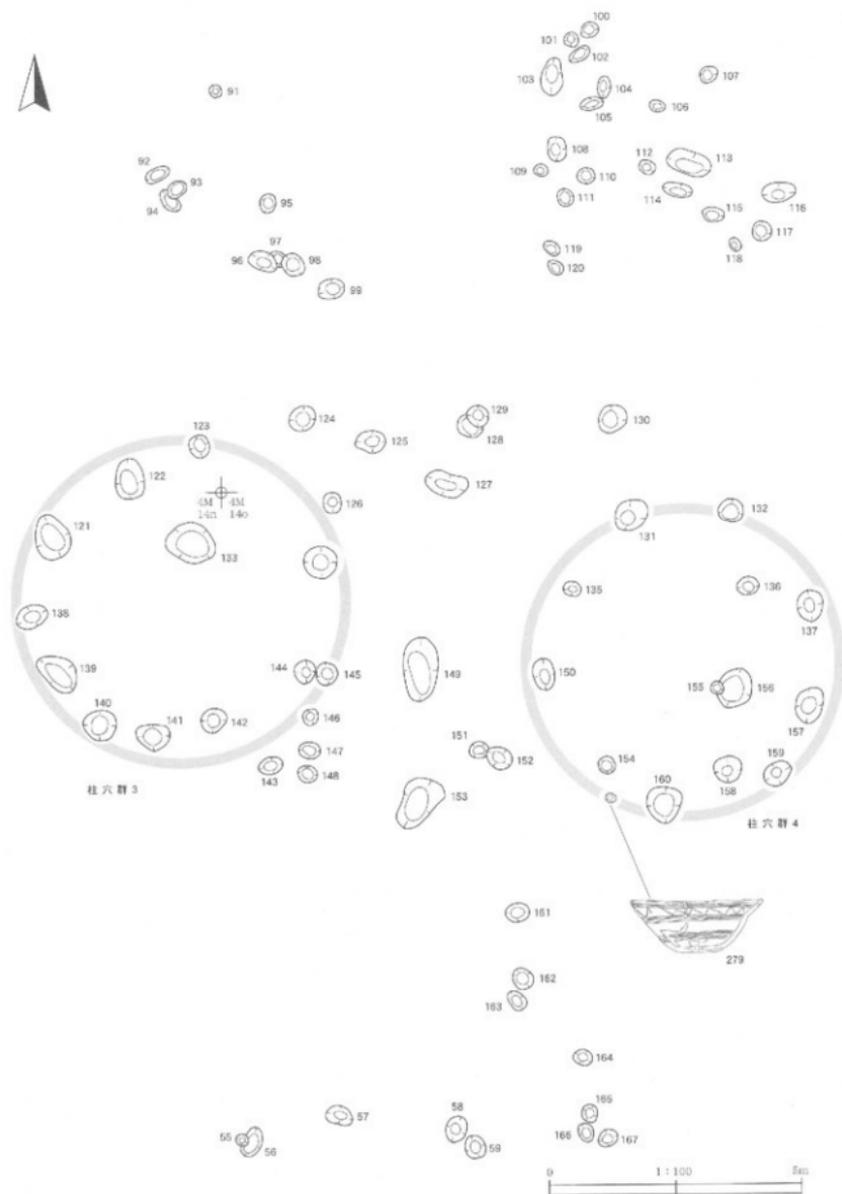
2 検出した遺構・遺物



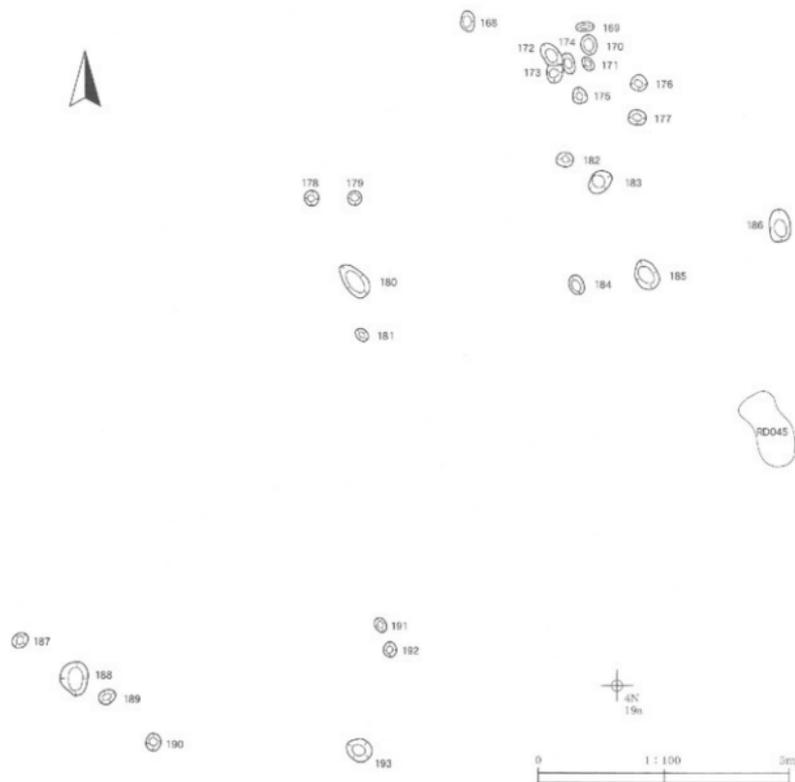
第70図 柱穴群(2)

第25表 柱穴深さ (No.1~No.126)

No	深さ(cm)	No	深さ(cm)								
1	27.7	19	20.0	37	22.1	55	20.8	73	19.9	91	26.9
2	9.5	20	12.1	38	11.6	56	8.6	74	22.0	92	14.8
3	20.4	21	10.2	39	11.8	57	9.7	75	12.3	93	16.1
4	28.3	22	2.0	40	22.1	58	18.4	76	22.9	94	15.9
5	18.5	23	9.4	41	7.5	59	8.2	77	14.7	95	17.3
6	17.2	24	17.8	42	22.1	60	8.1	78	10.9	96	17.8
7	21.5	25	17.4	43	21.2	61	16.6	79	20.4	97	13.2
8	21.4	26	0.3	44	26.5	62	15.0	80	19.7	98	15.0
9	13.4	27	17.2	45	13.6	63	14.2	81	6.1	99	21.5
10	12.3	28	12.2	46	14.8	64	9.5	82	20.4	100	18.2
11	13.8	29	15.0	47	13.2	65	21.3	83	12.0	101	29.9
12	13.6	30	11.0	48	18.0	66	16.6	84	18.4	102	7.9
13	14.7	31	27.7	49	16.2	67	8.1	85	14.4	103	31.8
14	14.9	32	13.1	50	13.4	68	10.5	86	15.6	104	22.9
15	27.1	33	9.3	51	16.3	69	25.3	87	17.8	105	22.0
16	17.2	34	17.2	52	21.1	70	14.4	88	10.5	106	14.2
17	10.3	35	17.9	53	9.2	71	18.4	89	9.8	107	17.2
18	15.0	36	10.4	54	10.6	72	16.1	90	11.5	108	14.2
										109	25.3
										110	27.8
										111	24.7
										112	20.2
										113	10.4
										114	16.8
										115	15.1
										116	21.7
										117	27.4
										118	14.9
										119	18.7
										120	19.8
										121	17.3
										122	32.2
										123	16.5
										124	25.0
										125	底なし
										126	底なし



第71図 柱穴群(3)



第72図 柱穴群(4)

第26表 柱穴深さ (No.127~No.193)

No.	深さ (cm)												
127	35.8	137	22.4	147	20.0	157	13.3	167	9.2	177	31.3	187	18.6
128	9.5	138	12.5	148	8.8	158	16.1	168	18.2	178	16.0	188	10.6
129	32.8	139	18.3	149	30.9	159	15.2	169	6.4	179	25.6	189	10.9
130	12.3	140	20.7	150	30.5	160	11.6	170	6.8	180	26.3	190	15.0
131	26.9	141	23.0	151	14.5	161	28.6	171	7.0	181	13.6	191	12.7
132	18.7	142	29.2	152	14.9	162	21.4	172	28.0	182	11.0	192	9.4
133	34.2	143	12.6	153	23.2	163	23.6	173	12.9	183	28.4	193	23.4
134	26.2	144	18.5	154	13.4	164	19.1	174	8.4	184	30.2		
135	8.3	145	29.2	155	16.1	165	12.8	175	9.5	185	13.1		
136	22.2	146	20.6	156	14.6	166	16.0	176	13.4	186	33.6		

柱穴群2は比較的、柱穴の並びが粗雑である。12個の柱穴が直径5mの範囲で円形に並んでいる。柱穴の範囲内から1個の柱穴が見つかった他、R F 019が位置している。R F 019は今回、単独の焼土遺構として扱っているが、柱穴群2に伴う付属施設(炉)の可能性も考えられる。

柱穴群3は11個の柱穴が直径6.5mの範囲で円形に並んでいる。並んだ柱穴範囲内から柱穴1基を確認したが、炉などは見つかっていない。また検出面上に硬化した面は見受けられなかった。

柱穴群4は柱穴群1の東側で隣接する。10個の柱穴が直径6.5mの範囲で並んでいる。柱穴の範囲内には3個の柱穴が確認されたが、炉や硬化面などは見受けられない。

その他にも柱穴が集中する場所が見受けられたが、柱穴の並びに規則性が見いだせなかった。

柱穴はR E 001、003の周辺でも遺構を囲うように巡っているものを確認しており、これらの柱穴の堆積土も黒褐色シルトである。柱穴群と同様の様相を呈するものであることを考えると、堅穴状遺構のような掘り込みを有するか、そうでないかの違いであり、柱穴群1～4も建物の可能性は高いものと考えられる。

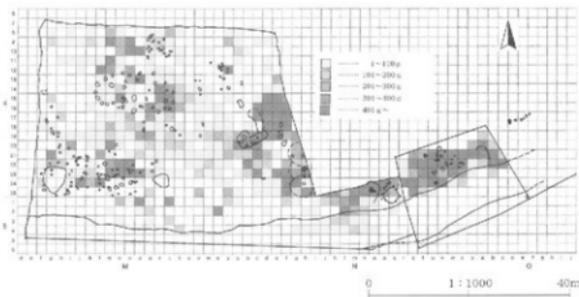
(9) 遺構外出土遺物

縄文・弥生土器(第73～82図、写真図版49～55)

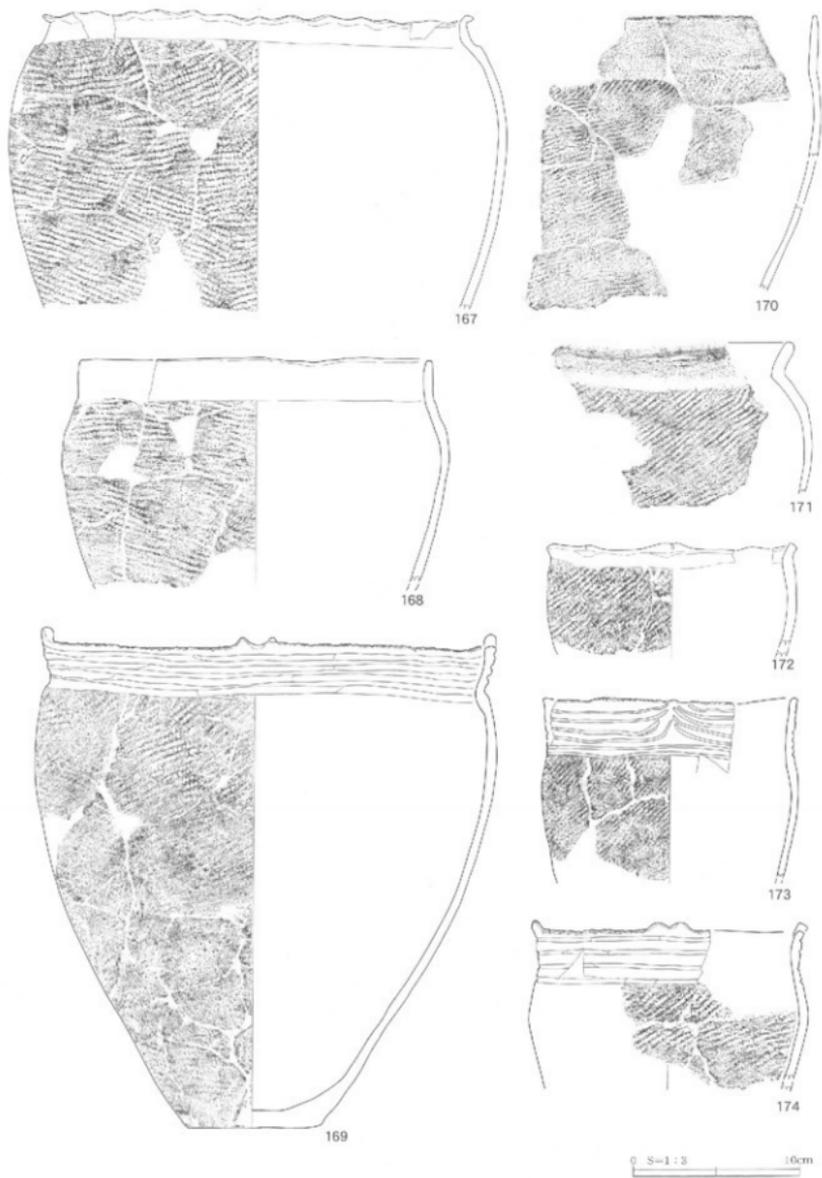
遺構外から9,757点(93.1kg)の縄文土器、弥生土器が出土している^(註)。出土層位はIV層である。出土分布は第73図に示したとおりであるが、堅穴住居跡や堅穴状遺構が集中する調査区東端部で集中的に土器が出土している。また特に遺物集中区とした4 N 16 f～19 gグリッド付近ではいずれのグリッドからも400gを超える土器が出土している。その他、柱穴群が位置する、4 M 23 o～24 qグリッド付近や4 M 15 s～17 tグリッド付近でも1グリッドあたり400gを超える土器が出土している。

出土した土器のうち、121点を図示した。167～190は深鉢である。深鉢は出土土器の器種組成の中で最も多い器種である。169、173、174、178～184はA類に相当する。169は口唇部に4単位のB突起が付き、また細かい刻みが巡る。173は口唇部に刻みが巡り、口縁部に横線で巡る沈線は口唇部へと直上する。174は169と同様の文様構成をなすが、頸部のくびれがやや弱い。181、184は大形の破片であるが、どちらも口唇部に工具による押圧が施される。形態はやや頸部のくびれが弱い。167、168、170～172、175～177、186はC類に相当する。167は口唇部が指頭による押圧が巡り、頸部には段を有する。168、170、171は口唇部が平縁を呈する。171は頸部のくびれが明瞭である。172は口唇部が波状を呈し、頂部に刻みが入る。175～177は小片で、形態は不明である。176には口縁部下に沈線が巡る。185、188はD類に相当する。185は口径が広く、鉢に近い形態である。口縁部から底部までL R縄文のみ施文される。188は口縁部に浅い沈線が2条巡り、その上からL R縄文を施文している。

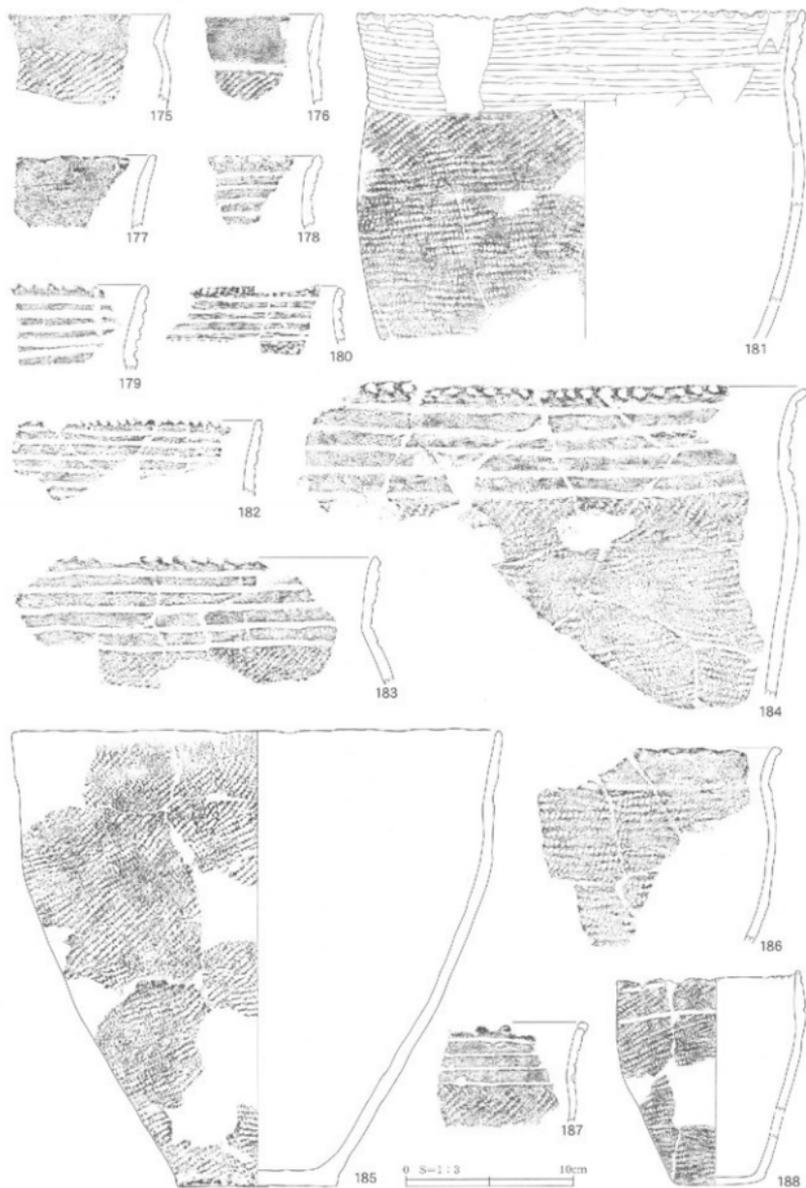
191～214は鉢である。191、193はB類に相当する。L Rの縄文を施文後、工字文を描いている。



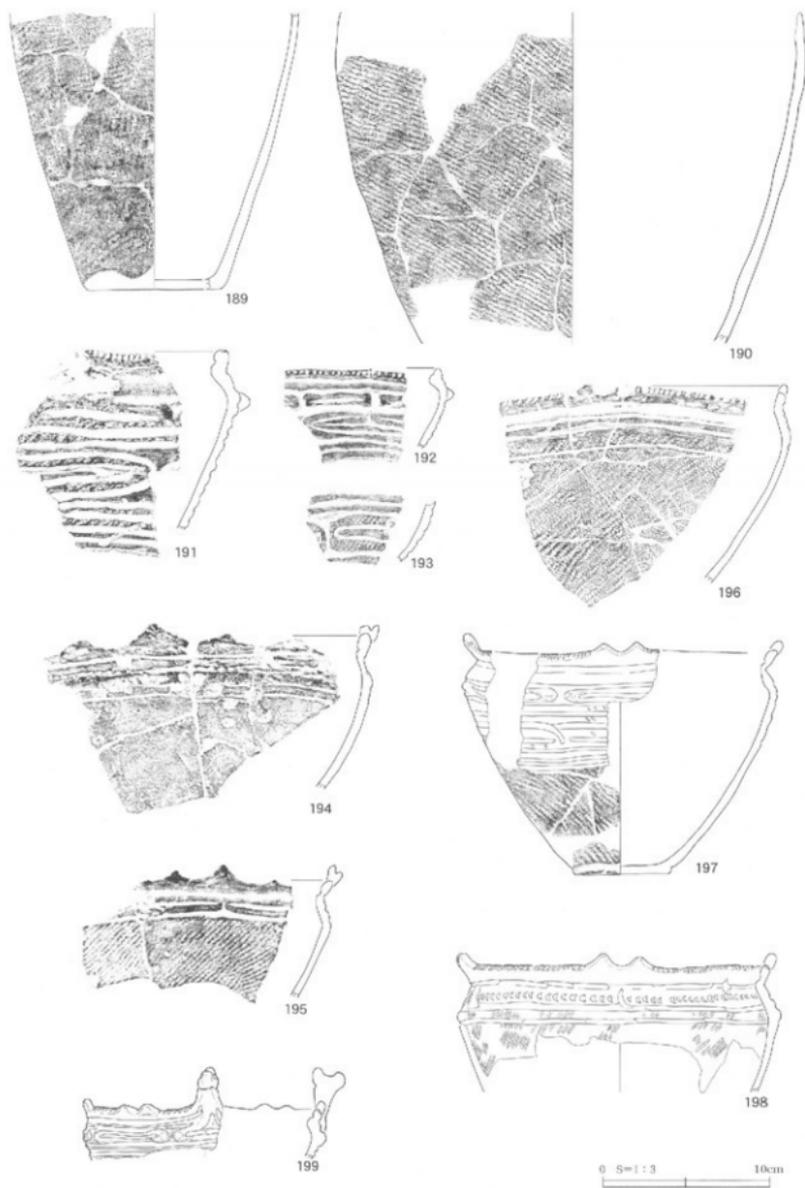
第73図 遺構外出土土器分布図



第74図 遺構外出土器(1)



第75図 遺構外出土土器(2)



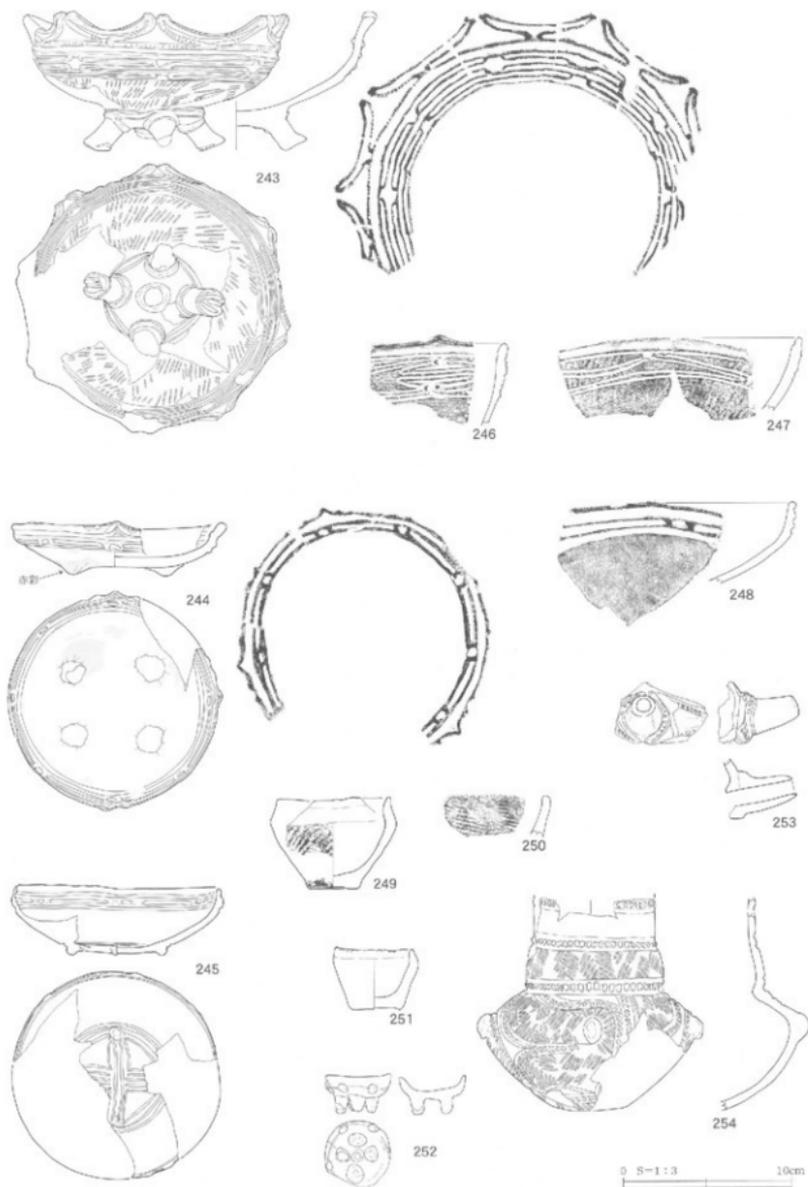
第76図 遺構外出土土器(3)



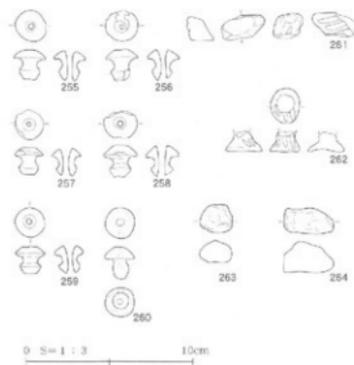
第77図 遺構外出土土器(4)



第78図 遺構外出土器(5)



第79図 遺構外出土土器(6)



第80図 遺構外出土土器(7)

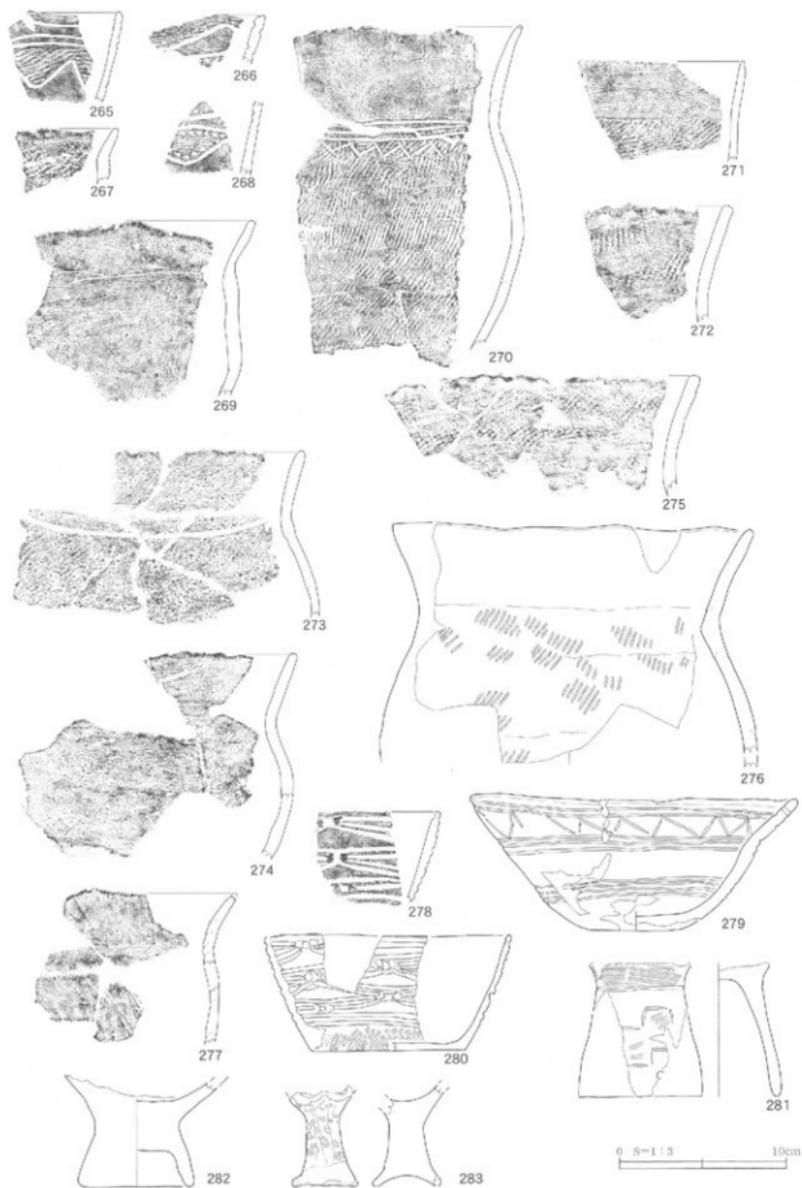
197、199はC類に相当する。197は口唇部に4単位のB突起が付き、その間を刻みが巡る。199は大突起が1単位で付き、その間をB突起と刻みが巡る。194、195、196、198、203、207~209、212はD類に相当する。口縁部にみられる文様は、沈線で「凸」字状を描き、その上に刺突が横位に連続する文様(194、198、207、209)、また「凸」字状を描く沈線文の上に横位の沈線が1条巡る文様(195、196)、あるいは「凸」字状の文様がなく横位の沈線のみが2条巡る文様(203、208)の3パターン確認できる。200、201、206はE類に相当し、所謂「特殊工字文」が施文される。

215~229は壺である。破片が多く、形態などの全容が分かるものは少ない。215は口縁部が欠損しているが、胴部には浮線手法による工字文が巡り、底面には短い四脚が付く。216は口縁部片で、口唇部に1単位のA突起とその両脇にB突起が付く。217は口唇部が平縁を呈し、口縁部にはB突起が付く。胴部は無文である。219、220は口縁部片で、隆帯による匹字文が付く。224はD類に相当し、口唇部には刻みが、口縁部と頸部下に匹字文が巡る。227もD類に相当する。口唇部は波状を呈し、口縁部に工字文が施文される。胴部にはL R斜縄文が施文される。229は口縁部片であるが、228とほぼ同様の文様であると思われる。

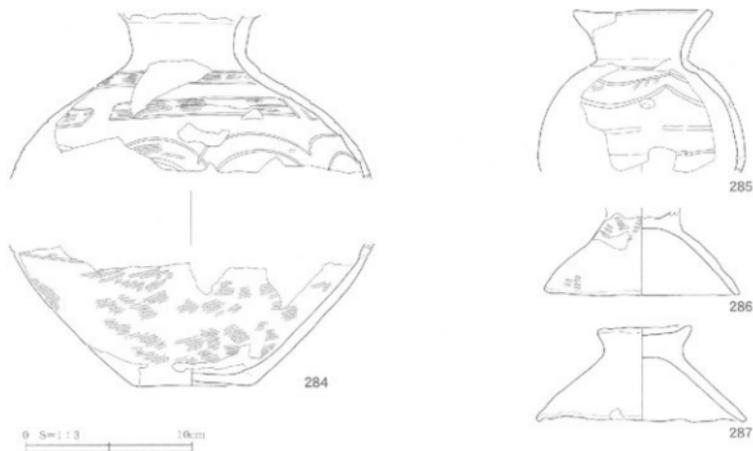
192、230~248は浅鉢である。230~236、239、240はF 1類に相当する。230~236はほぼ同じ文様で、口唇部に4単位のA突起とその間にB突起が付く。239、240は口唇部は平縁を呈し、口縁部に4単位のB突起が付く。234はB類で口唇部にA突起とB突起が交互に付き、胴部には工字文が施文される。235はA類で、L R縄文を施文後、沈線による工字文を施文している。236はB類で、工字文施文後に口縁部にB突起を貼り付けている。237は口唇部にB突起が付き、口~胴部には変形工字文が施文される。242は2類とした台付浅鉢の台部で、浮線手法による工字文が台全体に描かれている。243はB 3類で、巻頭写真の「獣脚付浅鉢」と仮称したものである。4 N24 o グリッドから底部~脚が出土したが、残りの部分は破片で周辺グリッドから出土している。口唇部は8単位の波状口縁を呈する。口縁部には浮線手法による匹字文を施文し、胴部にはL R斜縄文を巡らす。底部は台状に厚みをもち、4単位の脚が付く。脚の底面には沈線により、獣の蹄を思わせるような文様が施文される。四脚のうち、二脚は欠損しているが、四脚全て同様の文様が施文されていたものと思われる。244はC類で、口徑に対し、高さが低く、皿状を呈する。底面に短い四脚が付いている。欠損しており、明確には分からないが、4単位であろうと思われる。脚は244で残存する脚部と比べ、非常に小さい。また、底面には沈線により円形と十字を表した文様が描かれている。247はE類に相当し、L R縄文を施文後、沈線による変形工字文が口縁部を巡る。

249~252はミニチュア土器である。249、251は鉢を模している。口縁部付近で内側に屈曲し、249は胴部にL R縄文、251は口唇部に刻みをつけられる。252は浅鉢を模しており、胴部に突起が貼り付き、底面には4単位の脚が付く。

253、254は注口土器である。254は本遺跡出土の土器で、唯一、後期に比定される。



第81図 遺構外出土土器(8)



第82図 遺構外出土土器(9)

255～260は耳栓である。出土位置は調査区東端の遺物集中区や竪穴住居跡が位置する箇所集中する。形態は全て同じもので、金子昭彦氏の分類「C2ネジ形」に比定されるものである(金子2006)。ほとんどが中央部に穿孔が認められるが、260は両端が凹むのみで、穿孔されていない。また凹んだ部分も含めて全面に朱が塗られている。

261、262は土製品である。小片であるが土偶の一部と考えられる。どちらも沈線による文様が施文される。262は形態から跗の可能性が高い。

263、264は粘土塊である。

265～287は弥生土器である。出土位置の傾向はRE001の周辺と調査区西側に多く分布する。ほとんどが破片資料であり、全容の分かるものは少ない。ただし、279の浅鉢は完形で、検出面上で逆位の状態で出土した。また287の蓋も完形である。

265～277は壺である。265は口縁部に沈線により波状の区画が施され、区画内に斜縄文が充填される。266も沈線により波状文が描かれ、口端部に斜縄文が施文される。268は沈線による区画内に斜縄文の他に刺突が充填する。270は頸部にペン先状の工具による3条の沈線文と鋸歯文が巡り、胴部にはLR縄文が施文される。272、275はやや厚みのある口縁部にLR縄文が横位に施文される。276は胴部にLR縄文が施文される。

278～280は浅鉢である。278、280は逆台形の形態で口縁部から胴部にかけて変形工字文が連続する。279はほぼ完形で、「柱穴群4」の周辺から逆位の状態で出土した(第71図)。底部は安定の悪い丸底で、口縁部に向け、外へとほぼ直線的に広がる形態である。口縁部に細い工具による、沈線と鋸歯文が巡る。また胴部にも4条の沈線が横位に巡る。

281～283は高坏であるが、見つかったのは高台部分で、形態全体が分かるものはない。281は底部に向けて外へと広がる形態で、磨滅が激しいものの、沈線による方形区画と区画内に斜縄文が施文される。283は縦方向へのケズリ(?)による成形痕が認められ、その上からLR縄文が施文される。

284、285は壺である。284は口縁部と底部は復元できたものの、胴部の一部が欠損しており、接合しなかった。頸部から胴部上半にかけて、方形や波状に区画され、区画内にL・R縄文が施文される。L・R縄文は胴部下半から底部にかけてにも施文される。285はやや小形の壺で、口縁部は反外気味に立ち上がる。磨減が激しく、文様が定かではないが、概ね284に類似した文様であるものと思われる。胴部上半に穿孔しようとして途中でやめたような痕跡が認められる。

286、287は蓋である。286は「柱穴群2」の周辺から出土した(第70図)。上部が欠損しているが、L・R縄文が施文されている。287は無文である。

〈注〉RG054は古代の溝であるが、縄文時代の包含層を切り込んで構築されており、そのため堆積上中から縄文土器、石器が出土している。これらに関しては、遺構に伴うものとは見なさず、遺構外出土遺物とした。

第27表 土器観察表 遺構外(第26次分)

図録番号	原図番号	出土位置	層位	器種	分類	形状・寸法	外面文様	内面文様・調整	外面色別・内面色別	出土	個人	備考
167	49	4 M 2 t	IV層下位	深鉢	C 3	コ-胴	帯: 押圧 製: L・R縦	口~胴上: ケズリ・ナデ?	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	B	
168	49	4 M 2 l o	IV層	深鉢	C 1	コ-胴 1/3	製: L・R縦	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	
169	49	4 N 25 p	IV層	深鉢	A 2	鳩堂形	帯: B突起(4稜状)、筋み 11: 沈線(4) 製: L・R縦	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 黒	砂	A	容重10.40g
170	53	4 M 22 m	IV層	深鉢	C 1	口~胴 1/5	帯: L・R縦	口~胴: ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・長	A	
171	53	4 N 22 b	IV層	深鉢	C 1	口~胴 1/5	帯: L・R横	口~胴: ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・長	A	
172	49	5 N 1 p	IV層	深鉢	C 2	口~胴 1/3	帯: 突起 製: L・R横	口~胴上: ナデ	黒 黒	砂・長	A	
173	49	4 M 19 s	IV層	深鉢	A 2	口~胴 1/2	帯: 筋み 11: 沈線(5) 製: L・R横	口~胴: ナデ	灰黄褐色 黒	砂・長	A	外周: 灰化物付着
174	49	4 M 20 r	IV層	深鉢	A 2	口~胴 1/3	帯: B突起(4稜状)、筋み 11: 沈線(4) 製: L・R横	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 黒	砂・長	A	内面に灰化物付着
175	53	4 N 24 p	IV層	深鉢	C 1	口縁部 片	帯: L・R横	口: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
176	53	4 M 23 p	IV層上位	深鉢	C 1	口縁部 片	帯: 沈線 製: L・R横	口: ナデ	灰白 灰黄	砂・長	A	
177	53	4 M 21 o	IV層	深鉢	C 1	口縁部 片	帯: 押圧	口: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・赤	B	
178	53	5 N 1 m	IV層	深鉢	A 1	口縁部 片	帯: 押圧 口: 沈線(6)	口: ナデ?	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	B	アスファルト付着
179	53	4 M 21 u	IV層	深鉢	A 1	口縁部 片	帯: 押圧 11: 沈線(5)	口: ナデ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	砂・赤	B	
180	53	5 N 21 d	IV層	深鉢	A 1	口縁部 片	帯: 筋み 口: 沈線(5)	口: ナデ	黒褐色 黒	長	B	
181	49	4 N 24 c	IV層	深鉢	A 2	口~胴 2/3	帯: 押圧 口: 沈線(4) 製: L・R縦、筋	口: 沈線口~胴上: ケズリ・ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	B	
182	53	4 M 21 n	IV層	深鉢	A 1	口縁部 片	帯: 押圧 11: 沈線(6)	口: ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	砂	A	
183	53	4 N 21 d	IV層	深鉢	A 1	口~胴 1/5	帯: 押圧 11: 沈線(5) 製: L・R横	口~胴: ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	砂	A	
184	53	5 M 2 q	IV層	深鉢	A 1	口~胴 1/5	帯: 押圧 口: 沈線(5) 製: L・R横、筋	口~胴: ナデ	黒褐色 黒	砂・長	A	
185	49	4 N 25 p	IV層	深鉢	D 2	口~胴 2/3	帯: L・R横	口~胴: ケズリ ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	容重10.70g
186	53	4 M 25 e	柱穴2	深鉢	C 3	口~胴 1/3	帯: 押圧 製: L・R縦	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
187	53	4 M 22 q	IV層	深鉢	A	口縁部 片	帯: B突起、筋み 口: 沈線 製: L・R横	口: ナデ	黒褐色 黒	砂・長	B	内面に灰化物付着
188	50	4 N 24 i	IV層	深鉢	D 2	鳩堂形	帯: 筋み 11: L・R横→沈線 製: L・R横、筋	口~胴: ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	C	容重0.67g
189	30	4 N 21 i	IV層	深鉢	-	帯~底	胴下: L・R横、筋	胴下: ナデ	浅黄 にぶい黄褐色	砂・長	A	
190	30	4 M 14 q	IV層	深鉢	-	灰黄片	胴: L・R縦	胴: ナデ	黒 黒	砂	B	

掲載 番号	写 真 番号	用 紙 品 名	品 位	製 作 種 別	分 類	検 出 部 位	外部文様	内部文様・調整	外部色調 内部色調	船 主	承 入 番	備 考
191	53	4 N21 p	IV層	洋紙	R 2	印刷部 片	帯: 刷込 口: 刷: 工字文+LR横	口: 沈緑、ミガキ	黒色 灰黄帯	黒	B	内面に炭化物付着
192	53	4 N25 k	IV層	洋紙	B	印刷部 片	帯: 刷込 口: 刷: 工字文	口: 沈緑、ミガキ	黒色 黒底	白	C	内面に炭化物付着
193	53	4 N16 f	IV層	洋紙	B	印刷部 片	帯: 工字文+LR横	刷: ナテ	灰黄帯 灰黄帯	砂	B	
194	53	4 N18 f	IV層	洋紙	D 3	印刷部 片	帯: A突起、沈緑 口: 沈緑、刺突	口: 沈緑、ナテ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂	B	
195	53	4 N20 c	IV層	洋紙	D 2	印刷部 片	帯: A突起、沈緑 口: 工字文、刷: LR横	口: 沈緑、ミガキ	黒色 黒底	白	C	内面に炭化物付着
196	33	R G064	洋紙 半上 位	洋紙	D 3	印刷部 片	帯: 刷込、刷込 口: 沈緑、刷: LR横	口: 沈緑 口: 刷: ミガキ	黒色 黒底	黒	C	
197	30	4 N22 c 4 N24 f 4 N24 i 5 N 1 k	IV層	洋紙	C 3	印刷部 片	帯: B突起(4単位)、刷込 口: 工字文、LR横	口: 沈緑 口: 刷: ナテ	黒色 黒底	砂	C	容量: 1.93 l
198	30	4 N16 f 4 N24 i 5 N 1 k	IV層	洋紙	D 2	印刷部 片	帯: B突起(4単位)、刷込 口: 沈緑、刺突、刷: LR横	口: 刷: ナテ、 ミガキ	黒色 黒底	白	C	
199	53	4 N23 q	IV層	洋紙	C 3	印刷部 片	帯: 突起、刷込 口: 突起、工字文	口: 沈緑、ミガキ	黒色 にぶい黒	白	C	
200	50	5 N 1 q	IV層	洋紙	E 3	印刷部 片	帯: 突起、沈緑 口: 刺突、工字文、刷: LR横	口: 刷: ケズリ ミガキ	黒色 にぶい黒	白	C	容量: 1.03 l
201	53	4 M21 a	IV層	洋紙	E 3	印刷部 片	帯: B突起、刷込 工字文、突刺、刷: LR横	口: 刷: ナテ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・長	A	
202	53	5 N 7 w	IV層	洋紙	E 3	印刷部 片	帯: B突起、刷込 工字文、刷: LR横	口: ナテ	灰黄帯 灰黄帯	砂・長	B	
203	53	4 N21 b	IV層	洋紙	D 2	印刷部 片	帯: B突起、刷: LR横	口: ナテ	灰黄帯 にぶい黄緑	砂	A	
204	53	4 M20 x	IV層	洋紙	D	印刷部 片	帯: 刷込、口: 沈緑、刺突 刷: LR横	口: 沈緑	灰黄帯 灰黄帯	砂	C	
205	53	4 M20 x	IV層	洋紙	D	印刷部 片	帯: 刷込 口: 沈緑、刺突	口: 沈緑	灰黄帯 灰黄帯	砂	C	
206	53	4 M20 k	IV層	洋紙	—	印刷部 片	帯: 沈緑、LR横	刷: ナテ	灰黄帯 にぶい黄緑	砂・長	A	
207	54	4 N24 p	IV層 上 位	洋紙	D 2	印刷部 片	帯: B突起、刷込 口: 沈緑、刺突	口: ナテ	黒色 黒底	白	C	内面に炭化物付着
208	54	5 N 3 a	IV層 上 位	洋紙	D	印刷部 片	帯: B突起、刷込 刷: LR横	口: ナテ	黒色 灰黄帯	砂	B	
209	54	4 N21 c	IV層	洋紙	D 2	印刷部 片	帯: 刷込、口: 沈緑、刺突 刷: LR横	口: 沈緑、ミガキ	にぶい黄 黒底	砂	C	容量: 0.44 l
210	54	5 N16 e	IV層	洋紙	D	印刷部 片	帯: 沈緑、刺突 刷: LR横	口: 沈緑、ナテ	黒色 黒底	砂	R	
211	50	4 N17 f	IV層	洋紙	E 3	印刷部 片	帯: B突起、口: 沈緑 刷: LR横	口: 刷: ナテ	黒色 灰黄帯	砂	B	容量: 0.38 l
212	50	4 N21 b	IV層	洋紙	D 2	印刷部 片	帯: 刷込、口: 沈緑 刷: LR横	口: ナテ 閉上: ミガキ	にぶい黄 にぶい黄緑	砂・長	A	容量: 0.49 l
213	54	4 M 9 i 4 M 8 o	IV層	洋紙	E	印刷部 片	帯: LR横	—	黒色 黒底	砂	B	
214	50	4 M23 s	IV層	洋紙	C 3	印刷部 片	帯: 刷込、口: 工字文 刷: LR横	口: ナテ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・長	A	容量: 0.17 l
215	52	4 N21 c	IV層	洋紙	B 2	印刷部 片	帯: 工字文、刷: LR横	口: 刷: ナテ	黒色 黒底	白	C	
216	54	4 N20 b	IV層	洋紙	a	印刷部 片	帯: A突起、B突起	口: 沈緑、ミガキ	灰黄帯 灰黄帯	白	C	
217	52	4 M22 h	IV層	洋紙	D b 1	印刷部 片	口: 工字文	口: ナテ	にぶい黄緑 灰黄帯	白	B	
218	—	4 M22 h	IV層	洋紙	—	印刷部 片	帯: 沈緑	—	にぶい黄緑 灰黄帯	白	B	
219	54	5 N 1 g	IV層 上 位	洋紙	a	印刷部 片	帯: 刷込 口: 工字文、ミガキ	口: 沈緑、ミガキ	黒色 黒底	黒	C	
220	54	4 N18 y	IV層	洋紙	b	印刷部 片	帯: 沈緑 口: 突起、ミガキ	口: 沈緑、ミガキ	灰黄帯 灰黄帯	砂	C	
221	52	4 M23 o	IV層	洋紙	—	印刷部 片	帯: LR横、刷: 横移状紙	刷: ケズリ	にぶい黄 にぶい黄緑	砂・長	A	
222	52	4 M26 a	IV層	洋紙	—	印刷部 片	刷: 刷込	刷: ナテ	にぶい黄緑 灰黄帯	砂・長	B	
223	52	5 M 1 a	IV層	洋紙	—	印刷部 片	帯: 刷込	ナテ?	黒 にぶい黄緑	砂・長	B	

調査番号	写経番号	白土位置	部位	経緯	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色紙内面色紙	粘土	個人名	備考
224	52	4 N11 n	IV層	漆	D b4	口一底 1/3	口、顔：匠字文	口：沈殿 口一底：ナデ	に深い青緑色 に深い黄緑色	赤・白	C	容量3.00ℓ
225	54	4 N21 d	IV層	漆	-	胴部片	胴：LR(?)横	胴：ナデ	に深い青緑色 に深い黄緑色	砂	B	
226	54	4 N21 c	IV層	漆	-	胴部片	胴：匠字文・LR横	胴：ナデ	黄灰 黄灰	砂・漆	C	
227	54	4 N23 p	IV層	漆	D a4	口一底 2/3	口：突起、口：上字文 胴：LR横	口：ナデ	黄緑	砂	C	
228	54	4 M20 j	IV層	漆	D 44	口一底 1/3	顔：沈殿、胴：LR横	口一底：ナデ	赤緑 黄赤帯	砂・灰	A	
229	54	4 N25 p	IV層	漆	a	口一底 1/2	口：突起、沈殿 口：沈殿	口：沈殿、ナデ	に深い緑色 に深い緑色	白	C	
230	54	4 N21 b	IV層	沈鉢	F 1	口一底 1/2	口：突起、B突起 口：沈殿	口一底：ミガキ	黄緑 灰黄帯	赤・白	C	容量1.24ℓ
231	54	4 N23 g	IV層	沈鉢	F 1	口一底 1/3	口：突起(4単位) 口：沈殿	口：沈殿、ミガキ	黄緑 黄赤	赤	C	容量0.61ℓ
232	54	4 N16 e	IV層	沈鉢	F 1	口一底 1/4	口：突起(4単位) 口：B突起、沈殿	口：沈殿	に深い黄緑色 に深い黄緑色	白	C	容量0.23ℓ
233	54	4 N20 e	IV層	沈鉢	F 1	口一底 1/4	口：突起、B突起 口：沈殿、ミガキ	口：沈殿、ミガキ	黄緑 黄赤	赤・白	C	
234	54	4 N16 e	IV層	沈鉢	B	口一底 1/3	口：突起、B突起 口：突起、匠字文	口：沈殿 胴：ミガキ	黄赤 黄赤	白	C	
235	54	R G054	IV層	沈鉢	A 3	胴部片	胴：匠字文・横文	胴：ナデ	黄赤 灰黄帯	白	C	
236	54	4 N20 i	IV層	沈鉢	B 1	口一底 1/4	口：B突起、沈殿	口一底：ケズリ 口一底：ミガキ	灰黄帯 灰黄帯	白	C	
237	54	4 N20 g	IV層	沈鉢	B 1	口一底 1/5	口：B突起 口：匠字文	口：沈殿 胴：ミガキ	黄赤 黄赤	白	C	
238	54	5 N1 p	IV層	沈鉢	C	口一底 1/3	口：突起 口：上字文	口：沈殿	黄赤	砂	C	
239	52	4 N20 e 4 N17 e	IV層	沈鉢	F 1	口一底 1/3	口：突起、黄赤 胴：LR横	口：沈殿 胴：ナデ	に深い青緑色 に深い黄緑色	白	C	容量1.75ℓ
240	54	4 N18 e	IV層	沈鉢	F 1	口一底 1/3	口：B突起、沈殿 胴：LR横	口一底：ナデ	黄赤	砂・長	C	
241	54	4 N16 e	IV層	沈鉢	G 1	口一底 1/3	口：突起、ナデ	口一底：ナデ	黄赤	砂・長	B	
242	52	4 M21 a	IV層	沈鉢	2	胴部片	口：匠字文	ミガキ	黄赤 灰黄帯	白	C	
243	造深 厚底	4 N24 o	IV層	沈鉢	B 3	口一底 2/3	口：突起(6単位) 口：匠字文 胴：LR横	口一底：ナデ	に深い黄緑色 に深い黄緑色	白	C	容量0.42ℓ
244	52	4 N21 d	IV層	沈鉢	C 3	略定形	口：突起、B突起 胴：匠字文	口：沈殿 胴一底：ミガキ	に深い青緑色 に深い黄緑色	砂	C	外面赤彩 容量0.13ℓ
245	32	4 N19 g	IV層	沈鉢	F 3	口一底 2/3	口：突起匠字文 底：沈殿	口一底：ナデ	黄赤 に深い黄緑色	白	C	容量0.25ℓ
246	54	5 N1 p	IV層	沈鉢	F	口一底 1/3	口：突起 口：匠字文	口：沈殿、ミガキ	黄赤 に深い黄緑色	長	C	
247	54	4 N22 c	IV層	沈鉢	E	口一底 1/3	口：突起匠字文、LR横(?)	口：沈殿、ミガキ	黄赤 黄赤	白・漆	C	
248	54	4 N20 e	IV層	沈鉢	C 1	口一底 1/3	口：匠字文 胴：ミガキ	口一底：ミガキ	黄赤	黄	C	
249	54	4 N19 c 4 N19 c	IV層	沈鉢	-	口一底 1/3	胴：LR横	-	に深い黄緑色 明黄緑	砂	B	内面にアスファルト 付着
250	54	4 M24 s	IV層	沈鉢	-	胴部片	胴：LR横	胴：ナデ	に深い青緑色 に深い黄緑色	砂・長	B	
251	51	4 M17 j	IV層	沈鉢	-	略定形	口：突起 胴：無文	-	黄赤	砂・長	C	手づくね
252	54	5 N1 o	IV層下位	沈鉢	-	略定形	口：突起、沈殿 底：匠字文、無文	-	に深い黄緑色 黄赤	砂	C	手づくね
253	54	4 N24 p	IV層	沈鉢	-	口一底 1/3	口：突起、匠字文	ナデ	黄赤 黄赤	白	C	
254	51	5 N1 p	IV層	沈鉢	-	口一底 1/3	口：突起、黄赤 胴：突起-匠字文(赤黄緑文)	口：ナデ	黄赤 明黄緑	砂・漆	B	口一底欠損。 容量3→4式
255	55	4 N25 p	IV層	沈鉢	-	略定形	-	-	黄赤	長	C	
256	55	4 N25 o	IV層下位	沈鉢	-	略定形	-	-	に深い黄緑色	砂・長	C	

2 検出した遺構・遺物

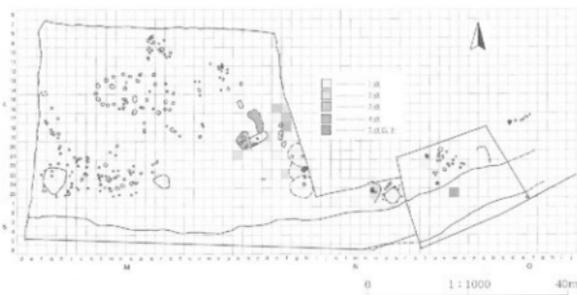
掲載 番号	写真 番号	出土位置	層位	器種	分類	産地 産地	外面文様	内面文様・調整	外白色刷 内口色刷	出土 個人 名	備考
237	55	4 N25 b	IV層	耳栓	陶製	陶製	—	—	にぶい黄緑	伊・長	C
238	55	4 N24 d	IV層	耳栓	—	1/3欠 破	—	—	にぶい黄緑	伊・長	C
239	55	5 N1 p	IV層	耳栓	—	陶製	—	—	にぶい黄緑	伊・長	C
240	55	R G054	階上中	耳栓	—	陶製	—	—	にぶい黄緑	伊	穿孔なし。台座に染
241	55	4 N21 c	IV層	土製品	—	—	—	—	褐色	伊	C
242	55	4 N19 g	IV層	土製品	—	埋りの 土	流線	—	黄褐色	伊	C
243	55	4 N	IV層	土製品	—	—	—	—	黄褐色	—	—
244	55	4 M16 o	IV層	土製品	—	—	—	—	黄褐色	—	—
245	55	5 M3 y	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ミギ キ	—	黒 にぶい黄緑	長	C
246	55	4 N19 d	IV層	土製品	弥生	口：流線 口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊	A
247	55	4 M23 s	IV層	土製品	弥生	口：流線 口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊	B
248	55	5 M3 q	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ナデ	—	黒 流黄	伊	A
249	55	4 M17 f	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ナデ	—	黒 にぶい黄緑	伊・長	B
250	55	5 M1 w	IV層下位	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ナデ	—	黒 にぶい黄緑	伊	B
251	55	4 M21 o	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	B
252	55	4 M17 e	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	A
253	55	4 M16 i 4 M15 i 4 M13 p	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 にぶい黄緑	伊	A
254	55	4 M11 q 4 M10 s	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ナデ	—	黒 流黄	伊	A
255	55	4 M16 n 4 M14 q	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ナデ	—	黒 流黄	伊	A
256	55	4 M11 u	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 にぶい黄緑	伊・長	B
257	55	4 M10 n	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	A
258	55	4 N25 r	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ミギ キ	—	黒 にぶい黄緑	伊・長	C
259	51	4 M17 e	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線	—	黒 にぶい黄緑	伊・長	B 容量0.56 l
260	51	4 N25 r	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ミギ キ	—	黒 にぶい黄緑	伊・長	B 容量0.67 l
261	51	4 M10 l	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	B
262	51	R G054	階上上位	土製品	弥生	口：流線、L R縦	—	—	黒 にぶい黄緑	伊	A
263	51	R G054	階上中	土製品	弥生	口：流線、L R縦	—	—	黒 流黄	伊・長	B
264	51	4 M13 m	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：流線、ミギ キ	—	黒 流黄	伊・長	B
265	51	4 M13 m	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	B
266	51	4 M15 a	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	B
267	51	4 M25 n	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 流黄	伊・長	B
268	51	5 M1 r	IV層	土製品	弥生	口：流線、L R縦	口：ナデ	—	黒 にぶい黄緑	伊	A

石器 (第83～128図、写真図版62～69)

第26次調査区から出土した石器は、ツール類が413点 (224.3kg)、石核、フレイクが1607点を数え、そのうち遺構外出土のツール類は252点、石核、フレイクが1202点である。土器と同じIV層中から出土しており、縄文時代晩期に比定されるものと思われる。ツール類の器種は、石鏃、石匙、石錐、兜状石器、不定形石器、尖頭器、中形石器未成品、打製石斧、磨製石斧、両極石器、敲磨器類、石皿類である。敲磨器類が最も多く、それに不定形石器や、石鏃、石皿類が次ぐ。狩猟採集や調理用の道具と考えられる石器が多数を占め、それに対し、石錘といった漁労具は出土しない傾向が読み取れる。また石棒などの祭祀的な意味合いの強い石器類は第26次調査区では見つかっていない。

石鏃 (S85～103)

1類17点、2類6点、3類6点、4類10点で、合計39点を数える。そのうち遺構外出土は25点で、内訳は1類9点、2類5点、3類4点、4類7点である。出土分布は4M18fグリッドを中心とし、その周囲から多く出土している。このエリアは遺物集中区であり、まだ遺物集中区として認定する



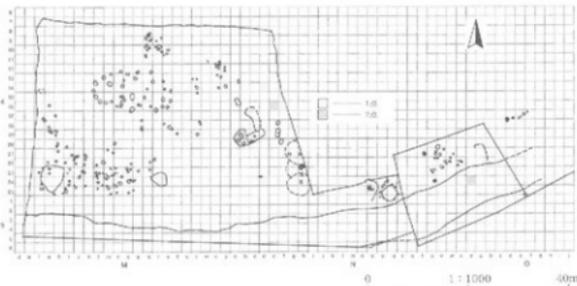
第83図 石鏃出土分布

前に包含層出土扱いで取り上げたものが含まれている。その他、RA003周辺からも出土している。西側に向かうにつれ、出土量は希薄になる (第83図)。

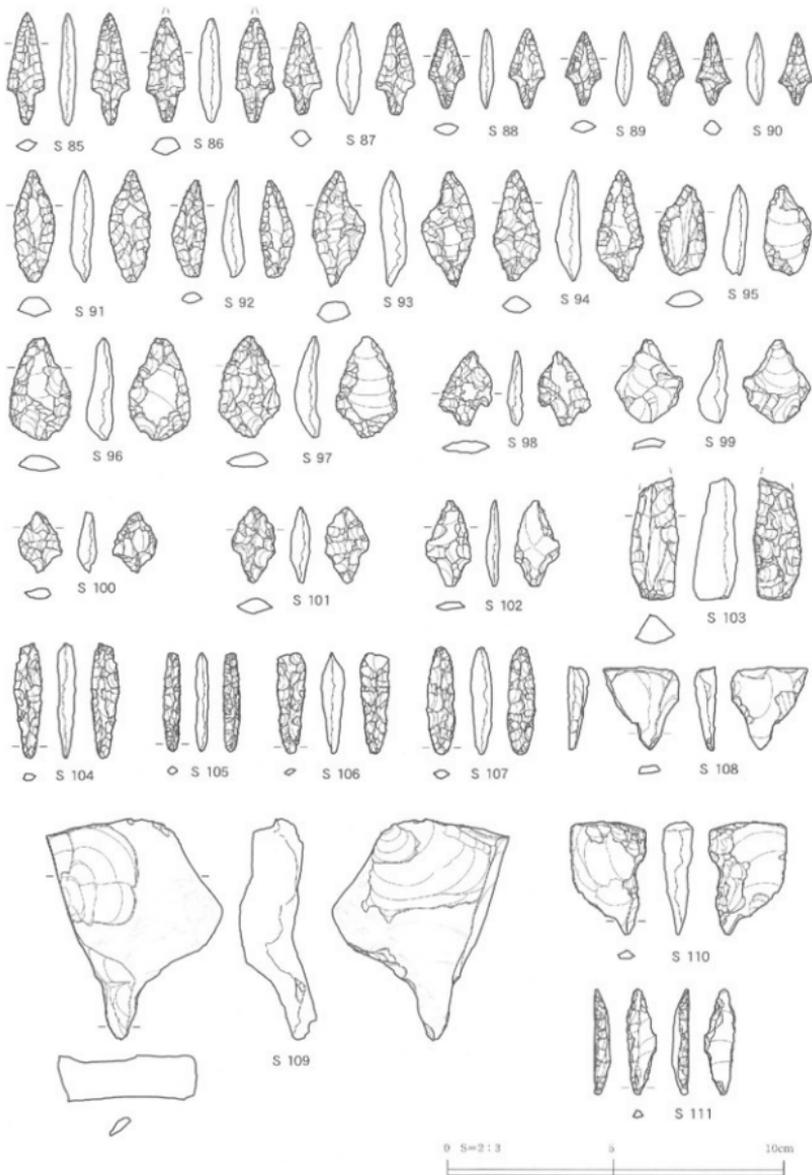
遺構外出土25点のうち、19点を図示した。S85～90は1類である。比較的、刃部が長い形態が多い。S91～94は2類である。93は刃部が作出される一辺がやや歪であるが、他は刃部はほぼ左右対称に作出されている。S95～97は3類である。S95は基部の片面の一部にのみ二次加工が施されているが、その他は両面の側縁全周に二次加工が施されている。S98～103は4類 (未成品) である。S98は玉随製で、基部部分が製作途中である。S99は赤色頁岩1類製で、大まかな形状を作出されたのみである。103をのぞき、いずれも形状から、1類を作出する途中でやめたものと考えられる。

石錐 (S104～111)

1類6点、2a類3点、2b類3点、3類2点で、合計14点を数える。そのうち遺構外出土は11点で、内訳は1類5点、2a類2点、2b類3点、3類2点である。出土分布は、



第84図 石錐出土分布



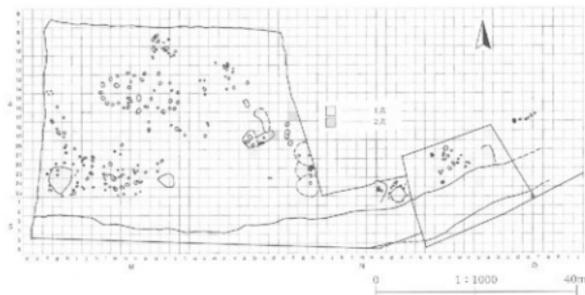
第85図 遺構外出土石器(1)

遺物集中区から竪穴住居跡が分布するエリアに集中している。またRD048の検出面上からも1点出土しており、RD048に伴う遺物である可能性がある。調査区西側は比較的希薄であるが、調査区北西端から1点出土している(第84図)。

11点のうち、8点を図示した。S104~107は1類である。全体的に観察していて、錐部先端に使用による磨滅の痕跡は見受けられなかった。ただS107は錐部先端が比較的丸いので、使用によるものかもしれない。S109は2a類で、やや大きく両面に自然面が残る。錐部は片面から加工を施したのみである。S108、110は2b類である。錐部は片面にのみ二次加工が施される。S111は3類(未成品)である。形態から1類を作出した途中のものと考えられる。

石匙(S112~119)

1a類4点、1b類3点、2類2点、3類2点、4類1点で、合計12点出土している。そのうち、遺構外出土は9点で、内訳は1a類2点、1b類2点、2類2点、3類2点、4類1点である。出土分布は遺物集中区から竪穴住居跡が分布するエリアに集中している(第



第86図 石匙出土分布

86図)。また、RD048検出面上からも2点出土している。RD048は検出が難しく、検出面上の遺物を一部、遺構外出土として取り上げており、これらの石匙はRD048に伴う石器であった可能性もある。

9点のうち、8点を図示した。S112、113は1a類である。S114、115は1b類である。S114は摘み部にアスファルトが付着している。S116~117は2類である。S117は摘み部と刃部との幅がほぼ同じで、細長い形状を呈する。S118は3類である。ほぼ全周に二次加工が施される。刃部の先端がやや鉸状に尖っており、石鎌へ転用しようとした可能性が考えられる。119は4類(未成品)である。摘み部にのみ二次加工が施されている。

筥状石器(S120~124)

7点を数える。遺構内出土は1点、遺構外出土は6点で、遺構外出土の方が多い。出土位置は竪穴住居跡が分布するエリアに集中する。RA004、005の検出面上から1点ずつ出土しており、両遺構に伴う遺物であった可能性がある。

5点を図示した。幅が広い端部が丸いもの(S120、124)と、直線的なもの(S121、122、123)とに二分できる。いずれも両面から二次加工を施し、刃部を作出している。

尖頭器(S125)

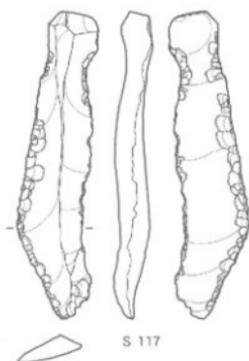
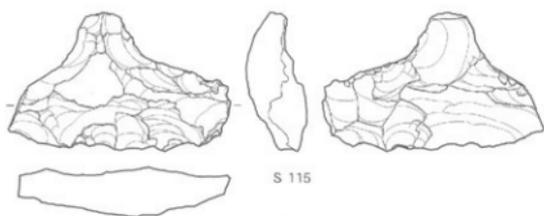
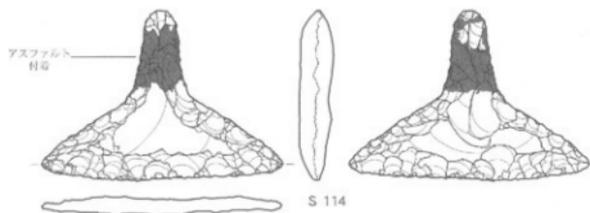
遺構外から1点のみ出土している。

出土地点は調査区東端、4N19eグリッドで、遺物集中区付近から出土している。

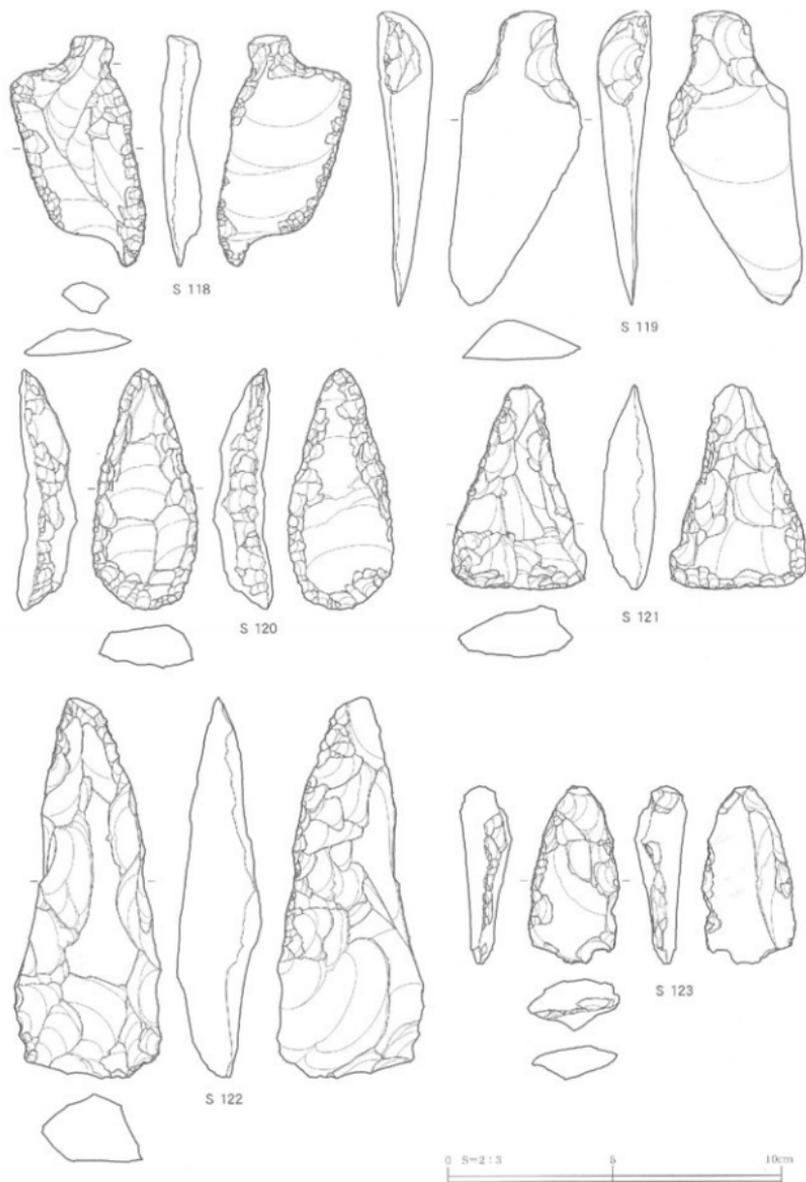
S125は体部を欠損しており、先端部のみ残存する。両面からほぼ全周にかけて二次加工を施している。

中形石器未成品(S126、127)

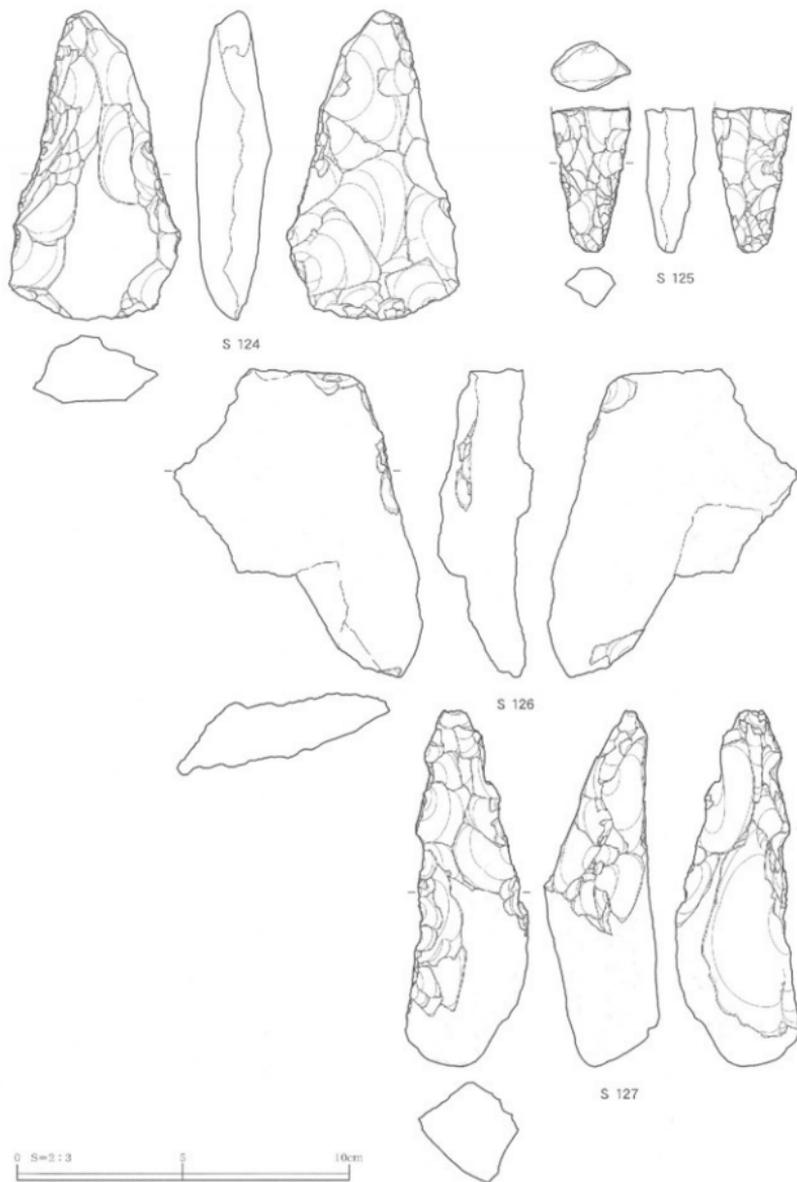
5点を数える。遺構内出土は1点、遺構外出土は4点で、遺構外出土の方が多い。



第87図 遺構外出土石器(2)



第88図 遺構外出土石器（3）



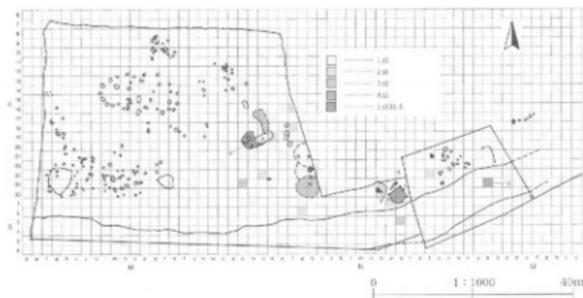
第89図 遺構外出土石器(4)

出土分布はそれぞれ分散しており、偏りは見受けられなかったが、調査区北側の柱穴群内から1点出土しており、柱穴群が遺構であれば、遺構に伴う遺物である可能性がある。

2点図示した。S126は両面に自然面が残り、形態もやや不整形であるが、側縁部の一部に二次加工が施される。S127は棒状を呈する形状で、両面から二次加工を施す。ただし側面の形状からみて、刃部を作出するための二次加工とは考えがたい。

不定形石器 (S128~137)

1類60点、2類6点、3類5点で、合計71点を数える。遺構内出土は28点、遺構外出土が43点で、内訳は1類36点、2類4点、3類3点を数える。出土分布は、調査区東側の遺物集中区付近やRE001付近に集中するが、調査区西側にも若干点存在する(第90図)。



第90図 不定形石器出土分布

10点図示した。S128~133、135、137は1類である。S128は細長の形状を呈し、片方の側縁にアスファルトが付着している。S131は円形で、縁部の両面に二次加工が施される。S134、136は2類である。S-134は円形で、縁部の両面から二次加工を施す。S136は半円状を呈し、片面は自然面のままである。刃部を作出する二次加工は片面のみ施される。S138は鋭角な先端部から、二次加工と微細調整痕とが確認される。S139は二次加工により、鋸状の刃部が作出されている。

礫器 (S140・141)

3点みつかっており、遺物集中区から1点、遺構外から2点出土している。遺構外出土2点の出土位置は調査区中央部、4M21vグリッドと、RA003が位置する4N24qグリッドで、両者は離れており、出土傾向に規則性は見いだせない。

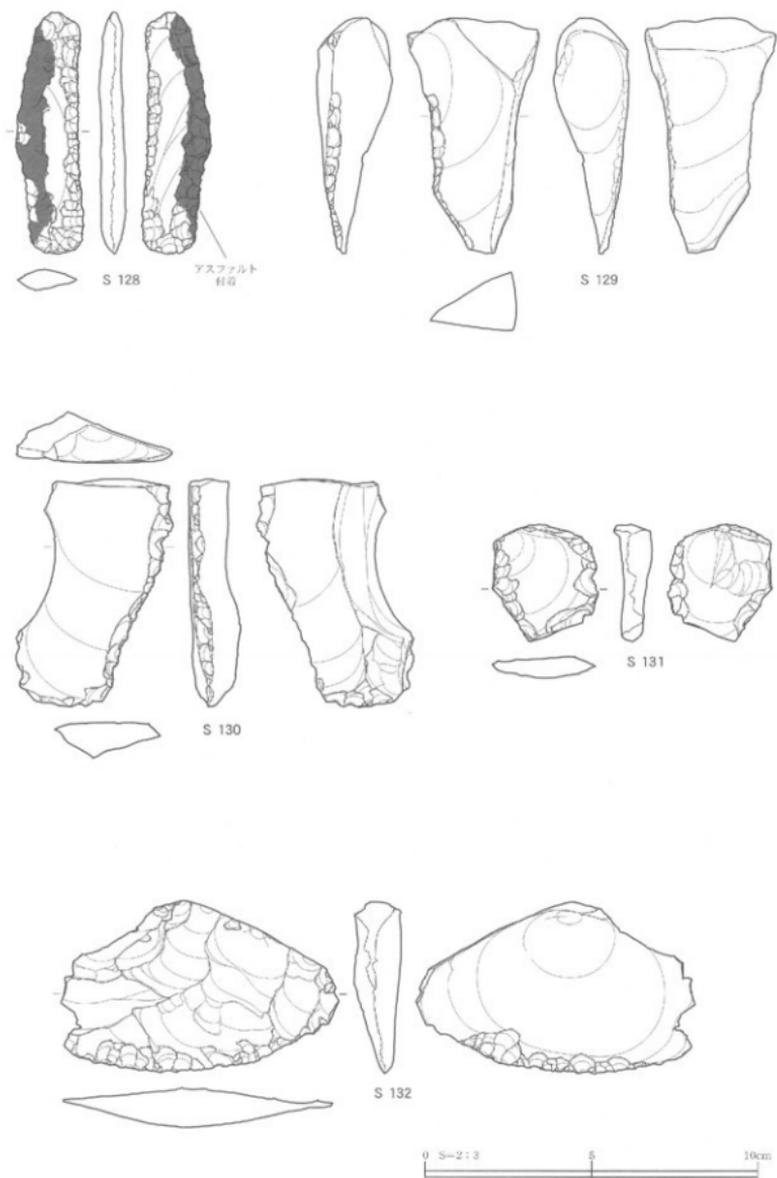
2点とも図示した。いずれも自然礫の側縁を両面から二次加工を施し、刃部を作出している。石材は頁岩2類、デイサイト、凝灰岩で、3点共に異なる石材を利用する。また重量を比べても400g台2点、600g台1点であり、3点には共通点が少ない。

打製石斧・磨製石斧 (S142~145)

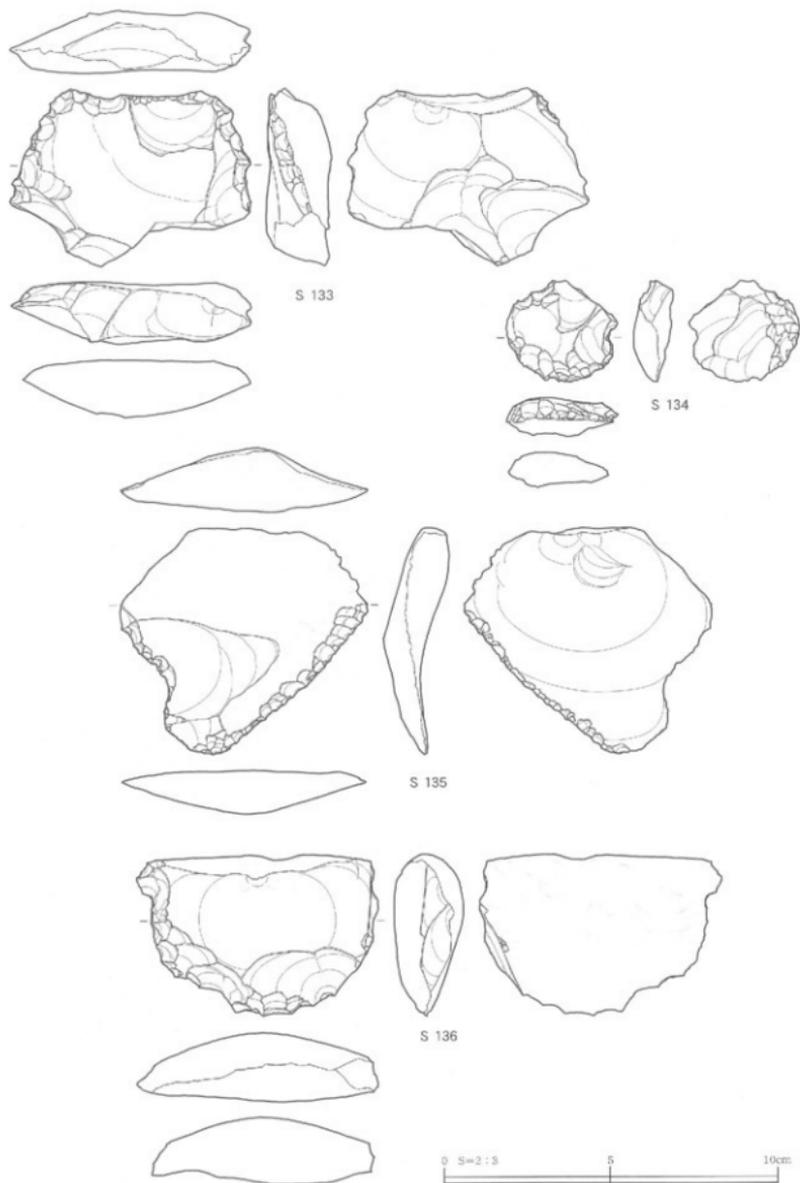
打製石斧4点、磨製石斧2点で、合計6点を数える。打製石斧2点が遺構内出土である他は、全て遺構外出土である。遺構外から出土した4点の出土位置は、どれも竪穴住居跡が分布するエリアから出土している。

4点いずれも図示した。S142、143は打製石斧である。S142は円形の形状を呈し、片面に自然面が残る。刃部は両面から二次加工を施しており、刃部の両側面は敲打による刃つぶしを施し、掘りやすいように加工されている。S143はやや大振りで、分銅状を呈する。刃部には二次加工は施さず、挟み部は幅広く敲打を施している。S144、145は磨製石斧である。S144は刃部に欠損がみられ、使用による刃こぼれの可能性が考えられる。S145は基部のみ残存する。敲打により整形痕が認められる。

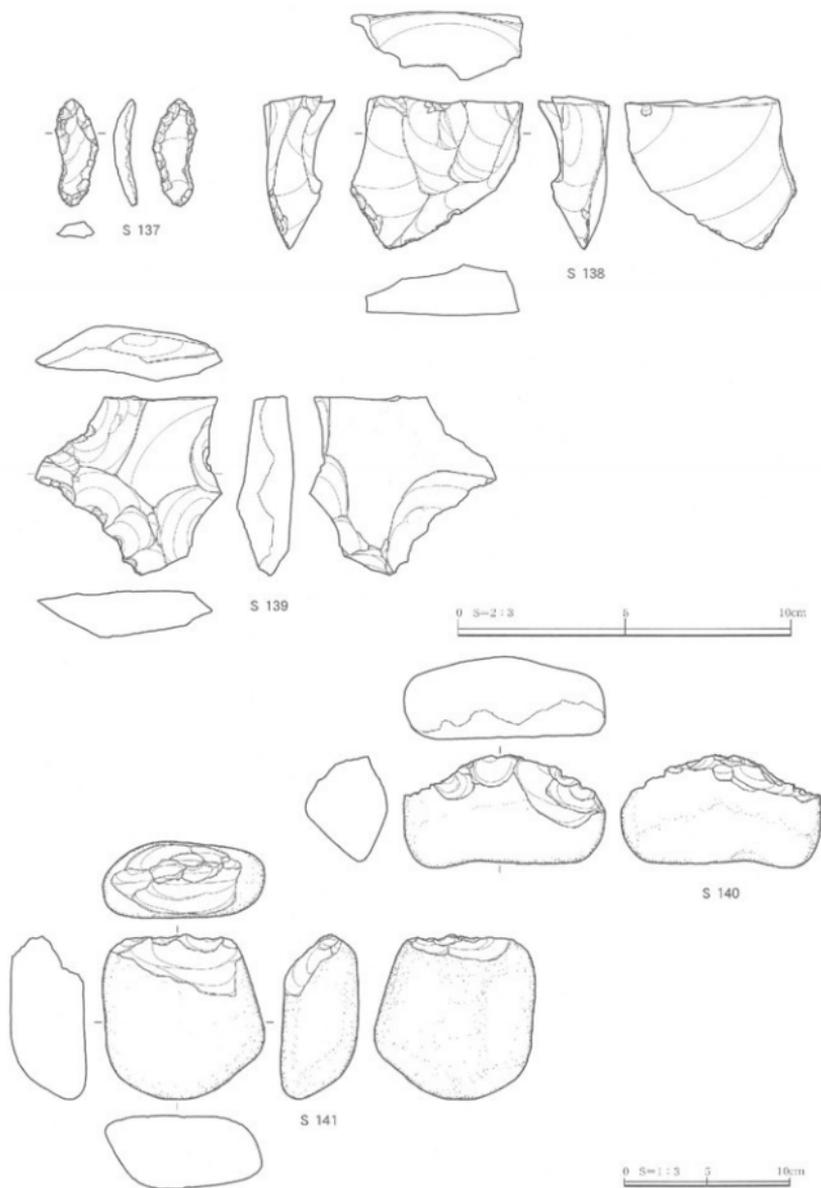
2 検出した遺構・遺物



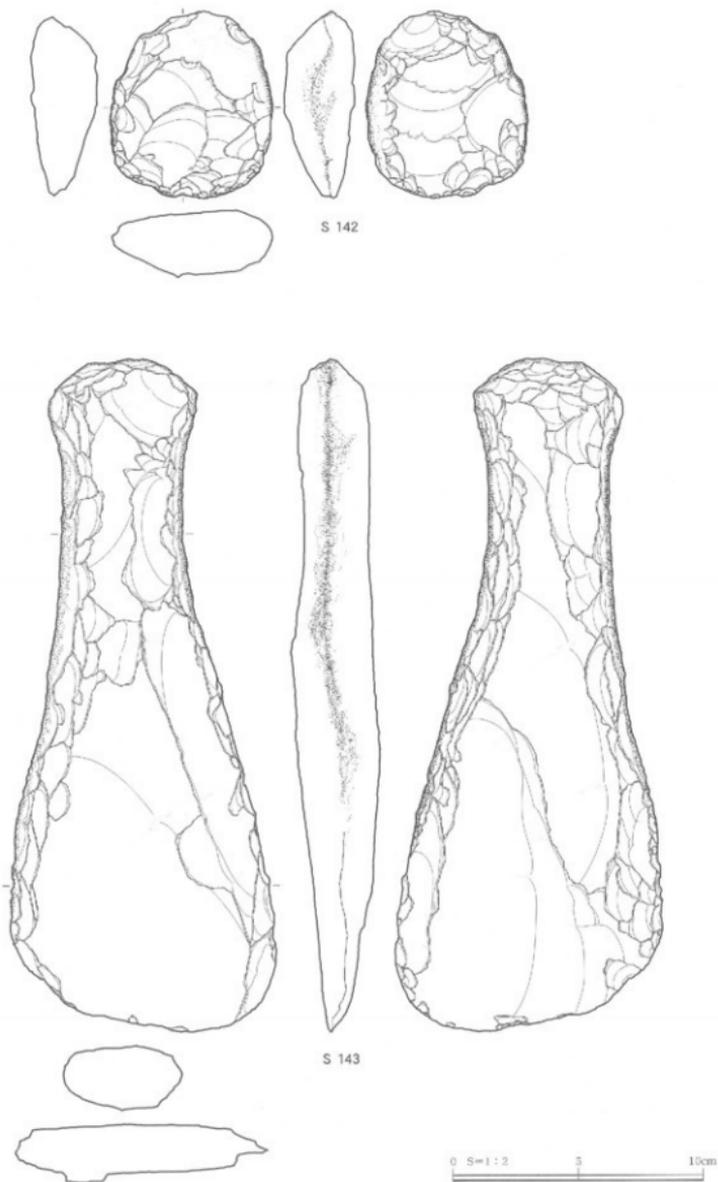
第91図 遺構外出土石器(5)



第92図 遺構外出土石器(6)



第93図 遺構外出土石器（7）



第94図 遺構外出土石器(8)

敲磨器類 (S146~156)

1類121点、2類35点、3類9点、4類24点、5類12点、6類1点、7類1点、合計203点出土している。そのうち遺構外出土は117点である。内訳は1類71点、2類20点、3類5点、4類13点、5類7点、6類1点を数える。7類は遺構外からは出土していない。1類

が圧倒的に多く60%を占める。4類も12%を占め、合わせると本遺跡から出土している敲磨器類の7割以上は、磨痕が認められるものである特徴が見受けられる。対して凹痕が認められるものは少なく、敲打痕はさらに少ない。また複数種の使用痕跡みられるものも少なく、1つの敲磨器類で数種の作業を行うことは少なかった可能性が考えられる。また出土分布に偏りはなく、調査区全体からみつまっている(第91図)。

11点を図示した。S146、147はA類である。S146は磨痕の内面が円錐状に剥離しており、握りやすいように加工した可能性が考えられる。S148、149はB類で、いずれも両面に凹痕が確認できた。S150、151はC類である。いずれも平坦面を磨面とし、その側面の一部に敲打痕が認められる。S154、155はE類である。平坦面のほぼ中央部に凹痕がみられる。S152、153、156はG類である。S152は円柱状を呈する形態で平坦な一面に敲打痕がみられる。S153、156は扁平な鏝で、側面の一部にのみ敲打痕がみられた。

両極石器 (S157~160)

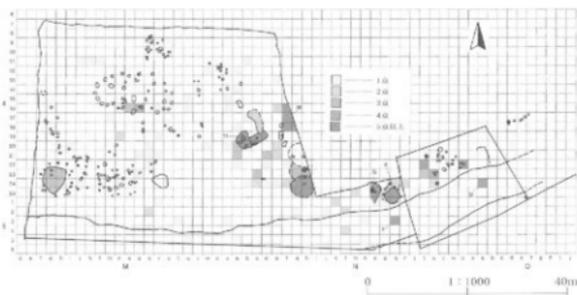
5点出土している。遺構内出土1点、遺構外出土4点で遺構外出土の方が多い。遺構外出土4点の出土分布は、RE004、005、RD048が位置するエリアに集中する。また調査区北側の柱穴群内から1点出土しており、柱穴群が遺構であれば、遺構に伴う可能性があるといえる。

4点とも図示した。いずれも上下一対のみに両極剥離がみられる。石材は5点全て頁岩を素材とし、特に頁岩1類が多い。また出土した5点のうち2点に、表面に自然面が確認された。

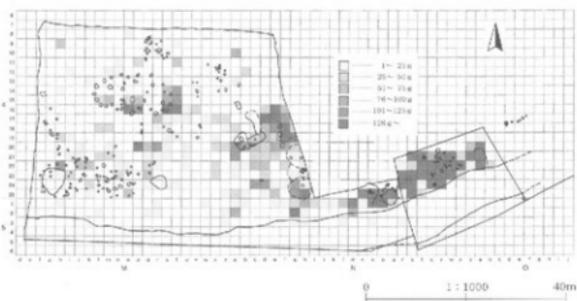
フレイク・Uフレイク・Rフレイク(S161~214)

総点数1,555点、総重量16,136.92gを測る。そのうち、Uフレイクは84点、Rフレイク45点である。

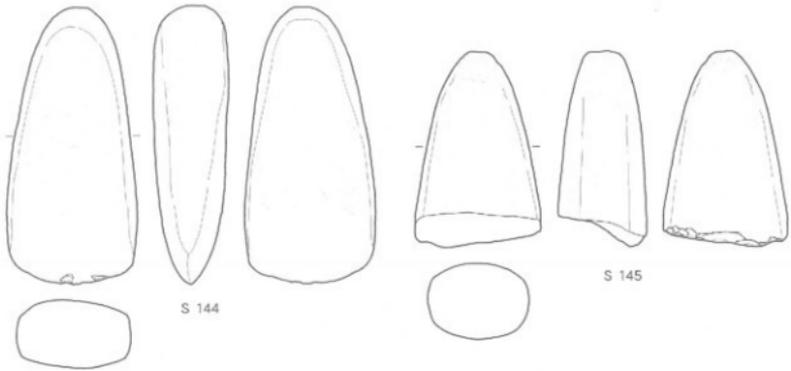
出土分布の傾向を見てみると、壱穴住居跡や壱穴状遺構、あるいは遺物集中区が位置する調査区



第95図 敲磨器類出土分布

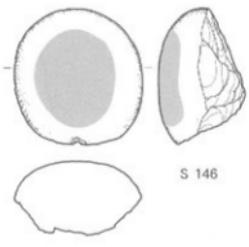


第96図 フレイク出土分布

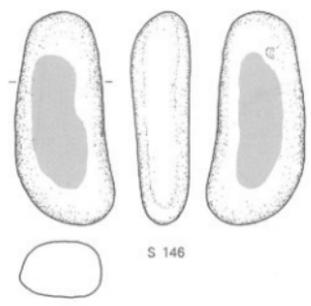


S 144

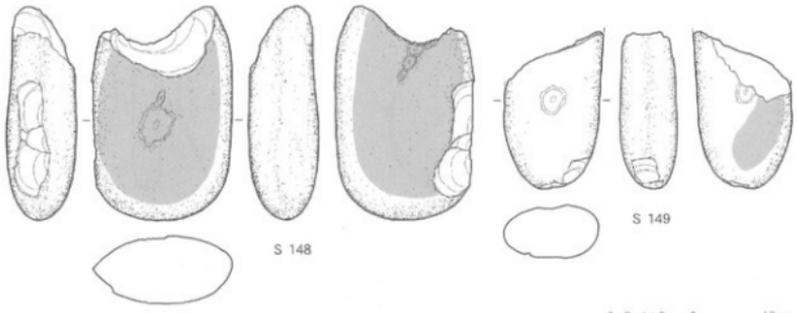
S 145



S 146



S 146

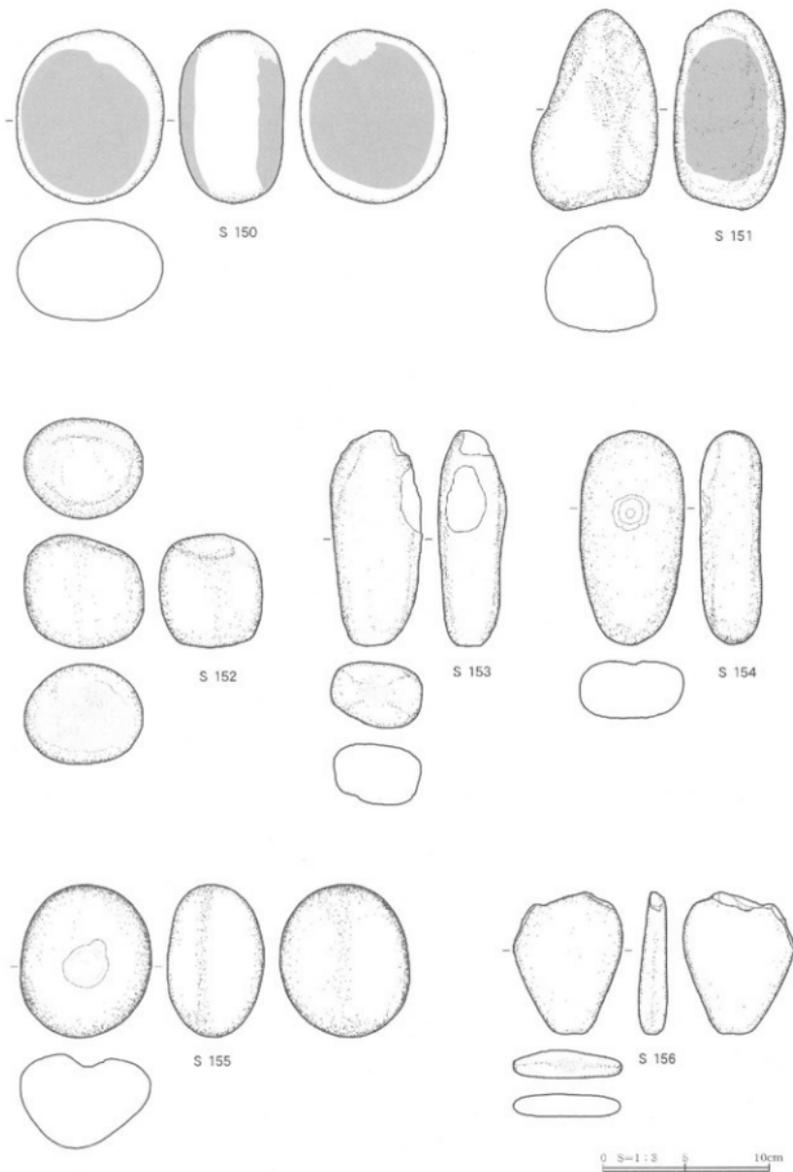


S 148

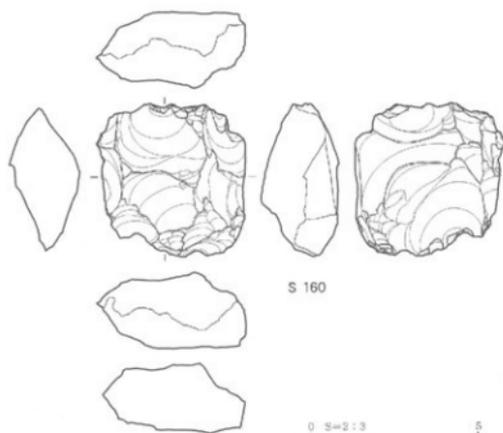
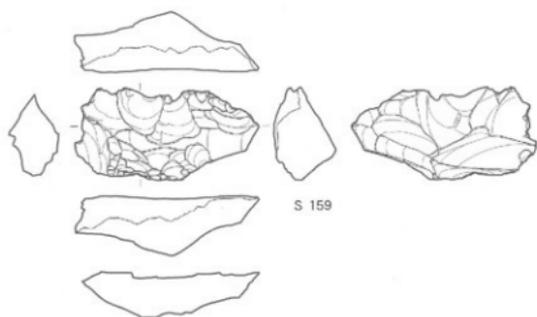
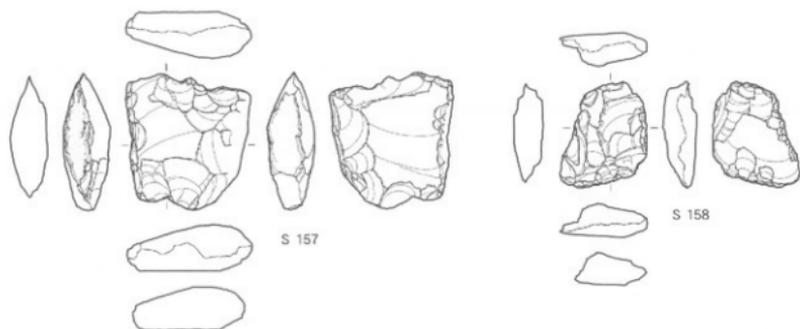
S 149



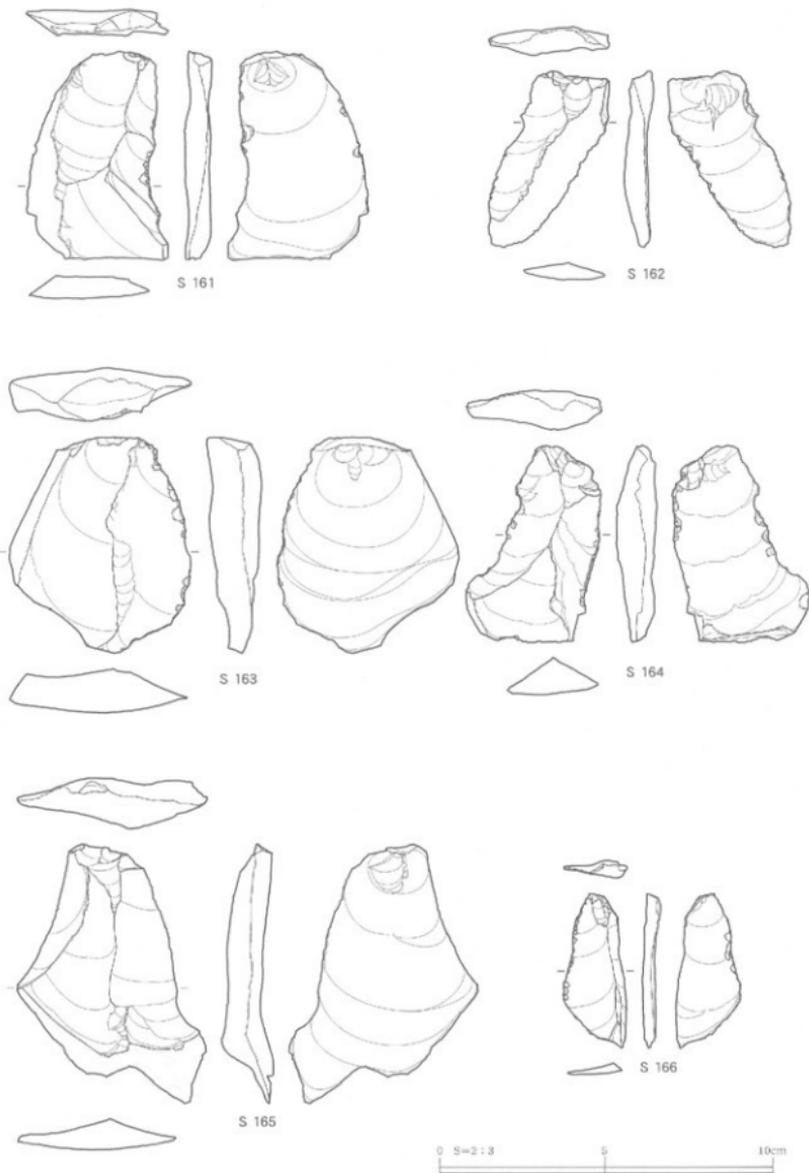
第97図 遺構外出土石器(9)



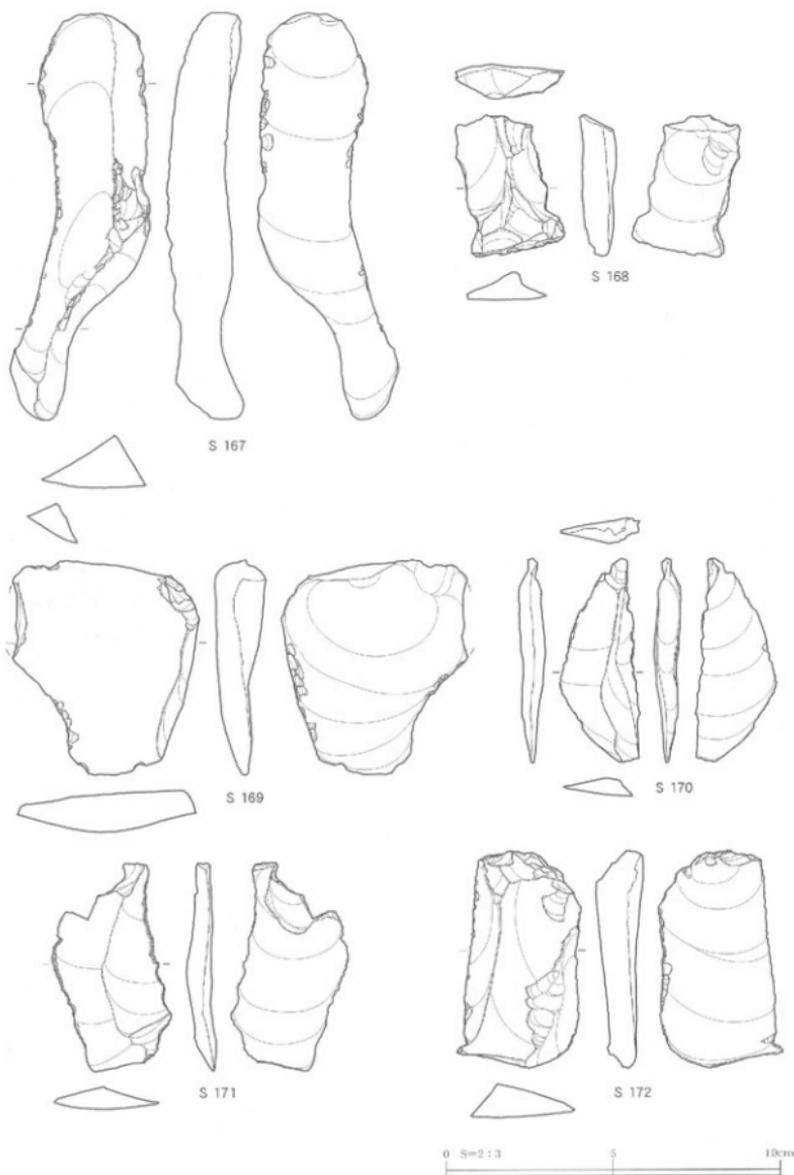
第96図 遺構外出土石器 (10)



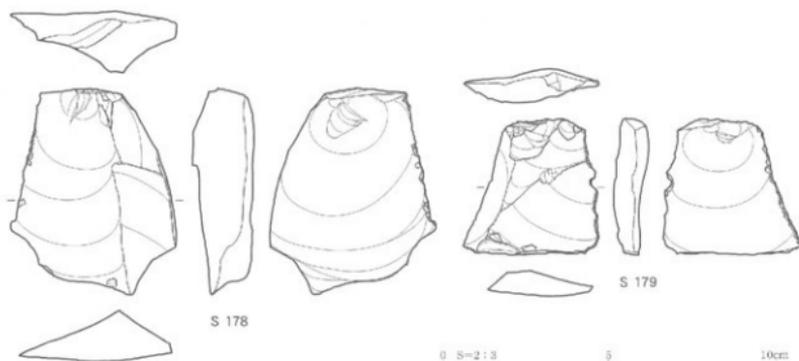
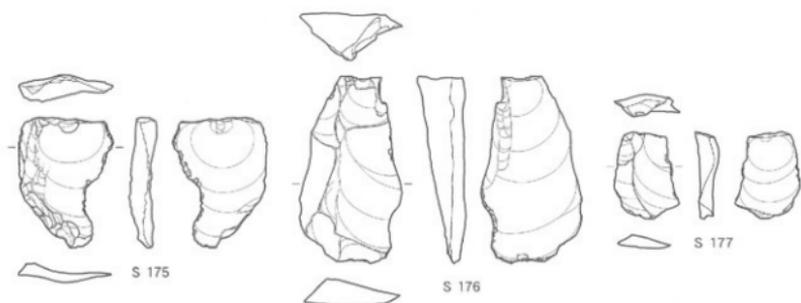
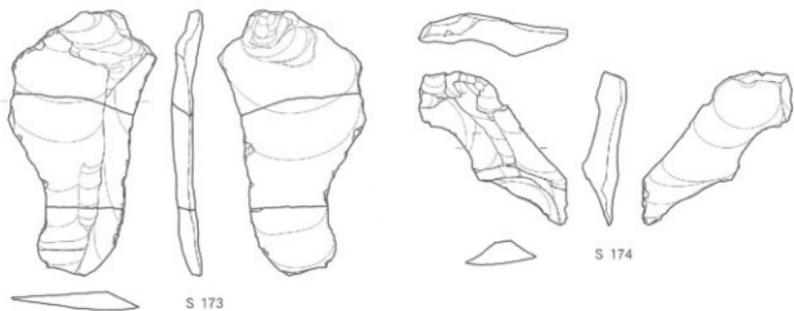
第99回 遺構外出土石器 (11)



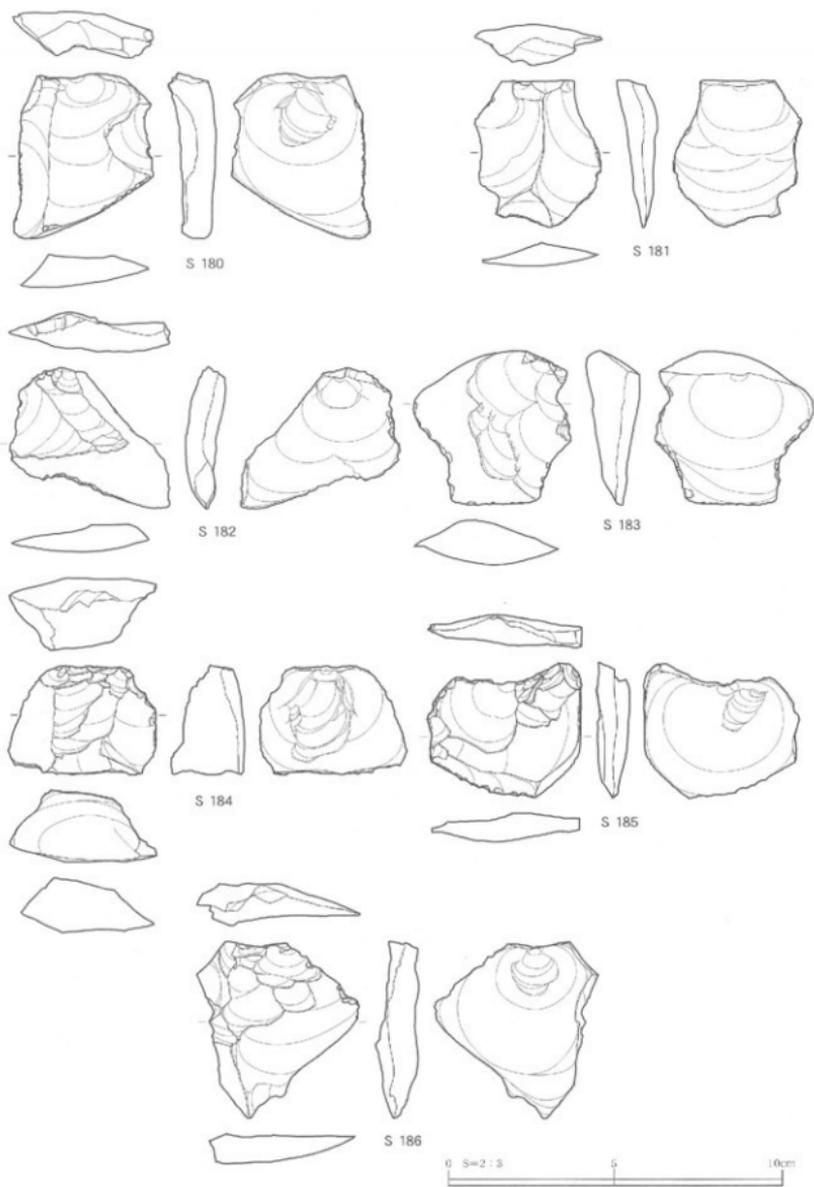
第100図 遺構外出土石器 (12)



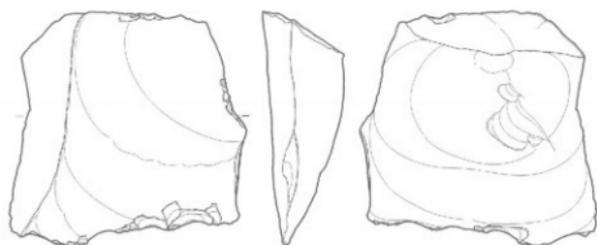
第101図 遺構外出土石器 (13)



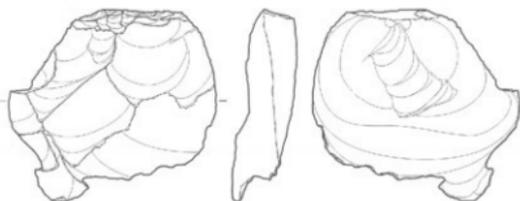
第102図 遺構外出土石器 (14)



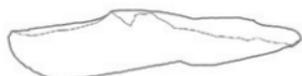
第103図 遺構外出土石器 (15)



S 187



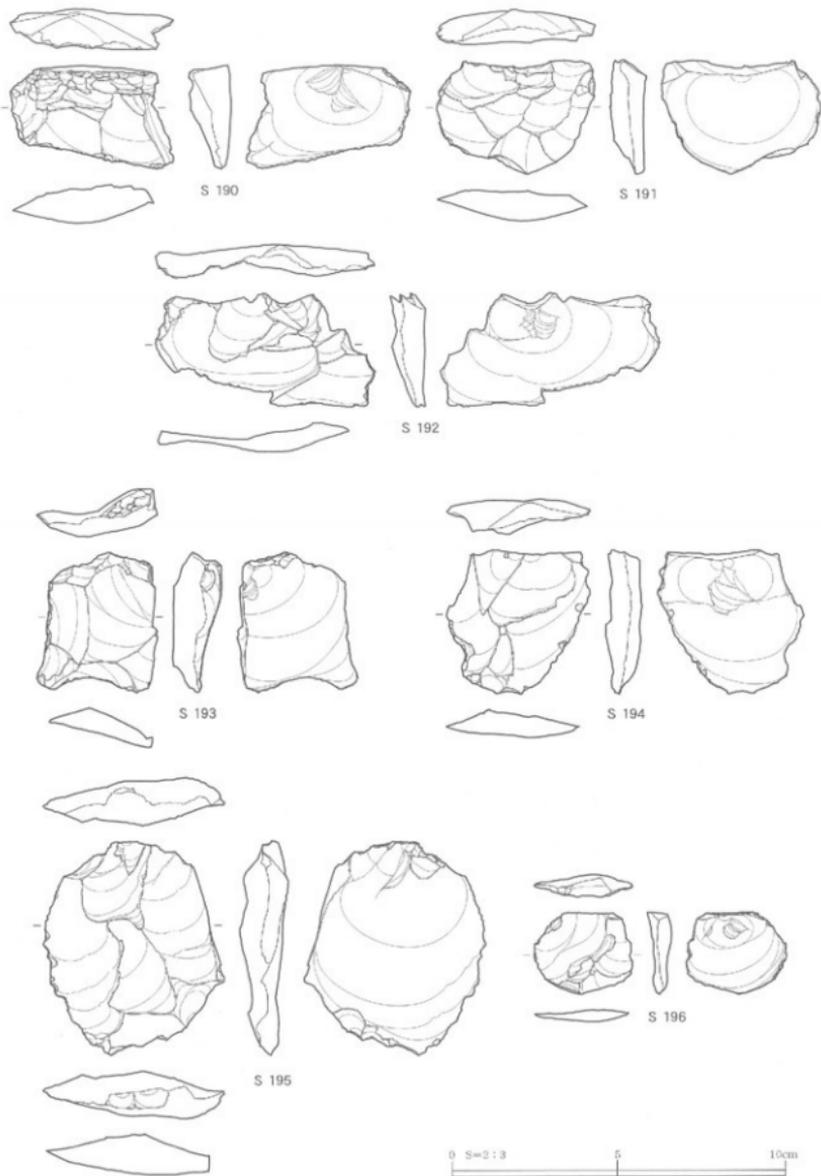
S 188



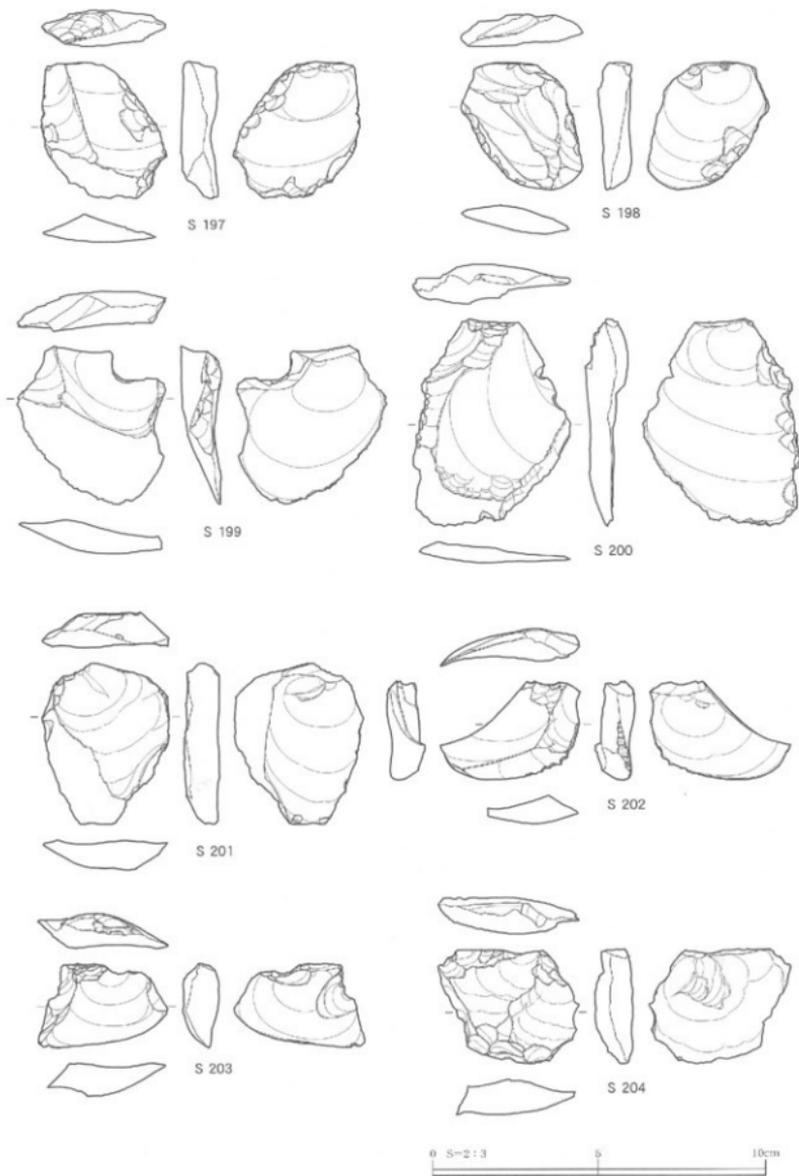
S 189



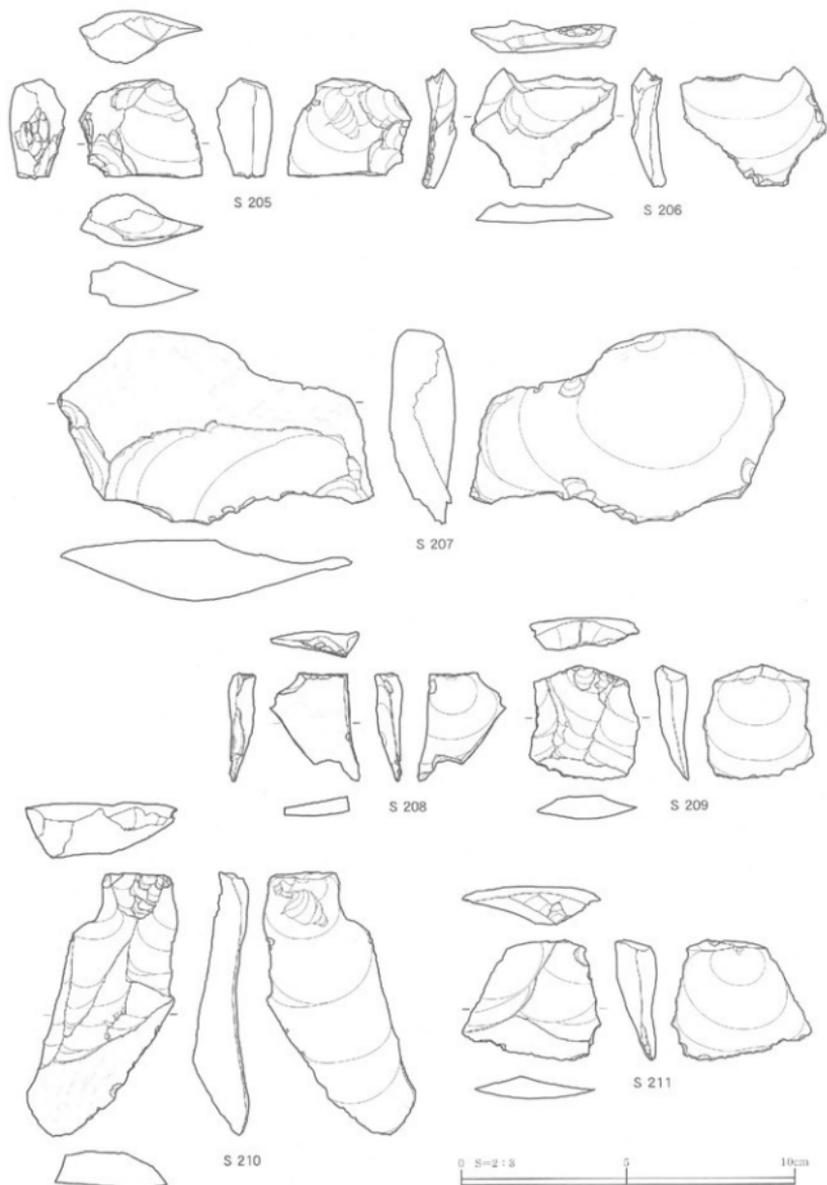
第104図 遺構外出土石器 (16)



第105図 遺構外出土石器 (17)



第106図 遺構外出土石器 (18)



第107図 遺構外出土石器 (19)

東側に集中している。また調査区中央から西側にかけての遺構や柱穴群が位置する付近にもやや散りながらも、多くのフレイクが出土する（第92図）。

54点を図示した。S161～192はUフレイクである。いずれも側縁の一部に微細剥離痕がみられる。自然面の残るものも多く（S161～165、167、169、182～189）、中には自然面から微細剥離痕が確認されるものもある（S167、169、182、182）。側縁の一部に階段状の押圧剥離痕がみられるものもあり（S169、172、175、184～186、188、190）、何らかのツールを製作していた過程で排出された可能性が考えられる。

S191～207はRフレイクである。側縁の一部に、刃部とは異なる不連続な押圧剥離痕がみられる。自然面の残るものが多く見受けられた（S194、195、197、199～201、205～207）。

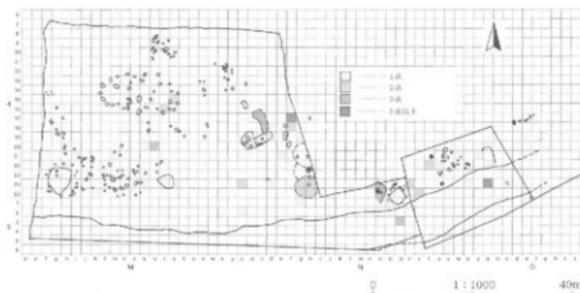
S208～214はフレイクである。自然面の残るものが多く見受けられた（S209～214）。

石核（S215～221）

52点出土している。遺構内出土16点、遺構外出土36点で、遺構外出土の方が多し。

出土分布を見ると、偏り無く調査区全域から出土している（第100図）。

7点を図示した。S215は立方体状の形態をしており、荒削段階のものと考えられ、端部の一部にのみ剥離作業が行われて



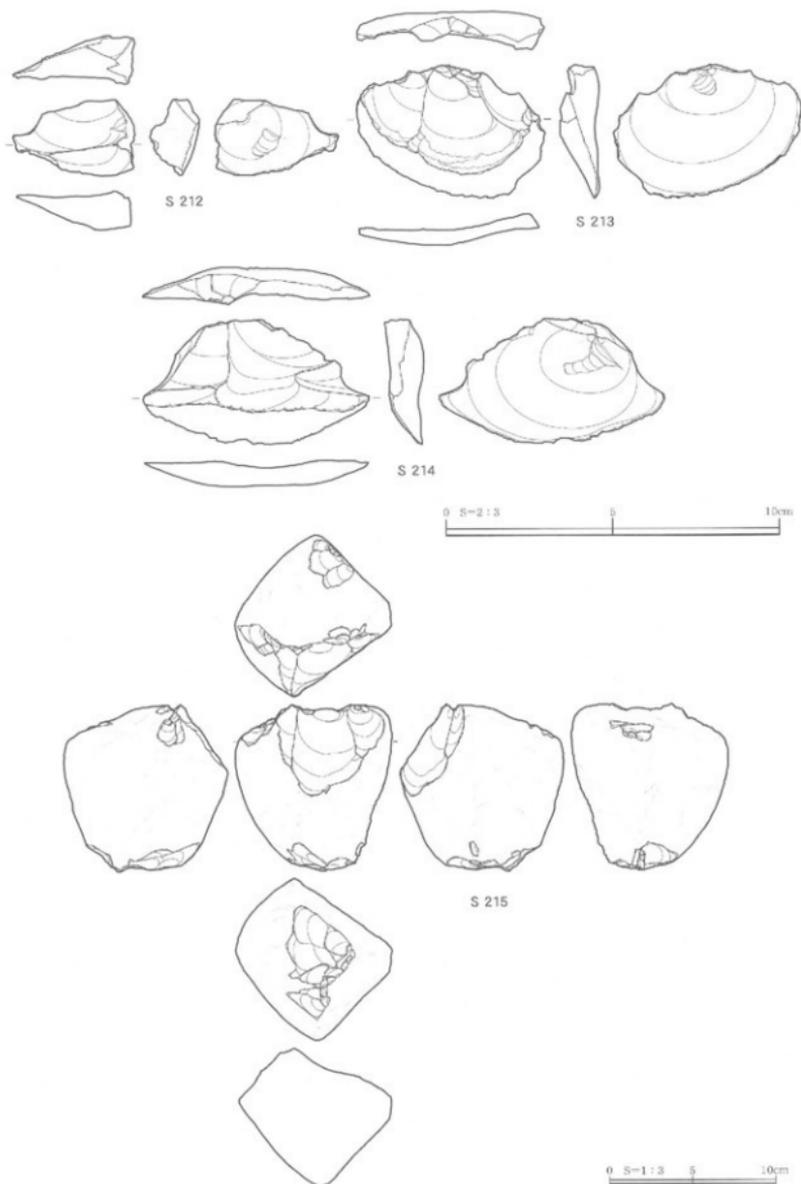
第100図 石核出土分布

いる。S216はやや細長い礫を素材とし、自然面が残る。複数の作業面が確認でき、それぞれの面に複数方向から剥離作業を行っている。S217は球状の礫を素材とし、端部を大きく荒削して、広い作業面を作っている。作業面にはほぼ打点の位置をほぼ90°方向を変えて、2方向から剥離作業を行っている。S218は球状の礫を素材とし、複数の作業面が確認できる。それぞれの作業面には、同一方向からの剥離が行われている。S219は板状の礫を素材とし、広い面を作業面にする。作業面には複数方向から剥離作業を行っている。S220は板状の礫を素材とし、広い面の一面のみに複数方向から剥離作業を行っている。剥離作業はこの一部のみでやめてしまっている。自然面は、一部が剥離した後、磨滅したようにもみられる。S221は棒状の礫で、全体に剥離作業が行われる。何らかのツール類の製作途中であった可能性も考えられる。ただし、刃部を作出しようとした二次加工が見受けられないので、石核とした。剥離作業は礫の長辺に直交するように2方向から行われている。

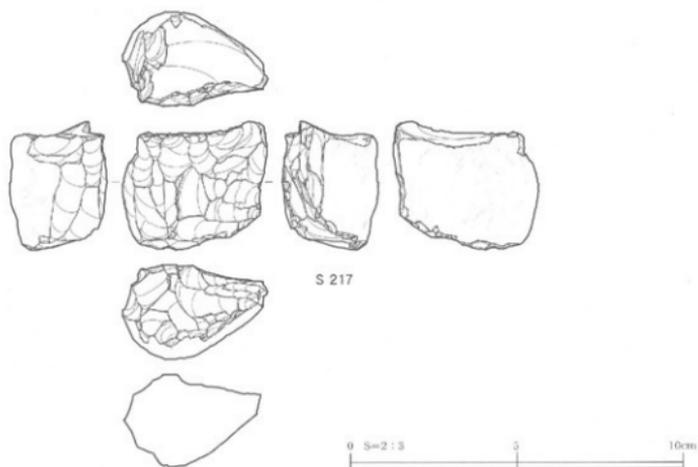
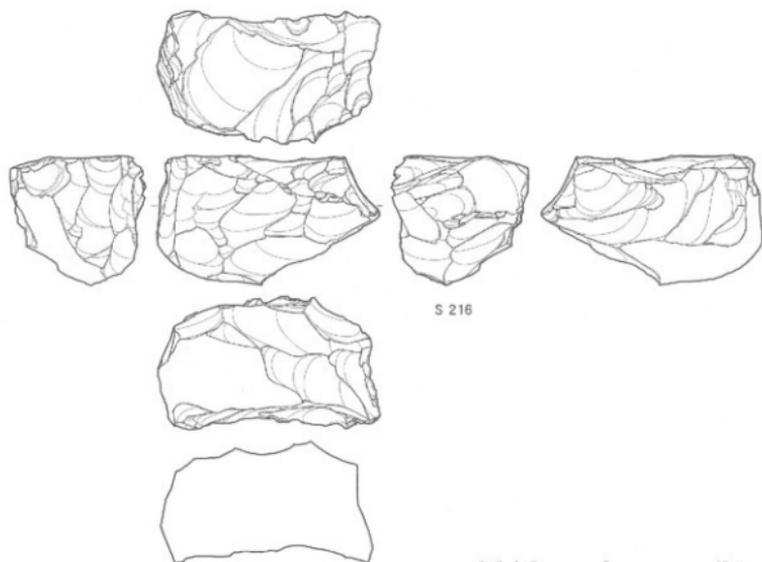
石核、フレイクにみられる接合関係（S222～257）

石核、フレイクについて接合関係を調べたところ、石核7点、フレイク65点に接合関係がみられた。接合したものは31組を数える。

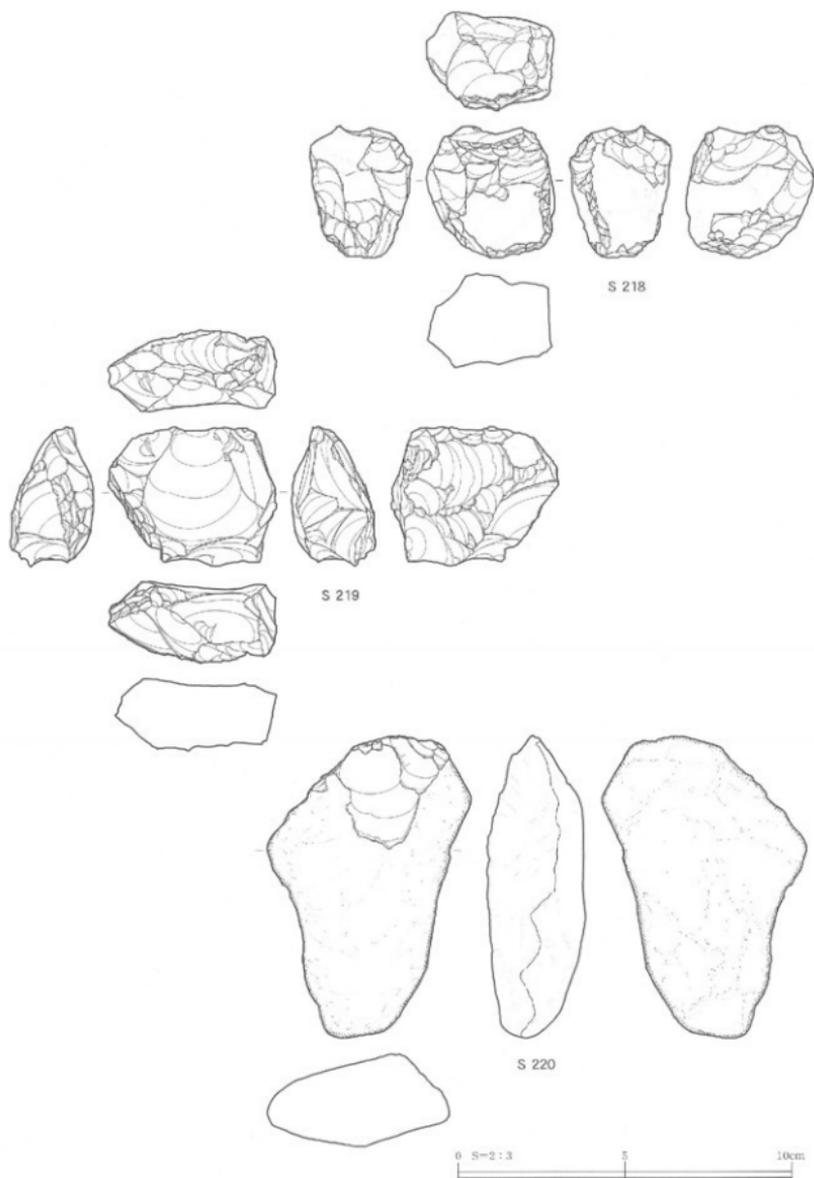
同グリッド内から出土した石核、フレイクが接合する傾向が多いが、中には2m以上離れたグリッド間で、接合するものもみられる。第113図にそれらの分布を示した。4N24oグリッドから出土したフレイクと旧河道の底面付近から出土したフレイクが接合している。4N24oグリッドには整穴住居跡等の遺構が位置しており、この接合関係により、旧河道が集落の存続時期に埋没せずに存在して



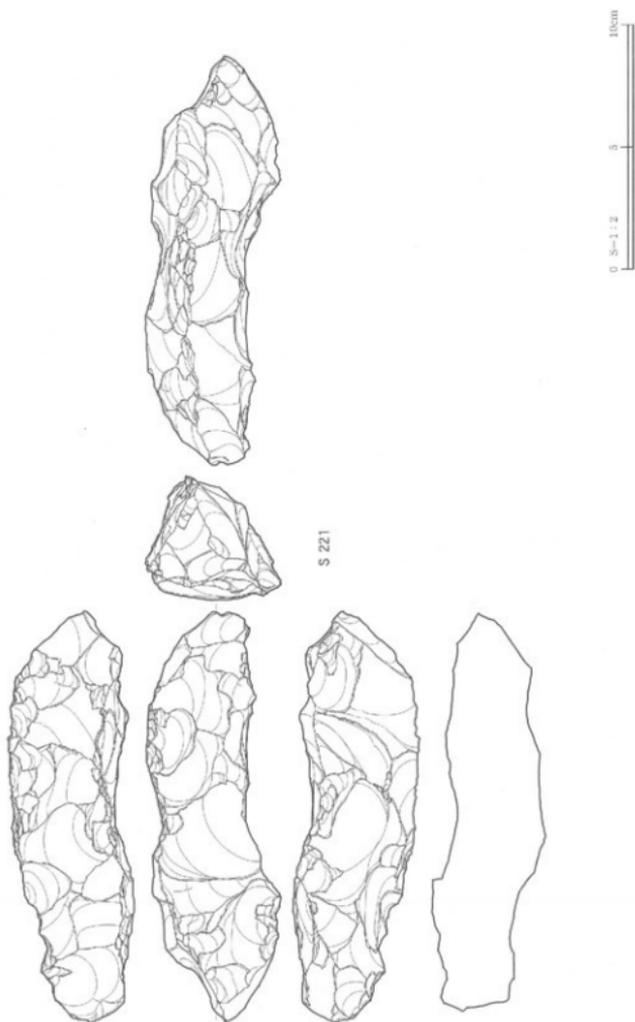
第109図 遺構外出土石器 (20)



第110図 遺構外出土石器 (21)



第111圖 遺構外出土石器 (22)



第112図 遺構外出土石器 (23)

いたことが裏付けられる。

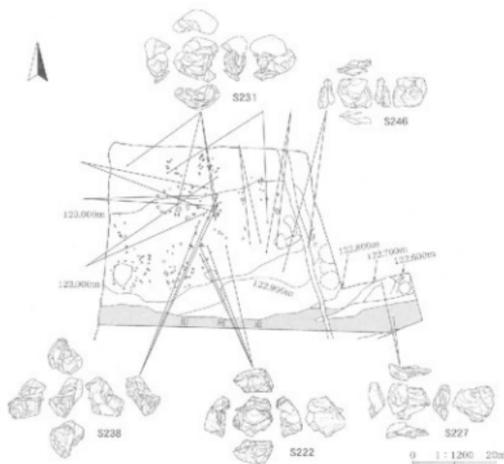
7組 (S222～S257) を図示した。S222は石核1点 (S224) とフリイク3点 (S223～226) が接合したものである。まず石核 (S224) からS226を剥離させ、次いでS225、S223を剥離させる。3点とも同一方向から打撃を加えている。これらのフリイクを剥離させた面をさらに打面とし、石核から剥離作業を行っている (S224の広い作業面が相当する)。S227は3点のフリイク (S228～230) が接合したものであり、そのうち2点は遺構外出土で、もう1点は旧河道から出土である。石核は見つからなかった。S228、229は同一方向から打撃を加えられ、剥離作業が行われたことが確認できる。

S231は石核 (S237) とフリイク4

点 (S232～236) が接合したものである。まず石核 (S237) からS232を剥離させ、次いでS233、S235を剥離させる。そしてS234を剥離させた後、作業面を調整してから、S236を剥離させている。S238は石核1点 (S245) と剥片6点 (S239～244) が接合したものである。まず、S241を剥離させ、その面を打面とし、S243、244 (S240) を剥離させている。またさらにS243、244の剥離面を打面とし、打撃の方向を 90° 変えて、S242を剥離している。S246はフリイク3点 (S247～249) が接合したものである。3点とも同一方向から打撃が加えられており、まずS249が、次いでS248、S247が剥離されたことが確認できた。S250はフリイク3点 (S251～253) が接合したものである。いずれも、打面、打点が確認できず、接合状態が復元できなかった。S254はフリイク3点が接合したものである。石核は確認できなかったがS255、256を剥離し、次いでS257を剥離したものと考えられる。いずれのフリイクにも主要剥離面にさらに剥離作業が行われている。

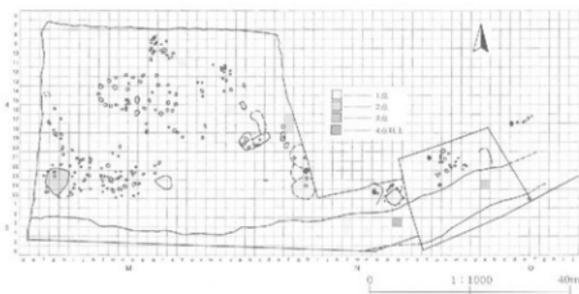
石皿類 (S258～261)

1類20点、2類12点、3類5点、合計37点が出土しており、そのうち遺構外出土は18点で、内訳は1類9点、2類5点、3類4点であった。出土分布をみると、調査区ほぼ全域からみつかっており、偏りが見受けられない (第114図)。

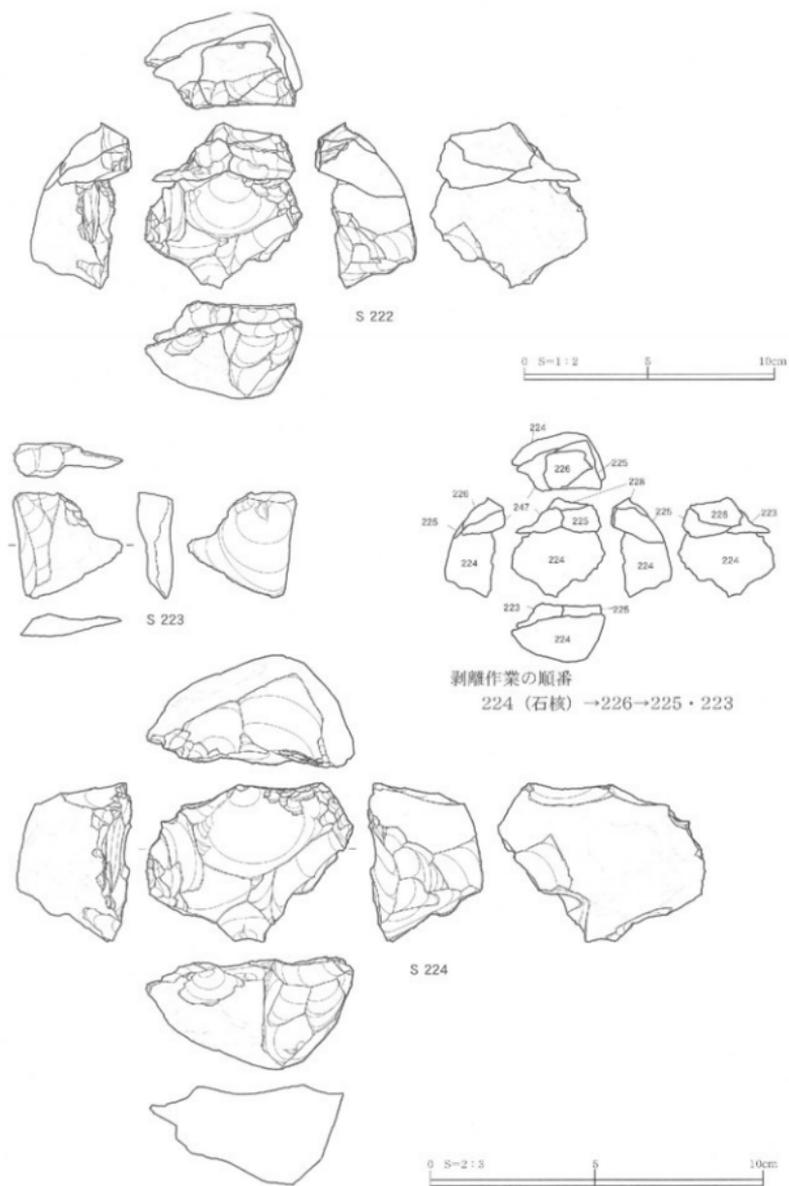


第113図 接合資料分布図

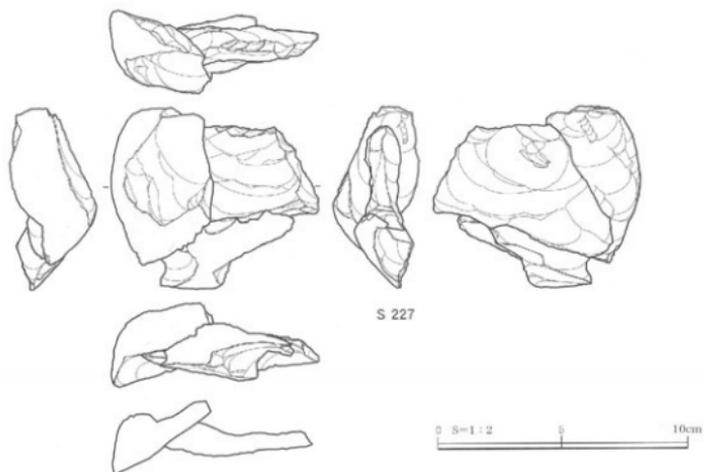
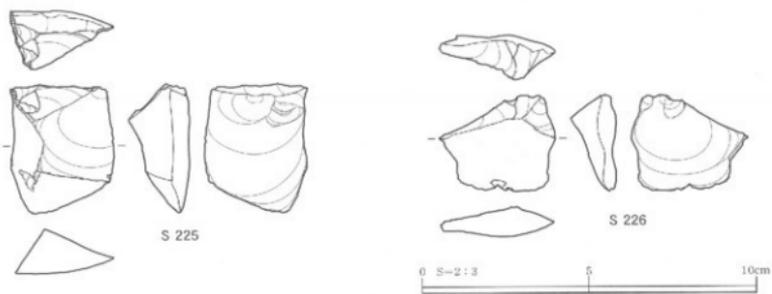
(2m以上離れた位置から出土したものに限定した)



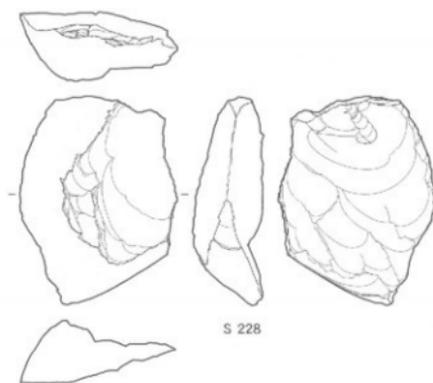
第114図 石皿類出土分布



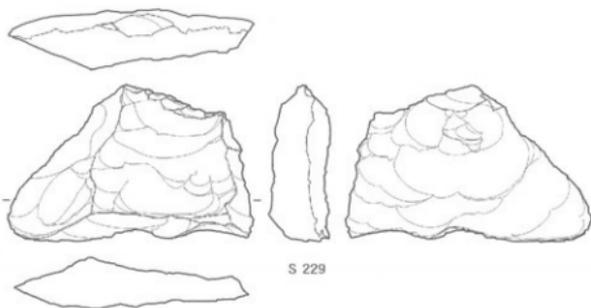
第115図 接合資料(1)



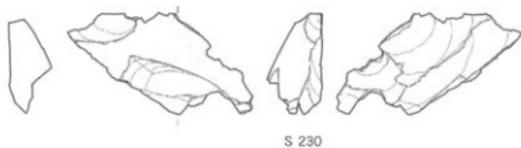
第116図 接合資料(2)



S 228



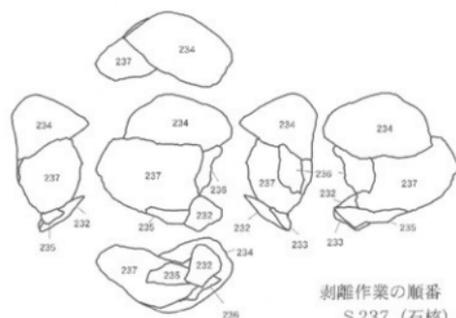
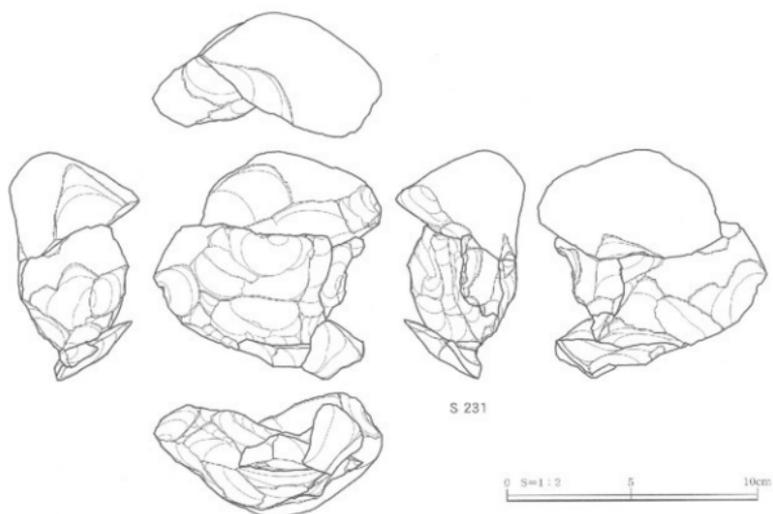
S 229



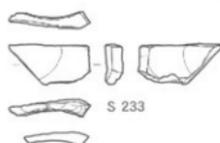
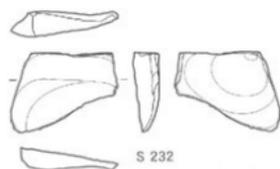
S 230

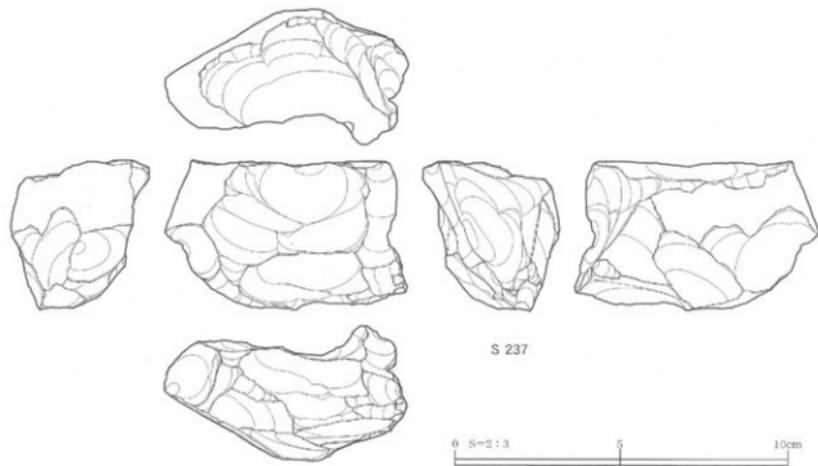
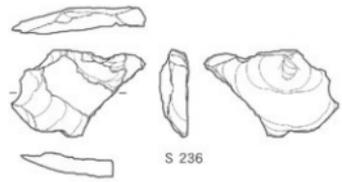
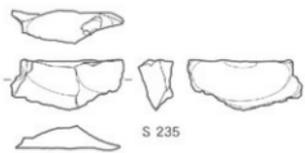
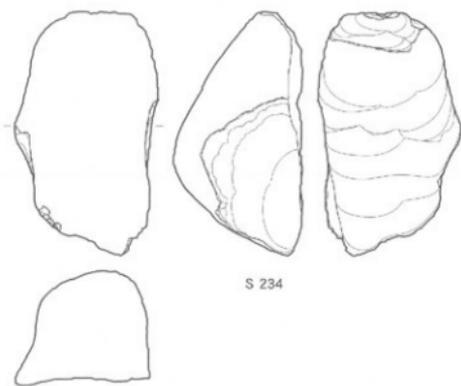


第117図 接合資料(3)

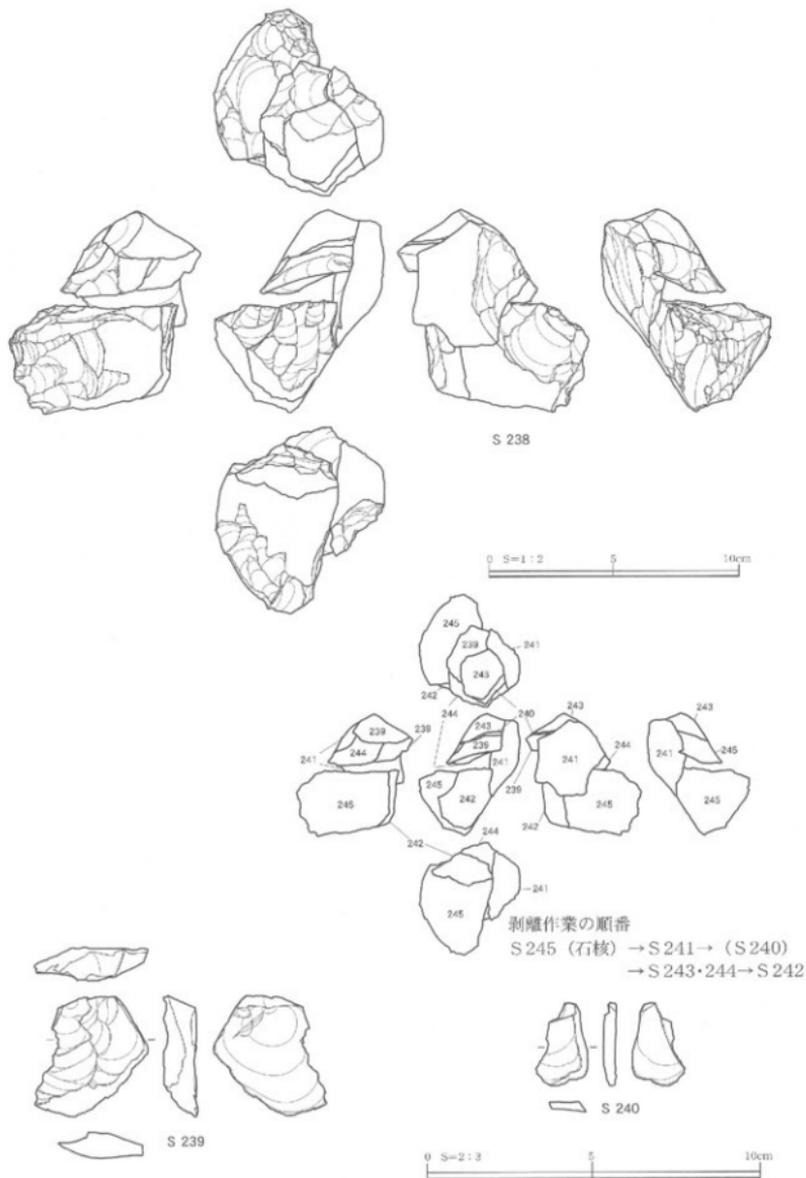


剝離作業の順番
 S 237 (石核) → S 232・233・235
 → S 234 → S 236

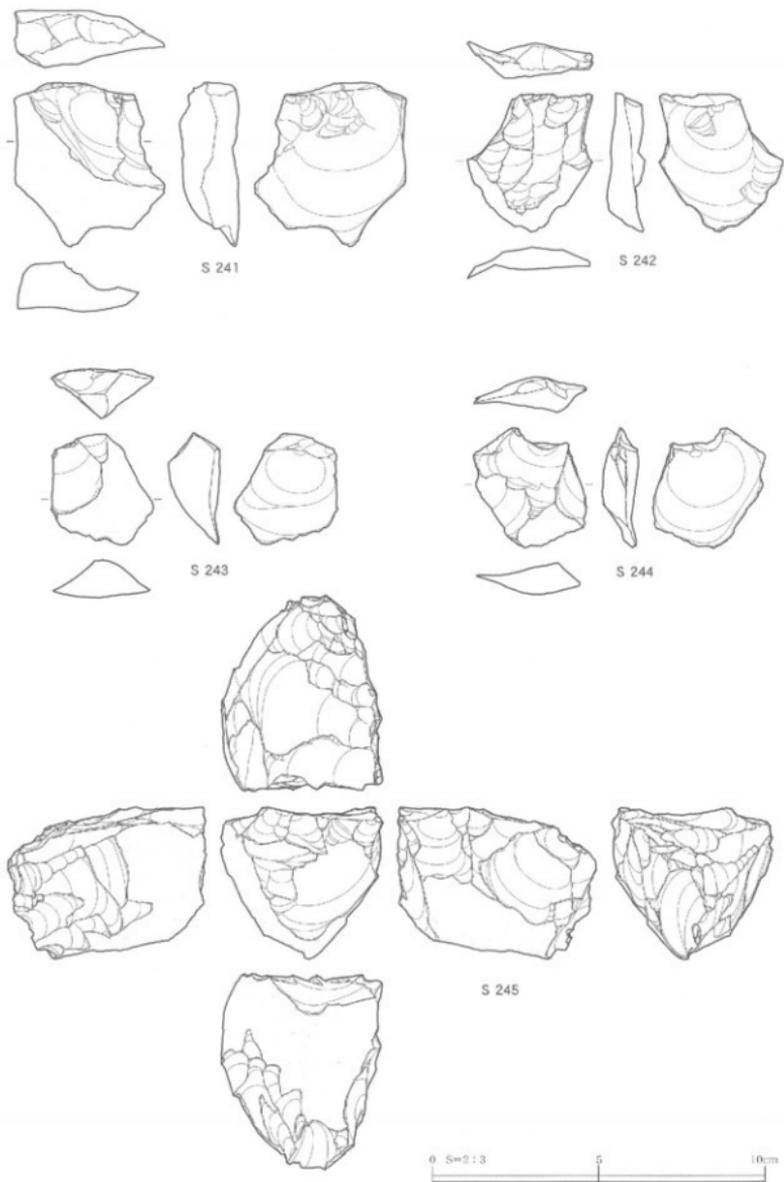




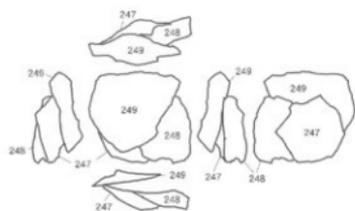
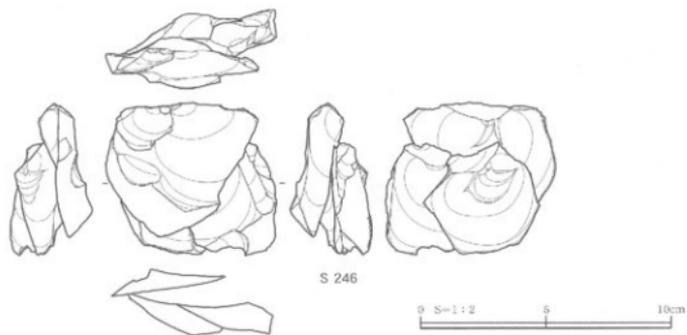
第119図 接合資料(5)



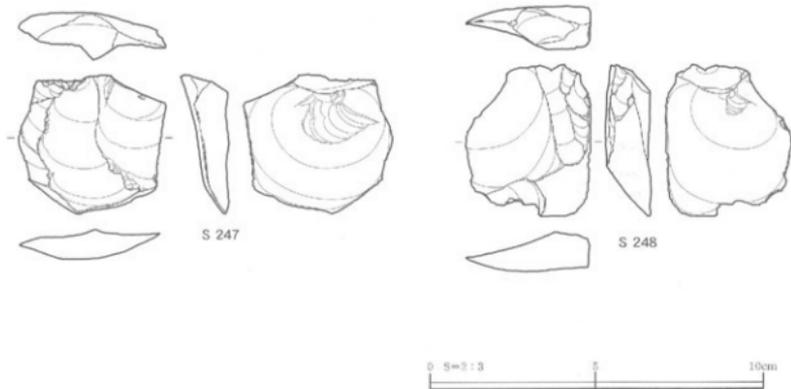
第120図 接合資料(6)

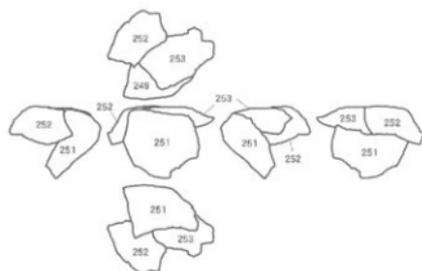
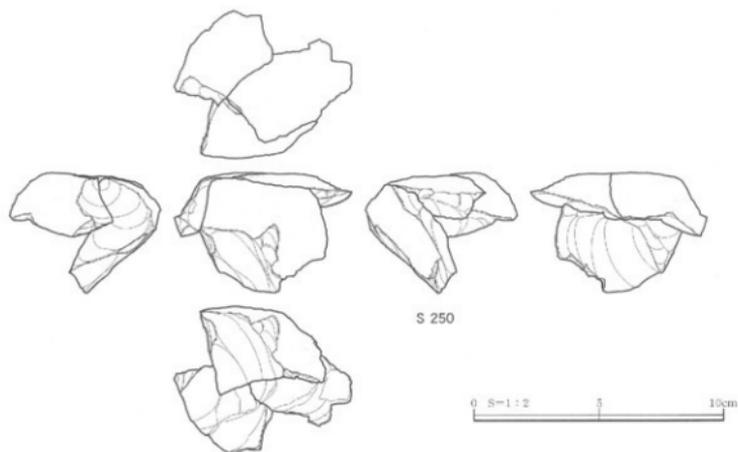
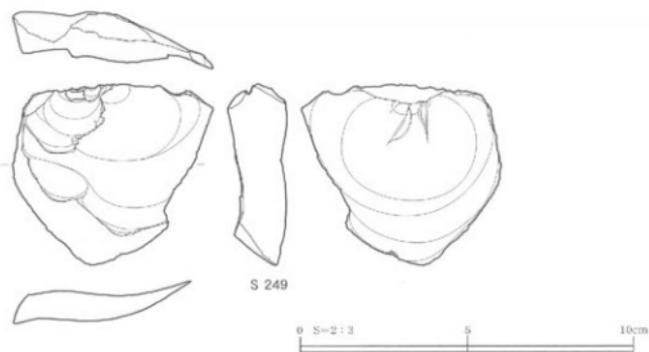


第121図 接合資料(7)

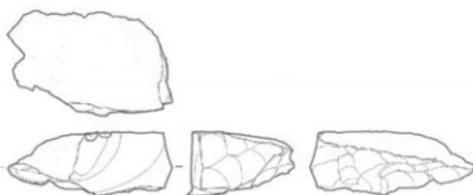
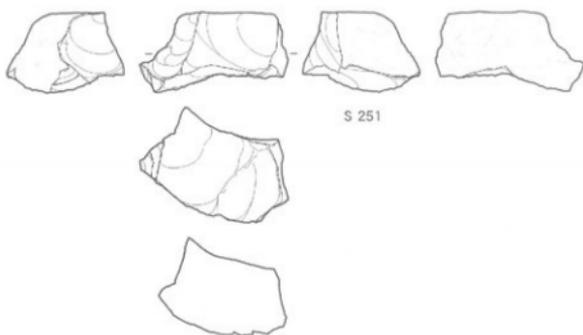
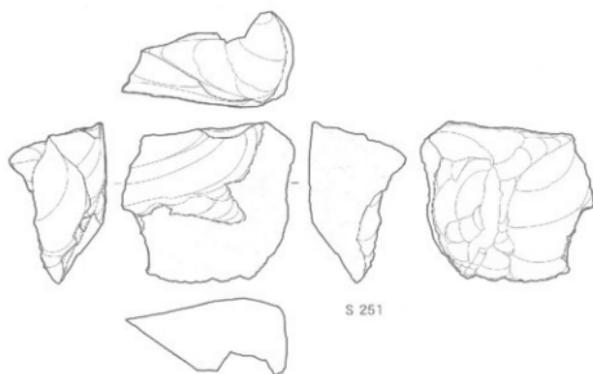


剥離作業の順番
S 249 → S 247・248

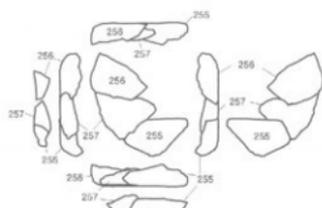
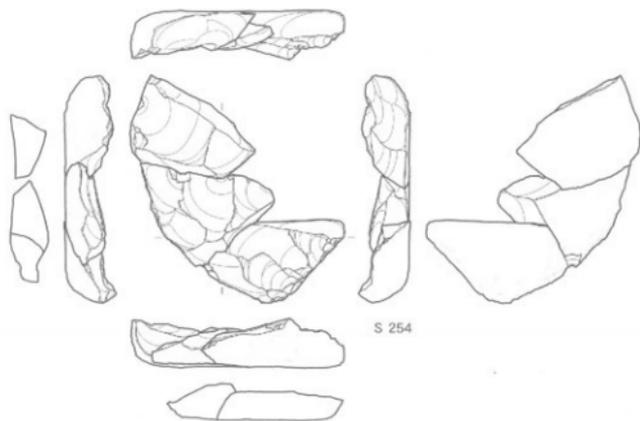




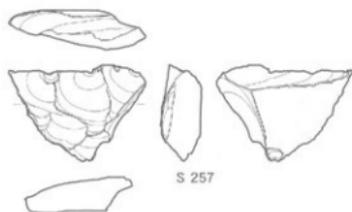
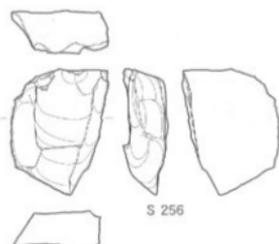
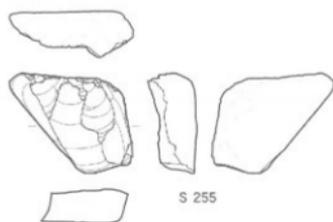
第123図 接合資料(9)



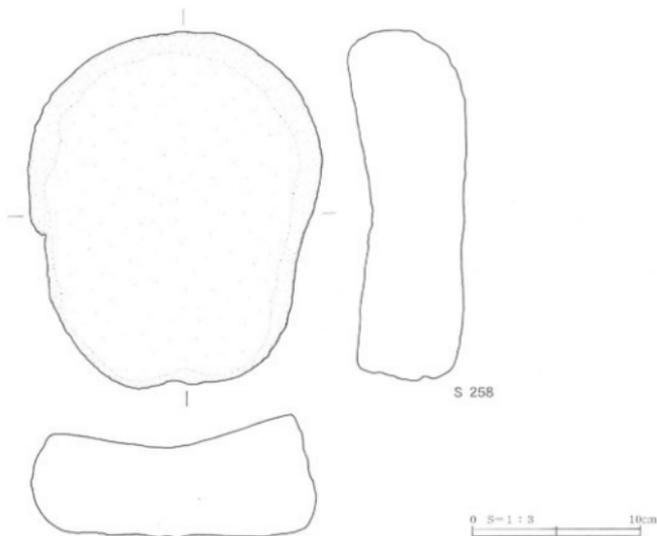
第124図 接合資料 (10)



剥離作業の順番
S 255・256→S 257



第125図 接合資料 (11)



第126図 遺構外出土石器 (24)

4点を図示した。S258は楕円形を呈し、厚みのある扁平な軽石を素材とする。扁平な一面にのみ、磨痕による窪みがみられる。S260は約半分が欠損しているが、扁平な一面は光沢をもつほど磨滅している。S261は一部欠損しているが、両面および側面に磨痕、凹痕、敲打痕がそれぞれみられる。

有孔石製品 (S262~264)

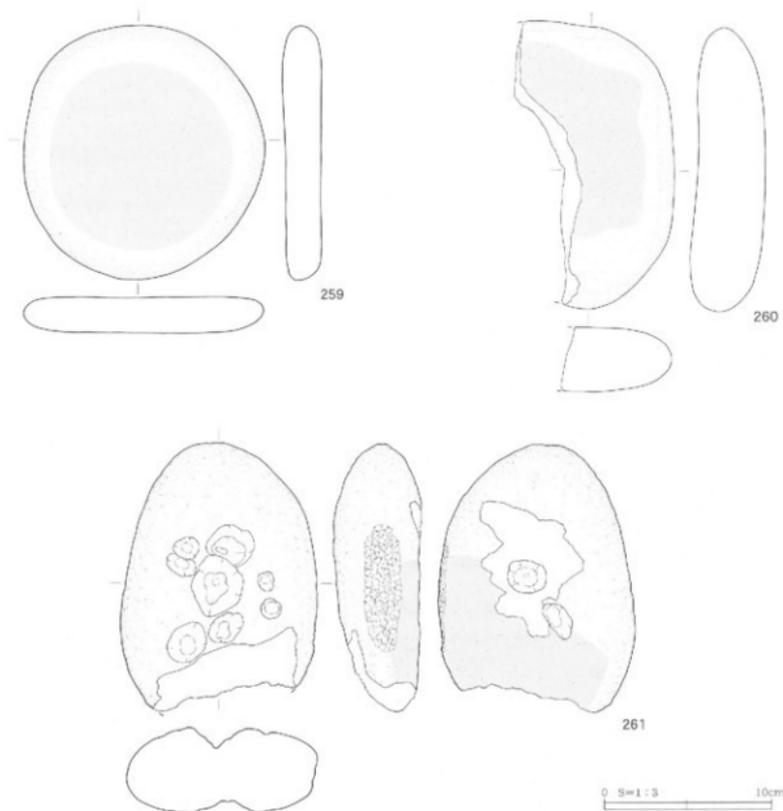
4点出土している。遺構内出土1点、遺構外出土3点で、遺構外出土が多い。遺構外出土3点の出土位置は、調査区東側に偏っており、特に、S262、263は遺物集中区的位置するグリッドから出土している。

3点とも図示した。いずれも形態に規則性は見いだせない。S262、263は扁平な礫のほぼ中央に両面から穿孔を施している。S264はやや不整形な礫の中央よりややずれた位置に穿孔を施している。石材はアイサイト、頁岩、凝灰岩を石材とし偏りが無い。

不明石器 (S265~268)

礫石器の中で、何らかの人為的な加工が施されているものの、刃部或使用痕が認められないものを不明石器とし、一括した。形態など様々であり、同性格のものではない。と思われる。6点出土している。遺構内出土2点、遺構外出土4点で、遺構外出土が多い。出土分布はやや調査区東側に偏る傾向がみられる。

4点とも図示した。S132は半円状の礫の平坦面に深い凹痕がみられる。S136、137は一部欠損しているが、棒状を呈し、断面形は隅丸の方形である。石棒の可能性がある。S268は不整な楕円形を呈し、側面の一部に磨痕を施し水平になるように仕上げている。正面が分からないので、水平面を底面として考えた。その場合、側面はほぼ左右対称になる。形状から石冠の可能性も考えられようが、類例が見あたらず、性格は不明である。石材は安山岩、アイサイト、頁岩、凝灰岩、閃緑岩、ひん岩



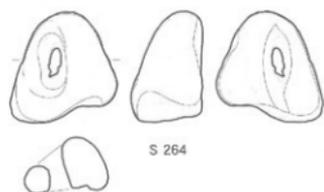
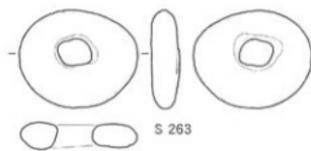
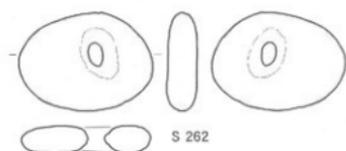
第127図 遺構外出土石器 (25)

を石材とし、それぞれ異なる石材が利用されている。

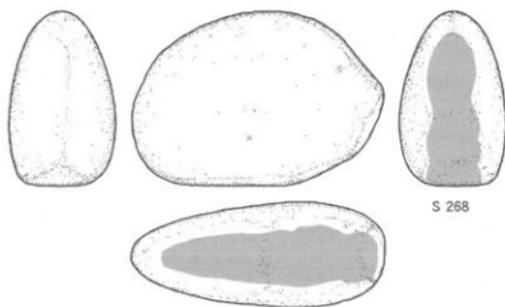
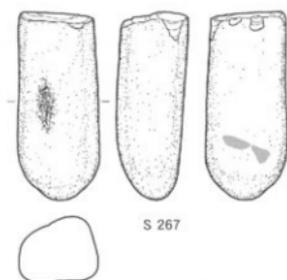
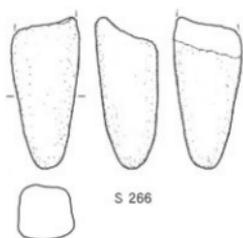
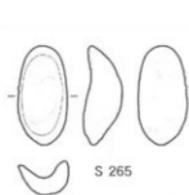
自然礫

本遺跡からは、人為的な加工の痕跡がみられない自然礫が1002点 (257.7kg) 見つっている。いずれもIV層中や遺構内から出土しており、自然に流入したとは考えられず、石器製作などのため遺跡内に持ち込まれたものと思われる。

17種の石材が確認された (第30表)。安山岩や頁岩など、本遺跡でも主にツール類に利用される石材がほとんどである。おおむね奥羽山脈から産出されたものである。北上山地系の石材はチャートと片麻岩のみで、どちらの石材もツール類に利用される石材ではないので、何のために持ち込まれたかは不明である。遺構内から出土する自然礫も多く、特にRA003は群を抜いて多い。RA003は床面上からフレイクが集中して出土するなどの特徴も見受けられ、この自然礫の多さと含め、石器製作



0 S=1:2 5 10cm



0 S=1:3 5 10cm

第128図 遺構外出土石器(26)

第28表 石器観察表 遺構外(26次分)

発掘 番号	写出 番号	器 種	出土位置	形状	分類	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	先鋒角 (度 ¹)	形状(図)	備 考
S85	62	石鏃	4 N22g	刃部下位	1鏃	頁岩1	34.03	10.09	4.68	1.20	89	定形	中条館5.12cm
S86	62	石鏃	4 N24a	刃部	1鏃	頁岩1	31.61	11.26	6.21	1.85	26	定形欠損	中条館5.16cm
S87	62	石鏃	4 N15f	刃部下位	1鏃	頁岩1	27.93	11.28	6.67	1.44	28	定形	中条館4.6cm
S88	62	石鏃	4 N25m	刃部	1鏃	頁岩	24.09	10.40	4.01	0.73	36	定形	中条館4.02cm
S89	62	石鏃	4 M20m	刃部	1鏃	頁岩1	22.41	10.33	4.96	0.70	41	定形	中条館4.88cm
S90	62	石鏃	4 N19d	刃部	1鏃	頁岩1	22.21	9.93	4.84	0.68	32	定形	中条館5.06cm
S91	62	石鏃	4 N18c	刃部	2鏃	頁岩1	33.96	12.13	3.89	2.29	43	定形	
S92	62	石鏃	4 N18d	刃部	2鏃	頁岩1	29.54	9.80	3.41	1.45	37	定形	
S93	62	石鏃	4 N18e	刃部	2鏃	頁岩1	34.85	15.36	7.17	3.39	46	定形	
S94	62	石鏃	4 N22g	刃部	2鏃	頁岩1	33.63	13.79	7.21	2.61	35	定形	
S95	62	石鏃	4 N22d	刃部	3鏃	頁岩1	27.53	14.72	6.35	2.45	60	定形	
S96	62	石鏃	4 N17f	刃部	3鏃	頁岩1	31.09	18.20	7.38	4.06	48	定形	
S97	62	石鏃	4 N19b	刃部	3鏃	頁岩1	30.78	18.18	5.89	3.03	68	定形	
S98	62	石鏃	4 N16c	刃部	3鏃	頁岩	22.47	15.01	4.49	1.15	(67)		
S99	62	石鏃	4 N19b	刃部	5鏃	赤色頁岩1	25.37	20.18	8.22	2.20	60		
S100	62	石鏃	4 N18d	刃部	5鏃	赤色頁岩1	18.40	22.89	5.20	0.93	66		
S101	62	石鏃	4 N20a	刃部	5鏃	頁岩1	25.07	23.65	5.27	1.22	74		
S102	62	石鏃	4 N17f	刃部	5鏃	赤色頁岩1	26.29	23.35	3.05	1.06	46		
S103	62	石鏃	4 N25k	刃部	5鏃	頁岩1	(37.90)	22.85	10.21	3.85	—		
S104	62	石鏃	4 N21g	刃部	1鏃	凝灰岩	34.78	8.19	5.13	1.28	17	定形	
S105	62	石鏃	4 N21g	刃部	1鏃	赤色頁岩1	29.79	4.76	3.51	0.6	12	定形	
S106	62	石鏃	4 N15c	刃部	1鏃	頁岩1	30.77	8.36	6.7	1.31	25	定形	
S107	62	石鏃	4 N15c	刃部	1鏃	頁岩1	32.74	8.2	6.49	1.75	29	定形	
S108	62	石鏃	4 N17g	刃部	2 a鏃	頁岩	25.16	22.34	6.82	2.99	76	定形?	
S109	62	石鏃	4 N23d	刃部	2 a鏃	頁岩2	65.72	43.72	17.1	32.99	53	定形?	
S110	62	石鏃	4 N25f	刃部	2 b鏃	下位	34.07	22.55	8.81	5.88	57	定形?	
S111	62	石鏃	4 N18d	刃部	4鏃	頁岩1	32.28	8.5	4.68	1.20	31		
S112	62	石鏃	4 N22g	刃部下位	1 a鏃	頁岩3	45.24	63.31	9.13	18.98	—	定形	中条館13.76cm
S113	62	石鏃	4 N16f	刃部	1 a鏃	頁岩7	45.09 (22.51)		8.24	5.84	—	1/2欠損	
S114	62	石鏃	4 N16f	刃部	1 b鏃	頁岩2	51.22	72.00	9.94	20.47	—	定形	中条館13.72cm アスファルト付着
S115	62	石鏃	4 N20b	刃部	1 b鏃	頁岩2	41.80	66.89	15.71	30.61	—	定形?	中条館17.80cm
S116	62	石鏃	R G05a	地層土中	2鏃	頁岩1	69.81	36.12	10.37	16.30	—	刃部欠損	中条館8.14cm
S117	62	石鏃	4 N18d	刃部	2鏃	頁岩1	33.29	32.07	8.02	13.64	—	定形	中条館11.85cm
S118	62	石鏃	4 N18d	刃部	3鏃	頁岩2	68.33	33.57	7.39	20.94	—	定形	中条館12.20cm
S119	62	石鏃	4 M22p	刃部	4鏃	頁岩2	91.63	37.29	17.51	38.87	—		中条館17.68cm
S120	62	鹿状石鏃	4 N21e	刃部	—	凝灰岩	73.27	37.16	13.49	33.26	—	定形	
S121	62	鹿状石鏃	4 N21b	刃部下位	—	頁岩2	62.21	40.28	15.28	20.33	—	定形	
S122	62	鹿状石鏃	R G05a	地層土中	—	頁岩1	114.91	43.80	24.75	95.41	—	定形	
S123	62	鹿状石鏃	5 M1 w	刃部下位	—	頁岩1	94.00	28.04	14.52	17.61	—	定形	
S124	62	鹿状石鏃	4 N21g	刃部	—	頁岩1	93.93	49.10	23.83	86.61	—	定形	
S125	62	丸頭石	4 N18c	刃部	—	頁岩1	(45.03)	23.31	14.07	(32.81)	—	1/2欠損	
S126	62	小豆石	4 N23j	刃部	—	頁岩3	103.46	62.66	23.34	118.68	—		
S127	62	小豆石	5 M2 r	刃部	—	頁岩1	109.66	34.52	25.46	114.37	—		
S128	62	不定形石鏃	R G54(N22g)	地層土中	1鏃	頁岩2	78.67	19.18	7.02	10.84	—		アスファルト付着
S129	62	不定形石鏃	4 N20e	刃部	1鏃	頁岩1	70.79	49.92	23.02	41.44	—		
S130	62	不定形石鏃	4 N19d	刃部	1鏃	頁岩4	72.37	38.55	14.03	34.19	—		
S131	62	不定形石鏃	4 N19f	刃部	1鏃	頁岩1	35.48	34.73	12.02	9.77	—		
S132	62	不定形石鏃	4 N23p	刃部	1鏃	頁岩2	51.39	80.11	13.16	41.13	—		
S133	62	不定形石鏃	4 N19b	刃部	1鏃	頁岩2	54.27	72.24	19.09	73.79	—		
S134	62	不定形石鏃	R G54(N22g)	地層土中	2鏃	頁岩2	30.75	33.02	10.92	10.39	—		
S135	62	不定形石鏃	4 N20g	刃部下位	1鏃	頁岩2	70.03	72.74	18.70	58.96	—		
S136	62	不定形石鏃	4 M15a	刃部	2鏃	頁岩1	48.65	70.18	22.08	77.01	—		
S137	62	不定形石鏃	4 N17e	刃部	1鏃	頁岩	32.20	11.84	6.33	2.15	—		
S138	62	不定形石鏃	4 N12a	刃部	3鏃	頁岩2	43.97	46.78	20.67	34.78	—		
S139	62	不定形石鏃	4 N16d	刃部下位	3鏃	頁岩1	54.18	35.74	14.69	35.41	—		
S140	63	燧石	4 M20v	刃部	—	クイサイト	61.91	120.09	49.82	114.57	—		自然面残る
S141	63	燧石	4 N23g	刃部	—	凝灰岩	94.11	43.87	635.56	—	—		自然面残る
S142	63	打製石鏃	4 N24e	刃部上位	—	頁岩2	272.00	103.30	32.35	1042.31	—		
S143	63	打製石鏃	4 N23c	刃部	—	頁岩1	73.66	63.33	26.33	180.42	—		

地質 番号	町田 番号	部 種	地上地質	層位	分類	石 質	長さ (m)	幅 (m)	厚さ (m)	重量 (g)	光澤面 (%)	塊状形状	備 考
S144	63	断層石帯	4 N24b	岩層	—	ひん片	85.05	38.97	21.27	119.15	—	—	
S145	63	断層石帯	4 N23a	岩層	—	ひん片	99.91	37.08	26.46	73.08	—	—	岩層欠損
S146	63	断層石帯	4 N23a	岩層	A層	ひん片	82.63	76.93	51.77	406.71	—	—	変形
S147	63	断層石帯	4 N14a	岩層	A層	凝灰岩	129.83	36.07	31.75	395.21	—	—	変形
S148	63	断層石帯	4 N23c	岩層	D層	クイサイト	130.40	79.63	41.13	670.09	—	—	1/4欠損
S149	63	断層石帯	4 N19b	岩層	B層	クイサイト	93.68	37.47	33.98	229.26	—	—	1/4欠損
S130	63	断層石帯	4 M18r	岩層	C層	赤褐色砂岩	105.12	86.75	62.49	869.8	—	—	変形
S131	63	断層石帯	4 N23d	岩層	C層	安山岩	114.19	73.78	54.86	717.83	—	—	変形
S132	63	断層石帯	4 N24m	岩層	G層	安山岩	67.76	71.39	60.84	419.33	—	—	変形
S133	63	断層石帯	4 N20e	岩層	G層	凝灰岩	130.74	35.05	29.45	378.26	—	—	1/4欠損
S154	61	断層石帯	4 N21d	岩層	F層	安山岩	130.15	63.21	36.20	437.86	—	—	変形
S155	61	断層石帯	4 N25a	岩層	E層	凝灰岩	92.78	77.74	59.41	525	—	—	変形
S156	61	断層石帯	4 N15e	岩層	G層	砂岩	98.22	64.95	4.18	119.17	—	—	1/4欠損
S157	61	断層石帯	4 N17a	岩層	—	頁岩1	38.37	35.97	4.09	23.02	—	—	打点: 上下
S158	61	断層石帯	4 N15a	岩層	—	頁岩1	30.27	25.49	9.71	7.13	—	—	打点: 上下左右
S159	61	断層石帯	4 N20b	岩層	—	頁岩1	27.56	36.33	27.83	20.9	—	—	打点: 上下
S160	61	断層石帯	4 N17d	岩層	岩層下段	頁岩2	34.6	42.7	24.02	46.91	—	—	打点: 上下
S161	61	断層石帯	4 N17e	岩層	C2層	頁岩2	43.39	43.35	8.69	19.64	—	—	
S162	61	断層石帯	4 M19j	岩層	D1層	頁岩1	60.69	22.23	6.65	8.44	—	—	
S163	61	断層石帯	4 M18i	岩層	D2層	頁岩1	66.19	34.06	16.55	47.35	—	—	
S164	61	断層石帯	4 N19d	岩層	D1層	頁岩6	60.18	35.79	11.47	19.12	—	—	
S165	61	断層石帯	R G05a	断層上段	D2層	頁岩2	84.54	36.36	13.00	33.51	—	—	
S166	61	断層石帯	4 N17f	岩層上段	D2層	頁岩1	47.72	19.03	5.31	3.03	—	—	
S167	61	断層石帯	4 N23b	岩層	B1層	頁岩2	124.96	32.18	20.41	61.99	—	—	
S168	61	断層石帯	4 M20a	岩層	C2層	頁岩1	43.07	28.22	9.22	11.58	—	—	
S169	61	断層石帯	4 M13p	岩層	A1層	頁岩2	61.45	25.65	15.29	43.16	—	—	
S170	61	断層石帯	4 N19a	岩層	D2層	頁岩1	61.22	25.91	6.76	6.55	—	—	
S171	61	断層石帯	4 N23i	岩層	D2層	頁岩1	61.63	44.34	7.28	10.53	—	—	
S172	61	断層石帯	4 N16d	岩層下段	C3層	頁岩1	65.67	35.81	12.46	26.48	—	—	
S173	61	断層石帯	4 N15i	岩層	D2層	頁岩5	80.58	42.30	8.80	13.47	—	—	
S174	61	断層石帯	4 N20a	岩層	C2層	頁岩1	30.13	43.93	7.64	8.80	—	—	
S175	61	断層石帯	4 N25k	岩層	C2層	頁岩2	39.29	28.20	7.23	4.87	—	—	
S176	61	断層石帯	4 M13t	岩層	D1層	頁岩1	37.69	30.33	10.95	13.07	—	—	
S177	61	断層石帯	4 N24a	岩層	C3層	黒雲岩	25.28	20.70	5.74	2.12	—	—	
S178	61	断層石帯	4 M13i	岩層	C3層	頁岩1	65.10	50.02	19.46	41.14	—	—	
S179	61	断層石帯	4 N16a	岩層	D3層	頁岩2	41.17	40.19	9.05	14.02	—	—	
S180	61	断層石帯	4 N13b	岩層	C2層	頁岩2	49.22	42.68	11.25	23.29	—	—	
S181	61	断層石帯	4 N23n	岩層	C2層	頁岩1	44.95	36.48	10.97	12.18	—	—	
S182	61	断層石帯	4 N22b	岩層	C2層	頁岩2	41.49	46.15	8.41	13.13	—	—	
S183	61	断層石帯	4 N24c	岩層	B1層	頁岩2	46.44	45.67	16.80	24.67	—	—	
S184	61	断層石帯	4 N22c	岩層	B2層	頁岩1	33.41	43.36	20.29	29.72	—	—	
S185	61	断層石帯	4 N21d	岩層	D1層	頁岩4	40.36	45.33	8.97	15.03	—	—	
S186	61	断層石帯	4 N12a	岩層	B2層	頁岩1	33.96	49.07	12.63	20.91	—	—	
S187	61	断層石帯	4 N16d	岩層下段	B2層	頁岩4	70.29	72.22	27.56	103.16	—	—	
S188	65	断層石帯	4 M21m	岩層	C1層	頁岩2	38.25	60.00	16.49	11.63	—	—	
S189	65	断層石帯	4 N21e	岩層	A2層	頁岩2	58.57	89.12	18.22	96.9	—	—	
S190	65	断層石帯	4 N23a	岩層	D2層	頁岩1	30.38	54.23	13.10	15.24	—	—	自然崩壊
S191	65	断層石帯	4 N21b	岩層	C2層	頁岩1	35.08	47.36	9.14	14.02	—	—	自然崩壊
S192	65	断層石帯	3 M22y	岩層下段	D2層	頁岩1	35.59	65.72	9.84	11.21	—	—	自然崩壊
S193	65	断層石帯	4 N24a	岩層下段	—	頁岩3	44.06	40.53	7.84	13.00	—	—	
S194	65	断層石帯	4 N19b	岩層	—	頁岩4	43.74	43.33	10.10	17.86	—	—	自然崩壊
S195	65	断層石帯	4 N23a	岩層	—	頁岩4	65.33	52.30	12.90	38.81	—	—	自然崩壊
S196	65	断層石帯	4 N23p	岩層	—	黒雲岩	24.36	29.71	6.46	3.31	—	—	
S197	65	断層石帯	4 N24a	岩層	—	頁岩3	35.41	36.33	9.93	25.13	—	—	自然崩壊
S198	65	断層石帯	4 N24a	岩層	—	頁岩4	38.05	42.96	8.63	12.40	—	—	
S199	65	断層石帯	4 N20c	岩層	—	頁岩2	45.64	47.49	14.06	15.41	—	—	自然崩壊
S200	65	断層石帯	4 N22a	岩層下段	—	頁岩2	63.62	66.31	11.33	20.36	—	—	自然崩壊
S201	65	断層石帯	4 M17y	岩層	—	頁岩3	49.37	38.05	10.75	19.78	—	—	自然崩壊
S202	65	断層石帯	4 N19e	岩層	—	頁岩3	36.17	40.11	9.99	7.76	—	—	
S203	65	断層石帯	4 N16f	岩層	—	頁岩2	24.81	49.44	10.73	8.41	—	—	
S204	65	断層石帯	4 N18g	岩層	—	凝灰岩	34.31	45.96	11.15	14.49	—	—	

2 検出した遺構・遺物

検出番号	発掘層	遺構	出土位置	層位	分類	材質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	発光内径(mm)	残存状態	備考
S205	65	フレイク	4 N13d	片層	—	頁岩?	30.25	38.45	14.90	15.17	—	—	自然面残る
S206	65	フレイク	4 N23 a	片層	—	頁岩1	36.52	45.38	7.77	9.03	—	—	自然面残る
S207	65	フレイク	4 N25 1	片層下位	—	頁岩1	54.91	98.68	22.27	85.01	—	—	自然面残る
S208	65	フレイク	4 N22 a	片層	D 2 類	頁岩1	32.95	23.69	7.41	4.06	—	—	—
S209	65	フレイク	4 N18 f	片層	D 3 類	頁岩1	34.53	32.13	8.34	8.61	—	—	自然面残る
S210	65	フレイク	4 N16 c	片層下位	B 2 類	頁岩3	82.03	35.59	13.88	35.72	—	—	自然面残る
S211	65	フレイク	4 M23 a	片層	B 3 類	頁岩2	36.97	49.70	11.20	10.16	—	—	自然面残る
S212	65	フレイク	4 N17 e	片層	B 2 類	頁岩2	23.66	37.66	14.88	7.63	—	—	自然面残る
S213	65	フレイク	4 N24 e	片層	B 3 類	頁岩2	46.02	37.21	16.10	14.06	—	—	—
S214	65	フレイク	4 N24 a	片層	C 2 類	頁岩2	39.98	65.93	10.31	18.36	—	—	自然面残る
S215	65	片層	4 M23 s	片層	A 1 類	頁岩1	102.15	85.09	73.35	840.43	—	—	自然面残る
S216	65	片層	5 N 2 1	片層	B 3 類	頁岩2	51.07	88.70	50.23	282.08	—	—	自然面残る
S217	65	石核	5 N 1 a	片層下位	B 1 類	頁岩1	39.59	44.38	30.00	31.21	—	—	自然面残る
S218	65	石核	4 N20 a	片層	A 3 類	頁岩1	38.93	56.66	31.30	32.89	—	—	自然面残る
S219	66	心核	4 M15 s	片層	D 2 類	頁岩1	44.61	52.22	24.72	24.15	—	—	—
S220	66	心核	4 N23 d	片層	A 1 類	頁岩1	92.03	62.63	27.61	151.29	—	—	自然面残る
S221	66	心核	4 N15 f	片層	C 3 類	頁岩4	167.50	51.73	45.08	368.32	—	—	自然面残る
S258	68	石籠型	4 N19 g	片層下位	1 類	安山岩	217.50	174.00	74.00	2128.38	—	—	字形
S259	69	石籠型	5 N 3 s	片層	1 類	砂岩	153.69	143.39	20.28	795.30	—	—	定形
S260	69	石籠型	5 N 2 1	片層下位	1 類	火山岩	177.00	165.02	39.11	787.67	—	—	1/4欠損
S261	69	石籠型	4 M10 t	片層	3 類	輝岩	117.93	163.00	57.33	685.81	—	—	1/4欠損
S262	69	石籠石製品	4 N17 f	片層	—	頁岩2	39.70	53.75	11.29	31.61	—	—	定形
S263	69	石籠石製品	4 N17 a	片層	—	デイスサイト	40.22	47.25	11.54	22.94	—	—	定形
S264	69	石籠石製品	4 M22 c	片層	—	輝岩岩	43.23	43.36	33.97	10.49	—	—	定形
S265	69	小形石籠	4 N20 c	片層	—	デイスサイト	60.32	30.30	22.63	34.48	—	—	定形
S266	69	小形石籠	4 M21 1	片層	—	火山岩	53.27	49.94	37.07	160.36	—	—	1/2欠損
S267	69	小形石籠	4 N25 d	片層	—	輝岩岩	115.78	48.67	39.85	402.90	—	—	1/4欠損
S268	69	小形石籠	5 N 2 1	片層	—	安山岩	105.89	153.68	64.25	1475.00	—	—	定形

第29表 石器観察表 接合資料

発掘層	発掘層	遺構	出土位置	層位	分類	材質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	備考	
223	66	フレイク	4 M15 s	片層	B 2 類	頁岩1	30.35	32.77	9.99	7.06	自然面残る 二次加工あり	
224	66	片層	4 M21 f	片層	A 2 類	頁岩1	48.03	65.72	36.24	85.92	自然面残る	
225	66	フレイク	4 M20 r	片層	D 2 類	頁岩1	39.20	30.41	18.12	16.68	自然面残る	
226	66	フレイク	4 M20 u	片層	C 2 類	頁岩1	29.35	34.35	12.76	7.93	自然面残る	
228	66	フレイク	4 N24 c	片層下位	D 1 類	火山頁岩2	63.98	47.61	18.51	55.32	自然面残る	
229	66	フレイク	池田遺	4 層下位	C 2 類	火山頁岩2	47.06	73.31	17.13	84.07	—	
230	66	フレイク	池田遺	4 層下位	D 1 類	火山頁岩2	30.12	59.33	14.64	16.28	自然面残る	
232	67	フレイク	4 M17 1	片層	B 2 類	頁岩6	21.89	31.32	7.21	4.00	自然面残る	
233	67	フレイク	4 M16 t	片層	D 1 類	頁岩6	11.97	23.04	4.62	1.13	自然面残る	
234	67	心核	4 M10 1	片層	A 1 類	頁岩6	74.69	43.10	37.80	19.41	自然面残る	
235	67	フレイク	4 M16 t	片層	D 2 類	頁岩6	13.53	33.71	9.95	3.31	—	
236	67	フレイク	4 M16 t	片層	B 2 類	頁岩6	26.67	41.59	7.36	4.37	自然面残る	
237	67	石核	4 M16 o	片層	B 3 類	頁岩6	52.61	74.90	37.34	123.22	自然面残る	
239	67	フレイク	4 M13 1	片層	C 2 類	頁岩2	37.84	33.60	9.89	8.80	自然面残る	
240	67	フレイク	4 M15 e	片層	D 1 類	頁岩2	25.55	14.67	3.59	0.98	自然面残る	
241	67	フレイク	4 M15 e	片層	B 3 類	頁岩2	49.92	46.06	10.16	21.64	自然面残る 二次加工あり	
242	67	フレイク	4 M15 p	片層	B 2 類	頁岩2	44.13	37.04	10.25	12.08	自然面残る 二次加工あり	
243	67	フレイク	4 M15 1	片層	B 2 類	頁岩2	35.11	30.22	15.15	10.60	自然面残る	
244	67	フレイク	4 M14 1	片層	C 3 類	頁岩2	24.74	26.01	12.05	8.00	自然面残る	
245	67	石核	4 M15 s	片層	A 3 類	頁岩2	61.52	44.84	40.55	138.89	自然面残る	
247	67	フレイク	4 N23 c	片層	C 2 類	頁岩2	49.83	42.58	14.31	15.91	自然面残る	
248	68	フレイク	R G05 f	堆積土下位	B 2 類	頁岩2	47.53	38.99	14.13	29.88	自然面残る 二次加工あり	
249	67	フレイク	4 N23 c	片層	B 1 類	頁岩1	55.33	62.56	14.71	29.99	自然面残る	
251	67	片層?	4 N25 o	片層	B 2 類	頁岩1	48.77	50.06	31.16	53.91	自然面残る	
250	252	67	フレイク	4 N25 o	片層	D 1 類	頁岩1	22.91	44.94	22.13	29.96	自然面残る
253	67	フレイク	4 N25 o	片層	D 1 類	頁岩1	30.22	49.53	19.12	32.37	自然面残る	
255	68	フレイク	R A003	堆積土下位	D 1 類	頁岩1	29.15	31.28	11.75	13.45	自然面残る 二次加工あり	
254	256	68	フレイク	R A003	堆積土下位	D 1 類	頁岩1	39.02	27.55	12.98	15.11	自然面残る 二次加工あり
257	68	フレイク	R A003	堆積土下位	D 1 類	頁岩1	29.29	40.89	11.86	10.18	自然面残る 二次加工あり	

第30表 自然礫集計表

点数(点)	安山岩	ダイサイト	砂岩	頁岩	珪質頁岩	凝灰岩	凝結凝灰岩	礫岩	閃綠岩	花崗閃綠岩	ひん岩	チャート	石英	流紋岩	片麻岩	玄武岩	蛇石	合計
RA003	43(11)	25(14)	4(1)	39(18)	0	23(8)	0	6(3)	3(1)	3(1)	2(1)	1(0)	1(0)	1(0)	0	0	0	153(58)
RA004	11(1)	11(5)	1(0)	6(1)	0	3(2)	0	1(0)	0	0	0	0	0	4(4)	0	0	1(1)	36(14)
RA005	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)
RA006	1(1)	2(2)	1(0)	4(1)	0	1(1)	1(1)	0	0	0	0	0	2(2)	0	1(1)	0	0	15(6)
RE001	21(6)	18(10)	2(1)	6(1)	0	1(0)	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	1(1)	50(20)
RE002	9(3)	2(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11(3)
RE003	2(0)	3(1)	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6(2)
RE004-5	9(1)	9(4)	3(1)	2(2)	0	1(0)	0	0	0	1(0)	0	0	0	0	0	0	0	35(11)
RD042	9(1)	1(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9(1)
RD043	2(0)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2(0)
RD044	1(0)	2(1)	0	1(0)	0	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5(2)
RD045	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RD046	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RD047	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RD048	1(0)	8(4)	1(0)	6(1)	0	0	0	2(2)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27(13)
RH001	11(2)	7(5)	2(0)	9(4)	0	1(0)	0	1(0)	0	0	0	0	1(0)	0	0	0	0	33(9)
RF018	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RF019	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
集積外	262(70)	109(47)	16(8)	113(52)	1(1)	62(32)	0	12(6)	10(4)	9(4)	8(4)	1(0)	6(3)	7(2)	0	1(1)	11(11)	621(233)
合計	389(102)	194(91)	30(12)	192(77)	1(1)	93(44)	1(1)	23(10)	13(5)	13(5)	10(3)	2(0)	9(3)	14(7)	3(1)	1(1)	16(16)	1002(375)

※ () は破損していた礫の数を示している。

重量(g)	安山岩	ダイサイト	砂岩	頁岩	珪質頁岩	凝灰岩	凝結凝灰岩	礫岩	閃綠岩	花崗閃綠岩	ひん岩	チャート	石英	流紋岩	片麻岩	玄武岩	蛇石	合計
RA003	11945	2700	200	1880	0	5245	0	1790	100	430	520	30	35	315	0	0	0	20190
RA004	2505	855	40	285	0	330	0	350	0	0	0	0	0	1040	0	0	130	5375
RA005	0	0	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
RA006	30	245	5	190	0	10	100	30	0	0	0	0	150	0	5	0	0	765
RE001	12655	6380	310	225	0	15	0	0	0	0	0	0	0	5600	0	0	10	25450
RE002	3365	880	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4015
RE003	475	1135	235	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1845
RE004-5	1015	1260	320	275	0	10	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	100	3990
RD042	115	340	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	455
RD043	650	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	650
RD044	80	90	0	20	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	290
RD045	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RD046	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RD047	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RD048	1725	1515	20	885	0	0	150	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4325
RH001	1780	1140	110	460	0	60	0	295	0	0	0	325	0	25	0	0	0	4045
RF018	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
RF019	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
集積外	101012	42035	3165	12290	10	4950	0	1175	2000	1485	960	110	595	3560	0	295	4690	182252
合計	137363	59395	4435	16300	10	10630	100	6770	2100	1925	1480	165	780	10540	3	295	4960	237632

との関連が考えられる。

また全ての自然礫について被熱の有無と破損の有無を視察した。ほとんどの自然礫に被熱痕は確認できなかった。破損の有無については、調査段階で割れてしまったものも若干、含まれており、確かなデータではないが、出土した自然礫のうち、約3割が欠損した状態で出土していた。これは比較的大きな安山岩でも、小さい頁岩でも同様な傾向が見受けられる。

(10) 古代の遺構・遺物

溝跡2条を検出した。いずれも縄文時代晩期の遺構面より上層のⅣa層上面で検出している。過去の調査において、53条の溝跡が見つかった。従って、今回の第26次調査で見つかった溝跡はR G 054、055とした。

溝跡 (R G)

R G 054 (第129図、写真図版25)

〈位置〉調査区やや東側に位置し、南北にのびる。

〈検出状況〉Ⅳa層上面で黒褐色のプランを確認した。

〈平面形・規模〉幅100～130cmを測り、深さは約75cmである。両端は共に調査区外へと伸びている。調査区内における長さは50mを測る。また、本遺構の南端は第24次調査区内で途絶えることが判っており、隣接する本宮熊堂B遺跡には達していない。断面形は「V」字状を呈している。北側の一部には陶器にテラス状の段が認められた。

〈重複関係〉R G 055と重複する。プラン検出段階で、色調の違いから本遺構のプランの方が明瞭で、R G 055のプランを切っていることを確認した。従って本遺構の方が新しいと判断した。

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし、3層に分層される。

〈遺物〉堆積土中から土師器の小片が出土している。残りが悪いので、図示していない。

また縄文時代の遺物が出土しているが、これは本遺構が縄文時代晩期の包含層や遺物集中区を切り込んで構築しているため、遺構の壁に堆積していた縄文時代の遺物が、堆積土中に流れ込んだものと考えられる。

〈時期〉小片であるが土師器の方が溝跡に伴う遺物と考えられ、古代の遺構と考えられる。ただ細かい時期を、これらの遺物で時期を決定することは難しいが、本遺構と重複し、本遺構より古いR G 055の堆積土中から10世紀前半の土師器がまとまって出土していることから、本遺構は10世紀前半以降に位置づけられる。

R G 055 (第130・131図、写真図版26・56・57)

〈位置〉調査区東南端5 N 1 s から5 N 4 g グリッドに位置する。

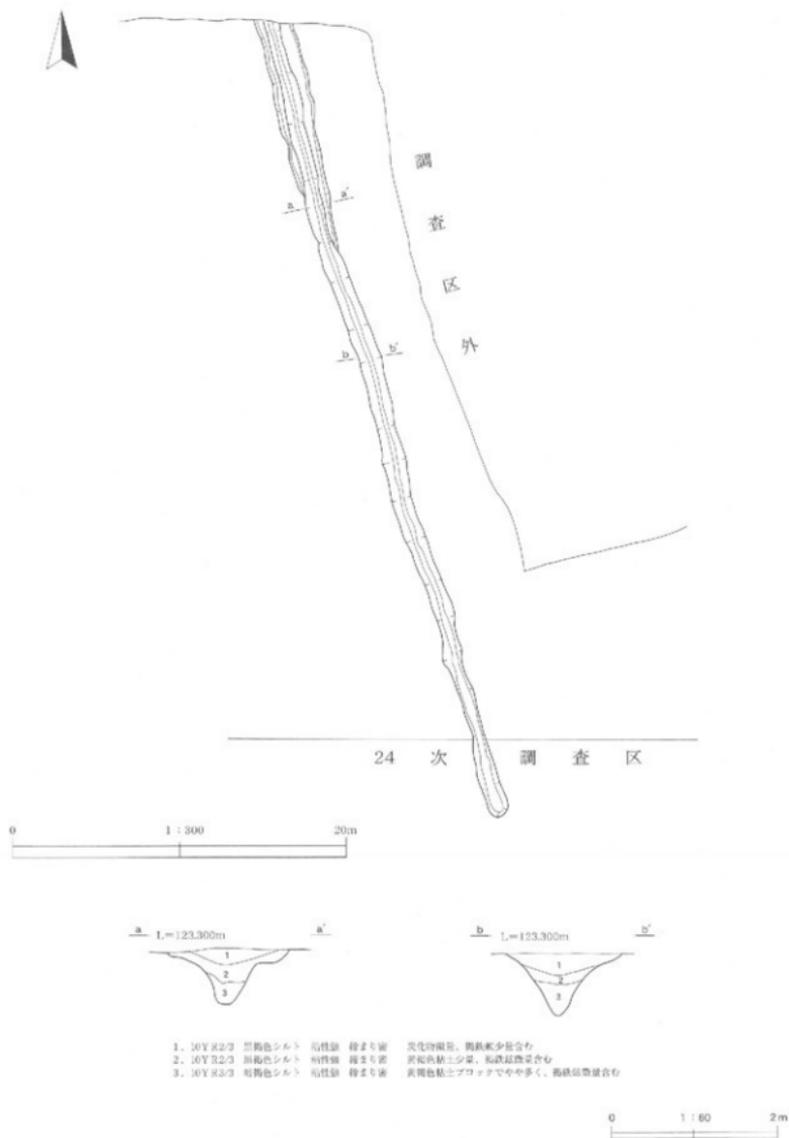
〈検出状況〉Ⅳa層上面でプランを確認した。

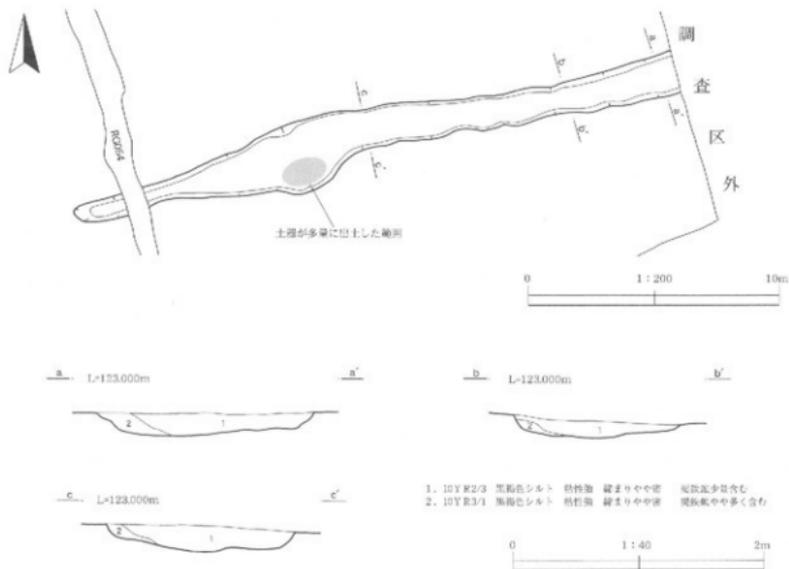
〈重複関係〉R G 054と重複する。本遺構の方が古い。また、旧河道とも重複しており、本遺構の方が新しい。

〈平面形・規模〉遺構は調査区外にのびており、規模は定かではないが、第26次調査区内においては、長さ24.5m、幅1～3mを測る。深さは14～20cmである。ほぼ直線的に伸び、南側の一部でやや幅が広がる。

〈堆積土〉黒褐色シルトを主体とし、2層に分層される。

〈遺物〉幅がややひろがる箇所底面付近より、土師器が集中して出土した(写真図版26-3)。いずれも10世紀前半のロクロ土師器である。288～300はⅠ類の坏でⅡ類が主体をなす。i・ii・iii・iv類が認められ、i・ii類が多い。299はii類としたが、高台付坏である。Ⅱ類は少なく、図示できるものは3点のみであった。301・302はⅡc類で、301は口縁部が外反し、302は内湾する。303はⅡa類に相当する。





第130図 R G 055

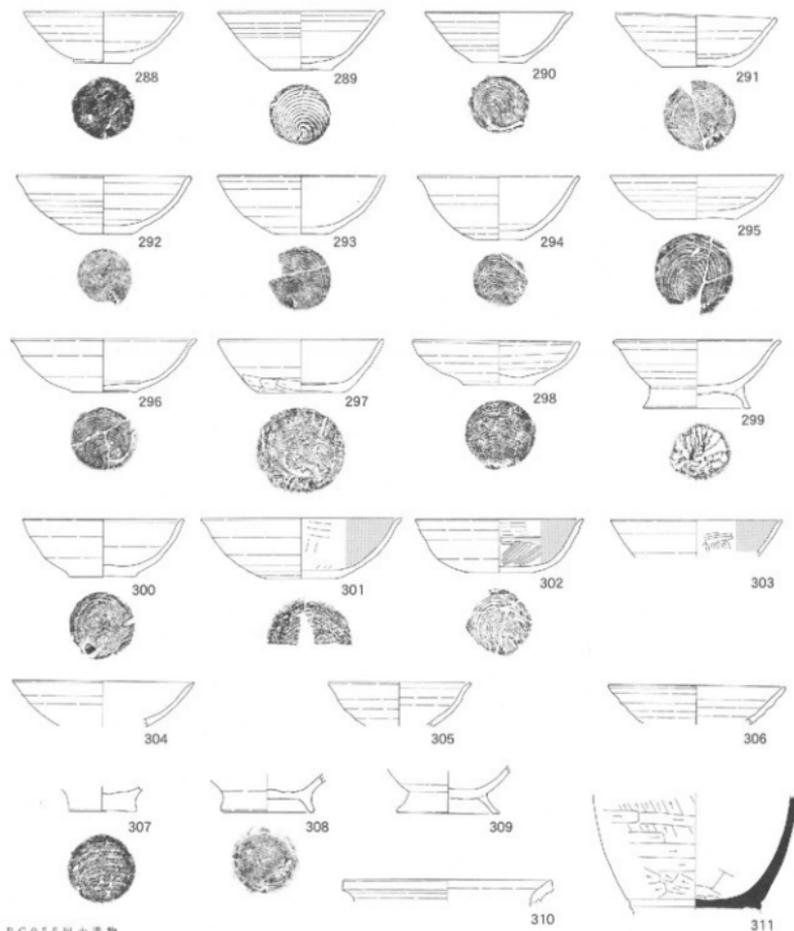
311は須恵器甕の胴部片である。

〈時期〉出土した土師器から10世紀前半の溝跡と考えられる。隣接する本宮熊堂B遺跡にみられる同時期の集落と密接な関係を有する可能性がある。

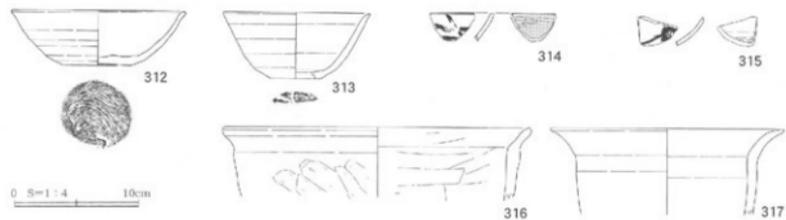
遺構外出土の古代遺物

わずかだが、遺構外から土師器が出土している。出土位置はおおむねR G 005付近に限られている。出土層位はIV層中であつたが、直下が旧河道であつたりするので、IV層へ流れ込んだものの可能性がある。

6点を図示した。312はI c ii類、313はI a類で、R G 055出土の土師器と類似する。314、315も坏の口縁部分で、外面に墨書が施されるが、小片のため文字は解読できない。316・317は土師器甕である。



RG055出土遺物
遺構外出土



0 5=1:4 10cm

第131圖 RG055・遺構外出土遺物

第31表 土器観察表 土師器

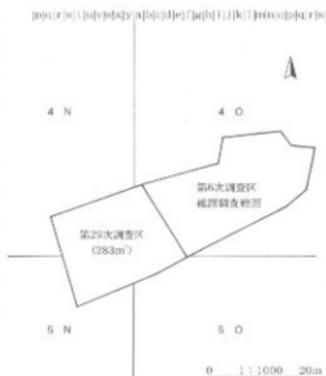
通称番号	写図番号	出土位置	層位	器 種	分類	残存部位	法 量	測 量	出土	色 沢	備 考	
288	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/4	口径：(12.0) 底径：4.8	器高：4.2 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	橙 黄		
289	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Ia	口～底1/4	口径：(13.6) 底径：4.9	器高：4.9 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
290	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Ia	口～底1/2	口径：12.0 底径：4.0	器高：4.2 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 にぶい橙		
291	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/3	口径：13.1 底径：5.5	器高：4.5 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	にぶい黄 黄		
292	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/5	口径：(14.1) 底径：4.3	器高：4.8 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
293	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/2	口径：13.4 底径：4.8	器高：4.8 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
294	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/2	口径：13.1 底径：4.0	器高：5.3 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
295	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/5	口径：(14.0) 底径：6.4	器高：3.6 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	にぶい黄 にぶい黄		
296	56	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/5	口径：(15.0) 底径：5.0	器高：4.4 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	にぶい黄 にぶい黄		
297	36	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Ia	口～底1/3	口径：(13.1) 底径：6.7	器高：4.4 外周：同軸ナテ ヘラケズリ 内周：同軸ナテ	砂・雲	にぶい黄 にぶい黄		
298	36	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciv	口～底2/3	口径：13.2 底径：3.6	器高：3.7 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	にぶい黄 にぶい黄		
299	36	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口～底1/2	口径：13.5 底径：(8.6)	器高：5.6 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 にぶい黄		
300	36	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciv	口～1/5	口径：(13.0) 底径：5.3	器高：5.8 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	黄 明		
301	36	R G 055	堆積土下位	土師器、坏 (内周)	Iciii	口～底1/5	口径：(16.2) 底径：5.4	器高：5.0 外周：同軸ナテ 内周：ミダキ	砂・雲	橙 黄		
302	37	R G 055	堆積土下位	土師器、坏 (内周)	Iciii	口～底1/2	口径：13.6 底径：5.2	器高：4.1 外周：同軸ナテ 内周：ミダキ	砂	黄 白		
303	37	R G 055	堆積土下位	土師器、坏 (内周)	Ia	口縁部1/4	口径：(14.0) 底径：-	器高：(3.0) 外周：同軸ナテ 内周：ミダキ	砂・雲	にぶい黄 にぶい黄		
304	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Ia	口縁部1/4	口径：(14.6) 底径：-	器高：(3.7) 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
305	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Iciii	口縁部1/4	口径：(11.6) 底径：-	器高：(3.6) 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
306	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	Ia	口縁部1/4	口径：(14.4) 底径：-	器高：(3.2) 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	橙 黄		
307	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	-	高台のみ	口径： 底径：5.4	器高：(2.0)	砂	橙 黄		
308	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	-	胴～高台	口径： 底径：7.4	器高：-	外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	にぶい にぶい	
309	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	-	胴～高台	口径： 底径：8.4	器高：-	外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄	
310	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	-	口縁部1/4	口径：(16.7) 底径：-	器高：(2.3) 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	にぶい黄 にぶい黄		
311	57	R G 055	堆積土下位	土師器、坏	-	口縁部1/2	口径： 底径：-	器高：(9.3) 外周：同軸ナテ ヘラケズリ 内周：同軸ナテ	砂	黄 黄		
312	57	5 N 2 m	IV層	土師器、坏	Iciii	口～底1/3	口径：(11.8) 底径：(4.0)	器高：5.4 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	橙 黄		
313	57	5 N 1 i	IV層	土師器、坏	Ia	口～底1/4	口径：(14.2) 底径：5.5	器高：4.5 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂・雲	にぶい にぶい		
314	57	5 N 2 o	IV層	土師器、坏 (内周・高台)	-	口縁部片	口径： 底径：-	器高：- 外周：同軸ナテ 内周：ミダキ	砂	にぶい黄 にぶい黄	「X」字	
315	57	4 M 14 p	IV層	土師器、坏 (口蓋)	-	口縁部片	口径： 底径：-	器高：- 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	黄 明赤	字体不別	
316	57	5 N 2 o	IV層	土師器、坏	-	口～胴1/5	口径：(24.8) 底径：-	器高：(5.7) 外周：ヘラケズリ 内周：ヘラケズリ	砂	にぶい黄 にぶい黄		
317	57	5 M 4 w	IV層	土師器、坏	-	口～胴1/4	口径：(19.0) 底径：-	器高：(7.0) 外周：同軸ナテ 内周：同軸ナテ	砂	にぶい黄 にぶい黄		

Ⅶ 第29次調査

1 概 略

第6次調査区状況確認調査を含む第29次調査で確認された遺構は、縄文時代の炉跡2基、焼土遺構1基、平安時代の溝跡2条、時期不明の柱穴状土坑30個、旧河道1箇所と縄文時代晩期の遺物包含層1箇所である。いずれも、既に第26次調査で報告している遺構の続きとなるものである。

出土遺物については、縄文時代晩期の土器が当センター収納用大コンテナ（容量40ℓ）5箱、石器・石製品類が中コンテナ（容量28ℓ）3箱、土製品3点、奈良・平安時代の土器が大コンテナ2箱（墨書・刻書土器5点含む）、獣骨片、赤色顔料などがある。なお、第6次調査区出土分の総量は中コンテナ1箱に及んでおり、一部ではあるが図示し掲載したものもある。



第132図 調査区とグリッド配置

2 検出した遺構・遺物

(1) 焼土遺構・炉跡

3基検出した。過去の調査で19基検出しており、それらに続くRF020～022とした。

RF020焼土遺構（第134図、写真図版28）

〈位置〉調査区の西端、4 N24 rグリッドに位置する。

〈検出状況・重複関係〉IV層上面において焼土の広がりとして検出した。重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉平面形はややいびつな楕円形を呈する。長軸は0.68m、短軸は0.36mを測る。焼土の厚さは8cm前後である。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉検出した面と同じ層位から出土している土器から縄文時代晩期後葉に属すると推測される。

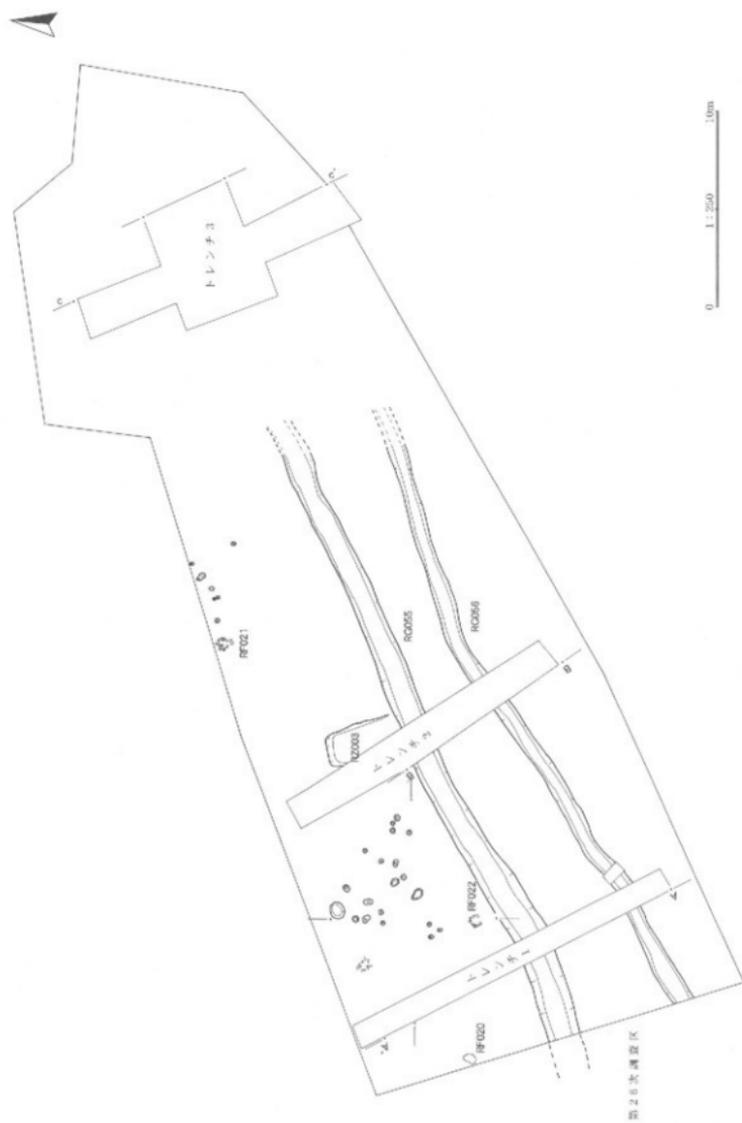
RF021石囲炉（第134図、写真図版28）

〈位置〉調査区外の4 O18 dグリッドに位置する。

〈検出状況・重複関係〉IV層の中位において規則的な石組みの配置として検出した。重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉平面形は楕円を呈する。長軸は0.90m、短軸は0.65mを測る。河原石で石組みされており、一部二重に配置されている。その内部は14cm前後掘り窪められ、0.72×0.94mの焼土が形成されている。厚さは7cmである。焼土の中央よりやや北西寄りに深鉢（319）が埋設されている。

〈遺物〉319は焼土中に埋設されていた深鉢である。A類に相当し、二次焼成により器面が変色している。また炉内から不定形石器1点が、そして炉石から敲磨器類、石皿類各1点が見つかった。



第133図 遺構配置図

3点とも図示した。S269は不定形石器3類で、縁辺の片面に不連続な押圧剥離が施されている。S270は砥磨器類で、A類に相当する。両面に磨痕が認められた。S271は楕円形状をした石皿類で、扁平な面に磨痕が見受けられる。

〈時期〉焼上中より出土した土器から、縄文時代晩期後葉に比定されよう。

R F 022石罏炉 (第134図、写真図版29)

〈位置〉調査区の西側4 N21 u グリッドに位置する。

〈検出状況・重複関係〉Ⅳ層の中心において規則的な石組みの配置として検出した。焼土は確認できなかったが形態から石罏炉として登録した。重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉平面形は円形を呈し、直径0.58mを測る。河原石で石組みされており、南東側が開口する。

〈遺物〉出土していない。

〈時期〉出土土器がないので、定かではないが、炉の形態から縄文時代晩期後葉に比定される。

(2) 溝 跡

2条検出した。1条は第26次調査区から続くR G 055である。今回新たに見つかったものはこれらに続くR G 056とした。

R G 055溝跡 (第133図、写真図版30)

〈位置〉調査区の中央、5 N 1 s ~ 4 O 23 d グリッド付近に位置する。西側は第26次調査区に、東側は第6次調査区に続く。

〈検出状況・重複関係〉Ⅲ層において検出した。重複する遺構はない。

〈規模・方向・形態〉長さは21.7mだが、第6次調査区において精査した分を含めれば32.4mとなる。幅は、開口部で1.3~1.8m、底面で0.7~0.9m、深さ24cm前後である。方向は、N-65°-Eで、段丘の縁に並行して走っている。また、R G 056とほぼ並行している。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。断面は台形状を呈する。

〈埋土〉黒色粘土の単層である。堆積の様相から自然に埋没したものと推測される。

〈遺物〉堆積土中から土師器が出土しており3点図示した。いずれも坏の小片で形態の分かるものはみつかっていない。702は内面黒色処理の坏で、内面にミガキ調整がみられる。704は高台坏の高台部分である。本遺構は第26次調査分から土師器が多量に出土しており、それらの土師器とほぼ同じ時期のものとして推定される。

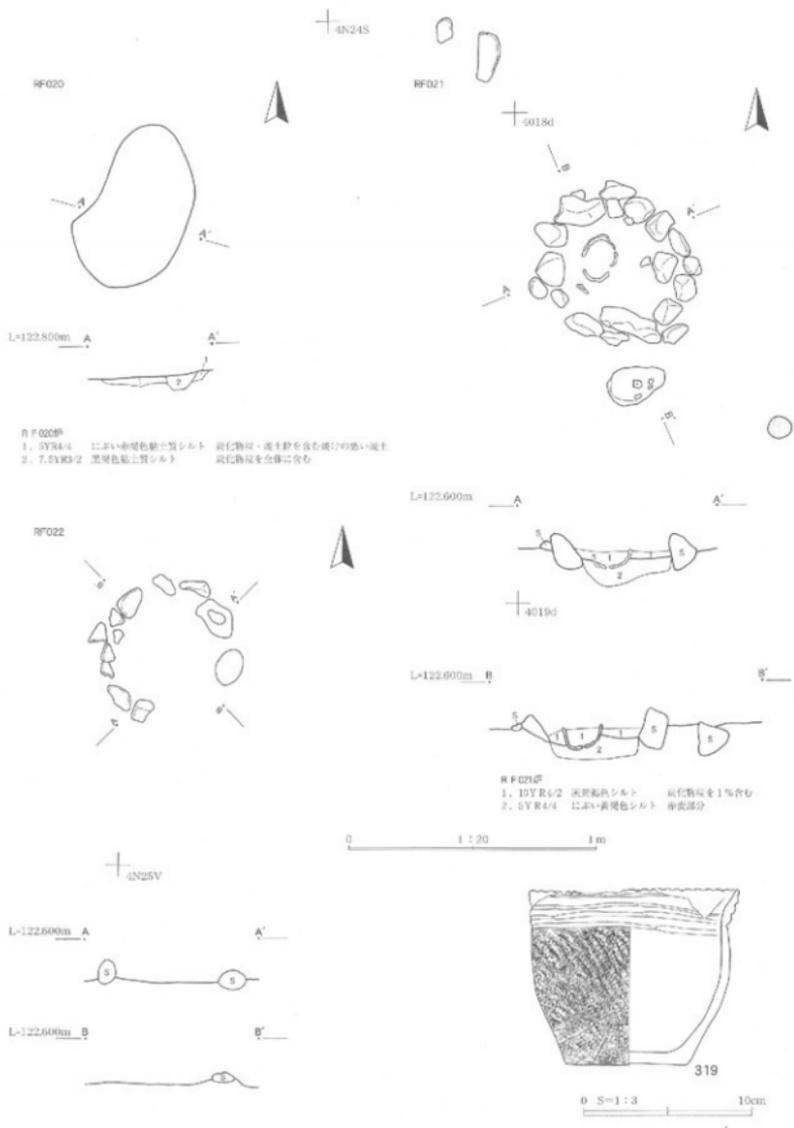
〈時期〉埋土中に十和田aテフラと推測される白色粒子を含むことから10世紀前半以降に位置づけられる。

R G 056溝跡 (第133図、写真図版30)

〈位置〉調査区の南側、5 N 4 t ~ 4 O 21 e グリッドに位置する。西側は第26次調査区に、東側は第6次調査区に続く。

〈検出状況・重複関係〉Ⅲ層において検出した。重複する遺構はない。

〈規模・方向・形態〉長さは22.9mだが、第6次調査区において精査した分を含めれば31.8mとなる。幅は、開口部で0.7~1.1m、底面で0.4~0.8m、深さ20cm前後である。蛇行しているが、方向はN-



第134図 R F 020~022

第32表 土器観察表 R F 021

調査番号	写真番号	土器分類	形状	器種・台頭	焼成温度	外周文様	FSH文様・装飾	外周色調 内装色調	土質	混入量	備考	
329	70	R F 021	丸型土器	深鉢	A 3	コ-底 2/3	縦：波み 口：波彫り 横：波模様	白：+ズリ	粒	砂・長	A	伊による二次焼成のため、器面が着色化。容積0.79ℓ

第33表 石器観察表 R F 021

標本番号	写真番号	器種	層位	分類	材質	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	先端角度(°)	保存状態	備考
S269	87	削器	2/3	3類	黒色1	40.89	27.35	20.95	11.59	—	完形	
S270	87	削器	—	A類	アイサイト	112.55	103.00	78.20	2334.09	—	完形	
S271	87	刮削器	—	1類	アイサイト	205.00	181.00	37.53	2190.00	—	完形	

55°-Eである。すぐ南側には段丘の縁があるが、これに沿うようにして走っている。底面は、ところどころ凹みが見られるが、概して平坦である。断面は台形状を呈する。

〈埋土〉鈍い黄褐色の粘土質シルトと十和田aテフラと思われる白色粒子からなる。後者は底面に厚く堆積している。

〈遺物〉堆積土中から土師器が出土しており、7点図示した。いずれもロクロ成形の坏である。口縁部が外反する形態であるが、外反が強いもの(695・697)と弱いもの(696・698)とにわけられる。696は内面黒色処理されており、内面にミガキ調整が見られる。本遺構の堆積土中からは十和田aテフラが多量に検出しており、これらの土師器は火山灰降下期の前後のものである可能性が高い。

〈時期〉遺構底面に十和田aテフラと考えられる白色粒子が厚く堆積していることから、10世紀前葉に位置づけられる。

(3) その他の遺構 (R Z)

R Z 003 (第135図、写真図版29)

〈位置〉調査区の東側、4 O21 a グリッドに位置する。

〈検出状況・重複関係〉IV層上面にて検出した。IV層を掘り下げる過程で周辺より若干落ち込む部分を認識していたが、当初は自然的な凹部と判断した。しかし、掘削後に凹部が長方形を呈していたことから人為的な掘り込みと認定するに至った。遺構の一部は試掘トレンチによって掘り抜かれているが、現状では重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉現状からすると本来は長方形だったと推測される。長軸は3.65m、短軸は1.68mを測り、深さは20cm前後である。底面は北側がやや波打っているが、旧河道と接続する南側は平らである。中央部分には拳大の礫が散乱する。

〈遺物〉出土していない。

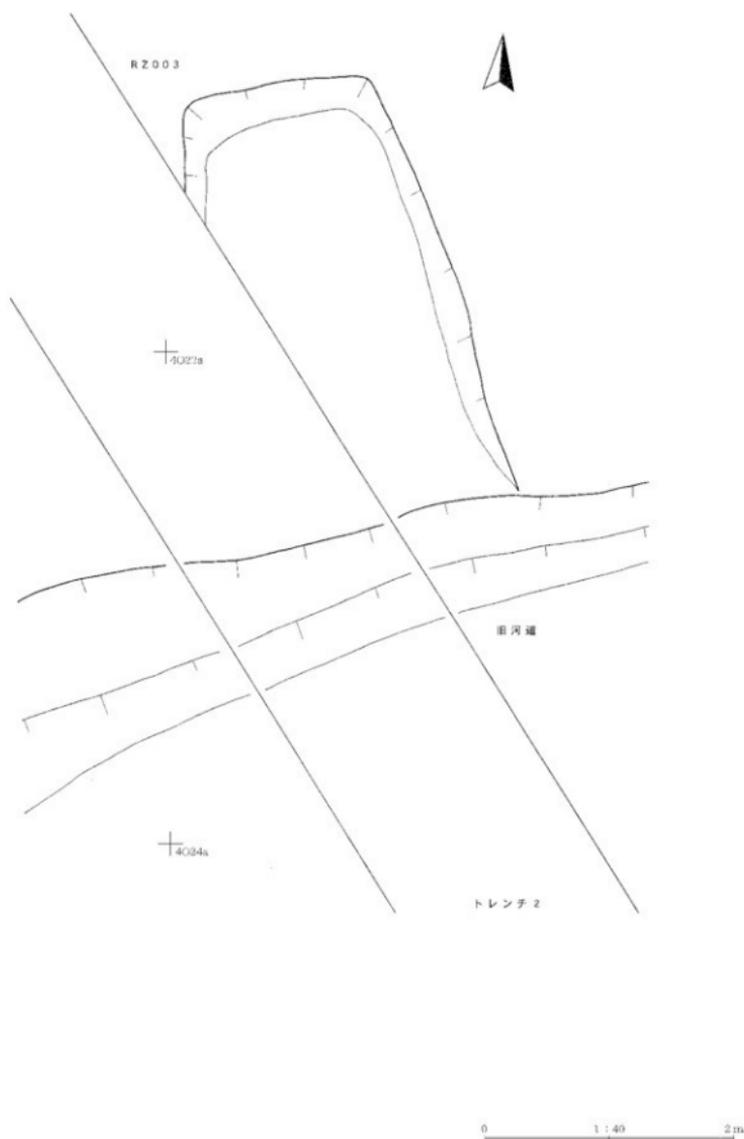
〈時期〉検出した面と同じ層位から出土している土器から、縄文時代晩期後葉に属すると推測される。

(4) 旧河道 (第136・137図、写真図版31・32)

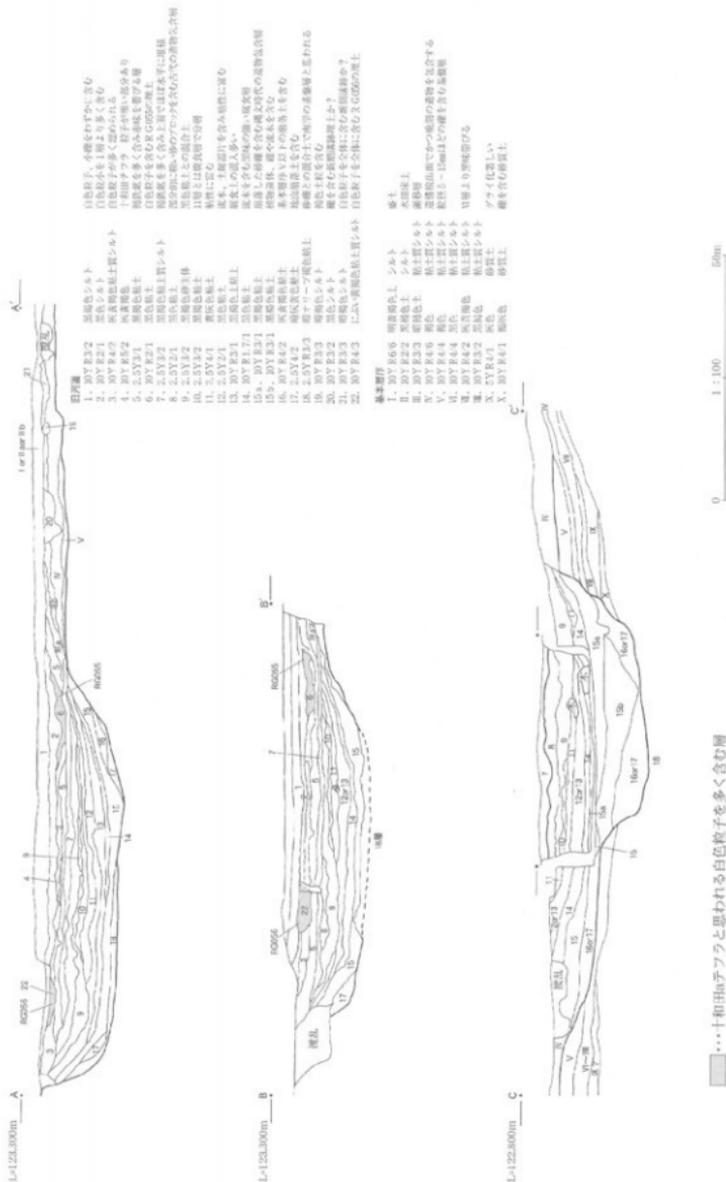
ここでは、主体となった旧河道の調査成果について記述する。

先に報告したとおり、第26次調査では縄文時代晩期後半および奈良・平安時代の土器のほか、多くの石器類や植物遺体などが多数出土した。調査後には、旧河道に堆積した土壌の自然科学的分析を行い、縄文時代と奈良・平安時代における周辺環境の違いを明らかにした。(Ⅶ 自然科学分析参照)

今次の調査区は第26次調査区の東側に隣接しており、調査では下流側となる旧河道跡の状況の把握を第一の目的とした。出土遺物には上述した種類のものがあり、土器はおよそ48.6kg、石器は剥片石



第135図 R Z 003



第137図 旧河道跡 断面図

器が11.8kg、礫石器類が12.5kgのほか、植物遺体が出土した。全体としては、遺物の種類などに前回調査と異なる状況は認められなかった。ただし、地形的に西から東へと考えられる河道の流路から、流水等が多く出土すると思われたが、これは予想に反している（第136図）。

〈位置・規模〉調査区の西南西から東北東にかけて幅6.7～8.8mをもって横断し、位置するグリッドは5N1s～4N22c、5N5t～4N25cなどである。

〈深さ・流路〉確認調査として前述した第6次調査区割に延びている範囲内に、今次調査区の東端から24mほどにトレンチ3を設定、重機により掘削し、河幅・深さ等を確認した。トレンチ3における検出面からの最大深度はおよそ2.2mである。また、トレンチ1・2のそれはいずれも1.7mをわずかに超える程度である。

〈堆積状況〉全体的に人為的に堆積している様相は見受けられない。第7層より上層は、ほぼ水平に堆積しており、この時点ではこの旧河道は埋まりきっていたものと思われる。第9層はラミナを形成する層で、第10層堆積後上流からの洪水砂もあわせて堆積したと思われる。

〈出土遺物〉第15層を主体として縄文晩期の遺物が、第8・9層からは土師器・須恵器が、第12・13層から夥しい量の植物遺体が出土している。古代の遺物については、第5層から9世紀後半～10世紀前半の、9層からは9世紀代の土師器が出土した。第26次調査では、第10・11層に相当すると思われる層から8世紀代の遺物が出土しており、層位的には矛盾がない。

67点を図示した。深鉢はA類が多く、320～324、327～372が相当する。口唇部には棒状工具による押圧が巡るものが多い。321は口唇部に押圧に加え、口唇部に平行する方向に沈線を刻んでおり、恐らく4単位で施されていたものと思われる。373～376はB類に相当する。いずれも破片資料で器形は不明である。口唇部の形状は平縁で何も施文されないものと棒状工具による押圧が施されるものとの2種類が確認された。325、326、377～379はC類に相当する。A類と比べ、いずれも口縁部文様帯が狭く、ほぼ直立気味である。377は口唇部直下を棒状工具により、横側に一周し、ナデ成形のような沈線文が認められる。

384～437は鉢であるが、破片資料がほとんどで、器形に分かるものは少ない。384はA類である。385、388はB類に相当し、器面に縄文を施文した後、沈線による工字文を施す。386、387、389～392はC類に相当する。391は形態3類に相当し、欠損しているが、口唇部に4単位のB状突起が付されるものと思われる。口縁部には沈線による工字文が施文される。内面の底面近くにアスファルトが厚く付着しており、アスファルトを入れる容器として使用されていた可能性がある。393～413はD類に相当する。口唇部はA突起をもち、波状を呈するものと、刻みが施されるもの、平縁のものがある。また口縁部文様帯は上下端に沈線が施され、その内側に沈線が巡るものとベン先状の工具による連続し刺突が巡る物と2種類が認められる。414はE類に相当し、沈線による変形工字文が施文される。415～419はF類に相当する。いずれも口縁部は無文で、胴部以下に縄文（単節LR）が施文される。416は口縁部から直立気味になる形状で、口縁部に段を有し、積ナデの調整が施される。

438～466は浅鉢であるが、やはり小片が多く、形態全体が分かるものは少ない。出土したものはB類（438～445）とC類（446～456）が確認でき、また文様は不明であるが、付付浅鉢に相当する2類の台部（457～458）、3類の脚付底部（460～466）が認められる。B類に相当するものは、いずれもやや幅広な沈線によって工字文が描かれ、口唇部にB突起が付くもの（438）、A突起が付くもの（439、441）、刻みが巡るもの（440、445）、平縁のもの（442、443）が見受けられる。446、447はC類の中でも形態の分かる破片で、口縁部が内湾しながら立ち上がる。448は沈線間に棒状工具による刺突と沈線を巡らしている。また、浮線部分を逆「凸」字状に変形させている。455は沈線間に沈線を巡ら

して、その際盛り上がった部分をコブ状に成形している。457は台部のみであるが台上半に沈線が、下半に卍字文が描かれる。

壺は全体の形態が分かるものがほとんどない。467はB類で、胴部に沈線による卍字文を施される。口縁部がやや外反気味に立ち上がるが、口唇部付近が欠損している。468は頸部より下が残存しており、胴部に卍字文が施文される。469～475は口縁部片で、a類(469、470、474)とb類(471、473)が確認できた。胴部片ではA類(476、478～480)とB類(477、482)が確認できた。481は胴部に縄文が施文されるのみの壺で、口縁部はやや外反気味に開き、胴部は恐らく胴部中央付近にある最大径に直線的に向かっており、他の形態の壺とはやや異なる。弥生土器の可能性が考えられる。

他に高坏の坏部(487～489)、ミニチュア土器(490、491)が確認できた。高坏はいずれも坏部の破片で、全体の形態はよく分からない。487は穿孔が2箇所認められた。ミニチュア土器はいずれも底部片で、形態は不明である。

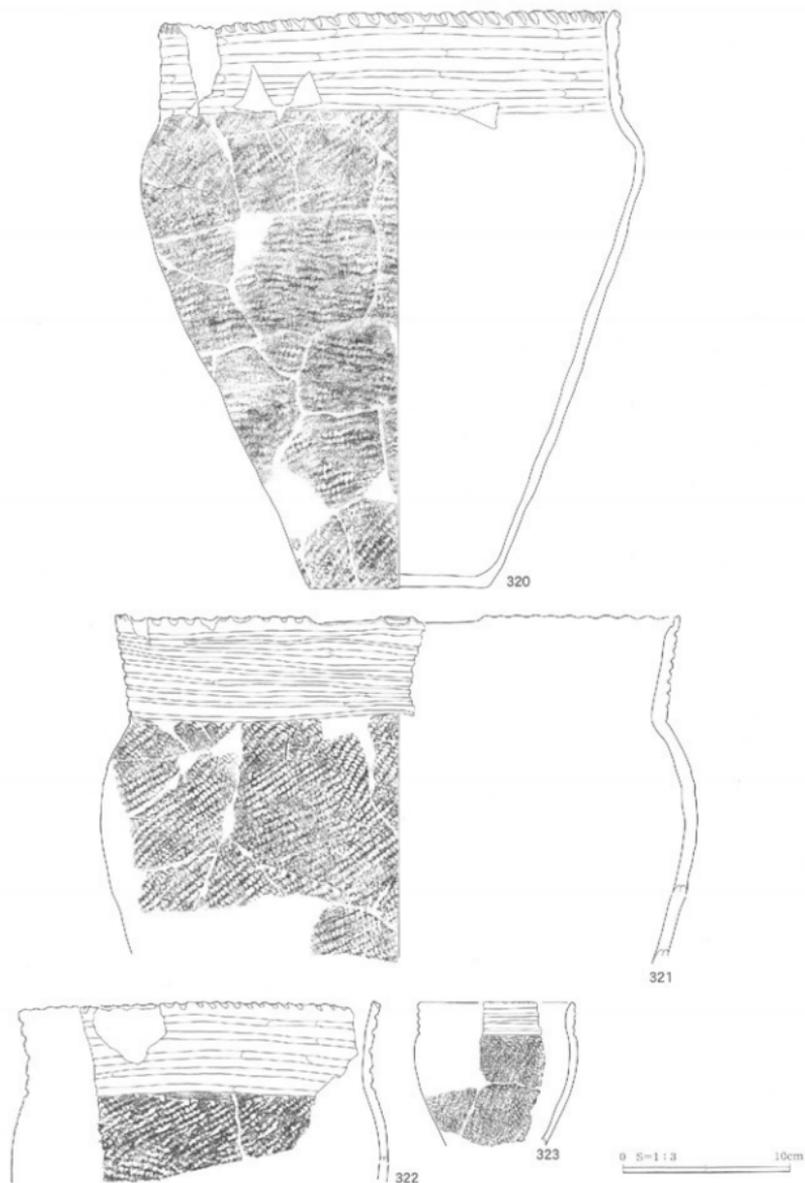
土製品は土製円板が1点(492)と土偶と思われる土製品が2点(493、494)確認できた。土製円板は深鉢の胴部片の転用と考えられ、縁辺部に整形の際の磨痕が認められる。493の土製品は外面に、縄文と沈線が施され、内面は中空となる。土偶の可能性が考えられるが、小片のため不明である。494は細いペン先状の工具による沈線が施され、また端部に刺突が集中する。土偶の頭部片と考えられる。

土師器、須恵器は12点(495～507)図示した。

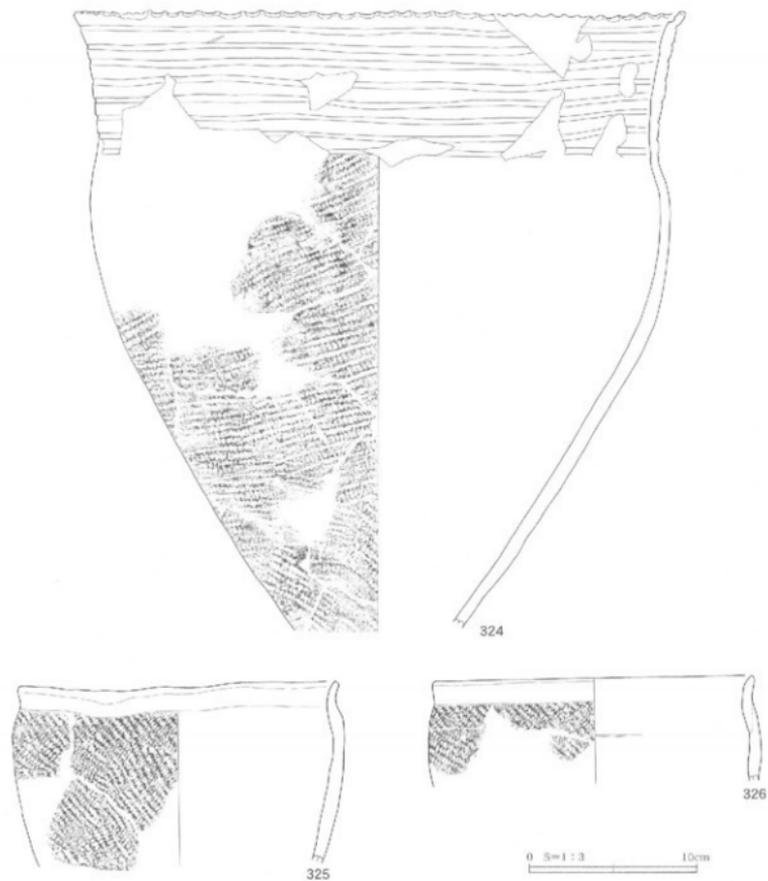
土師器は坏が多く、図示できたものも坏のみであった。495は内面黒色処理された坏で、胴部に段を有する。内外面ともにミガキ調整が施され、外面底部にはケズリ成形がみられる。496～505はロクロ成形の坏であり、いずれも口唇部直下で、やや外反する形状を呈する。500、502は内面黒色処理の坏で内面にミガキ調整が確認できる。また502～505は墨書土器である。506は須恵器蓋の胴部片で、内外面にタタキ目がみられる。507は土師器の小破片で、器種は不明であるが外面に刻みが見うけられる。

縄文時代の石器も出土している。出土層位はIV層およびI5～16層が多く、土器と同様に縄文時代晩期に比定されると思われる。29点を図示した。

S272～275は石鏃である。S273は中茎部にアスファルトが付着している。S274は第26・29次調査合わせ、唯一4類に相当する石鏃である。S275は5類(未成品)で、形態から1類を製作する途中でやめたものと思われる。S276、277は石鏃である。S276は2a類に相当し、先端部が欠損しているが、両側両面から二次加工を施している。S277は1類で鏃部は両面から二次加工を施している。S278は筈状石器で、刃部は片面から二次加工を施している。S279は尖頭器で両面から二次加工を施す。S280～286は不定形石器である。S280は2類で片面のみ二次加工を施し刃部を作出している。S281は2類で両面から二次加工を施し、刃部を作出している。S283・284・286は1類に相当し、片面に二次加工を施し、刃部を作出している。S287、288はRフレイクである。S287は自然面が残存し、その片面に二次加工が施されている。S289、290はフレイクである。S291、292は石核である。S291は自然面の残るほぼ原石の状態の一辺に両面から剥離作業を行っている。S292は広い面を打面とし、作業面を変えながら、ほぼ同一方向から打撃を加えている。S293、294は砥磨器類である。S293は垂な形態を呈し、平坦な面に磨痕が認められた。S294は細長い楕円形を呈し、両面に凹痕が認められる。S295、296は石皿類である。S295は両面に凹痕が、S296は片面に磨痕が認められる。S297～299は有孔石器である。穿孔はいずれも壺である。S298は穿孔の他、凹痕も認められる。S300は石棒類としたもので、両端が欠損している。断面形態からみて、所謂「石刃」に類するものであろうと思われる。



第138図 旧河道 出土遺物 (1)



第139図 旧河道 出土遺物（2）

〈旧河道内の検出遺構〉第3層以下第5層までを掘り込む形で、R G055・056の2条の溝跡が検出された。R G056の埋土には十和田aテフラが含まれている。出土した遺物から、いずれも平安時代に属する遺構と思われる。

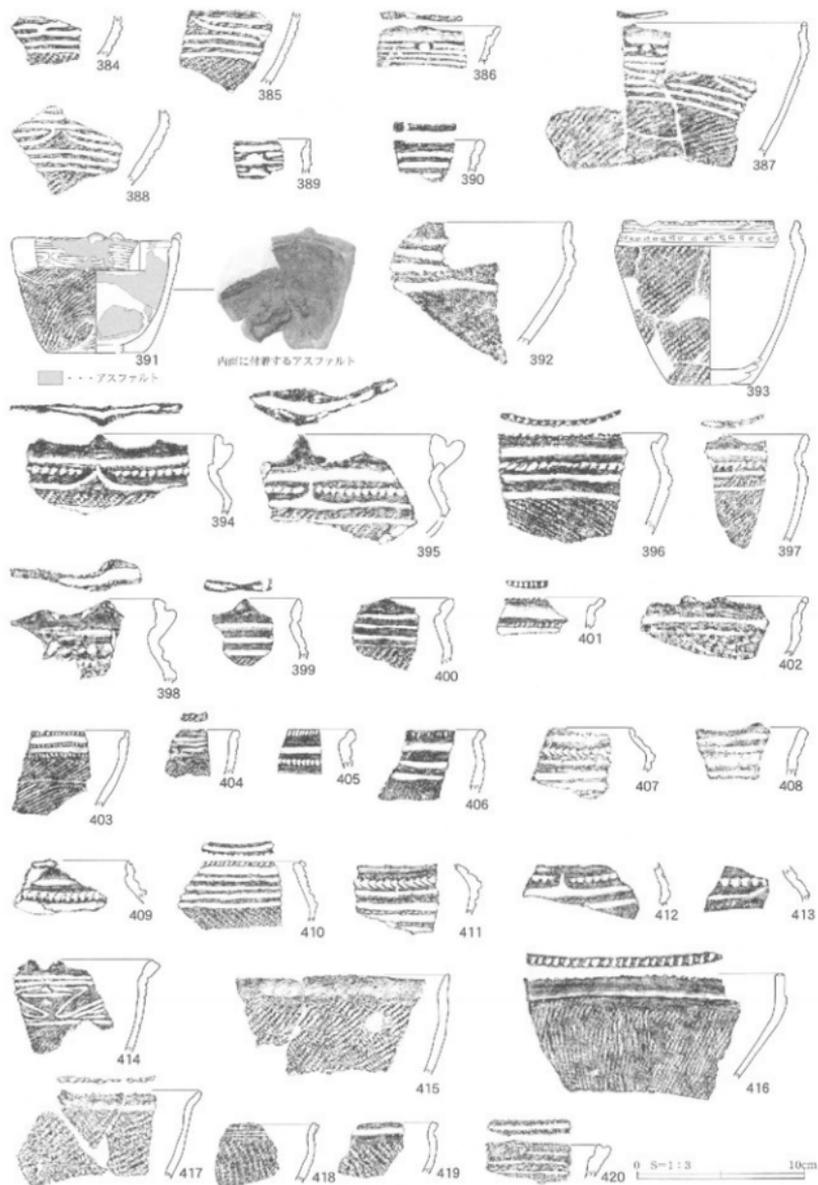
〈その他〉河底のレベルから、この河は西から東の方向への流れていたと判断される。また、花粉分析の結果から、縄文時代には湿地、それ以後は時折干上がることもある流れの弱い河であったと考えられる。



第140図 旧河道 出土遺物 (3)



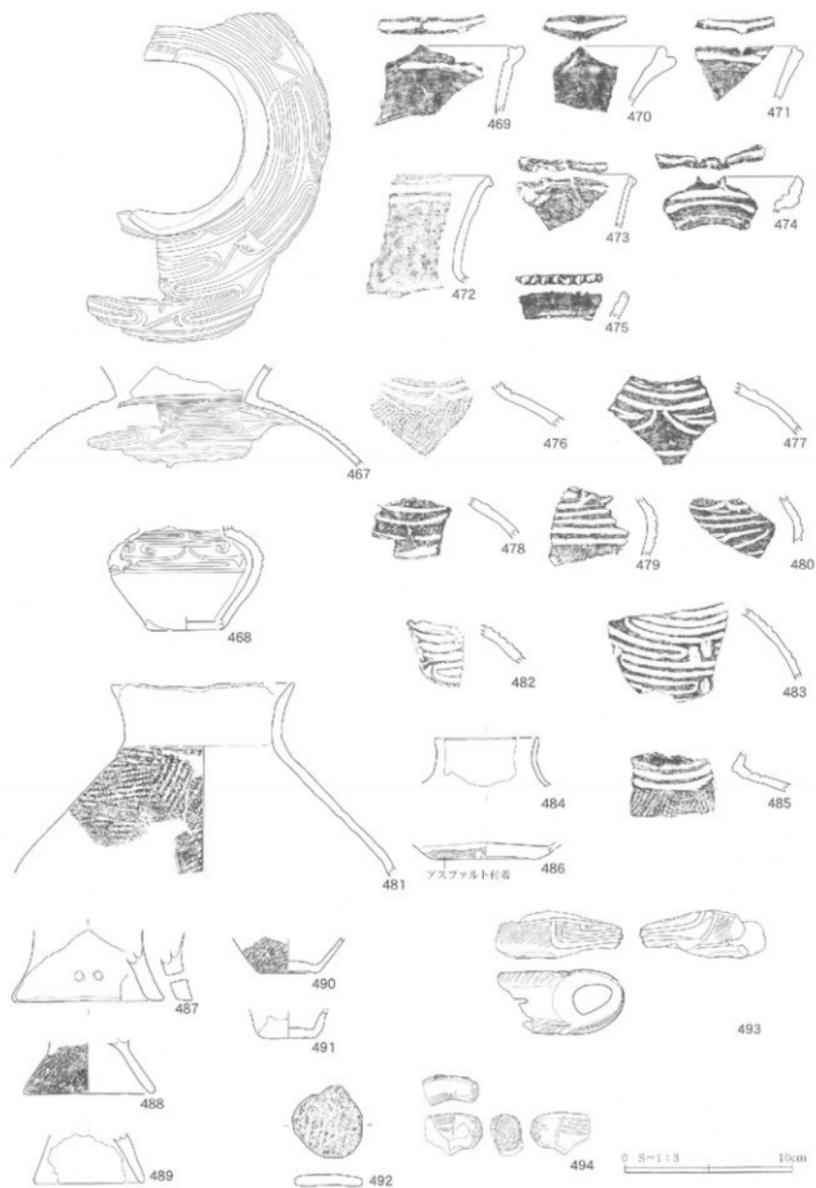
第141図 旧河道 出土遺物 (4)



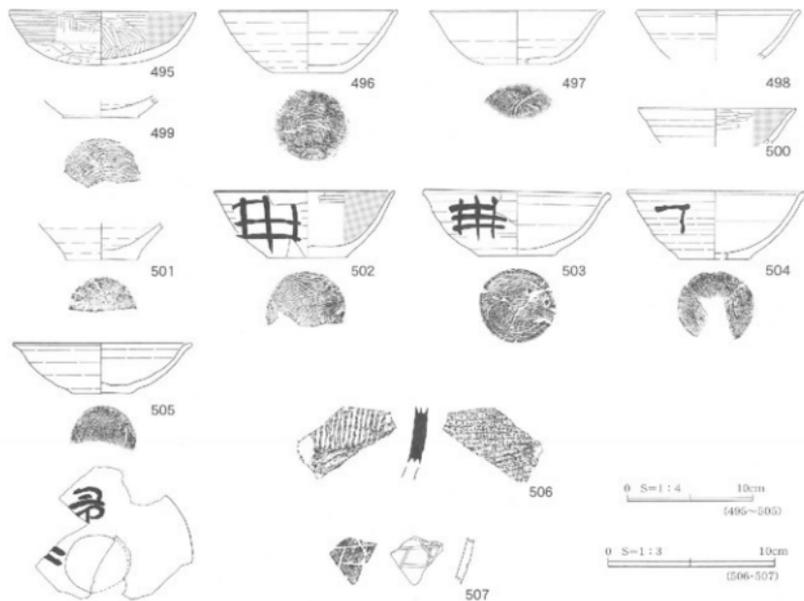
第142図 旧河道 出土遺物 (5)



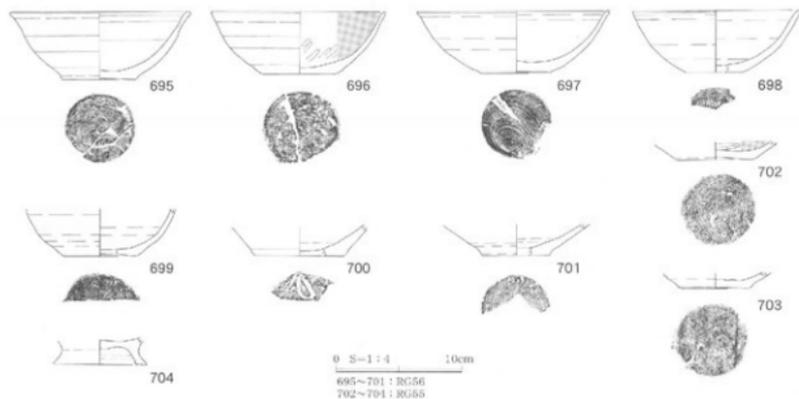
第143図 旧河道 出土遺物(6)



第144図 旧河道 出土遺物 (7)



第145図 旧河道 出土遺物 (8)



第146図 R G 55・56 出土遺物

第34表 土器観察表 旧河道 (第29次分)

編年 番号	写真 番号	出土位置	層位	器色	分類	残存 部位	外面文様	内面文様・痕跡	外面色澤 内面色澤	胎土	底 土	備 考
320	70	トレンチ 2	IV層	深緑	A 2	底定形	口: 浮正、沈線(5) 肩: L, R 横、筋	口~肩: ナテ	浅黄褐色 に深い黄褐色	白	B	容量12.64ℓ
321	71	トレンチ 2	IV層下位	深緑	A 2	口縁部 1/4	唇: 浮正 口: 沈線(9) 肩: L, R 横、筋	唇: 二具なる浮正 口: 沈線	灰青褐色 に深い黄褐色	砂	A	
322	71	トレンチ 2	IV層下位	深緑	A 2	口縁部 1/5	唇: 筋目 口: 沈線(5) 肩: L, R 横	口~肩上: ナテ	黄褐色 深褐色	砂	A	
323	71	トレンチ 1	18層上位	深緑	A 2	口縁部 1/5	唇: 筋目 口: 沈線(4) 肩: L, R 横	口~肩: ナテ	に深い黄褐色 深褐色	長	C	容量0.43ℓ
324	70	トレンチ 1	IV層上位	深緑	A 1	口縁部 2/3	唇: 筋目 口: 沈線(8) 肩: L, R 斜	口: 沈線 口~底: ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂	A	容量22.32ℓ
325	71	トレンチ 1	III層	深緑	C 2	口縁部 1/2	肩: R, L 横	口~底: ナテ	に深い黄褐色 深褐色	砂・長	B	
326	71	トレンチ 1	III層	深緑	C 2	口縁部 1/4	肩: L, R 横	口~底: ナテ	に深い黄褐色 深褐色	長・砂	A	
327	71	トレンチ 1・2間	地盤L中	深緑	A	口縁部 片	口: 沈線(5) 肩: L, R・R, L 羽状	口: ケズワリーナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂・長	A	
328	71	トレンチ 2	IV層下位	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	黄褐色 深褐色	砂・長	B	
329	71	トレンチ 1・2間	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線(5)	口: ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂・長	B	
330	71	トレンチ 2	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂・長	A	
331	71	トレンチ 2	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	に深い黄褐色 灰黄	長	C	外面に炭化物付着
332	71	トレンチ 1・2間	Ⅷ上中	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	黄褐色 に深い黄褐色	砂・長	B	
333	71	トレンチ 1・2間	IV層下位	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	に深い黄褐色 黄褐色	砂・長	B	
334	71	トレンチ 1・2間	IV層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	灰黄 灰白	砂・長	A	
335	71	トレンチ 1	Ⅲ~Ⅳ層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂	A	
336	71	トレンチ 1・2間	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線	に深い黄褐色	砂	A	
337	71	トレンチ 1・2間	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・長	A	
338	71	トレンチ 1	IV層	深緑	A	口縁部 片	唇: 筋目 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	浅黄 黄褐色	砂・長	A	
339	71	トレンチ 1	12層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	長	B	
340	71	トレンチ 2	IV層下位	深緑	A	口縁部 片	唇: 筋目 口: 沈線	口: ナテ	に深い黄褐色 灰黄褐色	砂	B	
341	71	トレンチ 2	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	黄褐色 灰黄褐色	砂・長	B	
342	71	トレンチ 1・2間	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧、沈線	口: 沈線、ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂	A	
343	71	トレンチ 2	IV層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	黄褐色 黄褐色	黄	B	
344	72	トレンチ 1・2間	15層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	灰黄褐色 に深い黄褐色	砂・長	A	
345	72	トレンチ 2	13層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	黄褐色 黄褐色	砂	A	
347	72	旧河道 築5層	IV層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	黄褐色 黄褐色	砂・長	B	
348	72	トレンチ 1	IV層上位	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	に深い黄褐色 黄褐色	砂	B	
349	72	トレンチ 1北	18層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	灰黄褐色 灰黄褐色	長	C	
350	72	トレンチ 1	12層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	に深い黄褐色 に深い黄褐色	砂・長	A	
351	72	トレンチ 1	12層	深緑	A	口縁部 片	唇: 押圧 口: 沈線	口: ナテ	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・長	A	

2 演出した演劇・演物

演劇 番号	季号 番号	山上位置	舞台	形態	分類	依存 部位	外口文様	内口文様・調敷	外面色装 内面色装	柱土	役 人数	備 考
352	72	トレンチ 2	14層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	巻：押圧	灰青帯 灰青帯	砂・灰	A	
353	72	トレンチ 1	IV層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線 刷：L R横	□：ナデ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・灰	A	
354	72	トレンチ 2	IV層上位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：沈線、ナデ	灰青帯色 灰青	備	C	
355	72	トレンチ 2	IV層上位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：ナデ	灰青 灰青	長	C	
356	72	トレンチ 1	Ⅲ～IV層上位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：ナデ	にぶい黄緑 にぶい黄	砂・雲	A	
356	72	トレンチ 2	Ⅲ層下位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：沈線、ナデ	灰青帯 帯	砂・長	A	
357	72	トレンチ 2	15層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：沈線、ナデ	にぶい黄緑 黄緑	砂・長	A	
358	72	トレンチ 1・2	15層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：沈線、ナデ	にぶい黄緑 帯	砂・灰	A	
359	72	トレンチ 2	Ⅲ層下位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：刷み □：沈線	□：ナデ	灰青帯 灰青帯	砂・長	A	
360	72	トレンチ 1	Ⅲ層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：ナデ	灰青 黒帯	砂・長	A	
361	72	トレンチ 1	Ⅲ層下位	漆鉢	A	口縁部 片	□：沈線 刷：L R横、縦	□：刷、ナデ	黄緑 黒帯	砂	A	
362	72	トレンチ 1・2	Ⅲ層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：刷み □：沈線	□：沈線、ナデ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・長	A	
363	72	トレンチ 1	Ⅲ層上位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線 刷：L R横	□：ナデ	黒灰 にぶい黄緑	雲	B	
364	72	トレンチ 1	Ⅲ層上位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：沈線、ナデ	にぶい黄緑 黄緑	砂・長	A	
365	72	トレンチ 1	15～16層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：ナデ	灰青帯 灰青帯	雲	C	
366	72	トレンチ 2	IV層下位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：刷み □：沈線	□：ナデ	黄緑 黒帯	砂・長	B	
367	72	トレンチ 1	IV層下位	漆鉢	A	口縁部 片	巻：刷み □：沈線 刷：L R横	□：ナデ?	黄緑 黒帯	砂・長	A	
368	72	トレンチ 1・2	Ⅲ層	漆鉢	A	口縁部 片	□：沈線 刷：L R横	□：ナデ	灰青帯 にぶい黄緑	砂・長	B	
369	72	トレンチ 1・2	14～15層	漆鉢	A	口縁部 片	巻：刷み □：沈線	□：ナデ	黒灰 にぶい黄緑	砂・雲	A	
370	72	トレンチ 1・2	Ⅲ～IV層	漆鉢	A	口縁部 片	□：沈線 刷：L R横	□：刷、ナデ	黄緑 灰白	砂・雲	A	
371	72	トレンチ 1	IV層上位	漆鉢	A	口縁部 片	□：押圧、沈線	□：ナデ	黒灰 灰青帯	長	A	
372	72	トレンチ 1	IV層下位	漆鉢	A	口縁部 片	□：沈線	□：ナデ	にぶい 黒帯	砂・雲	A	
373	72	トレンチ 1	15～16層	漆鉢	B	口縁部 片	□：沈線 刷：L R横	□：ナデ	黒灰 黒灰	砂・長	B	
374	72	トレンチ 1	15～16層	漆鉢	B	口縁部 片	□：沈線、ナデ	□：ナデ	黒灰 灰青帯	砂・長	B	
375	72	トレンチ 1	Ⅲ層下位～ IV層上位	漆鉢	B	口縁部 片	巻：押圧 □：沈線	□：ナデ?	にぶい黄緑 黄緑	砂・雲	A	
376	72	トレンチ 1	IV層上位	漆鉢	B	口縁部 片	巻：刷み □：沈線	□：ナデ	灰白 灰白	砂・雲	A	
377	72	トレンチ 2	11層	漆鉢	C	口縁部 片	巻：沈線 □：押圧、L R横 刷：L R横	□：ナデ	にぶい黄緑 灰青	砂・長	B	
378	72	トレンチ 1	15層	漆鉢	C	口縁部 片	巻：押圧 刷：L R横、縦	□：刷、ナデ	灰白 黒帯	砂・長	B	
379	72	トレンチ 1	Ⅲ層	漆鉢	C 2	口縁部 1/5	刷：L R横	□：刷、ナデ	黄 黒帯	砂・長	B	
380	72	トレンチ 1・2	15層	漆鉢	刷部片	刷：L R横	刷：ナデ	にぶい黄緑 灰青	砂・長	A		
381	72	トレンチ 1	Ⅲ層下位～ IV層上位	漆鉢	刷部片	刷：L R横	刷下：L R横 ナデ	刷下：L R横 ナデ	灰青帯色 にぶい黄緑	長	A	
382	70	トレンチ 2	IV層	漆鉢	刷部片	刷：L R横	刷下：L R横 ナデ	ナデ	にぶい黄 灰青	砂・長	B	

掲載番号	写真番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調査	外面色調 外面彫刻	胎土	器人	備考
383	72	トレンチ 2	IV層下位	鉢鉢	---	底部分	刷下: L R 横	ナデ	灰青帯 に赤い貴皮	砂・灰	B	
384	73	トレンチ 1	15~16層	鉢	A	胴部分	刷: 十字文、L R 横	語: ミザキ	黒褐色	灰	C	
385	73	トレンチ 1	IV層下位	鉢	B	胴部分	刷: 十字文、L R 横	刷: ナデ	灰褐色	灰	C	
386	73	トレンチ 1	IV層	鉢	C	口縁部 片	刷: B 突縁 口: T 字文	口: 沈線、ナデ	黒褐色	砂・灰	B	
387	73	トレンチ 1	IV層上位	鉢	C 3	口縁部 1/5	唇: B 突縁、沈線 口: T 字文、刷: L R 横	口: 沈線、ナデ	に赤い貴皮 に赤い貴皮	白・灰	C	
388	73	トレンチ 1	IV層上位	鉢	B	胴部分	刷: T 字文、L R 斜	刷: ナデ	に赤い貴皮 灰青帯	白・灰	B	
389	73	トレンチ 1・2 区	IV層上位	鉢	C	口縁部 片	口: T 字文	口: 沈線、ナデ	灰青帯	白	C	
390	73	トレンチ 1	15~16層 上位	鉢	C	口縁部 片	唇: B 突縁 口: 沈線(T 字文?)	口: 沈線、ナデ	黒褐色	白	C	
391	73	トレンチ 1	IV層	鉢	C 3	口縁部 1/3	唇: B 突縁 口: 沈線 刷: L R 斜	口: 沈線 口→語: ナデ	に赤い貴皮 黒褐色	灰	C	内面に十字スケット 付着。彩量0.29%
392	73	トレンチ 1	IV層上位	鉢	C	口縁部 片	口: 沈線 刷: L R ? 横	口→刷: ナデ	灰青帯 に赤い貴皮	砂・灰	B	
393	70	トレンチ 1 落ち頭	IV層下位	鉢	D 2	口縁部 1/2	唇: 刷み 口: 沈線、刷突 刷: L R 横	口→刷: ナデ	に赤い貴皮 に赤い貴皮	砂・灰	B	彩量0.33%
394	73	トレンチ 1	III層上 IV層上位	鉢	D	口縁部 片	唇: 突縁 口: 沈線、刷突 刷: L R 斜	口: 沈線 口→語: ミザキ	に赤い貴皮 黒褐色	灰	B	
395	73	トレンチ 1	IV層下位	鉢	D 2	口縁部 片	唇: 突縁、沈線 口: 沈線、刷突	口: 沈線、ナデ	黒灰 灰青	白	C	
396	73	トレンチ 1・2 区	15層	鉢	D	口縁部 片	口: 刷突、沈線、刷突 刷: L R 横	口: 沈線、ナデ	灰青帯	白	C	
397	73	トレンチ 2 区	15層	鉢	D	口縁部 片	唇: 刷突 (流紋口縁) 口: 刷突、沈線 刷: L R 斜	口: 沈線 口→刷: ナデ	黒褐色 黒褐色	白	C	
398	73	トレンチ 2	IV層下位	鉢	D	口縁部 片	唇: A 突縁、沈線 口: 刷突	口: 沈線、ナデ	黒灰青 黒褐色	灰	C	
399	73	トレンチ 1	III~IV層	鉢	D	口縁部 片	唇: A 突縁、沈線 口: 沈線 刷: L R 横	口: 沈線、ナデ	灰青 灰青	灰	C	
400	73	トレンチ 2 区	15層	鉢	D	口縁部 片	口: 沈線 刷: L R 横	口: 沈線、ナデ	黒灰青 黒褐色	灰	C	
401	73	トレンチ 1	15~16層	鉢	D	口縁部 片	唇: 刷み 口: 押込状の沈線	口: 沈線、ナデ	黒褐色 黒褐色	白	C	
402	73	トレンチ 1	IV層下位	鉢	D	口縁部 片	唇: B 突縁 口: 沈線	口: 沈線	に赤い貴皮	砂・灰	B	
403	73	トレンチ 1	IV層下位~ IV層上位	鉢	D	口縁部 片	唇: 刷み 口: 沈線、刷突 刷: L R 横	口: 沈線、ナデ	黒褐色	白	C	
404	73	トレンチ 1	12層	鉢	D	口縁部 片	唇: 刷み 口: 沈線	口: 沈線、ナデ	黒褐色 黒褐色	白	C	内面に黄化物
405	73	トレンチ 1	14~16層	鉢	D	口縁部 片	唇: 刷み 口: 沈線、刷突	口: 沈線	黒褐色 黒褐色	白	C	
406	73	トレンチ 1	IV層上位	鉢	D	口縁部 片	唇: 刷み 口: 沈線 刷: L R ? 横	口: 沈線、ナデ	黒褐色	灰	C	
407	73	トレンチ 1・2 区	地盤上中	鉢	D	口縁部 片	口: 沈線、刷突	刷: ナデ	灰青帯 黒褐色	灰	C	
408	73	トレンチ 1	IV層	鉢	D	口縁部 片	唇: A 突縁 口: 沈線	口: ナデ?	灰青帯 黒褐色	砂・灰	B	
409	73	トレンチ 1 北	IV層	鉢	D	口縁部 片	唇: 沈線 口: 沈線、刷突	口: 沈線、ナデ	灰青帯 に赤い貴皮	白	C	
410	73	トレンチ 1・2 区	P P 4	鉢	D	口縁部 片	唇: 沈線 口: 際上刷み 刷: L R 横	口: ナデ	黒褐色 黒褐色	灰	C	
411	73	トレンチ 1・2 区	14~15層	鉢	D	胴部分	刷: 沈線、刷突	刷: ナデ	黒褐色 黒褐色	灰	C	
412	73	トレンチ 1・2 区	IV層上位	鉢	D	胴部分	刷: 刷突、沈線、L R ? 横	刷: ナデ	灰青帯 黒褐色	灰	C	
413	73	トレンチ 1	III~IV層	鉢	D	口縁部 片	口: 沈線、刷突	口: ナデ	黒灰青 刷突	灰	C	
414	73	トレンチ 1 北	IV層	鉢	E	口縁部 片	唇: B 突縁 口: 刷形 T 字文	口: 沈線	灰青帯 灰青帯	砂・灰	C	

2 検出した遺構・遺物

掲載番号	写真番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調色	外面色調 外面色調	胎土	器上 器底	備考
415	73	トレンチ 1	V層上位	鉢	F3	口縁部 片	口: ナテ 胴: L R斜	口~胴: ナテ	黒褐色 灰青緑	長	B	
416	73	トレンチ 1	V層上位	鉢	F	口縁部 片	口: 菊み 口: ナテ 胴: L R横	口~胴: ナテ	にぶい黄 褐色	白・黒	C	
417	73	トレンチ 2区	15層	鉢	F3	口縁部 片	口: 菊み 胴: L R斜	口~胴: ナテ	灰青 灰黄	長	A	
418	73	トレンチ 1・2区	P F 15	鉢	F	口縁部 片	口: 菊み 沈線 胴: L R横	口~胴: ナテ	にぶい黄 褐色	白・黒	C	
419	73	トレンチ 1	V層	鉢	F	口縁部 片	口: 沈線 口: 沈線 胴: L R横	口: ナテ	にぶい黄 褐色	黒	C	
420	73	トレンチ 1・2区	15層	鉢	F	口縁部 片	口: 沈線 口: 沈線	口: 沈線	灰青緑 灰青黄	砂	C	
421	73	トレンチ 1・2区	埋積土	鉢	-	口縁部 片	口: 菊み 口: 沈線	口: 沈線	黒褐色 黒黄	黒	C	
422	73	トレンチ 1	V層上位	鉢	-	口縁部 片	口: 菊み 口: 沈線	口: 沈線、ナテ	にぶい黄 褐色	砂	C	
423	73	トレンチ 1・2区	15層	鉢	-	口縁部 片	口: 沈線 口: 沈線	口: 沈線	にぶい黄 褐色	黒	C	
424	73	トレンチ 1・2区	V層上位	鉢	-	口縁部 片	口: 菊み	口: 沈線	灰青 にぶい黄	白・黒	C	
425	73	トレンチ 1	15~16層 上位	鉢	-	口縁部 片	口: 菊み	口: ナテ	灰青 黒黄	砂・黒	B	
426	73	トレンチ 2	V層	鉢	-	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 口: 菊み 胴: L R斜	口~胴: ナテ	灰青 黒黄	砂・黒	B	
427	73	トレンチ 1	18層	鉢	-	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 胴: L R横	口: 沈線、ナテ?	褐色 にぶい黄	白・長	C	
428	73	トレンチ 1・2区	V層	鉢	-	胴部片	胴: 沈線、L R横	胴: ナテ	灰青 黒黄	白・長	C	
429	73	トレンチ 2	15層	鉢	-	胴部片	口: 沈線 胴: R L横	胴: ナテ	にぶい黄 褐色	砂	B	
430	74	トレンチ 2区	V層	鉢	-	胴部片	口: 沈線 胴: L R横	胴: ナテ	にぶい黄 褐色	長	B	
431	74	トレンチ 2区	15層	鉢	-	胴部片	胴: 沈線、L R横	胴: ナテ	灰青 黒黄	黒	C	
432	74	トレンチ 1北	V層上位	鉢	-	底部 のみ	底: L R横	底: ナテ?	灰青 黒黄	砂・黒	B	
433	74	トレンチ 1西	V層上位	鉢	-	底部 のみ	底: L R横	底: ナテ	にぶい黄 褐色	白・黒	C	
434	74	トレンチ 2東	15層	鉢	-	底部 のみ	底: L R横、沈線	底: ナテ	にぶい黄 褐色	黒	C	
435	74	トレンチ 1西	V層	鉢	-	底部片	底: L R横	底: ナテ?	黒 にぶい黄	黒	C	
436	74	トレンチ 1・2区	ベルト 区	鉢	-	底部片	底: L R横	底: ナテ	明黄褐色 にぶい黄	砂・長	A	
437	74	トレンチ 1	V層下位	鉢	-	底部片	底: 無文	底: ナテ	黒 褐色	長・砂	A	
438	74	トレンチ 1・2区	V層	浅鉢	B	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 胴: 菊み 胴: 菊み	口: 沈線 口~胴: ナテ	にぶい黄 褐色	砂	C	
439	74	トレンチ 1・2区	15層	浅鉢	B	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 胴: 菊み 胴: 菊み	口: 沈線、ナテ	灰青 灰黄	白	B	
440	74	トレンチ 1	V層上位	浅鉢	B	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 胴: 菊み 胴: 菊み	口: 沈線 口~胴: ナテ	黒 にぶい黄	白	C	
441	74	トレンチ 1	18層	浅鉢	B	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 胴: 菊み 胴: 菊み	口: 沈線	灰青 灰黄	長	C	
442	74	トレンチ 1	V層	浅鉢	B	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み 胴: 菊み 胴: 菊み	口: 沈線 口~胴: ナテ	黒 褐色	白	B	
443	74	トレンチ 1	18層	浅鉢	B	口縁部 片	口: 沈線 口: 沈線 胴: 菊み 胴: 菊み	口: 沈線、ナテ	灰青 黒黄	黒	C	
444	74	トレンチ 1	V層	浅鉢	B	胴部片	胴: 沈線 (T字文?)	胴: ナテ	黒 褐色	白	C	
445	74	トレンチ 2	V層下位	浅鉢	B	口縁部 片	口: 菊み 口: 菊み	口: 沈線、ナテ	にぶい黄 褐色	白	C	
446	74	トレンチ 1西	V層上位	浅鉢	C	口縁部 片	口: 沈線、菊み	口: 沈線 口~胴: ナテ	灰青 灰黄	黒	C	容量0.73ℓ

掲載番号	写真番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・図案	外面釉内面色別	胎土	形・量	備考
447	74	トレンチ1北	IV層	洗鉢	C	口・胴上1/2	口：沈線	口：沈線、ナデ	灰黄黒陶	白	C	容積0.57 l
448	74	トレンチ1	IV層	洗鉢	C	I・II線部片	II：沈線、刺突	口：胴：ナデ	焼灰黒陶	白・長	C	
449	74	トレンチ1	12層	洗鉢	C	I・II線部片	II：沈線、刺突	II：沈線 口：胴：ナデ	焼灰黒陶	砂	C	
450	74	トレンチ1・2間	埋葬土中	洗鉢	C	I・II線部片	II：沈線、刺突	II：沈線、ナデ	焼灰黒陶	白	C	
451	74	トレンチ1	IV層上位	洗鉢	C	I・II線部片	II：沈線、刺突	II：沈線	黄灰黒陶	白	C	
452	74	トレンチ2家	13~15層	洗鉢	C	口線部片	口：沈線	II~胴：ナデ	黄灰黒陶	長・白	C	
453	74	田河邊落手跡	IV層	洗鉢	C	口線部片	口：沈線、刺突	II：ナデ?	灰黄黒陶	白・紫	C	
454	74	トレンチ1	IV層	洗鉢	C	口線部片	口：沈線	II~胴：ミガキ	黒灰黒陶	長	C	
455	74	トレンチ1	13~16層上位	洗鉢	C	口線部片	口：沈線、刺突	口：沈線	灰白灰白	白	C	
456	74	トレンチ1・2間	IV層下位	洗鉢	-	I・II線部片	胴：沈線、ナデ	胴：クズリ・ナデ	灰黄焼灰黄陶	長	B	
457	74	トレンチ1北	IV層上位	洗鉢	2	台形	台：I字文	台：ナデ	灰白黒陶	白	C	
458	74	トレンチ1西	12層	洗鉢	2	台形	胴下：I・R線 台：沈線	台：ミガキ	黒陶黒陶	紫	C	
459	74	トレンチ1西	15、16層	洗鉢	2	台形1/3	台：無文	台：クズリ・ナデ	黒陶黒陶	白	C	
460	74	トレンチ1西	IV層上位	洗鉢	3	底部片	底：筋	底：ナデ	焼灰灰黄	紫	C	
461	74	トレンチ1・2間	III~IV層	洗鉢	3	底部片	底：無文	底：ナデ	黄灰黄灰黄	白	C	
462	74	トレンチ1北	IV層	洗鉢	3	底部片	底：沈線、刺	底：ナデ	黒灰赤黄陶	紫	C	
463	74	トレンチ2家	11層	洗鉢	3	底部片	底：沈線、刺	底：ナデ	焼灰灰黄陶	紫	C	
464	74	トレンチ1	14~15層	洗鉢	3	底部片	底	ナデ	焼灰焼灰	白	C	
465	74	トレンチ2	IV層下位	洗鉢	3	底部片	底	ナデ	焼灰灰黄陶	長	C	
466	74	トレンチ1西	IV層上位	洗鉢	3	底部片	底：沈線、刺	底：ナデ	黄陶黒陶	白	C	
467	74	トレンチ1西	IV層上位	甕	B	胴~胴上1/2	胴：工字文	胴：ナデ	焼灰	砂	C	
468	74	トレンチ1西	IV層上位	甕	B	胴~胴下	胴：工字文	胴：ナデ	灰黄焼灰	白・紫	C	
469	74	トレンチ1	15~16層上位	甕	a	I・II線部片	器：A突起、D突起、沈線 II：沈線	口：沈線	灰黄焼灰黄陶	白	C	
470	74	トレンチ1・2間	IV層下位	甕	a	I・II線部片	器：A突起、沈線	口：沈線	赤黄 にぶい灰	白	C	
471	74	トレンチ1	IV層上位	甕	b	I・II線部片	器：沈線 口：沈線(「工字文」?)	口：沈線、ナデ	焼灰	砂	C	
472	74	トレンチ2家	15層	甕	-	I・II線部片	口：降帯	口：沈線、ナデ	黄灰赤黄陶	砂	B	
473	74	トレンチ1・2間	IV層上位	甕	b	I・II線部片	II：降帯	口：沈線	焼灰焼灰	白	C	
474	74	トレンチ1	12層	甕	a	I・II線部片	器：B突起、沈線 口：降帯	口：沈線、ナデ	黒陶黒陶	紫	C	
475	74	トレンチ1	12層	甕	-	I・II線部片	器：刺突、沈線	口：沈線、ナデ	焼灰黒陶	紫	C	
476	74	トレンチ2家	15層	甕	A	胴部片	胴：沈線、I・R線	胴：ナデ?	灰黄灰黄	長	C	
477	74	トレンチ1	IV層上位	甕	B	胴部片	胴：工字文	胴：ナデ	灰黄灰黄	白・長	C	
478	74	トレンチ1・2間	埋土中	甕	A	胴部片	胴：沈線、I・R線	胴：ナデ	灰黄焼灰黄陶	白	C	

相模湾 番号	写図 番号	出土位置	層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様・調査	外面金具 内面色沢	胎土	変入 層	備 考
479	75	トレンチ 1	15~16層 上段	壺	A	胴部片	刷:沈線、L R横	刷:ケズリーナテ	唾灰質 陶質	長	C	
480	75	トレンチ 1	15~16層	壺	A	胴部片	刷:L R?横、L字文	刷:ナテ	唾灰 陶灰	長	C	
481	75	トレンチ 1北	IV層	壺	-	口-胴 上1/4	刷:L R横	刷:ナテ	唾 灰	砂	A	
482	75	トレンチ 1-2間	甲羅ナシ	壺	B	胴部片	刷:十字文	刷:ナテ	唾灰 黒濁	白	C	
483	75	トレンチ 1	18層	壺	B	胴部片	刷:十字文	刷:ナテ	唾 黄濁	赤	C	
484	75	トレンチ 1、2間	III-IV層	壺	-	口縁部 片	刷:無文	刷:ナテ	唾黄濁 赤黄濁	砂	A	
485	75	トレンチ 2南	火石灰周 辺	壺	-	胴部片	刷:ミガキ 刷:沈線、L R横	刷~横:ナテ	灰黄濁 灰黄濁	長	C	
486	75	トレンチ 1-2間	ベルトー ク	壺?	-	底部	底:L R横	底:ナテ	唾 粉質	赤	C	外壁にアスファルト 付着
487	75	トレンチ 1東	II層	高平?	-	不詳片	不詳:付丸(2層附)	不詳:ナテ?	にぶい黄濁 灰白	砂・長	A	
488	75	トレンチ 1東	塩屋上中	高平?	-	不詳	付:L R横	付:ナテ	明赤地に ぶい黄濁	赤	C	
489	75	トレンチ 1北	IV層	高平?	-	不詳片	ナテ	ナテ	にぶい黄濁 陶灰	長	B	
490	75	トレンチ 1-2間	III-IV層	ヒ チュア	-	底部片	底:L R横	底:ケズリ	赤濁 にぶい黄濁	砂・赤	A	
491	75	トレンチ 1-2間	III-IV層	ヒ チュア	-	底部片	底:黒文	底:ナテ	黒濁	砂	B	
492	75	トレンチ 2東	15層	十穀円 形	-	完整	R L斜	-	灰黄濁 にぶい黄濁	長・雪	B	
493	75	トレンチ 2	15層	十穀品	-	底部	L R横、沈線	-	にぶい黄濁	赤	C	
494	75	日河道ト レ北	III層	土器	-	胴部片	沈線、刷突	-	灰	白	C	

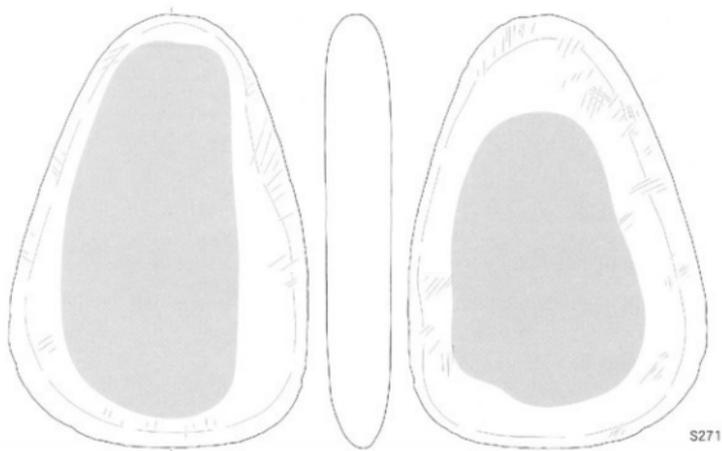
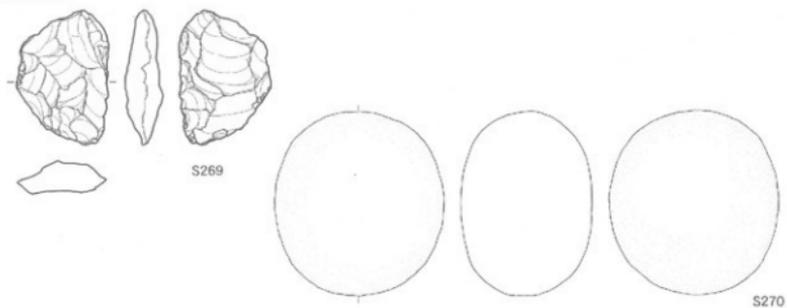
第35表 土器観察表 旧河道 土師器 (第29次分)

相模湾 番号	写図 番号	出土位置	層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様・調査	胎土	外面色沢 内面色沢	備 考
495	86	トレンチ 1-2段	14~ 15層	十穀器 杯(内黒)	1A2d	口-底 1/3	口径:(14.8) 器高:4.4 底径:6.5	外面:ナテ+ミガキ、 ケズリ 内面:ミガキ	長	にぶい黄濁 黒	内面に顔色の光沢
496	86	トレンチ 2	火石 灰周 辺	土師器 杯	1c ii	口-底 1/2	口径:14.4 器高:3.0 底径:5.4	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	砂	橙 濁	
497	86	トレンチ 2	11層	土師器 杯	1c ii	口-底 1/5	口径:(14.0) 器高:2.5 底径:5.1	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	砂	橙 濁	
498	75	トレンチ 2	火石 灰周 辺	土師器 杯	1c ii	口-胴 1/2	口径:13.2 器高:(3.9) 底径:-	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	砂	橙 濁	
499	75	トレンチ 2	火石 灰周 辺	土師器 杯	-	底部片	口径: 底径:6.0 器高:(1.1)	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	砂	橙 濁	
500	75	トレンチ 2	火石 灰周 辺(内黒)	土師器 杯	ii	口-胴 1/2	口径:12.5 器高:(3.0) 底径:-	外面:刷転ナテ 内面:ミガキ	砂	橙 濁	
501	75	26次調査 区境	12~ 13層	土師器 壺	-	底部片	口径: 底径:6.5 器高:(3.0)	外面:刷転ナテ 内面:ミガキ	砂	灰白 白	
502	86	トレンチ 2	火石 灰周 辺	土師器 杯(内黒)	ii c ii	口-底 2/3	口径:14.5 器高:1.4 底径:5.4	外面:刷転ナテ 内面:ミガキ	砂	橙 濁	黒濁
503	86	トレンチ 2	火石 灰周 辺	土師器 杯	1c ii	口-底 2/3	口径:15.0 器高:5.6 底径:6.0	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	砂	にぶい黄濁 にぶい黄濁	黒濁
504	86	トレンチ 2	7~ 8層	土師器 杯	1c iii	口-底 1/3	口径:(14.2) 器高:3.5 底径:5.6	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	砂	にぶい黄濁 にぶい黄濁	黒濁
505	86	トレンチ 2	火石 灰周 辺	土師器 杯	1c ii	口-底 2/3	口径:(14.5) 器高:4.1 底径:5.0	外面:刷転ナテ 内面:刷転ナテ	赤	橙 濁	黒濁
506	75	トレンチ 1	15層	須恵埴 器	-	胴部片	口径: 底径:-	外面:タタキ 内面:タタキ	砂	青灰 青灰	
507	75	トレンチ 2	5層	土師器 杯	-	胴部片	口径: 底径:-	外面: 内面:-	砂	灰黄 黄濁	黒濁

第36表 土器観察表 R G 055・056

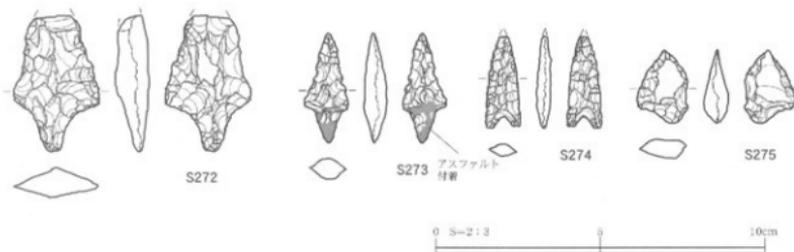
掲載番号	写真番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	法 量	調 整	粘土	外面色調	内面色調	備 考
695	86	R G 56	堆積土中	土師器、 平	I a	口～底1/2	口径：14.5 器高：5.5 底径：5.8	外面：同転ナデ 内面：逆転ナデ	砂	橙		
696	86	R G 56	堆積土中	土師器、 平(内蓋)	II c ii	口～底1/4	口径：(14.0) 器高：3.1 底径：(6.0)	外面：同転ナデ 内面：ミガキ	雲	橙		
697	86	R G 56	堆積土中	土師器、 平	I c	口～底1/3	口径：(15.4) 器高：3.0 底径：3.4	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	雲	橙		
698	84	R G 56	堆積土中	土師器、 平	I c	口～底1/4	口径：(13.4) 器高：3.0 底径：(4.4)	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	砂	橙		
699	84	R G 56	堆積土中	土師器、 平	—	胴～底1/2	口径：— 器高：(3.8) 底径：3.8	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	砂	橙		
700	84	R G 56	堆積土中	土師器、 平	—	胴～底1/2	口径：— 器高：(3.3) 底径：7.0	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	砂	橙		
701	84	R G 55	堆積土中	土師器、 平	—	胴～底1/3	口径：— 器高：(2.5) 底径：5.2	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	砂	橙		
702	84	R G 55	堆積土中	土師器、 平(内蓋)	—	底部のみ	口径：— 器高：(1.3) 底径：6.0	外面：同転ナデ 内面：ミガキ	雲	橙		
703	84	R G 55	堆積土中	土師器、 平	—	底部のみ	口径：— 器高：(1.2) 底径：5.4	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	雲	橙		
704	84	R G 55	堆積土中	土師器、 高台平	—	高台のみ	口径：— 器高：(1.9) 底径：7.5	外面：同転ナデ 内面：同転ナデ	砂	洗費橙 洗費橙		

RF021出土

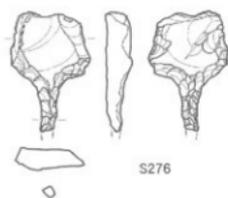


0 1:3 10cm

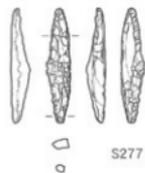
旧河道出土



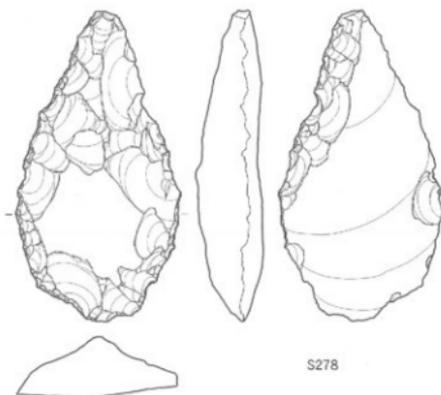
第147図 RF021・旧河道 出土遺物(9)



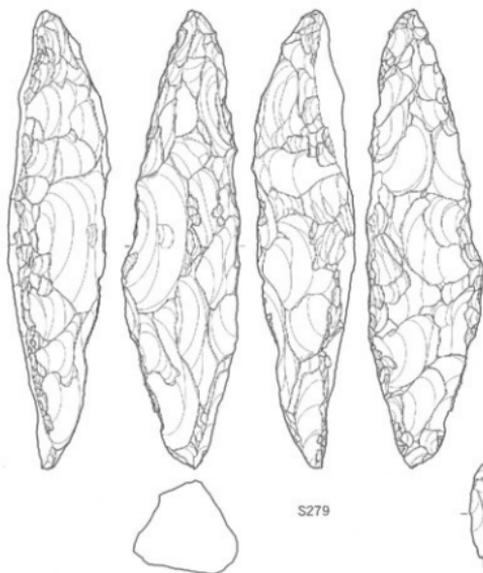
S276



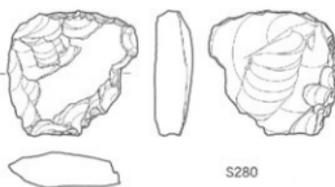
S277



S278



S279

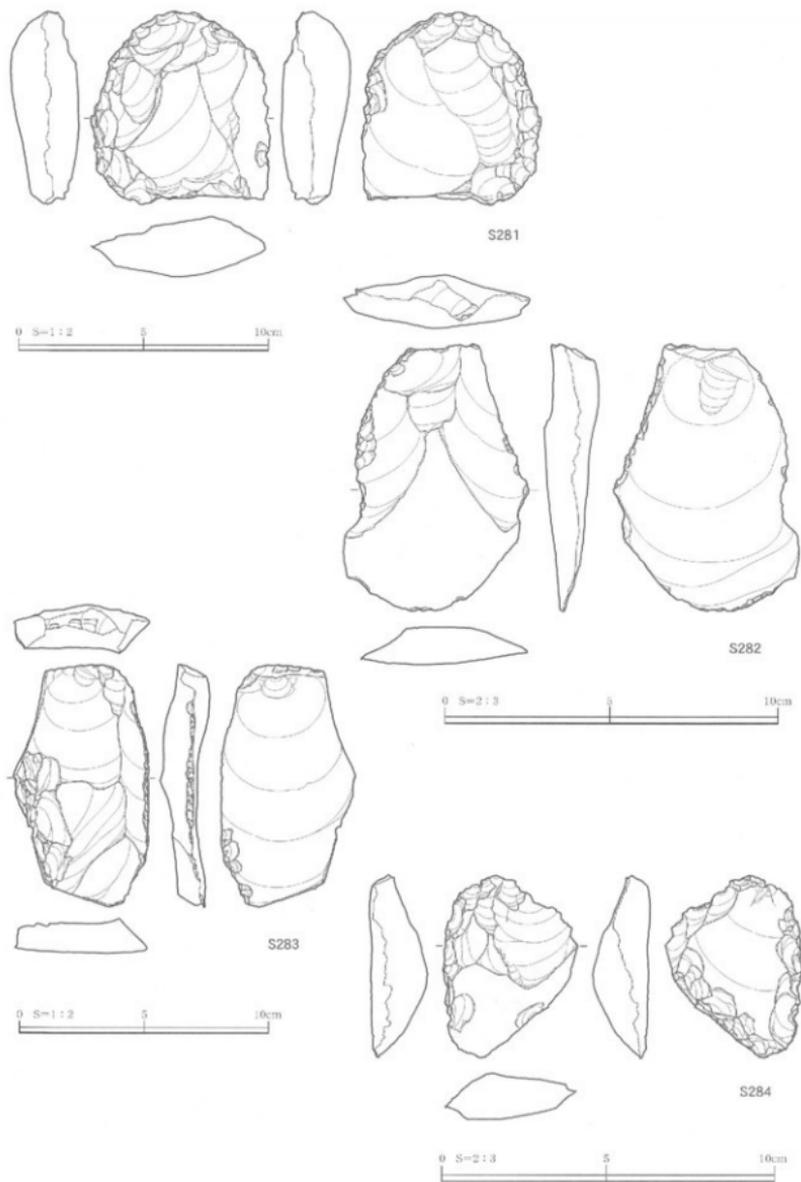


S280



第148圖 旧河道 出土遺物 (10)

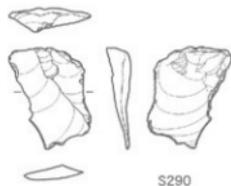
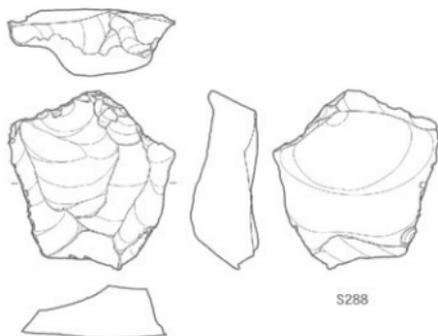
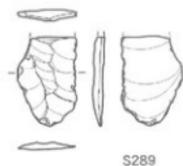
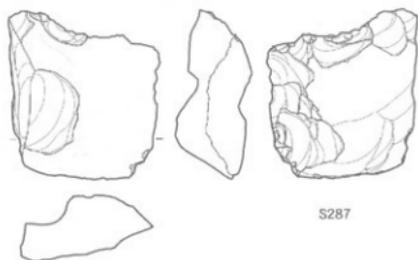
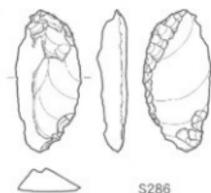
2 検出した遺構・遺物



第149図 旧河道 出土遺物 (11)

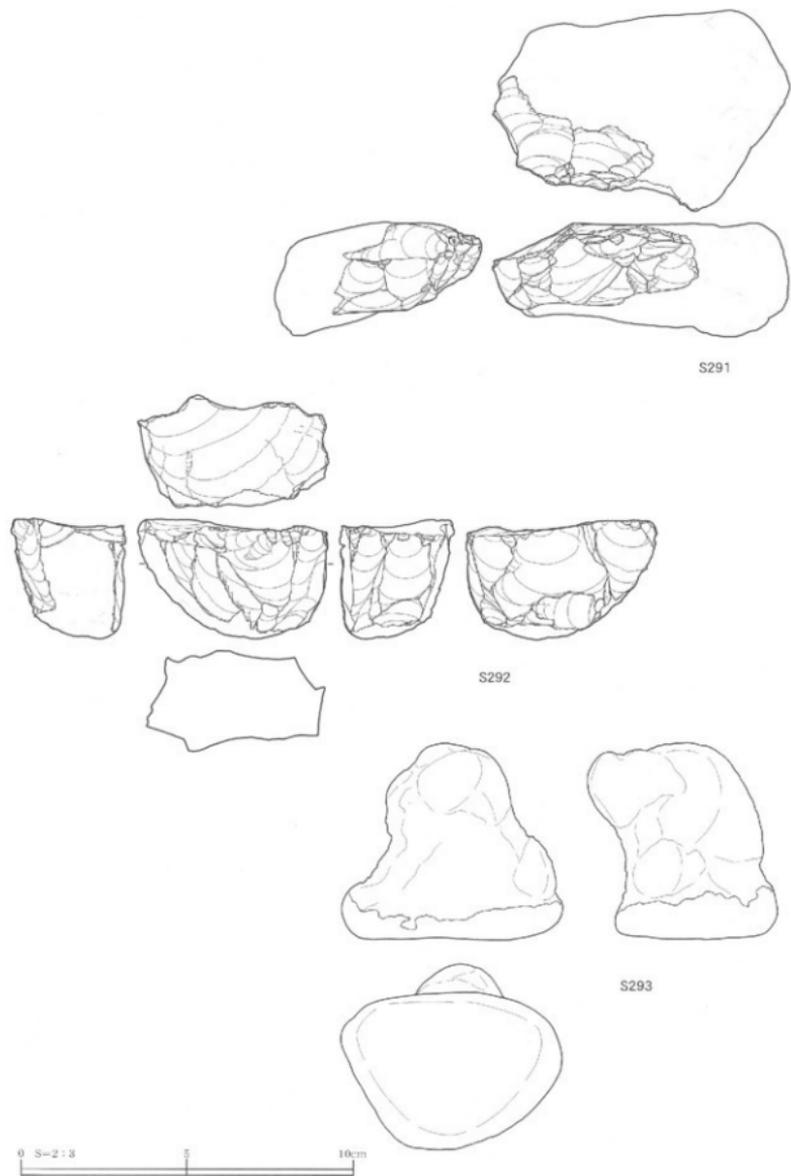


0 5=1:3 5 10cm

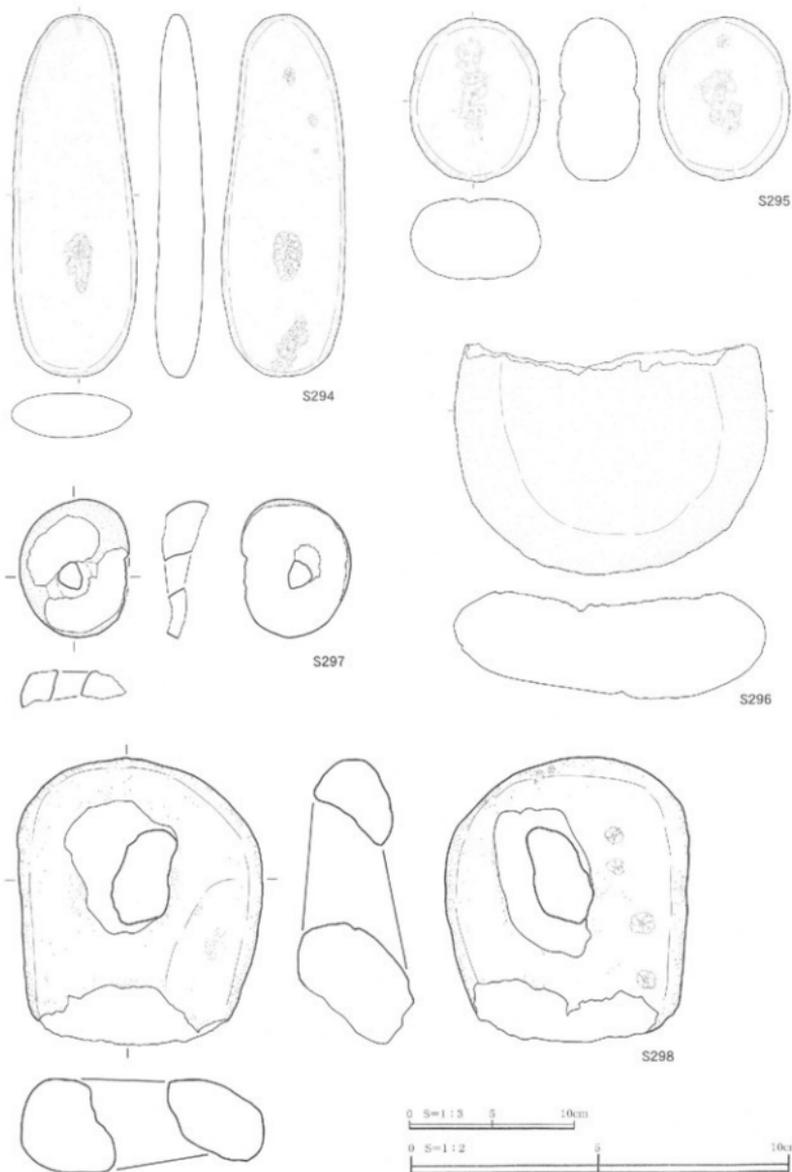


0 5=2:3 5 10cm

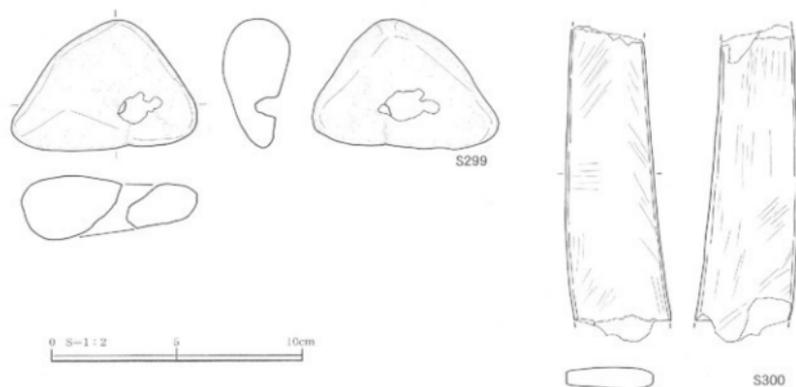
第150図 旧河道 出土遺物 (12)



第151図 旧河道 出土遺物 (13)



第152図 旧河道 出土遺物 (14)



第153図 旧河道 出土遺物 (15)

第37表 石器観察表 旧河道 (第29次分)

掲載番号	写図番号	部 類	出土位置	層 位	分類	石 質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	先端角度 (°)	残存状態	備 考
S272	87	石鏃	トレ1西	Ⅲ-Ⅲ層	1層	頁岩2	(51.00)	25.52	10.72	(7.90)	-	先端欠損	
S273	87	石鏃	トレ1・2間	Ⅳ層	1層	頁岩2	33.17	13.16	7.06	1.87	-	完形	アスファルト付着
S274	87	石鏃	トレ1・2間	埋積土	4層	頁岩5	(27.97)	10.28	4.55	(1.05)	-	先端欠損	
S275	87	石鏃	トレ2	Ⅳ層	5層	頁岩1	22.17	16.48	7.27	2.19	-	完形	
S276	87	石鏃	トレ1西	Ⅳ層	2 a 層	頁岩1	(36.65)	23.65	9.27	(5.11)	-	基部欠損	
S277	87	石鏃	トレ2	Ⅳ層	1層	頁岩1	34.86	(7.11)	5.81	(1.27)	-	基部欠損	
S278	87	石鏃	トレ1西	Ⅳ層	-	頁岩1	34.54	45.11	19.96	72.12	-	完形	
S279	87	尖頭器	トレ1・2間	14・15層	-	頁岩1	-	47.26	37.56	326.74	-	完形	
S280	87	不定形石鏃	トレ1西	Ⅳ層上	2層	頁岩1	38.63	36.89	12.69	19.81	-	完形	
S281	87	不定形石鏃	トレ2東	Ⅳ層	2層	頁岩2	79.34	70.76	26.69	145.63	-	完形	
S282	88	不定形石鏃	トレ1西	7層	3層	頁岩4	83.12	52.47	17.48	55.93	-	完形	
S283	88	不定形石鏃	トレ2	Ⅳ層	1層	頁岩2	36.83	54.20	15.47	96.75	-	完形	
S284	88	不定形石鏃	トレ2	Ⅳ層	1層	頁岩1	52.51	42.11	17.52	36.31	-	完形	
S285	88	不定形石鏃	トレ2	Ⅳ層	1層	頁岩1	148.54	82.58	34.61	322.86	-	完形	
S286	88	不定形石鏃	トレ1	14・15層	1層	頁岩1	43.25	19.62	9.67	6.70	-	完形	
S287	88	石フレイク	トレ2東	15層	-	頁岩2	80.46	52.47	19.65	42.99	-	完形	
S288	88	石フレイク	6次分埋層	-	-	頁岩1	53.10	49.57	22.51	47.02	-	完形	
S289	88	フレイク	トレ1西	Ⅳ層	D 2 層	凝灰岩	27.74	18.06	3.99	1.52	-	完形	
S290	88	フレイク	トレ1	14・15層	C 2 層	凝灰岩	31.29	20.51	7.22	2.79	-	完形	
S291	88	石杖	トレ1・2間	14・15層	B 2 層	頁岩1	45.22	77.80	45.21	188.50	-	-	
S292	88	石杖	トレ1・2間	14・15層	A 3 層	頁岩1	85.09	117.17	40.45	481.87	-	-	
S293	88	凝灰岩塊	トレ1	Ⅳ層	1層	安山岩	80.04	69.99	79.32	476.47	-	完形	
S294	89	凝灰岩塊	トレ1	15・15層	3層	砂岩	222.50	74.56	28.55	650.26	-	完形	
S295	89	石皿類	トレ1・2間	Ⅳ層下位	2層	安山岩	178.50	142.53	91.07	1756.01	-	完形	
S296	89	石皿類	トレ1	14・15層	1層	チャイナイト	(135.28)	186.00	69.96	1886.67	-	1/4欠損	
S297	89	不明石部	トレ1・2間	P P 2	-	凝灰岩	41.85	32.76	(15.05)	11.51	-	完形	
S298	89	不明石部	トレ1	Ⅲ-Ⅲ層	-	安山岩	46.44	73.13	30.11	234.61	-	完形	穿孔あり
S299	89	不明石部	トレ1	Ⅳ層	-	安山岩	52.08	74.78	29.28	118.72	-	完形	穿孔・凹痕あり
S300	89	石棒類	トレ2	ペルト5層	-	凝灰岩	(129.11)	37.09	8.97	(72.85)	-	先端欠損	北上山塊産石材

※トレ→トレンチの壁

(5) 遺構外出土遺物

遺構外から57.9kgの縄文土器、弥生土器が出土している。出土層は第26次調査同様、所謂包含層に相当するIV層を中心とする。出土分布は第73図に示したとおりである。全般的に出土量は多く、1グリッドあたりの出土量が400gを超える場所がほとんどである。ただし破片資料が多く、完形は少ない。出土した土器の器種は、縄文土器では深鉢、鉢、浅鉢、壺がみられる。また上製品ではミニチュア土器、土製円板、土偶を確認している。

出土した土器のうち、187点を図示した。

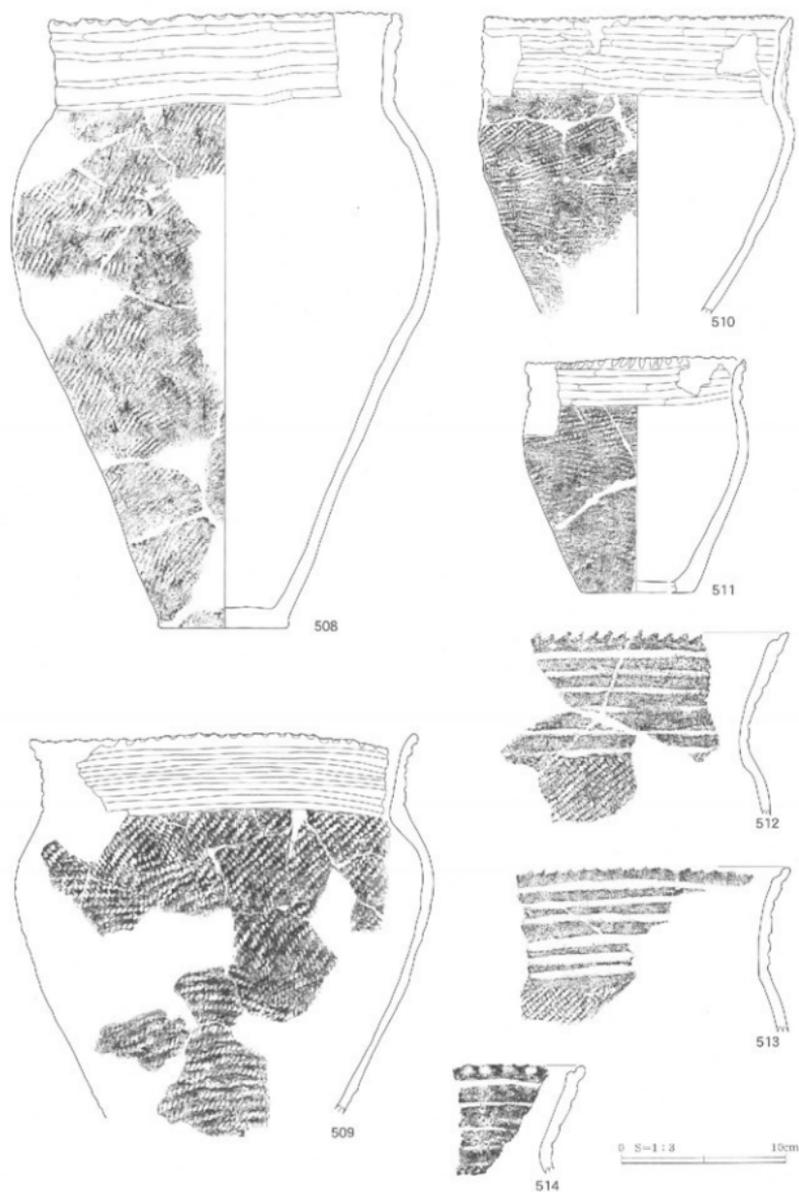
508～596は深鉢である。A類(508～564、570、576、580～582)が最も多く確認できた。いずれも口唇部に棒状工具による押圧や刻みが巡り、口唇部に何も施されない、平縁のものはほとんどない。形状の分かるものでは、508のように口縁部が直立気味のものも多く、口縁部が大きく開くものは517、519のみである。570は口縁部の文様帯が狭く、また横位の沈線の他に、口唇部直下に斜位の沈線が巡る。580は口縁部に縦位のB突起が付される。565、566、571～575はB類に相当する。565は口縁部を区画する上下端の沈線の他に、口唇部直下に斜位の沈線が巡る。567、577～579はC類に相当する。567は口縁部下に棒状工具による沈線を施文しようとしたのか、非常に浅く、ナデ成形のようにもみえる。口唇部にB突起が付き、棒状工具による押圧が巡る。

597～635は鉢である。D類、F類で形態の分かるものが確認できたが、他の分類では破片資料しか出土していない。A類は608の胴部片のみで、またB類も609、610のような小片のみである。C類は図示できる資料がなかった。597～605、611～621はD類に相当する。波状口縁のもの(597、611～616)、や平縁で、口唇部に刻みが巡るもの(598～602、610、617、618)が多く、中には4単位の突起が付されるもの(603、619)やB突起が付されるもの(604)もみられる。E類は622のみであり、小片で形態は不明である。606、607、623～626はF類に相当する。文様は胴部に縄文が施文されるもののみで、形態は内湾気味に立ち上がり口唇部直下で、やや外へと開くもの(606、607、623、624)と口縁部に段を有し、無文化するもの(625、626)とがみられる。

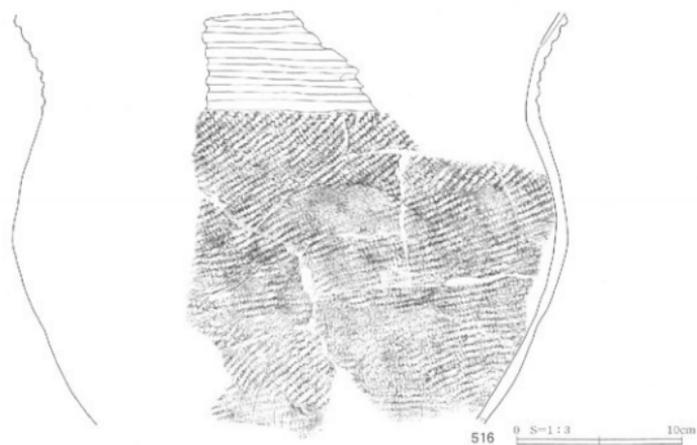
636～660は浅鉢である。他の器種同様、破片資料が多く、形態を復元できたものは少ないが、図示できたもの多くはB類(636～648、654)、C類(649～653、657)であり、他の分類に相当するものはわずかである。A類、E類は図示できるものが無かった。B類の中で、形態が復元できたものは全て3類である。636や638は小さい四脚が付く。638は底面全体に工字文が描かれている。637は比較的長い四脚が付く。口唇部に突起が付き、口縁部にはB突起が付く。その下に工字文が描かれている。C類はいずれも口縁部が内湾する形態であると推定され、口縁部に2～3条の沈線が巡り、棒状工具による刺突が施される。655は2類(台付浅鉢)の台部分であるが、沈線による工字文が施されており、B類かC類に相当すると推測される。F類は659のみで、口縁部がやや肥厚し、口唇部にはA突起が、口縁部には沈線が巡る。G類は660のみであった。器面は無文であり、口縁部に細い沈線が3条巡り、施文が浅く、文様というより成形痕の可能性が高い。

661～688は壺である。文様ではA類(661、662、682、686)とB類(663、665、681、683)、無文や縄文のみのもの(666～668、679)が見られるが、他の分類のものでは図示できるものは無かった。661、662は胴部に縄文を施文してから沈線による工字文を描いている。底面に小さい四脚が付く。663は胴部上半の破片で数段に渡り、沈線による工字文が描かれる。666はやや小形の壺で口唇部が1箇所、突起状に盛り上がる。頸部に沈線、胴部に縄文が施文される。

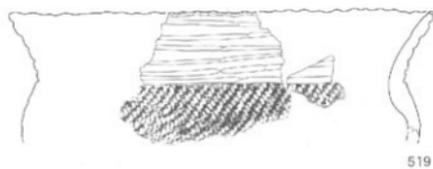
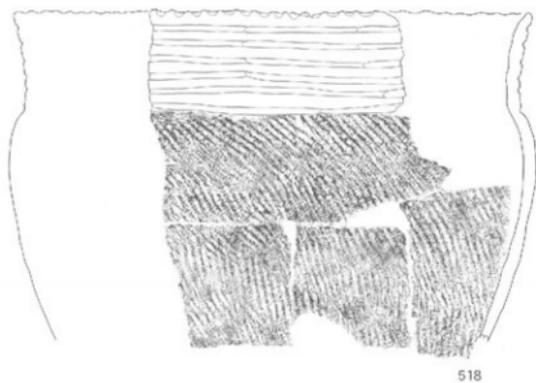
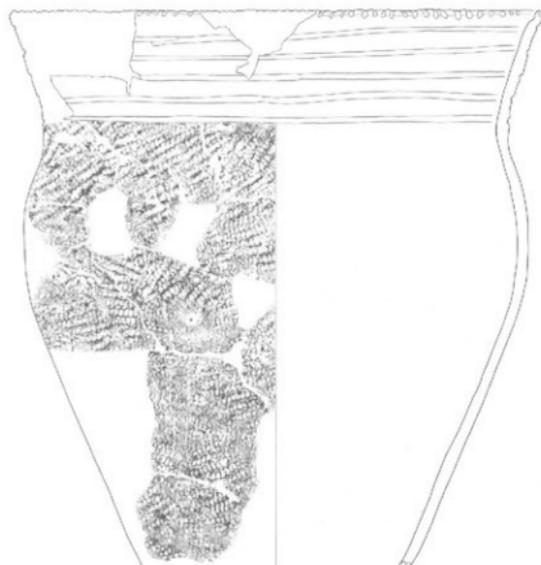
689～692はミニチュア土器である。689は深鉢を模しており、口唇部に4単位の突起が付く。693は



第154図 遺構外 出土土器（1）

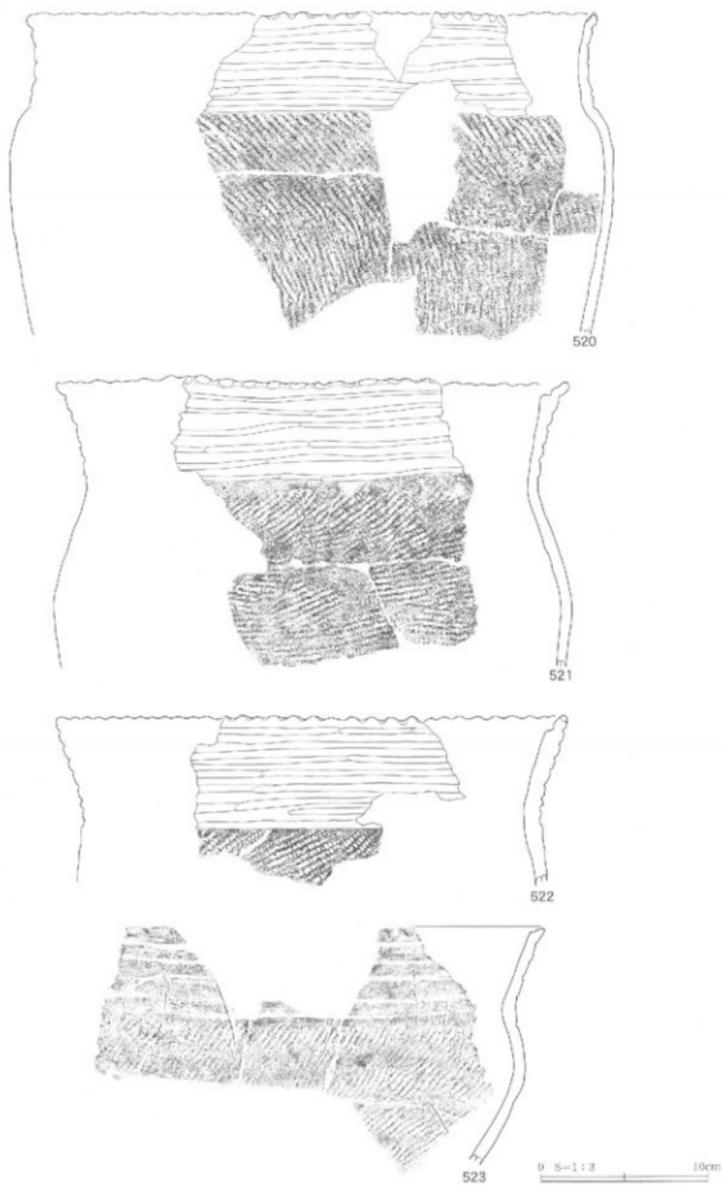


第155圖 遺構外 出土土器 (2)



0 5=1:3 10cm

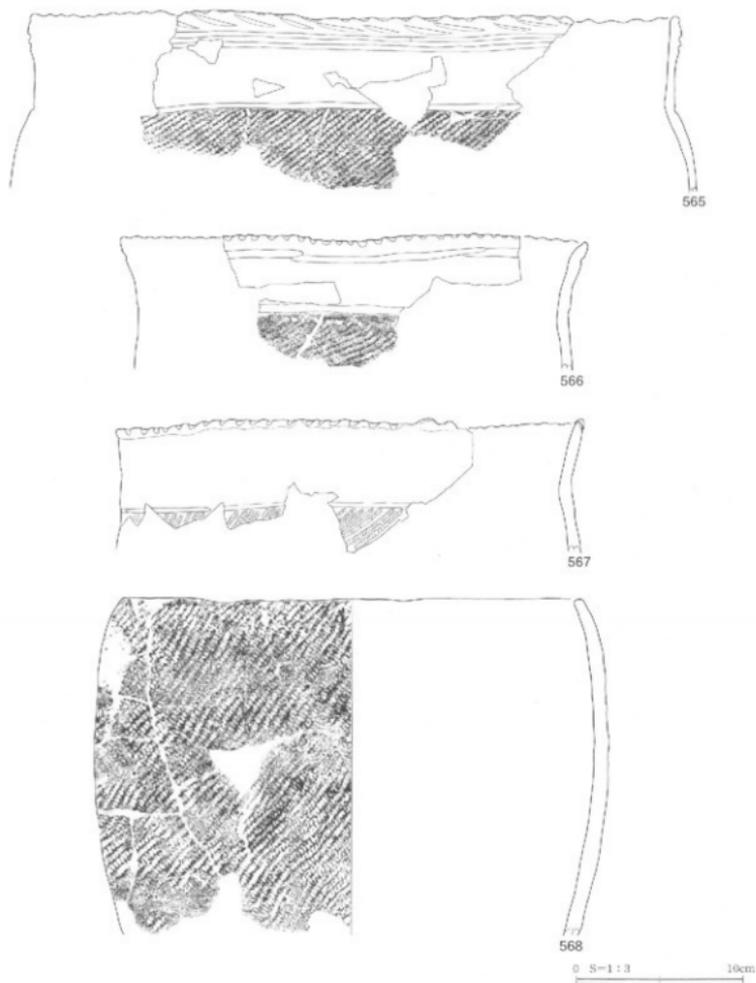
第156図 遺構外 出土土器(3)



第157図 遺構外 出土土器 (4)



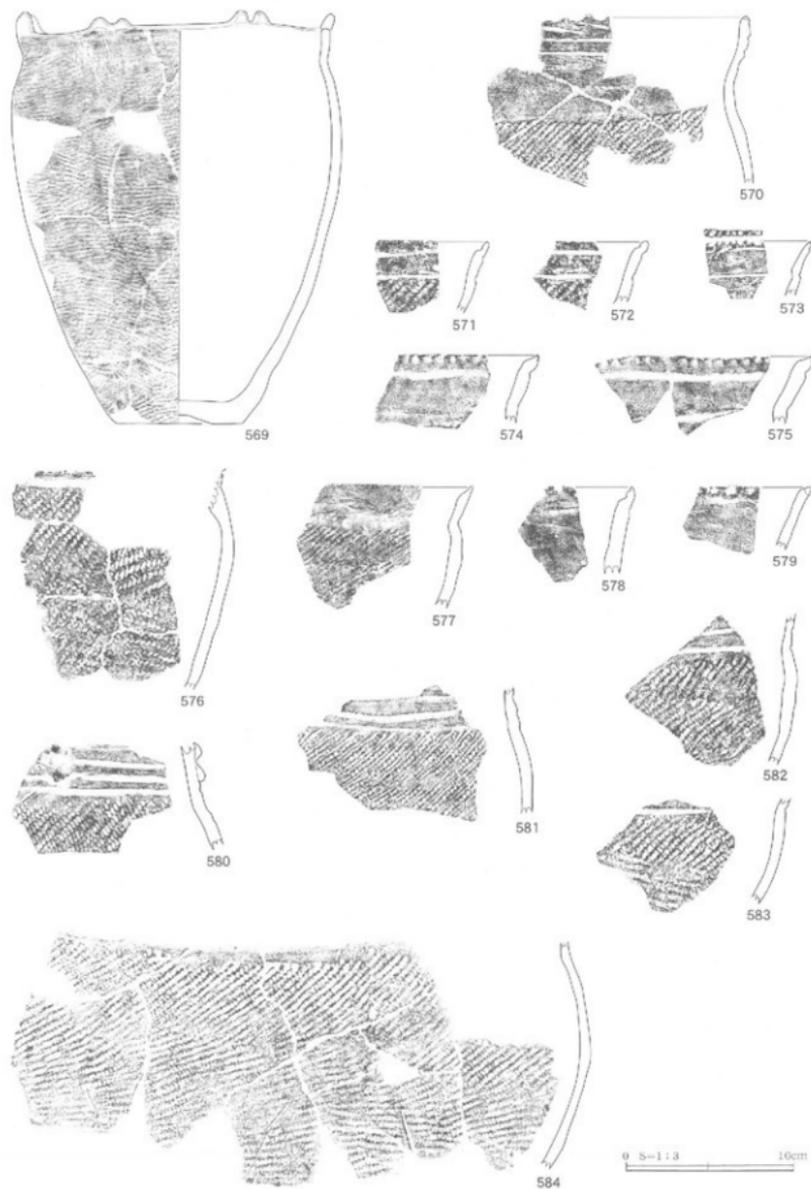
第158図 遺構外 出土土器 (5)



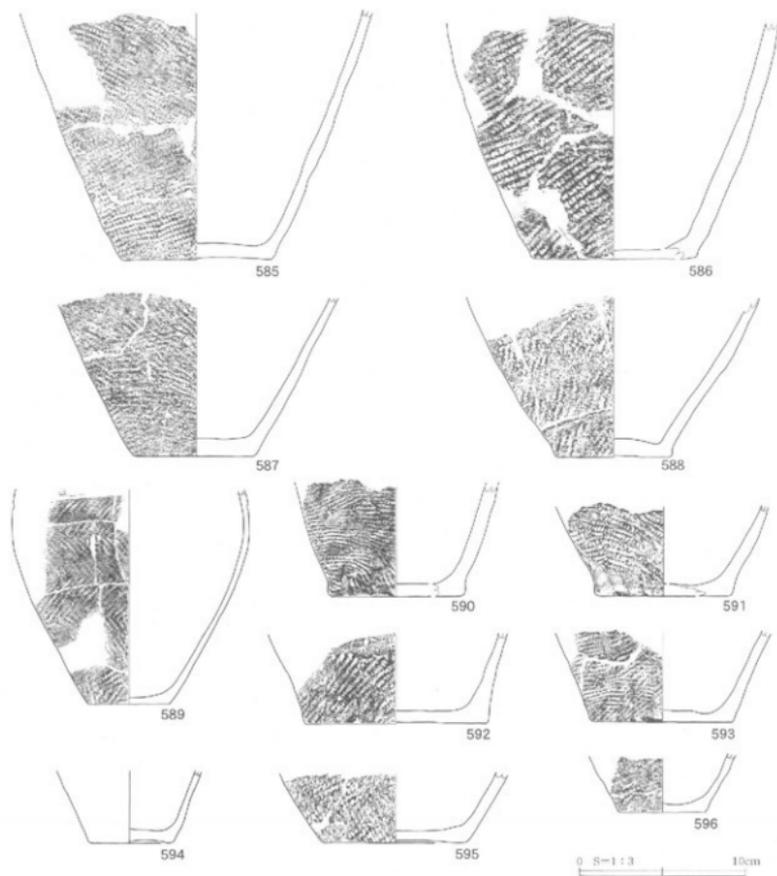
第159図 遺構外 出土土器(6)

土製円板である。施文されている縄文から深鉢の胴部片を転用したものと推定される。694は土偶と思われる土製品で、腕部分に相当するものであろうか。沈線が1条巡る。

また、数点であるが、遺構外より土師器片が見つかっており、4点図示した。705は奈良時代の高坏の台部分である。内面黒色処理され、外面にはケズリ調整が見られる。706～708は坏の底部片で、



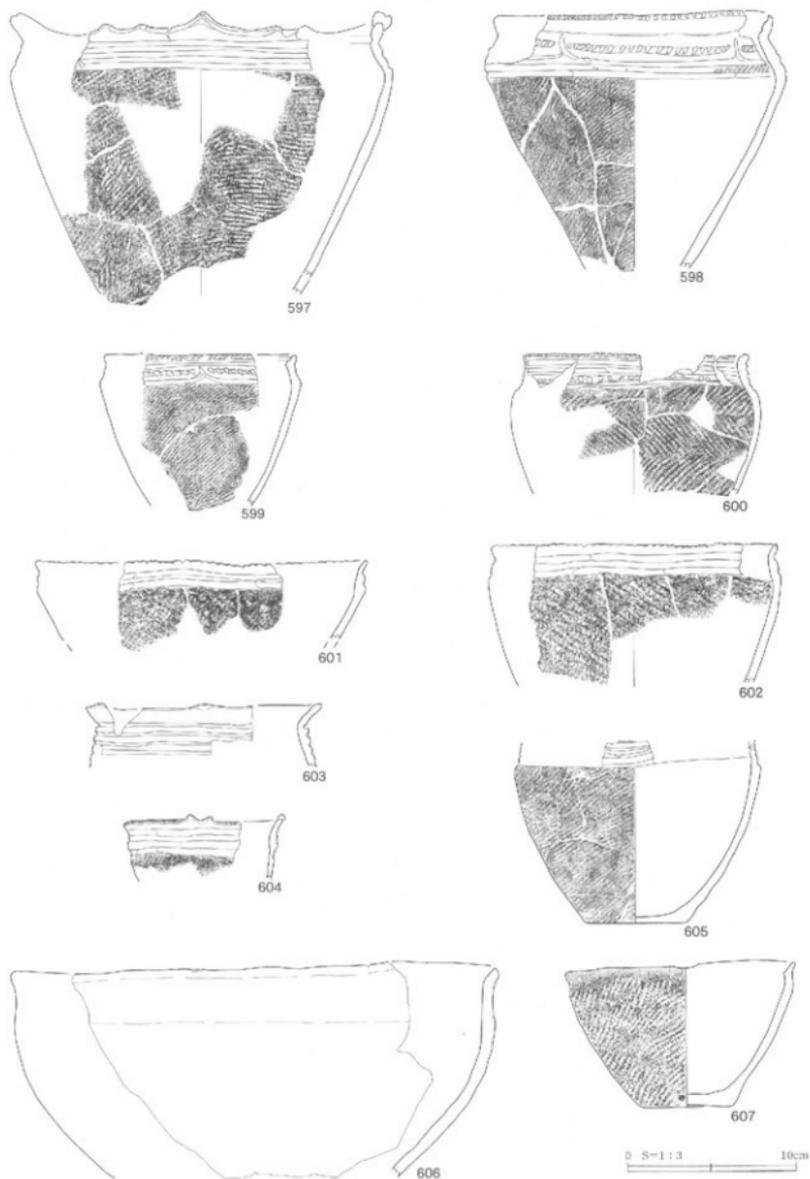
第160図 遺構外 出土土器 (7)



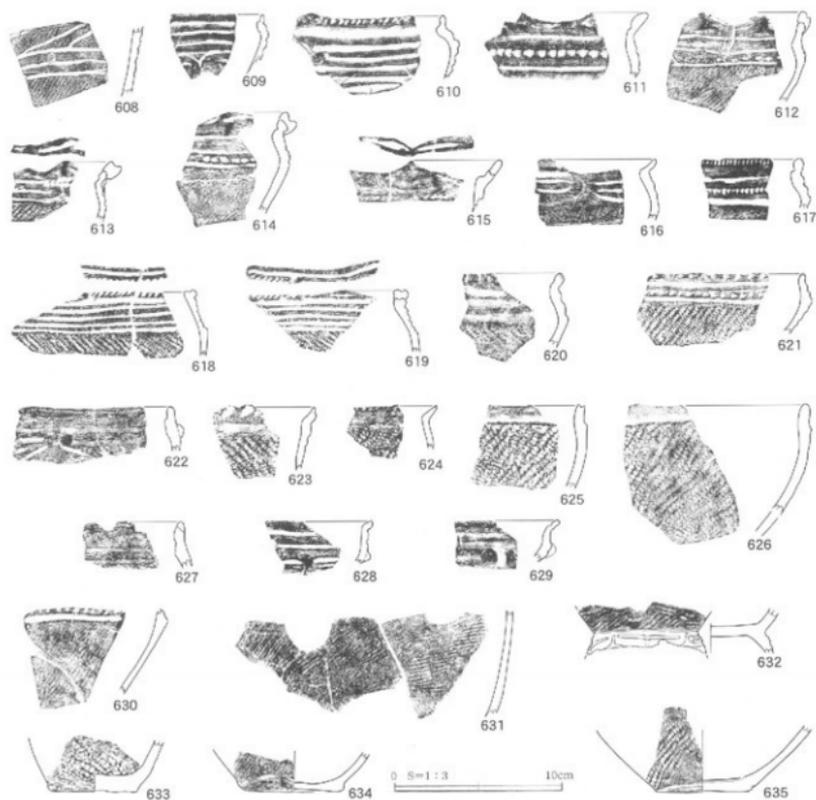
第161図 遺構外 出土石器（8）

糸切り痕がみられるので、ロクロ成形の坏であるものと推定される。

遺構外から80点の石器が出土している。26点図示したS301～308は石鏝である。1類が多い（S301・304～308）。S302は5類（未成品）であるが、中茎部を作出しており、形態から1類を製作する途中でやめたものであった可能性が高い。S303は2類である。S308は長さが50.21mmを計る。中茎部を欠損しており、実際はもっと大きかったものと想定されるが、他石鏝と比べても大きい。体部の途中にくびれが見受けられ、形態も他のものとは異なる。S309、310は石匙である。どちらも1類

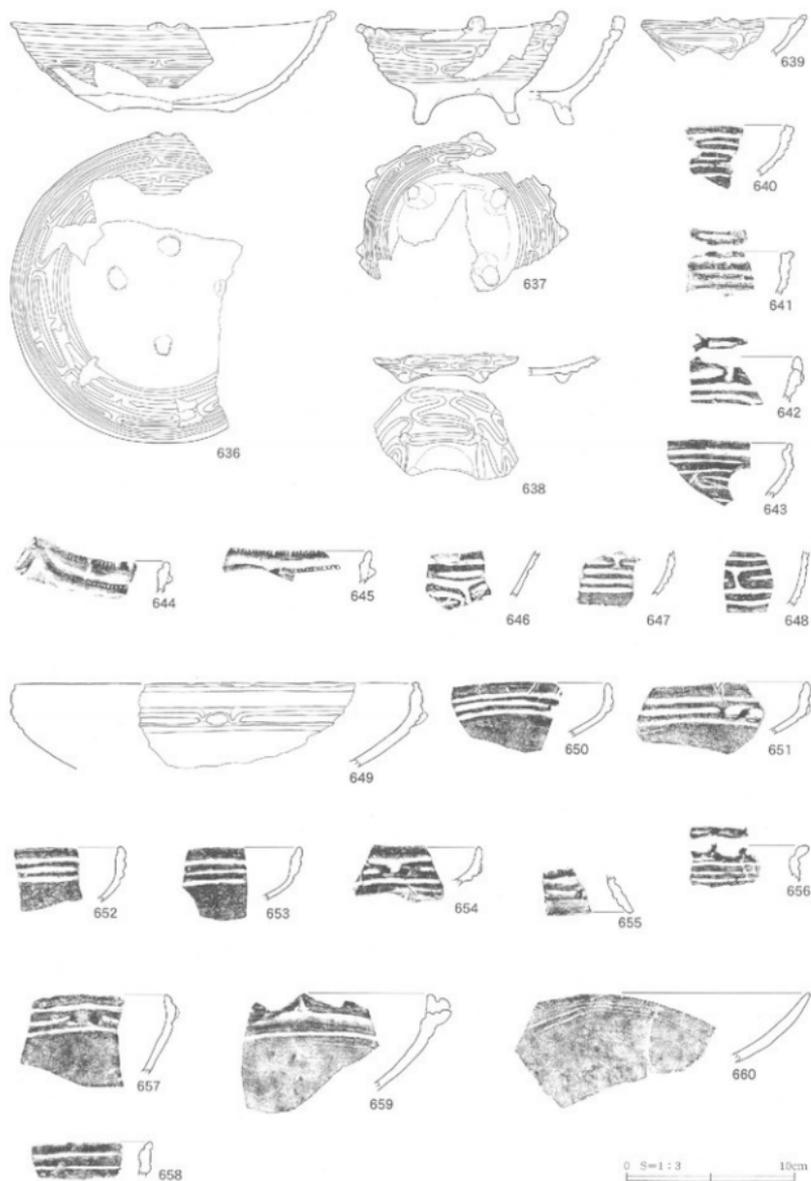


第162図 遺構外 出土土器(9)

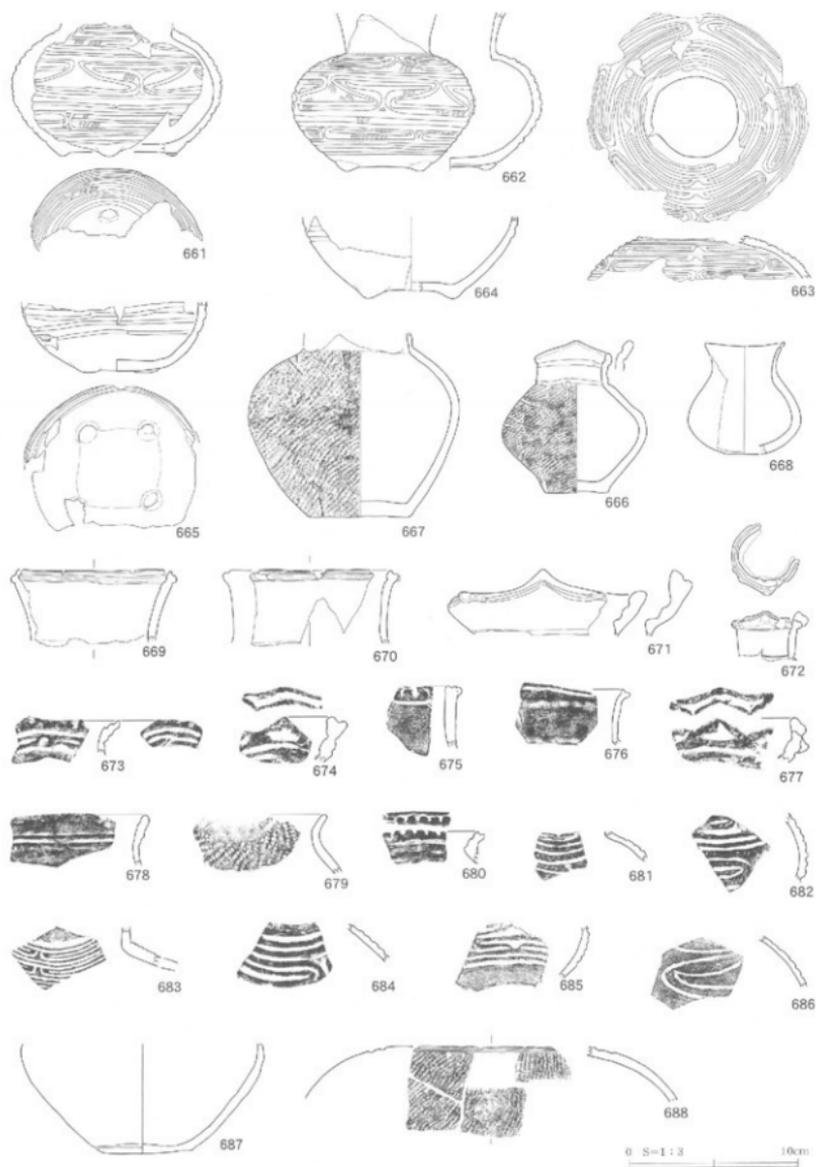


第163図 遺構外 出土土器 (10)

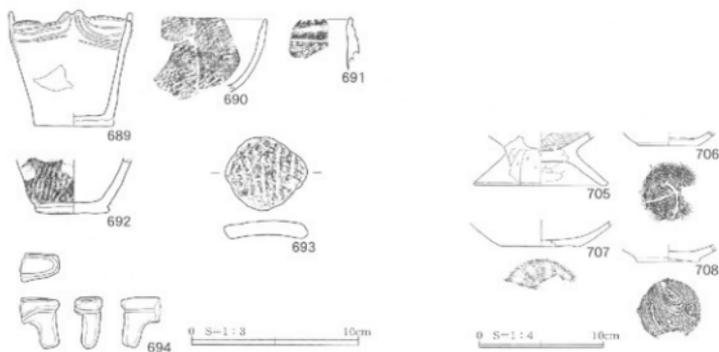
で、刃部は向面から二次加工を施し作出している。S311～313は不定形石器である。S311、313は1類、S312は2類に相当し、いずれも両面から二次加工を施し、刃部を作出している。S314はRフレイクである。縁辺の片面に連続する押圧剥離痕が見受けられるが全周しない。S315はUフレイクである。縁辺の一部に微細剥離痕が見受けられる。S316～319はフレイクである。S320は石核である。複数の作業面に打点を変えながら剥離作業を行っている。S321～323は敲磨器類である。S321は4類で、片面に凹痕が見受けられる。S322、323は2類で両面に凹痕が見受けられる。S324は有孔石器である。欠損が激しいが、円形状を呈すると思われ、片面には渦巻き状の溝が見受けられる。S525、526は石棒類である。いずれも欠損しているが、断面形態から所謂「石刀」であると思われる。



第164図 遺構外 出土土器 (11)



第165圖 遺構外 出土土器 (12)



第166図 遺構外 出土土器 (13)

第38表 土器観察表 遺構外 (第29次分)

掲載 番号	写真 番号	出土位置	層位	器種	分類	残存 部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	混入 量	備考
508	76	4 N23 t 4 N23 v	IV層 IV層下位	深鉢	A 2	口~底 1/2	帯:押圧 口:沈線(4) 刷: L R横	口:沈線 刷:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄	砂	A	容量9.62ℓ
509	78	4 N24 s	IV層	深鉢	A 2	口~胴 1/4	帯:押圧 口:沈線(6) 刷: L R縦、横	口~刷:ナテ	灰黄褐色 褐色	砂・長	A	容量7.98ℓ
510	76	4 N21 w 4 N23 t 4 N21 v	IV層下位 IV層 IV層下位	深鉢	A 2	口~胴 2/3	帯:押圧 口:沈線(5) 刷: L R横、縦	口~刷:ケズリ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	容量3.70ℓ
511	78	4 N23 s 4 N24 t	IV層	深鉢	A 2	口~底 1/3	帯:刷み 口:沈線(3) 刷: L R縦	口:押圧	にぶい黄褐色 黒褐色	砂	A	容量1.21ℓ
512	78	4 N21 s 4 N23 t	IV層	深鉢	A 1	口縁部 片	帯:押圧 口:沈線(6) 刷: L R横	口:沈線、ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	
513	78	4 N23 u	IV層	深鉢	A 1	口縁部 片	帯:押圧 口:沈線(6) 刷: L R横	口:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・黄	B	
514	78	P P 16	地境土中	深鉢	A	口縁部 片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	褐色 褐色	砂・長	A	
515	76	4 N21 a 4 N21 y 4 N21 r	IV層	深鉢	A 1	口~底 2/3	帯:押圧 口:沈線(5) 刷: L R斜	口~刷:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	容量22.06ℓ
516	78	4 N23 v 4 N24 v 4 N23 y	IV層	深鉢	A 1	口~胴 1/4	口:沈線(7) 刷: L R斜	口:ナテ 刷:ケズリ	褐色 黄褐色	砂・長	B	外面に炭化物 付着
517	76	4 N22 u 4 N22 v	IV層下位 IV層	深鉢	A 1	口~胴 下2/3	帯:刷み 口:沈線(5) 刷: L R斜	口:沈線 口~刷:ナテ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	容量17.44ℓ
518	78	4 N22 u 4 N24 v	IV層	深鉢	A 2	口~胴 上1/4	帯:押圧 口:沈線(6) 刷: R L横	口:ナテ 刷:ケズリ	明褐色 明褐色	砂・黄	A	
519	78	4 N24 s	IV層	深鉢	A 1	口~胴 1/5	帯:押圧 口:沈線(6) 刷: L R横	口:ナテ	黄灰 灰黄	砂	A	
520	78	4 N22 t 4 N23 t	IV層	深鉢	A 2	口~胴 1/4	帯:押圧 口:沈線(4) 刷: L R横	口~刷:ナテ	褐色 褐色	雲・砂	A	
521	79	4 N21 y 4 n21 y	IV層 IV層下位	深鉢	A 1	口~胴 1/4	帯:押圧 口:沈線(6) 刷: L R斜、縦	口:沈線 口~刷:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
522	79	4 N23 t 4 N24 v	IV層	深鉢	A 1	口~胴 上1/5	帯:押圧 口:沈線(7) 刷: L R縦	口:沈線 口~刷:ナテ	灰褐色 褐色	砂	A	
523	79	4 N22 w 4 N23 w	IV層	深鉢	A 1	口~胴 1/4	帯:押圧 口:沈線 刷: L R横	口:沈線	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	B	
524	79	4 N24 v	IV層下位	深鉢	A	口縁部 のみ	帯:押圧 口:沈線(8)	口:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	

探検番号	写回番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面名詞・内面名詞	土質	組合	備考
525	79	4 N21 y	IV層(土器集中部①)	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	黒褐色 黒灰	砂・雲	A	
526	79	4 N25 s	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
527	79	4 N21 a	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線	にぶい黄褐色 黄灰	砂・長	A	
528	79	4 N23 t	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	緑褐色	砂・雲	A	
529	79	4 O22 c	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	黒褐色 黒灰	砂・長	B	
530	79	4 N21 t	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	赤 にぶい黄褐色	砂・雲	B	
531	79	4 N24 v	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	にぶい赤 にぶい赤	砂	B	
532	79	4 N21 l	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線	にぶい黄褐色 灰白	砂・長	B	
533	79	4 N21 e 4 N25 r	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線	灰黄褐色 灰黄褐色	砂・長	A	
534	79	4 N25 s	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	灰黄 灰黄	砂	A	
535	79	4 N21 s	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	黒褐色 黒灰	砂	A	
536	79	4 N21 s	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	雲 雲	砂	A	
537	79	4 N22 w	IV層下位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	砂・雲	B	
538	79	4 N21 a	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:刷み 口:沈線	口:ナテ	灰黄褐色 灰黄褐色	雲	C	外面に吹きこぼれ
539	79	4 N22 v	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	黄褐色 黄褐色	砂	A	
540	79	4 N30 l	IV層下位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	淡黄褐色 灰白	砂	A	
541	79	4 N24 s	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線	緑褐色	砂・雲	B	
542	79	4 N21 y	IV層(土器集中部①)	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	にぶい黄褐色 黒褐色	砂・長	A	
543	79	4 N21 y	IV層(土器集中部①)	深鉢	A	口縁部片	口:押圧、沈線	口:ナテ	黒灰 にぶい黄褐色	砂・雲	A	
544	80	4 N21 a	IV層	深鉢	A	口縁部片	口:刷み、沈線	口:沈線、ナテ	灰黄 灰白	砂・長	A	
545	80	4 N20 a	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	褐 黒褐色	砂	A	
546	80	4 N22 a	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	雲	C	
547	80	4 N24 v	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	B	
548	80	4 N22 w	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	B	
549	80	4 N19 a 4 N19 b	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線	灰黄 灰黄	砂	A	
550	80	4 N24 s	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:刷み 口:沈線	口:ナテ	黒褐色 黒灰	砂	C	
551	80	4 N21 a	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂・長	A	
552	80	4 N22 v	IV層下位	深鉢	A	口縁部片	口:沈線、L.R?柄	口:沈線	にぶい黄褐色 黄灰	砂	B	
553	80	4 N25 s	IV層上位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	
554	80	4 N24 r	IV層下位	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:ナテ?	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	砂	A	
555	80	4 N24 v	IV層	深鉢	A	口縁部片	帯:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	砂・長	A	

探検番号	写号番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面急須 内面急須	出土	遺入 品	備考
556	80	4 N22w	IV層	深鉢	A	口縁部片	唇:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂	B	
557	80	4 N22v	IV層	深鉢	A	口縁部片	唇:押圧 口:沈線	口:沈線	浅黄緑 灰黄	砂・土	B	
558	80	4 N24v	IV層	深鉢	A	口縁部片	口:押圧、沈線	口:ナテ	灰黄緑 灰黄緑	砂・土	B	
559	80	出土地不明		深鉢	A	口縁部片	唇:押圧 口:沈線	口:ナテ	黒色 黒色	砂・土	A	
560	80	4 N21a	IV層	深鉢	A	口縁部片	唇:刻み 口:沈線	口:ナテ	灰黄緑 陶灰	土	C	
561	80	4 N24u	IV層	深鉢	A	口縁部片	口:突起、沈線	口:ナテ	にぶい黄緑 層	砂・土	B	
562	80	4 O22b	IV層	深鉢	A	口縁部片	唇:押圧 口:沈線	口:沈線、ナテ	浅黄 にぶい黄	砂・土	B	
563	80	4 N23u	IV層	深鉢	A	口縁部片	唇:突起 口:沈線	口:沈線	灰白 黒色	砂	A	
564	80	4 O22b	IV層	深鉢	A	口縁部片	唇:押圧 口:沈線	口:沈線	黒色 黒色	砂	A	
565	80	4 N21x	IV層下位	深鉢	B2	口縁部片 胴:LR横	唇:押圧 口:沈線 胴:L R横	口→胴:ナテ	にぶい赤緑 にぶい赤緑	砂・土	A	
566	80	4 N21l	IV層	深鉢	D1	口→胴 L/R	唇:押圧 口:沈線 胴:L R横	口→胴:ナテ	灰白 にぶい黄緑	砂	A	
567	80	4 N22x	IV層下位	深鉢	C	口→胴 L/R	唇:B突起、押圧 口:沈線 胴:L R横	口:ナテ	にぶい赤緑 灰黄	砂・土	A	
568	80	4 N22u	IV層	深鉢	D3	口→胴 L/R	口→胴:L R横	口→胴:ケズリ →ナテ	灰黄緑 にぶい黄緑	砂・土	A	
569	76	4 N21y	IV層	深鉢	C1	口→底 2/3	唇:B突起(8単位?) 口→底:L R横	口→胴:ナテ	浅黄 灰黄	砂	A	容目4.37ℓ
570	80	4 N21x	IV層下位	深鉢	A1	口縁部片	唇:押圧 口:沈線 胴:L R横	口:ナテ	黄 明赤黄	砂・土	B	
571	80	4 O21a	IV層	深鉢	B	口縁部片	唇:刻み 口:沈線 胴:L R横	口:沈線、ナテ	浅黄 黒色	砂・土	A	S72と同
572	80	4 N22x	IV層下位	深鉢	B	口縁部片	唇:刻み 口:沈線 胴:L R横	口:沈線、ナテ	浅黄 黒色	砂・土	A	
573	80	4 N23w	IV層下位	深鉢	B	口縁部片	唇:刻み 口:沈線 胴:L R横	口:ナテ	にぶい黄緑 灰黄緑	砂	B	
574	80	4 N21l	IV層下位	深鉢	B	口縁部片	口:押圧、沈線	口:ナテ?	浅黄 にぶい黄	砂	A	
575	80	4 N21l	IV層	深鉢	B	口縁部片	口:押圧、沈線	口:ナテ?	黄緑 浅黄	砂・土	A	
576	80	4 N24s	IV層	深鉢	A	胴部片	口:沈線 胴:L R横	胴:ナテ	黄緑 陶灰黄	砂・土	A	
577	80	4 N23u	IV層	深鉢	C	口縁部片	口:ケズリ 胴:L R横	口:ナテ	褐色 黒色	砂	A	
578	81	4 N24u	IV層	深鉢	C	口縁部片	唇:押圧、ケズリ	口:ナテ	灰黄緑 灰黄緑	砂	B	
579	81	4 N21w	IV層下位	深鉢	C	口縁部片	唇:押圧	口:ナテ	にぶい黒 黒色	砂・土	A	
580	81	4 N24v	IV層下位	深鉢	A	口縁部片	口:突起、沈線 胴:L R横	口:ナテ	灰黄緑 陶灰	砂・土	A	
581	81	4 N23t	IV層	深鉢	A	胴部片	口:沈線 胴:L R横	胴:ナテ	にぶい黄緑 にぶい黄緑	砂・土	A	
582	81	4 N21y	IV層	深鉢	A	胴部片	口:沈線 胴:L R横	胴:ナテ	灰黄緑 明赤黄	砂・土	B	
583	81	4 N22x	IV層	深鉢	-	胴部片	口:沈線 胴:明赤黄(L R横)	胴:ナテ	灰白 にぶい黄	砂・土	A	
584	81	4 N22u 4 N22v	IV層下位	深鉢	-	胴L/R	胴:L R横、斜	胴:ケズリ→ ナテ	黄 にぶい黄	砂・土	A	
585	76	4 N23w	IV層下位	深鉢	-	底部	底:L R横	胴→底:ケズリ	にぶい黄緑 浅黄	砂	A	
586	81	4 N23l 4 N22v	IV層	深鉢	-	胴下 L/R	胴下:L R横	胴下:ナテ	明赤黄 灰黄	砂	A	

掲載番号	字同番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外向文様	内面文様・調整	外向色調 内面色調	胎土	底金	備考
587	76	4 N22 v	IV層上位	深鉢		胴下～ 底部	胴下：L R縦	底：ナデ?	汚黄褐色	砂	A	
588	76	4 N20 a	IV層	深鉢	—	胴下～ 底	胴下：L R横	胴下：ナデ	汚褐色	砂	A	
589	81	4 N24 u 4 N24 v	IV層	深鉢	—	胴下～ 底	胴：沈線、L R横羽状	胴：ケズリ・ナ デ	灰褐色 に白い黄斑	白	C	
590	81	4 N21 r	IV層下位	深鉢	—	底部 1/5	底：L R縦	底：ナデ	に白い黄斑 明黄褐色	黄	B	
591	81	4 N20 y	IV層	深鉢		底部	胴下～底：L R縦	胴下：ケズリー ナデ	黒褐色 に白い黄斑	長	A	
592	81	4 N22 v	IV層	深鉢	—	底部	底：L R横	底：ナデ(?)	に白い黄斑 灰黄	砂・長	A	
593	81	4 N22 u	IV層下位	深鉢	—	底部	底：L R縦	底：ナデ	黄 褐色	砂	A	
594	81	4 N21 r 4 N21 v	IV層	深鉢	—	底部	底：無文	底：ナデ	黒褐色 に白い黄斑	長	B	
595	81	4 N23 u	IV層上位	深鉢		底部	底：L R縦	底：ケズリ	に白い黄斑 に白い黄	砂・長	A	
596	81	4 N22 w	IV層下位	深鉢	—	底部	底：L R(?)横	底：ケズリ	明黄褐色 に白い黄	砂	A	
597	81	4 N25 s 4 N23 t 4 N25 a	IV層 IV層下位 IV層	鉢	D2	口～胴 1/3	唇：突起、沈線 口：沈線 胴：L R縦	口：沈線 口～胴：ナデ	灰黄 黒褐色	砂	B	容量4.27ℓ
598	81	4 N21 r 4 N21 v	IV層下位	鉢	D2	口～胴 2/3	唇：刺突 口：沈線、 刺突 胴：L R縦	口：沈線 口～胴：ミザキ	に白い黄 に白い黄斑	砂	C	容量2.02ℓ
599	81	4 N25 t	IV層	鉢	D2	口～胴 上1/5	唇：刺突 口：沈線、 刺突 胴：L R横	口～胴：ナデ	黒褐色 酒褐色	白・黄	C	内面に灰化物付 着。容量0.62ℓ
600	81	4 N23 t	IV層	鉢	D	口～胴 1/3	口：沈線、刺突 胴：D突起、L R横羽状	唇：沈線 口～ 胴：ケズリ・ナデ	黄褐色 黒褐色	黄	C	
601	81	4 N21 b	IV層	鉢	D3	口～胴 1/5	唇：刺突 口：沈線 胴：R L?縦	口：ナデ?	に白い黄 褐色灰黄	砂	B	
602	82	4 N21 s	IV層	鉢	D3	口～胴 1/4	唇：刺突 口：沈線 胴：R L縦	口～胴：ナデ?	に白い黄 褐色灰白	砂	B	
603	82	4 N22 s	IV層	鉢	D2	口縁の み	唇：突起 口：沈線	口：ナデ	に白い黄 褐色黒褐色	白	C	
604	82	4 N22 u	IV層	鉢	D3	口～胴 上1/4	唇：D突起、刺突 口：沈線 胴：L R横	口：ナデ?	汚黄 褐色	砂・黄	B	
605	77	4 N22 s	IV層	鉢	D3	口～底 2/3	口：沈線 胴：L R斜	胴：ナデ	に白い黄 に白い黄	砂	B	
606	82	4 N22 t	IV層	鉢	F3	口～胴 1/4	口～胴：ナデ	口～胴：ナデ	汚黄褐色 灰白	砂	A	容量6.29ℓ
607	77	4 N23 v	IV層下位	鉢	F3	完全形	胴：L R横	口：ナデ?	汚黄褐色 黒褐色	砂	A	口縁部に片白状 のへこみと墨跡。 容量0.95ℓ
608	82	4 N21 u	IV層	鉢	A	胴部片	胴：沈線、L R横	胴：ナデ	黒褐色 灰黄	白	C	
609	82	4 N23 u	IV層	鉢	B	口縁部 片	口：沈線 胴：沈線	口：沈線	汚黄褐色 黒褐色	白	C	
610	82	4 N22 v	IV層	鉢	B	口縁部 片	唇：突起、刺突 口：沈線 胴：T字文	口：沈線	黒褐色 黒褐色	砂	C	内面に灰化物 付着
611	82	出土位置不明	—	鉢	D	口縁部 片	唇：突起 口：沈線、刺突	口：沈線	に白い黄 褐色	砂	C	
612	82	4 N21 l	IV層下位	鉢	D3	口縁部 片	唇：大突起 口：沈線、 刺突 胴：L R斜	口～胴：ナデ	黄 褐色	砂	B	
613	82	4 N22 t	IV層	鉢	D	口縁部 片	唇：大突起 小突起 口：沈線 胴：L R横	口：沈線	黒褐色 黒褐色	黄	C	
614	82	4 N21 l	IV層下位	鉢	D3	口縁部 片	唇：大突起 口：沈線、 刺突 胴：L R斜	口：沈線 口～ 胴：ナデ	黄 褐色	砂	C	
615	82	4 N23 t	IV層	鉢	D	口縁部 片	唇：大突起、沈線 口：沈線、刺突	口：沈線	に白い黄 褐色	砂	C	
616	82	4 N23 v	IV層上位	鉢	D	胴部片	胴：沈線 胴：R L横	胴：ナデ	汚黄 黒褐色	砂	B	

2 検出した遺構・遺物

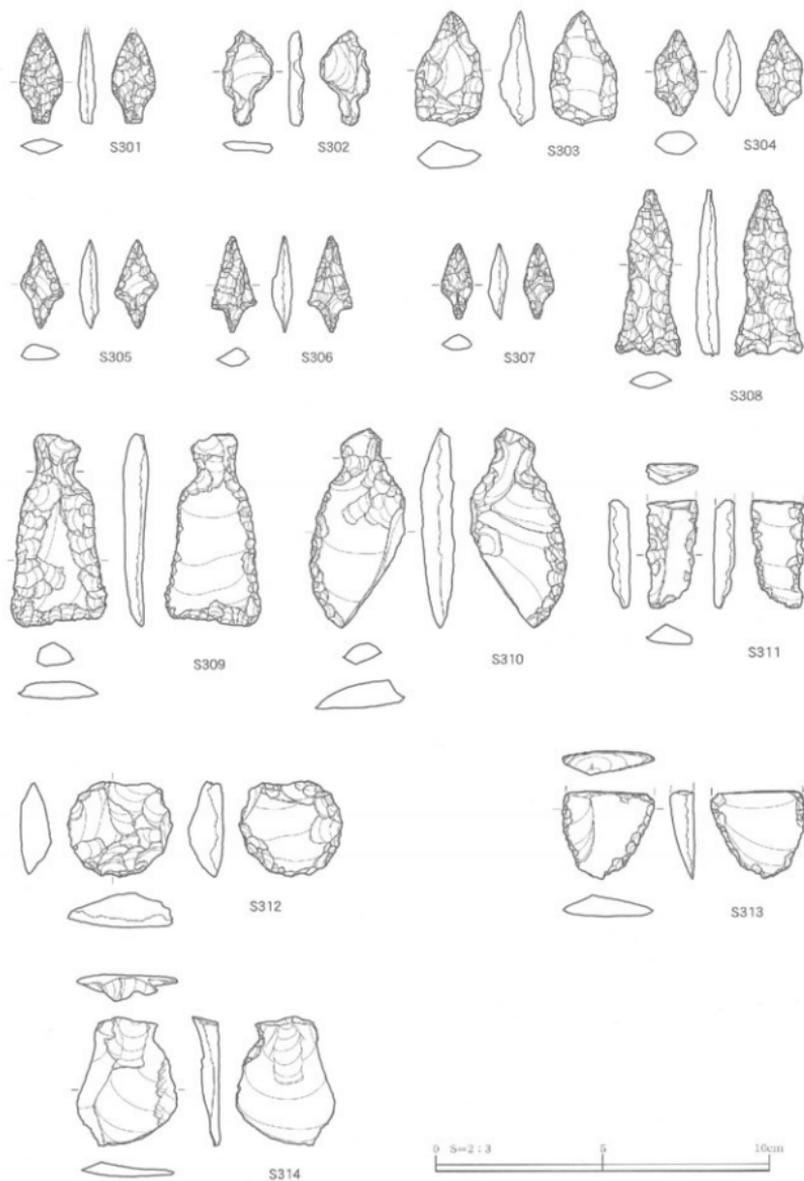
掲載番号	写真番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面各項 内面各項	胎土	透入層	備考	
617	82	4 N24 r 4 N25 r	IV層	鉢	D	口縁部片	唇: 刻み 口: 沈線、刺突、刷: L R線	口: 沈線	褐色黒泥	雲	C		
618	82	4 N22 x	IV層	鉢	D	口縁部片	唇: 突起、沈線 口: 刻み、沈線 刷: R L線	口: ナテ	黒褐色	長	B	619と同一	
619	82	4 N22 x	IV層下位	鉢	D	口縁部片	唇: 突起 口: 刻み、沈線 刷: R L線	口: ナテ	黒褐色	長	B	618と同一	
620	82	4 N23 s	IV層 (枕石?)	鉢	D	口縁部片	唇: 刻み 口: 沈線 刷: R L線	口: 沈線 口~刷: ナテ	にぶい黄褐色	砂	A		
621	82	4 N21 a	IV層	鉢	D 2	口縁部片	唇: 突起 口: 沈線、刺突、刷: L R線	口~刷: ナテ	褐色	砂・長	A		
622	82	4 N24 r 4 N25 r	IV層	鉢	E ?	口縁部片	唇: 刻み 口: 沈線、変形「」字文?	口: 沈線、ナテ	にぶい褐色	砂・長	A		
623	82	4 N22 b	IV層下位	鉢	F	口縁部片	唇: 刻み 口: 沈線 刷: R L線	口: ナテ	灰青褐色	長	B		
624	82	4 N25 s	IV層	鉢	F	口縁部片	口: ナテ 刷: L R線	口: ナテ	灰白褐色	砂・長	B		
625	82	4 N22 t	IV層上位	鉢	F	口縁部片	唇: 沈線 口: 磨消による黒文 刷: L R線	口: ナテ	黒褐色	砂・長	B	626と同一	
626	82	4 N23 u	IV層	鉢	F	口縁部片	唇: 沈線 刷: L R線	口: ナテ	黒褐色	砂・長	B	625と同一	
627	82	4 N21 r 4 N25 r	IV層	鉢		口縁部片	唇: B突起 口: 沈線	口: 沈線	褐色黒泥	砂・長	A		
628	82	4 N22 t	IV層	鉢	B	口縁部片	口: 沈線、工字文	口: ナテ	にぶい褐色	砂・雲	B		
629	82	4 N23 t	IV層	鉢	-	口縁部片	口: 沈線 突起	口: 沈線	にぶい黄褐色	砂	B		
630	82	4 N25 s	IV層	鉢		胴部片	刷: 刺突、沈線、L R線	刷: ナテ	灰青褐色	砂	C		
631	82	4 N23 w	IV層下位	鉢	-	胴部片	刷: L R線	刷: ナテ	褐色	砂	C		
632	82	4 N22 b	IV層下位	鉢	-	台部	刷下: L R線 台: 上字文	底: ナテ	淡青褐色	にぶい黄褐色	砂	B	
633	82	4 N20 y	IV層	鉢		底部	底: R L線	底: ナテ	灰白	砂	B		
634	82	4 N22 x	IV層下位	鉢	-	底部	底: L R線	底: ナテ	にぶい黄褐色 灰青褐色	白・雲	C		
635	82	4 N25 s	IV層上位	鉢	-	底部	底: L R線、沈線	底: ナテ	にぶい黄褐色 灰青褐色	白	C		
636	84	4 N22 s 4 N22 u	IV層下位 IV層	浅鉢	B 3	口~底 1/2	唇: B突起 口~刷: 工字文	口: 沈線 口~刷: ミガキ	褐色	雲	C	容量 0.73ℓ	
637	77-84	4 N21 a	IV層	浅鉢	B 3	口~底 1/2	唇: A突起、B突起 口~刷: 工字文	口: 沈線 口~刷: ナテ	黒褐色 黒褐色	雲	C	容量 0.25ℓ	
638	82	4 N22 x	IV層上位	浅鉢	B 3	底部	底: 工字文	底: ナテ	灰青褐色 灰青褐色	雲	C		
639	82	4 N22 t	IV層	浅鉢	B	口縁部 1/4	唇: B突起 口~刷: 工字文	口: 沈線、ナテ	にぶい黄褐色 灰青褐色	白	C		
640	82	出土地不明		浅鉢	B	口縁部片	唇: 沈線 口~刷: 上字文	口: 沈線 口~刷: ナテ	褐色 灰褐色	砂	C		
641	82	引河邊の北	IV層上位	浅鉢	B	口縁部片	唇: 沈線 口: 突起、工字文	口: 沈線	黒褐色	にぶい黄褐色	砂	C	
642	82	4 O22 b	IV層	浅鉢	B	口縁部片	唇: 突起、沈線 口: 工字文	口: 沈線、ミガキ	淡青褐色	砂	C		
643	82	4 N23 u	IV層	浅鉢	B	口縁部片	口: 沈線 刷: 工字文	口: 沈線	黒褐色	白	C		
644	83	4 N22 v 4 n22 w	I層	浅鉢	B	口縁部片	唇: 突起、刻み 口: 隆帯上刻み	口: 沈線	明赤褐色 明赤褐色	砂・雲	C		
645	83	4 N23 w	IV層下位	浅鉢	B	口縁部片	唇: 刻み 口: 突起、隆帯上刻み	口: 沈線	明赤褐色 明赤褐色	砂・雲	C	149と同一	
646	83	4 N23 v	IV層下位	浅鉢	B	胴部片	刷: 工字文	刷: ミガキ	黒褐色	砂	C		
647	83	4 N24 u	IV層	浅鉢	B	胴部片	刷: 工字文	刷: ナテ	暗灰青 暗灰青	砂	C		

掲載番号	写真番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	外面文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	器 高	備考
648	83	4 N23 t	IV層	洗鉢	B	胴部片	胴：T字文	胴：ナテ	灰褐色 灰青泥	砂	C	
649	83	4 N25 s	IV層	洗鉢	C	口～底 1/4	口：櫛付T字文	口：沈線、ナテ	褐色 褐色	白	C	
650	83	4 N21 w	IV層下位	洗鉢	C	口縁部 片	口：櫛付T字文、沈線 口：ミガキ	口～胴：ミガキ	褐色 にぶい帯	砂	C	
651	83	4 N21 t	IV層	洗鉢	C	口縁部 片	口：沈線、櫛付T字文	口：沈線 口～胴：ナテ	褐色	白	C	
652	83	4 N24 w	IV層	洗鉢	C	口縁部 片	口：沈線、櫛付T字文	口：沈線	灰青褐色 灰青褐色	砂	C	
653	83	4 N24 v	IV層上位	洗鉢	C	口縁部 片	口～胴：T字文	口：沈線 口～胴：ナテ	褐色 褐色	黄	C	
654	83	4 N25 s	IV層上位	洗鉢	D	口縁部 片	口：T字文	口：ナテ	淡黄 黄灰	砂	C	
655	83	4 N24 s	IV層上位	洗鉢	2	台部片	台：陸帯	台：沈線	褐色	白	C	
656	83	4 N25 s	IV層	鉢	D	口縁部 片	口：波状口縁、沈線 口：沈線	口：沈線	黒褐色 黒褐色	砂	C	
657	83	4 N24 s	IV層上位	洗鉢	C	口縁部 片	口：櫛付T字文	口：沈線 口～胴：ナテ	にぶい帯 にぶい帯	砂・長	C	
658	83	4 N22 t	IV層	洗鉢	-	口縁部 片	口：沈線	口：沈線	褐色	砂	C	
659	83	4 N24 r	IV層下位	洗鉢	F	口縁部 片	唇：A突起、B突起、 沈線 口：沈線	口：沈線 口～胴：ミガキ	灰青褐色 灰青褐色	黄	C	
660	83	4 N24 r 4 N25 r	IV層	洗鉢	G	口～胴 1/5	口：沈線 口～胴：ナテ	口～胴：ナテ	灰白 灰白	黄	C	
661	83	4 N22 t 4 N24 t	IV層 IV層	皿	A 2	胴～底 既1/3	胴：T字文 底：脚(4單位)	胴～底：ケズリ →ナテ	褐色 褐色	白	C	
662	77-84	4 N22 t	IV層	皿	A 4	胴～底	胴：T字文、L R横 底：脚(4單位)	底：ナテ	褐色 黒褐色	白	C	
663	77-84	4 N22 v	IV層下位	皿	B	胴上	胴：T字文	胴：ケズリー →ナテ	褐色 褐色	白	C	
664	83	4 N21 t	IV層	皿	-	胴～底 1/3	胴：沈線 底：脚(4單位)	胴～底：ナテ	にぶい帯 淡黄	砂	C	
665	77	4 N22 t	IV層	皿	B 3	胴～底 1/2	胴：沈線(T字文?)	胴～底：ケズリ →ナテ	淡黄 黄灰	白	C	
666	77	4 N23 v	IV層下位	皿	C 1	胴～底	胴：L R横	胴：ケズリー →ナテ	にぶい帯 明褐色	砂	A	
667	85	4 N23 v	IV層下位	皿	C e 2	完形	唇：波状 胴：沈線 底：L R横	口：沈線、ナテ	淡黄 にぶい帯	砂	B	容量0.18 l
668	85	4 N23 v 4 N24 v	IV層	皿	-	口～底 2/3	口文	口：ナテ?	淡黄 淡黄	砂	A	容量0.09 l
669	83	4 N22 t	IV層	皿	b	口～底 1/4	口：沈線、陸帯	口：沈線	にぶい帯 灰褐色	黄	C	
670	83	4 N22 t	IV層	皿	-	口縁部 1/4	口：沈線 口：B突起	口：沈線、ナテ	褐色	黄	C	
671	83	4 N21 s	IV層下位	皿	-	口1/4	口：沈線、A突起、B 突起	口：沈線	にぶい帯 にぶい帯	砂	C	
672	83	4 N25 s	IV層上位	皿	a	口～底 2/3	唇：沈線、A突起、B 突起	口：沈線、ナテ	褐色 灰青褐色	黄	C	
673	83	4 N25 s	IV層上位	皿	a	口縁部 片	唇：突起 口：T字文	口：沈線	明黄褐色 明黄褐色	白	C	
674	83	4 N22 w	IV層	皿	a	口縁部 片	唇：突起、沈線 口：突起、沈線	口：沈線	灰白 灰白	砂	C	
675	83	4 N22 u	IV層上位	皿	a	口縁部 片	唇：沈線 口：突起、陸帯	口：ナテ	褐色 褐色	砂	C	
676	83	4 N24 u	IV層下位	皿	a	口縁部 片	唇：突起、沈線	口：沈線	褐色 褐色	砂	C	
677	83	4 N21 v	IV層	皿	a	口縁部 片	唇：突起、沈線 口：突起、沈線	口：沈線	淡黄 淡黄	砂	C	
678	83	4 N23 u	IV層	皿	-	口縁部 片	口：陸帯	口：沈線、ナテ	褐色	砂	C	

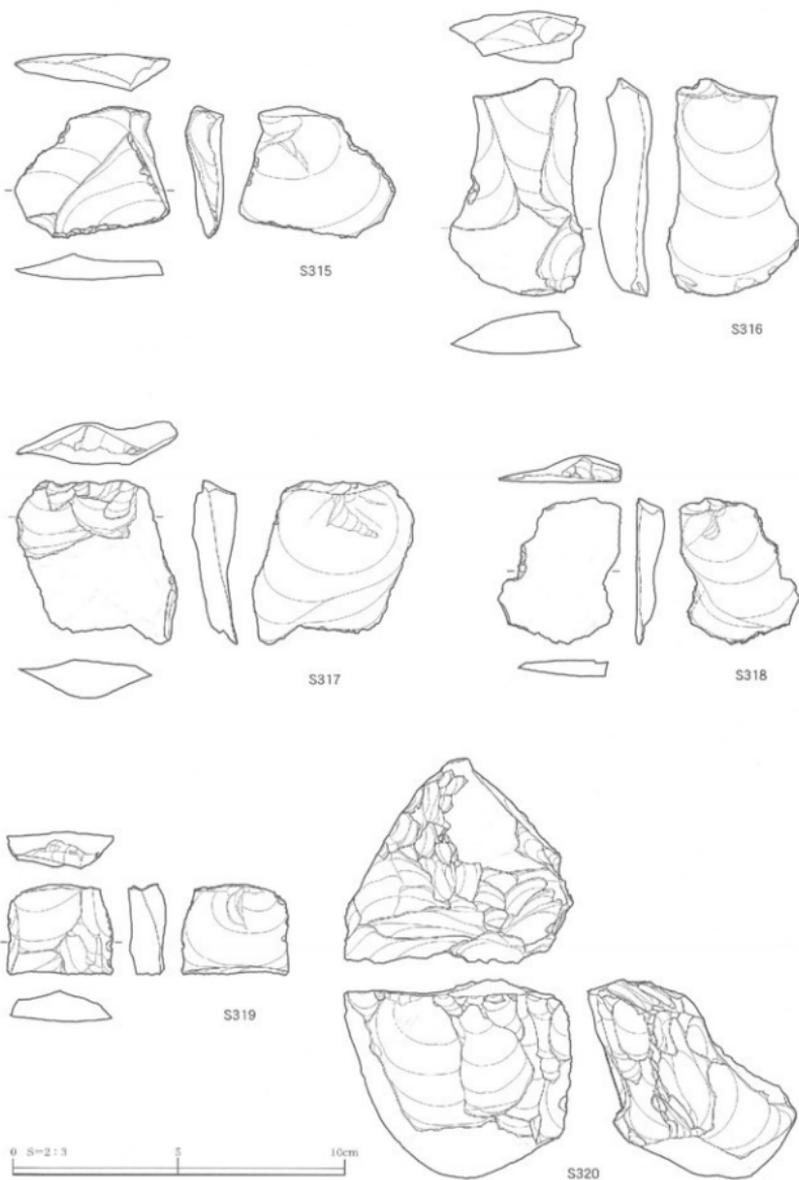
拓検 番号	写真 番号	出土位置	層位	器種	分類	残存 部位	外形文様	内面文様・調整	外面色調 内面色調	胎土	最大 径	備考
679	83	4 N21 y	IV層下位	壺	—	胴部片	胴：無文 胴：L R横	胴：ナデ	灰白 灰白	砂・雲	B	
680	83	4 N21 s	IV層上位	壺	a	口縁部 片	唇：沈線 口：隆帯	口：沈線	黒黒 黒黒	砂	C	
681	83	4 N20 a	IV層	甕	B	胴部片	胴：沈線（十字文？）	胴：ナデ	にぶい 橙	雲	C	
682	83	4 N24 s	IV層上位	壺	A	胴部片	胴：L R横、工字文	胴：ナデ	黒 黒	白	C	
683	83	4 N21 a	IV層	壺	B	胴部片	胴：工字文	胴：ナデ	にぶい黄 にぶい黄	砂・長	C	
684	83	4 N22 r	IV層	壺	B	胴部片	胴：工字文	胴：ナデ	灰黄 灰黄	砂	C	
685	83	4 N23 t	IV層	壺	B	胴部片	胴：工字文	胴：ナデ	黒 灰黄	砂	C	
686	83	4 N21 s	IV層上位	壺	A	胴部片	胴：工字文	胴：ナデ	橙 黒	砂	C	
687	83	4 N22 t 4 N21 v	IV層	壺	—	胴部一 底	胴：ナデ 底：沈線	胴～底：ケズリ →ナデ	灰相 橙	白	C	
688	83	4 N20 a	IV層	甕	—	胴1/5	胴：沈線、L R横	胴：ケズリ →ナデ	にぶい相 灰	雲	C	
689	85	4 N23 u	IV層上位	ニ チュア	—	口～底 2/3	唇：突起（4点位）、刻み 口：沈線	口～胴：ナデ	にぶい黄 灰黄	砂・雲	B	
690	85	4 N21 v	IV層	ニ チュア	—	口～胴 1/5	口～胴：L R斜	口～胴：ナデ	灰黄 灰黄	砂・雲	C	
691	85	4 N21 y	IV層	ニ チュア	—	口縁部 片	胴：沈線	口：沈線	明黄 にぶい黄	砂	A	
692	85	4 N22 t	IV層	ニ チュア	—	底部片	底：L R横、沈線	底：ナデ		白	C	
693	85	4 N24 v	IV層	土質 円板	—	完整	L R斜	—	にぶい黄 にぶい黄	砂・長	A	深鉢の胴部片 の転用
694	85	4 N21 s	IV層	土質	—	手のみ	唇：沈線、刻突	—	橙	砂・雲	B	

第39表 土器観察表 土師器 遺構外（第29次分）

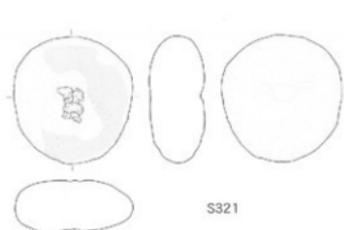
拓検 番号	写真 番号	出土位置	層位	器種	分類	残存部位	法 準	調 整	胎土	外面色調 内面色調	備考
705	84	南北測 調査区	IV層	土師器、 高杯	—	杯部片	口径：— 器高：(4.4) 底径：10.9	外面：ケズリ 内面：ナデ、ミガキ	砂	橙 黒	
706	84	4 O22 c	IV層	土師器、 杯	—	底部のみ	口径：— 器高：(1.1) 底径：4.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	砂	灰白 灰白	
707	84	4 O21 c	IV層	土師器、 杯	—	底部のみ	口径：— 器高：(2.1) 底径：6.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	雲	黒 黒	
708	84	4 O21 c	IV層	土師器、 杯	—	底部のみ	口径：— 器高：(0.7) 底径：5.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	雲	にぶい にぶい	



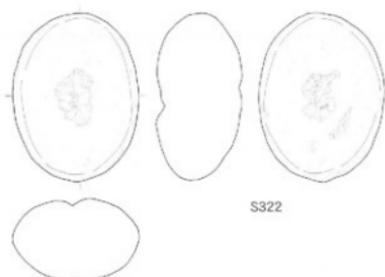
第167図 遺構出土石器 (1)



第168図 遺構出土石器(2)



S321

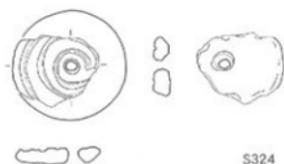


S322



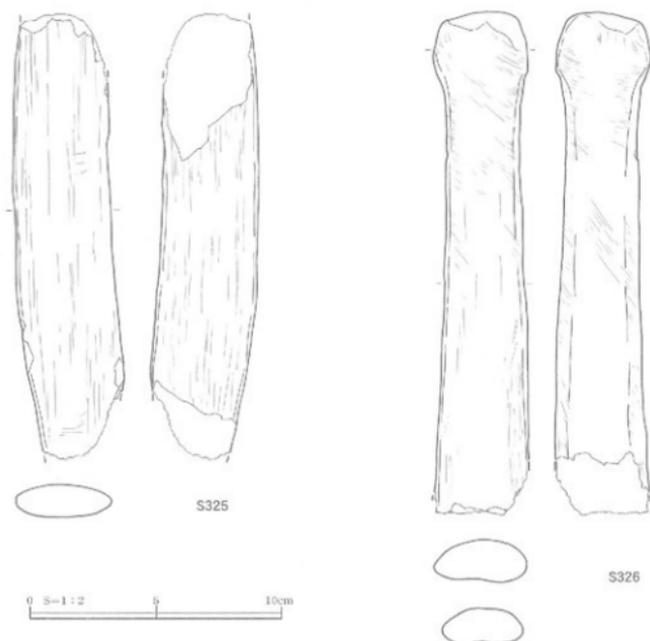
S323

0 5=1:3 5 10cm



S324

0 5=1:2 5 10cm



第170図 遺構出土石器(4)

第40表 石器観察表 遺構外

掲載番号	写図番号	器 類	出土位置	層位	分類	石 質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	先鋒角度(°)	適合状況	備 考
S301	89	石鏃	4 N22 t	B層	1層	めのう	92.43	12.79	5.44	1.33	65	竊込欠	
S302	89	石鏃	4 N22 x	B層	3層	頁岩 1	28.15	16.15	4.30	1.72	74	完形	
S303	89	石鏃	4 N23 u	B層中	1層	赤松頁岩 2	34.36	19.88	10.46	66.03	52	中身欠	
S304	89	石鏃	4 N24 r	B層	2層	頁岩 3	25.94	13.08	8.40	2.42	53	完形	
S305	89	石鏃	4 N24 s	B層	1層	頁岩 1	26.82	12.68	5.53	1.21	45	完形	
S306	89	石鏃	4 N25 s	B層	1層	頁岩 1	26.15	13.22	5.90	1.23	31	完形	中身欠65, 17mm
S307	89	石鏃	4 N30 a	B層	1層	頁岩 1	32.83	8.97	6.38	6.78	38	完形	中身欠66, 68mm
S308	89	石鏃	4 N30 c	B層	1層	頁岩 2	(50.21)	16.84	6.62	(4.68)	41	中身欠	
S309	89	石鏃	4 N19 a	I層	2層	頁岩 4	28.49	28.11	8.17	9.53	—	完形	横欠幅10, 95mm
S310	89	石鏃	4 N21 a	B層	3層	頁岩 2	(54.99)	(35.47)	10.02	(12.95)	—	刃部欠損	横欠幅12, 25mm
S311	89	不定形石器	4 N21 y	B層	1層	頁岩 4	(32.46)	15.34	6.17	(3.23)	—	刃部欠損	
S312	89	不定形石器	4 N23 t	B層	2層	頁岩 4	31.06	29.97	11.15	9.23	—	完形	
S313	90	不定形石器	4 N26 s	D層	1層	頁岩 2	(26.97)	27.07	7.28	(4.83)	—	刃部欠損	
S314	90	Bフレイク	4 N22 v	B層上	—	頁岩 4	40.02	29.74	7.46	5.33	—	完形	
S315	90	Bフレイク	4 N25 s	B層	D 1層	頁岩 2	44.58	39.56	11.51	15.07	—	完形	
S316	90	フレイク	遺構外	B層	B 3層	頁岩 1	85.74	40.28	13.41	33.00	—	完形	
S317	90	フレイク	遺構外	B層	B 2層	頁岩 2	56.37	49.03	12.31	22.99	—	完形	
S318	90	フレイク	遺構外	B層	A 3層	頁岩 2	45.29	33.63	8.89	15.63	—	完形	
S319	90	フレイク	遺構外	B層	C 3層	頁岩 1	27.47	31.91	12.32	13.94	—	完形	
S320	90	石核	4 N21 t	B層	—	頁岩 2	83.40	63.11	39.06	203.26	—	完形	自然形有
S321	90	張裂器類	4 N22 t	B層	A層	安山岩	77.47	71.54	33.85	237.80	—	完形	
S322	90	張裂器類	出土地不明	—	B層	アイサイト	102.08	73.08	50.82	473.32	—	完形	
S323	90	張裂器類	出土地不明	—	B層	安山岩	99.07	77.74	50.54	508.18	—	完形	
S324	91	骨片・骨製品	4 N22 a	B層	—	燧石	(28.60)	(34.14)	(6.21)	(3.61)	—	1/3欠損	
S325	91	石棒類	4 N22 t	B層	—	燧石	(181.50)	38.88	13.28	(139.33)	—	先端欠損	北土止地系石材
S326	91	石棒類	4 N24 s	B層	—	燧石	(204.00)	36.08	14.41	(192.58)	—	先端欠損	北土止地系石材

Ⅷ 自然科学分析

本宮熊堂A遺跡第29次調査の古代の花粉化石群

吉川昌伸 (古代の森研究会)

1. はじめに

本宮熊堂A遺跡は盛岡市本宮熊堂にあり、雫石川右岸に形成された段丘上に位置する。本遺跡は、縄文時代晩期後葉の集落遺跡からなり、奈良・平安時代前期の集落遺跡である本宮熊堂B遺跡に隣接する。調査区南端には旧河道が東西方向に伸び、河道内は縄文時代晩期以降の堆積物により埋積される。ここでは古代における周辺植生と生業に関する資料を得ることを目的に、旧河道内堆積物の花粉化石群の調査を行った。

分析試料は、旧河道内堆積物より発掘調査担当者により採取された。河道は、幅約10m、深さ約1.5mの規模で、主に黒色ないし黒褐色粘土や黒褐色粘土質シルトにより埋積される。河道内堆積物は、上位より1層から18層の18に区分され、7層より上位はほぼ水平に堆積する。6層にはTo-aテフラが散在し、土器層年に基づき9層は9世紀以降、10層は8世紀代と推定されている。ここでは古代の堆積層と推定される3, 5, 7, 8, 9, 10各層の6層準について調査した。

2. 分析方法

花粉化石群の調査は6層準で行った(図1)。花粉化石の抽出は、試料約3~5gを秤量し体積を測定後、10% KOH (湯煎約15分)、傾斜法により粗粒な植物遺体および砂を取り除く、48% HF (約15分)、重液分離(比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリシス処理(濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分)の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量希釈しタッチミキサーで十分攪拌後、マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量、泥分(シルト以下の細粒成分)、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのNIH Imageで微粒炭の水平投影面の積算面積を測定した。

イネ科花粉は、光学顕微鏡では彫紋の位相差像のパターンに基づき3群に区分されている(中村, 1977)が、ここではイネ属型とそれ以外(野生型)に識別した。イネ属型彫紋には、イネ、およびマコモとカモジクサなどの一部の花粉粒が含まれるため、イネ属以外の花粉が混じっている可能性はある。

3. 結果

花粉化石の調査を行った層準の堆積物は、有機物量が7.5~12.8%と低く無機物が卓越する特徴を示す。砂分は7.5~73.2%で変動し、特に7層では73.2%を占め中~粗粒砂を主とする。他にも3, 5, 9各層で24~43%と多く含まれる。つまり、10層は淀んだ環境にあったが、9層以降ではしばしば流水の影響があったことを示す。

第1表 旧河道地点の花粉分析試料の堆積物特性

試料	層位	土器偏年, テフラ	堆積物の特徴	堆積物の特性 (重量%)		
				砂	泥	強熱減量 (有機物量)
3	3	9世紀後半から10世紀前半 To-aの下位	灰黄褐色細～中粒砂質シルト	24.4	65.9	9.7
5	5		黒褐色細粒砂質粘土質シルト	26.0	61.2	12.8
7	7		黒褐色シルト質中～粗粒砂	73.2	19.3	7.5
8	8	9世紀代 (8世紀代)	オリーブ黒色粘土質シルト	11.0	77.3	11.7
9	9		黒褐色細粒砂質シルト	43.1	46.3	10.6
10	10		黒褐色シルト	7.5	80.8	11.7

出現した分類群のリストとその個数を表2に、主要花粉分布図を図2に示す。出現率は、樹木は樹木花粉、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究舎に保管してある。

花粉化石は下部の9・10層からは比較的多く出現したが、3～8層では樹木花粉は少ない。また、花粉の保存状態は上位層ほど悪い傾向にある。樹木花粉が多く産出した9・10層では、コナラ亜属が高率に占め、クリ属やブナ、ニレ属・ケヤキ属、トチノキ属、ハンノキ属、トネリコ属、針葉樹のスギを伴う。クリ属は保存が悪いためクリ属近似種とした花粉を含めると9層では30%と、コナラ亜属と同様な頻度である。草本ではイネ科と、ヨモギ属、シダ植物胞子が比較的多く占め、特にイネ科は9層で比較的高率に産出する。また、イネ属型花粉も僅かに産出した。花粉が少ない3～8層においても、9・10層と類似した組成を示し、コナラ亜属やクリ属、ブナ、ハンノキ属、トチノキ属などからなる。草本ではヨモギ属が目立って多く、イネ属型も大半の試料で産出している。

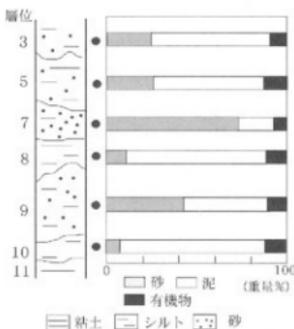


図1 旧河道内堆積物の特性

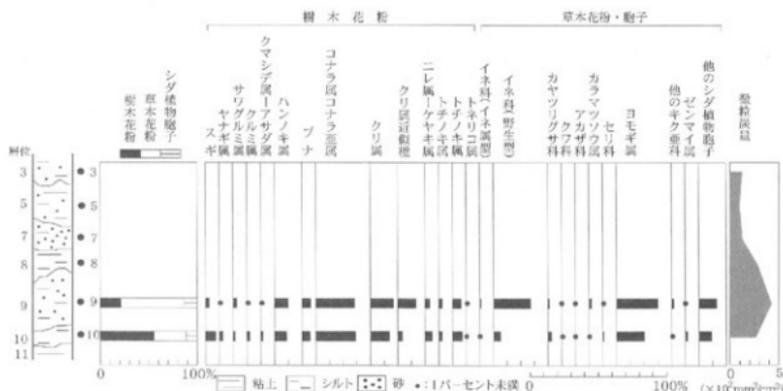


図2 旧河道地点の主要花粉分布図 (出現率は、樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で産出した)

微粒炭量は98~424 $\mu\text{m}^3/\text{cm}^3$ と全般に少ない。花粉量が多い層準で微粒炭量も多いことから、微粒炭の量と変動は周辺での生業の変化よりも、堆積速度を反映した結果とみられる。

表2 旧河道内地点の花粉分析結果一覧表

和名	学名	3	5	7	8	9	10
樹木							
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	-	-	1	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	1	-	1	1	3
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	1	1	-	4
マツ属単錐管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	-	-	-	-	6
マツ属複錐管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	-	8	-	-	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	1	-	2
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.)D.Don	1	1	4	-	3	21
ヒノキ型	<i>Chamaecyparis</i> type	-	-	-	-	1	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	1	-	-	1	7
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	2	1	-	-	3	4
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	1	-	1	6
タマシダ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	-	-	-	-	1	4
ハシバミ属	<i>Corvulus</i>	-	-	-	-	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	3	-	-	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	6	6	4	5	11	24
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	3	4	5	3	7	16
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	9	10	2	8	32	80
クリ属	<i>Castanea</i>	4	3	3	5	19	38
クリ属近縁種	<i>cf. Castanea</i>	-	18	2	7	15	10
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	1	1	6	1	4	14
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	1	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	-	1	3	7
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	2	3	1	3	7	20
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	1
ウロギ科	Araliaceae	-	-	-	-	1	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	1	1	-	1	1
草本							
イネ科(イネ属型)	Gramineae (Oryza type)	1	5	3	-	6	1
イネ科(野生型)	Gramineae (Wild type)	5	6	3	9	145	26
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	1	1	2	6	14
ショウジョウバカマ属	<i>Heloniopsis</i>	-	1	-	-	-	-
他のユリ科	other Liliaceae	-	-	-	-	-	1
ワケ科	Moraceae	2	1	-	-	1	4
タデ属サナタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinocaulon</i>	-	-	-	1	1	2
アザミ科	Chenopodiaceae	-	-	-	-	1	1
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	3	2	4	11	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	1	-	-
アブラナ科	Cruciferae	1	1	1	-	1	-
キジムシロ属近縁種	<i>cf. Potentilla</i>	-	-	-	-	-	3
他のバラ科	other Rosaceae	-	1	-	1	1	-
ヤリ科	Umbelliferae	-	1	1	-	4	5
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	16	67	49	59	159	102
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	1	-	9	4
タンポポ科	Liguliflorae	-	2	1	-	1	1
シダ植物							
ヒカゲノコ属	<i>Lycopodium</i>	-	1	-	2	1	3
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	-	-	-	4	1	8
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	48	31	13	114	69	46
樹木花粉数	Arboreal pollen	30	61	41	86	112	275
草本花粉数	Nonarboreal pollen	26	89	62	78	346	167
シダ植物胞子数	Fern spores	48	32	13	120	71	57
花粉・胞子数	Pollen and Spores	104	172	116	234	529	499
不明花粉	Unknown pollen	9	8	6	7	13	15
樹木花粉量(粒数 cm^3)		155	132	95	271	296	1587
微粒炭量(mm^3/cm^3)		126	98	126	281	424	265

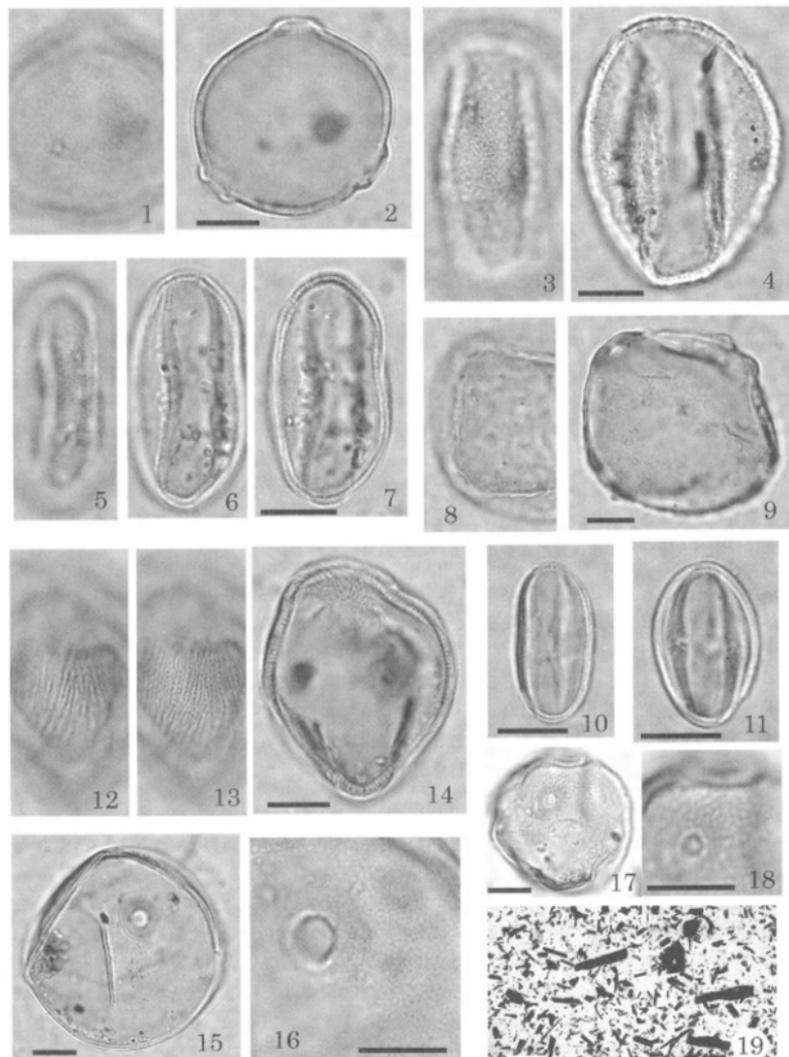
4. 花粉化石群からみた本宮熊堂A遺跡周辺の古代の植生

花粉の保存は全般に悪く、特に3～8層で顕著である。炭化していない植物遺体も10層を除いては稀であった。花粉の外殻は水域の酸素の少ない還元環境では残りやすいが、風化土壌のような酸化条件では分解されるため、堆積後に乾燥化した時期があったと考えられる。特に7層より上位ではほぼ水平に堆積していることから、しばしば乾燥化していたとみられる。

古代における周辺植生は、落葉広葉樹のコナラ亜属とクリ属を主とし、ブナ、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属、ハンノキ属、トネリコ属、クルミ属、および針葉樹のスギなどを伴う植生が形成されていたと推定される。樹木花粉の比率が低いことから周辺の植生は疎林であった可能性があり、さらにクリ属は虫媒花で広域に散布し難いと考えられるため、遺跡周辺ではクリ林が目立って多かった可能性が高い。トチノキ属についてもクリ属と同様に広域に散布し難いと考えられるため、周辺に分布していたと推定される。また、9層では樹木花粉の全体に占める比率が減少して、イネ科(野生型)とヨモギ属が増加し微粒炭量も増加していることから、周辺の樹木が伐採され日当たりの良い裸地が広がり、そうしたところにイネ科やヨモギ属が分布していたと推定される。こうした植生は、花粉の少ない3～8層においても9層と類似した花粉組成を示すことから、古代を通して目立った変化はなかったものと考えられる。コナラ亜属やブナにクリ属やトチノキ属をいく分多く伴う植生は、八戸市是川中居遺跡(吉川, 2002)や青森市三内丸山遺跡(吉川ほか, 2006)の白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)や十和田aテフラ(To-a)下位の古代頃の層準でも認められ、クリやトチノキが古代においても主要な植物資源であったとみられる。また、イネ科(野生型)やヨモギ属が比較的高率に出現してイネ属型花粉が少量であるため、河道の周りにはイネ科やヨモギ属が生育し、上流域あるいは離れた地点で水田が営まれていたと推定される。

引用文献

- 中村 純. 1977. 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 10, 21-30.
吉川昌伸. 2002. 長田沢1区における縄文時代晩期以降の花粉化石群. 「八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集 是川中居遺跡(真田沢地区)」(八戸遺跡調査会), 180-187.
吉川昌伸・鈴木 茂・辻 誠一郎・後藤香奈子・村田泰福. 2006. 三内丸山遺跡の植生史と人の活動. 植生史研究 特別第2号(印刷中)



図版 本高柳堂A遺跡より産出した花粉化石

1-2: クマシデ属-アサダ属 (*Juglans*), 10, AFR. MY 1600. 3-4: コナラ亜属 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*), 9, AFR. MY 1596. 5-7: トチノキ属 (*Aesculus*), 8, AFR. MY 1594. 8-9: ケヤキ属 (*Zelkova*), 10, AFR. MY 1601. 10: クリ属 (*Castanea*), 10, AFR. MY 1598. 11: クリ属 (*Castanea*), 10, AFR. MY 1597. 12-14: カエデ属 (*Acer*), 10, AFR. MY 1599. 15-16: イネ科イネ属型 (*Oryza* type), 7, AFR. MY 1595. 17-18: イネ科野生型 (*Wild type*), 9, AFR. MY 1628. 19: プレパラータの状況, 9. 花粉スケール=10 μ m. 状況スケール=100 μ m.

IX 調査の成果

1 本宮熊堂A遺跡から出土した縄文晩期の遺物について

(1) 縄文土器

分類と編年

当センターによる本宮熊堂A遺跡の調査は第29次調査で6回を数える。出土土器は大コンテナ箱(40ℓ)で総計88箱分に及び、ほとんどは縄文時代晩期後葉、大洞C2～A式土器に比定され、その他、大洞A'式土器が少量みられる。

本遺跡の過去の調査成果は、すでに報告書として刊行している(岩埋文第281集、第453集、第470集)。各調査回数により担当調査員が異なるが、出土した土器については形態の判別できるものは全て報告書に掲載することを前提としていることでは共通している。今回の第26・29次調査も同様であり、従って既に刊行している本遺跡の報告書と合わせてみていけば、本遺跡の土器様相は、ほぼ網羅できることになろう。

この点を踏まえて、本遺跡出土の縄文土器を概観し、「IV 遺物の分類基準」に提示した分類項目を設定した。特に各器種について形態と文様を基準に分類を試みたが、各器種の形態分類(1類～)と文様分類(A類～)を組み合わせると以下のように集約される。

深鉢：A1類、A2類、A3類、B1類、C1類、C2類、C3類、D3類(8分類)

鉢：A1類、B2類、B3類、C2類、C3類、D2類、D3類、E3類、F1類、F3類、G2類(11分類)

浅鉢：A3類、B1類、B3類、B5類、C2類、C3類、C5類、D1類、E2類、E4類、F1類、F5類、G1類、G5類(14分類)

壺：Aa1類、Aa2類、Ab2類、Bb2類、Bb3類、Ca1類、Cb4類、Cc1類、Db1類、Db4類、Dd1類(11分類)

これらの分類項目について、先学の研究(山内1930、高橋1993、小林1998、高瀬2000、品川2003など)や、本遺跡で確認された土器の出土状態や共存関係から各分類の時間的な位置づけを行い、本遺跡にみられる縄文晩期の土器様相を概観する。

まず時間軸の名称についてであるが、ここでは型式名を用い、大洞C2式・A式・A'式段階とした。ただし本遺跡出土土器の中で、大洞A式に比定されるものは他の時期の土器と比べバラエティーに富んでおり、大洞A式土器内においても時間幅があることが窺える。大洞A式土器は品川欣也氏により4細分されているが(品川2003)、本遺跡出土土器ではそこまでの細かい変遷を辿るには資料数が不足している。そこで便宜的に大洞A式を古段階と新段階とに二分した(第171・172図)。なお、鉢F類、浅鉢G1・5類は時期判断することが難しく第172図上に載せていない。

以下、各段階についてみていく。

まず大洞C2式段階は深鉢A・B1・D3類、鉢A1・D2・D3・F1類、壺Aa1・Cc1類で構成される。本遺跡では大洞C2式段階の土器量は少なく、また各器種ともバラエティーに乏しい。口縁部から胴部にかけて磨消縄文が施文されるものを位置づけたが、浅鉢は磨消縄文を施文された浅鉢

が出上していない。従って明確に大洞C2式段階に比定できる浅鉢が無い。ただし、分類項目からははずしてあるが、第17次調査で、磨消縄文がやや崩れたような文様が描かれた大形の浅鉢が1点(岩埋文第453集 p61-76の土器)出土しており、大洞C2式段階へと位置づけた。

次の大洞A式古段階では、深鉢は大洞C2式段階から継続する。ただしD類は本遺跡では大洞A式段階の器種との共存関係が認められないので、D類は大洞C2式段階で消滅したものと思われる。鉢はD2・D3類が大洞C2段階から継続し、他にB2・B3・C2類が出現する。そして浅鉢はA3・B類、壺はAa2類、Ab2類、Bb2類、Bb3類で構成される。大洞A式のメルクマールとされる工字文には縄文が施文されるもの(鉢B類、浅鉢A類、壺B類)と、されないもの(鉢C類、浅鉢B類、壺B類)とが見受けられ、これが時期差を反映しているのかどうか、議論されてきたところであり(高橋1993)、本遺跡第17次調査報告では本遺跡にみられる両文様の分布状況を調べた上、大きな差違がみられず、時期差であるか判断が難しいという見解に達している(岩埋文第453集)。今回の調査でもほぼ同様で、変遷図上では「工字文(縄文あり)」と「工字文(縄文なし)」とを縦並びに配したが、時期を反映しているものか判断し難い。また鉢C類、浅鉢B類は施文される文様から「工字文系」と「工字文系」とに細分でき、匹字文が施文される鉢は大洞A式新段階の器種と共存する事が多い(例えばRE001)。従って本遺跡でも工字文と匹字文とに時間差を認め、工字文系を大洞A式古段階に、また匹字文を施文する鉢・浅鉢は大洞A式新段階に位置づけた。浅鉢B類は大洞A式新段階のRE001の堆積土中から他の大洞A式新段階の器種と共存して出土しており、大洞A式新段階まで継続するものと推定され、工字文の細かな形態でさらに細分できる可能性が高いが今回は示唆することとする。

大洞A式新段階は深鉢C類、鉢C3・C4・E3類、浅鉢B3・C2・C3・C5・D1類、壺Ca1・Cb4・Db1・Dd4類で構成される。深鉢はC類へと一新した。鉢は文様にバラエティーが見られるようになり、浅鉢は台付浅鉢(2類)が出現する。これらの多くはRE001の堆積土上位から一括で出土している(第26図)。壺は口縁部に匹字文が施文されるb類や太類の4類がRE001で他の器種と共判しており、この段階に位置づけている。

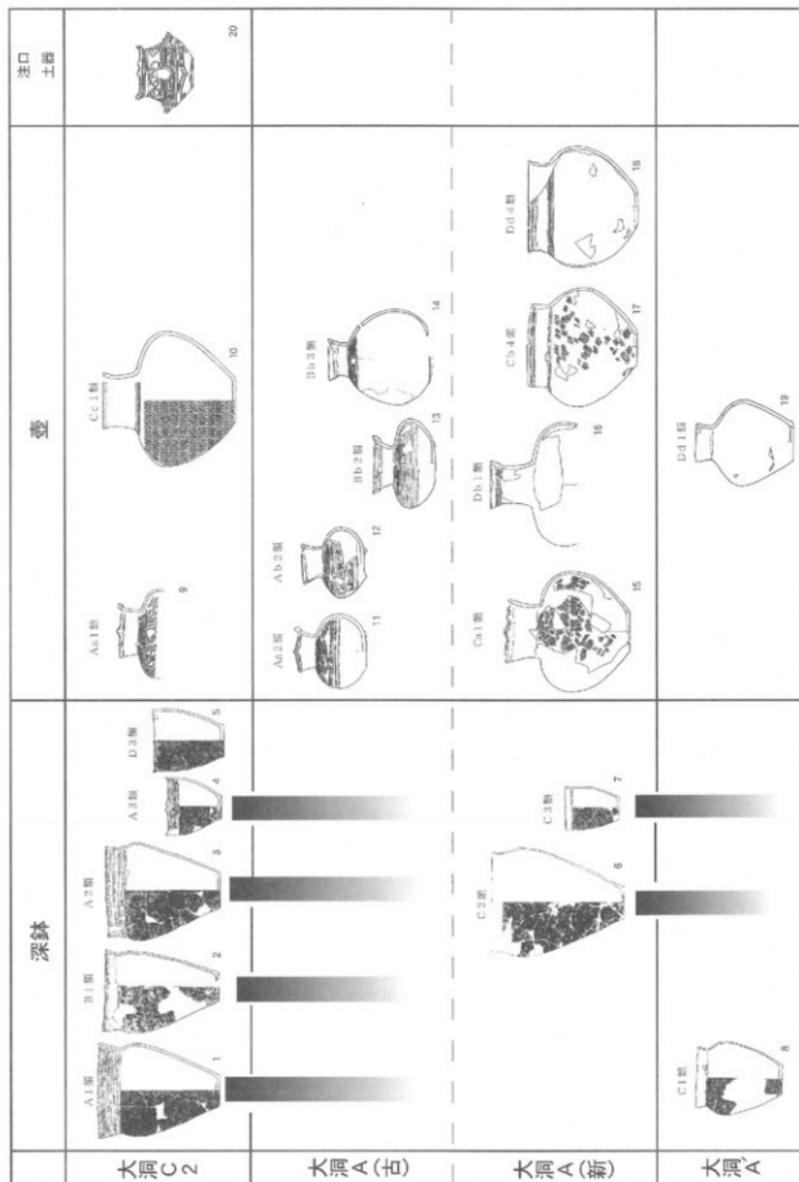
大洞A'式段階は資料数が少なく、不明瞭であるが、大洞A'式のメルクマールとなる変形工字文を施文するものを位置づけた。深鉢C1類、鉢G2、浅鉢E2、E4類、壺Dd1類で構成される。深鉢は前段階から文様ではC類がそのまま継続してものと推定されるがRE003から胴上半に最大径を有し、また口縁部が屈曲して開く、C1類(第40図-89)が認められ、また壺に關してもRE003からDd1類が出上しているが、胴下半が直線的に広がりながら立ち上がるなどこちらもやや形態が異なる(第41図-92)。RE003は他の遺構とやや離れて位置しており、また隣接するグリッドから弥生土器(蓋)が出てきている。他の遺構のようにC2~A式段階の上器が伴わないので、新しい可能性が高いと判断し、大洞A'式段階に位置づけた。浅鉢は形態分類4類が出現する。

土器の器種組成(第173図左下)

本遺跡にみられる縄文晩期土器の器種組成を刺り出すため、第26・29次調査で出土した縄文土器で、口縁部が残存するもの(不掲載資料を含む)の点数を計測した。個体資料から口縁部小片まで含まれるので、厳密な本遺跡出土個体数として換算できたとは言いがたいが、本遺跡の上器様相を知る上で、ある程度の器種構成傾向が見いだせたものと思う。

全体的にみて、深鉢が圧倒的に多く、全体の55%を占めている。次いで、鉢、浅鉢、壺の順で、注1土器やミニチュア土器は数点しか認められない。

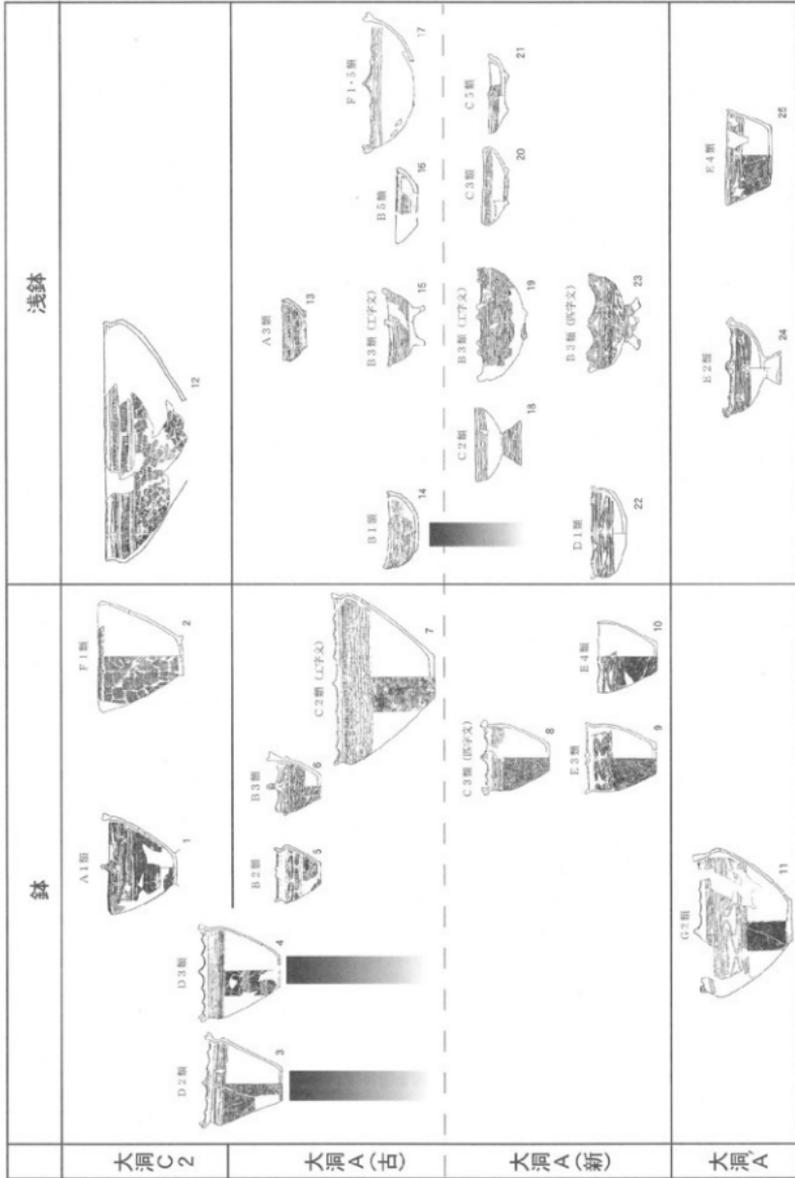
深鉢は多いが、前述の通り、A、B類が大洞C2式からA式古段階、C類が大洞A式新段階からA'



単位：縦軸：1/15 横：1/8

1、4～8、15、17～20……第26号調査分
 9……第29号調査分
 2、12～14、16……第17号調査分
 3、11……第6号調査分

第171図 深鉢・壺・注口土器の断面図



縮尺 鉢：1/10 浅鉢：1/8

1, 3, 4, 8-10, 17-20, 22-25 第26次調査分
15 第27次調査分
2, 5, 7, 11-14, 16, 21 第17次調査分
6 第17次調査分
第16次調査分

第172図 鉢・浅鉢変遷図

式まで継続するため、一時期にみられる割合はもっと少ないものと思われる。ただし、それを見越しても深鉢の占める割合は高く、敵期の土器器種組成の主体を占めていると言える。また深鉢については、第26次調査区ではA類とC類とで出土点数が拮抗しているのに対し、第29次調査区ではA類が圧倒的に多い。この差は集落において、「場の使われ方」に時期差がみられる可能性が考えられる。すなわち時間が下るにつれ、集落の領域が東側（第29次調査区）から西へ（第26次調査区）へと移行している可能性を示唆している。

鉢はC・D類が多く、特にD類は多い。D類は大洞C2～A式古段階まで継続したものと思われ、A～C類と組み合わせられて一定量保持されていたことが窺える。特に大洞C2式段階に位置づけられるA類の出土量が少ないことから、本遺跡の鉢はD類を主として製作していたようである。

浅鉢は大洞A式段階に位置づけられるB・C類が、同時期のA類などよりも突出して多い。特に所謂「粗製土器」であるF・G類より多い点特徴である。

土器の容量・サイズ（第173図）

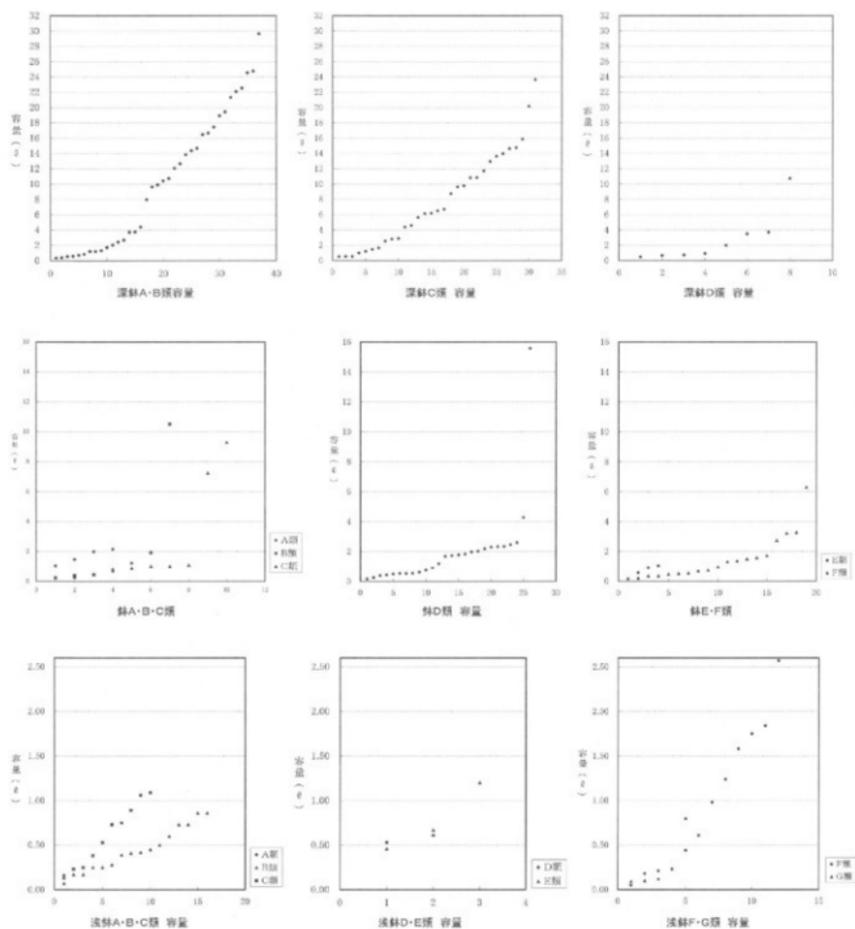
本遺跡第6・7・17・26・29次調査で出土した縄文晩期後葉の土器のうち、形態を復元できた195点を対象として、各土器の容量(ℓ)を計測した。各器種でサイズに一定の集中がみられたり、またまったく作られないサイズ（分布の断絶）があった場合、それは作り分けがあったことを意味し、当時の土器作りに文様だけでなく、サイズにも一定の規制が働いていたことを示唆する。なお計測に当たり、北陸学院短期大学小林正史教授の協力を得た。なお第26・29次調査分の土器で容量を計測したものについては、その結果を上器観察表に表記している。

第173図で示したグラフは特に計測できた土器が多かった深鉢、鉢、浅鉢について、分類別に容量の小さいサイズから順に並べた図である。以下、器種ごとに概観する。

深鉢については、76点を対象としている。B類は計測できる点数が2点と少なかったため、A類に含めた。4ℓ以下、6ℓ前後、15ℓ前後で分布の断絶があり、従って4ℓ以下、8ℓ～14ℓ、16ℓ以上で十器に作り分けがあった可能性が考えられる。C類もほぼ同様である。D類は4ℓ以下に集中しており、本遺跡では比較的小形のものに限定して作られていた可能性が高い。

鉢はA類4点、B類7点、C類、10点、D類26点、E類4点、F類19点、計70点を対象とした。A類は2ℓ以下に集中する。B類は1点10.51ℓがあるが、他は2ℓ以下に集中。C類は2点が10ℓ付近で、他は1ℓに集中する傾向がみられる。D類は3ℓ以下に集中。E類は1ℓ以下に集中し、F類は3ℓ以下に集中する。このように鉢の容量は3ℓ以下に収まっており、さらに各分類では集中度が異なる。すなわち細かく時期毎に土器のサイズに作り分けがあった事が窺える。また点数は少ないが、突出して大きな容量のものがみられ、他のものとは用途を異にする鉢である可能性が高い。

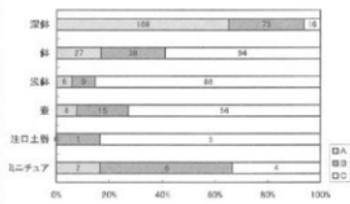
浅鉢はA類1点、B類16点、C類10点、D類2点、E類3点、F類12点、G類5点、計49点を対象とした。分類毎にみていくと、傾向が読み取りづらいものの、A～E、G類はほぼ1ℓ以下の範囲に収まっている。さらに細かくみていくならば、0.5ℓに集中するものがあり、このあたりに作り分けの画期があるのかも知れない。対して、F類は最小0.05ℓから最大2.57ℓまでと他の分類と比べ、容量の幅が広がる傾向がある。F類はI字文などの文様が施文されない、所謂「粗製土器」として捉えられるものであり、こういった土器はあまり規制を受けず、必要に応じ、サイズを変えながら製作されていたと捉えられるのかもしれない。



	2020			2021												計		
	A類	B類	C類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	A類	B類	C類	D類	E類		F類	G類
深鉢A	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深鉢B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深鉢C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深鉢D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深鉢E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深鉢F	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
深鉢G	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢F	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鉢G	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢F	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅鉢G	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
注口土質	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
互ニチュウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

新又土層口幅検討表

(2020年調査分付)



群別別割合

第173図 縄文土器属性分析

土器胎土の種類とその混入量について（第173図右下）

第26・29次調査分の本報告書に掲載した縄文晩期の土器625点を対象に、胎土の混入物とその混入量について観察した。内訳は深鉢265点、鉢159点、浅鉢101点、壺77点、注口土器6点、ミニチュア土器12点、また土偶を含む土製品5点である。観察項目、観察基準は「IV 分類基準」に記載している。

深鉢は胎土に砂粒や長石が含まれることが多い。砂粒を観察する限りでは安山岩系や頁岩系ではないかと思われるが定かではない。砂粒の粒径は大きく、器面上からも多量に混入されているのが観察できる。混入量はAが最も多く、全体の70%を占めている。

鉢も胎土に砂粒が含まれるものが多いが、雲母や白色粒子が含まれるものも多く見受けられた。混入量はCが最も多く、60%を占めている。

浅鉢の胎土は白色粒子が含まれることが多く、他に雲母なども多く含まれていたが、粒径が小さく、いずれも粒子状のものが多い。混入量もCが突出して多い。非常に丁寧に作られているのが窺える。

壺も、浅鉢とはほぼ同様の傾向が窺えた。やや浅鉢よりも砂粒が含まれることが多い。

注口土器は胎土に雲母や白色粒子が含まれ、混入量もCが突出する。

ミニチュア土器には砂粒、雲母、長石が含まれる物が多い。混入量はBが多く、またA、Cも一定量みられることから、必ずしも丁寧に作られるわけではないと思われる。

土偶・土製品は砂粒、雲母、長石が含まれるが、粒径が小さく、粒子状のものが多い。混入量もCが多く、丁寧に作られたものと思われる。

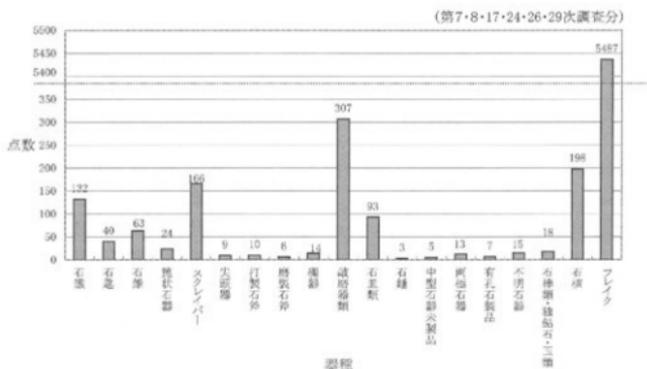
以上のように、土器の器種により、胎土への混入物やその混入量に違いが認められ、土器の容量だけでなく、製作技法や胎土混入物にも器種毎の作り分けがあったものと思われる。

(2) 石器について

第Ⅵ・Ⅶ章で、調査次ごとに出土した石器について説明を行った。ここではそれらを総括し、遺跡内全体の器種組成や各器種の属性についてみていく。

石器の器種組成

出土した石器は第26次調査で2,020点、第29次調査では880点を数える。これに平成8年度第6・7次調査分、平成15年度第17次調査分を加えると、本遺跡から総計6,612点の石器が出土している。第



第174図 本宮熊堂A遺跡出土石器組成器種

174図はそれらを器種組成別に棒グラフで表したものである。6,612点のうちツール類は925点を数え、定形石器では、石鏃、尖頭器などの狩猟具が141点で全体の15%を占める。石鏃、打製・磨製石斧などの採集加工具は103点で全体の11%に相当し、狩猟具とほぼ同等の比率で出土している。また敲磨器類・石皿類・石匙といった調理具は440点で、全体の48%を占める。対して、漁労具と考えられる石鏟は3点しかみつかっていない。本遺跡から検出した旧河道並びに、隣接する北上川や半石川での漁労は積極的に行っていなかったことが窺える。また、石核、フレイクの多さが目立っており、遺跡で石器製作が頻繁に行われていたことが窺える。

石材組成

使用される石材を石器全体から外観すると、安山岩が約半数を占め、次いで頁岩、デイサイトが多い傾向が見受けられた。安山岩、デイサイトが多いのは出土した石器のうち、最も多かった敲磨器類で使用される事が多いためであり、頁岩は多くの剥片石器で使用される石材である。凝灰岩は礫石器、剥片石器ともに使用される石材であった。(頁岩は1～6類、赤色頁岩1～3類まで全て含んでいる。また、軽石は主に安山岩の一種であろうと思われるが、礫石器などで意図的に選んでいることが考えられるので、安山岩とは別に扱った。)

石鏃 (第175図上)

第26次・29次調査で、55点出土している。

〈石材〉出土した55点全点を対象とした。頁岩が94%を占め、そのうち頁岩1類が半数を占める。また赤色頁岩1類や玉髓のような、稀少な石材を素材とするものが他のツール類と比べ、やや多いことも特徴の一つである。

〈重量〉定形品43点を対象とした。1類が0.49～1.86g、2類は1.45～3.39g、3類は2.19～4.45gの範囲に収まっており、1類、2類、3類の順に重い方へと分布の集中が移行する傾向が読み取れる。4類は1点しかみつかっていないので比較はできないが、1類と同じ範囲に含まれる。5類は0.75～2.20gの範囲であり、主に1類を製作しようとしていたものの可能性が高い。

〈長幅比〉欠損品・未成品を除く31点を対象とする。分類毎に大きな差は見いだせないものの、1類は1:1～1:2以上と幅広いのに対し、2類は1:2以上、3類は1:1～1:2の範囲内に収まる傾向にある。

〈厚さ〉41点を対象とする。分類毎の平均値でみると、1類が4.86mm、2類が6.51mm、3類が7.09mmで、重量と同様に1類から2類、3類と厚くなる傾向がある。

〈中茎部の幅〉使用時による磨減の少ない中茎部は製作時の形状を最も残す部分といえる。今回出土した39点のうち中茎部を持つのは1類18点であるが、その中茎部の幅は3.96～7.17mmの範囲に収まり、特に4.01～6.00mmの範囲に集中する。

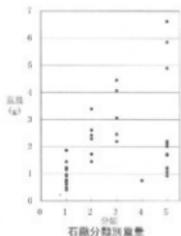
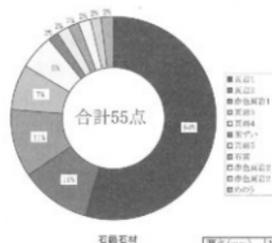
石鏟 (第175図中)

第26次・29次調査で、16点出土している。

〈石材〉出土した16点全点を対象とした。頁岩が77%を占め、そのうち頁岩1類が半数を占める。石鏃同様に、赤色頁岩1類や玉髓といった希少性の高い石材もみられる。

〈重量〉未成品(3類)を含む14点を対象とした。1類は0.42～1.74gの範囲に収まり、他の分類と比べ、重量は軽い。概ね2g以下に収まっており、製作にある程度の制約が働いていたことが窺える。

石錐属性分析

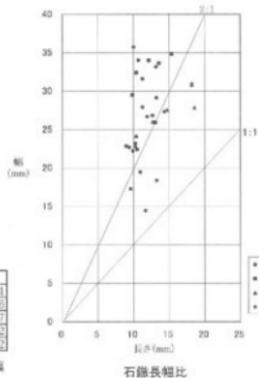


厚さ(mm)	1層	2層	3層	4層	合計
~4.00	0	0	0	1	1
4.01~5.00	7	0	0	1	8
5.01~6.00	6	2	1	0	9
6.01~7.00	0	1	2	0	3
7.01~	3	4	2	0	10

石錐厚さ分類表

(mm)	分類
~5.00	1
4.01~5.00	0
5.01~6.00	7
6.01~7.00	2
7.01~	2

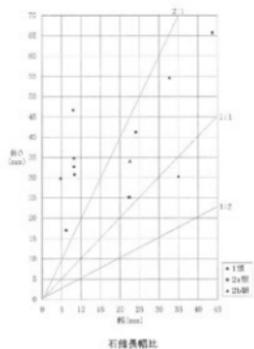
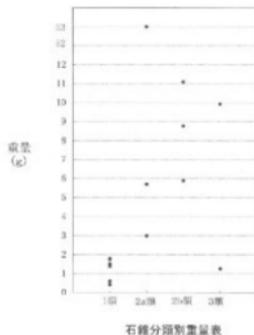
石錐 幅み部幅



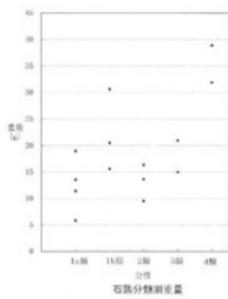
石錐属性分析

幅(mm)	1層	2層	3層	合計
~4.00	1	0	0	1
4.01~5.00	1	0	0	1
5.01~6.00	5	0	0	5
6.01~7.00	2	1	0	3
7.01~	6	3	3	12
合計	7	4	3	14

石錐幅分類表



石匙属性分析

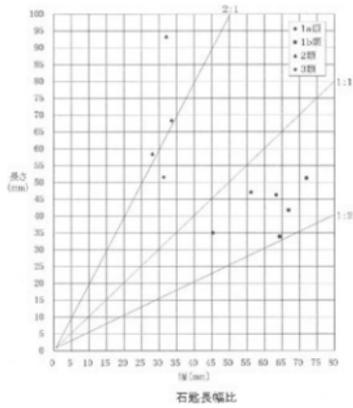


(mm)	1層	1.5層	2層	3層
~6.00	1	0	0	1
6.01~6.60	1	1	2	0
6.61~8.00	2	1	0	1
8.01~	0	1	1	1

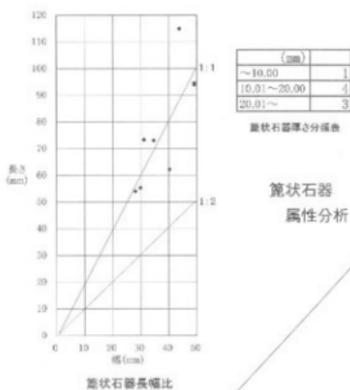
石匙厚さ分類表

(mm)	1層	1.5層	2層	3層
~13.00	0	0	1	0
13.01~14.00	1	0	1	0
14.01~15.00	0	1	1	0
15.01~	0	0	0	3
合計	1	1	2	3

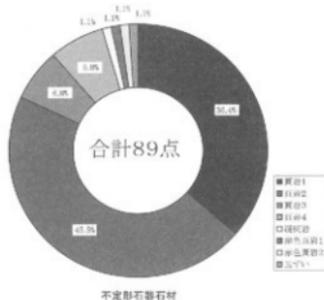
石匙幅み部幅分類表



第175図 石器の属性分析 (1)

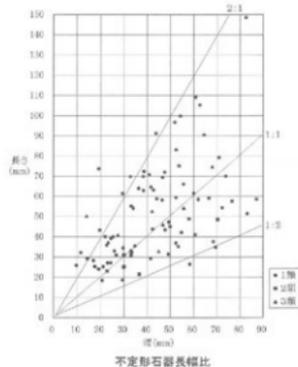
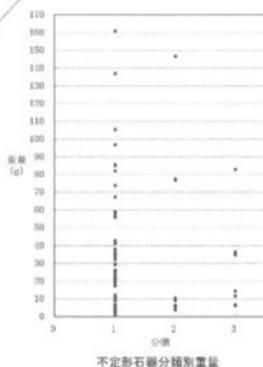


不定形石器属性分析

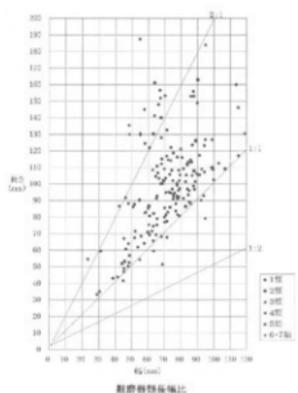
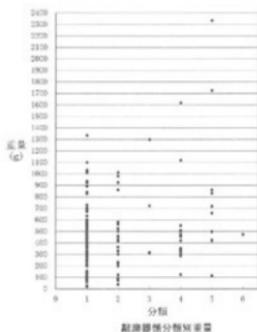
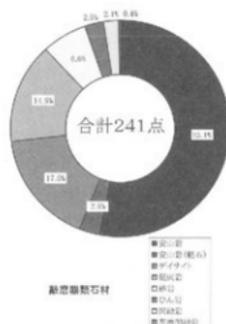


(mm)	1類	2類	3類
~6.00	4	0	0
6.01~7.00	7	0	0
7.01~8.00	9	3	1
8.01~9.00	5	0	0
9.00~10.00	2	0	0
10.01~11.00	5	1	2
11.01~12.00	6	1	0
12.01~13.00	4	0	0
13.01~14.00	5	0	1
14.01~15.00	4	0	1
15.01~16.00	3	0	0
16.01~17.00	3	0	0
17.01~18.00	3	0	1
18.01~19.00	2	0	1
19.01~20.00	3	0	0
20.01~	8	3	1

不定形石器厚さ分類表



敲磨器類属性分析



第176図 石器の属性分析(2)

第41表 フレイク計測表

	A1型	A2型	A3型	B1型	B2型	B3型	C1型	C2型	C3型	D1型	D2型	合計
頁岩1	27	22	22	41	103	81	22	77	67	281	311	1054
頁岩2	13	37	16	35	79	61	34	68	64	207	215	829
頁岩3	4	2	3	5	14	8	5	1	11	39	38	130
頁岩4	1	0	1	5	6	3	1	10	11	29	32	99
頁岩5	0	0	0	0	0	1	0	1	2	6	12	22
頁岩6	0	0	0	0	2	1	1	0	0	4	1	9
頁岩7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	4
赤色頁岩1	2	1	0	1	1	0	0	0	0	7	15	27
赤色頁岩2	0	0	0	0	0	1	1	0	3	9	9	23
赤色頁岩3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	6	10
石英	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	4
凝灰岩	0	1	0	0	1	0	0	0	1	16	2	21
デイサイト	0	0	0	1	0	0	1	1	1	8	2	14
玉髓	0	0	0	0	2	0	0	0	6	14	23	45
砂岩	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	1	6
黒曜石	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
流紋岩	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3	0	6
輝岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計	47	63	42	90	210	157	66	161	171	629	670	2306

	A1型	A2型	A3型	B1型	B2型	B3型	C1型	C2型	C3型	D1型	D2型	合計
頁岩1	774.77	324.36	290.69	443.15	1983.59	1223.61	347.28	810.23	603.16	1566.12	1496.18	9863.14
頁岩2	793.31	954.06	162.05	1036.24	1518.79	934.10	457.32	1032.29	698.98	2687.41	1230.72	11505.27
頁岩3	21.78	339.26	42.83	61.29	298.18	139.01	22.09	3.38	77.43	659.51	241.47	1906.23
頁岩4	26.30	0.00	4.50	46.45	211.94	89.73	9.13	107.33	58.38	316.47	185.60	1055.83
頁岩5	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	31.50	0.00	3.82	17.89	31.50	73.50	158.21
頁岩6	0.00	0.00	0.00	0.00	6.31	17.39	4.00	0.00	0.00	161.04	3.31	192.05
頁岩7	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.70	5.51	9.01
赤色頁岩1	34.36	8.80	0.00	22.40	4.86	0.00	0.00	0.00	0.00	23.25	30.41	124.08
赤色頁岩2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	21.41	4.67	0.00	61.89	107.97	33.74	229.68
赤色頁岩3	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	10.25	1.49	7.97	19.71
石英	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	22.39	16.99	0.00	19.80	59.18
凝灰岩	0.00	4.91	0.00	0.00	19.30	0.00	0.00	0.00	16.86	247.30	27.60	315.97
デイサイト	0.00	0.00	0.00	17.19	0.00	0.00	11.18	8.12	36.80	79.89	38.70	191.88
玉髓	0.00	0.00	0.00	0.00	12.38	0.00	0.00	0.00	21.54	93.86	64.80	192.58
砂岩	0.00	0.00	0.00	76.30	0.00	0.00	16.15	0.00	0.00	41.10	28.51	162.06
黒曜石	0.00	0.00	0.00	0.00	1.65	0.00	0.00	2.12	0.00	0.00	0.00	3.77
流紋岩	0.00	0.00	0.00	48.83	23.47	66.65	0.00	0.00	0.00	132.67	22.10	293.72
輝岩	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	45.51	0.00	45.51
合計	1650.52	1631.39	500.07	1751.85	4080.47	2523.40	871.82	1989.68	1620.97	6197.79	3509.92	26327.88

フレイク・ウフレイク

これに対し2 a類は2.99~52.99g、2 b類は5.88~11.09gの範囲で、1類より重量にばらつきがみられる。3類は未成品であるが、うち1点は1.26gであり、1類を作出する途中のものと考えられる。〈長幅比〉未成品、欠損品を除く12点を対象とした。1類は圧倒的に長さの比が高い。2 a、b類はやや幅広になるが、それでも比率は1:1を大きく超えて、幅広になるものは見受けられない。

〈厚さ〉14点を対象とした。3.00~14.00mmの広い範囲に分布が見られたが、中でも5.01~7.00mmの範囲に集中する傾向が見られた。

石匙 (第175図下)

第26・29次調査で、15点が出土している。

〈石材〉出土した15点全点を対象とした。全て頁岩を石材としており、なかでも頁岩1類、2類が全体の7割を占めている。遺物集中区から赤色頁岩1類を素材としたものが1点出土している。

〈重量〉未成品(4類)を含む14点を対象とした。各分類で分布の集中は見受けられない。しかし、1 b類で突出して重いものがあるほか、いずれも20g以下の範囲におさまる。

〈長幅比〉未成品・欠損品を除く10点を対象とした。刃部が横方向に付く1 a、b類は幅の方に比重が高く、刃部が縦方向(やや斜め方向も)に付く2、3類は長さの方に比重が高くなる。2、3類の

中には、比率が2:1を大きく超えるものがあるのに対し、1類は1:1~1:2の範囲を超えず、作出の際に何らかの規制が働いている可能性が窺える。

〈痛み部幅〉痛み部の残存する11点を対象とした。1 a・1 b類は幅にばらつきがみられ、製作の際に規制がない可能性が窺える。2類は12.00mm以下に集中する。3類は12.01~13.00mmの範囲に集中する。

〈厚さ〉S115 (15.71mm)、S119 (17.51mm)は突出して厚みがある。他は7.00~10.00mmの範囲に収まる。

筒状石器 (第176図上)

第26次・29次調査で8点が出土している。

〈石材〉出土した8点全点を対象とした。頁岩と凝灰岩とが使用され、頁岩が全体の7割を占める。〈重量〉8点を対象とした。最小13.76g、最大95.41gで幅が広い。数が少ないので確実ではないが、10g台2点、30g台2点、また50g以上4点が確認できる。

〈長幅比〉8点を対象とした。比率が1:1~2:1の範囲に収まるものと、2:1を大きく超えるものとに分けられる。

〈厚さ〉10.00mm以下、10.01~20.00mm (S120、121、123)、20.01mm以上 (S122、124)の3つの範囲に収まる。

打製石斧・磨製石斧

第26次調査で打製石斧4点、磨製石斧2点みつがっている。第29次調査ではみつがっていない。

〈石材〉打製石斧は全て頁岩を石材としている。中でも頁岩2類が4点中3点を占めている。磨製石斧は2点共にひん岩を素材とする。

〈重量〉打製石斧はS143が1000gを超える重量である他、他は500g以下であった。ただし、それらも、100g台、200g台、400g台であり、重量に偏りがみられなかった。磨製石斧は完形はS144のみで、重量は119gであった。第17次調査でみつかった刃部が欠損した磨製石斧の重量が200g以上あり、それと比べても小さいことが分かる。

〈長幅比〉打製石斧は形状が円形と分銅状のものがあり、それぞれ、長幅比が大きく異なる。円形は比率が1:1前後になるが、分銅状は長さの方に比率が大きく傾く。

不定形石器 (第176図中)

第26次・29次調査で、89点出土している。

〈石材〉出土した89点全点を対象とする。頁岩、凝灰岩、玉髄が石材として確認できた。頁岩を主体とし、90%以上を占める。その中でも頁岩1、2類が多い。また赤色頁岩や玉髄といった希少性の高い石材を使用したものもみられる。

〈重量〉欠損品を除く87点を対象とした。1類は最小0.68g、最大136.89gであるが、45g以内に多くは集中する傾向がみられる。2類は最大77.41gのものが1点あるが、他は4~10g前後の範囲に集中する傾向が見られる。3類は最小6.39g、最大35.41gで、6g前後と35g前後に集中する傾向が見られた。

〈長幅比〉欠損品を除く87点を対象とした。1類、3類は1:2~2:1の範囲に広く分布する。2類はほぼ1:1~1:2の範囲に収まる。

〈厚さ〉89点を対象とした。分類毎の出土点数にかなり差があるが、7mm前後、14mm前後、また20mm以上に集中する傾向は1～3類で共通している。

敲磨器類（第176図下）

第26・29次調査で241点が出土している。

〈石材〉出土した241点全点を対象とした。安山岩、デイサイト、凝灰岩が主体を占める。これらの石材は第26次調査区から見つかった自然礫の中でも、特に多かった石材である。

〈重量〉完形品162点を対象とした。各分類の重量を比較すると、1、3～5類で、突出して重いものが1点ずつみられるが、全体的に60g以下と、60～110gの範囲とに分布の集中が見られる。

〈長幅比〉長さ・幅が計測可能な175点を対象とした。1：1～2：1の範囲にほぼおさまる傾向がみられる。

〈残存状態〉完形の状態で検出することが圧倒的に多く、それに2分の1以上残存するものが次ぐ。残存部が2分の1以下のものは全体の1割にも満たないので、破損が廃棄の原因ではない可能性が高い。

石皿類（第177図上）

第26・29次調査で44点が出土している。

〈石材〉出土した44点全点を対象とした。安山岩、軽石、デイサイト、凝灰岩、ひん岩、砂岩を石材とする。安山岩や軽石が多く確認された。軽石は他の器種には用いられない石材であり、意図的に選んで使用したものと思われる。

〈重量〉完形品31点を対象とした。4kgを超える、突出して重いものが数点見受けられるが、概ね600g～3kgの範囲におさまる傾向が見られた。

〈長幅比〉長さ、幅の計測可能な31点を対象とした。概ね1：1～1：2の範囲内におさまる傾向が見受けられる。

〈残存状態〉完形で出土するものが多く、全体の7割以上を占める。敲磨器類と同様に、破損が廃棄の原因ではない可能性が高い。

フレイク（第177図下）

第26・29次調査合わせて2306点（26.3kg）出土している。

〈石材〉出土した2306点全点を対象とした。頁岩が圧倒的に多く、特に頁岩1、2類は全体の80%を占めている。頁岩1、2類は本遺跡出土の剥片石器類に最も利用される石材でもある。これらのフレイクは遺跡内でツール類を製作する際に排出されたものである可能性が高い。

また希少性が高い、赤色頁岩や玉髓も多い。第26次調査区遺物集中区からは赤色頁岩1類を石材とする石匙（S68）も出土している他、赤色頁岩の母岩もみつかり、本遺跡内で製作していた可能性がある。

〈分類別重量比〉各分類について重量で比較する。分類基準については「Ⅳ 遺物の分類基準」で示している。背面の観察（A～C類）ではB類が突出して多く、C類がそれに次ぎ、A類が最も少ない。打面の調整回数による観察（1～3類）では2類が多く、1、3類はほぼ同じである。2つの観察項目による分類の組み合わせ（A1～C3類）ではB2類が突出して多い。

背面に自然面の残るA1～A3類は石器製作過程の中で、初段階に排出されるフレイクと考えられ

る。対して、C2、C3類は背面にも打面にも自然面の残らない、石器製作過程の進んだ段階で排出されたフレイクと考えられる。そしてB1～3類、C1類はその中間段階に相当するものと思われる。B2類が多く排出されることは、ある程度想定されていたことではあるが、背面観察でのA、C類、打面観察での1、2類が一定数量出土したということは、やはり本遺跡内で石器製作を行っていたことを裏付ける。特に自然面が残るフレイクが多い。前述の通り、本遺跡からは頁岩等の自然礫が多くみつかっていることも踏まえれば、原石(母岩)の状態で本遺跡内に持ち込まれていることが考えられる。

石核(第177図下)

第26・29次調査合わせて88点出土している。

〈石材〉出土した88点全点を対象とした。石材は全て頁岩である。特に頁岩1類が突出して多く、頁岩2類がこれに次ぐ。この点は本遺跡出土のフレイクの石材比と符合している。

〈重量〉第177図下は各分類の重量を示したものであるが、200g以下と、200～400gの範囲とで集中する傾向が認められる。また、A1、A2、A3、C2類には100g以上の比較的重い石核が見受けられ、特にA3類には1,000gを超えるものが1点確認された。

〈分類別点数〉第177図下には分類別に点数を計測した結果を示している。形状(A～C類)では、A、B類がほぼ同数で認められ、石器石材として球状あるいは扁平な板状の礫を選択されていたことが分かる。また石核にみられる作業面数(1～3類)では2面(2類)が最も多いが、1面、2面以上(1、3類)も決して少なくない。

なお出土した石核の7割以上に自然面の残存が確認できた。フレイクでも自然面の残るものが多く認められ、本遺跡跡で出土した石核・フレイクの大きな特徴として捉えられよう。

2 本宮熊堂A遺跡の縄文晩期集落について

集落の立地と遺構の変遷について

本遺跡は縄文時代晩期後葉、大洞C2～A式期にほぼ限定された集落遺跡である。「Ⅱ 遺跡の立地、環境」でも概説したが、本遺跡は北上川によって形成された河岸段丘上の低位段丘面(砂礫段丘Ⅲ)に立地し、周辺地域にみられる該期の遺跡の多くが山地を中心に分布することからみると、やや特異な場所に位置する遺跡といえる。

本遺跡は縄文晩期と古代の遺構とが認められる複合遺跡であるが、縄文晩期の遺構は、本遺跡の南西部に集中する(第178図右上に示した範囲図が縄文晩期の分布域を示している)。集落は北から南に向け緩やかな傾斜が認められる場所に立地し、標高123m前後を測る。集落の南端には幅約10mの旧河道が東西方向にのび、竪穴住居跡群はこの旧河道の北岸にほぼ並列するように展開する。土坑群は竪穴住居跡とよりさらに北寄りに集中する。また遺構外出土(Ⅳ層出土)遺物も土坑群周辺に集中する傾向が見受けられ、何らかの関係があるのかもしれない。柱穴状土坑は竪穴住居群からやや離れた西側に位置する。第Ⅵ章でも触れたが、柱穴群は何らかの建物であった可能性があり、時期が下るにつれ、集落の中心が東から西へと移行していったと推定される。

第178図は前述した土器分類と編年を基に、出土遺物から遺構の帰属時期を捉え、集落の変遷を図示したものである。ただし柱穴群や炉跡、数基の土坑は出土遺物が無く時期不明である。

大洞C2式段階(第179図上)では竪穴住居跡3棟(RA001・002・006)、竪穴状遺構2棟(RE



第178図 縄文晩期遺構全体図

大洞C 2式段階



大洞A式古段階



縮尺 1/800

大洞A式新段階



大洞A'式段階



縮尺 1/800

001・002)、焼土遺構1基、土坑14基が見受けられる。竪穴住居跡は全て石囲炉を伴い、旧河道にほぼ並列する。土坑は竪穴住居跡の北側に、竪穴住居跡を取り囲むように分布する。北西側にやや集中する傾向が認められ、竪穴状遺構や大形土坑(RD048)もほぼ同じ場所に位置する。

大河A式古段階(第179図D)では竪穴住居跡1棟(RA005)、竪穴状遺構1棟、石囲炉1基、土坑7基が見受けられる。竪穴住居跡には地床炉が伴う。本遺跡から出土した土器は、この段階に比定されるものが多いが、遺構はやや少ない。ただしRA005の東側に隣接して石囲炉(第17次調査・RF016)が位置する。この石囲炉は竪穴住居跡の炉である可能性が高い。竪穴住居跡・土坑の配置は前段階とほぼ同じである。また旧河道から出土した土器や第26次調査区の遺物集中区から出土した土器も大河C2～A式古段階が主体をなす。竪穴状遺構(RE002)1基が竪穴住居跡や土坑と離れて位置する。その距離は約20mを測り、その間は焼土遺構が1基見受けられるのみの遺構空白域である。この遺構空白域では、IV層出土遺物も他のエリアと比べて少なかった。

大河A式新段階(第180図上)では竪穴住居跡2棟(RA003・004)、竪穴状遺構1棟、石囲炉1基、土坑1基が見受けられた。竪穴住居跡には石囲炉を伴うものと地床炉を伴うものの、両方が見受けられた。また竪穴住居跡よりやや離れた場所に石囲炉1基(第6次調査)が見受けられるが、この石囲炉もまた竪穴住居跡に伴う炉である可能性が高い。竪穴住居跡の位置はほぼ前段階と同じであるが、前段階と比べ、やや旧河道に寄っている。土坑はこの段階と判断できたものが1基しかなかったが、遺物が出土しないだけで該当する土坑はもっと多かったものと推定できる。また調査区西側の柱穴群は伴遺物がほとんどないが、柱穴群周辺の遺構外(IV層)出土遺物にはこの段階の遺物が多く含まれており、従って柱穴群はこの段階の遺構である可能性がある。そうなれば、この段階から、集落の中心がやや西側に移った可能性が考えられる。

大河A'式段階(第180図下)は竪穴状遺構1棟(RE003)のみである。元々、本遺跡出土土器で、この段階に比定される土器は少なく、RE003から出土した土器も厳密にはこの段階に確定できるものではない(土器の項参照)。特に竪穴住居跡や炉跡・焼土遺構が認められず、この段階に至り集落としての機能を失い、消滅していったものと考えられる。ただし、前段階同様、調査区西側に分布する柱穴群はこの段階にも帰属する可能性があり、柱穴群が掘り込みを持たない建物跡であれば、この段階でも集落はやや西へと移りながら存続していたものと推定される。

また、本遺跡からは弥生土器が数点認められるが、弥生時代の遺構は検出しておらず、集落も弥生時代にまでは継続しなかったものと捉えられる。以下、主な遺構について概観する。

竪穴住居跡

第6・17・26次調査で、計6棟見つかっている。ただし明確に形態の分かるものはRA001(第6次)・002(第17次)のみである。前述の通り、竪穴住居跡は旧河道の北岸に沿うようにして展開しており、かつ一定の場所に集中する傾向が窺える。またその周辺からは、他に石囲炉6基が検出している。これらはプランが確認できなかった竪穴住居跡の炉である可能性が高い。従って最大で12棟の竪穴住居群が分布していた可能性が高い。ただし全ての竪穴住居跡が同時期存在していた訳ではないので、各段階で、1～3棟程度の集落であったと思われる。

形態の分かるRA001・002はどちらも円形を呈し、規模は径3～5mを測る。床面は平坦であるが、硬化面は認められない。壁も緩やかな立ち上がりである。柱穴は貧弱で、柱構成などは判然としない。竪穴住居跡に伴う炉は石囲炉と地床炉がある。本遺跡では石囲炉の方が多い。石囲炉は炉石を円形に配して構築している。石材、サイズに規則性は見いだせず、近隣の山地か河川から取得した自然礫を

利用している。炉石には加工された痕跡は認められなかったが、一部、敲磨器類や石皿類から転用されたものが見受けられた。また焼土の堆積は比較的薄い。他に特徴として、炉の周辺に焼土が分布(RA003)したり、円形の石組(RA006)がみられるなど、炉に別の付属施設が設置される例が見受けられる。

遺物の出土量は少なくはないが、土器では破片が多い。床直などで故意的に置いておかれたように出土する例はほとんど認められない。石器ではフリイクの出土量が多く、竪穴住居内で石器製作を行っていた可能性が高い。

竪穴状遺構

一辺2m以上の方形基調の掘り込みで、炉を有しない遺構を「竪穴状遺構」とした。第26次調査で5棟見つまっている。

特徴としては炉を有さない他、周辺で柱穴状土坑が集中していることが挙げられる。柱穴状土坑の配置に規則性は見いだせないが、これらが遺構に伴う上屋を支える柱であった可能性が考えられる。また遺物の出土状況にも竪穴住居跡にはない特徴があらわれている。竪穴状遺構では複数の土器が略完形の状態、しかも集中して出土する傾向がある。例えばRE001では多量の土器が検出面上(堆積上)で出土し、中には入れ子状に重ねられて出土する土器も見受けられる。ただし、そういった状態で出土した土器群に規則性は見せず、意図的に置かれたとは考えづらい。本遺跡からは集落に伴う、遺物の捨て場が見つかっておらず、竪穴状遺構がその役割を果たしていた可能性が考えられ、従ってこれらの土器も一括廃棄された土器群と考えられる方が自然と言える。

土 坑

40基みつまっている。竪穴住居群より北側に密集する。土坑群の分布域は周辺には第26次調査で遺物集中区とした箇所があり、また第17次調査でも遺物が多量に出土した場所でもある。遺物と密接な関係があるようにも思えるが、土坑の堆積上中から出土する遺物は少ない。

形状は円形や楕円形で、規模は2m前後である。どれも比較的、出土遺物が少なく、性格は定かではない。ただし、遺構の深さからみて、貯蔵用の施設とは考えられない。第17次調査報告では堆積土中から完形の深鉢や土版が出土することを理由に墓塚の可能性を示唆している。第26次調査区のRD042では完形の石甕が底面から出土しており、これらの遺物を副葬品と考えるならば、墓塚の可能性はある。

旧 河 道

調査区南側に幅10mの旧河道があり、第24・26・29次調査区にまたがる。その旧河道を境に、南側は本宮熊堂B遺跡に接しているが、本宮熊堂B遺跡からは該期の土坑が数基みつまっているものの、竪穴住居跡は確認されていない。従ってこのことから旧河道は本遺跡にみられる晩期集落の境界として位置していることが窺える。ただし本宮熊堂B遺跡の土坑の他に、さらに500mほどに位置する野古A遺跡からは該期のものと思われる陥し穴がみつっており、本遺跡にみられる晩期集落を営んだ生活者の領域は南側にまで広がっていたものと思われる。

旧河道からは土器片や石器がみつかる他、堅果類などが出土している(第24次調査)が、ワナなどの痕跡はみつっていない。また本遺跡から石鏟等の漁労具はほとんどみつっていない。こういった点を踏まえれば、旧河道での生業活動は行われていなかった可能性が高い。なお東北学院大学松本

3. 本宮熊堂A遺跡から出土の土師器について
4. 旧河道に堆積した土壌の花粉分析に関する見解

教授によると、この旧河道は当時河川として機能せず、沢状のものであった可能性が高いことが指摘されている（2006 岩埋文470集）。

3. 本宮熊堂A遺跡から出土の土師器について

ここでは本宮熊堂A遺跡から出土した土師器について簡単にまとめる。

土師器が出土したのは本宮熊堂A遺跡と本宮熊堂B遺跡とを画する旧河道からと、旧河道が埋没した後に掘削された2条の溝（RG055・056）からである。これらのほとんどは平安時代以降のもので、ロクロ成形で黒色処理が施されていないものが大半を占める。体部が内湾しながら口縁部まで立ちあがるものが多く、9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。

これらの土器は、本宮熊堂B遺跡から出土した九字の墨書土器と同じものがみられるので、そこに居住していた人々が使用していたものと思われる。出土状況から、祭祀的な様相は確認できなかった。残存率が1/3以下のものがほとんどなので、破損して使用できなくなったものを廃棄したものと思われる。

4. 旧河道に堆積した土壌の花粉分析に関する見解

分析までの経緯 本宮熊堂A遺跡第29次調査では、旧河道に堆積した土壌を層位ごとに採取して、花粉分析に供した。試料の採取にあたっては、花粉は乾燥に弱く、劣化しやすいため、トレンチの断面を奥に20cmほど掘り進めて現れた土壌を採取した。採取した土壌は、あらかじめ層番号を記入した写真撮影用の35mmフィルムが入っていたケースに詰め込んだ。これらはビニール袋にまとめて室内で保存していた。分析業者が決定し、試料を送付したのは採取から約5ヶ月後の2005年12月である。

分析の目的 2004年度には第29次調査区に隣接する地点で第24次調査が行われ、同じように旧河道に堆積した土壌に含まれる花粉分析が行われている。その結果、1g層からイネ科が増加し、この時期に「周辺で水田が営まれていたと推定」されている（『本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告書』p268）。ただ、1g層の時期は十和田aテフラの堆積から推測されるにとどまっていた。そこで、第29次調査では1g層と対応すると思われる9層から破片であるが9世紀中ごろと考えられる土器が出土したので、9層を鍵として上下の層の土壌の花粉分析を行うことによって、「周辺で水田が営まれていた」時期を確定しようと、再度花粉分析を行った。

分析の結果 詳細な分析は本報告書第7章を参考されたい。結果からすれば、第24次調査でイネ科の花粉が検出された1g層と対応する9層からは同じイネ科の花粉が急激に出現した。ただし、今回の分析ではこれらは野生型のもので判断されており、栽培されたものとは断定できない。したがって、少なくとも今回の分析による限りでは、9世紀中ごろにおいて遺跡周辺で水田が営まれていたということは必ずしもいえない。

分析から読み取れること 今回、イネ科花粉の出現—水田での稲の栽培開始—がいつからかを探るため、旧河道に堆積した土壌の花粉分析を行った。当初の予想とは違い、検出された花粉が野生型だったため、周辺で水田による稲の栽培が行われていたということは、今のところいえなくなった。ただ、

野生型でもイネ科の花粉が9世紀中ごろから急激に増えたことの原因を考える必要がある。これについて分析担当者は、周辺の樹木が伐採され日当たりのよい裸地が広がった所にイネ科植物が分布するようになったのではないかと推測している。この推測が正しいならば、周辺で樹木が伐採された要因が何なのかを考える必要がある。そこで、想起されるのが9世紀初頭に造営された志波城の存在である。志波城が機能していたのはわずかに十数年間だが、そこでは鎮兵をはじめ多くの人々が生活していた。その確定的な人数は不明だが、弘仁3年の時点で「それ志波城は河浜に近く、しばしば水害を被る。そのところを去りて、便地に遷すべし。伏して望むらくは（鎮兵）二千人を置き、しばらく守衛に充て、その城が遠り訖らば、すなわち千人を留め、永く鎮戍となし、自余はことごとく解却に従わんことを」（『日本後紀』弘仁二年四月二日辛丑条）とあり、志波城には1000から2000人の鎮兵が詰っていたと推測される。彼ら鎮兵が消費する薪炭だけでも相当量に達していたことは容易に想像され、周辺の樹木が伐採されるという事態は、おそらくこうした志波城の造営に伴って人口が一時的にであれ、増加したと関わるのではないかと今のところ考えられよう。

<引用・参考文献>

- 青森県考古学会 2006 『龜ヶ岡文化の諸問題 研究発表会資料集』
- 石川日出志^{3a} 2005 『関東・東北弥生土器と北海道統続縄文土器の広域圏年表』
- 岩手県教育委員会 1961 『岩手県史』第1巻
- 財団法人雄蔵文化振興事業団
雄蔵文化財センター 1982 『新内遺跡（1）遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団雄蔵文化財調査報告書第32集
(以下、第○集と略する)
- 1980 『安塔原遺跡発掘調査報告書』第74集
- 1986 『手代森遺跡発掘調査報告書』第108集
- 1992 『上八木田Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ遺跡発掘調査報告書』第177集
- 1995 『上米内遺跡発掘調査報告書』第220集
- 1998 『本宮北・本宮熊立A遺跡発掘調査報告書』第281集
- 2000 『川岸埜Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第317集
- 2004 『本宮熊立A遺跡第17次発掘調査報告書』第453集
『本宮熊立D遺跡第18次発掘調査報告書』第458集
『台太郎遺跡第51次発掘調査報告書』第468集
- 2006 『本宮熊立A遺跡第24次・本宮熊立B遺跡第25次発掘調査報告書』第470集
- 2006 『大塚遺跡発掘調査報告書』第481集
- 2006 『全形遺跡発掘調査報告書』第482集
- 2006 『平成17年度発掘調査報告書』第490集
- 岩手考古学会 2005 『岩手県における弥生前期から注記の諸問題—土器型式と地域間交流—資料集』
- 金子昭彦 2000 『岩手県における縄文時代晩期の遺構』（財）岩手県雄蔵文化財センター『紀要XⅧ』
- 2001 『岩手県における縄文時代晩期の遺跡—付 代表的な集落遺跡の検討』（財）岩手県雄蔵文化財センター『紀要XⅨ』
- 2002 『岩手県における縄文時代晩期の集落跡』（財）岩手県雄蔵文化財センター『紀要XⅩⅠ』
- 2006 『東北地方における縄文晩期の「芸術品」（1）—分類と代表的な遺跡の集成一』（財）岩手県雄蔵文化財センター『紀要XⅩⅤ』

- 北上市教育委員会 1977 『九年橋遺跡第3次調査報告書』北上市文化財調査報告書第18集
- 北上市教育委員会 1978 『九年橋遺跡第4次調査報告書』北上市文化財調査報告書第23集
- 北上市教育委員会 1979 『九年橋遺跡第5次調査報告書』北上市文化財調査報告書第25集
- 北上市教育委員会 1980 『九年橋遺跡第6次調査報告書』北上市文化財調査報告書第29集
- 北上市教育委員会 1984 『九年橋遺跡第7次調査報告書』北上市文化財調査報告書第35集
- 北上市教育委員会 1985 『九年橋遺跡第8次調査報告書』北上市文化財調査報告書第39集
- 北上市教育委員会 1986 『九年橋遺跡第9次調査報告書』北上市文化財調査報告書第42集
- 北上市教育委員会 1987 『九年橋遺跡第10次調査報告書』北上市文化財調査報告書第44集
- 北上市教育委員会 1990 『九年橋遺跡第11次調査報告書』北上市文化財調査報告書第49集
- 小林正史 1998 『土器の文様はなぜ変わるのか』『長野県小笠市水遺跡発掘調査資料図録』第3分冊
- 児玉大成 2002 『くびれ石考—縄文人の好奇心をくすぐる自然石—』『海と考古学とロマン』
- 佐藤広史 1985 『型式の空間分布から見た土器型式』『赤い本 片倉信光氏追悼論文集』赤い本刊行会
- 佐藤由紀男 2002 『煮炊き用土器の容容変化からみた本州北部の縄文/弥生』『日本考古学』第13号
- 品川歌也 2003 『器種と文様、そして機能の相関関係にみる大洞A式土器の変遷』『歌台史学』第119号
- 鈴木道之助 1991 『石器入門事典』柏書房
- 須藤 隆 2002 『東北日本における晩期縄文集落の研究』『東北大学文学研究科研究年報』第52号
- 高橋元範 2000 『東北地方における弥生土器の形成過程』『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集
- 高橋龍三郎 1993 『大洞C2式土器細分のための諸課題』『先史考古学研究』第4号
- 仲田茂司 1998 『弥生から見た大洞A式土器—阿武隈川中上流域を中心に—』『しのお考古』第11号
- 中村 大 1998 『龜ヶ岡文化における墓制の基礎的研究(1)—東北北部の土坑墓について』
『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯
- 新潟県朝日村教育委員会 2002 『奥三内ダム関連遺跡発掘調査報告書XIII アチャ平遺跡上段』朝日村文化財報告書第21集
- 2002 『奥三内ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元原敷遺跡Ⅱ(上段)』朝日村文化財報告書第22集
- 新潟県教育委員会 1996 『清水上遺跡Ⅱ関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集
- 2004 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集
- 松海道遺跡調査会 『東京都 あきる野市 松海道遺跡』
- 盛岡市教育委員会 1979 『盛岡市史』第1巻
- 1991 『上平遺跡群—上猪去遺跡群—平成2年度発掘調査概報』
- 1998 『盛岡市埋蔵文化財調査年報 平成5・6年度』
- 1998 『遺跡台帳 平成10年度版』
- 1999 『遺跡台帳 平成11年度版』
- 2002 『盛岡市内遺跡群』平成13年度発掘調査概報
- 2003 『盛岡市内遺跡群』平成14年度発掘調査概報
- 2003 『向田遺跡 浅岸地区十地区區整理事業関連遺跡調査報告書Ⅱ』
- 山内清男 1930 『所屬龜ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末』『考古学』第1巻3号

写 真 图 版

1.全景(南西から)



2.基本層序①
(調査区東壁・西から)



3.基本層序②
(調査区北壁・南から)





1.RA003全景（南西から）



2.RA003断面（西から）



3.RA003浅鉢出土状況（南から）

1.RA003石圍伊 (西から)



2.RA003石圍伊断面 (西から)



3.RA003石圍伊掘り方 (西から)





1.RA004全景（西から）

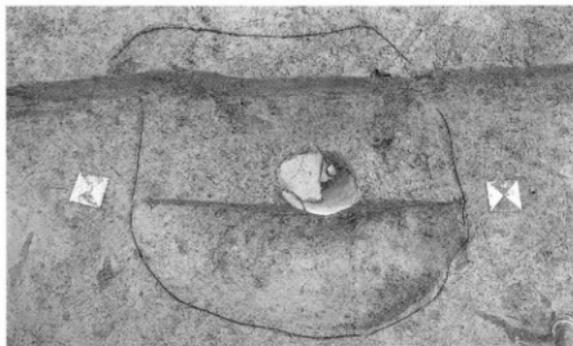


2.RA004断面（西から）



3.RA004遺物出土状況（東から）

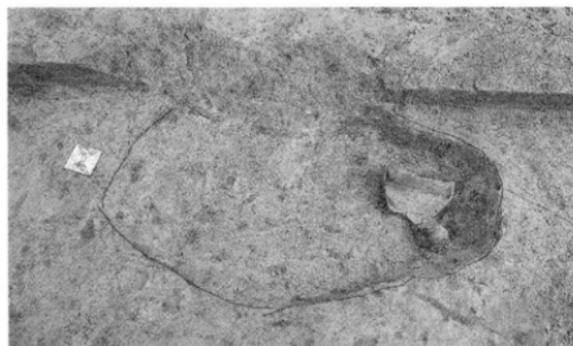
1.RA004炉（西から）

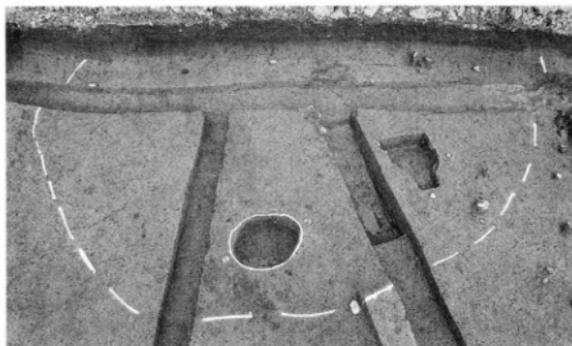


2.RA004伊断面（西から）

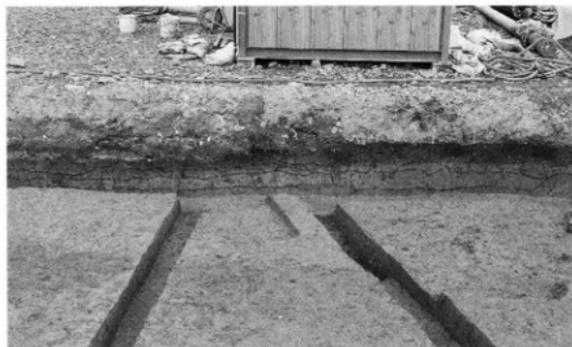


3.RA004伊掘り方（西から）





1.RA005全景（西から）



2.RA005a-a断面（西から）

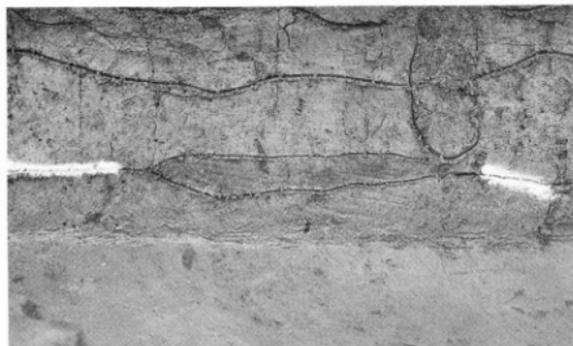


3.RA005b-b断面（南から）

1.RA005伊 (西から)



2.RA005伊断面 (西から)



3.RA005伊振り方 (西から)





1.RA006全景（西から）



2.RA006断面（南から）



3.RA006石囲炉（西から）

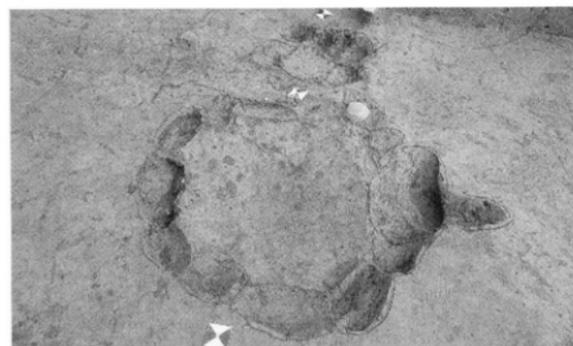
1.RA006石圍伊断面（南から）



2.RA006石組（西から）



3.RA006石圍伊掘り方





1.RE001全景 (南から)



2.RE001検出面遺物出土状況
(南から)

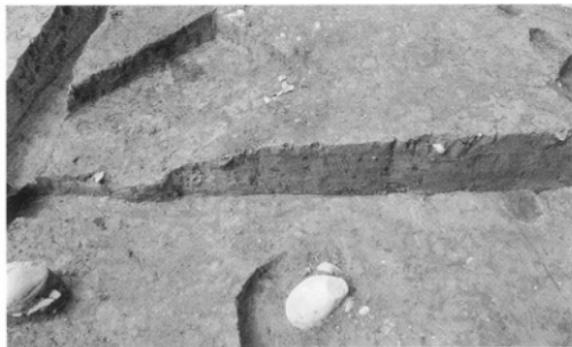


3.RE001遺物出土状況①
(南東から)

1.RE001b-b'断面" (北から)

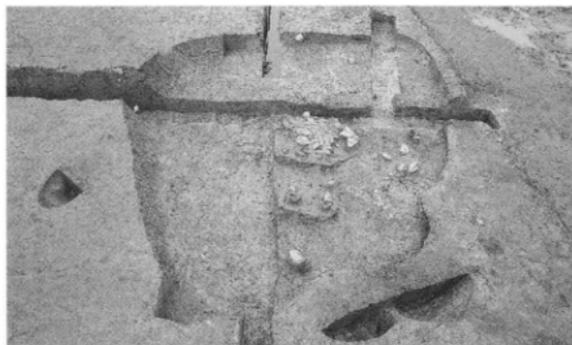


2.RE001b-b'断面" (北から)



3.RE001遺物出土状況②





1.RE002全景 (西から)



2.RE002断面 (西から)



3.RE002遺物出土状況 (西から)

1.RE003 (南東から)



2.RE003断面 (東から)



3.RE003遺物出土状況 (北から)

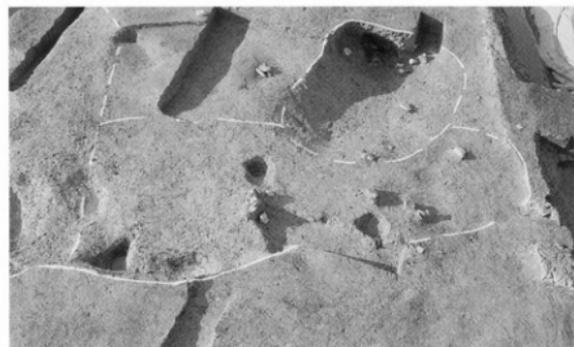




1.RE004・005全景（南から）



2.RE004全景（南から）



3.RE005全景（南から）

1.RE004・005断面（南から）



2.RE004断面（東から）

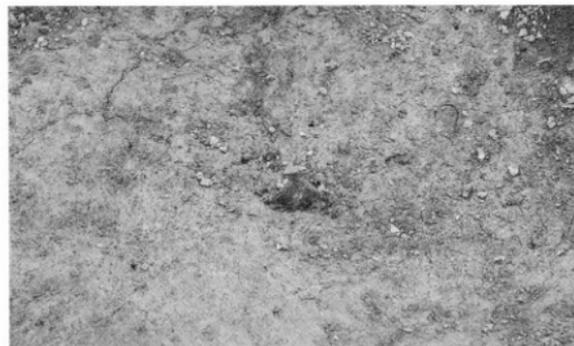


3.RE004遺物出土状況（東から）





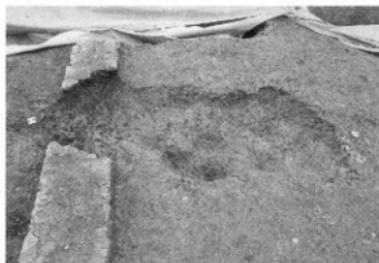
1.RD042全景（西から）



2.RD042石匙出土状況
（北西から）



3.RD042断面（南から）



1.RD043全景（東から）



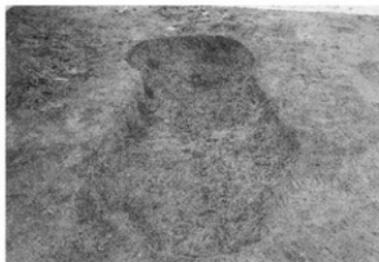
2.RD043断面（東から）



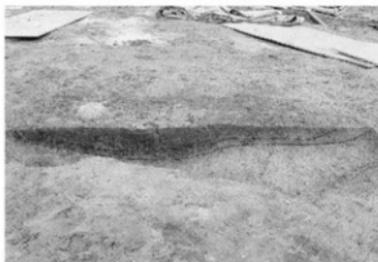
3.RD044全景（南から）



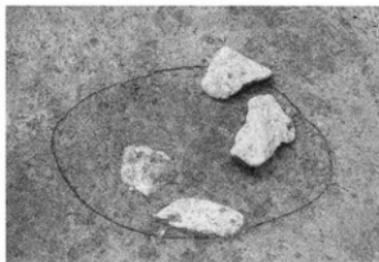
4.RD044断面（南から）



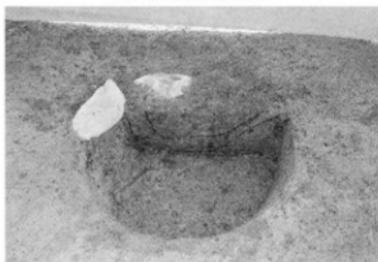
5.RD045全景（南から）



6.RD045断面（南から）



7.RD046検出状況（東から）



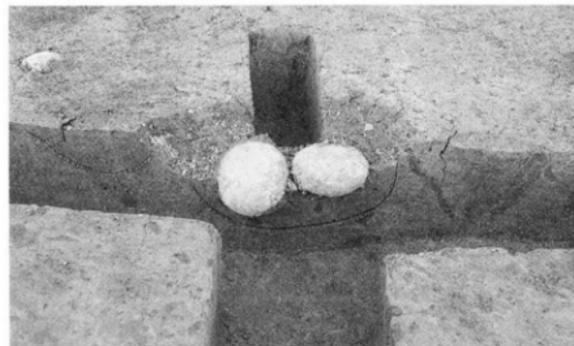
8.RD046断面（北から）



1.RD047石重出土状況（西から）



2.RD047磨石出土状況（西から）



3.RD047断面（南西から）

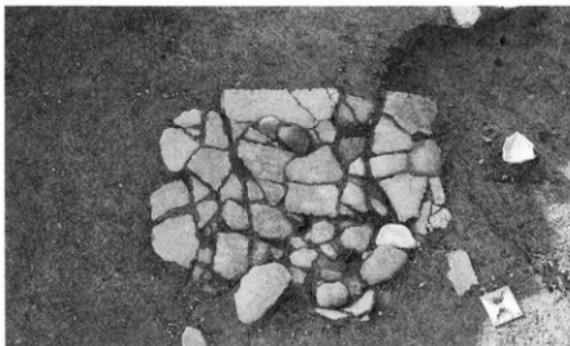
1.RD048全景 (南から)



2.RD048遺物出土状況①
(南から)



3.RD048遺物出土状況②
(東から)

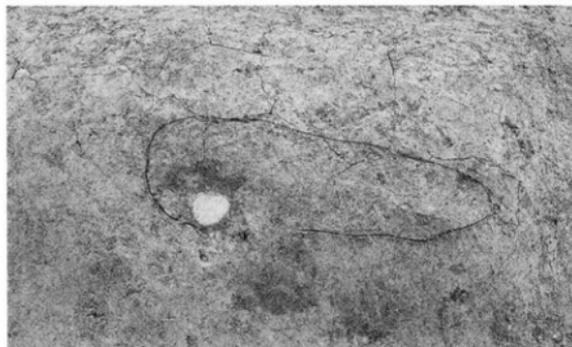




1.RD048遺物出土状況
(南から)



2.RD048遺物出土状況
(南東から)



3.RF018全景(北から)

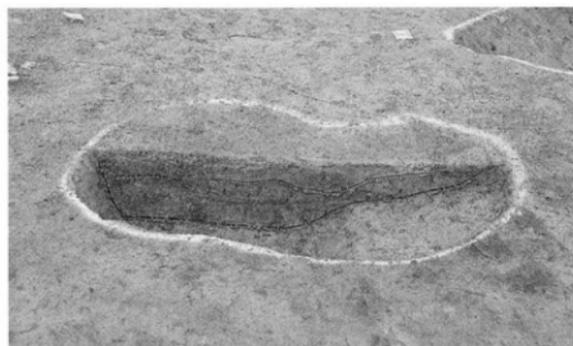
1.RF018断面（北から）



2.RF019全景（北から）

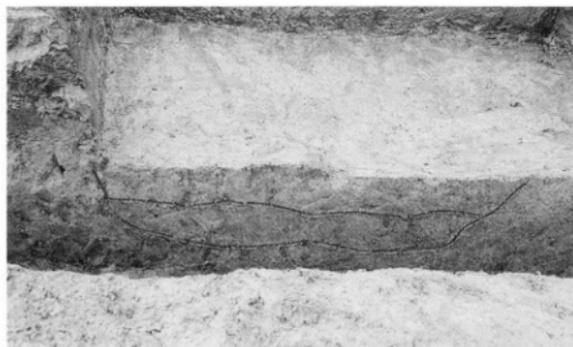


3.RF019断面（南から）





1.RH001検出状況（東から）



2.RH001断面（東から）



3.RH001実掘（東から）

1. 遺物集中区全景（南から）

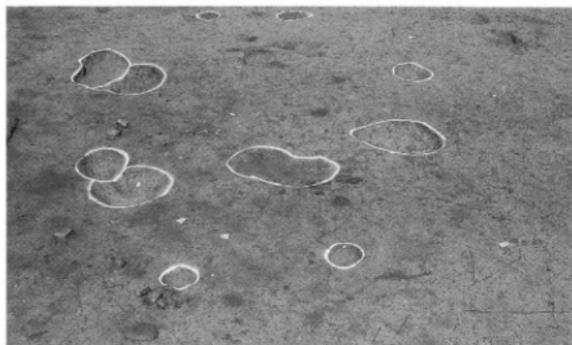


2. 遺物集中区遺物出土状況①
（北から）



3. 遺物集中区遺物出土状況②
（北から）





1.柱穴群①(南から)



2.柱穴群②(東から)



3.柱穴群③(東から)

1.RG054全景（南から）



2.RG054a-a断面（南から）



3.RG054b-b断面（南から）





1.RG055全景（西から）



2.RG055断面（西から）

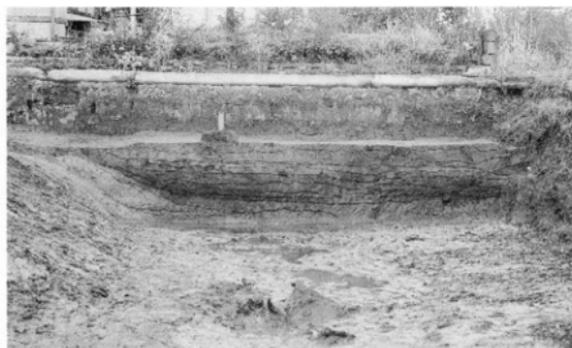


3.RG055土師器出土状況
（北から）

1.旧河道全景（西から）



2.旧河道断面（西から）



3.旧河道流木類出土状況
（北から）





1. RF020焼土遺構断面（北面から）



2. RF021石囲炉（南西から）



3. RF021石囲炉断面（西から）



1. RF022石囲炉 (南から)



2. RF022石囲炉断面 (南から)



3. RZ003 (南東から)



2. RG055全景 (西から)



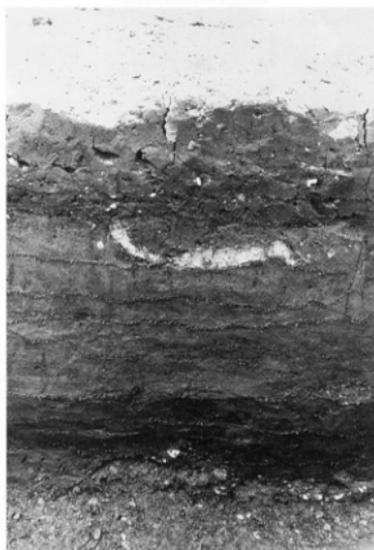
2. RG055と旧河道の断面 (南東から)



3. RG055断面 (東から)



4. RG056全景 (西から)



4. 旧河道内のRG056断面 (東から)



1. 旧河道古代面全景（南西から）



2. 旧河道全景（西から）



3. 旧河道全景（北東から）



1. 旧河道トレンチ1断面
(南東から)



2. 旧河道トレンチ2断面
(南東から)



3. 旧河道トレンチ3断面
(南西から)



1. 遺物集中区全景① (南から)



2. 遺物集中区全景② (東から)



3. 遺物出土状況① (北西から)



4. 遺物出土状況② (南東から)



5. 遺物出土状況③ (西から)



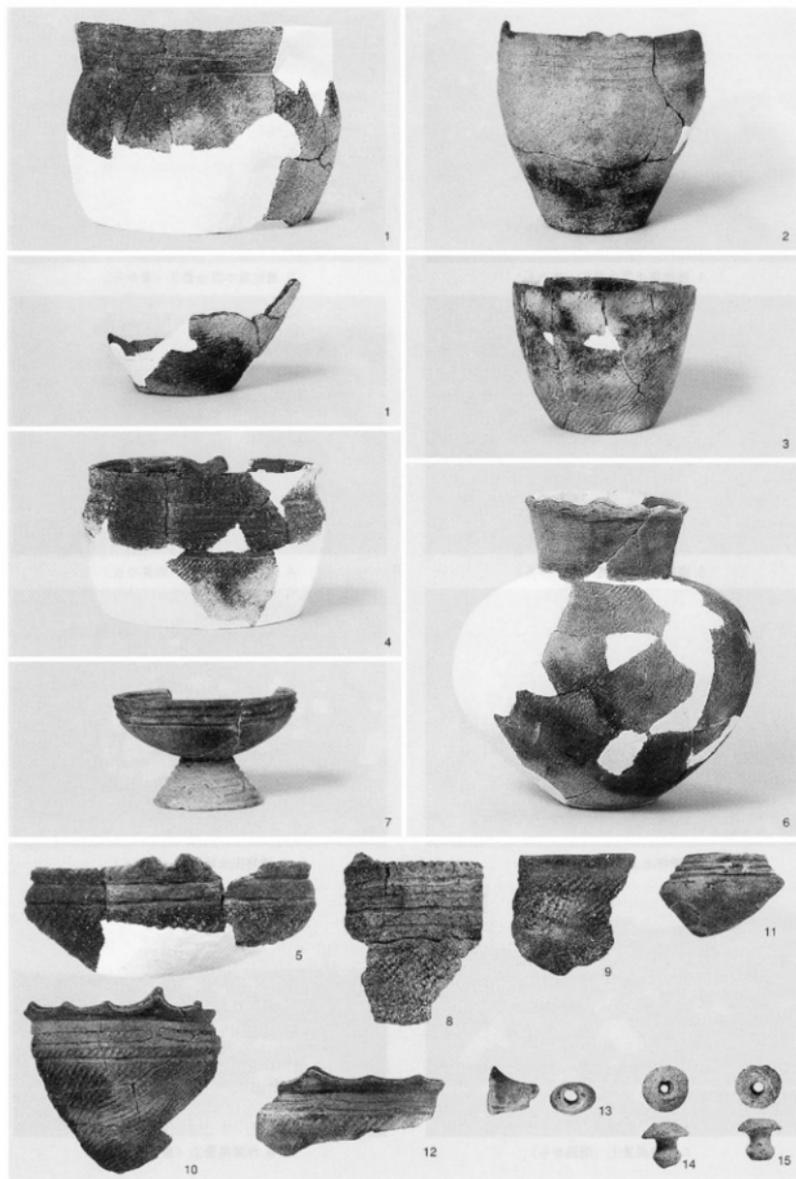
6. 遺物出土状況④ (南から)



7. 作業風景① (南西から)

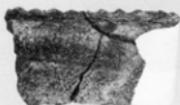


8. 作業風景② (東から)



写真図版34 RA003出土土器

RA004



RA005



RA006



30



34

33

31

32

RE001



35



36



37

写真図版36 RA006・RE001出土土器(1)



写真図版37 RE001出土土器(2)



45



46



48



49



50



51

写真図版38 RE001出土土器(3)



52



54



53



55



57



56



63



64



65



66



67



70



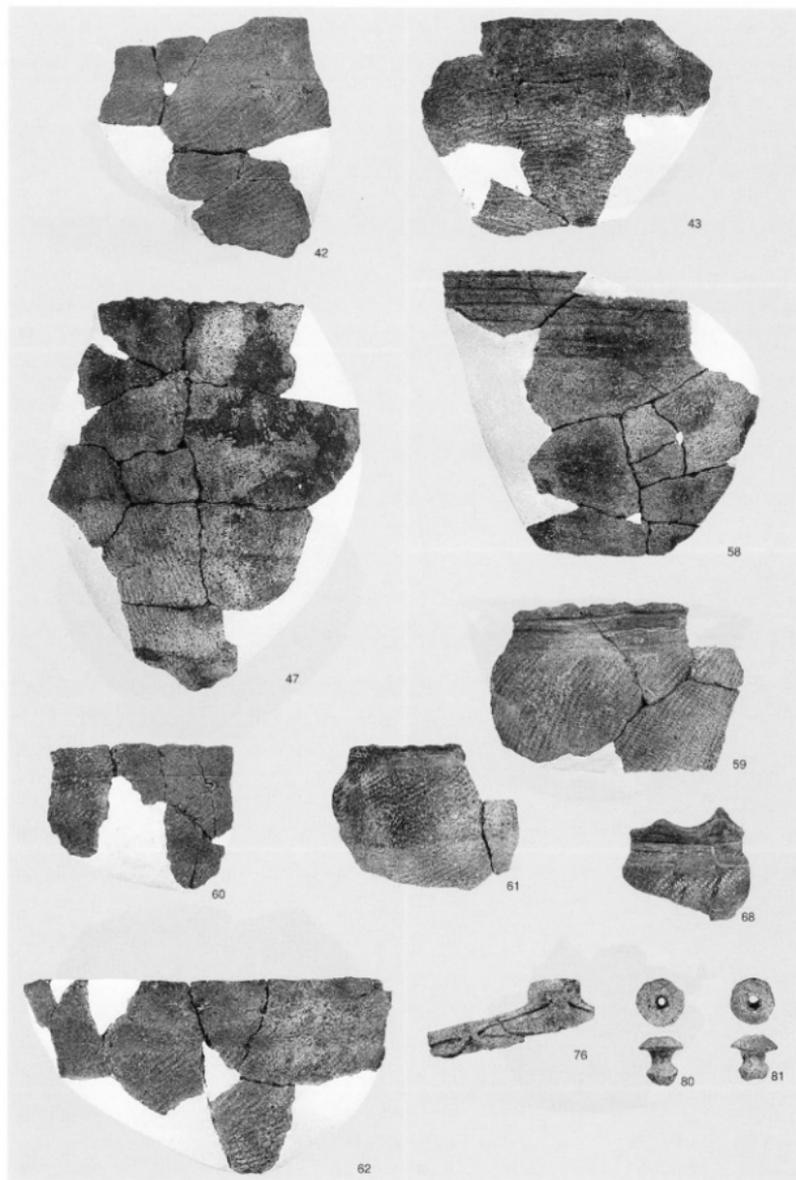
69



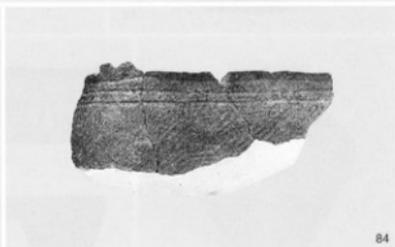
71

写真図版40 RE001出土土器 (5)

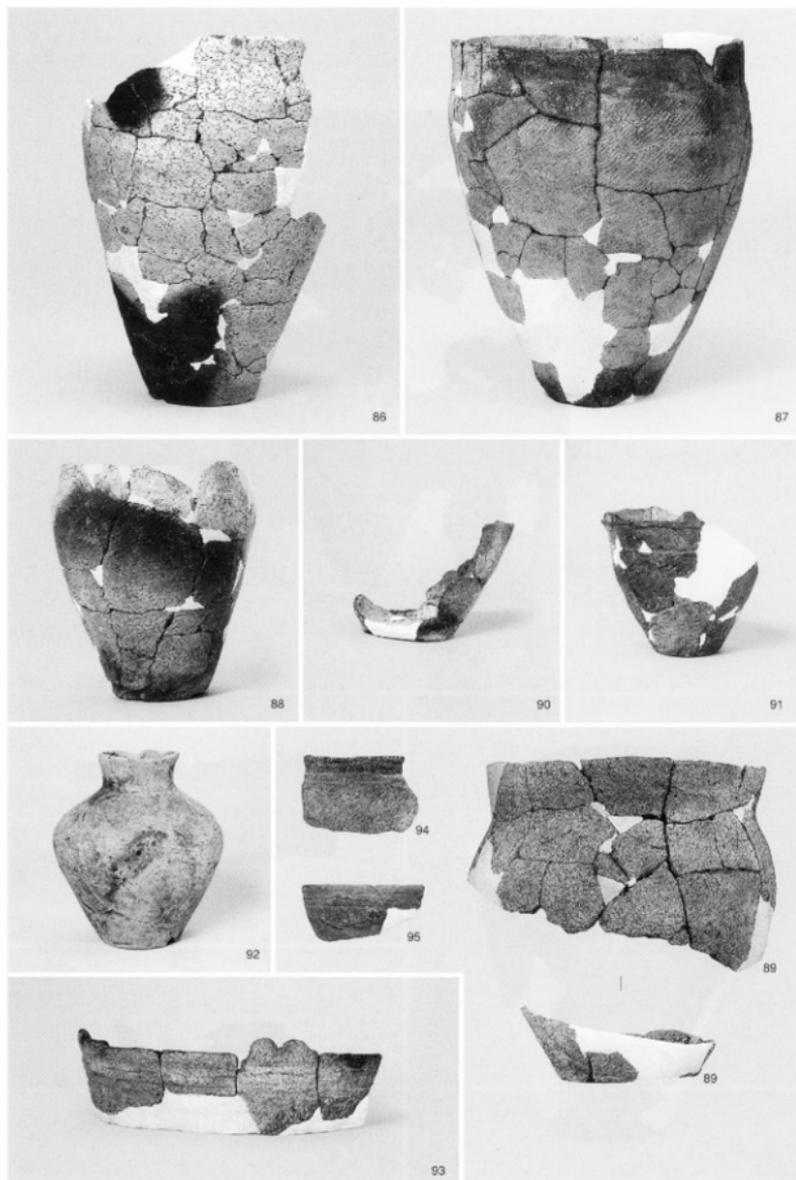




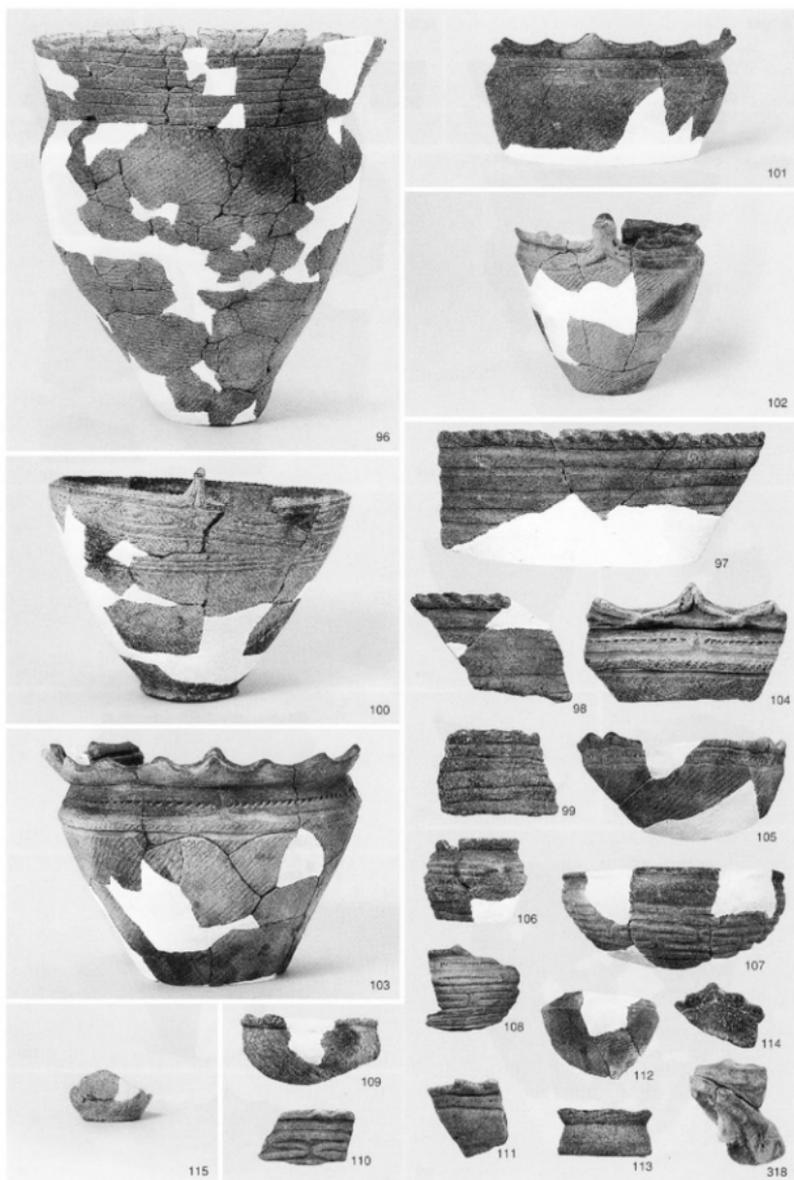
写真図版42 RE001出土土器(7)



写真図版43 RE002出土土器



写真図版44 RE003出土土器



写真図版45 RE004・005出土土器

RD042



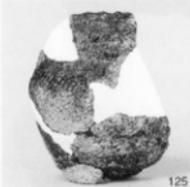
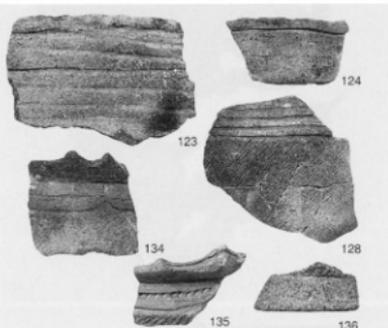
RD043



RD044



RD048



写真図版46 RD042~044・048出土土器

RF018



137

遺物集中区



145



145



146



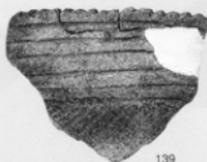
148



149



138



139



140



141



142



143



144



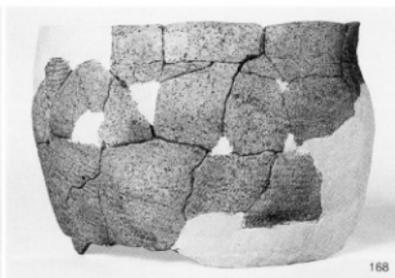
147



写真图版48 旧河道出土土器



167



168



169



174



181



172



173



185



188



190



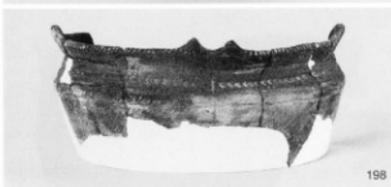
197



212



189



198



200

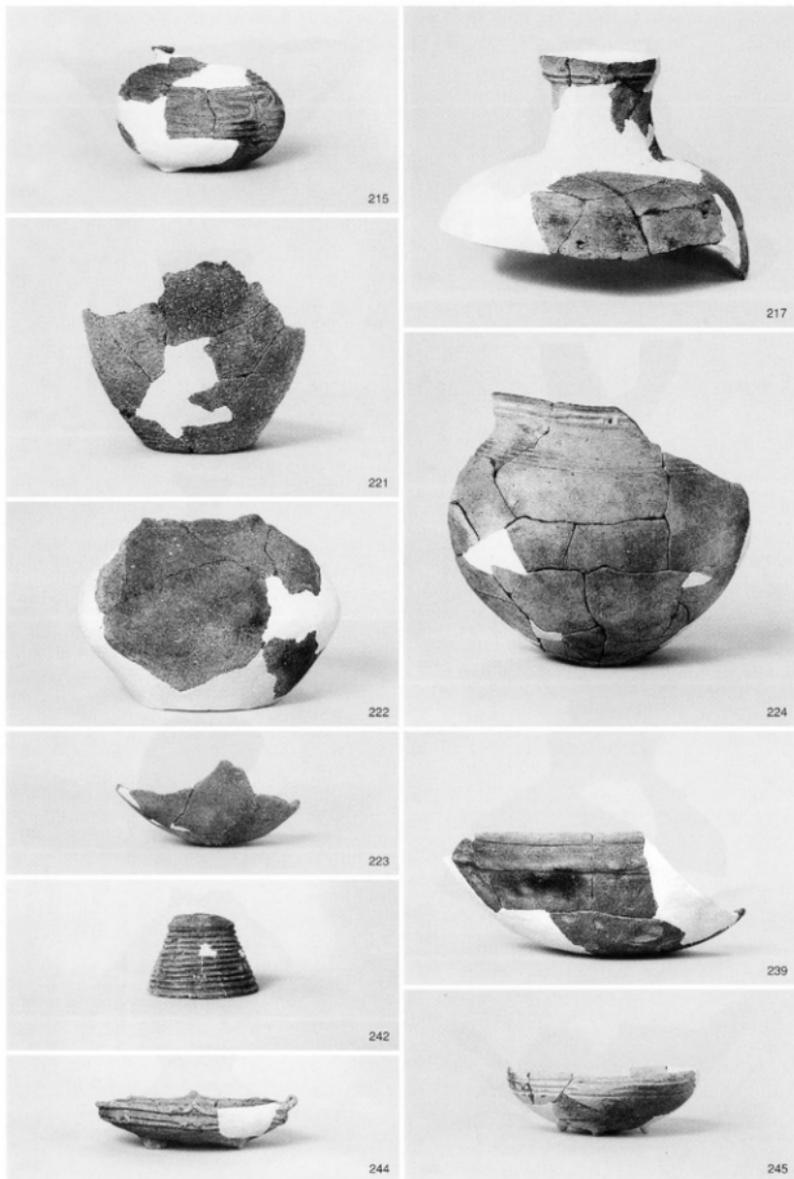


211

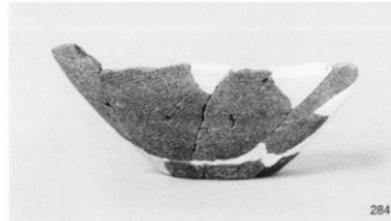
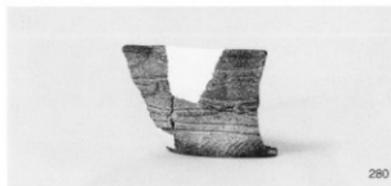


214

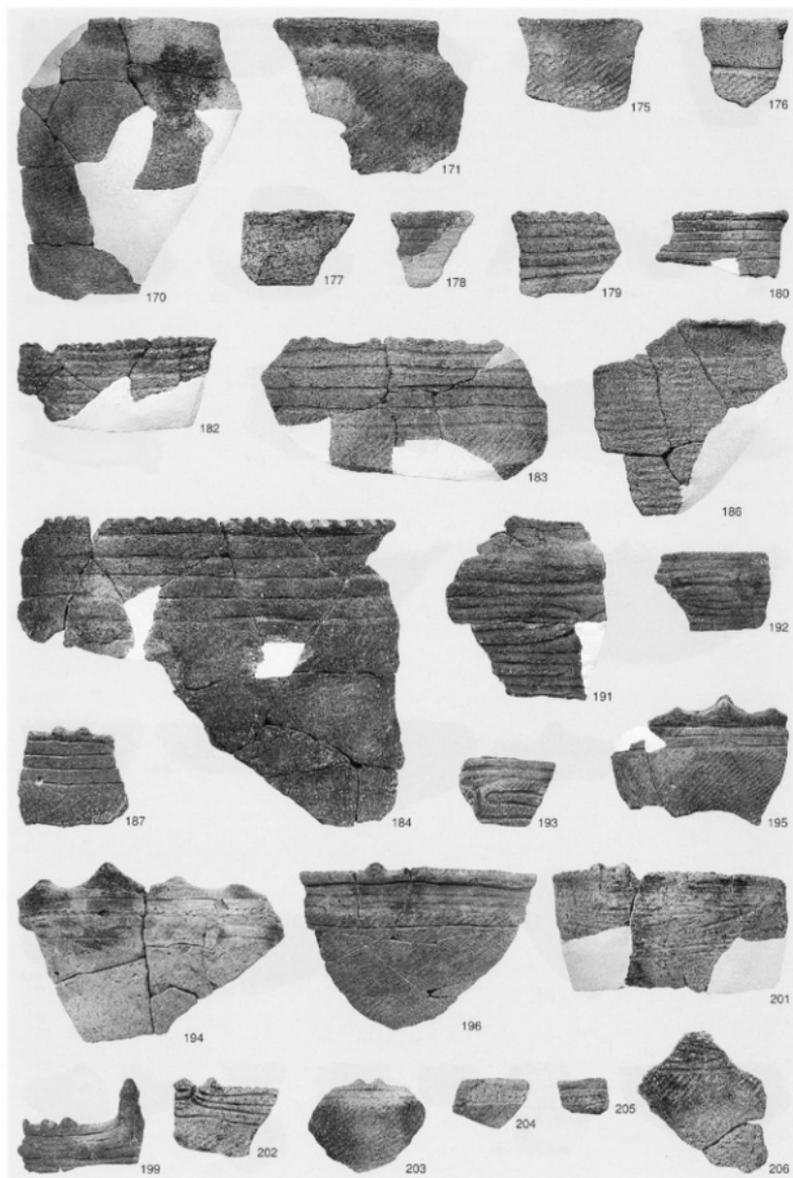
写真図版50 遺構外土器(2)



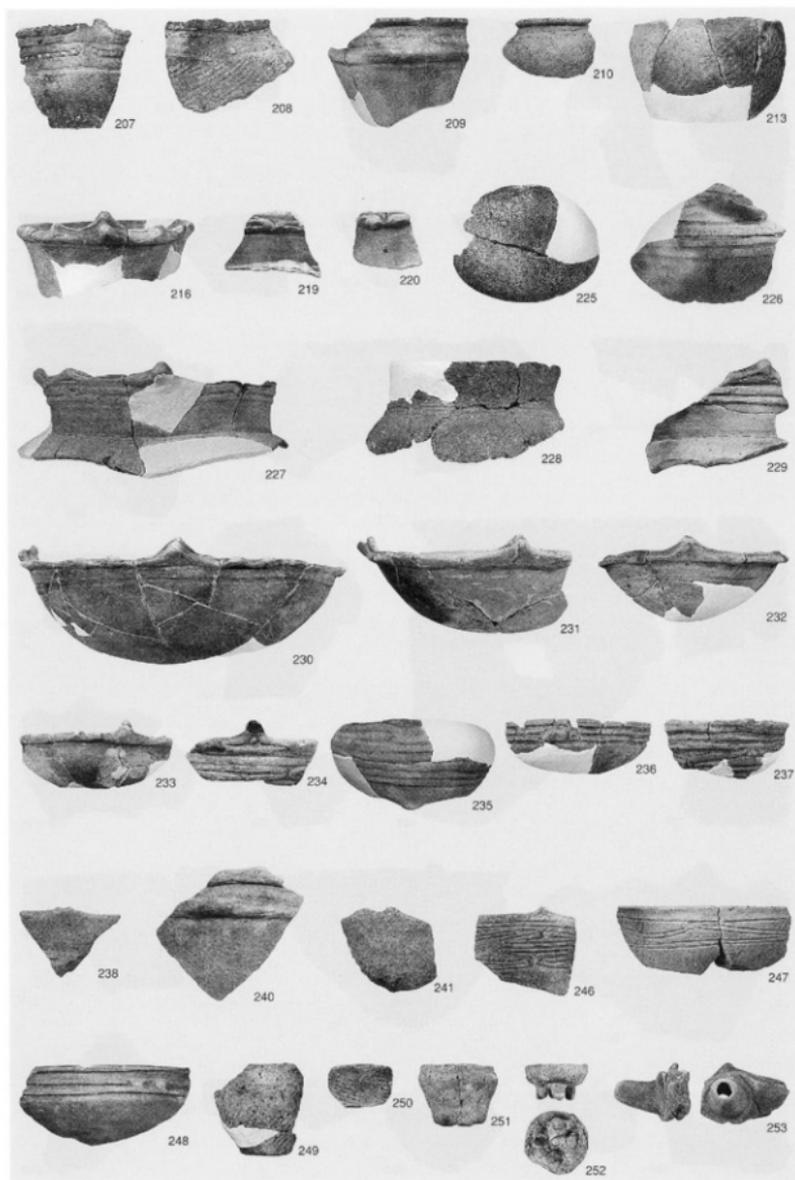
写真図版51 遺構外土器 (3)



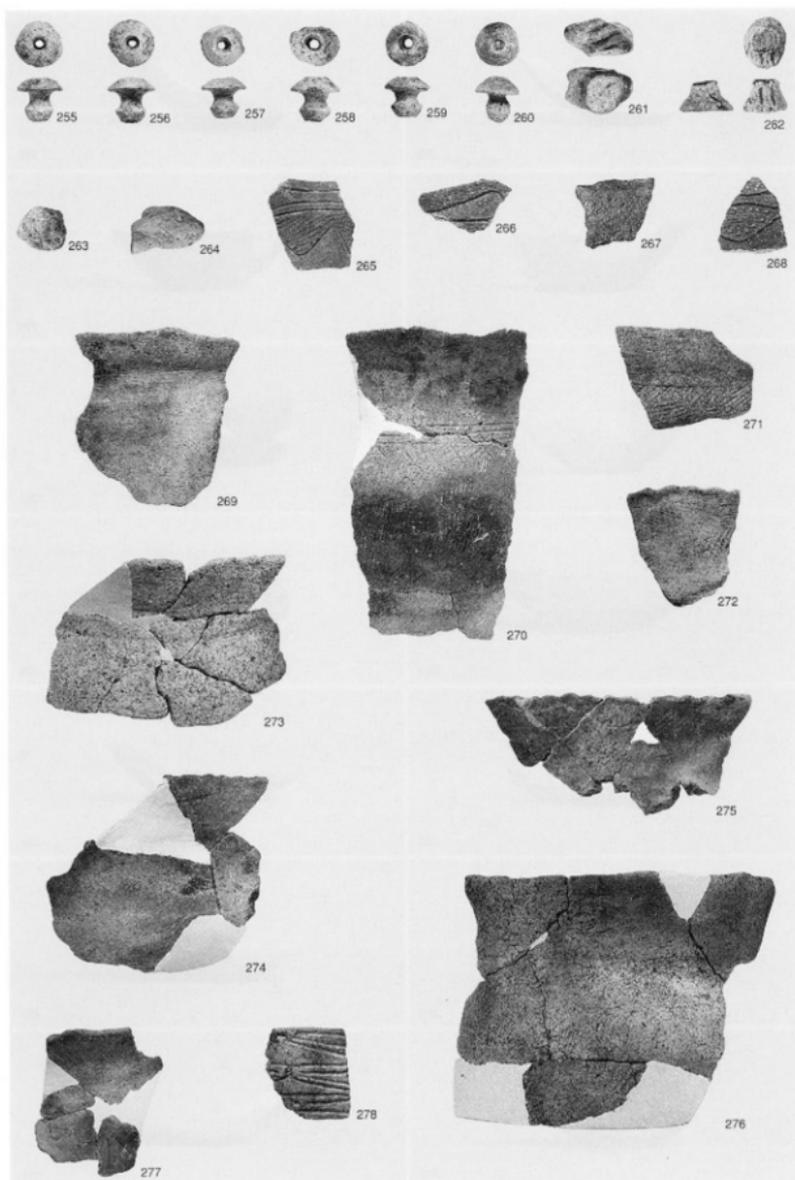
写真図版52 遺構外土器（4）



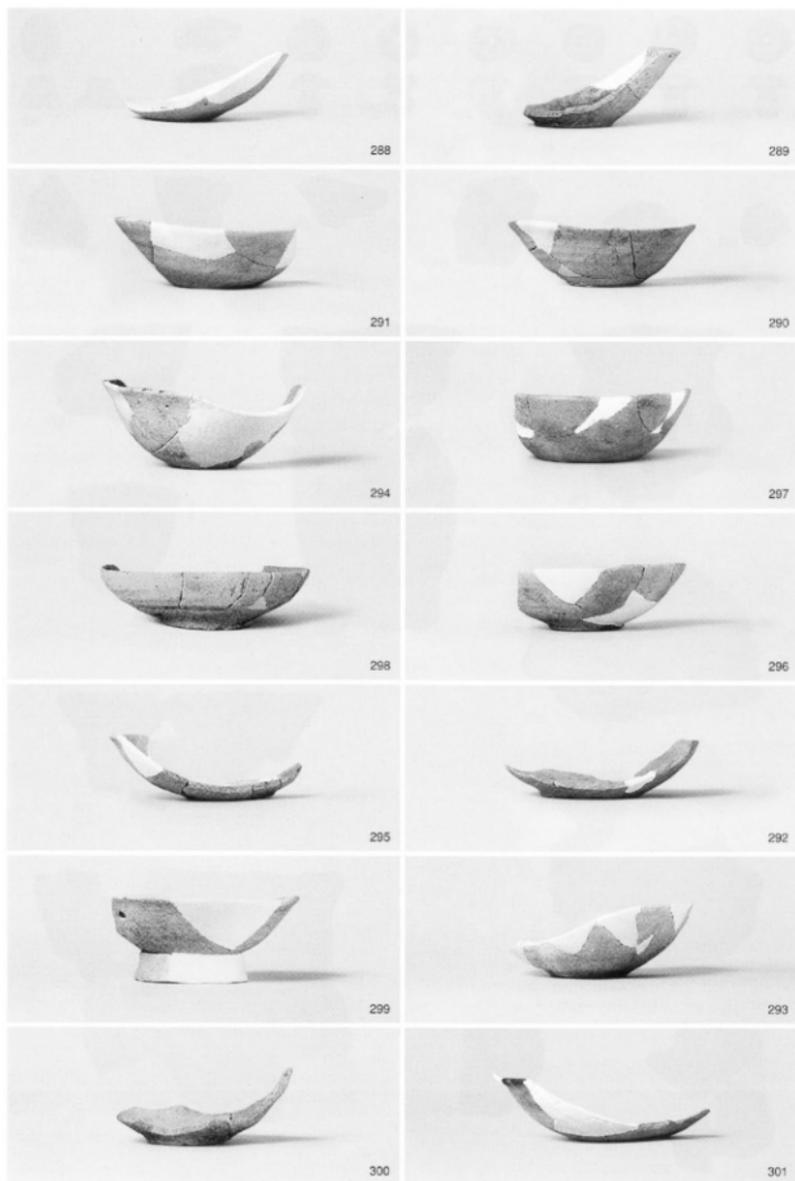
写真図版53 遺構外土器（5）



写真図版54 遺構外土器（5）



写真図版55 遺構外土器 (7)

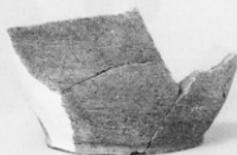


写真図版56 RG055出土土器（1）

RG055



302



311



307



309



308



306



305



304



303



310

遺構外



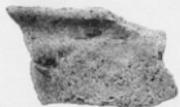
312



313



317



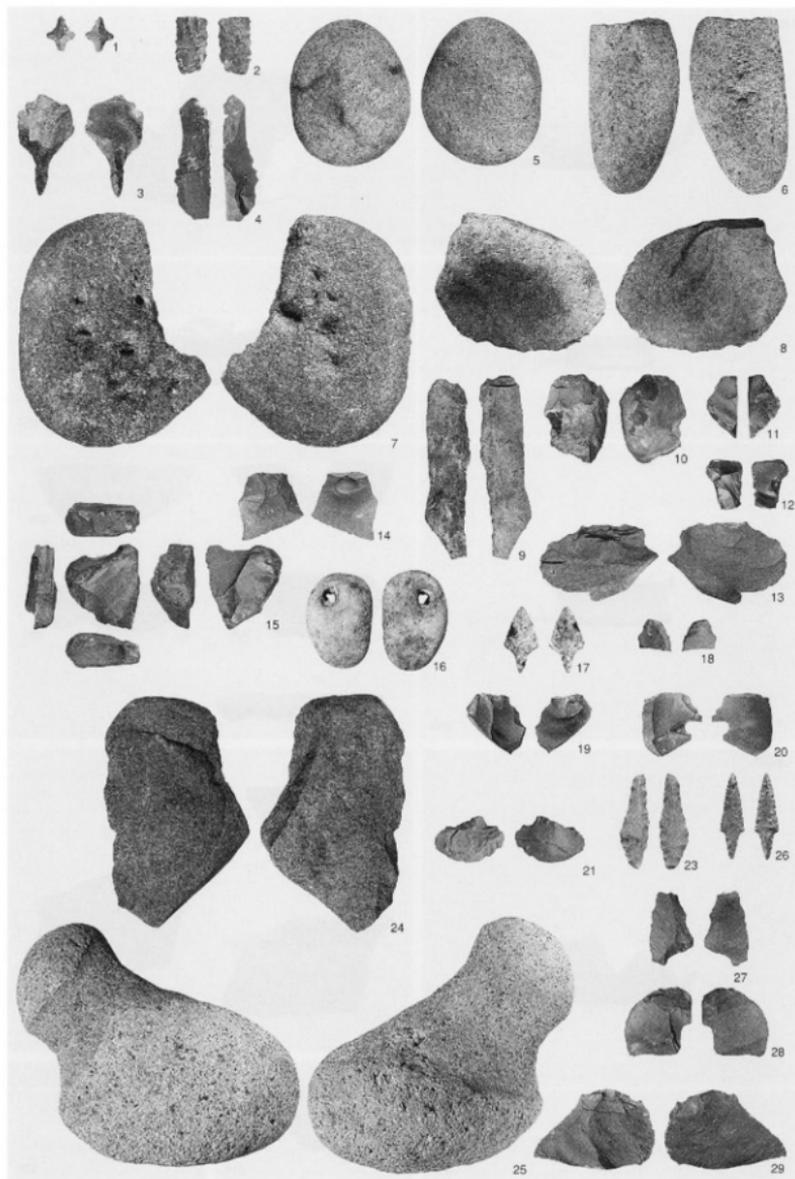
316



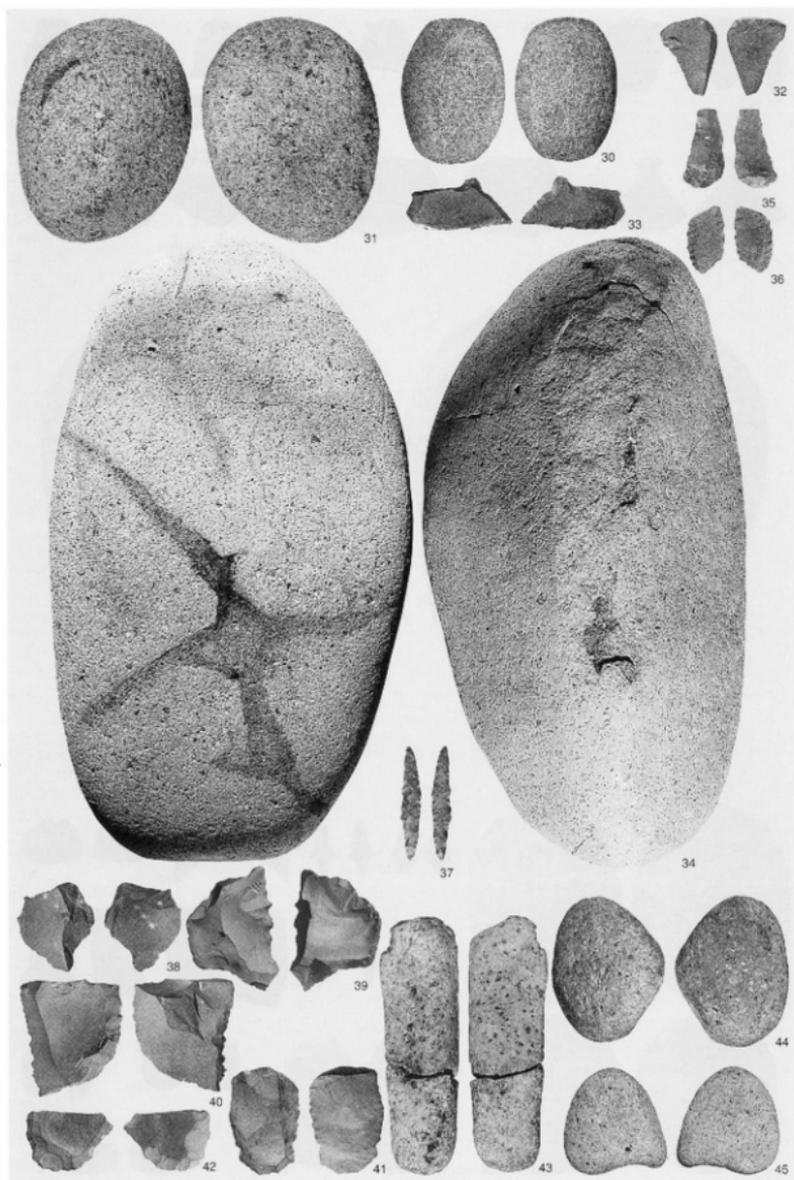
314



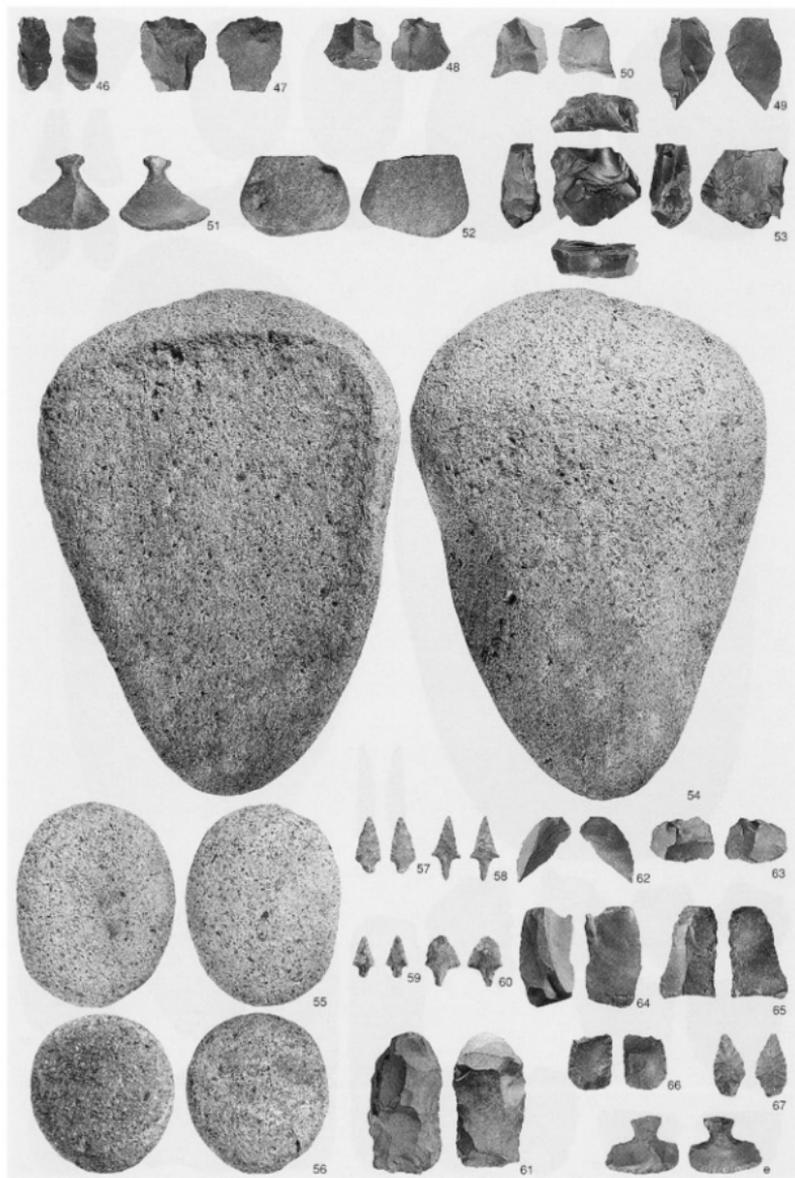
315



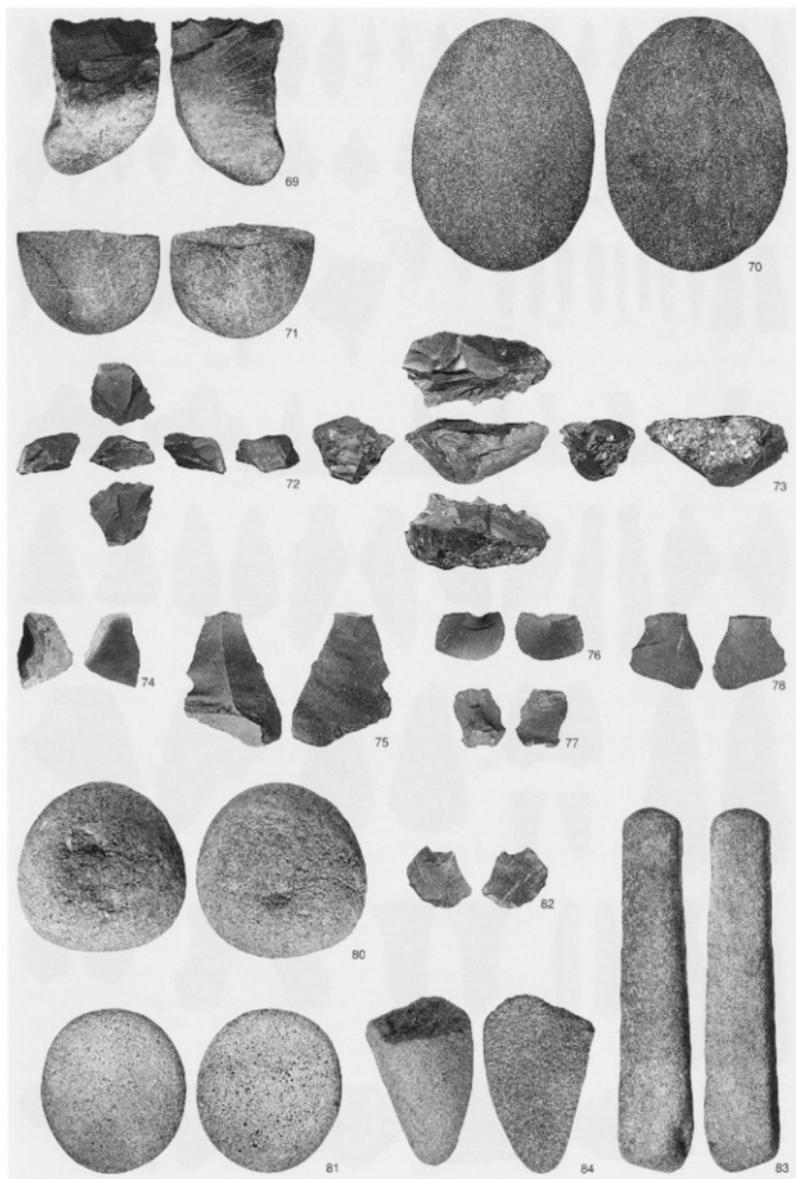
写真図版58 RA003~006・RE001出土石器(1)



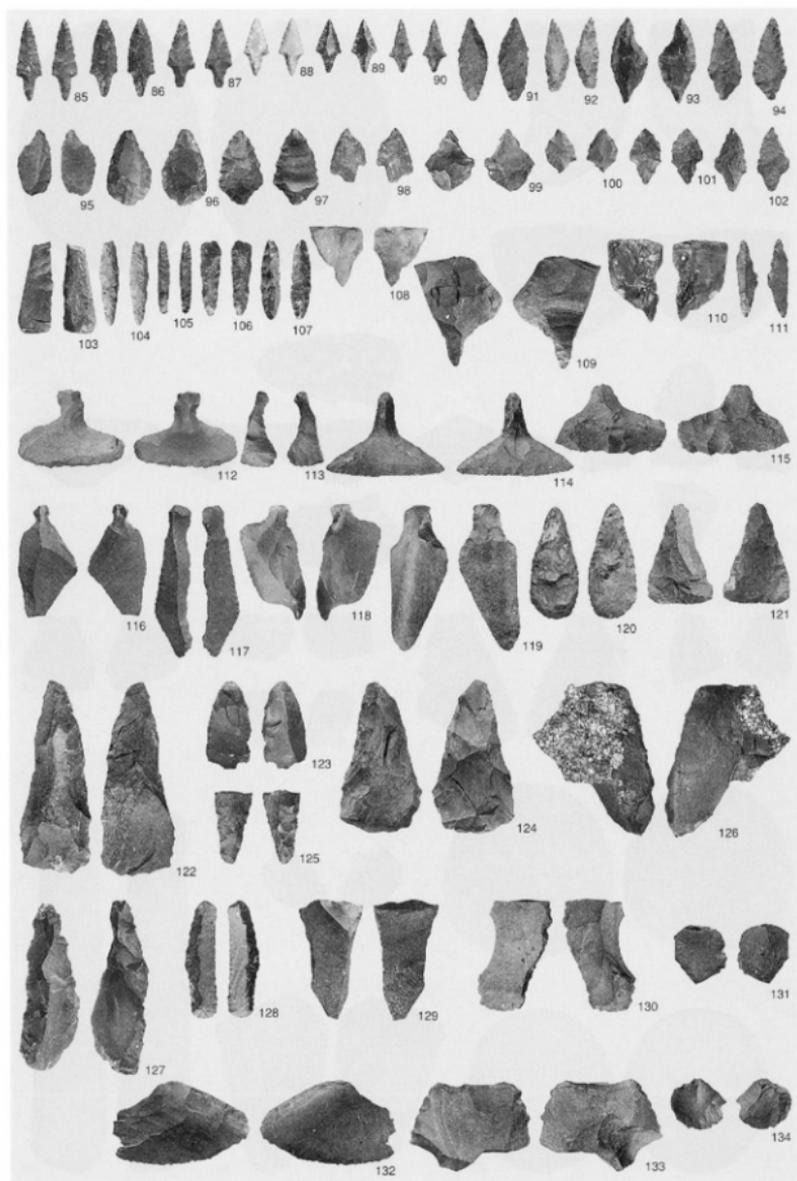
写真図版59 RE001~RE004・005出土石器



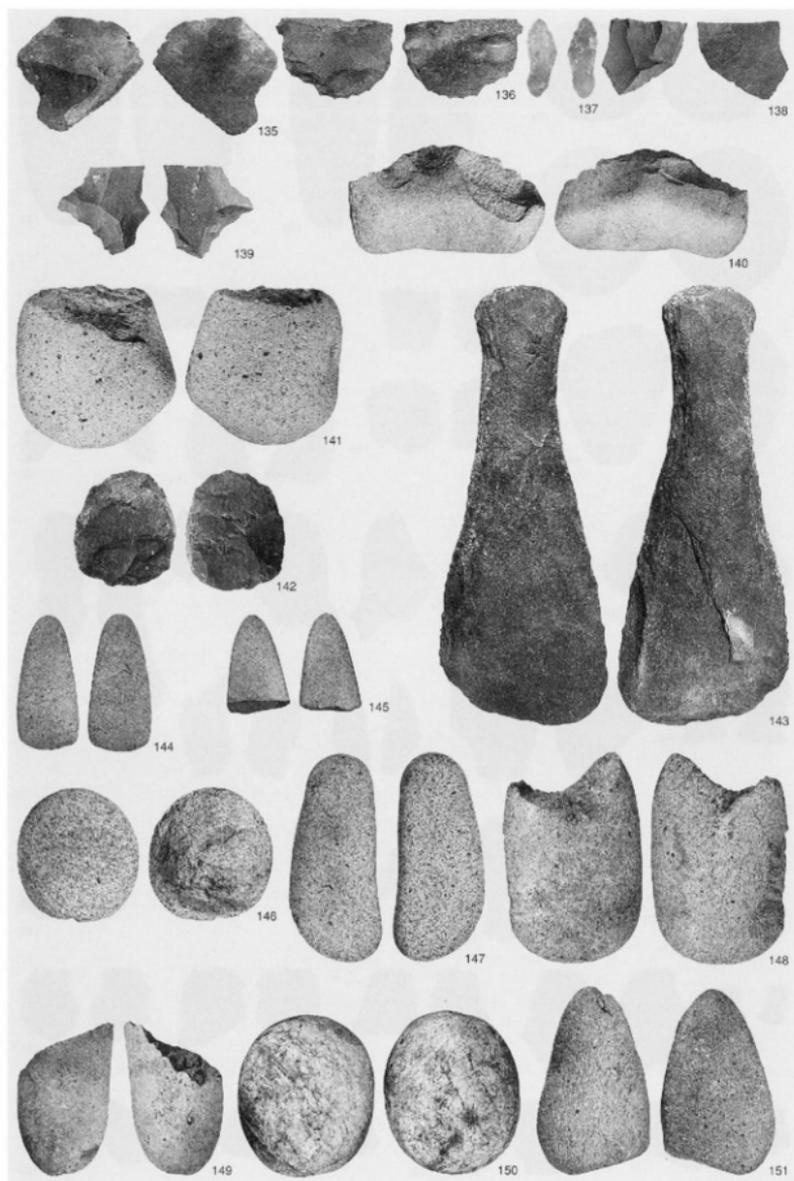
写真图版60 RE004·005·RH001·土坑·遗物集中区出土石器



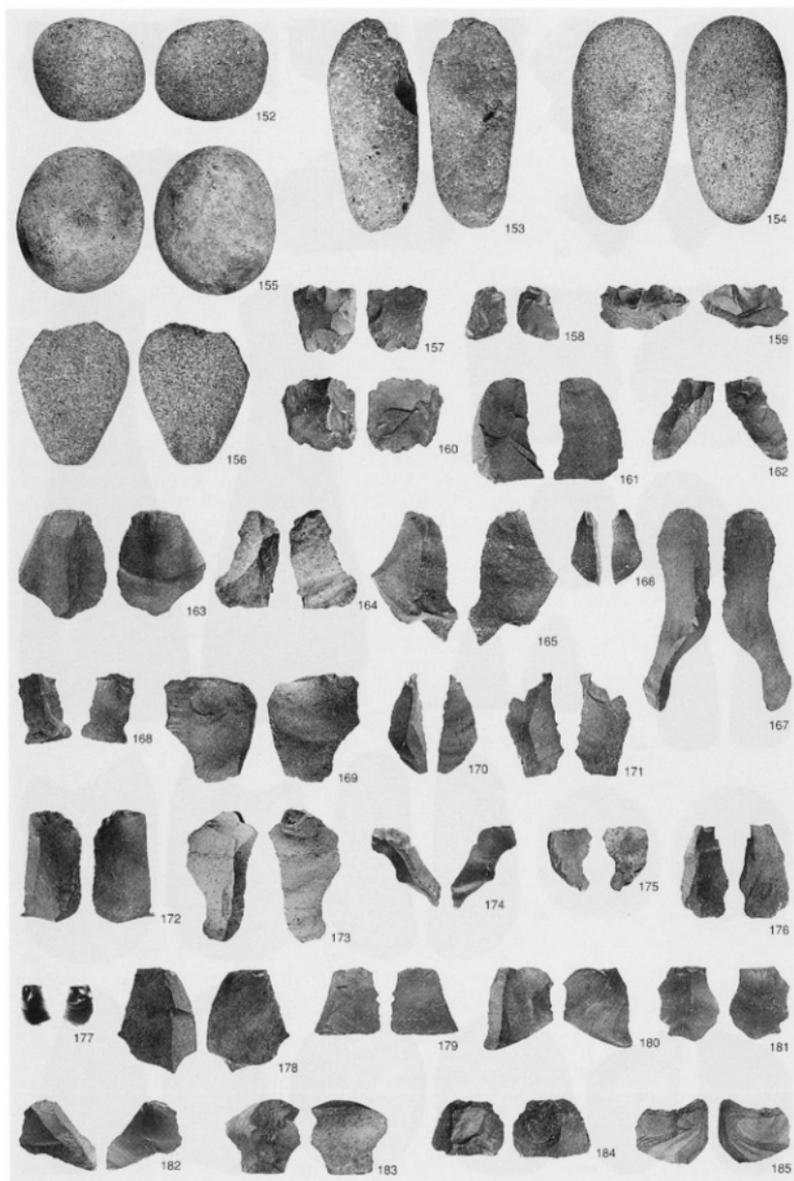
写真图版61 遗物集中区·旧河道出土石器



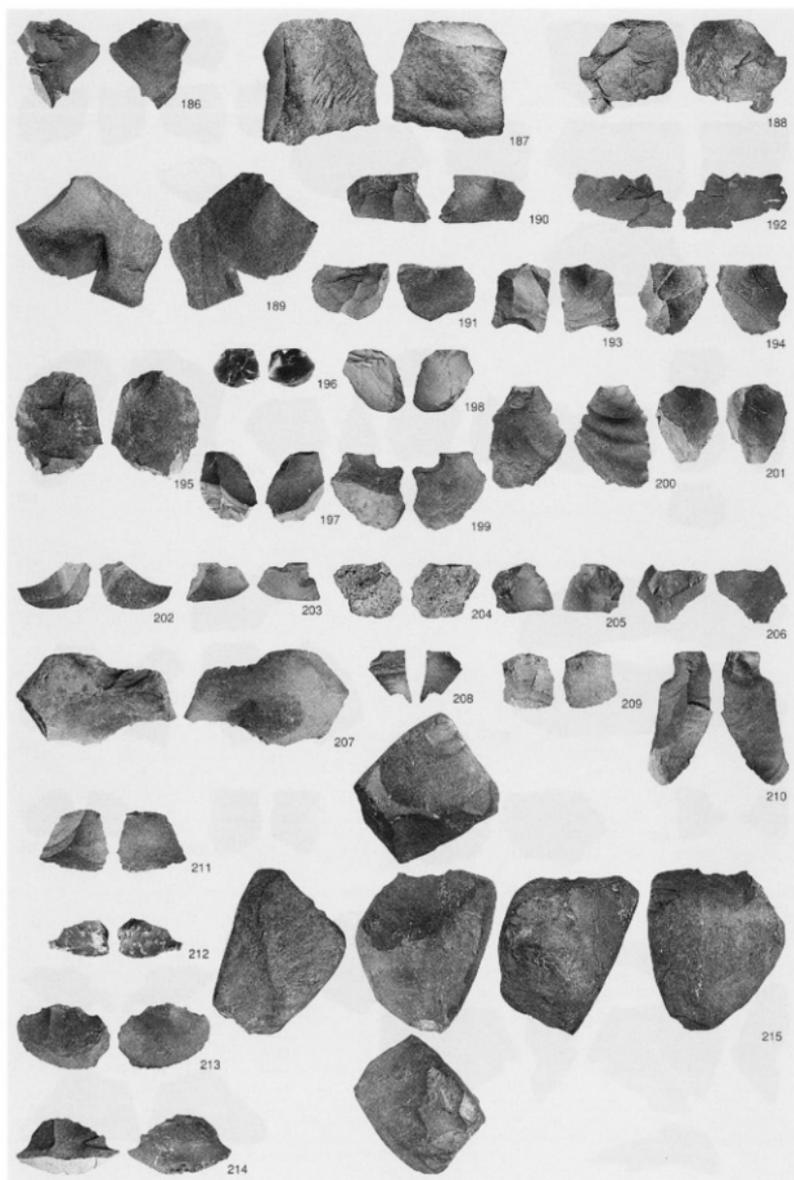
写真図版62 遺構外石器(1)



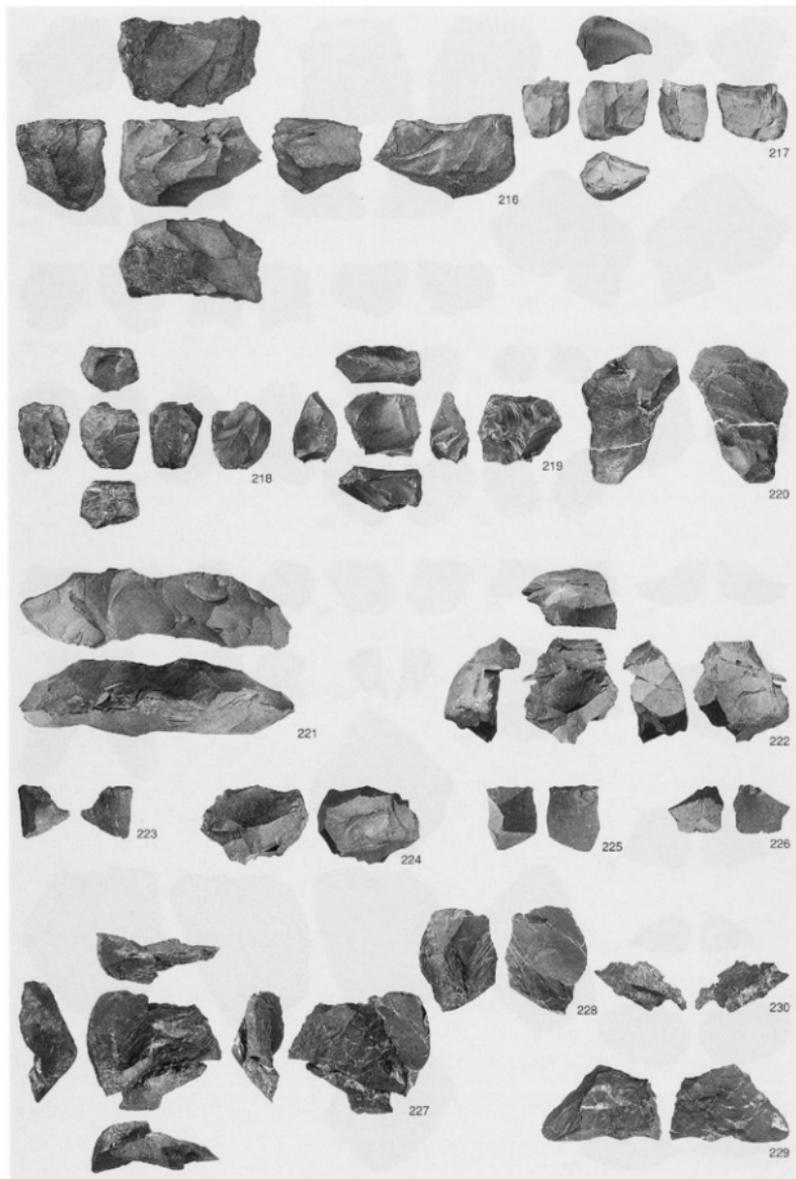
写真図版63 遺構外石器 (2)



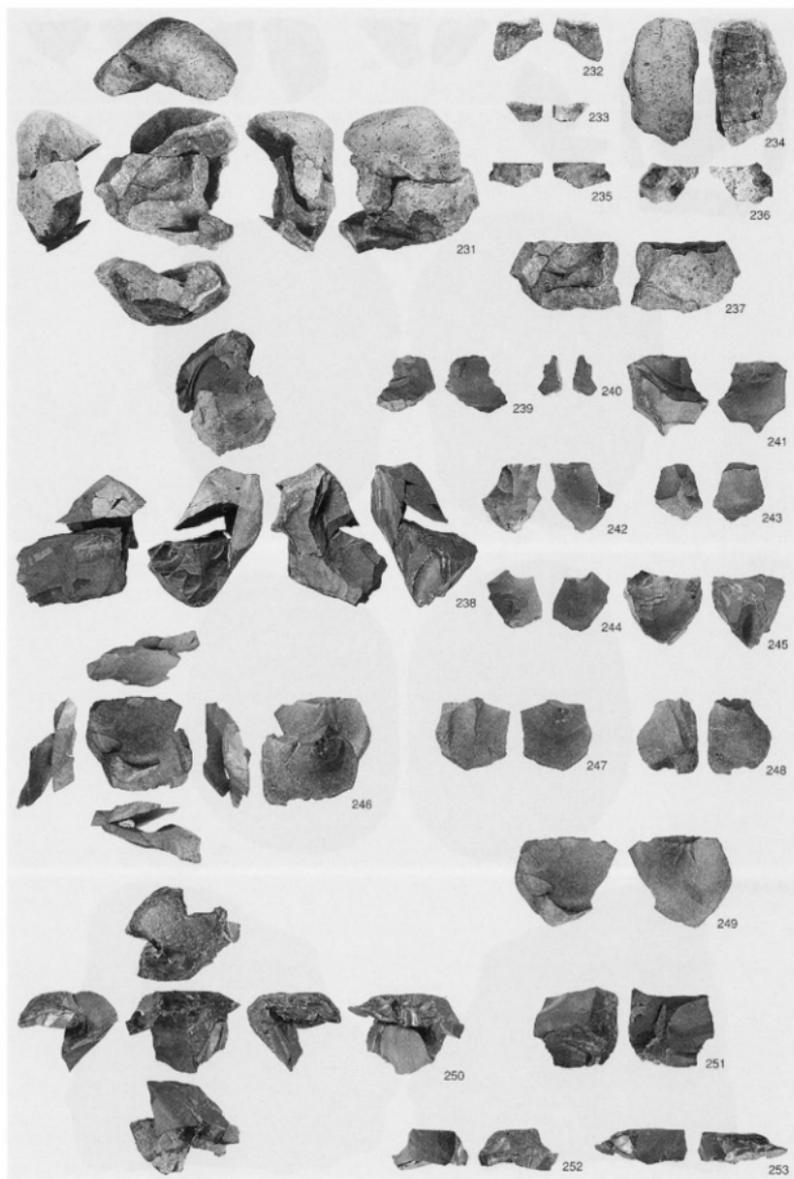
写真図版64 遺構外石器(3)



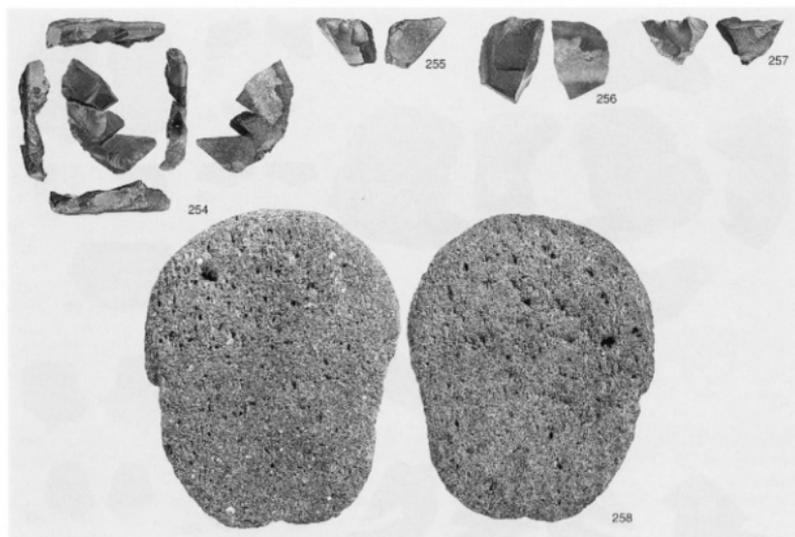
写真図版65 遺構外石器（4）



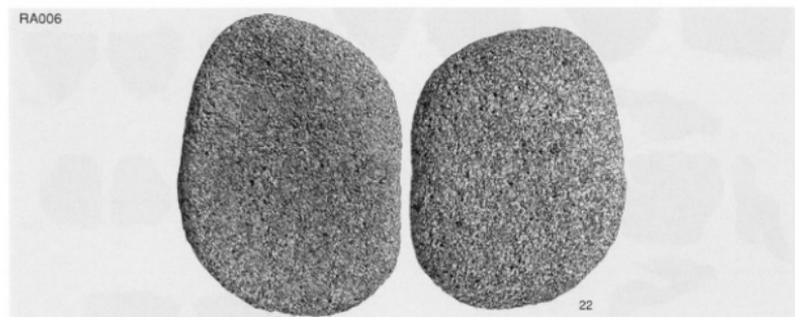
写真図版66 遺構外石器 (5)



写真図版67 遺構外石器(6)



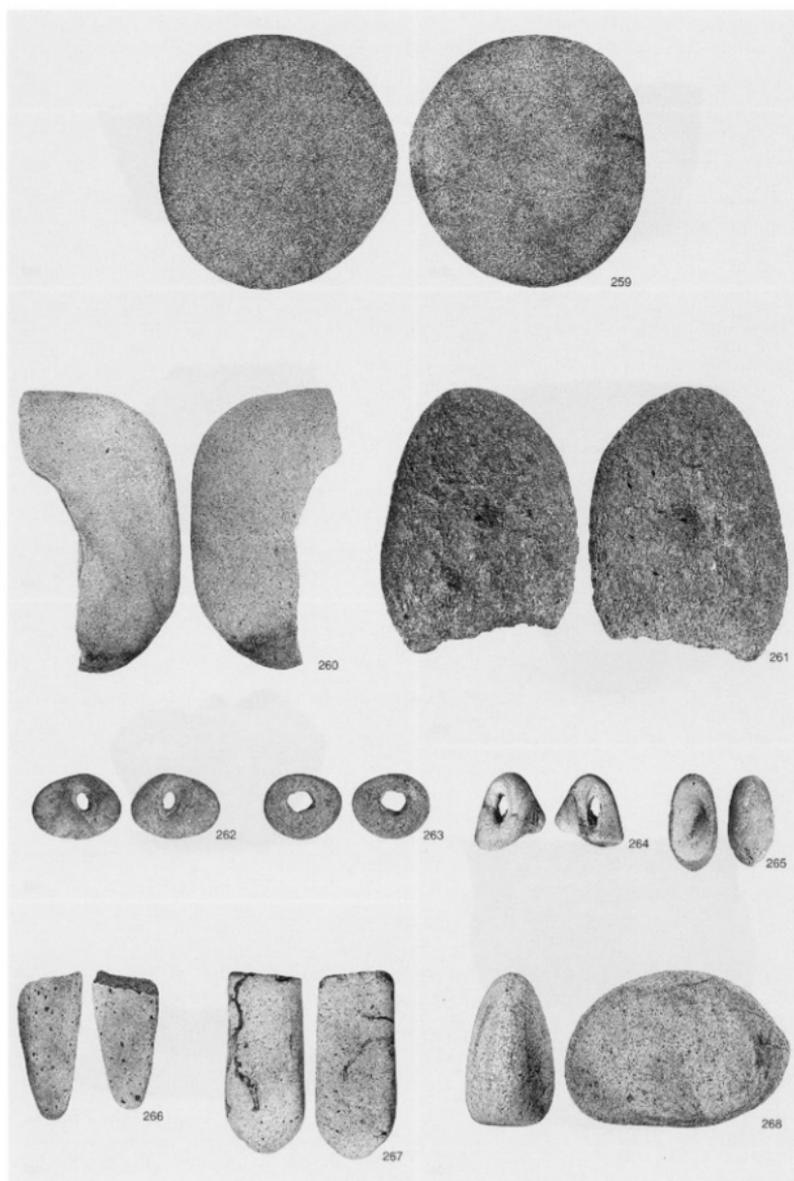
RA006



遺物集中区



写真図版68 遺構外・RA006・遺物集中区出土石器（7）



写真図版69 遺構外石器 (8)



319



392



320



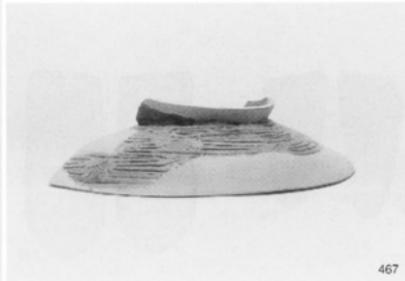
393



324

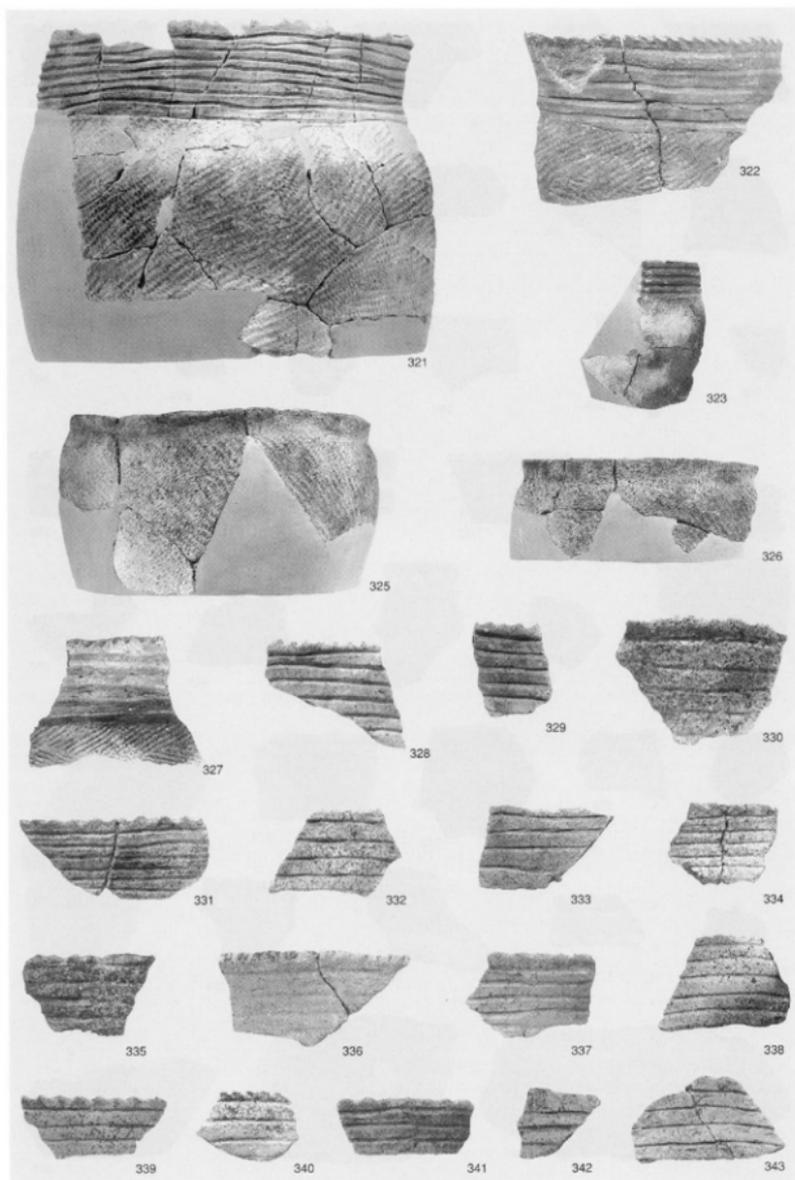


468

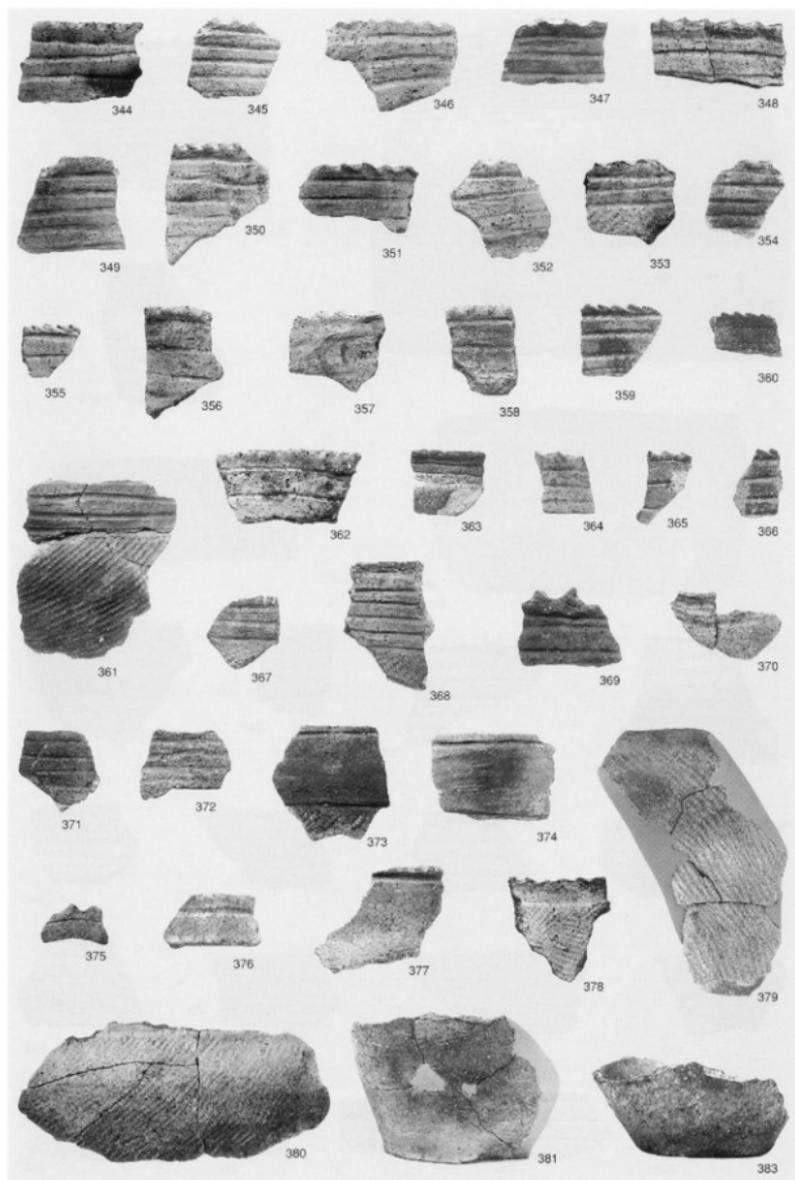


467

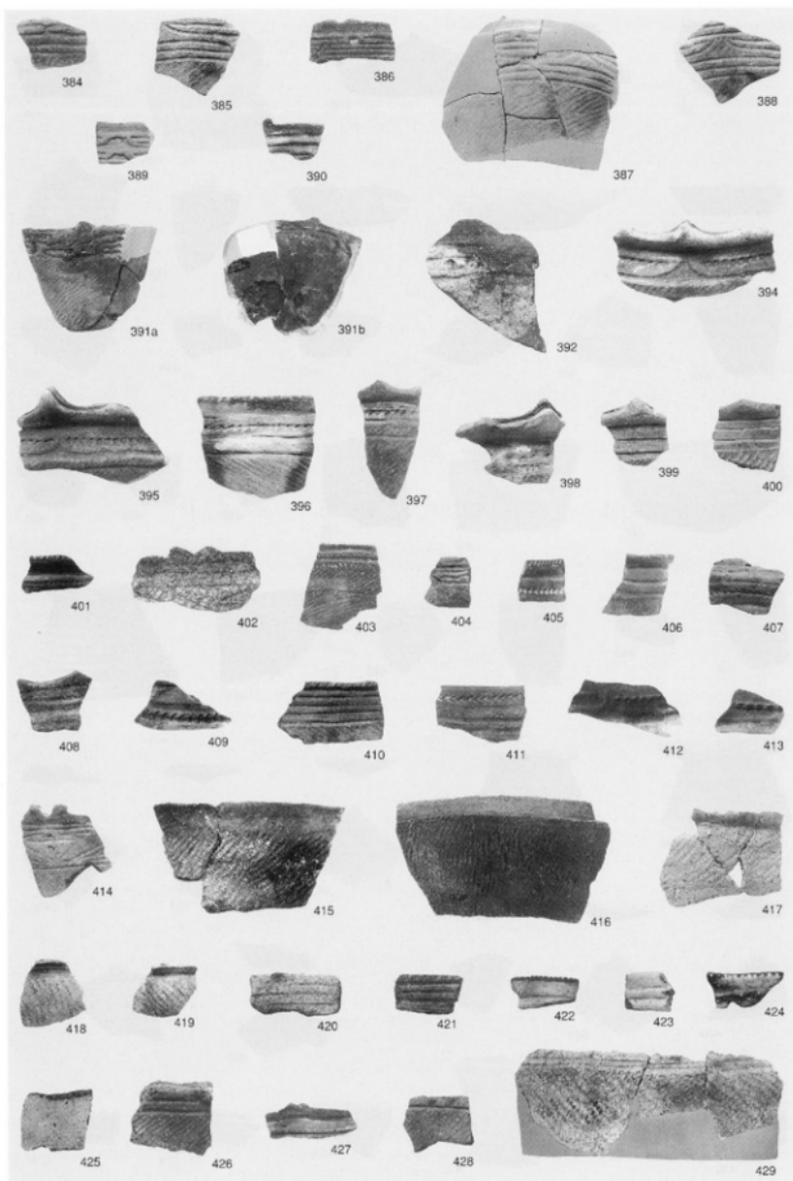
写真図版70 旧河道出土土器（1）



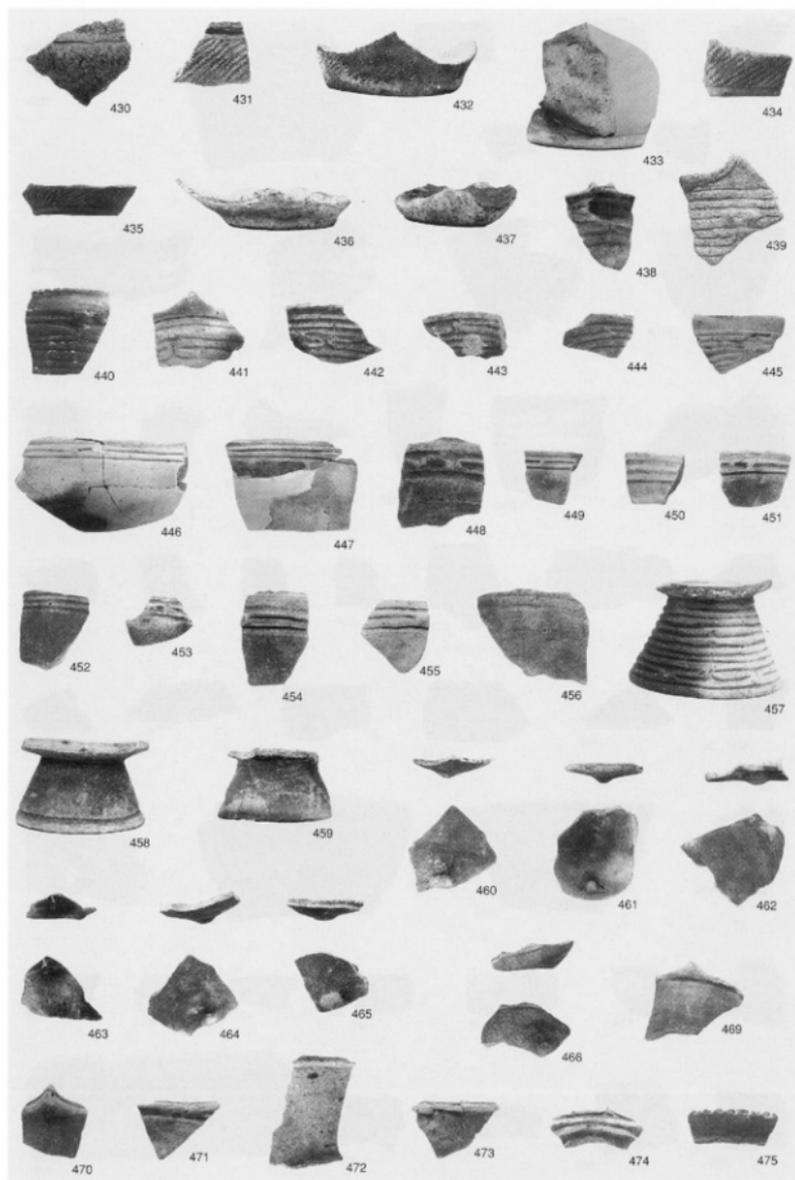
写真图版71 旧河道出土土器(2)



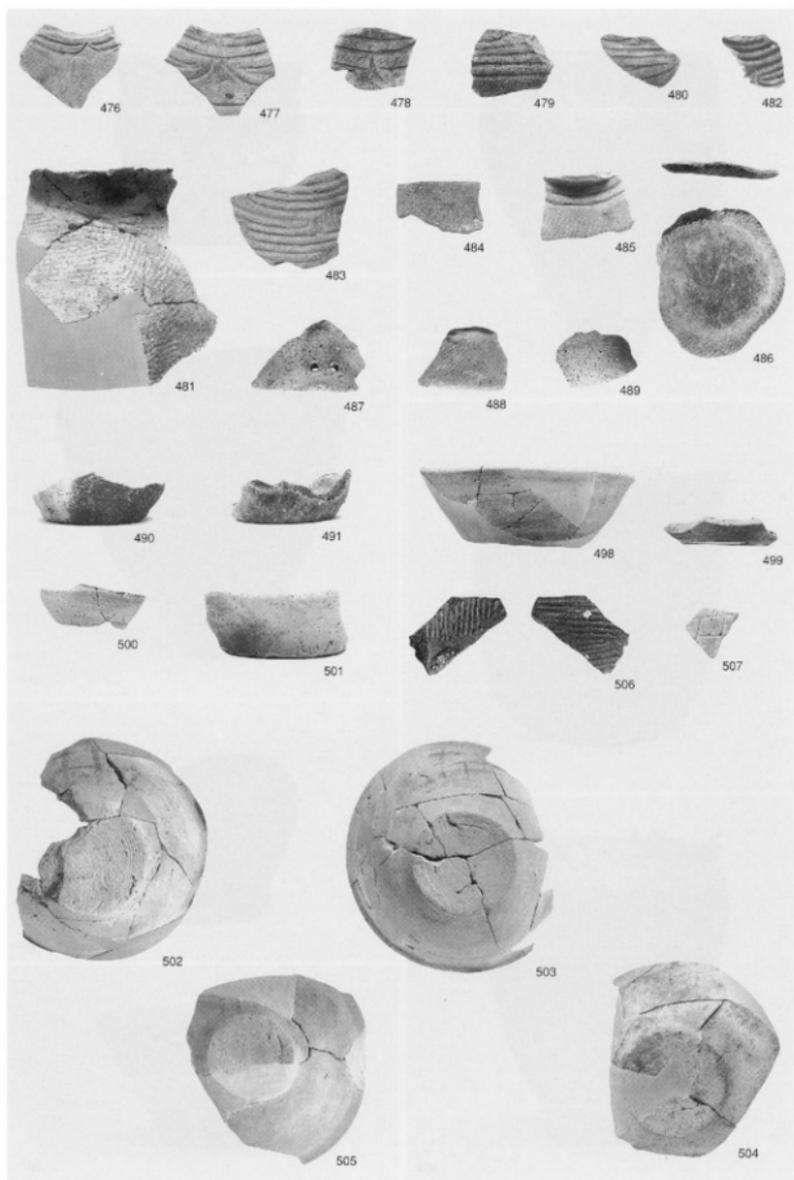
写真図版72 旧河道出土土器（3）



写真図版73 旧河道出土土器(4)



写真図版74 旧河道出土土器 (5)



写真図版75 旧河道出土土器(6)



508



510



517



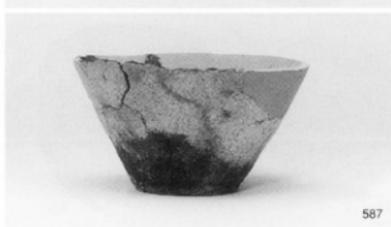
515



509



585



587

写真図版76 遺構出土土器(1)



588



598



605



607



636



637



662



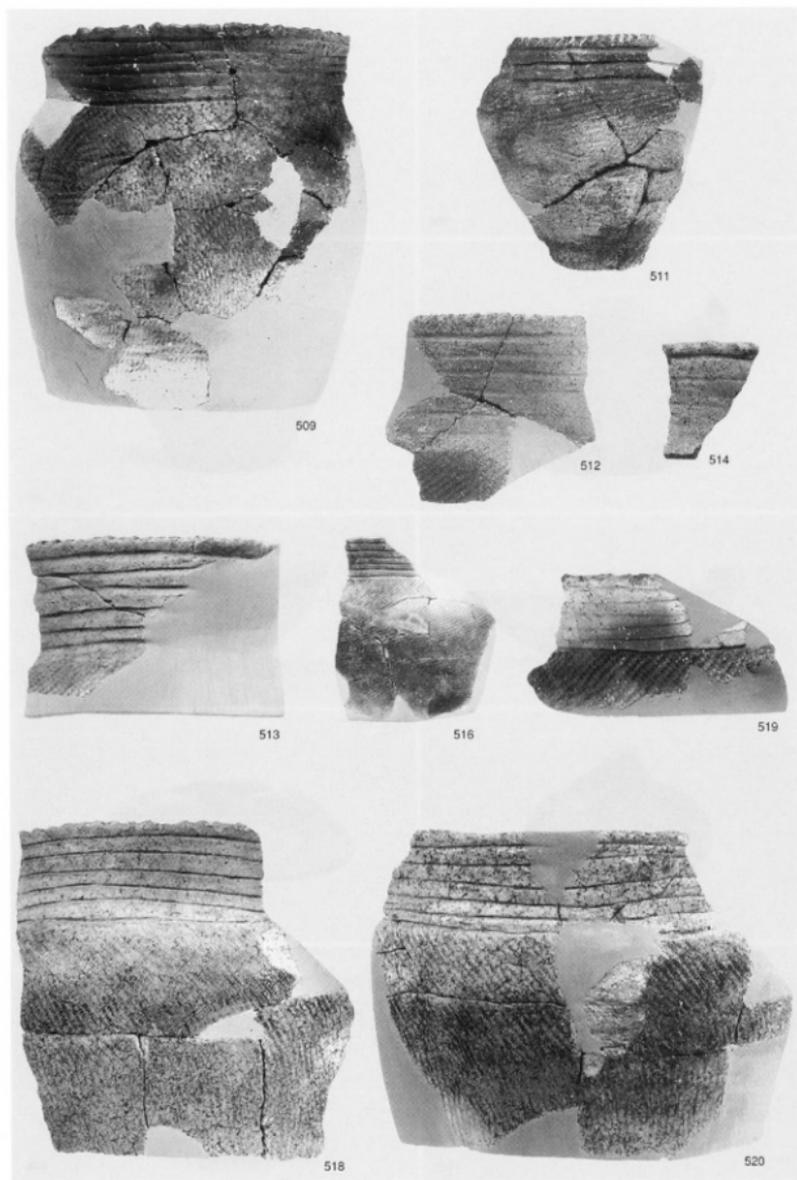
663



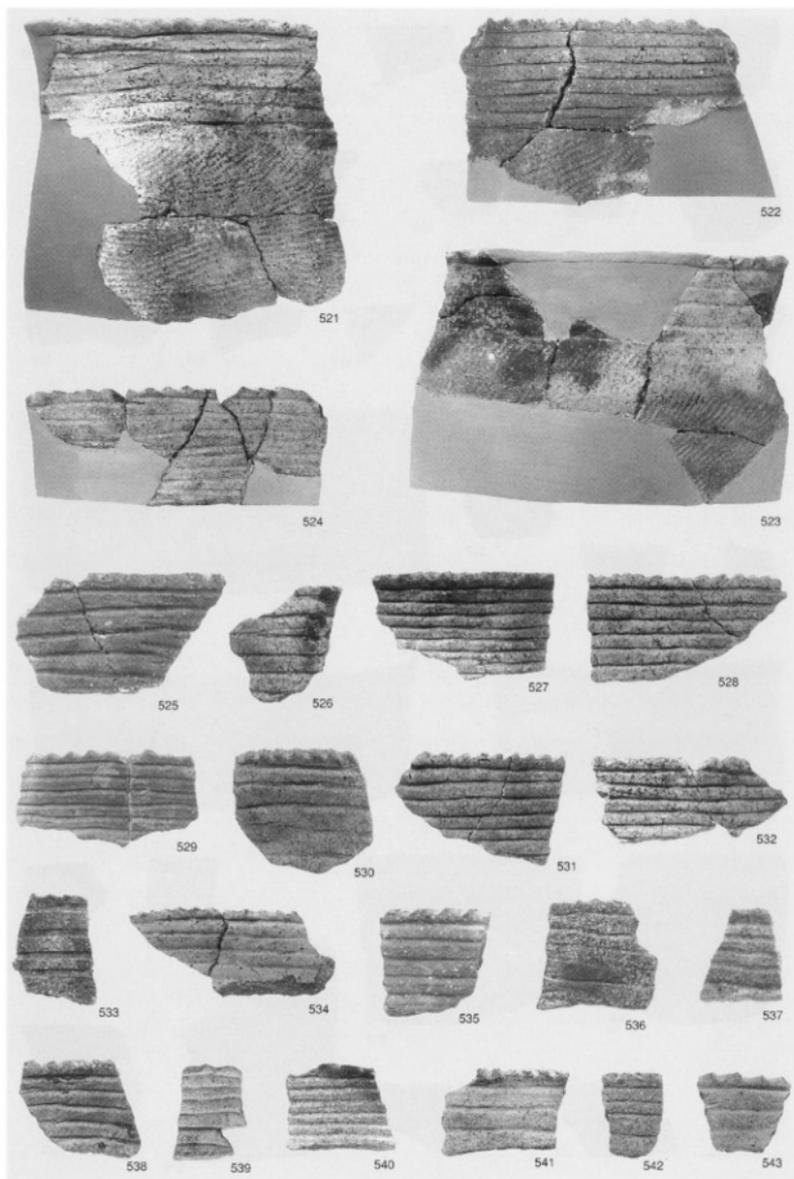
665



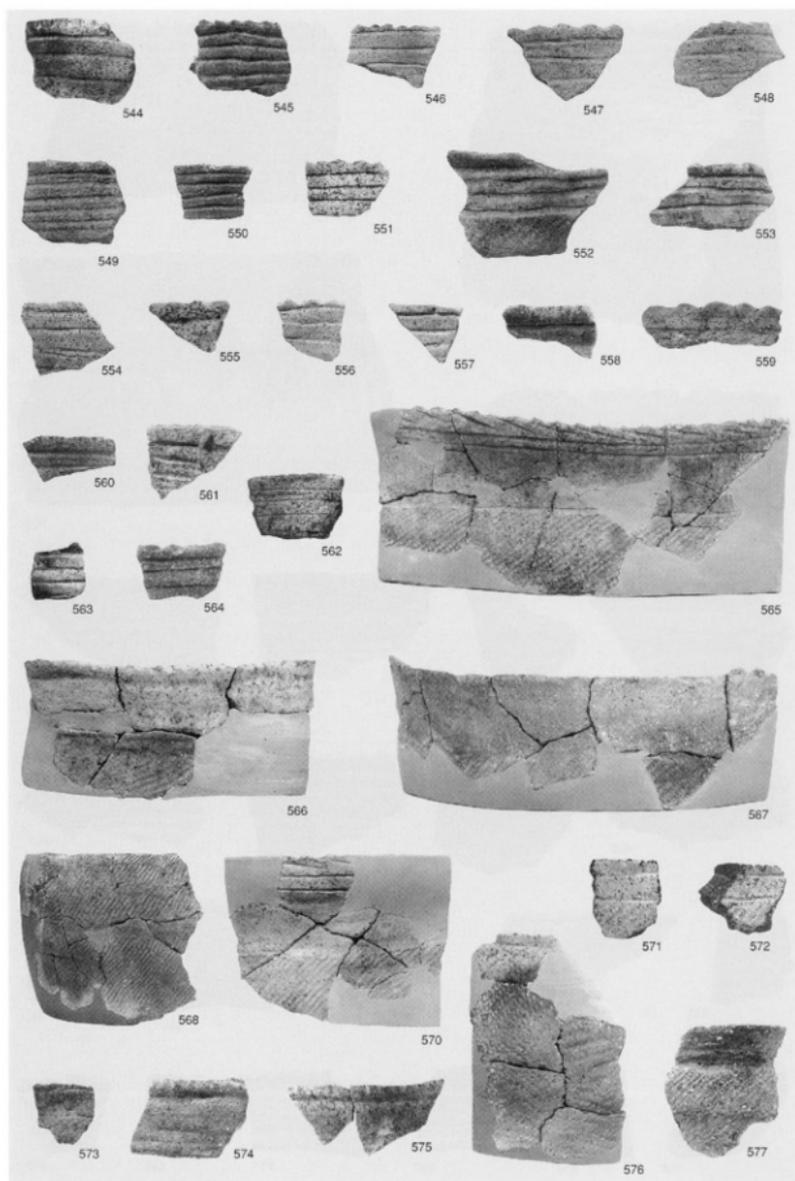
666



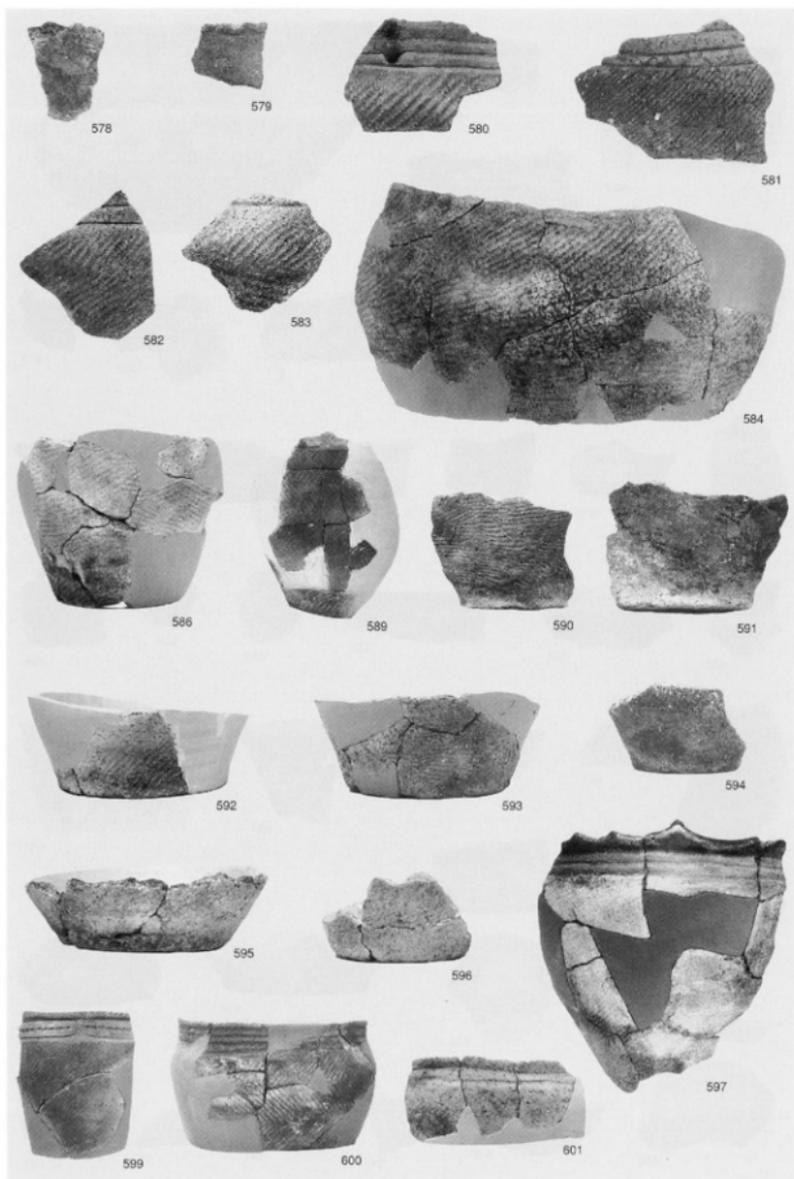
写真図版78 遺構出土土器（3）



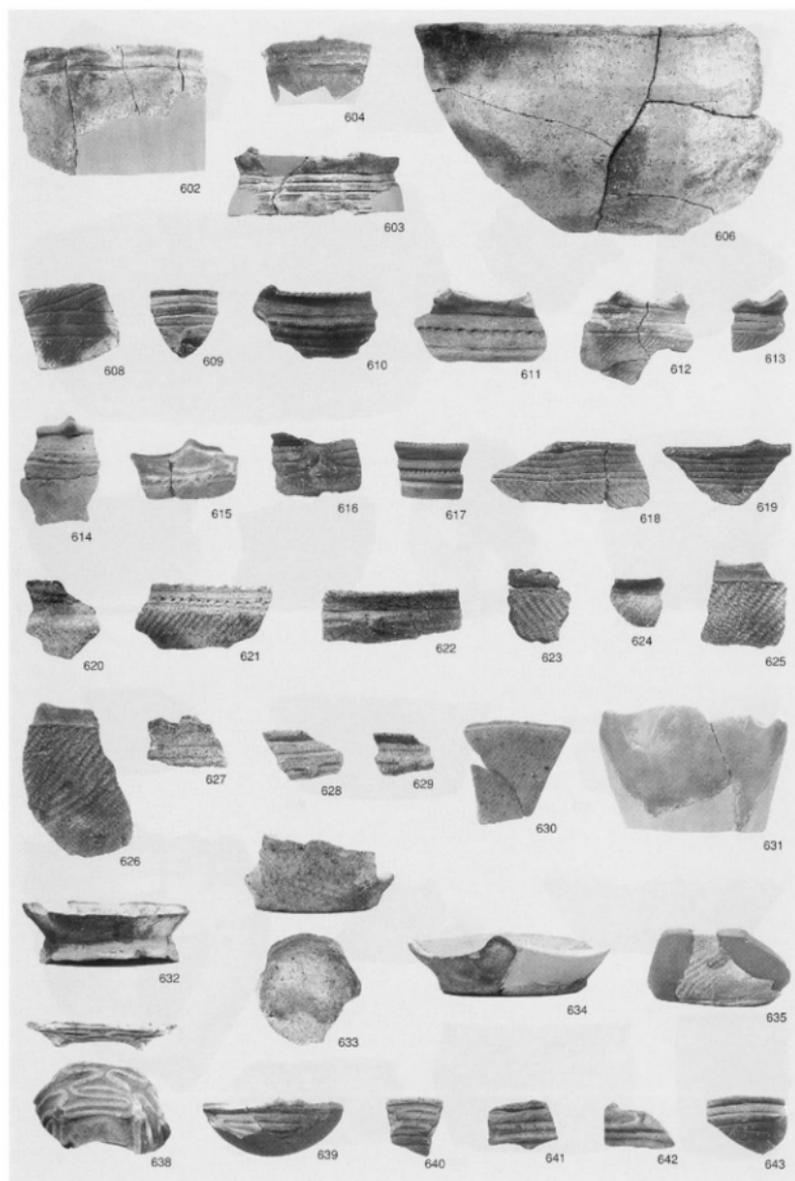
写真図版79 遺構出土土器(4)



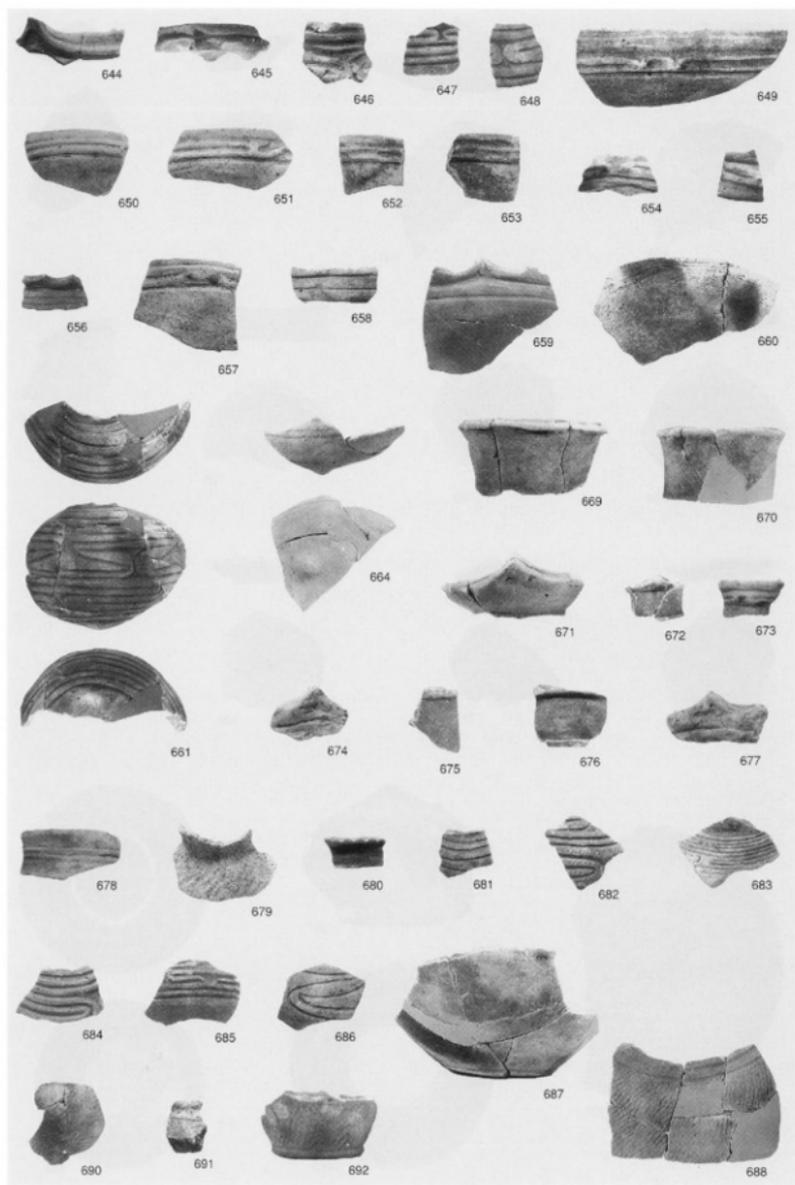
写真図版80 遺構出土土器 (5)



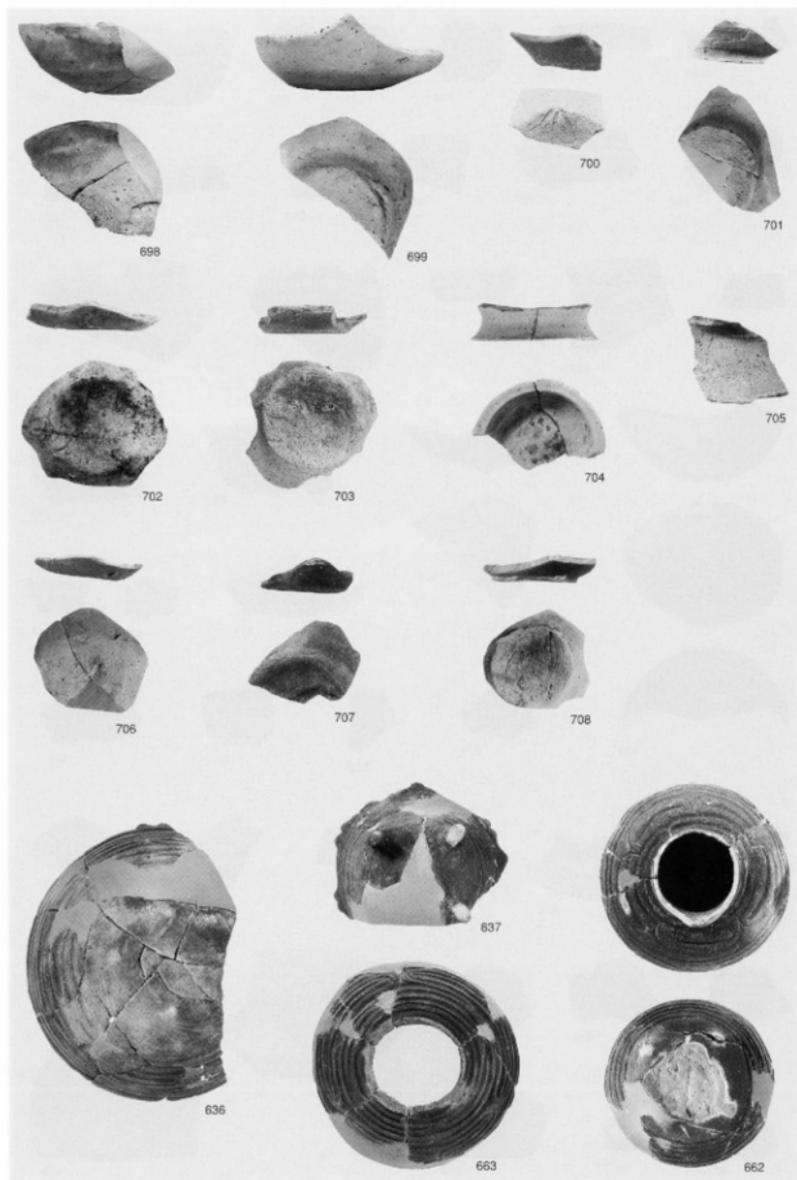
写真図版81 遺構出土土器(6)



写真図版82 遺構出土土器 (7)



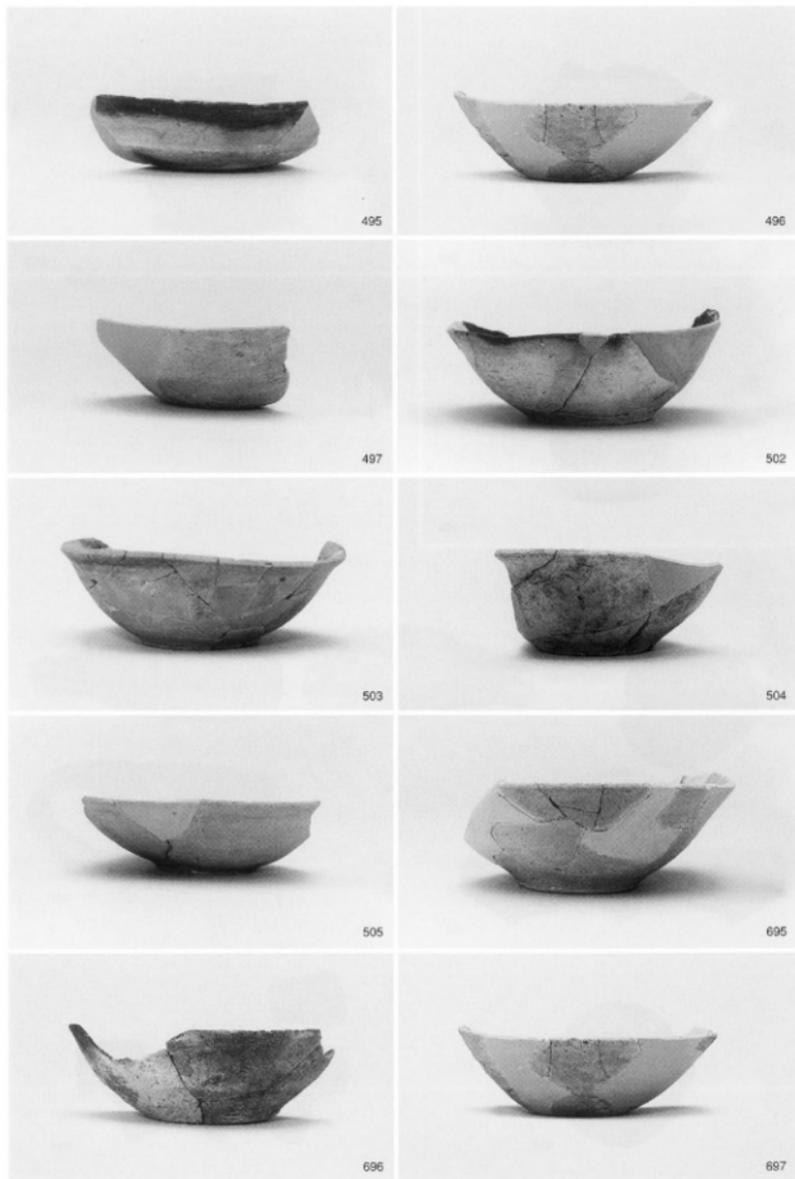
写真図版83 遺構出土土器(8)



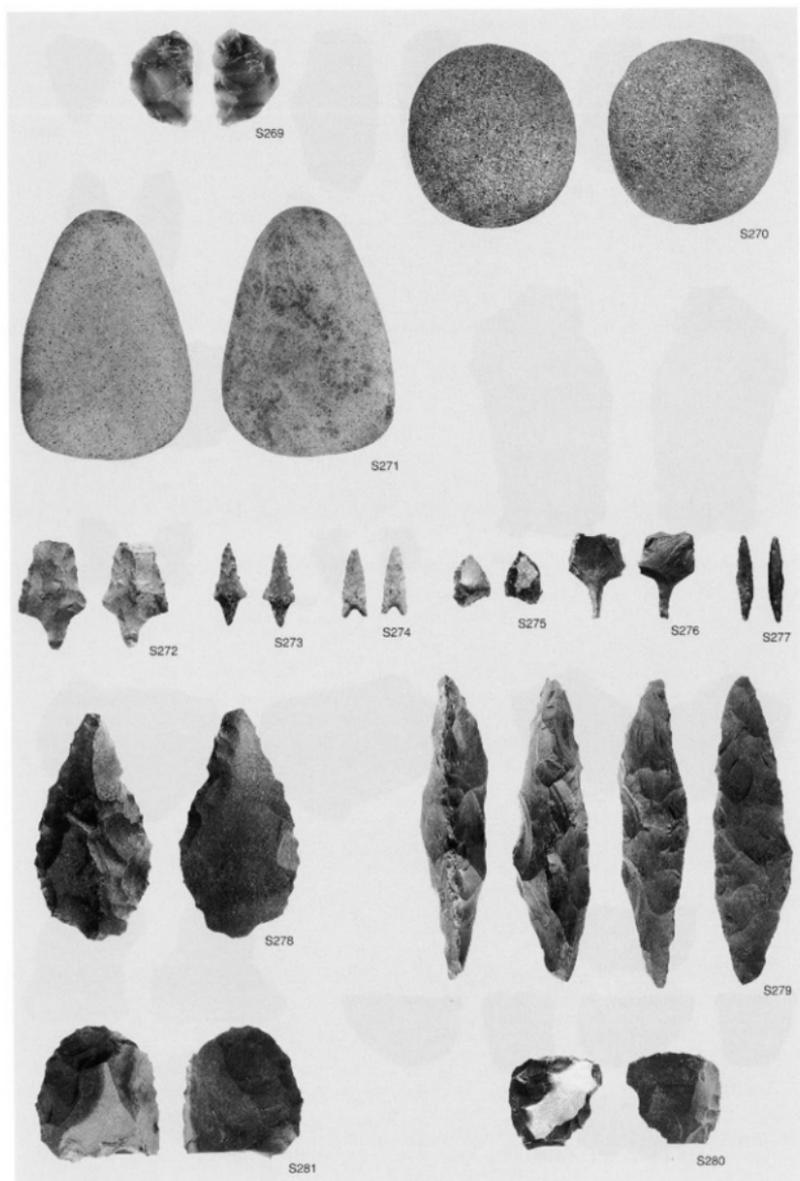
写真図版84 遺構出土土器(9)



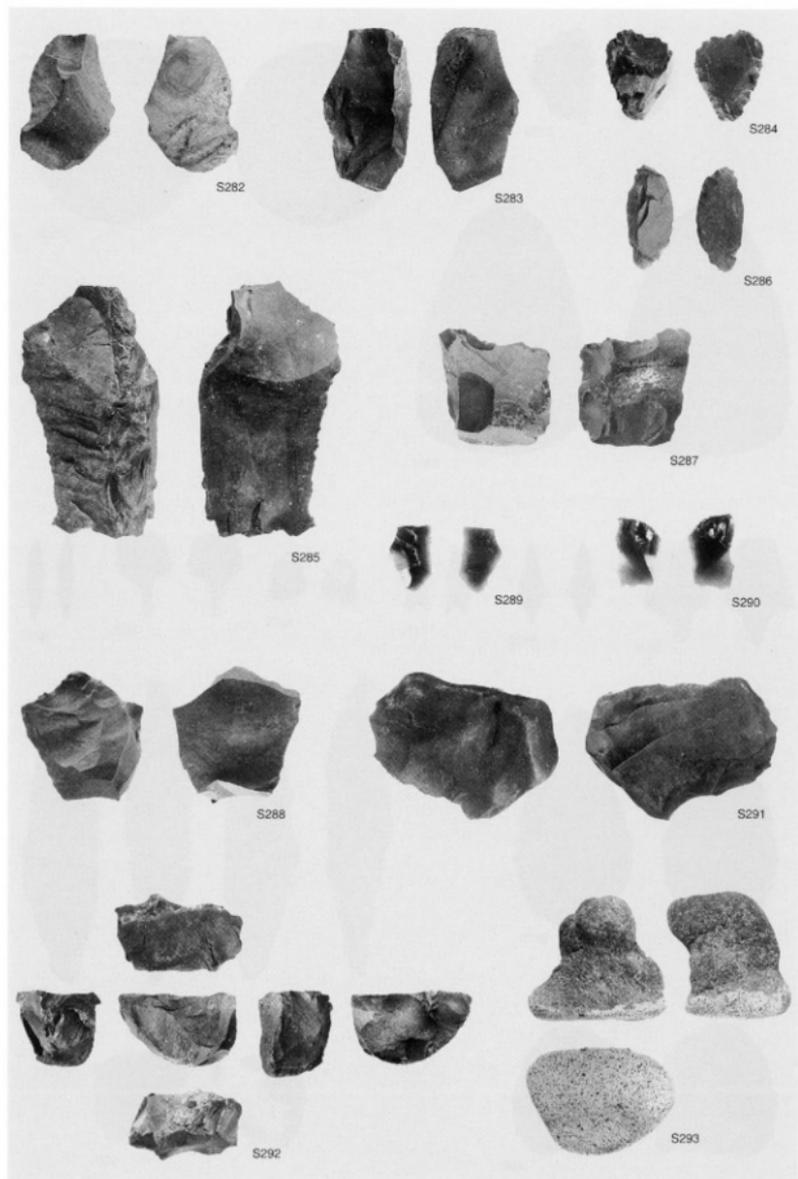
写真図版85 遺構出土土器 (10)



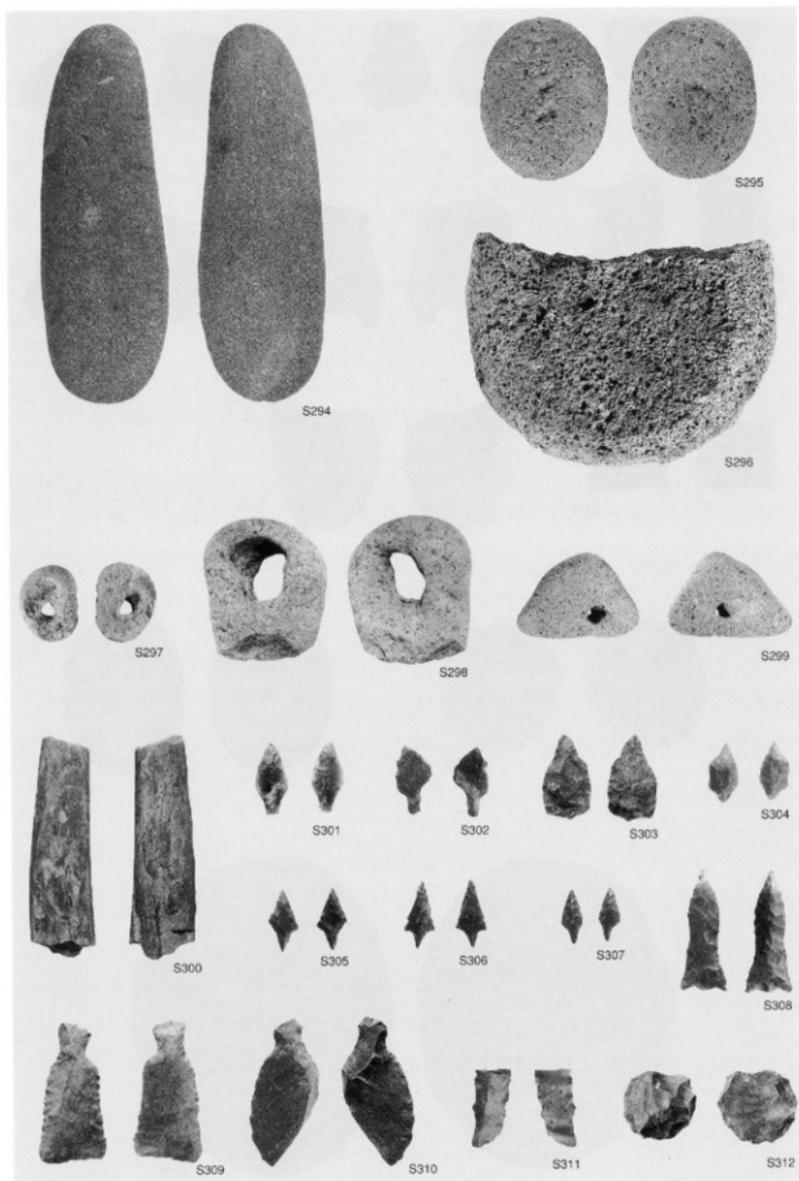
写真図版86 遺構出土土器 (11)



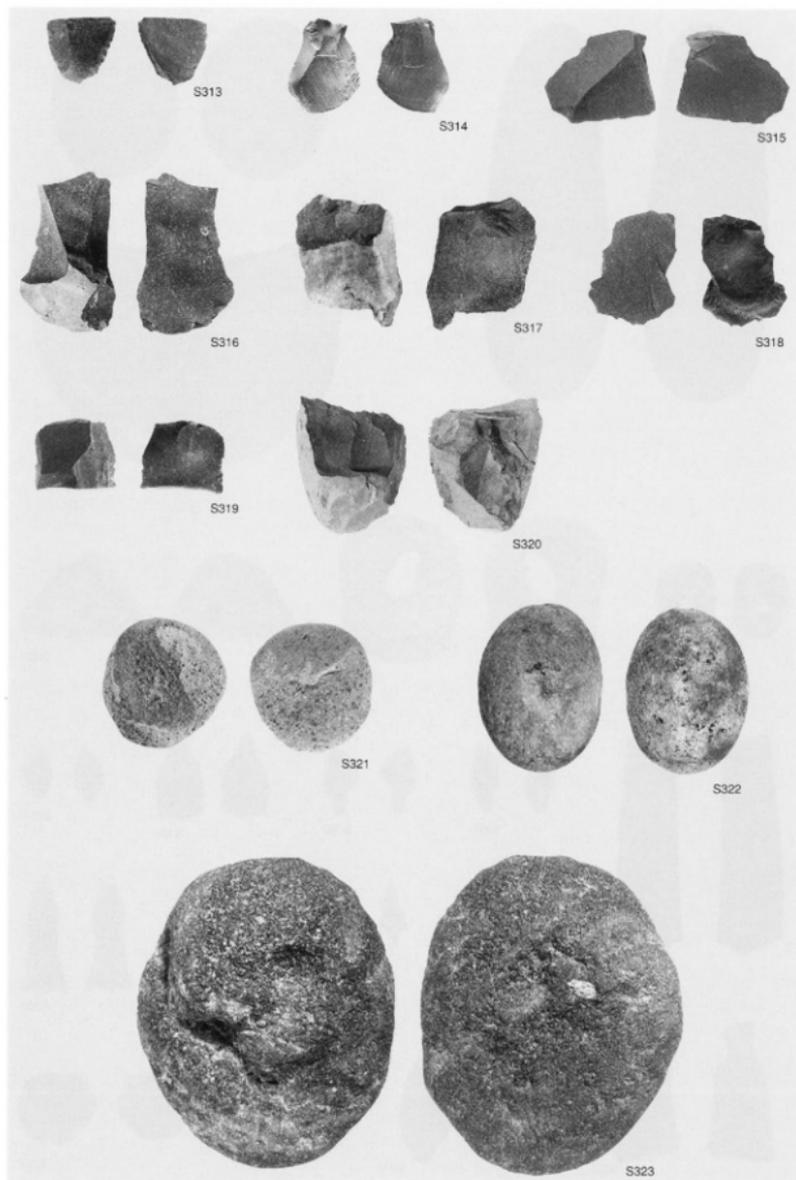
写真図版87 旧河道出土石器(1)



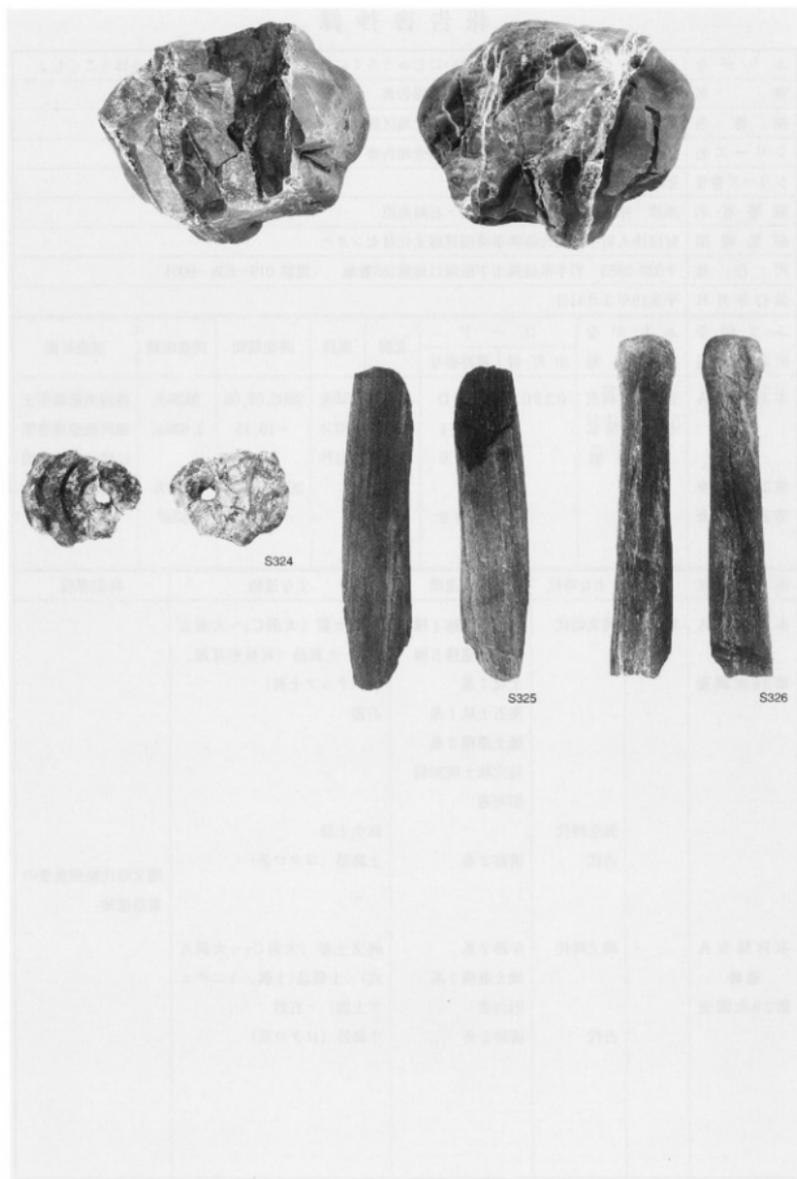
写真図版88 旧河道出土石器(2)



写真図版89 旧河道・遺構外出土石器（1）



写真図版90 遺構外出土石器（2）



写真図版91 遺構外出土石器(3)

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうえーいせきだいにじゅうろくにじゅうくじはっかつちょうさほうこくしょ							
書名	本宮熊堂A遺跡第26・29次発掘調査報告書							
副書名	盛岡広域都市計画事業盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第502集							
編著者名	須原 拓・亀澤盛行・濱田 宏・石崎高臣							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 電話 019-638-9001							
発行年月日	平成19年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
本宮熊堂A 遺跡	岩手県盛岡市 本宮字熊堂 24-3 他	03201	OKD -04 -26 ・ -29	36度 05分 15秒	136度 57分 51秒	2005.07.05 ~10.15 2006.06.01 ~06.30	第26次 2,636㎡ 第29次 283㎡	盛岡南新都市土 地区画整理事業 に伴う緊急発掘 調査
第26次調査 第29次調査								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
本宮熊堂A 遺跡 第26次調査	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡4棟 竪穴状遺構5棟 土坑7基 集石土坑1基 焼土遺構2基 柱穴状土坑30個 旧河道	縄文土器（大洞C2~大洞A式）・土製品（耳栓形耳飾、ミニチュア土器） 石器			縄文時代晩期後葉の 集落遺跡	
		弥生時代 古代	溝跡2条	弥生土器 土師器（ロクロ系）				
本宮熊堂A 遺跡 第29次調査		縄文時代	炉跡2基 焼土遺構1基 旧河道	縄文土器（大洞C2~大洞A式）・土製品（土偶、ミニチュア土器）・石器				
		古代	溝跡2条	土師器（ロクロ系）				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第502集

本宮熊堂 A 遺跡第26・29次発掘調査報告書

盛岡広域都市計画事業盛岡市新都市上地区区画整備事業関連道路発掘調査

印刷 平成19年1月25日

発行 平成19年1月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印刷 永代印刷株式会社
〒020-0811 岩手県盛岡市川目町23番10号
電話 (019) 623-0111
FAX (019) 625-5454

